
旧車物語

3気筒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旧車物語

【Nコード】

N9754K

【作者名】

3気筒

【あらすじ】

高校3年最後の春、何のへんてつもない普通の読書好きな少年、中山圭太は幼なじみの三笠由美に誘われてバイクの免許を取った。そして父親が昔乗っていたZ400FXをもらい……。バイク、主に旧車を通して様々な出会い、経験をしていく2人とそれを取りまく様々な人物たちと繰り広げる日常をラノベ風(?)に描いた、バイクに詳しくなくても気軽に読める作品です。

第1章 春、桜、バイク（前書き）

はじめまして、3気筒です。

この度はこの小説「旧車物語」をご覧いただき誠にありがとうございます。
います。

初小説なので、グダグダしていますが、どうか宜しくお願いします。

第1章 春、桜、バイク

春の日射しが心地よい4月半ば。桜の木もいい感じに緑とピンクが交ざり始めたこの季節。県立相模南高校、通称『南高』の3年A組の横五列ある中の窓側一番後ろの席で、1人の少女が叫んだ。

「免許取ったぞお!!」

朝の静かな教室で彼女、三笠由美は雄叫びを上げた。

「やっとか、まあおめでとう」

「なによ、これで私も圭太と走れるのに・・・もつと喜びなさいよ」

由美はめんどくさそうに話す彼、中山圭太に呆れたような顔とすねた顔を足したような感じの顔をして話す。

「だって僕と一緒に通い始めて、僕が取ってから2ヶ月も経ってるじゃん。掛かりすぎだよ。」

二人は春休み少し前からオートバイの免許証。『普通自動二輪』の免許証を取りに行っていた。

「だって実技は出来てんのよ!?なのに学科でバシバシ落としてくんだもん!私頭使うの苦手だからどーしてもダメなのよ・・・」

圭太と由美は幼なじみである。まあ、圭太からすれば腐れ縁である。読書が好きで控えめな性格の圭太に比べ、由美は男の子みたいに乗やバイクに興味を持ち、女の子と遊ぶより男の子と遊んでいる時が多かった。「でも、免許取るうって言い出したのは由美のほうじゃないか。」

そう、事の発端は去年も終わりを迎えた12月。由美がいきなり「バイクの免許取るう!？」と話を持ちかけ、乗り気でない圭太をまるで無視して圭太の親に「圭太君とバイクの免許を取るって話になったから了承してほしい!」とか言っつて、気付けば親父を言い包めていた。

「いいじゃない、圭太のお父さんバイク好きだし。お父さんからバ

イク貰ってたじゃない。」

「ああ、もらったけどまだこれと言って行きたい場所も無かったしまだ一度も乗ってないし、何しろ古いしね」

親父から譲り受けたのは、親父がちょうど今の自分と同じ年位の時に買ってからずっと乗っているバイクで、圭太はよくわからないが親父曰く「名車」らしい。

「あのバイクカッコいいよね！私小さい時あのバイク見たときに、もう将来バイクに乗るって決めてたわ！」

小さい時から一緒に遊んでいる由美はまだ圭太の親父がそのバイクに乗っていた時を知っているのだ。

「カワサキのZ400FXって言うのよね〜いいなあ、私もカワサキにする！！」

1人盛り上がる由美を尻目に圭太は少し考えた。

圭太はFXが昔の名車と言うのは親父から聞いている。しかしどういうバイクなのかは全く聞いていない。後にこれが災難を呼ぶ事になる。

「と、言うわけで！今日学校帰りにバイク屋に行くから付き合っつてね！？」

笑顔で聞いてくる由美を見て圭太は考える。特に部活も入っていないため放課後はフリーだが、バイク屋に行くのは若干面倒だ。が、断れば目の前の笑顔が般若になる。そんなコトを0・2秒くらいで考え、由美に了承の仕草をした。そんな関係がもう10年以上続いているのだ。

そして、今日の放課後がやってきた。二人は学校から自転車で走りいつもの帰宅路を進み、その途中で右折し、国道に出る道を走る。国道に出て、八王子方面に走ると途中で大きな看板を出した大きな中古バイク屋がある。

「さあ！私の愛車を探すわよ！！いざ出陣！！！」

「ちよっ！走ると危ないよ！って、ハア・・・」

由美が勢いよく走りさり、後から圭太がゆっくり付いていく。こ

んな光景も何度も見てきた。

建物は、一階は整備工場。二階は中型バイクコーナーで、三階は大型バイクコーナーになっている。

目的は二階のバイクコーナーにあるから、二階に上がるとすぐに見つけることが出来た。

「うわぁ・・・！やっぱりバイクってカッコいいなあ！カワサキ以外のバイクもいっぱいあるよ〜！！」

いろいろバイクをうれしそうに顔で舐めるように見ながら由美は子供のようにはしゃぐ。

「やっぱり新しいバイクはピカピカしてるね、なんか僕と同じ400のはずなのに全然大きく見えるよ。」

そういいながら圭太は97年式のスキのインパルスを見ていた。今から見たら決して新しくは無いが、自分のFXと比べたら全然新しい型のバイクを眺める。

「圭太〜！こっちこっち〜！！」

なにやら由美が叫んでいる。行かなきゃ面倒だし、行くか。

「ここ、新しいバイクしかないね〜」

一時間近く見ていて、由美がつぶやく。

「カッコいいんだけど、無骨な感じが無いのよね〜。なんかおとなしいバイクばかり。」

「そりゃ、僕のバイクみたいな古いのなんか置いてる店なんかないでしょ。」

圭太が言うと「違うの」と由美が続けた。

「古く無くてもいいのよ。新しくてもあの雰囲気が出ていれば良いのよ・・・」

「そんなコトを言ってもなあ・・・」

「とりあえず、今日は帰りましょう？せっかくの愛車をこんなに早く決めたらダメよね。もつと慎重にならなきゃ。」

「お、由美にしてはマトモなことを」

「・・・なんか言った?」「ごめんなさい、悪かったからニコニコしながらアームロックするのやめて・・・!!」

その後、痛むこめかみを押さえながら自転車で帰り道を二人で進んだ。

「あれ?由美!こつち道違うんじゃない!？」

突然、予定より早く曲がった由美に呼び掛けた。

「あ、間違えた・・・けど、この次右に行けば戻れるでしょ?」

そういいながら、次を右に曲がる丁字路に差し掛かる。

しかし由美の外側、つまり左にいた僕になぜか右に曲がるはずの由美が突っ込んできた。そして・・・

がしゃん!!

見事にぶつかった・・・

「痛たたた・・・つ、なにするんだよ!右だろ!？」ちよつと怒りながら圭太が起き上がる。ケガは無いみたいだ。

「圭太!あれ!!」

一方、由美もケガは無く、ひとしきり左方向を指差し叫んでいる。

「バイク屋さんがある!!圭太!行くよ!!」

すぐさま自転車を起こしてミサイルみたいに加速する由美を見て、いろいろな意味で泣きそうになりながら圭太は後を追った。

『榊モーターズ』

錆付いた看板に古くさい書体で書いてある。

店の前に自転車を止めて入っていくと原付から大型車まで、さっきの大手中古車屋ほどの数は無いがバイクが並んでいる。

「ごめんくださーい!バイク探してて!見ていてもいいですかー!??」

由美が店の奥の扉に叫ぶと、初老の男の人が出てきた。

「いらつしゃい、お嬢ちゃんバイク探してるの？」

すこししゃがれた声で男の人が聞いてきた。

「はい！カッコいいネイキッドのバイクを探してますー！！」

由美がいい返事を返してた。男は一度伸びをしてから

「そーかい、今どき女の子がビツクスクーターじゃなく、ネイキッドとは珍しいねえ。いいよ、好きなだけ見ておいで。」

優しい笑みを浮かべながら案内してくれた。

「こころ無しか、さっきの店と同じバイクもならんでいるのに古く見えるね」

並んでいるバイクを見て圭太がつぶやいた。

しばらく見ていると、由美がある一台のバイクの前で止まった。

そして・・・

「け、け、圭太あ！！！！」

なにかあわてながら叫んだ。急いで振り返ると、由美が驚きとよるこびとをごちゃませにした感じの顔で固まっていた。

そして由美の前にあるバイクを見て自分も驚いてしまった。

「な！？これ・・・僕と同じ・・・FX！？」

真っ赤なFXが、そこにあつた。

由美が笑顔爆発寸前の、嬉しすぎて逆に笑うのにタイムロスした顔をしている。しかしそれも当然の反応だ。なにせ探し求めている理想のバイクの中でも一番求めていたバイクが目の前にあるのだ。

カワサキの名車『Z400FX』

『硬派カワサキ』を決定付けた70年代最後にして最高傑作と名高い4ストマルチ。ホンダのCB400F以来、2気筒が400のス

タンダードだった時代に登場し、以降他メーカーも4気筒を作るコトになったほどの衝撃を当時与えた。

そして、圭太が親父から譲り受けたバイクでもある。

「やったあ！！すごい！見てよ圭太！！あんたのと同じバイクよ！？すごい！！」

しかし、もはやテンションが最高潮に達している由美とFXを見て、圭太は違和感を覚えた。型は間違いなく同じだ。タンクもサイドカバーも、テールカウルも、ウインカーも同じだ。

が、少し大きく見えるのだ。なにか違うと思って見ているとバイク屋のおじさんが出てきた。

「お嬢ちゃん目の付けどころがいいのう。じゃが、コイツはFXじゃないんだ」

「え！？」

「・・・！」

驚きの声をあげる由美と、やはり違うと思っていた圭太の二者の反応をみて老人は笑った。

「コイツはゼファーじゃよ」

「ぜ、ゼファー！？え、だってゼファーって全然違うじゃない！ゼファーはもつと丸いじゃない！さっき見てきたばかりなんだから！！」

イマイチ信じていない由美と、どういことなのかがなんとなくだがわかってきた圭太のそれぞれの反応を見て老人は笑った。

「はっはっは！お嬢ちゃん？そもそもゼファーの先祖がFXと言うのは知つとるかね？」

由美は「へっ？」とアホみたいな顔をしていた。

「ゼファーはFXをモデルに作られた奴でな、初期型はエンジンもFXの後継機種のGPZ400Fとそう変わらないエンジンを載せていての、音はFXに近いんじゃない」

ニコニコしながら話を続けるおじさんの話を聞きながら、由美は「はえっ」とか言ってる。

「エンジンはわかったけど、いや、よくわかんないけど・・・じゃあ何故このゼファーはFXと同じタンクとか付いてるの？」

由美が心底わからないと言う風に聞いた。

「ドレミ工房と言うショップがあつてな、そこにゼファーをFX仕様にする外装キットが出ていてな。もう作つてないのじゃが運良く前のオーナーがその仕様にしてたんじゃない？」

自分の考えがだいたい当たっていた圭太は「ふーん」と見ていたが、由美は相変わらず考えている。が、それも一瞬だった。

「・・・よし！決めた！！」

またさつき満面の笑顔を取り戻した由美が叫んだ。

「おじいちゃん！このゼファー、私に売って！！」

「お、おい由美！」

圭太が由美に確認する。

「いいのか？こんなに早く決めちゃって!？」

「いいのよ、別に！」

「で、でも本物FXじゃないんだし・・・」

衝動買いが多く、そのたびに凹む由美を見てきた圭太が説得するが、

「本物かどうかなんでどうでもいいのよ。ただ、一目みて思ったの。」

由美が圭太の顔を見ながら真剣に言った。

「初めて見た時に、もうこれしか無いって思った。この子が『乗ってくれ』って言うてる気がするの・・・」

由美の真面目な顔を見て、圭太は考えた。そして・・・

「はあ、相変わらずだな、由美は。人の言うことなんか聞かないんだから」

「な、なによ？」

はーっ、とまたため息をついて圭太は言った

「由美がこれが良いって決めたんだ。僕はもう何も言わないよ。」

そう言つて、圭太はもう一度ゼファー改FXを見た。自分の持つ

ているFXよりも大きくて綺麗なこのバイクは確かにカッコいいし、
なにより由美がそれがいいと決めたら絶対に曲げないから、もう圭
太に言うことは無かった。しかし……。

「でもちよつと高いわよね……」

由美がヘッドライトに貼られた値札を見て唖る。6桁の数字が並
べられているが、今まで見てたゼファアの相場より少し飛び抜けて
いる。

「もうちよつと安くならない？」

おじさんに向かって堂々と値切り交渉をする由美。相変わらず図
々しいな、こいつは。

「んー……コイツは悩むなあ……」

かなり真剣に悩んでいる。まあ、お世辞にもあまり商売繁盛して
いるようには見えないし、仕方はないが……

「よし！ワシも男じゃ！お嬢ちゃんみたいなかわいい子に乗られる
ならコイツも本望だろう！」

そう言いながら、値札に赤いマッキーで最初の値段に マークを
書き、その下に新たな値段を殴り書きする。

「これで限界じゃ！どうする？」

なるほど、確かに結構下がった。大丈夫なのかこの店……

「ありがとう！！これなら全然OKよ！！」

嬉しそうに答えた由美を見た。

「しかし、お金は分割払いじゃろう？」

おじさんの質問に、由美は「ナニをバカなコトを」と言いたげな
目で見た。

「去年夏から働いて貯めたお金と、昔からあった貯金を足せば楽勝
よ……」

ああ、確かコイツ去年まで働いてたな、確か喫茶店と朝の新聞配
達。そんなに貯めてたのか。

かくして、このゼファア改FXが数日後に由美のモノになる。

第1章 春、桜、バイク（後書き）

人物紹介

中山圭太

職業 高校3年生

誕生日 6月29日（現在17歳）

身長 169？

愛車 Z400FX

家族構成 父・母・姉

好きなもの 小説・掃除・甘すぎるコーヒー・心から頼れる友達・平和

嫌いなもの 汚い部屋・ゴーヤー・苦いコーヒー

本作の主人公、目立たないけど主人公。普段は小説（主に推理物）を読むことが多い普通すぎる高校生。しかし、免許を取ったの機に、さまざまな出会いや経験をしていく。一人称は「僕」

三笠由美

職業 高校3年生

誕生日 11月8日（現在17歳）

髪型 セミロング

身長 162センチ

愛車 ゼファー400改FX仕様

家族構成 父（出張）・母・弟

好きなもの 圭太・友達・仲間・ゼファー改FX・長距離ツーリング・衝動買い・すっぱい梅干し

嫌いなもの 意地汚い奴・暴走族・筋の通らないこと・すっぱくない梅干し

圭太の幼なじみにして、ヒロイン。目立たないけどヒロイン。いつ

も笑顔で、圭太とは幼稚園の時から付き合い。圭太が好きのだが
自分に素直になれないでいる。一人称「私」

第2章 ハガキとコンビニとリーゼントと・・・(前書き)

こんにちは

今日も投稿します！相変わらずグダグダですが、宜しくお願いします。

あとがきはキャラ紹介です。

第2章 ハガキとコンビニとリーゼントと・・・

あれから数日後の金曜日、いよいよ明日、由美の愛車が車検から帰ってくる。帰ってくればあのゼファー改は正式に由美の物になる。

朝の通学路から落ち着かない由美は、スキップをしながら鼻歌まで歌い出す始末。横を歩いている圭太は朝から周りの視線を気にしながら歩かなくてはならなかった。

「あー楽しみだよー！なんか修学旅行の前日より楽しみだよー！」
スキップしながらルンルン気分で由美が言う。

「由美く、少し落ち着きなよ」
あきれ顔で言う圭太の目の下には薄らクマが出来ていた。それはここ数日、由美の電話のせいで深夜まで起きているからである。あの日から由美はバイクに乗ったらまずはいっしょにツーリングに行くこうと計画を立てまくっていた。

「でね、最初からあんまり遠くに行くのと疲れるから、最初は隣町にあるダムに行きましょう！結構自然があつてきつと楽しいわー！」
昨日からずっとこの調子である。まあ、明日は土曜で他に用事もなにも無いから別にどうということは無いが・・・

そして放課後、圭太と由美は二人で学校を後にして歩いていた。
「今日は私明日に備えて準備しなきゃいけないから、今日は早く家に帰ってバイクの妄想・・・じゃない、想像とか明日の計画も立てなきゃいけないからじゃあねー！」
家が向かいの一件隣だから、ほとんど道がいっしょなんだけどとりあえず別れた。

家に着いてそれからしばらくリビングでたまっていた小説を読んでいると、1つ年上の姉に呼ばれた。

「圭太、ちょっとコンビニまで行ってきてくれない？」

「どうかしたの？」

「ちょっと面白い物頼める？ハガキを買ってきてほしいのよ」

「どうやら、最近ハマってる雑誌の懸賞用のハガキが切れたらしい。中学生みたいなのが好きな姉である。」

「一昨日もハガキ買ってきたじゃん、もう無いの？」

ハガキの切れるスピードの速さに呆れていると、姉、中山茶子は胸を張って答えた。

「懸賞は枚数と創意工夫が必要なの！電波少年なの！！」

なにやら意味のわからないことを喚いている。

なんか良く分からない変人だが、それでも茶子は一応今年の春から東京にある大学に通っている。

そして大学に「懸賞部」を作ろうとして大学に申請したが、2秒ではじかれた。ちなみに高校では「ほふく前進部」を作ろうとして同じ目に逢っている。まさに変人である。

しかし顔はいい為、毎年春は彼女の性格を理解していない男子が声をよく掛け、本性が判るとすぐに破局する。そしてその最速記録は4時間とシューマツハも驚きの最速スピードである。

「わかったよ、今回は何枚買えばいいの？」

「50枚」

「多くない!？」

驚いて圭太が聞くと、茶子は余裕の笑みで言った。

「甘いはね・・・まだまだ少ないくらいよ。はい、3000円！お釣りはあげる！」

そう言っつて、3枚の野口を渡して茶子は自室に戻っていった。

「恥ずかしいなあ・・・コンビニで50枚って言うの・・・」

1人残された圭太がため息をついた。

玄関を出てガレージのシャッターを開ける。自転車で行けばよかったが、明日バイクに乗るのに今まで全然乗っていなかったし、どうせ1件のコンビニには50枚も無いので、感覚を取り戻すついで

にFXで行くことにした。

バイクをガレージから出してキーを捻り、コックを捻ってチョークを引いてセルを回す。

キュルルルル、ボワっ！！

一発で掛かってくれた。バイクに乗らない間にバッテリーを外していて正解だった。

道路に出て、ギアをローに入れて半クラしながら発進。とりあえず町を流してみた。

・・・

町を走ってまだ15分くらいしか経っていないのに、圭太はなにか変な気持ちになった。

町行くライダー、特に若いビツクスカーターに乗った人とすれ違ったりすると物凄く見られるのだ。さっきなんか、後ろから来たバイクに思い切り煽られた。

ライダーだけじゃない、道を歩いているヤンキー風な奴もガン見してくる。なにかいけないのだろうか？ とりあえず目的のコンビニに着いた。

そこでまず20枚のハガキを買った。20枚でも店員に変な眼で見られているようで恥ずかしくなる。

そして2件目のコンビニに到着。とりあえずエンジンを切って、店内に入る。

目的の買い物が終わりバイクに向かうと、どうしたことが、バイクが不良少年三人に囲まれている。

あまり関わりたくないが、自分のバイクなので勇気を出して行った。

「あ、あのおく、それ僕のバイクなんだけど」

なんとかそれだけを言っつて圭太は相手の反応を見る。

「あ？このフェックスがお前の？」

「フカしコイてんじゃねーぞ？コラ！？」

「お前みたいなダサ坊がフェックス？ざけんじゃねーぞ・・・？」

三人とも、かなり怒ってる。どーやら圭太が乗っていることに文句があるらしい。

「ダサ坊先輩、ちょっとバイク貸してよ？すぐに返すからさ」

ニヤニヤしながら1人の金髪にピアスを開けた奴が言った。もちろん、圭太に貸す気はない。

「勘弁してよ・・・僕、そろそろ帰らないと・・・」

なるべく揉めないように言う。しかし、彼らはキレた。

「あ！？ざけんじゃねーよ！！てめえダサ坊のクセによう！？」

「じゃあよ、没収しちまうか？2、3発殴りや言うこと聞くべ？」

なんで自分がこんな目に会わなきゃいけないんだ！？なんて心の中で叫ぶ圭太に向かって、金髪ピアスが拳を振り上げようとした時、駐車場に爆音が轟いた。

バリバリバリバリ！！！！

カーン！カーン！！

その方向を見ると、辺りに爆音と白煙をまき散らしながらバイクが二台こちらに来る。

圭太を含め4人は、そのバイクに釘付けになった。

ハンドルが上にながって、乗りにくそうだ。バイクは爆音を響かせながら停まった。そして白いカフェヘルを脱いだ男を見て圭太は驚いた。

今どきリーゼントパーマ。しかもグラサン着用である。いくら流りに疎い圭太でも十分に古いスタイルと言うのがわかる。しかも見た目がめちゃくちゃ怖い。

ヤンキー三人は顔を真っ青にして震え上がっていた。まるでこの

世の終わりみたいな顔をしている。

「あ、旭先輩……!?!」

金髪ピアスが泣きそうな顔をしながら震えている。どうやら知り合いのようだ。

「おう、テメーら。」

旭と呼ばれた人がこちら、とくに三人の方を向いて話し掛けてくる。

「テメーら、寄って集って1人のパンピー3人で囲んでナニやってんだ?」

ドスの効いた声で、彼は聞いた。

金髪ピアスが泣きそうな顔で説明しはじめた。

「い、いや、違っんですよ先輩?このガキがフェックスなんか乗っていたから、生意気だと思って、その……」

声まで震わせて弁解する金髪ピアスを尻目に、旭先輩がバイクから降りた。

「あ?パンピーがフェックス乗っちゃいけねーなんて決まりがあんのか?テメーら」

バキッ!!

旭先輩の拳が金髪ピアスに飛び、金髪ピアスは文字どおり吹っ飛んだ。

残り2人にも一発ずつ、鉄拳を入れていく。

「テメーら、今からこの人に謝れや。」

そういうと、三人は泣きながら圭太に見事な土下座してきた。

「す、スンマセンでした!許してくださいあい!!」

もはや三人とも泣きながらの謝罪に圭太は「え、あ、うん」としか言えなかった。

「よし、じゃあもうテメーらは行け。次やったらどーなるかわかったか?」

「は、ハイ!スンマセンでしたあ!!」

三人はダッシュで逃げていった。

「おう、オメー」

びくう！！

「ななな、なんですか？」

ビビりながら、精一杯出来るだけの声を出して圭太が聞くと「まあそんなに固くなんな」と言つて旭が続ける。

「ケガ無いか？俺は霧島旭あきひつてんだ。よろしくな！」

さつきと打つて変わつて明るく、全然ドスの効いていない声で自己紹介された。

「ぼ、僕は中山圭太です・・・！」
なんとか出せた。

「そーか、いい単車に乗つてるよな、俺もFペケ好きなんだよ」
そういいながら圭太のFXを眺める旭は、さつきまでと違いニコニコしていた。

「お前、この辺は変な奴いっぱいいるからよ。単車乗ってるつてだけで絡んでくるバカがたくさんいるからまた絡まれたら『旭のダチだ』って言いな？そーすりゃOKよ」

そういいながら、FXを見ている旭に、圭太が話し掛ける。

「あ、あのお！」

「ん？」

「そ、そのバイク、なんて言つんですか？」

そういつて、二台のバイクを見る。旭といつしよにいた人はまだヘルメットをかぶつてバイクから降りていない。

二台とも同じ型のバイクである。

「ああ、ありゃスズキのGT380つて言つてな、通称サンパチつてんだ。てーかよ、FX乗つててなんでサンパチ知らねんだよオメー」

心底わからないと言う顔で（グラスンをしていてわかりにくいが）聞いてきた。

「じつは親父から押しつけられて・・・成り行きで乗ってるだけだからこのバイクがどういふバイクかわかんないんですよ。ただ、親

父から名前だけは昔から聞いていて・・・」

なんとか伝えると旭は「はあ・・・」とつぶやいた。

「じゃあこのFXがどうという人間に人気があるのか、を知らないんだな？」

「え？」

わからない顔をする圭太に、旭が説明をした。

「俺んサンパチもそーなんだが、FXつーのは族、つまり暴走族や旧車會なんかで人気が高いんだ。市場じゃあ100万つけて売るシヨップもザラじゃない。」

旭の説明に、圭太はシヨックを受けた。これからはどこに行ってもこんな感じで絡まれるのだろうか。ケンカは弱くはないが、さっきみたいに複数人で来られてはなすすべもない。真っ青になって考えている圭太に旭がおかしそうに笑う。

「そんなには深く考えんなよ。さっきみたいなのは滅多にねーんだからよ」

そう、旧車に乗っているときたまこういう目にも会うことはあるが、ほとんどは羨望の眼差しや、憧れの的になることもあるのだ。

「あ、ちなみに俺は暴走族じゃあないぜ、そこんとこよろしくな！」

そして、もう一人のサンパチ乗りの人がやっとバイクから降りてヘルメットを脱いだ。

「紹介するよ、こいつは真田美春、俺の友達だ・・・って痛っ！」

旭みたいに、てつきりめちゃくちゃ怖い人が出てくるのかと思っていたら逆にめっちゃくちゃ可愛い女の子だったため、拍子抜けした。

ショートカットにした髪に、綺麗な顔立ち、出ているところは出ている、引っ込むところは引っ込んで。脚も長くて、パーフェクトだが、ヘルメットで旭の頭を殴るあたりかなり怖いのかも。

「いてえ・・・！なにすんだよ!？」

若干涙目で、(例によつてグラサンでわからないが)旭が訴える。

「友達つて紹介するからよぉ、怒つちやうぞぉ!」

すでに怒りながら、少し間延びした声で美春は言った。

「だって恥ずかしいんだもんよ、お前みたいな可愛いのと、俺みたいなバカが付き合つてるって言うのが」

確かに美春と旭が付き合つてるなんて、見ただけでは全く思えないがそんなことを言えば旭の恐ろしい鉄拳と美春のヘルメットが飛ぶから止めた。

「ちなみに赤いサンパチが俺ので、青いのが美春のヤツな。」

マフラーからタンクラインまで同じサンパチ。結構迫力があり、旭のサンパチはハンドルが鬼ハンでツノみたいの上に伸びている。対して美春のは普通のハンドルだ。

「ま、とりあえず俺の方からF×に乗ったヤツは俺のダチだから手え出すなって市内に話回しとくから、また会おうや、これ番号な」
そういつてメモ用紙にケータイの番号を書きなぐり、圭太に渡した。

「明日あ隣街のダムまで美春とツーリング行くからよぉ、暇なら来いよ!」

「あ、僕も明日2人で隣街のダムに行きますよ!」

「ほお、マジか!だったらまた連絡くれ!合流出来そうなら合流しようや!」

「はい!こちらこそ!」

そして旭と美春がそれぞれ、自分のサンパチに乗りキックでエンジン始動、あたりにバラチャンの爆音と2スト特有の白煙を轟かせ、圭太に手を振りながらコンビニの駐車場を後にした。

旭たちが去つた後、残された白煙はカストロールの甘い香りがした。

第2章 ハガキとコンビニとリーゼントと・・・（後書き）

登場人物紹介

中山茶子

職業 大学1年生

誕生日 2月14日（現在18歳）

髪型 長髪（明るい茶色）

身長 164？

愛車 とくに無し

家族構成 父・母・圭太（弟）

好きなもの 圭太・家族・由美・友達・懸賞・蟻の巣に水を流すこと・牛乳茶づけ

嫌いなもの 自分を変つていう人・生の魚類・

圭太の姉。幼少のころから変人で近所では少し有名。頭は良く、スタイルもいいので、男からはもつたいたいと言われている。由美とは圭太と同じく幼稚園からの付き合いで、実の姉のように慕われている。

霧島旭

職業 ラーメン屋・バイク屋

誕生日 12月1日（現18歳）

髪型 リーゼントパーマ（黒）

身長 175？

愛車 GT380改

家族構成 父・母・妹

好きなもの 美春・仲間・GT380・カレー・ロックンロール・革ジャン・

嫌いなもの 美春に手を出す奴・筋の通らないこと、または人・自

分の顔

細い眉毛、リーゼントパーマ、革ジャン・・・などいかにも『昭和ヤンキー』な見た目をしている男。硬派で熱血漢で喧嘩はめっぼう強くて・・・と隙がないように見えるが、美春にはめっぼう弱い、というか甘い。いつもメガサを掛けているが素顔は意外とイケメンで、本人はそれがコンプレックス。パワーの割に身体は細い。

真田美春

職業 ラーメン屋・スーパーのレジ打ち

誕生日 5月3日(現18歳)

髪型 襟足長めのショートカット(蒼黒色)

身長 165?

愛車 GT380改

好きなもの 旭・旭の観察・旭といること・圭太と由美・GT380・カレー・晴れた日

嫌いなもの 旭を悪く言う奴・旭を傷つける奴・汚い人

旭の彼女。旭には似合わないくらい美人。どこかのんびりした口調で、頑張り屋だがどこか抜けていることが多い。何やら暗い過去を背負っているようだ・・・?旭のことが大好きで、旭に害をなす者には恐ろしいことも平気で実行する、ある意味一番怖い娘

第3章 初ツーリング！(前編) (前書き)

前編です。相変わらず文字数少ないです・・・
今回の2章から『旭&美春編』になります。
あとがきは特別企画です！

第3章 初ツーリング！（前編）

今日1日でいろいろあった。

あの後、家に帰るまでにトラブルは何もなかった。これも旭の連絡のおかげか。しかし連絡回るの早すぎないか？と思いつながら無事に家にたどり着いた。

しばらく時間を空けてから旭に連絡を試みる。

『おう、俺だ。』

「あ、旭さんですか？」

なんとかつながった

『ああ、圭太か。あの後、無事に帰れたか？』

さつきあつたばかりの圭太の声を覚えていてくれて、さらに帰れたかの心配もするあたり。旭はかなり人間が出来ているのかも知れない。そんなことを圭太は思った。

「はい、無事にたどり着きましたよ」

『そーか。で明日は合流出来そうか？』

「はい、もう一人に聞いたたら『ツーリングは人数が多いほうが楽しいし、圭太が世話になったなら』ってことで問題無いです。」

この電話をかける前に、由美に時間を知るついでに一応今日の出発話を話し、確認を取ったのだ。

最初は「圭太と2人がいい」とか小さな声で意味ありげなコトを言っていたが、女心に関しては鈍感な圭太には意味がわからず、助けてもらったお礼も兼ねてと頼むと、「じゃ、じゃあ仕方無いわね！圭太を助けてくれたなら私もお礼くらいは言わないとね！」とか言っていたので、OKになった。

『そーか、わかった！そつちは何時に出るんだ？』

「朝11時に出て、途中で昼食を食べてからだから多分1時には着きます」

ちなみに、明日は朝10時にバイク屋まで由美を乗せて、由美の

ゼファア改を取りに行き、それから出る。そこから隣町のダム入り口までバイクなら約40分。遠く感じるが、町の端に住んでいる圭太たちは、隣の町のさらに反対側にあるダムまでは少し距離があり、昼食がどうせ長引くので早くても1時という計算になる。

『そうか、なら1時にダムの山道の入り口に集合でいいな?』

「はい、すみません時間あわせてもらっちゃって。」

『いいって、気にすんな。それより、明日に備えてオレのサンパチちゃんオイル足さなきゃなあ。じゃあ、明日1時な』

そうこうして電話を切った。

その後、圭太はいつもどおりに過ごし、夜11時には就寝した。

一方・・・

チツ、チツ、チツ、チツ・・・

「あー！ダメだあー！！全然寝れない！！！！」

由美は明日、我が愛車ゼファア改のコトと圭太とのツーリングに行くことに楽しみと緊張で寝付けないでいた。

「うー、どーしよう・・・」

ちなみに、由美は小学生の時から圭太が少し気になる存在になっていた。しかし、自分の男勝りな性格と圭太のおとなしさが災いしてその想いを伝えられないでいる。そもそも、この気持ちが何なのかすら良く分かっていない。

「明日は早いんだから、早く寝なきゃ・・・」

頑張つて目をつむるが、一向に眠くならない。何時間も過ぎた気がして時計を見ると10分も経っていない。

「あー！もう！！」

そんなことを後数回繰り返し、ようやく眠りに付くのであった。

そして当口。

「おはよー、よく眠れたわ〜・・・。」

朝、自宅まで来た由美の顔を見て圭太は思った。「コイツ絶対あんまり寝てないな」と。

「とりあえずバイク屋までよろしくね！待っててね〜、ゼファーちゃん！」

そうこうして由美を乗せて発進した。本当は「免許取得1年間は2人乗り禁止」というルールがあるが、今日この時は見逃してもらいたい。

少し走るとすぐにバイク屋、「柎モーターズ」に着いた。

「ふう、到着〜」

ヘルメットを脱ぎながら圭太がつぶやく。

「あんたの運転、慎重すぎてつまらないなあ」

由美がなにやら自分勝手なコトを言っているが気にしないことにした。

「おお、来たかい。」

柎モーターズのおじさん、柎さんが店から出てきた。

「おはよー！おじさん！私のゼファーは！？」

「ああ、中にあるからこつちおいでな」

「圭太！早く行くわよー！！」

こうして、店のなかに三人で入っていった。

「わぁ・・・！ピッカピカだぁ・・・！！」

目の前には、ピカピカのゼファー改が置いてあった。

「今日ツーリング行くって聞いたからね、磨いといたよ。」

「ありがとう！おじさん！」

「まあ、とりあえず各部の説明は前回したから、特に言うことはないんだけどひとつだけいいかな？」

おじさんは真剣な顔で由美と、そして圭太に向かって話す。

「絶対に、無理な運転はしないこと。無理なことをすれば絶対に危ない目に会う。バイク事故は簡単に命を落とすこともザラじゃない。絶対に安全運転で、楽しく走ってくれ。」

いつもの優しい笑顔ではなく真剣に、強く話すおじさんの言葉を聞いてこちらも固くなる。

バイクというのは確かに、なにかあれば簡単に命をなくすこともある。毎年バイクでの事故で何人ものライダーが命を落としたり、重症を負ったりする。

「ま、じじいからの説教はこんくらいにするかの、それより早く行かないと遅れるぞ?」

言われて時計を見ると、もうすぐ11時だ。

「あら、本当だ!早く行かなきゃ!」

そういつてヘルメットを被る由美。ちなみにヘルメットはジェットタイプだ。

「おじさん!今の話、肝に命じとくわ!!ありがとうございます!」

由美がお礼を言くと、おじさんは笑いながら頷いた。

きゅるるる・・・ボワン!!

セルが回り、ゼファアのエンジンが始動。ちなみにマフラーは無名だが、ショート手曲げ管である。

「うわあ、スゴい・・・教習で乗ったヤツなんかより全然カッコいい音・・・」軽くフカしながら、由美が感動の声をあげる。

「じゃあ、道中気を付けてな。また気軽においでな。」

「ありがとうございます!」

「どうもお世話になりました」

2人ともお礼を言って、ギアをローに入れた。

「よし、圭太!とりあえず隣の町行く前に、少し走ってご飯食べに行くわよ!」

「いいけど、どこに行くのさ?」

「ついてきなさい!!」

そう言いつて、由美は半クラッチでゆっくりと発進、後から圭太が追い掛けた。

「やっぱり若い子は元気だのお・・・」

榊は走り去っていく背中を見て誰ともなく呟いた。

しばらく国道を走り、途中五差路を右に曲がる。

由美のゼファー改FXは速度を40前後に圭太の前を走っていた。

「きもちー！！！！」

ゼファー改を駆りながら、由美が叫ぶ。マフラーにサイレンサー（消音器）が入っているためそこまでうるさくはないがそれでも結構大きい音に由美のテンションは最高潮に達していた。

「大丈夫かな由美のヤツ・・・」

ゼファー改FXの後ろを走る本物FXに乗る圭太はヒヤヒヤしていた。

免許を取ったばかりの由美の運転は、教習場では教官ベタ誉めの腕だったが、教習場と公道は違う。教習でも公道は走ったがあれは教官もいたし普段より注意力が働いている。しかし免許取得すれば、口やかましい教官はいない。減点も見極めもなにも無いから、飛ばしたり注意力が薄くなり事故を起すのでは、と悪い方に考えてしまふ。

しかし、由美はそんなコトを考えている圭太をいい意味で裏切った。

ニーグリップをして、飛ばしたい気持ちを押さえて法定速度内で真っ直ぐ走る。

初心者の中には自分の腕を過信しすぎて蛇行やすり抜け、その他無謀な行為を行うことが多々あるが、由美はそのテンションとは裏腹に普通に走っている。

しばらく進み、途中にあるファミレスに2人は寄った。駐車場に入り2、3度軽くフカしてキーを切った。

「あー、もう最高！！さすが私のゼファーちゃん！！」

バイクから降りた後も、じーっとゼファー改FXを見ている由美に、圭太がしびれを切らした。

「早く入ろうよ、旭さん達とのツーリングに遅れちゃうよ」

まだ時間はあったが、万が一に遅れたら申し訳ないので由美を説得して店内に入った。

「……」

「……」

「……カッコいい……カッコよすぎるわ!」

店の窓際、バイクの目の前の席に座りながら由美はさっきからずつとこんな感じだ。

「FXってやつぱりカッコいいわよね!! 2台も並ぶと迫力もあるし!」

由美が立ち上がらんばかりに聞いてくる。

「そうだね」

しかし、どこか投げやりな感じで圭太が答えた。

「なによー、あんた、FX好きじゃないの?」

結構スナながら由美が聞いてきた。それはそうだろう、せっかく型式や名前は違うが圭太のFXと同じ外装のゼファーを買って、初日だと言うのにこんな反応をされれば誰でも拗ねたくなる。

「いや、嫌いじゃないよ。好きだけどさ」

「じゃあ何よ?」

アヒル口で聞いてくる由美に圭太は水を一口飲んでから答えた。

「うらやましくてさ、由美が。僕のは父さんからお下がりで、自分で乗りたいバイク決めたわけじゃないからさ、まだそこまで感情移入出来ないんだ。それと、自分でバイクを決めた由美がうらやましいのと、自分で買えない僕が少し悔しかっただけ」

そう。いくらカッコいいバイクでも、圭太はまだ乗り始めて日が経ってないし、自分で買ったわけでもないためになかなか自分のバイクに愛着が湧いていないのだ。

だが由美は「そんなことないよ!」と言ってきた。

「あんなにカッコいいし、圭太のお父さんから譲り受けたバイクなんだから圭太がそこまで考えることは無いわよ!」

由美は圭太に迫るが、その顔はかなり真剣だ。

「それに私は圭太のFXのおかげでバイクの免許取ったり、ゼファ
ーちゃんに決めただから！」

「え？」

心底わからないという感じで圭太が問う。

「だって、私昔からバイクとか車とか乗り物全般が好きだったじゃ
ない？小さいときからあのFXを見ていたから「いつか私もバイク
に乗りたいたい」って思ってた、免許取ってから圭太はあのFXをもら
ってだから私・・・圭太と同じバイクがいいって思ってた、それで
・・・」

なにやら言葉がまとまっていないが、圭太は言いたいことがよく
わかった。

「そうか・・・ゴメンね、僕が変な風に考えてて。」

圭太は頭を下げた。

「でも、ありがとう。今の言葉で僕もさっきよりだいぶFXに愛着
が湧いたよ、やっぱりカッコいいしね」

圭太がそう言うと、由美はさっきまでの不満と恥ずかしそうな顔
から一変、満面の笑みを浮かべた。

「当たり前じゃない！あんなにカッコいいんだもん！分かればいい
のよ、分かれば！」

そうこうして料理が出てきてバイクの話をしながら食べて、店を
出た。今から出ればちょうどいい。

「よし、行くわよゼファーちゃん！！」

セルの音が鳴り、次にピストンの爆発音が轟く。

圭太のFXも同じようにエンジン始動。

「よし、行こうか」

そう言っただけで今度は圭太が前を走りだす。由美は後ろから程よい距
離を保って付いてくる。

春の風を感じながら、圭太は心の中で由美に改めてお礼を言った。
そして自分にも聞こえないような小さな声で呟いた。

「よろしくね、FX」

2台のカワサキは、気持ち良さそうに道路を快走した。

第3章 初ツーリング！（前編）（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！記念すべき1人目は主人公の中山圭太君です！！」

圭太「あ・・・はじめまして・・・ってなんですかここ！？なに登場人物って！？それにあなた誰ですか！？」

作者「ああ、まあここは夢の中のようなものです。そして私の名は・・・まあ気にするな」

圭太「気にするよ！なんで僕がこんなところに・・・」

作者「まあ、考えても答えは出ないし、時間もないから早くしてね。うん」

圭太「理不尽だ・・・まあ、夢ならいいか・・・」

KAWASAKI Z400FX 圭太仕様

スペック

エンジン ノーマル

足回り ノーマル

外装 ノーマル

色 ブルー

作者「・・・」

圭太「・・・」

作者「・・・つまんねー」

圭太「え！？僕強制的に連れてこられて勝手にバイクの紹介させられて、それで最後ソレだけ！？」

作者「ミスキャストだったな・・・」

圭太「ひどいよ！ていうかもういいでしょ！？夢なんだからそろそろ覚めて!!」

作者「わかったよ、しょうがないなあ・・・じゃあまたね」

がばっ・・・！ 起きた

圭太「・・・すごく嫌な夢を見たような気がする・・・」

というわけで、たまにはこんなお遊びもしてみたいと思います。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

今日は、前編と後編2つ上げますので、読んでいる方がいらっしやいましたら、厳しい感想など待っています

第4章 初ツーリング！（後編）

あれから時間にしたら10分くらいで目的地「宮瀬ダム」に着いた。

この当たりにはダムで水貯めしているので小さな湖がある。そして山もあって静かな場所で広い二車線の道路は車通りが少なく、道も最近綺麗に舗装しなおされ始めていてだんだんではあるが走りやすい環境になっている。地元のライダーが少し息抜きに、しかし遠出するほどの距離は辛いという人たちがよく訪れる場所である。

圭太と由美はしばらくその入り口で待っていた。約束より10分早く来てしまったので、旭達を待つばかりだ。

しばらくすると遠くから2スト特有の甲高い音が2台ぶん聞こえてきた。道路の向こうを見ていると、2台のバイクが白煙をもくもく上げながら近づいてきた。

そして目の前に止まった2台のGT380、通称サンパチは最後にアクセルをフカしてエンジンを切った。

「よう、待ったか？」

2台あるサンパチのうち、赤いサンパチに乗っている旭がヘルメットを脱いで聞いてきた。

「いえ、さっき来たばかりです」

圭太が答えると由美が耳元でささやいた。

「け、圭太、この人？」

「え？うん」

「不良から助けられたって聞いたけど、向こうも不良じゃない！」

「コソコソ」

まあ確かに、ヘルメット脱いだら横浜〇蠅のJohnnyみたいなのが出てきたらそりゃあ怖いだろう。翔のほうは怖そうだけども、え？知らない？

「なーにコソコソしてんだよ」

ギクツ！！

「ま、理由はわからんでもないがな」

笑いながら答えた旭に、由美は第一印象で人を決めてしまった自分を反省した。これだけだが、話せばいい人じゃないか。

「あ、私は三笠由美です！昨日は圭太を助けてくれたみたいで……ありがとうございます！」

そう言っ頭をペコリて下げた。

「気にすんな、そんなんしょっちゅうだからよ」

そんなことを言いながらタバコに火を着ける。なんか大人っぽい姿が似合う人だと由美は思った。

「そちらの方は？」

由美が聞くと、青いサンパチに乗っていた美春がヘルメットを脱いだ。

「はじめまして、私は真田美春！ちなみに旭の彼女ね！」

そんなことを言われて、旭ははずかしがっている。頬をポリポリ掻きながらそつぽをむいている。こういう子供っぽい仕草もどこか似合う。しかし、それより……

「……き、綺麗ですね……」

美春の胸と顔を見て、由美はため息をついた。実際、顔は美春に負けず劣らずな由美だが、いかんせん胸が無い。

特別胸があるわけではない美春だが、由美の胸はまな板までいかなくても、あまり無い。山で例えると美春が富士山なら由美はさながら高尾山くらいだ。

「そ、そんなことないよお！あとさつきからどこ見てるの！？」

焦りながら胸を隠す美春。つーか隠すことないだろ、服着てるんだから。

「いーなー、私なんか無いからなあ……少しくらい分けてくださ
いよお……」

もしそれで「はいどうぞ」ってヤナセワールドのキャラクターみたいに胸を分けられたらどーするつもりだ。

「おい」

2人で話していると、話の輪に入れないうち2人がどこか恥ずかしそうな顔をしてそっぽを向いていた。それに気付き、由美たちも真っ赤に。

「しかし、由美ちゃんの単車もイイ感じのイジリかたしてるよなあ」

そういつて、旭は由美のバイクに目を向けた。

「まさかゼファー改FX仕様とは、シブいなあ」

由美と圭太は驚いた。このゼファーを買うときに由美は最初気付かなかつたし、FXに乗っている圭太も違和感を感じていただけなのに、旭は一目で正体を見破ったのだ。

「よくわかりましたね！」由美が感動して拍手しながら聞くと旭は笑いながら話した。

「いやあ、旧車とか好きだとこーゆーのが普通に出来てくるんだよ」

そういつてタバコを捨てた。

「ゼファーとFXじゃ、エンジンとフレーム、特にフレームは全然違うからな。詳しい奴はサイドカバーの下見ればすぐにわかるよ」

「フレーム？」

旭がゼファー改FX仕様の簡単な見分け方を説明すると、由美がよくわからないと言った顔で聞いてきた。

「判り易く言やあ、単車の骨組みだな。バイクの基本的な性格はこのフレームで決まるといつてもいいが・・・まあ難しい話はまたの機会にしよう」

そういつて旭は自分の愛車、GT380の横に立つて、ハンドルに引っ掛けていたカフェヘルを被った。

「よし、立ち話もなんだからでっ発すつか！！」

「でっ発？」

圭太がわかんない顔をしていると旭が「ああ、俺たちの間で出発のコトだ」と説明して、由美が「ああ、なるほど」と納得した。

4人はそれぞれのバイクにまたがり、エンジンを掛ける。
由美と圭太はセルで掛けるが、旭と美春のサンパチにはセルなど付いてなく、キックを使ってエンジンを掛ける。

ばぁん！！バリバリバリバリ・・・！！

こんな感じのカミナリみたいな音をたてる。

「あんまり俺たちの後ろ付いてくると白煙とオイルまみれになるから、前に出るか横にズレた位置にいてな！単車汚れちまうからよ！！」

道は一本道だから先頭を走っても問題無いが、やはり初めて来る場所だし、初心者なので旭達に先行してもらうことにした。

2台のサンパチは、白煙と爆音、目には見えないがオイルも撒き散らして走りだす。後に圭太と由美が続いた。

走りはじめて数分、由美が圭太の横にらんで叫んだ

「なんか自然が綺麗な場所だね！！」

ニコニコ顔で叫ぶ由美に圭太も叫ぶ。

「そうだけど、あんまりよそ見しちゃダメだよ！！」

そんなこんなで、しばらく走るとダムが見えてきた。ここで、先行交代。旭と美春が圭太達の横に並び、『先に行け』と指でジェスチャーする。

それを見て、由美が真っ先に飛び出し、圭太が後を追った。

4台はランデブー走行を楽しみ、時折目をあわせたりして楽しみながら走っていた。

突然、旭のサンパチがギアを落として加速していった。追い掛けようかと思っただがやめておいた。事故したら大変だし。

真っ直ぐ走っていると、旭がエンジンをかけながら止まってまっいてくれた。

その後、後ろに回った旭がまた横に出てきた。今度は何をするかと思っていると、いきなり前輪を持ち上げウィリーを始めた。し

かも鬼ハンドルでの荒技だ。

そのまま後輪だけしか使わずに加速していき、しばらくしたら前輪を下げてウィリーをやめて減速、圭太の横にまたならんだ。

「すごい！なんであんなこと出来るんですかあ！？」

由美は興奮した感じで旭に叫ぶが、旭は答えず手だけ振った。

しばらく走ると、さつきと違うファミレスが出てきた。

旭のサンパチのウィンカーがチカチカ点滅して、ここに一旦寄ることになった。

「いやあ、今日は天気も良くてサイコーだな！！」

ファミレスに入った4人は、さつきと同じように窓際のバイクが見える位置に座って飲み物を飲んでいる。

「でも、なんであんなウィリーが出来るんですかあ？」

由美が興味深々に聞いてくる。

「ああ、ありや偶然だ」

そんなあからさまな嘘を言う旭を不満げな顔で由美が見る。

「教えてくれてもいいじゃないですかあ、ケチ」

まあ、教えなかったのは由美にケガされたくないという良心が働いたのもあるが、圭太の目が「教えないで」と言っていたからでもある。

「でも、ここから見てもやっぱり旧車4台集まると大きいわね」

美春がコーラを飲みながら言う。ちなみに旭もコーラで、由美はメロンソーダ、圭太はウーロン茶だ。

「正確には、私のゼファーは旧車じゃないけどね」

由美が笑いながら言う。

「でもゼファーも初期型がもう20年前だろ？ありやあ初期型ベースだから立派な旧車だよ」

旭が言うと、由美が笑いながら「ありがとう」と言う。

「でも、旭さんや美春さんみたいに私のゼファーちゃんも改造したいなあ・・・」

由美がそんなことを言うと圭太が「ええ？」と言った。

「外装もFX仕様でマフラーも変わってて、他にどこをいじるのさ？」

圭太の質問というか疑問に旭が答えた。

「単車なんてのは、イジリだすと止まんないよ。外装やってマフラーやって、エンジンやったら足回り。その次はフレームも強化したいしってなつていくんだよ。」

由美が「へえ」と感心する。

「じゃあ、旭さんも結構イジってるんですか？」

圭太が二杯目のウーロン茶を飲みながら聞いてきた。

「いんや、オレと美春のサンパチはチャンバー変えてシート変えただけだよ、オレだけハンドルが鬼ハンだけだな」

「チャンバー？」

由美の疑問符に、旭は「判り易く言えば、マフラーだよ」とコーラを飲み干し答えた。

「えー！じゃあなんであんなバリバリ音するんですか？私たちのバイクはマフラー変えてるけどあんな大きな音出ませんよ」

由美のアヒル口の不満顔での質問に、今度は美春が答えた。

「理由は2つ。エンジンの構造の違いと、あとはマフラーのサイレンサーよ」

「どーいうことですか？」

由美の質問に、美春は「こほん」と先生のように咳払いをしてから答えた。

「あなたたちのバイク、FXとゼファーはクルマのエンジンと同じ4ストエンジンって言って、ガソリンだけを燃やして走るエンジンなのよ。それに対して、私とあつくくんが乗るサンパチは2ストエンジンって言って、ガソリンに加えてオイルも燃やして走るの。だから私たちのサンパチは白煙を吐きながら走るの。まあ、白煙の量はセッティングとオイルの種類によるけどね、それと4ストエンジンにはバルブっていう部品があるんだけど、2ストにはバルブがなくって、ピストンがバルブの役割も果たすから、甲高い音が出るの。」

「お前、いつの間にそんなに勉強したの？ すごいな」

旭に誉められて美春は「エヘヘ」と笑いながら続ける。

「ちなみに、マフラーの音はあなたたちのサイレンサーが入っているから小さいのよ。」

「サイレンサー？」

「消音器のこと。後で試しに抜いてみたら？ すっごい音がするんだから！」

「わ、本当ですか？ ありがとうございます！」

頭を下げる由美に対して、美春が「いやいや、頭をあげてよ」と言う。

「後、私に対しては別に敬語抜きで良いわよ？ ね、あつくん！」

「いや、なんでもいいけどその呼び方はやめて、恥ずかしいから」

「ががががーん！！！」

音にしたらそんな衝撃が美春を襲った。

「それと、美春の言うことはだいたい合ってる。ただ、4ストモオイルが燃える時もある。まあ、その時はエンジンの調子が良くない壊れてる時とただけだが……。あと、長いあいだオイルを変えないと白い煙が出るから、そしたらすぐに変えな。あと、……」

「あ、旭さん！！ 美春さんが泣きそうな顔して撃沈してますよ！！！」

圭太の言葉に美春を見ると旭をあつくんと呼ぶのをやめると言われたコトと、頑張っつて覚えた知識にダメ出しされ、美春が撃沈されていた。時折、「頑張っつて覚えたのに……」とか「どーせバカですよお……」とか「あつくんっつて呼んじゃいけないなんて……」とか小さく聞こえてくる。

「でも単車に乗って数ヶ月のヤツにしたらすごいよ！ 天才だよ！ うん！」

旭が慌てフオローすると、美春は顔を上げて「え……？」って

反応した。

「うん！マジでよお！オレなんかそのくらいするときなんかなんにも知らなかったぜ！！」

圭太と由美は心の中で「ウソだあ」なんて思ったが、美春はだんだん笑顔になってきた。下から上目遣いで「本当・・・？」とか聞いている。

圭太と由美はまた心の中で「この人いちいち仕草が可愛いなあ」とか思いながら見ていた。

「ああ、本当だつて！！なあ！？」

圭太がいきなり話しを振られた。

「え、うん。そうですね！僕も全然わかんなかったし、今のお話でよくわかりましたから！」

圭太のフォローもあり、美春は「ありがとう」と礼をいった。

「だろ？お前すごいよ、うん」

旭がもう一度言つと、完全に機嫌を直したのか、美春は復活した。

「やっぱりあつくくんは優しいね！」

やはり呼び方は変わらず、旭は恥ずかしそうにしていたがここでまた「その呼び方はやめろ」つて言つたらまた撃沈するだろうからなにも言わなかった。

そんな2人をみて由美笑った。

「旭さん、パツと見怖いけど美春さんといると優しいそうですね」

笑いながら言う由美に旭が「ん？」といいながら話しを続ける。

「なんだとく、せっかくゼファアのパーツが家にあるからあげようと思つたのにそんなこと言つと上げねーぞ？」と言つと、由美が身を乗り出してきた。

「え？ゼファアちゃんのパーツあるんですか！？」

「ああ、ウチには結構いろんなバイクのパーツが転がってるんだ。

みんな俺ん家にパーツ置いていくから、増えてて逆に困ってるんだ。

「

旭の説明に、由美はテーブルに頭までつけて謝りはじめた。

「ごめんなさい！だからゼファーちゃんの部品、使えそうなの分けてください！！！」

かなり真剣に謝りまくる由美を見て、旭がケラケラ笑いだした。

「はっはっは！冗談だよ、冗談！いいよ、ウチ来るならあげるよ。」

「本当！？」

今日何度目かのハイテンションに、圭太が「おい由美」と止める。

「なによー、ゼファーちゃんのパーツ貰えるのよ！？」

「いや、それはいいんだけど」

そういつて辺りを見るようにジェスチャーした。

周りの人が盛り上がってるこの席をかなり見ていた。いくら空いていても、かなり目立っていたらしい。

由美が小さな声で「し、失礼しましたあ・・・」と言いながら席に座った。

「ま、とりあえず帰りにウチ寄っていけよ。そしたら確か外装とかマフラーとかその場で付けれそうなのパーツあるからよ」

旭の提案に由美は「はい！」と答えた。

こうして、今日旭の家に寄ることが決定された。

第4章 初ツーリング！（後編）（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！2人目は主人公の三笠由美ちゃんです！！」

由美「え！？なにここ！？っかアంత誰！？」

作者「いちいち面倒だなあ・・・ここは夢の中みたいなもので、私は進行役で、あなたは愛車を紹介してくれればいいんですよ」

由美「なんだこの人・・・まあいいわ！夢とは言え、私はゼファーちゃんを紹介できるなら誰でもいいわ！！例えあんたみたいなのでも！」

作者「お、なんか最後気になったけど、物分かりがよろしくて助かるなあ。圭太君はなんかノリ悪かったし」

由美「え！？圭太も来たの！？」

作者「きましたよ、ノリ悪かったけどネ」

由美「あ、圭太はこういうアピールできる場所で弱気になっちゃうからねえ」

作者「あなたはある意味凶太すぎるけどネ・・・」

由美「なんか言った？」

作者「いえ？なにも？それより愛車自慢宜しく！」

由美「なんかムカつくけど・・・まあいいわ！これが私のゼファーちゃんよ！！」

KAWASAKI ZEPHYR 400 改 由美仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル 吸排気系は手曲げショート管のみ

足回り ノーマル

外装 ドレミ製Z400FX仕様キット
色 レッド（ソリッドカラー）

作者「おお、なんかシブい仕様だねえ」

由美「最高でしょ！？こんなにカツコイイ子はいないわ！！」

作者「ドレミのキットっていうのがイイね」

由美「何言ってるの！？全部最高よ！！」

作者「ははは、こりゃ完全に親バカだ」

由美「親バカ上等！あゝ、カツコイイ・・・」

作者「じゃあ、次イジるとしたらどこをイジるの？」

由美「んゝ・・・そうね、とりあえず今はまだこのままでいいわ！強いて言えば前のタイヤの上についてる銀色の奴を赤いのに変えたいわね」

作者「ほゝ、フロントフェンダーか」

由美「そうね。ところで・・・」

作者「なんですか？」

由美「紹介も終わったし、そろそろ帰ってもいいんじゃない？」

作者「あ、そう？わかったゝ。またそのうち呼べたら呼ぶよ」

由美「別にいいわよ、呼ばなくても」

作者「そんなこと言うなよ！結構苦労してるんだぞ！？」

由美「知らないわよ。そんなことより早く帰してよ！」

ゴスつ！！ 足首を思い切り蹴られた音。

作者「痛つ・・・！わかったよ！じゃーねゝ！」

がばつ 起きた

由美「あゝ・・・もう朝かあ・・・」

というわけで、今回は由美編でした！

ご意見ご感想お叱りの言葉！いつでも受け付けております！それ

では……！

第5章 忍び寄る影!?

4人はファミレスを出た。

この後、旭の家にゼファアのパーツを買いに行くのでダムを少しまた流してから帰ることになったのだ。

皆自分のバイクのエンジンを掛ける。由美もエンジンを掛けようとスターターに指を伸ばした時、美春に呼び止められた。

「あ、由美ちゃん」

「なんですか？」

由美が美春に聞き返すと、美春がニコニコしながら問い掛ける。

「敬語は抜きつて言ったじゃない。それに、サイレンサー抜くんじやないの？」

「あ、ごめんなさ……じゃない、ごめん。よし、そーいえばサイレンサー抜いた音を聞きたかったんだよね！」

そう言つて、サイレンサーを外そうと思ひバイクから降りるが、なにがサイレンサーでどうやって外すのかわからないことに気付いた。

「……旭さん、サイレンサーつてどれですか？」

由美に呼ばれて、エンジンを暖気していた旭が由美のゼファアに向かった。

「サイレンサーつてのは、マフラーを後ろから見ればわかりやすいよ。ほら、排気口が出口に比べて小せえだろ？この穴を埋めているぶんだけ消音されてんだ」

なるほど、確かにマフラーの出口の直径は大きいのに、排気ガスが出る穴は小さい。

「ま、でも実際はやんないほうがいいんだけどな」

旭が訳有りげに言う。

「オレ達みたいにあんまりうるさいと、マップにも目を付けられるしな」

そう、旭達のサンパチもそうだが、由美のもこれを抜いたら騒音規定をオーバーするかもしれない。

「ま、運がなければの話だけだな。みんな結構外してんだけど。しかも捕まっても対した話じゃないしな」

そんなことを言う旭に、由美がしゃがみながら聞く。

「じゃあやめたほうがいいですか？」

「実際は付けてた方がいい。まあ、この辺地元は警察もそこまでうるさくないけどキップでもなんでも切られたらオレも責任感じるしな。オレは反対だな」

「なんだかなあ・・・」

そう言って、由美が旭を見る。

「でも、私は外したい！ゼファーちゃんの本当の声が聞けるし！」

そういって、ゼファーのタンクに手を置いた。

「じゃ、好きにしたらいいさ。ただ、一応違法になるってことを頭に入れとけよ。ま、守ってるヤツなんかめつたにいないけどな」

ちゃんと忠告もしたし、反対もした。他人にすっかりアドバイスし、その上で旭はバイクをイジる。いくらバイクがかっこよくなっても、それが違法と知らない、まして今日初めて自分のバイクに乗った由美に「サイレンサー抜いたらかっこいい」なんて理由で煽って抜いたりしない。こういうことを自然に出来る旭だからこそ、慕っている人間（特に後輩たちから）が多いのだ。

そして、しゃがみながら説明を再開する。

「マフラーの出口の下になんかネジが出てんだろ？このネジで固定されてんだけど、このネジ抜くのに必要な六角レンチが車載工具の中に入ってるからソイツを出してくれ」

なるほど、車載工具が必要なのか、しかし・・・

「あの、車載工具ってどこにあるんですか・・・？」

この質問に、由美以外の3人は呆れ顔である。

「由美く、そんなことも確認しないでバイク買ったの？」

呆れながら圭太に聞かれ、由美は恥ずかしさに顔を真っ赤にさせ

た。

「だ、だってもう直感で買っしかないって思って、そんなこと気にする余裕無かったのよ!!!」

「はっはっは、んな恥ずかしいこと堂々と威張るな」

旭に笑われて由美はさらに真っ赤になった。

「ま、ゼファアの車載工具はシートの下にあるんだ。あけてみな？」

旭に言われて、由美はシートを外した。すると確かにシート下に車載工具があった。

「で、中から・・・じゃーん!!」

六角レンチを取り出した旭は、マフラーの下にレンチを持っていきネジを緩めはじめた。

「よし、ネジが抜けたべ？そしたら、六角レンチのL字の短い方をサイレンサーに差し込んで・・・」

旭がそのまま引つ張ると、中から黒くなったサイレンサーが出てきた。

「で、サイレンサーは持って帰るからウエスに包んでシートの下に入れて、完成!」

「おお!!」

確かに後ろから見ても、マフラーの穴を塞ぐものが無くなって、いかにも「よく排気します」と言わんばかりのイカついリアビューになった。

「じゃあ、エンジン掛けて見な?ビビッから」

意味深なことを言うとそのくさとその場を離れる旭。

「言われなくても!」とスターターに手を伸ばしエンジン始動。すると・・・

きゅるるるるる・・・ボアァン!!!!!!!!!!!!

「ひっ！！」

あまりの爆発的な音に、由美は旭の予言通りビビった。

「おー、良い音くれてやがるなあ」

なかなか感心しながら見ている旭に対して由美は、一瞬ビビったがすぐ感動に変わった。

「す、すごい！！こんなに変わるんだ！！」

嬉しくなってバンバンフカす。

ゴアアアン！ゴアアアン！！

「サイコー！！キヤー！！」

バンバンフカすからもうすごい爆音が辺りに響き渡る。それを見ていた圭太に旭が寄ってきた。

「オメーのも抜いちまうか？」

その問に対して、旭は至って冷静に答えた。

「大丈夫です」

圭太は断った。あまり爆音すぎるのは目立つし、圭太のFXは純正マフラーなのでさして効果は無いだろう。

「ま、さっきも言ったが、実際はやんないほうがいいんだけどな」

「まあ本人が喜んでるならいいんじゃないですか？」

「だな」

そして、全員で来た道をまた戻りながら走る。

実は、もう少し走ればさっきのダム入り口にすぐに戻れるのだが、「せっかく来たんだし」と言うことで逆走して遠回りのルートで帰ることになった。

4台は順調に走り、景色を楽しみながら走った。

「やっぱりみんなで走るの楽しい！！」

爆音直管仕様になったゼファー改FXは、旭達のサンパチみたい

な甲高いバリバリした音では無く、低音でくぐもった爆音を山に反響させながら走る。

スピードは法廷速度である40キロ。旭も相手がペーパーライダーなので飛ばしたりせず、さっきのウィリーなどの曲芸乗りもやらなかった。

しばらく走り、またダム入り口に戻ってきた。

このまま旭の家に行くことになっているので旭に付いていくことになる。

ここから五差路を右折。国道に出て車を追い越したりもせず不安全運転で走る。

信号に引っかけ待っていると、爆音を轟かす3台は注目された。

「見て見て！圭太、今すごい目立ってるよ！」

なかなか上機嫌の由美に圭太が微妙な顔をして言う。

「やっぱりみんな私のゼファーちゃんの良さがわかるのね！」

由美は気を良くしてるが、多分注目の理由は違うと思う。

そんなこんなで信号が青に変わり、左折。国道を出て一般道を走っている時に事件が起きた。

突如、後ろから車が煽ってきた。

かなりノーズを詰めて、一番後ろを走っている美春と由美にプレッシャーを掛ける。

「な、なにになになに?!」

由美が慌ててスピードを上げると、車もスピードを上げて付いてきた。

異変に気付いた旭が、美春に並ぶ。

「どーした!？」

「車が後ろからピッタリ付いてきて・・・」

まだ法廷速度を軽くオーバーした程度だが、狭く信号も多い一般道でその車の行為は異常だ。

（仕方ねえ、こっちにや圭太や由美もいる。しゃくだが車に道を譲

るう・・・ちくしょう)

「しょうがねえ、とりあえず道譲って先行かせよう」

美春と由美にそう言っつて、道を譲り先に行かせようとする。バイク乗りにしたら、車に先に行かせるのはしゃくだし、何しろこの車の煽り方にムカつきを覚えた旭だが、こちらには初心者が2人もいる。悔しいがこれが最善の策だ。

道を譲ると車は前に躍り出たが、今度は旭にあわせて並走してきた。

「ああ？なんだこの野郎・・・ここまで舐められちゃ黙ってらんねーぞお、おっ」

そう呟き、運転しているヤツの顔を見る。どこにでも居そうな中年の男がヘラヘラ笑いながら運転している。おそらく中国系の人間で、よく見ると後部座席にもあと2人は乗っていた。

舌打ちしながら、旭がサンパチで脱出を試みる。いつまでもこの危険な行為をしている車と並走していたら事故に巻き込まれるかも知れない。

しかし、車は旭に距離を詰めてきた。いわゆる幅寄せである。

歩道側にギリギリ詰められる。このままでは弾かれるのは時間の問題である。

「・・・の野郎！」

旭は車に叫び右足でドアに蹴りを入れた。見事にベッコリいった。

そして旭は相手ドライバーにガンを付けながら、普通のハンドルだったら通れないような狭い車と歩道の間を、鬼ハンにしたGT3 80は甲高い音を鳴らして加速していく。

前に出たところで今度は車の前でアクセルをフカす。

カーン！カーン！

バリバリバリバリ！！

車に向かって旭は威圧的なフカし方、いわゆる『コール』を切る。

白煙が視界を覆いオイルが飛ぶ。

しかし車は、それでも構わず煽ってくる。

旭は頭の中で『コイツ無理やり止めてボコボコにしてやるか？』とか物騒なことを考えていたが、やがて車は途中で曲がり、旭達から離れていった。

「あつくん！！大丈夫！？ケガ無い！？」

美春がヘルメットの僅かな隙間からでもわかるくらい心配している顔をしていた。

「大丈夫だ、心配すんなよ！」

そう言つて旭は走りながらガッツポーズを取る。しかし・・・

「ひ、肘から血が出てるよ！？大丈夫！？」

見ると右の肘から血が出てる。おそらく幅寄せされて抜き返したときに切つたらしい。真つ赤な血が下にポツポツ後ろに流れながら落ちていく。

「旭さん！大丈夫ですか！？」

さっきまでいっしょに前を走っていた圭太もやってきた。

「肘を少し切つたみたいだな、ちくしょうあのクソ野郎がよお」

旭が圭太に見せるように腕を上げた。しかし、少してレベルの血の量では無い。

「だ、大丈夫なんですか！？」

由美がおずおず聞いてきた。

「ああ、ウチに行けば包帯とかあるし、大丈夫だろ」そんなことをいいながらまたハンドルに手を伸ばす旭。圭太は心の中で（ターミネーターみたいだな）と思った。

「あつくんにケガ・・・あつくんにケガ・・・あいつら、絶対に・・・」

美春は誰にも聞こえない小さな声でつぶやいた。そして妙に明るい声で続けた。

「壊してやる・・・」

「？」

由美は、変な雰囲気にもまれた美春を見た。その背後に恐ろしいオーラを見たような気がした。

変な横やりが入ったが、4人は旭の家に向かって走り続けた。これが後に大きな出来事になるとも知らずに・・・

第5章 忍び寄る影！？（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！3人目はリーゼントパーマとグラサンがトレードマーク！！霧島旭クンで・・・」

グシャ！！ 踏まれた

旭「おい・・・てめえ・・・？」

作者「い・・・痛い・・・」

旭「人が寝ようつて時によう・・・なに勝手に人のこと呼んでんだよ・・・？」

「ゲシッ！！ また蹴られた。

作者「痛っ・・・！だからぁ！ここは夢の中なんだって！」

旭「え・・・？そうなの・・・？」

作者「そうなの！」

旭「そうか・・・ここが夢の中なのか・・・まぁ、1000歩譲ってここが夢の中だとしよう・・・で？オメーは何なんだ？」

作者「まぁ、この夢の中の住人とでも申しましょうか」

バキッ！！ 殴られた

旭「なに勝手に人の夢の中に住んでんだよこの野郎・・・？」

作者「暴力反対！ここはお前だけの夢じゃないの！たまーにいろんな人の夢の中に現れる空間なの！！」

旭「なんだ良かった・・・」

作者「圭太たちとずいぶん扱いが違うじゃないか・・・」

旭「あいつらダチだし、お前知らねーし・・・っーか圭太のこと

知ってんのかよ？」

作者「もちのロン！私は圭太君と由美ちゃんの夢にも現れましたからね！」

旭「2人ともかわいそうだな」

作者「まあそんなわけで（スルー）今回は旭君に愛車を紹介して頂こうと思ひまして・・・」

旭「別にいいけどなんで・・・？」

作者「いいじゃん、気にするな」

SUZUKI GT380改（B4型） 旭仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル（腰上、腰下オーバーホール済み） 吸

排気系はミズノモーターズのゼス管3本チャンバー

足回り ノーマル

外装 鬼ハン（環七シボリ風） 左ミラー無 ウィンカーカチ上

げ 純正シートアンコ抜き

カラー キャンディーレッド（B4純正カラー）

旭「以上だ」

作者「おお・・・なんだか70年代の空気がポンプと・・・」

旭「当時の族仕様を目指したからなあ・・・どうだ？かつこいいだろ？」

作者「うん、かつこいいよ。でもなんで3本チャンバーなの？GT380って言ったらいモ管なのに・・・」

旭「よく聞いてくれた！俺はサンパチにイモ管付けた時の音が嫌いなんだ！」

作者「なんで？」

旭「愚問！イモ管と集合管は音がくぐもった音するべ！？それに引き換え、3本チャンバーはバリバリ言うたろ？だからだ」

作者「ふーん、でもイモ管もバリバリ言わない？」

旭「だってみんな付けてるじゃん」

作者「ああ、そっちが本音か」

旭「まあいいや。とりあえずもう帰っていいよな？」

作者「いいけど・・・なんでみんなそう早く帰りたいがるの？」

旭「お前がキモイから」 即答

作者「ヒドっ!」

旭「しゃーねーべ？本当の事だし・・・じゃーな」

というわけで、長いあとがきでした汗

第6章 月光の下、恐怖の笑み

圭太達が住む街の、一番端は県境になっている。その県境に境川と言う、文字通り県境を区切る川があり、そのすぐそばのアパート「雪風荘」の一階、103号室が旭の住む部屋だ。

アパートの裏に住民用の駐輪場があり、舗装されていない砂利のその場所には、住民の物と思われる自転車が5台、そしてバイクは旭のGT380と、他に仲良く3台のバイクが停まっていた。

こここのアパートの立地は狭い道沿いであり、駐輪場も裏にあるため停めるのが少々手間だが、同時に防犯効果もある。価値ある旧車は暴走族に人気があるために、堂々と停めては置けないのだ。

旭のサンパチは、カバーを掛けて前輪後輪にそれぞれU字ロック、チェーンをフレームとアパートの柱に括り付けて嚴重に置かれている。

そんな旭の部屋、103号室に由美と圭太を招き入れた。

「おう、ちつと散らかってんけど勘弁な」

そういつて案内されたのは風呂が共同でトイレと狭い台所、六畳半の畳部屋という狭い部屋に絨毯を引いて、こたつ机とクッションが4つ、ダンス、小さいテレビなどが置いてある。六畳半の部屋にこれだけの物しか無いと広く感じるハズだが、旭の言うとおりバイクの部品であふれている。あちこちにテールカウルやハンドル、中にはフロントフォークも転がっていた。ちなみにベランダにはマフラーやチャンバーが壁に立て掛けられていて、壁にはコルクボードやポスターが貼ってある。隅に木刀とかいろいろ落ちていたりするけれど、2人は見なかったことにした。

「確か包帯は〜と・・・」

がさごそダンスから救急箱を取出し、中から包帯を取り出す。

「あ、あつくん！私が巻いてあげるから貸して！」

美春が張り切りながら言う。

さっきのトラブルの後、走りながらなにかを光の無い瞳で小さく呟いていた美春だったが、今ではいつもの明るい彼女に戻っている。ちなみにさっきの状態に気付いていたのは由美しかいなかったが、何を言っているのか聞こえなかったしあまり気にしていなかった。

「とりあえず一回水で洗ったからあとはこのままガーゼ当てて包帯を巻けば大丈夫ね」

「消毒とかしなくていいんですか？」

圭太の質問に美春がガーゼを固定しながら答える。

「消毒液ってかなり強い殺菌性があるでしょう？小さい傷なら大丈夫なんだけど大きい傷に使うと傷口をくつつける菌まで殺しちゃうから治りが遅くなるの。だから、一度水で流して化膿止めだけ塗ってガーゼの上から包帯で巻くのが一番治りが早いだよ」

美春の説明にみんな驚いた。美春も包帯を巻きながらみんなの反応を見て嬉しそうな顔をしている。

「はい出来たよ！お風呂に入る時は湯船には患部を入れないように！」

そういいながら救急箱に包帯などをしまつて、旭が出したダンスにしまった。

「なんかこの光景だけ見てたら新婚さんみたい」

由美が言うと、美春と旭は顔を赤くして照れはじめた。

「いつから一人暮らしなんですか？」

圭太の質問に旭が、

「高校終わってすぐだから、一月くらい前だよ」

「え、じゃあ旭さんて今19歳!？」

由美が物凄く驚いて聞いてくる。

「そーだよ、そんなに見えないか？」

少しふてくされながら旭が聞くと、由美があわてて否定した。

「いや、そんなことは無いですよ!？ただそこら辺の大人より全然しっかりしてるから、つい・・・」

「由美、今全国のそこら辺の大人を敵に回したよ？」

「いいのよ、事実じゃない」

「あ、そーだ。由美ちゃんゼファアの部品取りに来たんだけか」
本来の用事を思い出し、旭が押し入れを開けた。

中には、さらに部品が転がっている。

「これ使えんかなあ？あと・・・あつた、これとか・・・」
いろいろ押し入れから取り出してくる。

「よし、こんなもんだな。」

出した部品は、ゼファアのBEETタイプテールと無名のZ？テールとテールランプASSSE、俗に言うヤンキーテールや、BEETタイプフロントフェンダー、シートベースなどの外装と550エンジン用のシリンダーとピストンセットや、その他に数点の部品が出てきた。

「なんでこんなにゼファアの部品が・・・」

圭太の驚きを通り越して呆れた顔と、由美のまるでオモチャを買ってもらった子供のような顔を見て旭が笑った。

「昔、ダチが乗ってたな。今は違う車種に乗ってたが『他にゼファア乗ってた困っているヤツがいたら上げてくれ』って頼まれててな、まあ下品なパーツもあるけど、これが全部だな」

そう言いながらヤンキーテールを持つ。これは確かに下品だ。BEETタイプのテールくらいの羽ならまだかつこいいが、ヤンキーテールは少しデカすぎる。

「この長いテールって何？」

そうやって由美が手に取ったのはカモノハシの口のような形をしたテールカウルだ。

「ああ、そいつはZ？テールカウルだ」

「ぜっつー？」

Z？という呼び慣れない名前にすっかり？マークな由美に旭が説明を始める。

「Z？ってのは昔のカワサキの名車で正式名はZ750RSって大型のバイクの名前でよ。このテールはそのZ？のテールカウルを

ゼファー用に形をおこしたヤツで、ゼファー乗ってンヤツには結構
人気があんだぜ？」

そう説明すると、圭太が「あっ」と閃いた。

「Z750FXって、Zって付くんですよ？じゃあ・・・」

「そう、お前の乗ってるZ400FXの祖先みたいなもんだ」

旭の答えに由美は唸りながら言う。

「外装は別に困ってないのよね、よくよく考えれば。あ、でもこの
フロントフェンダーは欲しいです！」

由美はBEETのメッシュフロントフェンダーを差した。

「ああ、確か由美ちゃんのはゼファー純正のメッキだったわね」

「ああ、別に大丈夫だけどよ、塗り直さなきゃ色あわないぜ？」

由美のゼファーは赤だがフロントフェンダーは黄色だった。

「んー、確かに黄色は似合わない・・・」

由美が少し残念そうな顔で考える。赤いゼファーに黄色のフェン
ダーを付けたのを想像してさらに残念そうな顔になる。

「ま、色なら塗れるぜ。あの赤はソリッドだろーからダチに頼めば
3日くらいで塗ってくれるさ」

「本当！？やった！！」

「ああ、ただし3日後くらいな」

「赤くなるなら3日でも4日でも！！」

圭太は「もうちょっと待てるよ」とツツコミを入れたかったがや
めておいた。

「後は純正部品とかくらいしか使えるの無いし、550のシリンダ
ーとピストンは使えるけどそーなると大型になっちまうしな・・・」

もちろん由美は中型免許しか持ってないし、旭も中型免許しか
持たない由美のゼファーにこんな改造はしたくない。見た目によら
ず一般人には優しいのだ。

「あ、そういえば」

そんな旭を見て、圭太が何かを思い出したように尋ねた。

「旭さん、サングラス外さないんですか？」

圭太に言われ、皆一斉に旭を見る。

確かに、家の中でサングラスは変だ。例えるなら外でパジャマでいるようなものだ。しかし、

「あまり外したくないんだよ、美春なんかは見慣れてるからいいけどハズかしいんだよな」

「いいじゃないですかー、もう仲良くなっただし、そろそろ素顔を見せてくださいよ」

由美が旭に詰め寄る。

「わぁーったよ。見せるから詰めて来んな、狭いんだから。それと、顔見て笑うなよ・・・？」

旭が言くと、2人は勢いよくうなずいた。

そして、旭は下を向いてサングラスを外してそして顔を上げた。
すると・・・

「おお、」

「わぁ・・・」

圭太と由美の反応を見て旭が怒る。

「わ、笑うんじゃないよ・・・!!」

旭に怒られ、2人はとりあえず誤った。

「あはははは！」

「美春！お前も静かにしろ!!」

旭が顔を少し赤くして怒鳴る！

由美がニヤニヤしながら、

「だって見た目は体細いのに、ケンカ強くてリーゼントで革ジャンで、性格シブくて只でさえマンガのヤンキーみたいなのに、なんで顔までそんなに整ってるんですか？」

さらに由美は旭の顔の特徴を上げていく。

「鼻もちょうどいい位に高いし、瞼も二重だし円らだし輪郭もいいし、少しかわいい系入ってるし・・・」

そっぴいながら、由美は旭の顔を仰視する。

由美が言うほどでは無いが、確かにこれなら上くらいのレベルである。目はパツチリ二重で、本当につぶらな瞳をしている。左目の下には小さな泣き黒子がちょこんとついている。

しかしそれを上の上にする効果があった。それは旭の、お世辞にもカッコイイとは言えない時代遅れの髪型だ。

リーゼントでパーマで普段サングラスを着用している旭を見なれていて、逆にその頭が彼の素顔を違う方向に全力で引き立たせていた。

「マジでこの顔好きじゃないんだ・・・顔だけ見たらケンカん時にナメられるし、なんかもつとイカツイ顔がよかつたんだが・・・こんな優男みたいな顔面なんか望んじやいねーってのになあ・・・」

少し恥ずかしがりながら落ち込むと言う、ある意味荒技を使いなから旭が言うと、

「あつくんはなんでも出来て、性格も良くて優しいのに、顔までいいんだよ！」

美春がまるで自分のコトのように言う。すると旭が落ち込みながら、

「なんだよ、もしかして顔で選んだのか？」

そうすると美春が、慌てながら否定した。

「ち、違うよ！？私はあつくんの性格とか優しい所が好きなの！見た目じゃないの！！！」

必死に訴える美春に旭は、ふと意地悪しようと思ひ、さらに落ち込んだ振りをした。

「はあ、実際はどーだかわかんないよな、そーか、顔で選んだのか、本人は顔を気にしてるのに、あんまりだぜ美春さん・・・」

いかにも演技くさい感じで旭が床にノの字を書きながら話す。常の彼女なら、旭がからかっている事なんかすぐにわかっただろう。

しかし、大好きな旭にそんな風に思われたくないと思ひ、美春が今にも泣きそうな顔で目に涙をためながら弁解をする。

「ち、違うの！本当なの！信じて・・・！信じてくれないなら・・・

証拠を見せるから！」

そういつて突然台所にあった包丁を取り出し、お腹に向ける美春。

「い、今から見せるから・・・待ってて!!！」

「全員！美春を確保しろ!!!！」

大慌てで3人は美春を止めにかかった。

数十分後。

「や、やっと止まったか・・・」

「ぐすつ・・・ぐすつ・・・」

疲れ果てた3人と、泣きながら俯く美春と、床に落ちた包丁。

この現場だけ見たらそれだけで警察が来そうな光景だ。

「全く美春よく、あんな冗談に決まってんべ？マジにすんなよ」

「・・・じょーだん？」

「そーだよ美春さん、旭さんがあんな酷いこと言うわけないもん」

「美春さん、落ち着きました？」

由美と圭太が美春に言う。

「ゴメンな、俺もからかいすぎた。あやまる」

旭が謝ると、美春はさらに泣きながら抱きついてきた。

「えっぐ・・・ひつく・・・私も、ひつく・・・変な言い方してごめんなしゃい・・・えっぐ・・・」

旭の胸で泣きながら呂律の回らない声で謝る美春を、「よしよし」と慰める旭。

ふと、目線を感じた。

見ると由美と圭太の「第三者」が目線で「忘れないですよ」と訴えていた。

旭は由美達の視線を感じて恥ずかしくなり、タコの吸盤みたいに張りつく美春を剥がしにかかる。

「お、おい美春・・・！由美ちゃん達見てるから・・・!!！」

「もう離さないもん」

「こら、美春・・・！」

「僕達のことなんかすっかり忘れてるね」

「美男美女が人前で抱き合ってイチャイチャするなんてね」

今度は圭太と由美が旭をからかい始める。

「いいから早くコイツ引き剥がすの手伝えよ！！」

その後、すっかり泣き止み、子供みたいなことを言う美春をなだめることさらに数分、美春が離れた時には圭太達の視線と、恥ずかしさで旭は顔を真っ赤にして撃沈されていた。

それから数時間、圭太達は旭の部屋で談笑していた。

「あ、もうこんな時間じゃねーか」

突然旭が壁にかかっている時計を見て立ち上がった。

「わりい、今日ちとこの後用事あるんだわ。」

手を併せて皆に謝ると、由美が

「え、せつかく盛り上がって来たのにですか？」

「ああ、ワリイな。でも美春はまだ居るんだべ？」

「うん、今日は暇だし」

「そか、だつたら圭太達美春いるからまだ帰らなくていいなら居ていいぜ？1時間くらいで帰るからよ？」

旭の言葉に由美が

「本当ですか！？圭太！どーする！？」

「別に大丈夫だよ。家が遠い訳じゃないし・・・あまり遅くならなければ大丈夫だよ」

圭太が自分の腕時計を見てうなずく。

「じゃあ旭さん！ありがたく居させてもらいます！」

由美が元気に宣言した。

「わかった、じゃあ言ってくるわ」

そういつて旭がサングラスを掛け、左手にヘルメットをぶら下げながら部屋のドアを開けようとドアノブに手を掛けた瞬間。

旭がいきなり走って部屋に戻り、部屋の隅にあった木刀を握りしめ血走った目でまた玄関に走っていき、出ていった。

その様子を見て3人は、ただごとでは無いと思い旭の後を追った。

狭い玄関で3人が靴をなんとか穿いていると、外から男の怒号と悲鳴、そして人を殴った時の鈍い音が聞こえた。

「あつくん!!」

美春が1番に飛び出し、あとから圭太と由美が玄関から仲良く飛び出した。

恐ろしい光景が、広がっていた。

そこには、2人の男に囲まれた旭が木刀を左手に持って恐ろしい顔で睨み付けていた。

目が慣れて、圭太達は2人の男が共に工具を片手に持っているのがわかった。

そして、未だ恐ろしい顔をした旭の足元にもう1人男がいた。

しかしうつ伏せになってなにやら呻きながら倒れているところを見ると、旭にやられたらしい。

しかしこの光景を見ただけでは、3人にはなにが起きたのかが分からない。

「あ、あつくん!どうしたの!？」

美春が叫ぶと旭がなんと足元にいる伸びている男の腹に蹴りを入れた。

「オメー等、部屋に入ってる!」

そう言って残り2人の男に視線を戻す。

「コイツ等、最近まで隣の県に居た窃盗団だ」

すでに落ちている男に、旭はさらに蹴りを加える。

男は微かにだが意識があつたが、今の蹴りで完全に白目を向いてしまった。

他の2人は、旭と睨み合っている。

ここで逃げれば仲間が警察に送られ、自分たちの身も危ないと思つているのだろう。しかし長居するのはもつと危険・・・早く仲間を奪い返して逃げるチャンスをうかがっていた。

「おめーら、さっき昼に絡んできた車に乗ってた中国人だろ？ ナメた真似しやがってよお」

そういつて間合いを詰める。

旭のケンカの強さをあらかじめ調べていた彼らは昼間にケガを負わせようと思ひ車で煽つてケガをさせたのだが、右手にケガを負い包帯を巻いているのに、圭太達が玄関を飛び出す数秒で1人を片付けたのだ。

「おう、てめえ等まさかただで帰れるたあ思つてねえよな？」

旭が言つと、1人の男が、なにか訳のわからない言葉を叫びながらスパナで殴りにかかる。

しかし旭はそれを避けて木刀を男の腹にたたき込んだ。

「・・・!？」

みぞおちに入ったのか、男は息を吸えずに腹を押さえてうずくまつている。

「後はおめえ1人だぜ？」

言葉の通じない異国の人間に旭が問う。

ジリジリ間合いを詰める。このまま行けばすぐに旭が勝つだろう。

しかし、

「あつくん！ 後ろ!!」

「・・・!？ ぐあつ!!」

突然、先ほど腹にいつぱつもらつてのたうち回っていた男が旭の背後に立ち上がり、スパナを思い切り背中突き立てた。

「て、てめえ・・・!!」

片膝を付きながら旭が睨み付ける。が、さらに前に居た男が旭の顔を蹴り上げた。

「……ンの野郎!!」

旭は態勢を立て直し、さっき顔を蹴り上げた男の膝を木刀でぶっ叩いた。

「……!？」

男はなにか叫びながら膝を押さえて転げ回った。

「さあ、どーすんだ？二度とオレ達の地元に姿を現さないならこのまま行かせてやる。でなけりゃあ……」

旭が木刀で転げ回る男の腹に一発入れながら

「殺す……!」

凄みを効かせて怒鳴りつける。

男は、他に倒れた仲間を置いたまま、立ち上がり駐車場から逃げていった。

「あつくん!」

美春達が駆け寄ってきた。

美春はかなり旭のコトを心配した目で見ていた。しかし圭太達は、心配と同時に恐怖の眼差しでも旭を見ていた。

「オメえら!部屋に戻れって言ったじゃねーか!!」

3人を見て、旭が怒った。もし自分がやられて、美春たちに相手が襲いかかったらと思っていたのだ。そして旭は、こんな自分を2人に見せたくなくなかったのだ。素の自分を見て、2人が自分のことを嫌うのではないかと思ったのだ。旭の顔は蹴られた為に噛んだのか、口から血が出ていた。

「……すみませんでした……」

由美と圭太が旭に言う。言葉がハモった。

「旭さん、あれって昼間の……?」

圭太が質問した。

「ああ、間違いねえ。オレあ一度覚えたツラは忘れねえんだからよ」

旭が胸を張って威張る。
それを見て、2人は笑顔を取り戻した。

シュツ・・・!!

「ガアッ!!」

突如、旭が倒れた。

旭の背後にはさつき敗走した男がナイフを持って立っていた。

旭の背中が服が裂け、布越しからも血が滲んでいた。

「・・・!!」

なにやら男が叫んでいた。しかし、目の前で起きたことを頭が理解出来ず、由美と圭太は固まっただけだ。

そして男は距離を縮めてきた。

なにがどうなっているのかわからなかった。いくら強気な由美でも、目の前で人が切られればパニックにもなる。ふと、由美が横を見るとさつきまでいたはずの美春がいなかった。圭太もすぐに気が付き慌てて辺りを見回す。

そして、男がナイフを振りかざしたその時、男がいきなり横に飛んだ。いや、正確には誰かに突き飛ばされた。

見ると、男が下になって逃げようとしている。言葉はわからないがかなりパニックになっているらしく、悲鳴をあげながら抵抗している。

上には、美春が乗っかっている。

見ただけではこれだけの状況だが、美春は右手で男の首を思い切り締め付けながら左手には先ほど美春が腹切りに使おうとしていた包丁を持って今にも振り落とそうとしている。

これだけ見たら2人は止めようとしただろう。

しかし、由美達は凍り付いた。まるで幽霊でも見ているかのような感じで立ち尽くすしかなかった。

美春が満面の笑顔を浮かべていた。

顔に微笑みを浮かべながら、自分より力があるはずの男の首を締め、美春の振り上げた包丁を月の光が照らしていた。

しかし、美春の目には光がなかった。光を無くし、焦点の合わない目で美春は呟いた。

「あつくんを傷つけた・・・あつくんにケガさせた・・・」

そう言いながら美春がさらに首を締める手に力を入れた。男は口から泡を吹きながら最後の抵抗をするも力が緩む気配は無い。

「昼間のもあなた達だったんでしょ？今日だけであつくんを2回もケガさせたんだ・・・」

美春が手を緩めたのか、男が息を吸う音が聞こえたがすぐにまた絞められたのかうめき声に変わった。

「すぐには壊さないから安心して・・・？」

そう言いながら、普段の笑顔でささやいた。

「ゆっくり、じわじわと、たっぷり時間を掛けて・・・」

左手を振り下ろした。男の右肩に包丁が深々と突き刺さった。

「壊してあげるから・・・ね？」

体や顔に返り血を浴びながら美春が笑顔で言った。

また首を締める手を緩めて息を吸わせる。が、また絞めて包丁を突き刺す。

右肩を刺し息を吸わせ、左肩を刺し息を吸わせ、次は腕を、次は足を・・・。

男は最初こそ激痛に体を暴れさせていたが、今では時折体がピクピク動くだけの、ただの人形になってしまった。

圭太達はハツとなって急いで美春を止めに入った。

振り上げた腕を圭太が後ろから取り押さえ、由美が首を絞める手を離させようと全力で飛び付いた。

しかし、まるでびくともしない。圭太は両手で全体重を使って包丁を奪おうとするがまるで動かず、由美も同じ状態であった。

「なに・・・？由美ちゃん達、邪魔するの・・・？」

光の無い目で由美を見ながら美春が問う。

「美春ちゃん！もう十分よ！？止めてよ！これ以上やったら・・・！？」

「死んじやうよ！！」と言いたかったが、由美はそこから先の言葉を続けられなかった。なぜなら・・・
恐ろしい笑い声が響き渡ったからだ・・・

ははっ、ははははは・・・

最初は小さかった笑い声がだんだん大きくなった。そして

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」
壊れたように笑いだした。

顔に返り血、恐ろしい笑みに恐ろしい笑い声。

由美は手を離してしまった。

「ナニを言っているの？由美ちゃん？」

美春は、なにを言っているのかまるでわからないと言うふうに由美に聞いてきた。

「あつくんを傷つける悪い奴は、壊さなきゃダメじゃない？ふふっ、おかしいね・・・由美ちゃん？」

由美は腰が抜けてしまった。

つかんでいた腕を離してその場にへたれこんだ。

まるで、化け物でも見るかのような目で美春を見ていた。

圭太も怯えたが、早くしなければ美春は人を殺してしまう。いくら向こうが悪くても殺してしまえば美春は警察に捕まってしまうかもしれない。それだけは避けなければならない。

とにかく最後の力を振り絞り美春の手にある包丁を奪おうとするが、包丁から滴れてくる血糊で滑ってうまくいかない。

なんとか諦めずにやっている、美春がバケモノのように首を折りながら振り向いた。

「圭太君も・・・じゃまするの？由美ちゃんはわかってくれたよ・・・？」

その整った顔に、恐ろしい笑みを張りつかせながら、美春は圭太に聞いた。

「ダメです・・・！せつかく仲良くなれたのに、こんなところであなたと離れたくありません・・・！！」

圭太が力を込めて言う、美春が微笑した。

「そう・・・じゃあ仕方ないわよね・・・？」

そういつて、一瞬力を緩めた美春に、圭太はホッと安堵の息を漏らした。が、その後すぐに油断していた圭太を突き飛ばした。もうすっかり油断していた圭太はいきなり突き飛ばされ、なすすべも無く後ろに尻餅をついて転んだ。

「コイツの廃棄は後回しね・・・圭太君・・・？」

そういつて美春は折りながら男の首を離して立ち上がる。男は微かに息はある。

「圭太君・・・とりあえずキミが邪魔するなら、あなたも私に協力するようにその身体に教えてあげる・・・」

言いながら、美春が包丁を圭太に向ける。

圭太は内心、かなり怯えたが勇気を振り絞って対面する。

「少し痛いと思うけど・・・安心してね？」

そういつて美春が包丁を振り上げた。

「美春・・・！！」

後ろから旭が立ち上がって美春に叫んだ。

美春は旭に振り向き、驚いた顔で旭を見た。

「あつくん・・・？あれ・・・？なんで私・・・？」

目に光が戻って美春が自分の体に着いた返り血を見る。辺りを見

回せば、恐怖に腰を抜かし、バケモノでも見るかのような脅えた視線でこちらを見ている由美と圭太。そして、今まで包丁で刺していた男がぶっ倒れていた・・・

「あ・・・あつ・・・」

そこで糸が切れたように美春はグラス前に倒れた。

旭は倒れる美春を受けとめて静かに抱きしめた・・・

第6章 月光の下、恐怖の笑み（後書き）

今日はバイク紹介&自慢コーナーは無しです。順番から言えば、次は美春なんですが・・・

本編が重すぎるのでまたの機会です汗

それでは！ご意見ご感想、お叱り待ってます！（笑）

第7章 2人の出会い、結ばれる絆（前書き）

今回で旭&美春編は終了です。

あとがきはあのコーナーです（笑）

第7章 2人の出会い、結ばれる絆

現場は凄まじかった。

1人の男が、全身血まみれで倒れていて、残り2人の男が血まみれの男をかついで走って駐車場から逃げて行った。

そして去り際、こちらをさぞバケモノを見たかのような目で見ていった。

「圭太達・・・こんなコトの後で申し訳ないが・・・、コイツ運ぶの手伝ってくんねーか・・・？」

傷だらけの旭が気絶した美春を抱き締めて静かに言った。

「はい、わかりました」

圭太がうなずくと、由美も従った。

部屋の中に入り旭の布団の上に美春を寝かせる。由美は美春についた返り血を拭き、服を着替えさせた。圭太と旭は男達が落としていったスパナやナイフなど、拾って来てゴミ箱に捨てた。砂利に溜まっていた血は旭が砂を掛けて消した。

それらの作業を終えてから旭は自らの傷に包帯を巻き始めた。

背中への傷は刺されたのでは無く切り裂かれたもので、さらに傷は浅かった為、今日1日は包帯で巻いておいて明日病院に行つて何針か縫えば大丈夫そうな傷であった。そして・・・

「本当にすまない・・・！」

旭は先ほどから10分以上圭太と由美に土下座をしたまま顔を上げない。

「旭さん、僕は全然大丈夫ですかから顔を上げてくださいよ！」

「そうですね！もともと悪いのはあつちなんだから！」

圭太と由美が旭に言うが、しかし2人共なにか怯えたような顔をしていた。

「あんなもん見せちまったら、お前達がオレを嫌つてもなにも言えない。それにオレはお前達まで危険な目に合わせちまった・・・！」

旭がずっと土下座し続ける。そして、

「だからオレのコトは許さなくてもいい・・・ただ、美春だけは許してやってくれ！！頼む！！」

旭の言葉に2人は驚いた。

2人共、あの時の旭の行動にはなにも落ち度はなかったと思う。

バイクを盗みに来た奴を、出血させさないで最低限の攻撃で追い払ったのだから。

しかし、その後、旭がやられた後の美春の行動には2人共に恐怖した。

あの時、取ってきた凶器で旭を切り付けた男を横から倒して、あの残酷な笑顔で包丁を何回も何回も突き刺していた、あの血まみれの笑顔が2人の脳裏から離れないでいた。

そして、最後は包丁の先を圭太に向けていた。

これが2人を恐怖させた美春の行動である。

「なぜ、美春さんはあんなことを？」

圭太が聞くとやっと頭を上げた旭が座りながら話した。

「今日1日あいつを見ていてわかったと思うけれどあいつはオレになにかあつたりするとすぐ慌てたりパニックになるだろ？後、美春は自分やオレ、仲間がヤバくなると、ああいう目をして相手を襲う時があるんだ。特にオレの時にな・・・」

「うん・・・」

由美が相づちを入れた。

「なんでああいう風になつちまったか・・・これはオレの考えだが・・・話せば長いが、聞くか？」

旭が真面目な顔で聞いてきた。もちろん2人は聞くつもりなので肯定した。

「わかった。じゃあ話すな」

そして旭が姿勢を正して話始めた。

「オレとアイツが出会ったのが1年前でよ、この先の街道を八王子

方面に進んだあたりの周り山ばっかりで民家も警察もコンビニも無いような場所だな・・・オレが走ってたら夜あいつがフラッと道路に出てきたんだ。」

旭が目を細目ながら話す。その瞳は、2年前の出来事を思い出すかのような、遠くを見るような目をしていた。

「で、オレはなんとか避けて怒ったんだ・・・『お前危ねえーぞ！死んじまうぞ』ってよ・・・そしたらアイツ、表情の無い、光の無い目をしながら無表情で涙を流してな、こう言ったんだ」

「なんで・・・なんで殺してくれなかったの？」

少女は確かにそう言った。

しかも服はあちこちが破れてボロボロで身体も傷だらけで、ただ事では無い状態だった。

フラフラした足取りで、道路を旭が来た道に歩いていく。

「おい、ちよつと待てよ！」

旭が愛車のサンパチを路肩に停めて駆け出した。この深夜になら車はこないだろうし、それどころでも無いと思った。

「なんだってそんな格好してんだお前・・・？家はどこだよ！？」

辺りを見回して周りに民家が無いことを確認した。

ここから近くの民家までは歩いて30分はかかる。しかもこんな格好で出歩いているのだから間違いなくこの辺りの人間では無いだろう。そしてなにより・・・「なぜ車道に飛び出した？さっきの言葉はオレに挽かれたかったのか？」

旭が立て続けに質問する。が、少女は旭の存在など気付いていな

いかのように歩いていった。

「おい、ちよつと・・・」

旭が少女の肩を掴むと、少女が叫んだ。

「いやぁ！もう止めて！！これ以上私をいじめないで！もうこれ以上犯さないで！！お願いだからぁ！！」少女が叫んで旭を振り切りうとするが、旭は離そうとしなかった。

「お願いだから！もう許して！もう許してえ！！」

泣きながら叫ぶ少女は旭の腕に噛み付いた。

「・・・！！」

痛さに旭は手を離してしまい、少女はその隙に街灯のほとんどない暗闇の車道をひたすらに走って行った。

それを見て旭が噛まれた腕をさすりながら呟いた。

「あいつ、まさか・・・？」

思い当たる節が旭にはあった。そして、皮肉にも旭の考えは当たっていた。

この時、性的暴行事件がこの地域で多発していた。少女がその被害者であることはもう見てすぐにわかった。

「追っかけるつかねーべか」

このまま放っておくわけにもいかないし、旭はそんな冷めた性格では無い。サンパチに火を入れ、少女の後を追うために走り始めた。

「そろそろ追い付くころだべ・・・？」

時速30キロくらいで辺りを注意しながら見ていた旭はそろそろこの辺りで会えると思っていたが、まだ会えていない。ここはしばらく一本道だから曲がる場所は無いはずだ。

「ん？ありゃあ・・・」

走っていると、やっと少女を見つけた。

少女は死んだような顔をして、ガードレールに座っていた。

「おい、あんた」

旭が再び少女に話し掛けた。

「……」
しかし少女はなにも言わない。

「その……さっきはすまん、驚かせたみたいで……」

「……」

「べ、別に怪しいもんじゃないんだ、ただ少し心配でな……」

旭は逃げ出さない少女に安堵して隣に腰掛けた。

「オレは霧島旭ってんだ！あんたは？」

旭が努めて明るく言う。あまり女と話すことは無い。後輩のタ坊なんかはナンパばかりしているが……

「……」

少女はその質問にも沈黙したままだ。

困った旭はなにか無いかと思いを巡らすと、目の前になぜか自販機があるのを見つけた。

「ちつと待つてな？」

そう言つて旭は自販機に駆けていった。

ポケットから小銭を数枚取出し、小銭を入れた。

(あの娘、なに飲めんのかな?)

迷つた末、春とはいえ夜は寒いと思いホットカフェオレと自分の「コーヒーを買つて戻る。

「お待たせ」

そう言つて少女にホットカフェオレを渡す。

少女はこちらを光の無い目で見ているが、なかなか受け取らなかつたので旭は缶のプルタブを開けて無理やり掴ませた。

「……あつたかい」

少女が久しぶりに言葉を発してくれた。どうやらさっきとは違い、会話が出来そうだ。

「甘くて美味いから飲んでみな？」

少女は缶を両手で持ちながら少しずつ少しずつ飲んでいった。

「……美味しい」

無表情だが、そう言つてくれたことに旭が安堵する。

「腹、減ってないか？」

旭が聞くが、少女は黙ってしまった。その変わり・・・

ぐーっ・・・

少女のお腹からそんな音が鳴って、旭は笑ってしまった。

「はっはっは、素直でよろしい！」

そういつて頭を撫でた。

さつきみたいに拒否反応を起こされたらどうしようかとも思ったが、少女はカフェオレに夢中らしい。

「確かここに・・・あった！」

旭がジャケットからどこにしまっていたのか、カレーパンを一つ取り出した。

「これ、半分つしようぜ？」

そう言つてカレーパンを半分にして少女に渡すと、少女は受け取つて小さな口でかじつた。すると・・・

「・・・！」

すごい勢いで食べ始めた。旭が啞然となつて見ていて、気付いたら全て平らげてしまつていた。

そして

「な、なんか狙われてるー!?!？」

旭の持つカレーパンを、ものすごく欲しそうな目で見ている少女はまるで子犬の様だった。

「うう、わかつたよあげるからそんな目で見るなよ」

そう言つて渡すとまた食べ始め、あつと言つ間に完食した。

「美味しかった・・・ありがと・・・」

珍しく向こうから話し掛けてくれた。

「別にいいよ」

「・・・私、カレーパンがこんなに美味しい物だったなんて知らなかった。」

少女は気のせいかな、少し笑顔を取り戻したような気がした。

「おう！カレーパンは最高だぜ！？カレーバンザイ！！」

嬉しくなって旭がはしゃいだ。周りからは「カレー星人」と呼ばれるほどのカレー好きの旭が、これを言われて喜ばないハズが無い。

「ありがと……やさしくしてくれて……」

少女はまた下を向いてしまった。

「はは、ところで名前と歳は？」

旭が聞くと少女は答えた。

「みはる……真田美春……歳は16……高校2年です……」

「お、なんだよ！タメ歳じゃんか！！」

旭がはしゃぐが、少女、美春は頭が？になった。

「タメ歳……？」

「ああ、同い年ってことさ！」

そして、旭は本題に入る前に美春に話しを聞いた。

「なあ、なぜさつきは急に逃げ出したんだ？」

少し温くなったコーヒーを飲みながら旭が聞いた。

「逃げる……？」

しかし美春は全然知らないみたいなのを言っている。さつき逃げ出したことも含めていろいろ質問していくと、由美が話始めた。

「私……ここ数日の記憶が曖昧なの。さつきも……気付いたら、なぜかココにいて、服を見たらボロボロで身体はあちこち痛くて……」

そう言っつて美春は、うつむいたままで続けた。

「だから……あなたから逃げ出したっていうのも……私、全然覚えていない……ごめんなさい……私、どうしちゃったのかな……」

話を聞いて旭は、怒りに任せて固いスチール缶をクシャクシャに握り潰した。

彼女の状態とさっきの叫びからして彼女が性的暴行事件の被害者であることは確定した。

恐らく、あまりの恐怖に記憶が失われているのだろう。

しかし、さっきまでは事件の時のコトをはっきり覚えていた。ということとはさっきまで犯人と居たのだろうか・・・

あまり出来の良くない頭でしばらく考えていると、一台の車が旭が戻ってきた道から走ってきた。

一瞬警察だったら面倒だと思ったが、音を聞いて違うと思った。多分、小排気量の車に砲弾型のマフラーかなにかを付けた感じの音だ。

ゴボゴボゴボっ！

車が近くまで来ると、読みどおり、マフラーを変えただけの普通のミニバンだった。

しかし、その音と車を見て、美春の様子が明らかに変わった。

カンっ！コロコロ・・・

缶を取り落とした美春を見て旭が反応した。

(様子が変わった・・・！？)

車が目の前に止まった。

「美春ちゃん、こんなところに居たのかい？探しちゃったよ」

出てきたのは太った、いかにも鈍そうで陰湿そうな男だった。年齢は多分若くても30代くらいで、髪はすでに薄く、黒い縁のメガネを掛けている。

「あんだ・・・美春の家族かなんかか？」

旭が容赦なく睨み付けて聞く。

(コイツぁ怪しすぎんぜ？)

「はい、美春が世話になってます」

男が頭を下げた。

「あんたはコイツのなんなんだ？まさか兄貴・・・ってわけじゃあ無いよな？」

「は、はい、美春ちゃんは僕の従妹なんですよ」
そう言う男を見て旭がフンッと鼻をならした。

美春を見ると、まるでこの世の終わりのような顔をして震えている。

男は後ろのドアを開けて美春に言った。

「さあ・・・早く乗りなよ？家に帰らないとみんな心配するよ？」

男が美春を引っ張るが、美春は動かない。それどころか、後ろに下がっている。

「おい、あんた。この娘の従兄なんだろ？なんか証明できるもん出せ」

旭が美春の肩を掴む腕を放して、挑発するように言う。

「・・・なんでですか？」

男が聞き返す。しかし、旭に譲る気は毛頭無い。

「いやあ、最近物騒じゃん？この辺も暴行事件やらなんやら起きてるから確認しねーとよ？・・・出来ないならこの娘はオレが交番まで連れていく。あんたは後ろから付いてくればいいさ」

こうすれば、仮にコイツが従兄ならここでなにか証明出来る物を出すだろうし、なければこのまま殴って警察にしょっ引くことができる。

「ああ、わかりました。少し待ってください。」

そう言うって運転席のドアを開けてなにやら探し始めた。

本当の従兄なのかも知れない・・・と油断していた旭に男が話し掛けてきた。

「こんな物しかありませんが・・・」

そういつて出したのは、あるうことか・・・美春の服の破れた切れ端と一枚の写真だった。写真には、死んだ目で犯されている・・・美春の姿が映されていた。

旭は一気に頭がカアツとなった。自分の血管がプチ切れる音を聞

いた気がした。

(今すぐぶち殺す!!)

本能でそう思い、相手の顔面目がけて鉄拳を加えようと接近した。

しかし、男は左手から隠し持っていたスプレーを出してこちらに向けた。

旭が気付いた時にはすでにスプレーは噴射されていた。

「ぐあっ!!!?」

目を潰され、一気に周りが見えなくなる。

かろうじて生きていた右目をうつすら開けると、男が美春を後部座席に押し込んでいた。

「やだあ!助けて・・・!ひつく・・・!いやあ!」

美春を押し込めると、男は急いで車に乗り込み車を走らせた。

「逃がしやしねーぞ!この野郎!!」

旭は復活した目を見開きサンパチに火を入れ、猛スピードで追い掛けた。

車にはすぐに追い付いた。後ろからバンバン煽る。もちろん、スピードは上げなかった。事故を起こしたら美春にもケガが及ぶからだ。

「ここからでもよくわかる、美春のヤツ暴れてやがるなあ」

車の後部座席で暴れている美春の影を見て少し安堵する。しかしその後、男が美春を殴った。美春の影は倒れて、起き上がって来ない。

「ンの野郎!!!!!!」

スピードを上げて車に並ぶ。

助手席方向に並び、ドアを蹴りまくる。

幅を寄せられたら次は回り込んで反対車線から蹴りを入れた。

「止まりやがれコラ!!」

旭が叫ぶが車は一向に止まらない。さらに2台は山に突入した。

峠道に入りしばらくして、突然車からエンジン音が消え、車が止まった。

とりあえず油断せずに、車から少し距離を置いた場所で単車を停める。

運転席を見るとどうやらガス欠になったみたいだ。

「あれ！？くそ！！なんでかからないんだ！？」

ハアハアいいながら男が運転席で焦っている。

確かに車のセルは回っているがかかる気配は無い。

しかし、さっきのスプレーがあるため油断せずにヘルメットにサングラスを被ったまま旭は車に近づき、運転席のドアを開けようと手を掛けたが、開かなかった。

「無駄な抵抗しやがって」

そう言っただけに穿いている安全靴で窓ガラスに蹴りを入れた。

ガラスは簡単に割れて、男が悲鳴をあげながら顔をふさいでいた。

「おい」

割れたガラスに手を突っ込み、男の少ない髪の毛を掴めるだけ掴んで外に引っ張りだす。残っていたガラスがいくつか割れて男の顔に突き刺さり血が出ている。

「わ、わ、わ、す、すみませんでした！！美春ちゃんは返すから許してください！！」

泣きながら謝る男を見て旭は男に唾を吐いた。

「なにやっつてんだオメー・・・？今すぐ死ぬか・・・？」

と脅した。その顔はヘルメットとサングラスのせいでわかりにくい、鬼のような顔をしていた。

「す、すみません！もうこれからはなにもしませんから許してください！！」

「そーか、なら早く美春を解放しろ」

そう言っただけ、男は「は、ハイ！」といいながら車のドアを開けた、その瞬間。

「ぎゃあああああああ!!」

男が断末魔の叫びを上げた。

見ると旭が男の右腕を踏み潰していた。そして先ほどのスプレーが手からこぼれ落ちる。

男はドアを開けてすぐに反撃しようとしていたのだ。

「バカかテメー?んなセコいワザがいつまでも通じると思ってたのか?あ?」

そう言つて、旭は男を車から引きずりだした。

数発殴り、男が泣き始めたあたりで、男を捨てて美春のコトを見た。

「けっ、まだ寝てやがる」

口に薄らと笑みを浮かべながら旭が呟いた。

美春は泣きながら気絶か、あるいは寝てしまっていた。

「まあ、こいつぶつ殺したら起こすからよ、それまでの辛抱な」

そう言いながら男に向き帰ると、男が手にジッポライターを持っていた。

「テメー・・・?なににする気だ・・・?」

旭がヘルメットを脱いだ。向こうがなにか変なコトをしたらコイツをぶん投げるためだ。

「くそっ!なんでだ!なんでおまえみたいな不良に僕の楽しみを邪魔されなければならなんだ!!?」

男が咆哮した。目は血走り、車を蹴とばしながら叫ぶ。

「くそっ!くそっ!くそっ!なんでだ!?!なんで停まったんだ!?!」

そっついながら車を蹴り続けている。

旭はしばらく見ていたが、そろそろ処刑の時間だと思い、男に近づこうとした。その時、

「ほ、本当にガス欠なのか!?まだガソリンあるんじゃないのか!?ええ!?!」

言いながら男はガソリン給油口を蹴り続け、蓋を壊した。

「そーだ・・・！本当にガソリンがないのか確かめればいいじゃないか・・・！」

そう言っつて男はキャップを外し始めた。

そして、細いジッポに火を付けた瞬間、旭はナニをするのかがわかった。そして恐怖した。

「や、止めるテメー！！！」

男にタツクルを仕掛けたが、時すでに遅く、ジッポは火が付いたままガソリントankに吸い込まれた。

瞬間・・・

ばあああん！！！！

車が炎上しはじめた。ガスが少なかつたため、激しく爆発したわけではないが、これでは全焼は免れない。

「て、テメー！！！」

旭が急いで後部座席にいる美春を助けるためドアノブに手を掛ける。

「っ・・・！？」

しかし、ドアはカギが閉まっている上にものすごく熱くなっていた。

「なんだ！？まだガソリンあるじゃないか！？」

男が狂ったように・・・いや、すでに狂いながら燃え盛る車に向かって蹴りを入れていた。

「このヤロツ！！！」

旭は燃える車のガラスを安全靴で蹴破り、中に侵入した。しかし狭い窓から侵入したために顔や手を切り、出血してしまった。サングラスも、燃える車内で落としてしまった。

前のガラスが割れていたおかげで車内で炎が爆発することはなかったが、かなり火の回りが早い。

「美春！おい！！！」

狭い後部座席で横たわる美春に旭が叫ぶ。

「・・・あなたは？」

美春が目を覚ました。

目の前には血を流している旭が居た。

しかし、今の美春は旭のことを覚えていない。恐らく、男に犯されていた時の拒否反応から生まれた“自分を守るため”に作られたもう1人の自分だ。最初旭を拒否したのも、記憶が無いのもこのせいだ。

「美春！今は時間が無い！逃げるぞ！！」

旭が抱き起こそうとする。しかし、美春は暴れだした。

「いや！やめて！！もういじめないでえ！！」

暴れる美春に旭が叫んだ。

「バカ！もうお前をいじめるヤツはここにはいない！！これからはなにかあつたらオレが守る！！だからオレを信じろ！！」

そう言つて美春を抱き抱えた。

すでに車内温度は60度を超えていた。

もうろうとする意識の中、美春は最後の言葉を聞いて、意識の途絶える瞬間に思った。

「この人なら、私を守ってくれる。だから、私はこの人に何かあつたら全力でそれを助けよう。」

これは旭も知らない話。

そして、もう1人の自分の中に隠された、本人も知らない記憶。

「この人が誰かにケガさせられたり苦しむことがあつたら・・・」

途絶えゆく意識の中で、美春は視界も霞む炎の中、自分を抱いてくれている彼の熱くなってきた体温を感じながら

「私はその誰かを必ず壊す・・・」

そこで美春は意識が途絶えた。

これが後に出てくる美春の中の『もう1人の自分』である。

旭は狭い車内で炎と煙から美春を守ったが、自らも窮地に立っている状況に変わりはない。

「ちくしょう！どつちから出るんだ!？」

炎と煙が視界を遮る世界で、旭はなんとか脱出の方法を考えた。そして、

「こつちか!!!」

ドアを蹴破り、一気に外に飛び出た。

美春を地面において、自分も燃えている服を脱ぎ捨てた。

「あゝ、ちくしょう・・・無茶すぎたか・・・」

火傷したところを見て旭が呟いた。腕や背中は特に酷く、水ぶくれになっていた。しかし、腹は美春を抱えていたので火傷はなかった。美春を守っていた腕や背中、その他の部分はかなりひどい火傷を負っている。

「美春は・・・火傷しなかったかな・・・?」

そこまで考えて意識が途絶えた。

その後、燃え上がる炎を見て地元の消防が消し止めに来て、旭と美春は保護された。

そして、あの男は燃え続ける車をひたすら蹴っていて、消防と一緒に来た警察に取り押さえられた。

後に過去の被害者などの取り調べや旭の証言で逮捕された。ちなみに美春は記憶が綺麗に無くなっているのか覚えていなかった。

数日後・・・

「入院生活は暇じゃあゝ!!!」

旭はベッドの上で1人叫んだ。自慢のリーゼントは下ろされている。ちなみにこの頃の旭はまだパーマが掛かっていなかった為、真っ直ぐな髪の毛を下ろし、サングラスを掛けていない旭の姿は年相

応の、可愛げのある少年に見えた。

旭は背中と腕、その他に多数火傷を負い全治3週間入院、今日でまだ3日目だ。

「あゝ、ちくしょう・・・動くときりりして痛い・・・」

1人個室の部屋で愚痴る。なぜ旭が病院の個室という料金の高い部屋に居るかというと、事件の後で美春の両親が感謝して入院費を少し負担してくれているお陰でこの個室を使わせてもらっているのだ。

そして・・・

コンコン

ドアがノックされ、旭は「どーぞー」と言った。

すると・・・

「き、霧島・・・君・・・？入ってもいいかな・・・？」

そこには、点滴を付けて、所々包帯を巻いた痛々し姿の美春が立っていた。

彼女は車の中で旭に助けられたことは覚えてなく、旭の証言でわかったのだ。

ちなみに彼女は全治1週間程度の背中や腕の火傷で済んだが、それでも旭と同じく入院していて、今は旭の隣の個室にて療養中だ。

「おう、入ってよ。毎日来てくれてありがとな？」

旭が首だけ動かして言った。

「私はまだ歩けるし、き、霧島君のお陰で助かったんだもん！それは毎日だって来ちゃうよ！」

美春は、あの忌まわしい出来事の前性格に戻っていた。

旭は美春のあまりの明るさと、可愛い笑顔に驚いたものだった。

「よう、まだあの時のことは思い出せないのか・・・？」

旭が聞いたら美春は「ん・・・」と唸った。

「全く覚えてないの・・・でも最近一つ思い出したよ！！」

美春の言葉に旭が勢い良く食い付いた。

「ほ、本当か!？」

火傷で痛む身体を起こしながら食い付く旭に、美春は右腕人差し指を旭に向けて笑顔で答えた。

「カレーパン！美味しかったよ！」

美春は事件の事や、あの時燃える車での事を今もまだ思い出せないでいる。

しかし、なにか旭の身に起きれば、いつでも旭の為に考えて、行動して、そして・・・

「そういうわけだ」

旭が話し終えるのに一時間かかった。

由美は泣いていたし、圭太も感動していた。

「じゃあ、美春さんは結局その記憶が無いんですか？」

圭太が聞くと、

「ああ、だが今日のあれは、あの時の記憶が一時的に戻ってあーいう風な防衛というかなんというか・・・まあ反応を起こしたんじゃないかと思っただ・・・」

そういう旭に、由美がなにやら考えていた。

（でも、美春ちゃんやけに旭さんのことを言っていたなあ。どーな

んだろ?)

考えていたら、なにか引つ掛かった。

しかし・・・

「すまん！だから美春を許してやってくれ！！頼む！！！」

旭が全力で土下座を始めたため、由美の「引つ掛かり」はどこかに行ってしまう、旭に顔を上げるように言う。

「もう、心配しなくて大丈夫ですよ！私は美春ちゃんの友達だから！これからもよろしくしたいわ！！もちろん！旭さんともね！」

美春が元気良く言うと、圭太も続けて、

「そうですね、そんな過去の話関係無いです！美春さんは良い人なんだし！！！」

そう言って笑顔で答えた。

「ありがとう・・・」

旭は改めて2人にお礼を言った。そして・・・

「まだ美春寝てっから・・・オレと美春しか知らない秘密を教えるよ」

いいながら、旭は上半身を脱いだ。

体にはあちこちに古い火傷の後が残っている。

「さつき巻いた背中の中の包帯越しにでかい火傷の跡があるだろう？実は、美春も全く同じ場所に全く同じ形の火傷の跡があるんだ」

2人は“おお”と唸った。

確かに、背中には先ほど巻いた包帯の後ろに、大きな火傷の傷痕が残されている。それはすごいなあと圭太達が思っていると、突然背後から怖い視線を感じた。

怖くなって後ろを振りかえる。そこには・・・

「ア〜キ〜ラ〜くん？なに話してるのかな？」

美春が起きていた。

「ぎゃああああああ！美春！？おめ、いつから！？」

「あつくんが火傷の秘密を話した辺りからだよ？」

旭に向かつて貞子のように這ってくる美春に3人は恐怖する。

「み、美春さん・・・なにか覚えてないですか？」

圭太が聞くと美春が

「あつくくんが窃盗団やつつけて、多分私が気絶したんでしょう？」
「這いずりながら質問に答えた。」

それを聞いて3人は「ああ、やっぱり覚えてないんだな」と思った。そして同時に「いつかあの人格も無くなるだろう」とも思った。

「それよりあつくくん・・・？なんで2人だけの秘密をバラしてるのかな？かな？」

「なんかキヤラクター違うし！それ危ないし！！」

旭が後退る。

「わかんないな、なんのことかなあ？」

ととうとう目の前まで来た。

「お、お前気絶したんだからもう少し寝ておけ・・・！な・・・！？」

旭が言うとき美春の目が“きゅぴーん”と光った。

「あつくくんも背中ケガしてるんだから早く寝なきゃダメでしょう！？」

「ぎゃあああああああ！爪を傷に立てるなあああああ！背中はやバイiiiiiiii！」

そんな2人を見て、圭太と由美は思った。

「あの背中傷はすぐに治るわね」

「うん」

2人の夫婦喧嘩(?)を見て妙に納得してしまった。

背中と同じ形の痛々しい火傷跡は、同時に同じ形の絆でもあるのだ。

その上に出て来た傷など、あつという間に治るだろう。

第7章 2人の出会い、結ばれる絆（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！4人目は今回本編が終了した真田美春ちゃんです！」

美春「よくわかんないけどこんばんは〜美春です」

作者「おお、今まで3人来たけどここまで落ち着きのある人は初めてだ・・・」

美春「だってここ夢の中でしょう？まわりは背景真っ白だし、あなたの足透けてるし・・・」

作者「透けてないよ！誤解を招くようなこと言うな！」

美春「冗談だけど・・・で、ここで私は何をすればいいのかな？」

作者「いや、ここではあなたの愛車のことを思う存分語ったり自慢してもらおうと・・・」

美春「私のサンパチちゃんのこと・・・？」

作者「左様でございます・・・」

美春「いいよ！あつくくんが組んでくれたサンパチちゃんの事ならみんなに自慢しちゃうよ!!」

SUZUKI GT380改（B3型） 美春仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル（腰上、腰下オーバーホール済み） 吸排

気系はミズノモーターズのゼス管3本チャンバー

足回り GT750後期フロントフォーク移植、フロントダブルデイスク、リアドラムワイヤー ロッドに変更。

外装 ノーマルハンドル、左ミラー無、純正シートアンコ抜き

カラー キャンディーブルー（B5カラーアレンジ 塗り替え）

作者「おお・・・旭君のサンパチより足回りがすごい・・・」

美春「GT750のフロント周りでよく止まるよ!」

作者「美春ちゃんの安全を考えてのチューンだね。旭君もよく考えてるなあ」

美春「おかげでいつも調子いいです!それに・・・いつもあつくんは私のサンパチちゃんをメンテナンスしてくれるし・・・なにか困ってもすぐに解決してくれるし・・・いつも優しいし、カッコイイし、頼りになるし・・・それに・・・」

作者「おーい、ここはバイク自慢の場所だぞ」

美春「あ・・・そうだっけ・・・」

作者「ところで、美春ちゃん、いつからこのサンパチに乗ってるの?」

美春「知りたい・・・?」

作者「そりゃあもう」

美春「ひ・み・つ」

作者「なんでよ」

美春「それは、あなたががんばればみなさんわかることよ?」

作者「え・・・?それどういう・・・」

美春「さーて!そろそろ帰りますか!じゃあ、ばいばい!」

作者「あ、ちよっ・・・行っちゃったよ・・・」

がばっ 起きた

美春「今日もいい天気ねえ・・・ふふっ」

というわけで、第2章完了!

もっと文章力が上がったなら、旭と美春のサンパチの話を短編にしてみたいと思います。

次回からは第3章です！70年代のホンダのバイクが出てきま
す！お楽しみに！！
ご意見感想、厳しい指摘、いつまでも待っております！！

第8章 高尾ツーリング！新たな出会い！（前書き）

今回から新キャラ登場です。宜しくお願いします。

第8章 高尾ツーリング！新たな出会い！

あれから1週間。

旭の背中への傷は縫うこともなく、かさぶたが小さくなり完治も近くなってきた頃、由美の頼んでいたフロントフェンダーも塗装が終わった為、今日は旭の家にてフロントフェンダーを付け替えた。

「か・・・カッコいい・・・！」

そう言っつて、由美は自分の愛車、ゼファー400改FXを見て感動していた。たかだかフロントフェンダー一つで、バイクの見た目も全然違う風に見えた。

「まあ、アクセントには良い効果だろ？」

旭もその塗装の出来映えを見て満足する。ソリッドの赤は、シワも垂れもムラも無く光り輝いている。

「もう最高！旭さんありがとう！！」

由美が抱きつかんばかりに喜ぶ。

「落ち着けよ、オレは付けたただけだべ？礼なら塗ってくれたオレんだちに言えよな？」

旭が由美をなだめながら続けた。

「板金屋の息子でよ、塗装と溶接の腕はピカイチなんだよなあ」

そう言っつて改めてフロントフェンダーを見る。やはり色は全くズレはない神業的な調合だ。

「まあ、アイツは最近仕事忙しいみたいだから・・・今度俺から礼言っとくわ」

「ありがとうございます！」

由美が元気良く頭を下げた。

「じゃあ俺はこれからちよいと寝るわ。昨日全然寝てなくてな、夕方になっつたら起きるから、なんかあつたら夕方連絡くれ」

「ハイ！！」

旭が自室に戻り、由美はもう一度フロントフェンダーを見つめて

から、張り切りながらゼファー改に跨がる。

「乗ったら見えないけど、最高の気分ね！よし、今から走りにいこう！！」

1人張り切ってキーを差してエンジンを始動させようとした時。

「ねえ、由美」

「うわっ！？圭太！いたの!？」

「そっちが呼んだんじゃんかあ、酷いなあ・・・」

圭太がFXの前でイジけていたので、由美が急いで機嫌を取り直す。

実は今日の朝、まだまだ夢の中にいた圭太を朝からケータイに鬼電して叩き起こし、「今日フロントフェンダー出来たって！付けてもらいついでに走りにいこう!！」と言って、半ば強制的に拉致してここまで付き合わせたのに、どうやらすっかり忘れていたらしい。

「ご、ゴメン！テンション上がったら、すっかり忘れちゃってた・・・!！」

「まあ、別にいいけどさあ・・・」

なんとか機嫌を直した圭太も、バイクに跨がる。

「で？どこまで行くのさ？」

今日は土曜日月末、来月に入ればゴールデンウィークでどこに行っても渋滞が起ころし始める。その前に道の空いているウチにどこかに行こうと言っらしい。

「2人で行くなら、また宮瀬ダム？」

圭太が聞くと、由美が「ノンノン」と言いながら指を振った。

「せっかくなんだから、今日は高尾の山まで行きましょう？麓にある蕎麦屋に行ってお蕎麦食べに行きましょう!！」

由美の提案に、圭太は考えた。

（まあ、高尾なら街道一本道だし、そんなに距離も無いし・・・まあ、安全かな・・・？）

「まあ、高尾位ならいいんじゃない？」

「よし！決まり！！」

由美がエンジンを掛けた。

消音器を抜いた手曲げタイプのマフラーから低い爆音が轟く。エンジン音を軽く吹かすとちゃんとタコメーターに反応してツキがいい。「よおし！出っぱつだ！！」

由美が旭の掛け声を真似して、バイクを半クラッチで発進させて駐車場を後にした。

街道に出てしばらく直進、すれ違うライダーがこちらを物珍しく見ていく。それは初めて圭太がFXに乗った時のあの威嚇するような目では無く、憧れのような眼差した。

少しいい気分で神奈川と東京の境に差し掛かったところで、なんの前触れも無しに絶好調だった由美のゼファアのエンジンが急に止まった。

圭太も驚いて一度バイクを歩道に寄せて、通行の邪魔にならないようにして停めて由美の元に走った。

「どーしたの？まさか壊れた・・・？」

圭太が聞くと、混乱した由美が愛車の前でおろおろしていた。

「急にプスンッて言っ止まっちゃって・・・！あんなに調子よかつたのに・・・！！」

かなり狼狽している。確かに絶好調だった愛車がいきなり止まったら、そりゃ慌てもするだろう。素人だったらなおさらだ。

「とりあえず旭さんに連絡取ってみよう？そうすればなんとかなるかも！」

圭太の提案に、由美は「そ、そうね！け、ケータイ！！」と言ってポケットからケータイを取り出した。2人は、『バイクで何かあっても旭ならなんとかしてくれる』と本気で思っている。旭からしたらはた迷惑な話である。

『よお・・・どーした？』

旭が電話に出た。スピーカーモードにしているので、旭の声は圭太にも届く。

「あ、もしもし！寝ているところ申し訳ないです！！私のゼファーちゃんがいきなり止まっちゃったんです！！」

由美が早口で捲りたてると、

『マジか、今どこだ？』

旭は冷静に返してきた。やはりバイクの味方だと2人は思った。

「街道にいます！橋中の駅の入り口近くです！」

由美がそう言うと、スピーカーからガサゴソ音が聞こえた。どうやら布団に潜っていたらしい。

「わかった。今から行くから動くなよ？」

「すみません！ありがとうございます！！」

旭の言葉に、由美は電話なのに頭まで下げて言った。

それから20分くらいしてから、旭が到着した。いつものグラサンを胸ポケットにしまつて緑色のツナギを着ている旭と、リアシートに工具箱を括り付けたサンパチが、由美には神様と天使に見えた。

「で？どーやって止まっただ？」

目の下にクマのある神様が聞く。

「走ってたらいきなりプスンッて！そしたら止まっちゃって……！」

由美が言うと、旭が静かに「そうか……」と言ってバイクを揺らした。

「まさか……？もう治らないですか！？」

由美が泣きそうな顔で旭に聞くと、旭がまたまた静かな声で言った。

「いいか由美ちゃん……？落ち着いて聞けよ？」

“ごくり”と生唾を飲み込み、神様の次の言葉を待つ。由美はかなり長い時間のように感じていたが、時間にしたら数秒である。そして……

「こりゃガス欠だ!!」

「へ・・・?」

旭が怒鳴ると、由美はひどくアホな子供みたいな声を出した。

「タンクン中見てみる!ガス入ってんか!？」

言われた通り、タンクの中をのぞくと、ガスは一滴も無かった。

振ってもなんにも音はしない。

「由美ちゃん!バイクが止まったら最低限のコトは自分で確認しろ!!ガス欠なんかすぐにわかることだろーが!?!あ!?!」

神様が悪魔になった。

「す、すみませんー!!」

由美が深々と頭を下げ謝るが、旭の怒りはとどまることを知らない。

「だいたいなあ・・・?こっちは仕事で昨日、今日と一睡もしてなくて眠いんだよ!!それがなんだ!?単車止まったつーから来てみたらガス欠!?ナメンのも大概にしとけよコラア!!ツナギ着て工具まで積んできた俺がバカみてえじゃねえか!!」

あまりの眠さに怒り爆発の旭に、怒られていないのに圭太までもが通行人の目も気にせず見事な土下座をした。

この後、5分くらい延々と説教されて、旭は目が覚めたのか冷静になって辺りを見回すと、2人が土下座して、行き交う通行人がみんな見て見ぬ振りをして歩いていくコトに気付いた。

「あ、スマン・・・つい怒鳴っちゃった・・・」

今度は旭が頭を下げると、由美が「と、とんでもないです・・・!」と若干ビビりながら旭に言った。

「どうもオレって眠いと機嫌が悪くなるみたいで・・・もう怒ってねーからさ、許してくれや」

旭が言うと、由美も、

「こっちこそすみませんでした・・・」

と言ってお互いに握手して、旭は去っていった。

残された2人は・・・

「ねえ圭太……？」

「何？」

「この辺り……ガソリンスタンドあつたっけ……？」

「あと2キロはあるんじゃない？」

圭太の言葉に、由美が愕然とした。

「に、2キロ……！」

「ま、僕も付き合うから一緒にバイク押していこう」

そうして2人は、2キロ先までそれぞれのバイクを押し歩いた。もちろん、歩道の通行人には邪魔臭そうな目で見られたが、これは仕方のないコトだと諦めた。蕎麦屋への道はまだまだ遠い……

「いらつしゃいませ〜！！」

「はあはあ……が、ガソリン……レギュラー……2台とも満タンで……」

30分間、バイクを引きずりながら歩き続けた由美は、もうめちやくちや疲れ切っていた。

「はい、満タンですね！？レギュラー満タン入りま〜す！！」

元気良く叫んだ後、カラになったタンクをガソリンで潤しながら、若い店員が由美と圭太のバイクを興味津々に見ていた。

「お客さん、珍しいバイク乗ってますね？」

「でしょ？なかなかカッコいいでしょ？」

由美は歩きながら買ったカルピスを飲んで一息ついてから答えた。

「FXが2台なんて珍しいしカッコいいし、憧れますね〜」

店員は、どうやら由美のバイクをFXだと思っているらしい。ガソリンを入れ終わり、給油ノズルから垂れるガソリンをタンクに落とさないようにしてタンクから引き抜いてから店員がまじまじと見つめている。

由美はガソリン代を渡して、お釣りをもらってから満足気にな

ずいてガソリンスタンドを後にした。

「やっぱりゼファーとは分からないみたいね!!」

そう言っ走りながら圭太に叫ぶ。

「まあ、やっぱり分かりにくいよ」

圭太も同意した。

改めて見ると、パツと見は全然分らない。フレームさえ見なければ「足周りを徹底的に強化したFX」にしか見えない。

「よし!!満タンになったコトだし!急いで高尾山行くわよ!!」

2人は、少しスピードを上げ、しばらくして東京に入った。

東京と言えば都会なイメージだが、ここは神奈川と山梨に近いので、辺りはこざっぱりしていて、空気も良い。このまま真っ直ぐ進み甲州街道に入ると、本当に東京なのかと思ってしまうほどに何もない。

そうこうして、街道の終点である高尾に着いた。ここからまた高尾山を目指す。2台のバイクは軽快に道を行き、途中何事も無く高尾山にたどり着いた。

「あゝ!疲れたゝ!!」

山の麓の駐輪場にゼファーを停めて、由美が大きく伸びをした。

山の空気も新鮮で透き通っている。

「いやゝ、良い汗かいたわゝ・・・」

そう言って辺りを見回す。休日と言うこともあつてか、高尾山口駅や麓のケーブルカー乗り場は人が多いが、駐輪場や駐車場にはそれほどどの台数はいない。やはり山に行くときは電車で来たほうが楽なのだ。

「僕ここに来たの小学校の遠足以来だなあ・・・全然変わってないね」

圭太は小学校の遠足の時のコトを思い出す。駅も山の麓の賑わいも、あの時のままだ。ここにはまだ自然が残されている。

「私もそうだなあゝ・・・そう言えば・・・あの時圭太、登ってる

途中に転んで泣いたわよね？」

ケラケラ笑いながら由美が言うと、圭太も反撃した。

「そういう由美だって！お弁当忘れて僕のお弁当半分食べてたじゃないか！」

圭太が言うと由美は、ギクツ、となった。

「あ、あれは・・・！そう！ワザとよ！ワザと！！」

アハハ八とごまかし笑いをする由美を見て圭太はため息を付いた。なんて嘘が苦手なんだろうか。

それからすぐ、2人はバイクにハンドルロックとU字ロックを掛けてから駐輪場を後にした。U字ロックは、旭に「余所に行つてパークられたら洒落にもなんねーから、絶対買つといた方がいいぞ」と言われて最近買った物だ。因みに2人で同じ物で、圭太が青、由美は赤だ。

ケールブルカー乗り場の目の前にあるお土産屋などの並ぶ場所に、某ドラマでも使われたそば屋がある。

昼食がたら、2人はそこに入ってからこの後どうするかを相談するコトにした。「とりあえず、まだ結構時間には余裕があるし山に登ってみる？」

圭太が山菜そばを食べながら由美に聞くと、月見そばを食べながら、月見そばの卵をいつ割るかのタイミングを見極めていた由美がうなりながら答えた。

「そうねえ、まだ時間あるしケールブルカー使つて途中まで行つて、時間があればその後で一番上まで行くのもアリね・・・それにしても美味しいわね！」

そう言つて待ちに待った卵を割った。

「あと、ここらなら相模湖が近いよ？」

店に置いてあつたこの辺りの観光名所マップを見ながら圭太の提案したのは、山を2つ越えた場所にある相模湖である。

信号も少なく景色も良く、ツーリングするには絶好の場所である。

「相模湖かぁ・・・それいいわね、行きましよう！」

こうして、由美と圭太はそれぞれ蕎麦を食べおわり、店を後にして、2人はそのまま真っ直ぐケーブルカー乗り場に向かった。

ケーブルカーは開けた森の中を芋虫みたいに登っていく。床は坂にあわせて斜めになっており、ケーブルカー車内の高低差はかなりある。

ケーブルカーは山の中腹が終点でそこから先は徒歩になる。2人は終点で降りてそこから周りの山々を見渡せる場所から遠くを見た。

「うーん・・・私達のバイク、ここからじゃ見えないわね・・・」

由美が下を覗きながらうなる。もしここから見えたら、それは多分焼け野原で周りが何もなにか、標高50メートルくらいしかない丘である。

「そついえばまだ1時だし、上行く？」

圭太が腕時計を確認して、まだ十分すぎるくらい時間に余裕があるコトを由美に告げる。

「そつねえ・・・ここからなら40分くらいで着くはずよね・・・？」

由美がケーブルカー乗り場の地図で頂上までの距離を見て唸る。なかなかしんどい距離だ。

「あ、でもここと頂上の間になんか寺があるみたいだよ？」

圭太の言葉に由美が地図を見直す。なるほど、確かになにかあるみたいだ。

「本当だ！よし！とりあえずここまで行きましよう！」

こうして、由美達は少し登るコトにした。途中、2人は土産屋でソフトクリームを買って食べながら歩いた。暖かい日射しを受け、山を登りながら食べるソフトクリームはもの凄く美味しかった。

しばらく歩くと、地面が砂利道から石畳になってきた。そして、結構急な階段を登り、大きな木製の門をくぐり抜け、高尾山『薬王院』にたどり着いた。

薬王院は、聖武天皇が744年に勅命して開山した歴史のある寺院で、薬師如来が安直されたことから薬王院と呼ばれ、東京都指定有形文化財に指定されている。

ここからは坂道と言うより階段がメインになってくる。2人はこの薬王院の見所でもある本尊、飯縄権現でひと休みしながら、その社を見て遙か昔の時代から残るこの建物を見ていた。

「やっぱり、こういう和の文化ってすごいよね。昔遠足で来た時はわからなかったけど、今ならわかる気がする」

圭太が赤い社を見ながら言うと、由美もケータイで写真を取りながら頷く。

「やっぱり日本人でよかったなあ、って思える数少ない機会よね」
遠くで外国の旅行客達が社や周りの自然をカメラに収めていた。

高尾山は東京駅から電車で一本で行ける為、こういった外国から来た人も気軽に来れる観光スポットとしても知られている。

すると、白人のおじさん観光客がこちらにポラロイドカメラを由美達に向けた。

「あ、撮ってくれてるって！」

由美が言うと、圭太も恥ずかしがりながらもカメラの方を向いた。

そして二回シャッターが押されて、フラッシュが光った。しばらく待つと、写真が出来上がった。由美が圭太の肩に手を回してピースサインを向けていた。圭太は少し顔を赤くしていた。

「コレ、イチマイドゥゾ」

外国人観光客が片言ながら、日本語で話した。

「え！？良いんですか！？ありがとございます!!」

由美がはしやきながら言う。

「アナタ達ハ、アー・・・最高ノカップルです！」

片言混じりだが十分上手な日本語でこう言った。

「サンキュー！この写真、大事にするわ！」

由美が返すと、男性も

「ワタシも、オーストラリア帰ッたら、家に飾ルヨ！アリガトウゴ
ザイマス！！」

そう言っつて圭太と由美と固く握手をして、彼は家族だろうか、ま
たグループの輪に戻っていった。

由美も、彼らをケータイでだが写真に収めてメモリーカードに記
録した。

「よし！休憩おしまい！！頂上まで行きましょう！？」

由美達は、結局頂上まで行くことにした。時間はまだあるし、や
はりこのまま帰るのは少し惜しい気がした。

石畳からまた砂利道になり、周りの景色を見ながら、高校での話
やバイクの話などをしているうちに、あっという間に頂上にたどり
着いた。

「高いわねえ……」

「高いねえ……」

2人は頂上から山々を見渡した。遠くにはどこかの街の高いビル
が見えた。が、由美が後ろを見て叫んだ。

「あ！あの建物覚えてる！！」

由美の目線の先には、おみくじの販売所があった。

「よし、とりあえずあそこでおみくじ引きましょう！」

由美が走っつていって、圭太は後からのんびり歩いていっていった。

おみくじを買って、開けてみると、圭太のおみくじは「吉」だっ
た。勉強は好調で人間関係も良好とあるが、もしかしたら金銭面と
行事で苦労すると書いてある。ラッキーカラーは黄緑色だった。

おみくじを結ぶと、由美を見た。由美はなにやらニヤニヤしなが
らおみくじを見つめている。

「なにしてるのさ？おみくじ結ばないの？」

圭太が言つと、由美はニヤニヤしながら圭太を見た。

「大吉だったんだけど……私はここには結ばないわ。他に結ぶ場
所があるから」

そう言つて、大事におみくじをポケットにしまった。

「よし！それじゃあ駐輪場戻りますか！相模湖まで行くわよ！？」
ハイテンションで山を下りはじめる由美を見て、圭太はなんのこ
つちやと思つたが、さして気にせず下山した。

帰り道はケーブルカーでは無く、もう少し下つた場所にあるリフ
トで山を降りた。

2人は駐輪場について、バイクにまたがる前に圭太が飲み物を買
つてくると言うので、駐輪場で待つことにした。

その間に、由美はさっきのおみくじをポケットから取出し、バイ
クのみラーに結んだ。

「大吉 特に恋愛運が絶好調。ラッキーカラーは赤。」

由美は小さく笑つた後、急に恥ずかしくなり圭太の後を追つた。

「あれ？どうしたの？」

自販機の前で、由美の分のコーラを買おうとしていた圭太が、待
つてるハズの由美がこちらに来たので不思議に思つて聞くと、「な
んでもないよ！えへへ」と、笑いながら圭太からコーラを受け取
つた。

「そういえば・・・2人だけでツーリングつて初めてよねえ」

由美はコーラのプルタップを開けながら言つた。その顔はものすこ
く嬉しそうだ。

「そういえば、ここのとこいろいろあつたし・・・」

圭太が呟く。確かにここ1週間、旭と美春との出来事や学校でぜん
ぜんバイクに乗っていなかった。

「まあ、みんなで走るのも楽しいんだけどねえ・・・」

コーラの空き缶をゴミ箱に投げ捨てて由美が言つた。

2人が駐輪場に歩いて行くと、圭太達のバイクの前に同い年位の
少女が立っていた。

「あの人・・・なにやってるのかな？」

「まさか・・・バイク泥棒じゃないでしょうね!？」

「いや、白昼堂々人の多いところじゃやらないでしょ。それに女の子だし」

圭太が言うと由美も「それもそうねえ」と納得した。もし少女がバイク泥棒なら、あんなにのんびりバイクを眺めている余裕など無いだろう。

少女は、回り込んだり下から覗いたりしてバイクを見ている。ついにしゃがんでまでして見ていると、少し離れて写真を撮ったりしている。

そしてまた近づいては、惚けた顔をしながらバイクを見始める。

「あのおく・・・?」

びくっ!!

圭太が呼び掛けると、少女は飛び上がらんばかりに驚いた。

「す、すみません・・・!わ、私、そ、その・・・!!」

なにかすごく取り乱している。髪型は少し外に跳ねているセミロング、小さな顔は整っていて、どこか小動物系な感じの可愛い顔をしているが、その顔は今では焦燥しきっていて、「あの、その・・・」と繰り返すだけで言葉が出てこないでいる。

「いや、別に僕たち怒ってる訳じゃ無いんだけど・・・?」

圭太が言うと、少女はやっと落ち着いたのか、「よ・・・よかったですあ・・・」ととりあえず安堵した。

「あなた、もしかしてバイク好きなの?」

由美が質問すると、少女は「は、はい・・・」と緊張しながら続けた。

「す、すみませんでした・・・人のバイク勝手にじろじろ見てしまつて・・・」

少女が頭を下げた。

「気にしてないわよ?むしろもつと見てほしいわ!」

由美が胸を張って言うと、少女は「い、いいんですか?」と聞いた。

「かまわないわよ？私のゼファアーちゃんはカッコいいから、もっと見ていつて頂戴！」

その言葉に、少女は目を輝かせながら由美に「ありがとうございます！」と言つて由美のゼファアーと圭太のFXを見た。

「あゝ・・・やっぱりカワサキもカッコいいですよね・・・」
惚けた顔で少女が言う。

「君もバイクに乗ってるの？」

圭太が聞くと、少女は「は、はい・・・」と静かに言った。

「昔のホンダのバイクに乗っています・・・ちよつとボロですけど、外装は毎日磨いているから綺麗です・・・」

「じゃあ今日はバイクで来たの？」

由美の質問に「はい・・・」と答えて、駅の方を指差した。

「あつちに停めてて・・・」

「あ、じゃあ見せてよ！？私達の周りにホンダに乗ってる人いないのよー！」

由美が言うと、すこし困つたような顔で少女が続けた。

「あの、その・・・あなた達のバイクみたいに綺麗じゃないんですけど・・・いいですか？」

「問題無いわよ！待ってるから早く早く！！」

由美の言葉に、急かされるように少女は走つていった。

そして数分後、駐輪場に赤い小さなバイクが入ってきた。

「お、お待たせしました・・・」

少女のバイクを見て、2人は本当に古いバイクなんだと思った。

フロントフォークからライトボディまで赤く、エンジンのオイル滲みはそのバイクの古さを際立たせる。

「なんて言うバイクなの？」

由美が聞くと、少女がバイクから降りて答えた。

「CB350F ur、通称『サンゴーフォア』って言うバイクで、

・・・1974年に1年間しか作られなかった不人気車種なんですけど、私はこの子が大好きなんです」

初めて笑った少女の顔は、今までと違い明るく見えた。

「可愛いバイクね！あ、自己紹介が遅れたわね、私は三笠由美！由美って呼んでね？高校3年よ」

由美が自己紹介を終えると、次は圭太の番だ。

「あ、僕は中山圭太って言います。歳は由美と同じ年。よろしくお願ひします」

自己紹介された少女は、凄く嬉しそうにして（しかし、表情変化が貧しいためわかりにくい）自分も答えた。

「わ、私は衣笠翔子きぬがさしょうこって言います・・・た、高尾の近くに住んでいて、学校も高尾にあります・・・あと・・・私も3年生です」

少女、衣笠翔子はなんとか自己紹介を終えた。ものすごく緊張したのか、表情が硬い。

「あ、同じ年じゃない！よろしくね!？」

由美が握手して、腕をブンブン振る。翔子は振られるままになっている。

「あ、あの・・・!」

翔子が大きな声で（それでも普通の大きさ）言って、由美を見る。翔子は下を向いて、なにか小さな声で「・・・大丈夫・・・」とか「・・・言わなきゃ・・・」とか呟いて、拳をギュツと握りしめる。

そして、意を決したのかこちらを見て言葉を紡いだ。

「今日初めて会って・・・厚かましいかも知れないですけど・・・私、去年いろいろあってこっちに引越してきて・・・人見知りで暗くて、すぐに上がっちゃうし・・・だから・・・高校でも友達がいなくて・・・だからバイク好きな友達が前から欲しくて・・・だから、その・・・」

顔を真っ赤にさせながら由美と圭太達に言う。顔は火を吹かんばかりに真っ赤だ。

「その・・・よかつたら、お友達になつてください!」

翔子は思い切り頭を下げた。由美達の答えを、まるで裁判の判決

を待つ被告人のように緊張しきつた顔をして待っている。

「え？なに言ってるのよ？」

由美があっけからんとした態度で言った。

（ああ・・・やっぱり私みたいなネクラが友達なんて・・・図々しかったんだ・・・）

翔子はどんどん悪い方向に向かって考えてしまい、泣きそうになった。

「そんなコト言われなくても！私達はもう友達よ！？翔子ちゃん！」

由美の言葉に、半泣きだった翔子は「ふえ・・・？」と言ったあと、由美の言葉を脳内で再生し直した。

『ともだち』・・・。

そして・・・

「ふえ・・・ぐすつ・・・あ・・・ありがとう・・・じい・・・ましゅ・・・ひっく・・・！」

嬉しさのあまり翔子は泣き出してしまった。

急に泣き出してしまった翔子に最初こそ驚いて慌てていた由美も、すぐに笑顔になって翔子を抱き締めた。

第8章 高尾ツーリング！新たな出会い！（後書き）

衣笠翔子

職業 高校3年生

誕生日 10月24日（現17歳）

髪型 セミロング（少し外跳ね）

身長 157？

愛車 CB350Four

家族構成 父・母・兄

好きなもの CB350Four・写真・由美・母（他界）

嫌いなもの 現在の家族（母と兄）・いじめ・脂っこいもの

今回から登場する新キャラ。そのおとなしすぎる性格のせいではなく友達ができないでいるが、昔はもう少し明るかった。今の家族は、中学3年のころ父が再婚してできた新しい家族なのだ……。ここがこの章のカギになってくる。趣味はバイクと風景の写真を撮ること。

第9章 ブロー!? (前書き)

少し間が空いてしまいました汗

それでは第9章! 至らぬところ多々ありますが、宜しく願います!

第9章 ブロー！？

あれから翔子の嬉し泣きが止むまで10分はかかった。

なんとか泣き止んだ翔子は、次は顔を真つ青にして謝りだした。

「す……！すみませんでした！！私、迷惑を掛けてしまつて……！！」

ものすごい勢いで謝りだす翔子を見て、土下座&切腹も時間の問題だと2人は思った。

「もう大丈夫だから、別になんとも思つて無いわよ？」

由美が言つと、泣き顔の翔子が顔を上げた。

「す、すみません……私、人見知りで……こんな性格だから学校にも友達いなくて……」

翔子は、その場にしゃがんでうつむく。涙を堪えながら、ため息をついた。

「せっかく親切にしてもらつたのに……今も凄く怖くて……ごめんなさい……！」

「なあに言つてんのよ？私達は何にも思つてないんだから、気にしなくていいわよ？それに……」

由美は翔子の目の高さまでしゃがんで、翔子の顔を見て最後の言葉を紡いだ。

「私達……もう友達じゃん！？」

二カつと笑い翔子に話し掛ける。翔子の頬にそつと両手を当てて、優しい笑みで翔子に言った。

「あ……」

翔子は、自分の頬に伝わる由美の温かさを感じた。

「私達と同一年で、それでバイクに乗っていて、しかもそれが旧車なんて……こんな素敵な出会いがある？」

由美がニコニコしながら問うた。翔子もすでにさっきまでの悲しい顔では無い。

「私達を会わせてくれた、このバイク達に感謝しなきゃね？あなたのサンゴちゃんもきつとそう思ってるわよ？」

由美はそう言って視線をCB350Fourに向けた。毎日磨かれたタンクにサイドカバー、メッキパーツは年相応のキズや色褪せはあるものの、キラキラと太陽に輝いている。

「サンゴちゃんってなんですか・・・？」

翔子はCB350Four、通称サンゴフオアをサンゴちゃんというあだ名に可笑しくなって笑ってしまった。

「サンゴより、サンゴちゃんの方が可愛いでしょ？」

由美が少し顔を赤くして言う。やはり自分で言って恥ずかしかったみたいだ。

「ありがとうございます・・・私、もう大丈夫です」

そう言って翔子は、自分の愛車にして、パートナーのサンゴフオアのハンドルに手を掛けた。

「えへへ、サンゴちゃんだって？よかったね、可愛いあだ名もらって」

すっかり元気になった翔子は、最初に会った頃より自然な笑顔で、愛車に触れた。

「そのバイク、翔子ちゃんに凄く似合ってるよ？」

圭太が翔子に笑顔で言う。小さなサンゴフオアに、翔子が跨がる姿はこれ以上無いくらいにピッタリだ。

「ありがとうございます、圭太さん！」

「僕達に変な気を使わなくていいよ。同い年だし、友達なんだから！」

圭太の言葉に、翔子は「はい！」と、この日一番大きな声で元気良く頷いた。

「あ・・・翔子ちゃん、今日これから時間ある！？」

由美がなにかを考えてから翔子に聞いた。

「え？ありますけど・・・なんで？」

キョトンとした感じで話した翔子に、由美はしめしめと笑いなが

ら翔子を見た。

「今日、これから相模湖に行くけど、翔子ちゃんも一緒に行きましよう!？」

由美の提案に、圭太が「いいね、それ!」と賛成した。しかし・

「え・・・?でも、その・・・」

困った顔で、翔子がモジモジ始めた。

「お・・・お二人の邪魔じゃ無いですか・・・?」

翔子は、どうやら2人が付き合ってる同士だと思っっているらしい。恥ずかしくなっているのか、顔が赤い。

「いや、全っ然気にしなくていいよ?僕達別にそう言っのじゃ・・・っつて痛っ!!!」

圭太の言葉を、由美が脛を蹴って阻止した。そしつ翔子に向かって代わりに答えた。

「私達は気にしないから!ね!?圭太!？」

「なんで蹴られるんだ・・・?」

なんとか阻止した由美と、蹴られた理由が分からない圭太を見て、

翔子は「由美ちゃんがんばれ!」と心の中でエールを贈った。

「で?どうする?行きましよう!？」

由美の提案に、翔子は少し考えてから、由美達を見て言った。

「はい!・・・行きます!」

その顔には、もう迷いも不安も何もなかった。勇気なんて、いらない。もう自然体で話せてしまっ。さっきまではあんなに怖かったのに、今ではそんな恐怖は全く無い。翔子は心の中で改めて由美にお礼を言った。

「よし!それじゃあ行くわよ!!!準備はいい!？」

由美が圭太と翔子を見た。

「僕が行けるよ?」

「私も大丈夫、よろしくお願いします」

2人とも、すでに準備は出来ていた。

それを確認して、由美は頷いた後、エンジンを掛けた。

きゅるるる……ボアアアン!!!!

手曲げショート直管から吐き出されるゼファー改FXのエキゾーストが辺りに響き渡る。

「わぁ……カッコいい……」

翔子は、欲しいオモチャを見る子供のような目で由美とゼファーを見た。

「じゃあ僕も……」

きゅるるるる……ファアアン……

「ははは……やっぱり僕のはノーマルだから……」

由美の音の後に続いてしまった圭太は、ノーマルマフラーの排気音を聞いて少し苦笑いだ。

「やっぱりカワサキもカッコいい……」

「じゃ、次は翔子ちゃんよ？」

「あ、はい……!」

由美の言葉に頷き、翔子もセルに指を伸ばす。

きゅるるるるるる……ダアン……!

今までで一番長いセルの後、エンジンが掛かった。

「音が僕達より重いね、4ストだよね？」

圭太が聞くと、「うん」と言いながら答えた。

「やっぱりこの子はシングルカムだから……ツインカムのあなた達より音が重いんです」

「なんか今まで一度も聞いたこと無い音よね!私達もバイク乗ってる友達の後2人いるんだけど、あの人達のは2台とも2ストだしね

「！」
由美が、旭と美春の音を思い出しながら言う。あの2台は、由美や圭太、翔子とも違う甲高いカミナリのような音と真っ白な白煙、オイルを撒き散らす。

「いいなあ・・・私も会ってみたい・・・」
翔子が心底羨ましそうな目で2人を見る。

「じゃあ、今度一緒にツーリング行きましょう!? 見た目は怖いけど、やさしくて便りになる人と、どこかのんびりした可愛い人よ!」

由美の説明に、ますます嬉しそうな顔で由美を見る翔子は、本当に夢のような気分だった。

「あ、でも・・・最初に言った人・・・眠い時は物凄く怖いから、それは注意してね?」

由美が脅すように言うと、翔子は「わ・・・わかりました・・・」
と言って固くなった。

「話だけで相手を固まらせるなんて・・・旭さん恐るべし・・・」
「なに言ってるのさ? 由美が脅すように言うからじゃないか」

圭太がツツコミを入れた。

「とりあえず、相模湖へ行きましょう!? 今日には天気も良いし・・・! 最高よ!?!」

「安全運転でね?」

「よ・・・よろしくお願いします・・・!」

3人、それぞれの顔を見てからギアを1速に入れた。そして3人は高尾の山々にエキゾースト音を響かせながら高尾山を後にした。

3人の出発を、周りの山々が見守っていた。

走り始めて数分、3台のバイクは軽快に走っていた。

「空気がいいわよ! 空気が!」

アップダウンの続く峠道を進む3台の先頭を走る由美は高らかに叫んだ。山の冷たい空気と、春の太陽の日射しが心地いい。

「わ・・・私・・・」

翔子は、なにやら嬉しさに震えた声で呟いている。

「どう？翔子ちゃん！？みんなで走るの！？」

由美が叫ぶと、翔子が隣に並んで聞こえるように精一杯叫んだ。

「すごく楽しい・・・！1人で走るより何倍も何倍も・・・楽しい！」

ジエッペルをかぶる由美と圭太に叫ぶ翔子は、本当に楽しそうだ。因みに、翔子はツバの無いハーフトイプのヘルメットに、ゴーグルを掛けている。

「本当に・・・楽しいな・・・！」

翔子、今までずっと1人で走っていた為、3台とは言え、皆で走るコトに慣れていたので。

「圭太！ついてきてる！？」

由美が叫ぶと、しんがりにいる圭太は手を振って返してきた。

途中、3台は交代交代で前後を入れ替えたりしながら相模湖へ向かっていった。そして、相模湖まで後1キロを切った辺りで小さな橋が出てきた。走りながら下を見ると、下は綺麗に透き通った川があった。圭太は「綺麗だなあ」と思い、川を見続けた。

そして、ダムのある近くの道路に出た。きれいに舗装されていて、3台は気持ちよさそうに走った。

そして、道に沿って走ると、ダム近くの公園と言うか、広場に付いた。

3台は、近くの駐輪場にバイクを並べて、そこから歩いて公園まで行った。

「きれいな広場ねえ〜！！」

由美が思い切り伸びをして言った。

辺りには他にも人がちらほら居て、賑わっている。

「なんかお弁当とか持ってピクニックしたいわね！」

「ああ、いいね〜それ」

由美の言葉に圭太が賛同した。辺りには何もなく、民家も少ない。タイル貼りの道の脇には芝生が続いていて、こんな日は昼寝したくなるほど気持ちよさそうだ。

「あ、2人とも！こっち向いてください！」

翔子が、カバンからカメラ（なんか高そうなモノ）を取り出して、2人に向けた。

「はい・・・撮りますよ〜・・・？」

「あ、圭太！撮ってくれるって！！」

2人は仲良く並んでこちらを見る。表情はごく自然な笑顔だ。

「はい、チーズ！」

カシャツ・・・！

シャッターは無事に押されて、由美達を写したハズだ。

「ありがとうございます・・・！私、あまり人の写真は撮らないから・・・変に写ってたらだったらすみません・・・」

翔子が不安そうな顔で言う。

「大丈夫よ！上手く撮れてるハズよ！？ていうか、いつもどんな写真撮ってるの？」

由美の質問に、翔子は少し恥ずかしがりながらこちらを見て言った。

「普段は・・・風景とか、バイクとかを撮ってて・・・将来は写真家になりたいなーって・・・！」

モジモジしながら言う翔子に、由美は笑いながら翔子の肩を叩いた。

「いいじゃない！将来の夢があつて！！大丈夫、あなたならきっといいカメラマンになれるわー！！」

由美の言葉に、翔子は嬉しくなった。本当、こんなに嬉しくなったのは何年振。りだろつか・・・

そして、翔子は2人の姿を取り続けた。ダムをバツクに1枚、芝生の上で転げ回る由美の笑顔や、圭太の困り顔をたくさん撮った。今日この日のコトを忘れないよう、夢中でシャッターを切った。

「あ……！」

突然、由美が何かを思い出した。そして、翔子に駆け寄った。

「翔子ちゃん！私達ばかり撮らないで、あなたも写んなよ！？」

「え……そう、ですか……？」

由美の提案に、圭太も「そうだね、」と頷いた。

「うんうん！翔子ちゃんも入らなきゃダメよね！セルフタイマーとか無いの？」

由美の言葉に、翔子がセルフタイマーを10秒間に合わせた。

「じ……じゃあ私も、入りますね？」

カメラを岩の壁の上に置いて、ピントを合わせてからタイマーをセットして小走りで由美と圭太の方向に走った。

「あ、翔子ちゃん……真ん中おいでよ？」

右端にいた翔子に圭太が言うと、由美も一緒に賛同して、翔子の右を圭太が、左に翔子がくっつくようにして（圭太は、最初離れていたが由美に強制的にくっ付かされた）カメラを見た。

「ハイ！チーズ！！」

由美の掛け声の後、タイミング良くシャッターが降りた。

パシャ……！

3人は、しばらく同じような感じで写真を撮っていたが、フィルムが切れてしまうと遊び疲れて一休みした。

「ありがとう……今日はたくさん良い思い出が出来ました……」

翔子がコンビニで買ったアイスを食べながらお礼を言った。その顔はもの凄く嬉しそうで、見ていた2人もそれだけで大満足だ。

「こちらこそ！私たちもたくさん遊べて楽しかったし！！写真も、

出来たら見せてね？」

「うん！！」

楽しそうに話す由美と翔子を見て、圭太も良かったと思った。本当に心からバイクに乗っていて良かったと思った。バイクに乗っていなければ、旭と美春に会うことも、榊さんに会うことも、そして今日高尾に来て翔子と会うことも無かつただろう。2人もきつと、そんなコトを考えているんだろうなあ・・・と思う。

「もう5時かあ・・・早いなあ」

由美がケータイの時間を見て呟いた。真っ赤に燃えた夕日が3人を照らしていた。

「時間が過ぎるのがこんなに早く感じるなんて・・・久しぶりです・・・」

翔子が呟いた。それは本当の本当に楽しい時間を過ごしたコトを実感出来る言葉だ。手を前に組んで思い切り伸びをした。

「あ、そうだ・・・ケータイのアドレスと番号教えてよ？また一緒に走りに行きましょう！？」

由美が言つと、翔子は「あ・・・」と言つて少し困った顔をした。

「私・・・ケータイって持ってないんです・・・」

そう言つて、俯いてしまった。

「だから、家の番号じゃダメですか・・・？」

「いいわよ？全然オツケーよ！」

3人は、それぞれの番号を渡しあつた。アドレスは使えないので番号だけにした。

「ありがとうございます・・・！また連絡しますね！」

翔子が2人の番号を書いた紙を持って喜んで言つた。「じゃあ・・・もうそろそろ帰りますか！」

由美が言う。名残惜しいが、やはり時間が遅くなれば帰りが危なくなる。この辺りは街灯も少ないし道も狭いのだ。

「帰り道は、高尾までは僕達も一緒に帰れるよ？」

圭太が言うと、翔子は嬉しそうに頷いた。

そして、3人はあれこれ話ながら駐輪場に向かった。やはり別れたくない、もつとこの時間が続けばと思っているから、自然と足は遅くなるが、着実に駐輪場に向かっていた。

そして、駐輪場に着いた。3台のバイクは、主の帰りを仲良く待っていた。

「よし！じゃあ安全運転で帰るわよ！！」

そう言ってゼファーに飛び乗った由美だったが、なにかおかしいことに気付いた。圭太と翔子も異変を感じた。

「なんか・・・この匂いは・・・」

「が・・・ガソリン・・・？」

圭太と翔子が続けた。辺りにはガソリンの匂いが漂っていた。そして・・・

「あ！サンゴちゃんの下！！」

由美が指指す先は、翔子のC B 3 5 0 F o u rだった。その下の地面には・・・

「な・・・なんか漏れてる・・・」

地面にはガソリンがダダ漏れしていた。辺りにはガソリンの染みがあちこちに広がっていた。

「ああ！！」

翔子が見ると、キャブレターとガソリンコックからガソリンが漏れていた。それはもう大量に・・・。

「どどど、どうしよう・・・！？」

翔子が泣きそうな顔でキャブレターを見る。しかし、原因は全くわからなかった。

「サンゴちゃんを買ったバイク屋さんに連絡出来ないかな？」

圭太が言うと、フルフルと首を横に振った。

「これ・・・お母さんからもらったバイクで・・・よくわからないですう・・・」

さっきまでの笑顔から一変、泣きそうな翔子を見て、由美が圭太

に聞いた。

「……ねえ、圭太？」

「……何？」

「……今何時？」

「……5時半だね」

由美の間に、腕時計を確認して圭太が答えた。

「……5時つて夕方よね？」

「……うん、世間一般的に、間違いなく夕方だね」

「……そうよね」

2人は互いになにを考えているのか、すでに理解した。わからないのは翔子だけだ。

「……呼ぶわよ！」

「え……？誰を……？」

由美の言葉に質問した翔子に、圭太が答えた。

「バイクの神様だよ……！」

由美が電話で旭に連絡を取った。朝の二の舞にならぬように事情、車種、症状、場所を伝え、ガソリンが漏れているキャブレターの写真をケータイメールで送り、旭の返事を待つこと5分。軽トラで向かうとの連絡が来た。

「旭さん……！来てくれるって……！」

由美の言葉に圭太もホッと一安心だ。

「だ、誰ですか……？旭さんって……？」

自分のコトなのに、イマイチ状況がわからない翔子が聞くと、由美が笑いながら言った。

「さっき話した、バイク乗ってる友達……！ひとつ年上の人よ……！」

言われて、翔子は思い出した。

「さつき高尾山で言ってた人・・・？」

「そう・・・！眠い時は機嫌が悪いけど、普段は凄く優しい人！」

3人は、とりあえず駐輪場で待つことにした。最初は相模湖駅が近いので、3人はバイクを押して行こうと考えたが、坂道が多いのと、旭に「なるべく動かすな」と言われていた。バイクを置いて行こうかとも思ったが、夜になるとこの辺りの田舎は変な輩が多いため、駐輪場にとどまった。

「ごめんなさい・・・私のせいで、あなた達まで待たせてしまって、人まで呼んでもらって・・・」

翔子が頭を下げて言うが、先程のような泣きそうな顔では無く、迷惑を掛けてしまったと言う申し訳なさそうな顔をしている。

「まあ、お礼は旭さんに言ってお！私達は呼んだだけだしね、あなたが気にするコトじゃないわよ！」

「そうだよ、旧車にトラブルは付き物だし・・・しょうがないよ」

由美と圭太が、落ち込む翔子に言った。

圭太が言うように、旧車にトラブルは付き物で、それこそトラブルを起こさないコトの方が難しいのだ。

「あと1時間半は待つわね、なににする？」

由美の提案に、2人は悩んだ。1時間以上もの間、何もせずただつつ立っているのも厳しい。

「そう言えば、もし旭さんが来ても、この場で修理出来なかったらどうするの？旭さんに預けて、翔子ちゃん大丈夫？」

圭太が翔子に訊ねた。もしこの場で修理出来なかったら・・・可能性は十分にある。

「そしたら、今日はウチに泊まりなさい！今日せつかく会ったんだから、やっぱりこのまま帰るのは勿体ないわ！後圭太も！！」

「え・・・でも・・・」

由美の提案に、翔子はあたふたとする。仮にバイクが治らず、旭が軽トラで持って帰って修理することになったとしても、相模湖駅

から高尾駅までは電車一本。そのまま帰った方が早いし、なにより、今日知り合ったばかりの由美に迷惑を掛けたくないという気持ちが大きいのだ。

「め・・・迷惑じゃ、ないですか・・・？」

翔子が言うと、由美は得意の（？）「ナニをバカなコトを」という顔をして、翔子の肩に抱きついた。

「気にしなくてもいいわよ？私は全然迷惑じゃないからね！」

そう言っただけで由美は翔子のほっぺたをプニプニと突いた。

「あ、じゃあ一応家の確認してみるわ！」

由美はケータイを取り出して家に電話した。

「あ、もしもお母さん？今日友達泊まるかも知れないんだけど・・・え！？タカの友達が来てる！？うん・・・うんうん・・・そこかあ・・・わかったあ」

ケータイの通話を切って、由美が残念そうに翔子を見た。

「ゴメンね・・・弟の友達が泊まってるみたいで・・・家狭いからダメみたい。圭太の家は・・・？」

ダメだったらしい。そしていきなり話を圭太に振った。

「難しいかなあ・・・お姉ちゃんがいるし・・・」

圭太が難色を示す。

「ああ、茶子姉えかあ・・・今は何にハマってるの？」

「雑誌やテレビの懸賞。はあ・・・」

圭太がため息をついた。茶子は最近、学校に行く以外ほとんど懸賞ハガキを書いている。近い将来、『リアルなすび』としてテレビにインタビューされる日も近いかもしれない。そんな勢いに、圭太は少し呆れてしまっているが、茶子の意味不明な行動は昔からで慣れているし、またすぐに飽きるだろうと思っている。

「じゃあ・・・ダメだったら旭さん家に泊めてもらおう！もちろん、私達もね！」

由美が図々しすぎる提案をする。確かに旭は1人暮らしだ。しかし、旭にももちろん用事がある。旭が由美達3人を泊めるのがOK

かは、本人が来ないかぎりわからない。

「あ、あのおく・・・すみません・・・迷惑掛けてしまつて・・・」

自分のコトなのに、すっかり置いてけぼりにされていた翔子がポツリと口を開いた。

先のコトは先になつてみなければわからない。そんなわけで3人は雑談に華を咲かせることにした。

「じゃあ、由美ちゃんと圭太君は幼なじみなんですね？」

翔子が心底羨ましいといった顔で圭太を見る。それはもう、欲しいおもちゃを友達が持っているのを見る子供のような目だ。

「ええ、圭太が幼稚園の時から付き合ひよ！それから小学校も中学校も、高校までずっと一緒なのよ！」

由美が胸を張つて言う。そんな由美を見て、翔子は「いいなあ・・・」と呟いた。

「私、小学校の時に横浜から高尾に来たから・・・幼なじみや友達はいみんな横浜にいるんです・・・いいなあ・・・」

翔子が昔を思い出すように遠くを見る。昔遊んだ友達達は今なにをしているのだろうか・・・？そんなことを考えていた。

「じゃあ、今度横浜までツーリング行こうよ！国道から行けばすぐに着く距離だし！」

圭太の提案に、由美と翔子は首を縦に振った。今まで山の方に行か行っていないなかったこともあり、3人は翔子のバイクが治ったら、次旭達も誘つて横浜まで行こうと約束した。

第10章 軽トラにゆられて（前書き）

久しぶりの投稿です、忙しくて遅れてしまいました汗
それではどうぞ！

第10章 軽トラにゆられて

結局、旭が相模湖に着いた頃には日もどっぴりと沈んでいた。道が混んでいたらしく、軽トラから降りてくるなり「疲れたあゝ・・・」とタバコに火を付け、とりあえず一服し始めた。

「すみません旭さん、また呼んじゃって・・・」

圭太が言うと、旭は「気にすんな」と言ったが、今朝の出来事の後にそんなコトを言われても説得力は無い。

「しっかし・・・サンゴフオアとはなあ・・・」

旭は件のバイク、CB350Fourを見てため息をついた。地面には思い切りブチまけられたガソリンのシミが、街灯の光でもわかるくらいに広がっている。これしか見ていないため、詳しくはわからないが結構重症かも知れない。

「あ、あの・・・」

旭がこれから治す、または運ぶサンゴフオアを遠目に見ていると、女の子が1人、旭に呼び掛けた。その表情はものすごく緊張している。

「す、すみません！遠くから来てもらってしまって・・・！あの、私・・・」

「話は聞いてンゼ？翔子ちゃんだべ？オレは霧島旭、夜露死苦！」

あたふたしながら言う翔子に、旭が笑いながら自己紹介した。手クシでリーゼントを整え、くわえていたショートピースを地面に捨て、足で踏み潰す。

「しっかしサンゴフオアとは良い趣味してんな！サンゴフオアに乗ってる女の子なんて間違いない世界で翔子ちゃん1人だけだぜ？」

いつも掛けているグラサン越しに笑顔で言う旭。そんな旭のビジュアルを見ている翔子の表情は未だに硬いままだ。

「す、凄い髪型ですね、初めて見ました・・・！」

翔子が、旭の特徴的なリーゼントパーマを見る。いつ見ても完璧なリーゼントである。

「ああ、おつかしいだろ？今時こんな頭なんてよ」

旭が翔子に言った。どうやら時代錯誤の意識はちゃんとあるらしい。そんな旭を見て、翔子は少しだけ、ほんの少しだけだが表情が柔らかくなった。

「旭さん！サンゴちゃん治るわよね!？」

本人より先に、由美がバイクの話をしてきた。

「なんだよ、サンゴちゃんて」

笑いながら「どれどれ・・・」とバイクを覗き込むその表情は真剣だ。

旭は、原因と思われる箇所を探っていく、ため息をついて顔を上げた。

「ガソリンコックがサビサビだあ、OFFになってなのにガソリンがダダ漏れして滲んでいやがる・・・そんでキャブレターに流れたガソリンが滲んでんのあ、中のパッキンかゴムかなんかが径年劣化でお釈迦様ってわけだ、多分」

なすすべ無しと言わんばかりに旭が言う。見れば、ガソリンコックからガソリンが滲み、OFFにしているのにガソリンを供給する通路にガソリンが流れている。そしてトドメはキャブレターのパッキン類の径年劣化によるヤレで流れてきたガソリンがダダ漏れしたという寸法だ。

旭の診断に3人は首を傾げた。3人にはまだ難しい話だったみたいだ。が、コトの重大さがということにはわかったみたいだ。つまり・・・

「じゃあ、もしかして治らないんですか？」

由美の質問に旭が立ち上がって答えた。

「いや、ここじゃなんとも言えねーな・・・。とりあえずここじゃあ治せない、今日は1日、ウチに入院だな」

旭の言葉に、翔子はガツクリと落ち込んだ。それはもう海峡より深く……

「バイク屋に出したら軽くウン万はかかるからな、ウチに持って行ってオレが治したほうがいいだろ？それか、翔子ちゃん家まで運んでそこで治すかだが……」

旭の提案に、翔子がふるふると首を横に振った。

「私の家は、その……ちょっとダメです……」

たったそれだけの言葉をやっとのことで喉から押し出した。

「じゃあサンゴーフォアはウチで治すか。いいかな？」

「多分その方がいいわよ？」

由美も続けた。確かにこのままバイク屋に持って行って高いお金を払うくらいなら、旭に預けた方がいい。もしそれで治らなければ、バイク屋に見てもらったら良い。

そう思い翔子に言うのと、翔子は申し訳なさそうな顔をして「お願い、できますか……？」と聞いた。

「任せとけて！その為にわざわざ相模から来たんだからな！」

旭が胸を張って答えた。

「旭さんはバイク乗りの味方よね！」

由美が持ち上げると、旭は少し照れながらも、バイクを軽トラの荷台に積む時に使うレーンを地面につなげ始めた。

「じゃあ、今日はどうするの？」

「今日はここから電車で帰ります……一駅だしすぐに帰れますから……」

圭太の質問に翔子は力無く答えた。

「あ、バイクが心配なら明日までには治るかしんねーぞ？キャブとコックの部品に思い当たる奴がいるからな」

旭が言うと、由美が瞳を輝かせて旭を見た。

「本当ですか!？」

「あ、ああ……つか、なんで翔子ちゃんより由美ちゃんの方が喜んでんだ？」

由美は旭にさらに詰め寄った。目が怖い。

「今日と明日、旭さんはなにか用事ありますか!？」

「あつたらこんな県境まで単車引つ張りになんて来ねーよ。あるとすれば、このサンゴーフォアの修理くらいだよ」

ここまで来るの大変だったんだぞ、と言っ旭に、由美はなにか企んだ笑顔をした。そして翔子を捕まえて目の前まで連れてきた。

「私達、今日知り合っただばかりじゃないですか!？で、互いのコトをよく知るためと、翔子ちゃん歓迎会をしたいんだけど、旭さん家に1日泊まりでやっちゃダメですか!？」

由美が言っつと、翔子が「え．．．!？でも．．．」と落ち着かない顔をしていた。

「今日初めて会っつて、いきなり壊れたこの子を治してくれるのに、私までお家にお邪魔するなんて．．．悪いですよ．．．」

翔子が気を遣ったコトを言っつ。しかし旭は笑いながら答えた。

「狭くていいなら別に構わねーよ?今日は美春もいるし、賑やかになるなあ。翔子ちゃんが大丈夫なら、オレは大歓迎だ」

旭が言いながらサンゴーフォアを荷台に押し上げた。ほとんど助走を付けず、重たいサンゴーフォアを軽々急な坂になっているレールの上を走らせる。その姿を見て、翔子はこの細い身体のどこにそんな力があるのかと考えたが、すぐに今日これからのコトを考えた。

「いや、でも．．．やっぱり悪いです．．．迷惑まで掛けているのに．．．」

本当は行きたいのだが、やはり旭の迷惑では無いかと考えてしまっいどうしても首を縦に振れない。

「遠慮ばかりしちゃダメよ?今日この後用事でもあるの?」

由美が翔子に尋ねると、翔子は首を横に振った。

「いえ、今日も明日も、何も無いですけど．．．」

「もしかして親が厳しいの?」

「いえ．．．厳しくは、ないんですけど．．．」

質問攻めされる翔子を見て、圭太が由美の肩をポンツと叩いてから言った。

「あんまりしつこく言っちゃダメだよ。翔子ちゃんに迷惑だよ？」

圭太が言っていると、由美は静かになった。

圭太は、翔子の方を見て「大丈夫？」と聞いてから話を続けた。

「ゴメンね？由美がああいう性格なのは昔からだから」

「どーという意味よ？」

翔子がジト目で圭太を見る。しかし、圭太はそれを軽やかにスルーした。長年の付き合いが成せる技である。

「とりあえず、今日来れそうならおいでよ。無理にとは言わないけど、遠慮はしなくていいからね？」

圭太が言っていると、荷台にバイクをワイヤーで固定した旭も翔子に話し掛けた。

「遠慮はいらねーぜ？バイク好きな奴なら大歓迎だからよ？」

翔子は考えた。ここまで誘ってくれているのに断るのはみんなに悪いし、自分自身もまだ由美達と話したいことも山ほどある。しばらく考えて、「大丈夫だよね・・・」と小さく呟いてから、翔子は意を決して顔を上げた。

「わかりました・・・！それでは、ご厚意に甘えて泊めさせていただきます！」

翔子の答えに、由美が「やったあ！」と大喜びした。

「じゃあ、そうと決れば出発するか。もうすぐ7時半だしな」

時計を見て旭が言っていると、3人も領いて出発の準備をし始めた。

「翔子ちゃん！私の後ろに乗って！」

由美がリアシートをポンポンと叩く。翔子が由美に近づくと、旭が割って入った。

「ダメだよ由美ちゃん、まだ免許取って1年経ってねーべ？」

旭の言葉に、由美はつまんなそうな顔をした。

「いいじゃないですかあー、旭さん固すぎですよー」

由美がいじけながら言う。確かに旭のようなマンガから飛び出て

来たみたいな不良（！？）がそんな一般人じみたコトを言えばそうも言いたくなる。

「事故つたら大変だろ？半年とか経つならいいけど、まだ一月も経ってないんだから、ダメ」

真面目な顔をして旭が言うと、由美はしぶしぶながらも納得した。やはり事故を起こした時、1人ならば自分だけが痛い目にあうだけだが、2人になれば話が違う。2人乗りのバイクは、重たい為にブレーキは効きにくくなり、曲がるのも難しくなる為、事故率が高いのだ。

「軽トラの助手席が空いてるから、こつち乗りな」

旭が言うと、翔子は旭の軽トラで向かうことにした。翔子が乗り込むと、バイクの2人はエンジンを掛けて軽トラの運転席側に走り寄る。

「どうやって行きますか？」

バイクに乗ったまま圭太が聞く。

「道わかるべ？だったら先に行つてくれや、軽トラと並んで走つたら危ねえし遅いし、使えるパーツがあるかどうか行かなきゃいけねえ場所があるだ。美春も、もう家にいるだろーからよ？」

旭が言うと、途中までは合わせて、八王子付近に入ったら旭と翔子は国道から、由美達はそのまま街道で先に旭の家に行くことにした。

2台のカワサキが先に出て、後から軽トラが後ろを走りだした。

「しつかし、この軽トラは遅いなあ・・・借り物とはいえ、もうちょい快適なのがいいよな」

旭がハンドルをトントんと叩きながら言う。4速マニュアルのボロい軽トラはもの凄く動きがダルい。坂道でエンジンが息継ぎを失ってしまうりして、前を走る2人がだんだん離れて行き、向こうがこちらに合わせて減速する。

「本当にすみません・・・私のバイクの為に・・・」

翔子が今日何度目か、数えるのも大変なくらい謝る。

「気にすんなって、こんなんしょっちゅうだぜ？」

「そうなんですか・・・？」

旭が言うと、と翔子が返した。旭は運転席側の窓を、手動のクルクルハンドルで開けてタバコに火を付けた。

「ああ、この間なんかオレのダチが単車燃やしちまってよ？わざわざ取りに行った後で燃えた単車の使えそうな部品だけ再生して、また作り直したんだ。バカだよなあ」

旭が灰を外に落としながら笑って言った。前を走る2人がまたこちらに合わせてスピードを落とす。全然関係ないが、軽トラのメーター類は、走行距離15万キロを超えているだけあって、壊れていて動いていない。警察に見つかれば間違い無く整備不良で減点だ。

「バイクに詳しいって・・・凄いですね」

翔子が言うと、旭がいよいよと手を振った。

「バイクと四輪しか詳しい物が無えからな、オレからしたら勉強出来て大学とか行ってるタメの奴らの方がスゲーと思うよ」

そう言っつて、坂道でまた息継ぎをした軽トラのエンジンに鞭を打ち、ギアを2速に落とす。

「霧島さんって、今おいくつなんですか？」

翔子が先ほどから気になっていたことを聞く。サングラスと髪型のせいでわかりにくいのだ。

「じゃあ問題。いくつに見えるよ？」

旭が逆に質問してきた。翔子は唖って考えたが、わからないし、もし全然違う年齢だったら失礼だとも思った。

「時間切れ、正解は18だ」

旭が言うと、翔子は「ええ！？」とこの日一番の驚きの声を上げた。

「じ、じゃあ霧島さんて同じ年ですか・・・？」

「いや、一個上だ」

旭が言うと、翔子はさらに驚きと尊敬の眼差しで旭を見た。

「す、凄いです！ひとつしか変わらないのに、バイクも詳しくて大人っぽくって……！」

翔子が言うと、旭が苦笑いした。

「年のわりに老けてるだけだ、うん」

「そ、そんなコト無いですよ……？凄いいコトだと思います……」

翔子がフォローを入れた。

「サンキューな。そういや……家族に連絡しなくていいの？」

これから外泊するのだから、家族に連絡するのは当然だろう。

旭はそう思い翔子に聞いて、さつきまでとは違い暗い表情でうつむいた。

「いいんです……どうせ心配なんかしていませんから……」

そう言つて、窓の外を見る翔子に、旭が「なんでよ？」と尋ねた。

「私……家族とうまくいっていないんです……」

翔子の告白に、旭が眉をひそめた。真剣な顔で翔子の話を聞く。

「なんでよ？翔子ちゃんくらい良い子なら、家族とも上手く行くだろう？なんでまた……」

旭の問い、翔子がうつむいたまま答えた。悲しそうな表情もそのままだ。

「私が中学3年の時に、お父さんが再婚したんです……」

「……」

翔子の告白に、旭ただなにも言わずにハンドルを握って走っている。それを見て、翔子は話を続けた。

「小学4年の時に、お母さんが亡くなって……。中学に入ってからお父さんが今のお母さんである人と知り合つて、しばらくして再婚したんです……」

翔子は拳をギュツと握り締めた。

旭はただ何も言わずに聞いている。真剣な顔で翔子の話を聞いた。

「それで、私には新しいお母さんとお兄さんが出来ました・・・でも、お母さんとお兄さんは、私に厳しくて・・・なにもしていないのに叩かれたり、修学旅行も行かせてもらえなかったりもしました・・・」

翔子の言葉に、旭が反応した。タバコを灰皿に押し付け、蓋を閉めてから翔子に顔を向けた。

「なるほど・・・最悪な奴と再婚しちまったわけだ、翔子ちゃんのオヤジは・・・」

旭の言葉に、翔子は何も言わなかった。しかし少し首を縦に振った。

「オヤジはなんにも言わねーのか？」

旭が肝心なところを聞いた。再婚相手の母と兄がそんな態度で娘に当たっていたら、さすがに父親もなにか対応するだろう。

「お父さんは医者で、あまり帰れないんです・・・父が帰って来ると、今度はいつもと違う優しい態度で母と兄は私に接してくるんです・・・だから、私が言っても信じてもらえないし・・・。それで母はお父さんがいない間、いつもどおり私に当たったりして・・・家事を全部私に任せて、自分はどこかに遊びに行ったり、兄には優しくして・・・家での私は奴隷みたいな物なんです・・・」

翔子が、前を走っている2人を見て言った。2人は、旭と翔子がこんな話をしているなどとは思ってもいないだろう。時折、笑顔でこちらに手を振りながら走っている。

「だから、あの人達はもう私のことなんか心配してなんか無いんです・・・」

翔子が疲れた顔をして言った。

そんな翔子を見て、旭はギアを3速に入れてアクセルを乱暴に開け、軽トラにムチを打ちながら翔子に言った。

「・・・実はウチもよ、オヤジが再婚したんだ」

「・・・!？」

旭の言葉に、翔子は声にならないくらい驚いた。旭は、どこか遠

くを見ながら続けた。

「オレが生まれた時、おふくろはオレを生んですぐに死んじまつてよ……？それまでオレはオヤジに育てられてきたんだが……」
タバコを取出し、右耳に挟んで、旭は前に行く2台を見ながら言った。

「小6ん時によお、オヤジが再婚したんだ……相手は若くって優しそうな人で、オレと5つも年下の女の子も一緒だった。で、再婚するんだが、オレは母親とか兄妹って物を知らない。どうやって接したら良いのかわからず、全然マトモに話さなかった。で、結局家族に慣れないまま、オレはとうとう2ヶ月前に1人暮らしを始めたんだ」

旭は言いながらタバコに火を付けた。紫煙が窓の外に流れていく。

「ま、1人暮らしした理由はただ単に、オレが自立したかっただけなんだけどな……？」

旭が言うと、今まで聞いていた翔子が口を開いた。

「凄いですね……私はお母さんに甘えて育っていたから、お母さんがいないっていうのを受け入れるのに時間が掛かりました……」

うつむく翔子を見て、旭が肺に煙を吸い込んで、ふうーっと吐いた。煙はワツカの形をしていたが、やがてその形を崩しながら窓の外に流れていった。

「ま、翔子ちゃんの方が大変だけどな……？」

そう言っつて、旭は軽トラを走らせながら翔子を見た。元気の無い表情が見ていて辛かった。

「よし！じゃあ今日は嫌なこと忘れて、楽しくやろうや！あと、もし翔子ちゃんの親が、今日の無断外泊でなんかフザけたこと抜かしたら、オレに言えよ？オレ達が一緒に家まで行ってやるからよ？」

「は……はい、ありがとうございます……！」

少し笑みを浮かべてお礼を言う翔子を見て、旭が最後に質問した。

「じゃあ・・・もう聞くまでもないかもしれないけど、後ろのサンゴーフォアは・・・？」

「私のサンゴーフォアは、亡くなった、私の本当のお母さんが昔乗っていた物で、もらってからずっと大事にしているんです」

翔子は後ろの四角い小さな窓から、愛車であり母が残してくれた友達を見つめた。ヘッドライトを見ると、「今はちよつと具合が悪くても、またすぐにみんなと走りたい！」と、サンゴーフォアが訴えているかのようだ。

「任せときな、フォアはオレがバキバキに治してやるかんよ？」

旭は前を走る2台にクラクションを鳴らしながら言った。その言葉に、翔子も笑みを浮かべた。

それから半時間くらい走り、八王子付近に差し掛かる。由美達はここからは別行動なので途中でクラクションを鳴らして一時的な別れの挨拶をした。

国道方面に走り行く軽トラを見届けた後、由美と圭太も街道に向かって走りだした。

2台のバイクは、途中で午前中にも立ち寄ったガソリンスタンドで給油し、再び走り始める。途中、何台かのライダーとすれ違ったりやはり2人の愛車は注目された。

「注目されるのも、やっぱり悪く無いわね！」

翔子が、直管にした集合ショート管から吐き出される爆音にも負けないくらいの大声で叫ぶ。ちなみに交番付近に差し掛かると、スロットルを絞り、ギアを上げて音を立てないようにして走るのがすこし笑えた。

「そうかな・・・？僕は、あまり注目されたくないんだよね・・・」

やっぱり僕にこのバイクは不釣り合いなのかも」

圭太が走りながら言うと、翔子がハンドルから右手を放してあちやー、と顔に当てた。

「もう・・・！圭太も翔子ちゃんもやっぱり消極的ね！」

由美が、スピードを落として圭太に並ぶ。ちなみに並走は、警察に見つかれば車種によっては共同危険行為に見なされてキップを切られることもザラじゃない。

「私は、FXが似合うのは圭太しかいないって思ってるし、サンゴちゃんが似合うのも翔子ちゃんしかいないと思ってるんだから、もっと胸を張りなさい！」

励ますと言うか、煽てるように言う由美の言葉に「それは僕以外にFXに乗っている人を知らないからだよ」と言いたかったが、圭太は少し嬉しくなり首を縦に振った。

第11章 アルコール！？

一方、旭達は目的の場所である「羽黒自動車」に来ていた。なぜバイク屋では無く車屋に来たかと言つと、理由はひどく簡単。この息子が旭の同い年で友達、つまりバイク仲間なのだ。

「おー、旭じゃんか。どーした？」

その「羽黒自動車」の跡取りである羽黒洋介が、ジャッキアップされた客の車であるGX81MARK?の下から台車を使って顔を出した。短髪で背はあまり大きくは無いが、ガタイはいい。目がめちゃくちゃ細かいこともあって、よく必要以上に恐がられるのが本人の悩みでもある。

「おう、ちょい頼みがあつてよお」

旭は言いながら、少し下がった所に立っている翔子と、入り口に停めた軽トラの荷台を指差した。

「このコの単車なんだけどよ？キャブとガソリンコックがちつとイカれちまつてよ、ヨンフォア用の部品ストックであつたら安く譲つてほしいんだ」

洋介は旭の話の聞いて、翔子を見た。

翔子は少しおどおどとした感じで洋介を見ていたが、洋介の視線はすぐに後ろのサンゴーフォアに移った。

「このコがサンゴーフォア？すげーな、おい」

「だべ？オレも驚いたよ」

洋介の感想に、旭も同意した。

「全く、お前が前に言つてたゼファー改FXのコといい、美春ちゃんといい、最近の女つてのは渋い趣味してんな」

そう言いながら、洋介はガレージの奥の方にある棚から、大きな段ボールを引っ張り出した。

「ヨンフォア用のキャブと予備で持つてたガソリンコック、タダであげるよ」

翔子に笑いながら言つと、「タダ!? オットナア〜!」と旭がちよっかいを出した。

「え……!? 悪いです……! 私……!」

翔子が両手を振りながら言つが、洋介はそれを無視して翔子に言った。

「キャブはこないだまでオレのフォアに付いてたヤツで、サンゴーフォア用に加工してセッティングすれば調子良く動く。コックは予備に2つも持ってたから、別にいいよ」

洋介が笑いながら段ボールからキャブレターとガソリンコックを取り出した。中には他にもいろいろな部品が転がっているが、詳しくはわからない。

「でも……」

「オレのフォア用ストックパーツはフレーム含めて外装も2セット持つてるから、それだけでヨンフォア1台組める以上のパーツがあるから、これくらい痛くもなんともねーよ」

そう言つて翔子に目を向けた。細い目がやはり少し怖い。

「それに、サンゴーフォアなんて激シブな単車に乗ってる、かわいい女の子から金なんて取れねーよ。どーしても言うなら今夜オレと……つて痛っ!!」

「どさくさに紛れてナンパしてんじゃねーよ」

洋介を旭が一発ゴチつと殴った。

「あ、あの……! 本当にいいんですか……!?!」

今までおろおろするだけで精一杯だった翔子が洋介に確認を取つた。

「いって別に、心配しなくてオーケー」

手をブンブン振つて洋介が答えた。基調なパーツをタダであげるのに、全くもつて余裕だ。

なぜこんなに余裕なのか。それは洋介がヨンフォアに乗っているのは当たり前として、彼はヨンフォアマニアで、スペア部品はおろか、パーツ取り車も持っているほどなのだ。それだけのパーツがあ

れば、確かにキャブレターとガソリンコックくらい、なんでもないのでかもしれない。

「ほ、本当にありがとうございます……！」

ペコリと90度以上お辞儀して、翔子は洋介にお礼を言った。

受け取ったパーツを荷台に載せ、洋介の家を後にする。

「じゃあ、そろそろ行くわ。また一緒に走ろうぜ？」

「おう、オレのフォア、CRキャブに換えたからセッティング出したら、また走りに行こうや」

そう言っただけで旭と洋介は互いに拳を当てる。もう長いことやっている仲間達との別れの挨拶だ。

「本当にありがとうございます……！」

助手席から頭を下げる翔子に、洋介は手を振って返した。

2人が去った後、洋介はガレージの奥にカバーを掛けて置いてある愛車、CB400FOURに手を掛けた。

「CRキャブ、セッティング出さねーとな……？」

そう言ったが、今は取り敢えず客の車を治すのが先である。踵を返して洋介はまた車の下に潜り込んだ。

旭達がやっとアパートに着いた時には、時間はすでに10時を超えていた。2人はバイクを荷台から下ろした後、防犯のために鍵を付けてから部屋に入った。

「おう、帰ったぞ」

旭がまず入って、後から翔子が「お邪魔します……」と言って後から続く。

部屋にはすでに由美と圭太、美春がいた。

「旭さん、部品ありましたか？」

圭太が聞くと、由美と美春も旭を見た。

「おう、あつたぜ？しかもタダだったしな」

そう言つて、麻袋の中からキャブレターを取り出す。3人は「よかつたあ」と言いながらよろこんだ。

「あなたが翔子ちゃん？はじめまして、真田美春よ！あつくんの彼女だから、よろしくね」

そう言つて翔子の手を握つてブンブン振り回した。

「あ……どうも……」

お互い自己紹介が終わり、一段落付いた頃に、美春があらかじめ作つておいた特製カレーを人数分に渡して、遅めの夕食を取つた。ちなみに旭と美春はカレーを3回もおかわりした。本人達いわく「カレーは別腹」らしい。さらに2人はおやつにカレーパンまで食べていた。

「あゝ、もう入らないよ……」

「わ……私も……」

「……」

圭太と由美、翔子はおかわりこそしなかったが、あらかじめ大量に盛られたカレーを全部食べきつたので、満腹を通り越していた。

「はあ……で、これからなにかするの？」

圭太が苦しそうにお腹を押さえながら由美に尋ねると、由美もまた苦しそうにして翔子に目を向けた。

「そういえば……翔子ちゃん、なにかやりたいこととかある？」

自分から誘つておいて、実は全然なにをするかなんて決めていないあたり、相変わらず行き当たりばつたりな性格の由美を見て、圭太が呆れた。

「私は……みんなとお話出来れば、お話したいです」

翔子が控えめに言つた、

「じゃあそうと決めばお話タイム！！お題は？」

美春が元気良くみんなに聞くと、由美が「はいはい！！」と手を上げた。

「はい、では由美ちゃん！」

美春が先生みたいにして由美に発言を許した。

「みんなのバイク自慢にしましょう!!」

「んっ・・・私、それは最近どこかでやった気がするよ?」

美春が意味深なコトを言うと、由美も「え? そうだっけ・・・?」
と言って着席した。

「おい、なんでもいーけど、オレはこれからサンゴーフオアのキャブレターとかいろいろやらなきゃならねーんだぞ?」

「いいじゃないですか、今日はせっかくお泊りなんですから!!」

由美が相変わらずなことを言う。

「取り敢えずいろいろ話しましょうよ、泊まりなんですから」

圭太が言うと、由美、翔子、美春の3人は「賛成!」と一致した。

「しゃーねーなー・・・まあ、あんまり時間食うわけでもねーから
いいか・・・」

こうして、『第1回旭さん家で翔子ちゃんお泊まり歓迎会!』が
開催された。(命名、由美)

「へえっ、じゃあ翔子ちゃんて将来写真家になりたいんだ」

美春がオレンジジュースを飲みながら翔子に聞いた。

「はい。私、バイクとか自然の風景を撮るのが好きで・・・将来は
バイク雑誌のカメラマンとか、やってみたいなあって・・・」

同じく、ちびちびとオレンジジュースを飲みながら翔子が将来の
希望を答えた。

「いいわね! じゃあ、もしカメラマンになったら、私達のバイクの
写真、いっぱい撮って雑誌に紹介してね!!」

由美もおやつのおツッキーを食べながら翔子に笑顔で言った。ちな
みに、由美1人で一袋開けてしまった。

「皆さん、将来のこととか、なにか考えてますか?」

翔子が控えめながら、みんなの将来の夢を聞いた。みんな一様に考えた後、美春が手を上げた。

「整いました!!!」

落語家みたいな掛け声で美春が翔子に答えた。

「私は、将来あつくんに私の実家のラーメン屋さんを次いでもらって、それでサンパチも一緒にずっと乗り続けて、将来私達の子供に譲ってあげて家族で幸せに暮らすの!」

「キヤーっ!」とか言いながら美春が旭に抱きつくが、旭は顔を赤くしたままだ。

「美春さん家って、ラーメン屋さんなんですか?」

圭太が美春に言う。翔子はともかく、圭太と由美もそこは初耳だった。

「そうよ?あつくんも、もうウチで働いているし。ね?あつくん?」

美春が抱きつきながら旭に言う。が、旭は恥ずかしそうになっただけだ。

「じゃあ旭さん、将来お婿さんになるんですか・・・?」

圭太が聞くと、みんながそれを想像して、吹き出した。

「な、なに笑ってんだテメー等・・・!」

「だ、だって・・・!旭さんがお婿さんて・・・!」

由美が遠慮無く笑っていると、旭は恥ずかしくなって下を向いてしまった。

「じゃあ、次私ね!」

そう言ってオレンジジュースを飲み干した後、皆を見て由美が言った。

「私は、いつまでもみんなと仲良くして、いろんな所にツーリングに行くことよ!」

由美の間に、美春がニヤニヤしながら返した。

「で、将来圭太君とくっつくわけね?」

「なんで僕が由美と・・・って痛っ!」

由美が圭太を殴って黙らせた。それを見て、美春はケラケラと笑い、翔子は心の中で由美にエールを送った。

「じゃあ、話も盛り上がってきたし……！秘密兵器の登場！」

ぱんぱかぱーん　と自分で言いながら、美春が冷蔵庫からビールやチューハイ、日本酒など、アルコール類数品を取り出した。

「お、おめえ……！また酒なんか買って来やがって……！」

旭が呆れ半分で言うと、美春が「いいでしょ？」と言った。ちなみに、この部屋には二十歳以上の人間は1人もいない。

「だ、ダメですよ……！まだ未成年だし……！」

圭太が慌てて美春に言うが、美春はかまわずにビンビールの王冠を開けた。

「若者よ……時には冒険も必要なのよ……？」

コップにビールをついで、皆に回し始めた。

「私お酒ってほとんど飲んだことないのよねえ……」

「由美……！ダメだよ！」

圭太が由美に言うが由美はすでに目の前のお酒に興味深々。こうなってしまったら必ず飲んでしまうのは、誰の目にも明らかだった。

「翔子ちゃんからもなんか言っておげ……！？」　圭太が翔子に助けを求める。しかし……

「私……お酒って飲んだこと一度もないです……」

「翔子ちゃんまで……！？」

圭太は驚いた。まさか翔子までもがアルコールに興味を持つなどと、全然考えていなかったのである。

「圭太、あきらめろ……例えみんな呑まなくても美春が絶対みんなに無理矢理呑ますんだからよ……」

旭も、あきらめていた。タバコに火を点けてさらに続けた。

「美春は酒癖悪いぜ、はあ……」

「あつくんひどい」

美春がなにか抗議の声を上げているが、旭は華麗にスルーした。

「じゃあ、乾杯するわよ!!」

由美の掛け声に、圭太を含めた全員がコップを手に持ち、乾杯の準備をした。

「じゃあ、乾杯の音頭は翔子ちゃんね!」

「わ、私ですか・・・!?」

由美が言うと、翔子が驚きながら言った。

「今日はあなたの歓迎会なんだから、あなたがやらなきゃ意味無いじゃない」

あっけからんとして言う由美を見て、少し戸惑った後、諦めたように立ち上がった。

「あ・・・あの!」

翔子が皆の視線を受けながらも、立ちながら言った。

「き、今日は本当に楽しかったです・・・バイク壊れちゃったり、いろいろあつて迷惑も掛けてしまいましたけど・・・」

少し落ち込みながら言うと、由美が「頑張つて!」とエールを送る。

「でも・・・!今日は今までで一番楽しかった1日でした、ありがとうございました!」

ここまで言って、周りからは拍手が起こった。

「そ、それでは・・・か、乾杯・・・!」

『かんぱーい!!!!!!』

皆が翔子に続いた。

30分後・・・

「あつくくん 好きい」

美春が酔っ払って旭に抱きつく。しかし旭はそれを華麗にスルーした。ちなみに旭のコップの中身は全然減っていない。

「旭さん！全然減ってないじゃないですかあ！！」

由美が言つと、旭が言つた。

「べ、別にいいじゃねーか・・・」

「もしかして、お酒弱いんですか・・・？」

圭太が聞くと、確かに全然呑んでいないのに、旭の顔は真っ赤っかになっている。どうやらそうとう弱いらしい。

「そうなの。あつくんたら強そうに見えてお酒はダメダメなの」

美春がふにやふにやになりながら言う。

「旭さん、お酒はダメなんだあ・・・ふーん・・・」

由美も圭太も不思議そうにだが、納得した。

しかし・・・

「旭しゃん・・・！飲みが足りないでしゅ・・・！もっと飲むでしゅ！！」

そう言つて、旭の口に中ビンのビールを口に突っ込んでぐびぐび飲ませたのは、なんとびっくり、あの翔子である。宴会が始まり、数分のうちに翔子はたちまちこんなグダグタになっていた。以外すぎる展開に、最初は皆が驚いたが、「まあ、お酒だし、酔っ払ったらしようがないね」とみんな思っていた。

そんな感じで油断していた所に、翔子のいきなりの攻撃だ。喧嘩では無敵の浮沈艦である旭も奇襲攻撃とばかりに酒をグイグイ飲まされたらひとたまりもない。

「ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、ぶはあ・・・」

旭は半分ほどビールを飲まされたとたん・・・

「ふにや」

旭は、その風体に似合わぬ擬音を発してぶっ倒れた。掛けていたサングラスが外れ、その顔を見れば、目がぐるぐると渦を巻いてい

た。

「あれえ・・・、旭しゃんて、以外と顔かわいいんですかあ・・・？」

翔子が酔っ払って言うと、由美と美春がばか笑いしていて、圭太が1人あわてていた。

「あつくんにこんなに飲ませたら、そりゃぐぶっ倒れちゃうわよ〜」

「旭さん、ふにゃ、だって！かわいい！！」

ダメだ、全員酔っ払ってる・・・！

1人危機感を抱きながら旭を介抱しようとしたが、圭太もその数秒後、翔子の餌食になったのは言うまでもない。

さらに30分後

「美春ちゃ〜ん・・・圭太が私に振り向いてくれるにはどうすればいいの〜？」

ぐっ倒れている旭と圭太を尻目に、由美が美春に聞いた。美春はチューハイを飲みながら由美の方を見た。

「簡単よ〜 好きて言うっちゃえば良いのよ〜、ふふふ」

なんかおかしな目をしながら、美春が言った。
「それが出来たら苦労しにゃいの・・・」

由美が鬼殺しをオレンジジュースで割るといふ荒技をしながら美春に言う。ちなみに、3人ともすでにグダグタである。

「私だって・・・あつくんが夜とか襲ってくれないかりゃ、欲求不満なのよ？私浮気しちゃうわよ！？」

美春が死んでる旭を蹴ながら、なにやら危ない発言をする。いつもの彼女らしからぬ行動だがしかし、旭は当分起き上がることはなさそうだ。

「え？旭さんて、そーいうことあまりしにやいんですか？」

少しおかしな呂律で由美が聞くと、「そーなのよー！」と美春が言う。一方・・・

「美春しゃん、由美しゃん・・・！もつと飲むですう・・・！！」

翔子が鬼殺しをストレートで飲みながら2人に言う。顔はすでに真っ赤で、呂律も回らなければ表情もなんか危ない。

「あ・・・翔子ちゃん・・・そろそろ止めたほうが・・・」

人のコトを言えるような状態では無いが、他の2人より少しだけマトモな美春が言う。

「ひつく・・・！彼氏がいるだけで十分じゃないですかあゝ！欲求不満なんて、このエロ女めえ・・・！」しかし、翔子は止まるどころか、鬼殺しを一気に煽った後、またコップに継ぎ足した。ちなみにテーブルにこぼれまくっている。

「由美しゃんも・・・！好きな人がいるだけでいいにやらいー！」

「翔子ちゃん、あの・・・落ち着いてね？」

美春がなんとか宥めるが、今度は由美が立ち上がった。

「にやによゝ、好きでも気持ち伝わらない私のきもひがわかりゆの！？」

「あの、ね・・・？」

「好きならけいいにやらいれすか！私なんか、充実してりゆのはやしやいだけでしゅよー！！」

「あ・・・」

「シューパー野菜人にやんかに、私のきもひなんへわからにやいわよー！」

美春の血管が、ぶちっと

音をたててキレた。

「2人とも!!!落ち着きなしゃい!!!」

ばんっ、とテーブルを打っ叩いて美春が叫ぶ。しかし、美春を含め理性のある人間など、もはやとつくにこの部屋の中にはいない。3人は結局、ますますグダグタになっていった。

「だいたい、美春ちゃんはずりゆい!!!」

突然、由美が美春を指差した。

「ここにゃおつきい胸で旭しゃんをゆるーわくして、このお!!」

由美は後ろから美春の胸を鷲掴みにした。

「あ・・・!やめてよお・・・あっ!!」

「あり〜?ここがいいの?ここかにゃ?もみもみ」

「ら、らめらつてえ・・・先っぽはあ・・・!」

由美の危ない攻撃に、危ない声を上げる美春。ちなみに、その表情は口からヨダレを垂らしながら若干白目を剥いている。

「・・・!!!」

美春はそのままパタリと倒れた。

「ここよ変態めえ・・・!飲めえ!!!」

今度は翔子が叫びながら由美の口に、ビールビンを突っ込んだ。

「おぶっ・・・うぐっ・・・!ぶはあ、この・・・!」

無理矢理飲まされながら、由美も翔子の口にビールビンを突っ込んだ。

「うぐっ・・・しぎゅっ、ぶえっ・・・!」

「ぐびっ・・・おぶっ・・・うっ・・・!」

しぎゅっ、しぎゅっ、しぎゅっ、しぎゅっ・・・

「「ぶはあ・・・!!!!!!」」

バタンっ・・・!!!

結局、2人でビンビールを全て飲み干し、そのままぶっ倒れてしまった。

部屋の中には、5人の屍が横たわり、辺りはこぼれた酒の匂いと散らばったおつまみが散乱していた。

第12章 それぞれの朝（前書き）

お久しぶりです汗

時間が無くて更新が遅れております泣

ところで、こんな駄文にこんなジャンル。

需要はあるのか！？あるわけねーべー！ 旭風

でも、性懲りもなくこれからも書いていこうと思います

第12章 それぞれの朝

早朝5時半、最初に目を覚ましたのは、一番初めにぶつ倒れた旭だった。

「・・・」

軽い頭痛を押さえながら、昨夜の出来事を思い出す。部屋を見渡し、こぼれた酒や物の散らかりようを見てため息をつき、とりあえず美春と翔子は後でお説教することが即決定された。起き上がり、まだまだ眠りから覚めそうに無い皆を踏み潰さないように洗面所へ行く。

『ぐいゃ』

「？」

なにかを踏み潰したらしく足を退かすと、そこには苦しそうな顔をした圭太がうなされながらぶつ倒れていた。

旭は、とりあえず洗面所にたどり着き顔を洗い、歯を磨き、アパートの共同風呂に行くため、タオルと石鹸を持って部屋を静かに出た。今どき珍しい木造のアパートの通路を一番奥に進むと、まだ早朝ということもあって、お湯は張ってあるが沸いていない風呂場に着いた

。とりあえず沸かしながら頭を石鹸シャンプーの順番で洗う。リゼントのセットに使っている『ヤナギヤポマード』は油性なので最初に石鹸で洗わないと落ちないのだ。

とりあえずお湯も沸き、湯船に入り、ふうっと一息。今日は翔子がうちに来た本来の目的であるサンゴフオアの修理をしなければならぬ。

風呂から上がり、服を着る。上は黒いTシャツ、下は黒いニツカという出で立ちで、ドライヤーで頭を乾かす。パーマがかかっ

るため、何もしなくてもリゼントが出来上がる。パーマのかかっていないサイドや後ろは匂いのしない水性ポマードで押さえた。

外に出て思い切り伸びをした後、玄関に置いてある工具箱を引っ掴んで、サンゴーフォアのもとに歩いていく。

とりあえず、タンクからガソリンコックと、キャブレターを取り外すのにタンクを外す必要がある。

タンクの中のガソリンは、昨日の時点で相模湖の駐車場でお漏らししている為あまり入っていないが、ポンプで吸い取りながら空のポリタンクに移していく。

抜けたらシートを外して、タンクを止めているボルトを外す。したら、傷つけないよう、慎重にタンクを持ち上げる。

パラリ・・・

「!?!」

タンクを持ち上げた時、なにかが落ちた音がした。が、その音はバイクなどの部品である鉄ではなく、なにか軽い物のような音をたてた。

不思議に思つてタンクを一旦地面に敷いた新聞紙の上に静かに置いた後、地面を見てみると、薄汚れた小さな茶封筒が落つちていた。

タンクとフレームの間に挟まれていた為、ものすごく折れ曲がった茶封筒は、長い間そこにあつたらしく、所々に油滲みがある。

旭はそれを拾う。中でカサカサと音がするので、手紙自体はどうやらビニール袋に入っているらしい。裏を見ると、『翔子へ』と書いてあり、下の方には『衣笠佳代』とある。おそらく、今は亡き翔

子の本当の母親の名前である。

一瞬、開けて中身の手紙を見てみようと思つて封を切るうとして、止めた。人の手紙を見るのは趣味じゃあない。

旭は茶封筒をそのまま胸のポケットにしまった。後でお説教したら渡そうと思つた。

「とりあえず、コックからいくかあ」

旭は1人作業に入った・・・

「・・・朝かあ・・・」

旭が作業に入つて1時間くらいたつた朝7時半。圭太が目覚ました。うつ伏せのまま起き上がるうとして腕に力を入れるが、身体が重い。それは、体調が悪いとかダルいとか面倒くさいとかでは無く、物理的に重いのだ。

「あれ・・・なんか上に・・・？」

なんとか起き上がると、上に乗っていたものが『ドスン』と音を立てて落ちた。どうやら由美の足が圭太の背中に乗っていたらしい。大きないびきを掻きながら、由美が寝ていた。

「まだみんな寝てる・・・？」

圭太があたりを見回すと、同じくぶつ倒れている翔子が静かな寝息を立て、奥の方で寝ている美春が「あつくくん・・・すきい・・・」とか言いながら寝ている。

「旭さんがいないなあ・・・」

とりあえず立ち上がり、軽く背伸びをしてから圭太は玄関に向かう。

ドアを開けて外に出るとそこには、旭がサンゴーフォアのタンクに、もらったヨンフォア用のガソリンコックを付けようと格闘していた。

「おはようございます」

「おお、圭太か」

旭は、圭太をチラッと見て挨拶をした後、またすぐに作業に戻ってしまっただ。

「難航してるんですか？」

圭太が上から覗き込みながら聞いた。旭が小さいスパナを使いながらナットを締めて、ちゃんと装着出来たかを確認しながら答えた。

「おう・・・やっぱしポン付けとはいかなかったわ。なんとかコック側を加工してくっつけた」

ひっくり返されたタンクの裏を興味ありげに見ている圭太に旭が言う。

「とりあえずコックはOK。次はキャブだな」

そうして、タンクを隅の何も無いところに置いた。作業中、何かあつて塗装がハゲたりタンクが凹まないようにする為だ。

純正エアクリーナーボックスを外す為に、サイドカバーを開けると、なにか小さな黒い箱が鎮座していた。

「なんでこんなモン・・・？」

「どうしたんですか？」

何かを疑問に思っている旭に、圭太が訪ねる。素人目には全くわからないが、旭には何か気になる代物らしい。

「GPSだ」

「え・・・？」

「盗難防止に、シート下やサイドカバー下なんかにつけるモンなんだが・・・翔子ちゃん、よくこれ付けれたなあ」

そう言つて手に取つたのは、GPS発信機だった。判りやすく言えば、『ココセコム』と似たような物で、盗難されたりしても、GPSが発する電波で、『今それがどこにあるのか』が分かるのだ。

「お母さんからもらつたつて言つてましたから・・・よほど大事な

「んですね」

圭太が呑気に言うが、旭には引つ掛かることがある。

この『ココセコム』など、いわゆる『盗難保険』みたいな物で、月々利用料がかかるのだ。昨日軽トラの中で話を聞いた限り、家族との関係が良好では無く、バイトもしていない一介の女子高生の翔子が、GPSを付けれる余裕が果たしてあるのか・・・

それに、箱には『GPS』と書かれたラベルが貼つてあるものの、メーカーや貸出会社の名前は1つも書いていないのだ。

しばらく考えていたが答えは出てこず、とりあえず今は目の前のキャブレターの交換をすることにした。

「まあ、いいか・・・とりあえず作業に入ろう」

「僕も手伝います」

「マジか？サンキュー。まあ、交換だけだからあまり時間はかからねーし、勉強ついでにやってみつか？」

そうして2人は作業に取り掛かる。旭の指示にしたがいながら、圭太も手伝う。なれない手つきだが、旭のわかりやすい説明を受けながらなんとかこなしていく。2人は真剣な表情でバイクに向かった。

「ふに〜・・・」

朝8時頃、窓から漏れる日の光を感じながら美春が目を覚ました。しばらく布団の上で頭痛のする頭を出来るだけ回転させながら昨夜のことを思い出していたが、自分がお酒を飲もうと言い出したあたりまでは覚えているが、そこから先は全く覚えていない。辺りを見回すと、旭の姿が無い。

「あれ・・・？あつくんは・・・？」

寝呆けた頭で昨日のことを頑張つて思い出すがまるで思い出せない。そこで、参考資料として以前酒を呑んだときはどうなったのかを思い出すことにした。

「確か前は……」

思い出す過去の出来事。酔っ払った勢いで旭の頭をわしわし撫でたり旭の頭にビールをかけたたり旭の膝枕の上で嘔吐したり……前の自分の失態を思い出し、もし今回もそんなことをしてしまっていたら……

美春は恐怖と悲しさでガクガクと震えた。脳内妄想は嫌な方向へどんどんフル加速していく。

『オレ、お前みたいな酒に溺れた女、デエーツキレーだから!』

と言つて、自分に背を向けて部屋から出ていく旭の姿を想像して美春は泣きそうな顔で布団から飛び出した。

「あつくん! !ごめんなさいですからどこにも行かないでえ! !」

玄関を飛び出して、いきなり叫ぶ。朝から近所迷惑で誤解を生むような発言をした美春を、2発目のキャブレターの調整をしていた旭と圭太が不思議そうに見つめる。

「なにしてんだ? オメつてよお?」

「美春さん、おはようございます」

2人がバイクをイジッている光景を見て、美春は「へ?」とアホな子みたいな顔で立ち尽くし、その後すぐに安堵の顔になって「よ、よかつたあ……」と言いながらへなへなと崩れた。

「朝から近所迷惑な悲鳴上げんなよ、タダでさえ単車がウルセエんだかんよ?」

言いながらまたキャブレターに向き直ろうとしたが、「あ……そーいやあ」と旭は顔を上げた。

「ところで美春う……オメ、昨日はよくもみんなに酒なんか飲ませやがつてえ……!」

「ギクツ……!」

旭が立ち上がり、美春に向かって歩きだす。サングラスをしてい

ない為、その怒った表情が逆に怖い。美春は身の危険を感じ、少し後退りした。

「ご……ごめんなさい！」

即座に土下座モードに入る美春。しかし、旭は容赦無く美春の前に立ちはだかった。

「オメー、すーぐ酔っ払ってダメになるんだから酒なんか呑むな！大体、由美ちゃんとか翔子ちゃんなんか昨日酷かったんだぞ！？未成年なんだから呑むな！呑ますな！」

「あつくんだって未成年なのにタバコ吸ってるじゃ……」

「みいゝはゝるうゝ……！？」

「ごごご、ごめんなさいです！！！」

自分のコトは棚に上げて怒る旭に美春が不満を言うが、旭の怖い顔に美春は黙ってしまった。

それから延々、旭はキャブレターを治しながら美春に説教をするコトになった。

「むにゃ……？圭太……？」

それから33分後、由美が起きた。

辺りを見回すと、自分の部屋では無いコトはなんとか理解した。

「ごごご……？」

だんだん頭を覚醒させながら、由美はここが旭の家で、昨日は泊まりで皆で酒を飲んだコトを10分位かけて思い出した。最後は翔子と2人で酒を無理やり飲ませ合い、ぶっ倒れたのはさらに10分かけて思い出した。

「翔子ちゃんにお酒は禁物ね……」

自分が言えたコトでは無いが、由美はそう思った。もう二度と飲

まない。いや、それはさすがにアレだから、「成人するまで禁酒」を心の中で誓った。

「あゝ・・・圭太達がない・・・？」

周りを見て圭太達がないのを確認して、由美は少し考えてから、昨日翔子が旭の家に来た目的を思い出した。今ごろ、外でサンゴーフォアを治しているんだろう。

「あ・・・旭さんの声が聞こえる・・・」

玄関の外から、旭の声が少しだが聞こえる。内容はわからないが、旭の声しか聞こえない。

「独り言かしら？」

少し外が気になるが、今はとりあえずまだ寝ている翔子を起こそう。そう思い由美は翔子を探す。

翔子はこたつ机の横に小さくうずくまりながら寝ている。気持ち良さそうに寝ている翔子の寝顔を見て、悪いと思いながらも由美は翔子の肩を揺すった。

「翔子ちゃん、朝よ？」

2、3度揺するが、全く起きる気配は無い。寝言で「帰ります・・・」とか言っている。

由美は、その意味不明な寝言を聞いて笑ってしまった。

「まあ、昨日あれだけ飲んだら、疲れちゃうわよね・・・？」

翔子の幸せそうな寝顔を見て由美は近くにあった毛布を翔子に掛けた。翔子から聞いた友達関係の話が本当なら、こんなに楽しんだのは初めてなんじゃないかと思った。

「昨日ははしゃいだからなあ・・・」

翔子の顔を見ながら、昨日の夜のコトを思い出す。

興味本位で酒を飲んで、酔っ払って、拳げ句の果てには美春と翔子の3人が最後まで残って、自分の圭太に対する想いを話し、美春をイジメ、最後は翔子と酒飲み合戦になり・・・

「・・・！！！」

ここまで思い出して、由美は急に顔が自分でもわかるくらいに真

っ赤になった。いくら酔っ払ってたと言っても、自分は2人に自らの圭太に抱く想いを告白してしまったのだ。急に恥ずかしくなり、由美はその場で頭から湯気を上げながらぶっ倒れた。そして、翔子と変な言い争いになり、自分が美春に恥ずかしいコトをしてしまったのも思い出し、さらに湯気が立ち上る。

「ど・・・どーしよー・・・」

もしあの出来事を2人が覚えていたら・・・

『由美ちゃん、昨日は凄い告白してたよねえ』

『私も驚きました。圭太さんに報告しなくちゃいけませんよね？』

2人がそんなコトを言い合っている所を想像して、由美は立ち上がり玄関に向かった。もし美春があのコトを覚えていたら、後頭部下に手刀を入れて記憶を無くしてもらわなくてはならない。

靴を履いてドアノブを捻り外に出ると、そこにはしゃがみながらキャブレターを治している旭と圭太、そこから少し離れた所で美春が土下座していると言う奇妙な光景が広がっている。

「あ、おはよう」

「ど、どうしたの・・・？」

圭太の困った顔を見ながら由美も困惑した。だってそうだろう。玄関から外に出たらいきなり美春が土下座して泣いてて、旭はキャブレターを治しながらぶつぶつ小言を言ってるし。

「昨日みんなにお酒を勧めたコトを旭さんが怒ってるんだよ。もうずっとこんな状態だよ・・・」

圭太が呆れながら言う。

「ゆーちゃん・・・」

「ゆーちゃん？」

美春が泣きながら由美のコトを呼ぶ。呼び名が少しおかしいが、由美はなんとか突っこまないで返した。

「私・・・昨日なんかしたあ・・・？全然覚えてないよあ・・・」
えぐえぐ泣きながら美春が言う。その言葉に由美は安堵した。

「な、なんにもしてないわよ・・・！？私達、最後みんな潰れちゃ

「つたし・・・！」

「由美ちゃん、なに焦ってんよ・・・？」

旭の鋭い返しに、由美は動揺するが、圭太が止めに入った。

「旭さん、もう許して上げましょうよ。もう美春さんも反省してるし」

「そーだな、さすがに許してやるかあ」

意外とあっさり許した旭に由美と圭太は驚いた。美春は「本当！？」と言いながら顔を上げた。

「まあ今回は許してやるよ。そんなかし、またみんなに酒なんか飲ましたらダメだかな？わかった・・・」

「あつくんだいすきい！！！」

旭が全部言い終わる前に、美春は旭に飛び付いた。相変わらず旭が大好きなんだな、と2人は思った。

「いや、オメ、どけし・・・」

旭が恥ずかしがりながら言い、3分後、やっと解放された。

「けーちゃんもゆーちゃんもありがとうね！」

「なんですかそのあだ名・・・」

圭太が呆れながら言うと、美春は胸を張って答えた。

「何って、圭太君だからけーちゃん！由美ちゃんだからゆーちゃん！翔子ちゃんは、しょーちゃんだと男の子みたいだから、小さい『よ』を取ってしーちゃん！あつくんは旭だからあつくん！！！」

自信満々に言う美春を3人はしばらく見ていたが、やがて旭と圭太は作業に戻り、由美も圭太の横にしゃがみ作業を見るコトにした。

「そーいや、風呂入りたかったら入ってこいよ。奥の通路を歩いてけば風呂場があんべ？このポロアパートあ共同風呂ですよ？」

旭の言葉に、由美が「いいんですか？」と聞く。

「バスタオルは、オレの部屋に新しいヤツを美春が沢山持ってきやがったから、そこから持ってけばいいよ」

「ありがとうございます！」

「じゃあゆーちゃん、一緒に入る？」

美春が由美に言っと、由美は昨日の夜のコトを思い出して真っ赤になった。

「い、私は遠慮するわ・・・！美春ちゃん先入ってよ！！」

「どーしたのゆーちゃん？顔真っ赤あ」

「昨日布団かぶらないで寝てたかなあ、熱でもあんじゃねーか？」

美春と旭が心配そうに言うが、由美は「大丈夫です！」と言って2人を納得させた。

「じゃあ、お言葉に甘えて私が先で、その後でゆーちゃんが入って、最後はけーちゃんかしーちゃんね」

美春が1人でまとめた。部屋に戻ってタオルと歯ブラシとを持って出てきた。

「脱衣場に洗面所もあるから、そこで髪の毛乾かしたり歯磨き出来るから。あ、ドライヤーは私の使って？歯ブラシは予備のヤツ5本もあるから、後でみんなにあげるね！」

美春が早口に言っつて風呂場に走っつていった。

「じゃああと少しだし、気合い入れて治してやんべーか」

「引き続き手伝います」

「じゃあ私も！」

3人は、今は夢の中にいる翔子のサンゴーフォアに付けるヨンフォア用キャブレターに向かつて作業を開始した。

キャブレターはそんなに手間は掛からなかった。こちらは最低限の加工ですんだ。羽黒が大事にしまっていた為、キャブレター内も正常で問題はなかった。後は装着したキャブレターのセッティング出しただけだ。

「多分、スクリュウの番手やジェットなんかはこのまんまでイケると思うんだが・・・」

「スクリュウとジェットってなんですか？」

旭の独り言に、圭太が質問した。

「スクリューとジェットつてのは、簡単に言えば空気とガソリンを供給すんための穴だ。ちなみにジェットは2種類あって、スロージェットとメインジェットつてのがある」

「メインとスロー・・・？」

今度は由美が聞いた。確かにまだまだ素人の由美には難しい話かもしれない。旭は、「あー・・・」と言いながらわかりやすい説明を考える。

「エンジン掛けてアイドリングしてん時から低回転時に使うヤツがスロージェットで、メインジェットはそこから上の回転で使うんだよ」

「難しい・・・」

由美は素直に言った。頭の中で旭の言ったコトを反芻するが、全く理解出来ていないに等しい。

「それはともかくとして、とりあえずセッティング出しするべ」

旭の言葉になんとか理解はした圭太とちんぷんかんぷんな由美の2人はとりあえずここから先は手伝えるコトも無いので見守ることにした。

旭は鍵を捻ってコックをONにする。ガソリンが漏れてこないコトを確認して、キックをした。

カシャン！

カシャン！

カシャン！

カシャン！・・・バラバラバラ！！

「おお、掛かった掛かった」

旭がエンジンを掛けて、数回吹かす。シングルカムのフォア特有の音が辺りに響く。

「掛かったあ！！」

「うん」

「アイドリングが高い・・・」

3人の反応はバラバラだが、とりあえず組み付けは成功した。

「スクリュー絞るか」

タコメーターを見ると、アイドリング時の回転数は約2300と高めだ。旭はキャブレターのネジを絞めると、アイドリングの回転数が落ちていき、最終的に1500回転前後に落ち着いた。

「ガソリン漏れ無し、部品組み付け忘れ無し、ネジ緩み、締めすぎ無し、完調だな」

これで、翔子のサンゴアフォアの修理が終了した。

後は本人が目覚めるのを待つだけだ。

第13章 復活！CB350Four!! (前書き)

少し内容を改定しました汗

第13章 復活！CB350Four！！

外でサンゴーフォアが復活する少し前、その時。

「うう……」

翔子が目を覚ました。辺りには誰も居らず、周りを見回すも頭はボーンとしていて身体が働かない。

「ここは……旭さんの家で……昨日は……」

昨日のコトを思い出そうとするが、翔子は酒を飲んだということすら記憶に無い。覚えているのはその前の記憶のみで、しかも乾杯したあたりまでしか思い出せないでいた。

（私、寝ちゃったんだ……あれ？）

ようやく起き上がってコタツ机の上を見ると、そこにはカラになって転がっている缶ビールやチューハイ、日本酒などが散乱していた。翔子はなぜこんな物が転がっているかを少し考えるコトにした。

「……ダメ、思い出せない」

美春同様、酒を飲むと記憶を無くすらしい。酒を飲んだコトは愚か、酔っ払って酷い状態だったコトや旭と圭太を潰したコトやらその他もろもろ、全く思い出せない。

そんな感じでボーンしている、外から音が聞こえてきた。

カシャン！

カシャン！

カシャン！

カシャン！……バラバラバラ！

「この音……」

ハツとなつて耳を澄ます。音が高いが、間違いない。自分の愛車、CB350Fourの『音』だ。

「も、もう治って・・・!?」

急いで立ち上がり、外に駆け出そうとするが、長いコト寝ていたので立ちくらみをして、頭からコケた。痛むおでこをさすりながら立ち上がると、高かったアイドリングが下がり、いつもの音になった。

「は、早く・・・早く・・・!」

玄関で靴を履こうとするが、苦戦した。最後は踵を踏み潰して外に出た。

「あっ・・・」

そこには、太陽の眩しい輝きで周りが白くぼやけた中で、エンジンが掛かって完調のC B 3 5 0 F o u rと、その周りに3人の人影があった。

「あ、おはよう翔子ちゃん!!」

視界が慣れるのにコンマ3秒も掛からなかったが、それでも自分の中では1時間くらいにも思えた真っ白だった背景が元に戻つてくると、そこには手を振っている由美の姿を確認出来た。横には圭太と旭も立っていた。

「私達も手伝ったのよ!? 絶好調よ!!」

「やったのはほとんど旭さんだけだね」

由美と圭太の2人が言う。目の前には完調のC B 3 5 0 F o u rがアイドリングしている。

「コックの加工以外は案外ラクだったぜ。キャブレターはほぼポン付けた」

旭がアクセルを入れると、セッティングされた400用キャブレターでキャパが上がったおかげか、吹け上がりは格段に良くなったと思う。

「どう? サンゴちゃん、復活よ!!! っつて!??」

由美が翔子に言い掛けて、途中で止めてしまった。なぜなら・・・

「ひっぐ・・・っう・・・」

思い切り泣いていたからだ。

「な、泣かないでよお！！治ったんだから！！」

由美が慌てて言うのと、翔子は首を横に振って否定した。どうやら、嬉し泣きのようだ。

「す、すみません・・・ひぐっ・・・うれしくてえ・・・えぐっ・・・
・ありがとうございます・・・」

由美に抱きついて、翔子はわんわん泣いた。

「もー、そんな泣かないで？これくらい大丈夫よ、友達でしょ？」
頭を撫でながら由美が続けた。

「それにもし次、私のゼファーちゃんとか他のみんなのバイクが壊れちゃったら、その時は手伝ってね？」

「ぐすっ・・・もちろんです・・・！！・・・ふええええ！！」
「もー泣かないでよー！！」

よしよし、と翔子の頭を撫で続ける由美を見て、取り残された男2人も、一件落着とばかりに2人を見守っていた。

「ふう・・・まあこれで大丈夫だろ」

最後の最後に確認を終えた旭がポケットからショートピースを取り出す。

「あり・・・？ライターは、と・・・」

旭がライターを探していると、圭太が旭の目の前にライターを差し出した。

「落ちてましたよ？お疲れ様です」

圭太が言つて、火を点ける。

「おお、悪いなあ」

火を付けてもらい一服いれる。肺までため込んだ紫煙を吐き出す。

「しっかし、一度イジると中身も開けてえな。車体も」

そういいながらアイドリング音を聞く。やはり完調とは言っても、年式相応のガタは来ている。エンジン腰下からはクランク音が出ているし、クラッチもすり減っている。フロントフォークは柔らかかす

ぎるし、スポークホイールには錆も出ていて、メッキフロントフェンダーにも錆でメッキが浮いている。パツと音を聞いたり見ているだけでこれだ。詳しく見ればもつと改善点が出てくるだろう。しかし、この時代のバイクはもうほとんど純正部品が廃盤になっている。年間販売台数が約1万台弱しか売れていなかった、いわゆる不人気車種だったサンゴフオアは尚更部品が無い。

「まあ、部品出てきたらコツコツやるかぁ・・・ヨンフオアの部品も流用して」

旭が先のコトを考える。仲間のバイクを一度治しただけで終わらず、見れるところまでは最後まで面倒を見るのが彼の良い所である。

「でも、旭さんって本当になんでも出来るんですね」

圭太が感心して言う。

「ばぁーか、これしか出来ないんだよ。オレはバカだかんよ？単車とかしか治せないんだよ。大学とか行ってるヤツの方が、世間の役にイヤって程たてるぜ？単車は世間一般人からしたら嫌われモンだかな」

「そんなこと無いですよ。バイク治したりするコトが出来ると、十分世間に役立ってます。それに、世間なんか関係無いですよ」

圭太が自信満々に言う。

「サンキューな」

旭は少しうれしそうな顔をしてそっぽを向いた。

「みんな〜！お風呂出たよ〜！！」

丁度、美春が風呂から出たらしい。頭に乗せたタオルで隠れているショートカットの髪はまだ少し濡れている。

「朝風呂っていいねえ・・・！」

爺臭い（婆臭い？）ことを言いながら美春が皆の前に立ち止まる。

「ゆーちゃん、お風呂入ってきなよ！後が突つかかっているよ。次はしーちゃんとけーちゃんなんだからあ」

美春に言われて、由美は泣き止んだ翔子から離れて、「じゃあ、少し入ってくるわね！」と言って去っていった。

「とりあえず、後でサンゴーフォアのガソリン買いに行かなきゃなあ。昨日ほとんど相模湖に置いてきちまったからな」

「す、すみません・・・」

翔子が謝るが、旭は気にせずに「部屋に戻るか」と言うと、皆で部屋に戻った。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

部屋に戻った圭太、旭、美春、そして翔子の4人は一様に言葉を無くした。辺りには昨夜の残骸が生々しく散乱していて、部屋中酒臭い。

旭はこめかみに血管を浮かせながら、昨日の原因である美春と翔子に向き直った。

「あ、あつくん、怖い・・・」

「・・・？」

記憶は無いが、朝から説教された美春と、記憶の無い翔子の反応と、散らかった部屋を見て、旭の怒りがまた爆発した。

「2人とも！！そこに正座しろ！！」

「は・・・はいい！！！！！！」

かくして、また説教が始まった。横で、圭太がまたため息をついた。

「ただいまあゝ！！・・・って、あれ？」

30分後、由美が風呂から出てきた。髪の毛をタオルでゴシゴシ拭きながら部屋に入ると、旭がガミガミ怒ってて、美春と翔子が正座して下を向いて反省していた。

「・・・どーしたの？」

「部屋に戻ってきたらこの有様だから、旭さんがまた怒ってて・・・」

「見ればわかるわよ・・・美春ちゃん、2回目じゃない・・・」

由美が呆れながら言う。

「ハイハイ、旭さん！もう許してあげましょうよ？」

由美が説得すると、旭は最初と同じく、結構簡単に許した。

「じゃあ、みんな風呂入ったら片付けるぞ」

旭が言うのと、美春と翔子は物凄い早さで首を縦にコクコク振った。

「じゃあ次はしーちゃんお風呂ね！」

「あの・・・さっきから気になってたんですけど、そのしーちゃんって・・・？」

「よっし！！また説明するよ！由美ちゃんだからゆるーちゃんでえ・・・」

「いいから、早く行ってきなさい・・・想像通りだから」

美春の説明に、由美が首を突っ込んだ。翔子は、とりあえず美春にすみませんと頭を下げてから風呂場に向かった。

「ふう・・・」

湯船に浸かりながら、翔子は一息ついた。昨日から今日まで、いろんなコトがあっているんな人に出会えた。こんなに充実して楽しい日々など今までであったらどうか？そんなコトを考えながら湯船に浸かる。

(みんな優しい人達だなぁ・・・私もがんばらなきゃ！)

なにを頑張るのかはわからないが、心の中で何かを誓った。

(でも、義理母さんとか義理兄さん・・・昨日帰らなかったから・・・怒られるかなあ・・・)

再婚した父の新しい妻と、連れ子の兄のコトを考えて、一気に暗い表情になる。昨日は楽しかった。今日はどうなるか・・・

(せめてお父さんがいてくれれば・・・)

父がいれば、義理母も義理兄も露骨に嫌がらせはしてこない。多分、放っておかれるだろう。その方がかえって気が楽だ。

(でも、バイクが治ったんだし、嫌なコトばかり考えてもしょうがないよね・・・!)

そう思って、翔子は湯船から立ち上がり、風呂場を後にした。

「あ、しーちゃん。お帰り〜」

風呂場から部屋に帰ると、みんなが部屋の掃除をしていた。空き缶を袋に入れていた美春が翔子を見て、ニコニコしながら言った。

「お風呂ありがとございました」

「お礼はあつくんに言わなきゃだよ〜?」

「そ、そうですね・・・あ、旭さん・・・ありがとございました」

「あ?別にいいよ。じゃあ圭太入ってこいよ」

「ありがとございます。それじゃあ行ってきます」

圭太がバスタオルと歯ブラシを持って、部屋から出ていった。

「よお、翔子ちゃん。後でガソリン買ってくるケド、サンゴーフォアのタンク容量っていくつだっけか?」

「えと・・・すみません、わからないです・・・」

旭が聞くが、翔子もわからないらしく、首を横に振ると、旭は、

「まあいいか」と言って翔子に向き直る。

「じゃあ、1000円分でちよい買ってくるわ」

「じ、じゃあ私も行きます!!」

「いいよ、タバコ買ったり寄り道してくから時間かかるし」

「そうですか・・・じ、じゃあガソリン代渡しときますね!」

「おう、じゃあちよいと行ってくるわ」

翔子からガス代を貰って、小さなガソリン携行缶を麻袋に入れて旭が玄関に向かう。みんなもそれに付いていく。

「じゃあちよいと行くわ。部屋の片付けちゃんとやれよ?」

旭は何故か見送りにきた美春、由美、翔子に念を押す。3人は首を縦に振り頷いた。

カバーを外すと、鬼ハン、カチ上げウィンカー、ゼス管3本シヨットガンチャンバーを装備した真っ赤なGT380が姿を現した。

「旭さんって、GT380に乗ってたんですね・・・!カッコいい!!」

「ああ、美春もサンパチだけ?」

「由美さんから、旭さん達が2ストに乗っているって言うのは聞いていましたが・・・お2人共GT380だったなんて・・・」

翔子が、あの高尾の麓で圭太や由美のバイクを見ていた時の、あの惚けた感じの表情で言う。隅から隅までビカビカのサンパチは、持ち主の愛情が溢れていると言った感じだ。

「ま、後で単車談義でもしようや。じゃあとりあえず行ってくるから」

カフェヘルを被り、キャッツアイサングラスを掛け、真っ赤なスイングトップを羽織った、まさに昭和の不良的スタイルで旭が鬼ハンのサンパチに跨がる姿は物凄く様になっている。

キーを捻り、コックをONにしてチョークを目一杯引いてキックをすると、一発でエンジンが掛かった。とりあえず数回吹かした。

「カーン!カーン!!バリバリバリ・・・!!!!」

「すごい・・・カミナリみたいな音・・・」

2スト特有の甲高いエンジン音にシヨットガンチャンバーから吐き出される白煙と爆音を吐き出すGT380を見つめながら翔子が咳く。

「由美ちゃんのゼファーといい、旭さんのサンパチといい、私のサンゴフォアに比べちゃうと霞んじますね・・・」

翔子はどうやら自分の愛車であるCB350Fourと由美達のバイクと比べてレベルが低いと思っているらしい。確かに、エンジン腰下までフルオーバーホールされたGT380と、ヘッドすら一度も開けていないと思われるでCB350Fourは確かに違いは大きい。タダでさえノーマル38馬力のGT380と34馬力のCB350Four。旭のGT380は改造もしているからもつとパワーも出ているだろう。

「な〜に言っただよ？サンゴフォアは名車だぜ？霞むワケねーべよ？」

旭が言うと、翔子も「ほ、本当ですか・・・!?」と聞き返す。

後から出た後継機種CB400Four、通称『ヨンフォア』の影に隠れて目立たない存在のCB350Fourを名車と言ってくれたことが嬉しかったらしい。

そんな翔子を、旭がサンパチからサンゴフォアを見ながら言う。

「おうよ、ヨンフォアより車重で10キロ以上軽くて、パワーは3馬力しか変わらない。燃費もヨンフォアよりいいし、スタイルもいい。普通に走る分には全く苦労しねー、サイコーだぜ？」

「あ、あ、ありがとうございます・・・!!」

「そうよ翔子ちゃん！サンゴちゃんが霞んでるなら圭太のFXなんか見えないから！」

「おい」

ツッコみを入れた圭太を華麗にスルーして由美が翔子の肩を叩く。

「やっぱり・・・私はサンゴーフォアが好きです・・・!」

「あゝあ、つまんないの〜」

「まあまあ、美春ちゃん。みんな同じじゃつまんないわよ」

後半2人、なにか変なコトを言っているが気にしないほしい。

「じゃあちよつと出るから、しつかり片付けるよ?」

そう言つと旭はクラッチを握りギアを1速に入れて走つて行つた。

「じゃあ旭さんの遺言どうり、片付けるとしますか!」

「ゆーちゃん、あつくん死んでないから!」

「あははは!」

由美と美春の変な漫才を横目に、翔子は自分の愛車を見つめる。

(さつきちよつと由美ちゃん達のバイクをいいなあ、って思つちやつたけど私にはやっぱりこの子しかいないよ、お母さん・・・)

このバイクを残してくれた母親に感謝して、翔子は皆と部屋に戻つて行つた。やはり自分はこのシングルカム4気筒の古いバイクを好きであると再認識した。

第13章 復活！CB350Four！！（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！お久しぶりの5人目は只今本編真つ最中！！小動物系の衣笠翔子ちゃんです！」

翔子「・・・？」

作者「あのお・・・もしも〜し？」

翔子「どこ・・・ですか？」

作者「なんとというタイムラグだ・・・ここはかいつまんで言えば夢の中ですよ。あ、ちなみに私はこの夢の中の素敵な住民です」

翔子「え・・・？そうなんですか・・・？」

作者「はいな」

翔子「あ・・・」

作者「なんですか？」

翔子「私はここで何をすれば・・・、いいんでしょうか？」

作者「この空間では、自分の愛車について語ってくださいな」

翔子「私の、CB350Fourを・・・ですか？」

作者「そうです」

翔子「わ、わかりました・・・！き、緊張しますけど・・・がんばりますっ！！！」

HONDA CB350Four 翔子仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル

吸排気系 キャブレター（旧CB400FOUR用）

足回り ノーマル

外装 ノーマルハンドル、左ミラー無、純正シート

カラー 赤（純正オリジナルライン）

翔子「い、いじょうです……!!」

作者「なるほど……ヨンフォア用のキャブレターは旭の友達、洋介に譲ってもらったヤツだね。今後の改造の予定は？」

翔子「そ、そうですね……とりあえずは……キレイにしてあげたいです……!」

作者「なるほど、レストアね。じゃあこれから大変だね、部品無いよ〜?」

翔子「が、がんばります……!!」

作者「じゃあ、最後にお気に入りの部分は？」

翔子「えっと……全部です……!」

作者「では、今回はどうもありがとうございました!」

翔子「あ……はいです……」

がばっ 起きた

翔子「う……ここは、確か……」

というわけで、13話でした汗

これからもがんばって書いていくので、宜しくお願いします!

第14章 優しい日常（前書き）

遅れてしまい申し訳ないです汗

またこれから復活していくので宜しくお願いします。

今回は文字数少なめです汗

第14章 優しい日常

旭がサンパチで出て行ってしばらく。部屋の片付けももう終盤に入っていた。

飲み散らかして床にこぼれた酒は良く拭き、匂いは消臭剤でごまかした。空き缶も捨てて、散らかした物も綺麗に整頓したので昨日の小宴会の前よりも綺麗になっていた。

「よし、こんな感じで大丈夫よね！」

由美が額の汗を拭いながら部屋を見渡す。もう昨日の残骸は愚か、ホコリ1つ落ちていない床を見て大満足である。

「でも、昨日どれだけ飲んだの？すごい数の空き缶だけど・・・」
先ほど風呂から帰ってきた圭太がゴミ袋の中を見て呆れる。中は空き缶が無数に投げ込まれていて、端には日本酒の瓶や鬼殺しの紙パックなんかも分別されて置かれている。

「昨日翔子ちゃん凄かったわよね・・・」

「あつくとけーちゃん撃沈させて・・・」

「参ったよ本当に・・・」

3人は昨日のことを思い出しながら唸る。しかし当の本人は記憶が無いので皆を見ながら不思議そうにしている。

「しかし、旭さん。ガソリンとタバコ買いに行っただけなのに・・・遅いなあ・・・」

圭太が時計に目をやると、旭が出てから40分近く経っている。ガソリンスタンドもコンビニも街道にあるのだが、街道までバイクで2分もかからない距離である。

びりり

どこからかまぬけな電子音が鳴りだした。

「あ、わたしのケータイだ」

「どうやら美春のケータイらしい。パカッと開いてメールを確認する。」

「あつくん遅れるってえ」

「なんで？」

由美が訪ねるとケータイの文面を見せてきた。

「『洋介のバカに見つかった。なかなか解放してもらえないから少し遅れる』・・・誰？」

「羽黒洋介君。通称はぐつちー！」

美春がVサインしながら答える。

「え？羽黒さんですか・・・？」

「しーちゃん知ってるの？」

「はい、昨日部品を分けてもらった人です」

翔子が言つと、美春は「そうか、はぐつちからもらったのかあ」と納得した。

「はぐつちが相手じゃ、あつくんなかなか帰って来れないよ」

美春が諦めたようにつぶやいた。

「どんな人なのよ・・・」

美春が聞くと、少し考えた後笑いながら答えた。

「あつくんの悪友だね、うん。たまにケンカとかしてたりするんだけど、バイクの話とかいろいろなこと話合うから仲は良いんだよ」

美春の説明に「なるほど・・・」と納得する圭太。

「じゃあ旭さんが帰ってこない間、私達はなにしようかしら・・・」

「とりあえずお話ししよう！そうしよう！」

美春の妙なテンションでの意見に、皆不満もないので昨日グダグダに終わった座談会の続きをしながら待つコトにした。

「じゃあお題はなんにしよう？」

「そういえば、翔子ちゃん。結局昨日は無断外泊しちゃったみたい

「ただど大丈夫なの？」

由美が心配そうに聞くと、困ったような顔をしながら翔子が頬を掻く。

「どうでしょうね・・・多分大丈夫だと思います」

「そういえば、サンゴちゃんはお母さんからもらったのよねえ？」

昨日、駐車場で聞いた話を思い出して由美がたずねると、翔子はうつむきながらも肯定した。

「じゃあ大丈夫よ！お母さんも昔バイクに乗っていたんなら、きっと理解してくれるわよ」

「・・・」

由美の言葉に、翔子は黙ってしまふ。

「どうかしたの？」

圭太が心配して声をかけると、翔子はマジメな顔付になって皆を見た。

「実は、まだ皆さんに話してないことがあります」

「なに？」

「実は・・・」

翔子は昨日軽トラで旭に話したコトを皆にも全て話した。最初は皆驚いていたが次第に話は翔子の義母と義兄の話になっていった。

「ろくでもない親ね！」

今までおとなしく聞いていた由美が爆発した。あまりの怒りを圭太がなだめた。

「翔子ちゃん！もし親がなんか言ったら、私も説得するからなにかあつたら言つてね！！」

「は、はい・・・」

心配そうな顔で由美が励ましていると、翔子は肩を叩かれた。見ると美春がいつものなんか間抜けた顔とは違う、マジメな顔をしていた。

「しーちゃん。今日は早く帰った方がいいかもしれないよ」

「え？なんでよ美春ちゃん？」

由美がたずねると、圭太も後ろでうなずいている。

「確かに、美春さんが言うとおりだよ由美。多分このあとツーリングなんか行ったら多分翔子ちゃん、多分ものすごく怒られると思うよ」

「う……」

「とりあえずしーちゃんのバイクが壊れちゃったから、治してたら遅れたつてことにすれば多分大丈夫よ」

美春がマジメに考えながら言う。美春がマジメな時は凄く珍しいので由美も「むぐぐ……」と言ってしぶしぶ納得した。

「じゃあせめて翔子ちゃんを送っていきましようよ！それなら大丈夫でしょ!？」

由美の提案に、皆も賛成した。

「皆さん……本当に迷惑ばかりかけてしまってますみません……」

翔子が半泣きで皆に向かってしていると、美春が頭を撫でた。

「よく泣くねえ……私の胸の中で泣いてもいいよ？」

「え……いや、それは大丈夫でぶがつ!!」

断ろうとしたが、美春の方が早かった。両腕で翔子の頭をぎゅっと胸に抱き締める。

「くっ!!」

「遠慮しないでいいよぉ？」

なんかめっちゃくちや押しつけられて、苦しいからてじたばた暴れている翔子を美春はわざとなのか天然なのか相変わらずわからないがさらに力を入れて押しつけている。

そんな2人を見ながら、由美と圭太は今日これからのことを話していた。

「じゃあ、今日は旭さんが帰ってきたら翔子ちゃんを送っていきましょ？」

「そうだね、そうしよう。ところでさ」

「うん？」

「アレ、なんとかしなくていいの？」

圭太が指差す先は、相変わらず抱き締めている美春と、先ほどまで暴れていたが今では腕もだらんと伸び切って動かなくなつた瀕死の翔子がいた。

「み、美春ちゃん！翔子ちゃんが危ない！！」

「あ、本当だ・・・」

言われて翔子を解放した美春が翔子を見ると、翔子はヨダレを垂らしながら気絶していた。後に翔子はこの時のことを「お母さんが川の向こうから来るなって叫んでた」と語ったが、今はまだ夢の中である。

死にそうになつていている翔子を皆が必死になつて起こそうとしている丁度その時、旭はまだガソリンスタンドにいた。が・・・

「んだこの野郎？」

「ああ？テメーこそたわけてんじゃねーぞコラア？」

あたりは一触即発の雰囲気、旭と洋介が睨み合っている。

「オレのサンパチちゃんのどこがダサいつてえ？テメえ」

「何度でも言つてやんよ？イマドキ鬼ハンなんて、現役のがきくれないしか付けねえつてんだよ？」

「じゃあテメーのヨンフォアなんだよ？マー坊ハンだあ？コスプレかよコノヤロウ？」

「うるせーナ！ヨンフォアはこのスタイルがイチバンなんだよダボが！」

「あ？なに？そのゲロみてえなクツセエ音出すマフラーとコスプレが？だからオメエのヨンフォアは鉄クスにしか見えねんだよ」

「あ！？テメーのサンパチあ下痢便の音だべ！？キタネエから寄んな！！！」

先ほどからずっとこんな感じで店の前でケンカしている。互いの顔がぶつかる寸前まで近付けてガンをくれながら互いに言い合っているため、店員も怖くて近付けないのである。

ガアアアアアア！！プシャー！！！！

「アアアアアア？」

目の前の街道をブローオフバルブ音を響かせながら、1台のスポーツカーが走り抜けていった。

「んだあ、あのいかにも走り屋みてえなクルマはよ？」

旭がクルマにすっかりガン飛ばしながらぼやくと、仕事柄クルマにも詳しい洋介が説明を入れた。

「ありや、日産のシルビアだべ？たしかイチゴーとか言うヤツ」
エアロパーツなどで分かりにくいのが、車種はS15シルビアであることは間違いない。

「ダセエよな。どーせ四つ輪乗るんならジャパンとかヨンメリがイチバンだろーがよ」

「ああ、ナナイチマーク？とかソアラとかもな」

旭の言葉に洋介が同意すると

「お、なんだよ。テメー話わかんじゃねーか。ナナイチとかならやつば竹槍にデッパだよ」

「ジャパンとかヨンメリならシャコタンバーフェン、ホイールはマーク？？？だろ？」

「そーそー！洋介、テメーなかなかやるな！！」

「おうよ！こーやって見ると、お前の単車もシブイよなあ」

「おー、オメエのフォアもなかなか・・・」

なんやかんやでさつきと全く違う話で盛り上がっている。先程まで互いの愛車をバカにしあっていたのに今ではそんなコトは忘れて

互いに誉めあっている。ようするにコイツらバカだ。

先程とは全く違う、楽しげに話し合う2人を遠目に見ながらガソリンスタンドの店員は「早く帰れよ……」と思いながら立ち尽くしていた。

場所は戻って旭の家。皆の必死の呼び掛けによってなんとか蘇生した翔子が泣きながら由美に抱きついていていた。

「死ぬかと思っただです……」

「ほら、もう泣かないで？」

「しーちゃん！泣くなら私の胸で……」

「今度やったら確実に死んじやいますって……」

圭太が美春にツツコミを入れて、翔子も泣き止んだ。それにしてもよく泣くヤツだ。

「じゃあ、そろそろあつくんに連絡してみるよ。さすがにもうすぐ1時間くらい経つし……」

美春が携帯で旭に電話を掛けようとしたその時、外からエンジン音が聞こえてきた。

「やっと旭さん帰ってきたわ！」

由美が待ちくたびれたように言う。甲高いトリプルの音に混じってもう1台、「ガロオン！ガロオン！」というエンジン音が聞こえた。

「あ、はぐつちも来たみたい」

美春がうれしそうに笑う。外で2台が少し吹かした後エンジン音が消え、やがて部屋に旭と洋介が入ってきた。

「わりの、遅れたわ」

「美春ちゃん久しぶりー！」

入るなり謝る旭と、入るなり美春に元気良く挨拶する洋介。

「はぐつち久しぶり！」

美春もわーっと手を上げて挨拶する。

「で？翔子ちゃんは何知ってるけど、あと2人は？」

洋介が由美と圭太を見て旭に問う。圭太が立ち上がったって自己紹介しようとしたとき、旭が「ああ」と言っただけ。

「三笠由美ちゃんと中山圭太だ。最近知り合っただ」

「はじめまして！三笠由美です」

「な、中山圭太です」

2人はとりあえず洋介に挨拶した。洋介は「おお、お前らが」といいながら握手を求めた。

「話は聞いてるよ。由美ちゃんがFX仕様のゼファーで圭太がモノホンFXだろ？」

「ものほん？」

「本物のことだよ」

圭太に笑いながら言う。洋介は細い目を柔らかく曲げて自己紹介をした。

「オレは羽黒洋介。国道沿いにある羽黒モーターズの跡取り息子にして旭とは中坊ン時からの付き合い。単車はヨンフォアだ」

「あ、あのお・・・」

「どうしたの？」

翔子が後ろから洋介に近づくと、右手を差し出した。

「き、昨日はありがとうございました。おかげで私のサンゴフォアも治ったです。本当に、ありがとうございました・・・！」

翔子が頭を下げると、伸ばされた手を洋介が握り返す。小さな手を、洋介の大きくゴツゴツした手がやさしく包んだ。

「気にしなくていい。同じフォア同士、困ったらお互いに協力していこう」

洋介はそう言うと、そのまま翔子を玄関の外に連れていこうとする。

「どうしても見せたくってさあ、昨日頑張って組んだオレのヨンフォア！」

しばらく6人は外で揉めていたが、騒ぎは1時間後。近隣住民の苦情を聞き付けたアパート『雪風荘』2代目管理人が怒鳴りにくるまで収まらなかったという。

第14章 優しい日常（後書き）

登場人物紹介

羽黒洋介

職業 自動車整備工場（実家）

誕生日 3月24日（現18歳）

髪型 短髪（黒）

身長 167？

愛車 CB400FOUR改

家族構成 父・母

好きなもの CB400FOUR・単車談議・メガネレンチ・ライメン

嫌いなもの CB400FOUR（現行）・CB-1・ウダウダ言

う奴・自分の細い目

旭の悪友。旭とは中学のころからの付き合いであり地元では知らない者はいない。実家が自動車整備工場だったので中学卒業後は迷わず工場に。おかげでバイク・自動車に関する知識を得る。旭のGT380のパーツが回ってくるのも彼の工場の秘密ルートのおかげである。最近、同じCB乗りである翔子にちょっと気がある。

第15章 親子の絆（前書き）

今回で翔子編最後です。

第15章 親子の絆

変な騒ぎが一通り終わり、一同はまた旭の部屋に戻ってきた。

「てなわけで、現在もう昼前なんだけど・・・」

由美が皆にたずねる。

「翔子ちゃんもそろそろ帰らないといけないだろうし、送っていくついでにみんなでご飯食べていかない？」

由美が聞くと、美春が後ろから抱きついてきた。

「私はいいわよぉ〜！行こう行こう」

「美春ちゃん、ほっぺた突かないで」

相変わらず変なスキンシップをはかる美春に由美が諦めながらも一応ツツコミを入れる。

「そうだね。街道走ってればいくらでも飲食店はあるし。お金はあんまりないけど・・・」

圭太も同意した。が、やはり現役高校生。バイトもしていないしバイクのガス代もバカにならないので財布事情は厳しい。

「ワリンだけだよ、オレはちょい用事が出来たからまた今度な」
以外なことに、旭は別行動らしい。

「え？なんでえ？」

美春がキョトンとして聞くと、旭は面倒くさそうにして答える。

「どっかのバカが單車壊したみたいだから、ソイツのメンドー見に行かなきゃならんだ」

「誰くん？」

「加古だよ」

「ああ、カズくんかあ」

美春と旭がなにやら圭太達にはわからない話をしている。いろんなネットワークを持っている人だと圭太は思った。

「アイツの單車ペケジェーRだろ？部品取り1台あるぞ？」

洋介も会話に参加する。話はまとまったらしい。

「じゃあまとめると、旭さんと羽黒さんはバイク修理に行く。僕達は翔子ちゃんを送っていく、と」

圭太がまとめると、旭と洋介が「うむ、わりいな」「また誘ってな。翔子ちゃん！また遊ぼうね〜！！2人きりで！！」と、1人変なことを口走っているがとりあえず無視する。

「由美達も、それでいい？」

「私はかまわないわよ。ちょっと人数減っちゃったけど」

「あつくんも行くようよ〜」

由美は納得したが、美春は相変わらず旭がいないとダメらしい。また少しスネていると、由美が美春に言い聞かせる。

「まあまあ美春ちゃん、たまにはいいじゃない」

なだめようとすると、美春はそれまでのいじけ顔から急にけろっと可愛い笑顔になって「うん、そだね！」とうれしそうに笑う。

「すみません美春さん・・・私なんかのせいで・・・」

翔子が謝ると、美春は翔子の肩を軽く叩いた。

「気にしないでいいよお、ぶにぶにしてるなあ」

美春は今度は翔子のほっぺたをぶにぶにと突きはじめる。

「あ、そういや・・・」

美春の行動を無視して、旭が胸ポケットから1枚の封筒を翔子に渡した。

「こ、これは？」

「タンクとフレームの間に挟まってたよ。宛名見てみな？」

旭から渡された小さな封筒の裏を見て、翔子は驚いた。そこには、綺麗な字で『翔子へ 衣笠佳代』と書かれていた。

「お母さん・・・から？」

翔子の言葉に圭太と由美も注目する。ついでに旭はまだ翔子に引っ付いていた美春を引き剥がした。

「ななな、中身は!？」

「見てない。開けてみな？」

翔子はものすごく緊張した様子で手紙の封を綺麗に切った。中か

らビニールに包まれた手紙が1枚出てきた。

「・・・・・・・・」

翔子がまばたきするのも忘れたかのように、目を見開いて1文字1文字をその目に焼き付けるように読んでいる。1度全て読み終えた後、もう1度読み直してからその場に崩れ落ちた。

「ど、どうだったの!？」

由美が翔子にたずねる。翔子はしばらく下を向いて泣いていた。しかしいつもの弱々しい泣き方では無い。泣きながら立ち上がると、「少し1人にさせてください・・・」と言って部屋から出ていった。

「大丈夫かしら・・・翔子ちゃん」

由美が心配そうにつぶやく。しかし皆、翔子が出ていった扉を見つめることしか出来なかった。

「お母さん・・・」

翔子は愛車、CB350Fourのシートに手を置きながら話し掛ける。

「私・・・この子に乗ってるよ？素敵な友達も出来たし、だから・・・」

翔子はまた涙が溢れてくるのを止められなかった。涙は雫となってシートに落ちる。

「安心してね・・・!私・・・ひっく、よ、弱虫だけど、お母さん死んじゃってて、言えなかつたけど・・・!でも・・・!」

翔子は1度大きなしゃっくりをした。涙が止まらない。でも、言わなければ。

「ありがとう!お母さん・・・!」

言い切ってから、栓を切ったように泣きはじめた。膝から崩れ落ち、バイクに頭を預けて。翔子は息をするのも忘れるくらい泣いた。横には、母が残した手紙がある。

『翔子　あなたがこの手紙を読んでいるという事は、あなたは私の大切な思い出の詰まったバイクを受け継いだということですね？

今手紙を書いている時のあなたは、私の横でお昼寝中です。まだ立って歩くもおぼつかないあなたが、この手紙を読んでいる時にどんな子になっているのか非常に気になります。そして私もきつとい感じのおばさんになっているんでしょね。

このバイクは、私が高校3年の時に親戚の人からもらったものです。もらった時からすでに古いバイクだったのですが、このバイクで私はいろんなところを走りました。お父さんに会うきっかけも、このバイクでお父さんをひき殺しそうになってしまったことから始まりました。そんないろんな思い出が詰まっています。

それより、翔子。あなたは元気な子になったかしら？私の子だから、きつと元気すぎるくらいになっているとは思いますが。暴走族にはならないでね？未来に翔ばたく子という意味で名付けた名前どりの子になっていますか？将来は何になりたいのかしら？

なかなか、書きたいことがいっぱいありすぎてまとまってないです。手紙を書くことになれていないことも原因ですが。

そろそろ、横で寝ているあなたを起こさなければいけませんから、そろそろ最後になります。

バイク、大事にしてください。いらなければ捨ててください。それと、身体には気をつけてね。

後、大事なこと。友達をたくさんつくりなさい。うわべだけじゃない、本当の友達を。互いに信じあえる、裏表無い友達をたくさんつくりなさい。

では、ここで筆を置きます。あなたの幸せを心より願っています。

□

1990年 夏 母より

「私・・・元気な子じゃなくなっちゃったけど・・・ひぐつ・・・でも私、この子は大事にしてるよ・・・？お友達も、出来たよ・・・？」

翔子は愛車に向かって話し掛ける。母が残したバイクに、必死に話し掛ける。

「将来はね・・・？写真を撮りたいんだよ・・・？大好きなバイクと、自然と・・・うう、きつと楽しいよ・・・？」

翔子はだんだんに話したらいいのかわからなくなっていた。話したいことはたくさんあるのに、最後は「お母さん・・・お母さん・・・」と呟くだけになっていた。そんな翔子を、CB350F ourはただ静かに見ていた。

「・・・ただいまです」

翔子は結局、1時間近く外で泣いていた。部屋に戻ると皆が心配して翔子のもとに集まった。

「翔子ちゃん・・・大丈夫？」

由美が本当に心配していると、翔子はまた涙の後が消えていないが笑顔で由美を見た。

「大丈夫です。一通り泣いたら、落ち着きましたから」

「翔子ちゃん・・・」

「!?!」

突然、由美は翔子を抱き締めた。急なことだったので、翔子は驚いてしまった。

「よかつたあ・・・!心配したのよ!?!」

翔子を抱き締めたまま、由美が言う。このメンバーの中で一番翔子を気にしていたのは間違いなく由美だろう。

「・・・由美さん」

翔子が静かに言う。

「これで、最後にしますから・・・泣くの最後にしますから・・・泣かせてください・・・!」

そして翔子は泣いた。さっきまであんなに泣いていたのに、まだこんなに涙が出るとは思わなかった。ただ、由美が抱き締めてくれたら、また安心してしまったのだ。

腕の中で泣く翔子を、由美は優しく撫でた。

「しーちゃん・・・」

美春も感動して涙を流していた。圭太達もそんな翔子と由美を見て感動していた。自分達が好きなバイクが、数年かけて親子に手紙を渡した。親子の絆がさらに深まった瞬間だった。

翔子は泣きながら、天国にいる母に言った。

(私には、こんな素敵な友達がいるから、だから・・・私強くなるよ・・・!見ててお母さん・・・!)

翔子はまたしばらく泣き続けた。しかし、いつもの弱さからくる涙では無い。強くなるための、明日へ翔ばたくための涙であった。

そして30分後、翔子は涙を拭いた。そこにはまた一回り成長した翔子がいた。

「由美さん、みなさん・・・ご迷惑をおかけしました」

翔子はそういつて頭を下げる。

「いいのよ、翔子ちゃん！気にしなくて！」

由美が肩を叩きながら言う。

「私、家族と問題がいつぱいあるけど、これからは逃げないでがんばります・・・！」

「またなにかあったら教えてね！家だろうがなんだろうが乗り込んで行くわよ！？ね？みんな!？」

由美が言うと、皆頷いた。

「僕も、由美ほど役に立てるかわからないけどその時は全力で助けにいくよ」

圭太が言うと手を差し伸べた。翔子は圭太と握手すると皆とも握手していった。

「よし！じゃあ一段落ついたところで走りに行くわよ！お腹もすいちちゃったし！」

由美が言うと、翔子も「はい！」と元気良く返事した。

外に出るとそこにはバイクが6台も止まっている。旧車が6台も集まるとすごく迫力がある。

「じゃあ、オレ達は国道だから」

旭と洋介は一足先にエンジンをかけていた。辺りは白煙と爆音が支配している。

「これがヨンフォアなのね・・・」

「速そうだね・・・」

洋介のヨンフォアを見て、由美と圭太が感想を言う。旭のサンパチや自分のFXと比べるとすごく小さく見える。しかし、迫力はサンパチにもFXにも負けていない。真紅のフォアのヨシムラの当時物シート管から吐き出されるエキゾーストはアイドリングで低い

唸りを上げ、シングルカムのエンジンはCRキャブの音と重なってうねっている。バックステップは本気の証か。

「オレのフォア、結構いいだろ？」

洋介が圭太に向かって言う。ちゃんと話したいことがないが悪い人でないことはわかってるので圭太も素直に感想を言った。

「すごいです・・・音が速そうだしなによりスマートです」

ヨンフォアのスタイリングを見て圭太は言った。

「だろ？旭のサンパチよか速いぜ？」

「ああ？聞き捨てならねえぞコラア？」

旭が洋介を睨む。が、洋介はさらに続ける。

「フォアが1番よ、フォアが！」

「ため、サンパチなめてんかよ？」

「やんのか？」

「やってやんかコラ？」

飛び散る火花、呆れる圭太達。

「よっしゃ、じゃあどっちが先にウチまで着くか勝負な？」

「オーケー、事故って泣くなよ！？」

カーン！カーン！！バリバリバリ！！

コアン！コアン！！グオロロロロ！！

なんかあつという間に2人は走り去ってしまった。

「バカね・・・」

「だね・・・」

「あつくん・・・」

「・・・」

残された4人はそれぞれ呟いた。

「で、どこでご飯にする？」

由美の提案に、美春が「ふっふっふ」と笑いながら手を上げた。

「私のところにおいでよ?」「美春ちゃん家?」

由美がなんでだろうと考えていると、美春がバイクを出口の方に向けながら答えた。

「言わなかったっけ?うちラーメン屋さんなんだあ」

「へえ、ラーメン屋さんなんだあ・・・ってえええ!?!」

「いや、そんな驚かなくても・・・」

「あつくんもウチで働いてるんだよ?来る?」

美春が言っと、由美はコクコク頷いた。

「行く!私ラーメン好きなのよあ!」

由美が言っと、圭太も翔子も賛成したので、美春が「じゃあ行く!」と言ってバイクに火を入れた。それを合図に皆エンジンに火を入れる。

「じゃあついてきてねえ」

美春が駐車場を出ると、皆あとから続く。美春のサンパチと由美のゼファーは無駄に爆音仕様なのでなるべく音を立てないようにして出発していった。

しばらく走ること20分、4台のバイクは街道沿いの小さなラーメン屋に行き着いた。看板には『ラーメン真田屋』とある。美春の家だ。

「ただいまだよ」

店に入るなり、美春は大きな声で言う。ちなみに営業中だったので客の視線がみんな入り口に集中したので由美達は少し恥ずかしかった。

「おう、美春おかえり」

厨房から恰幅の良い男が出てきた。真田屋2代目にして美春の父である真田昌行その人である。

「お母さんはあ?」

「買い物。友達か?」

昌行は由美達を見る。

「大切な友達だよ。あつくんはいないけど」

「そうか、美春がいつも世話になってるね。お金はいいから、好きなもの食べな？」

「そういつて昌行は厨房に下がっていった。」

「い、いいんですか？」

圭太が聞くと、美春は笑いながら「大丈夫大丈夫」と言っ席に案内した。

席はテーブル席の1番広い席だった。

「好きなもの食べてねえ！」

美春が皆にメニューを見せる。

「なになに、真田ラーメン（醤油、塩、味噌）と・・・なにこれ？」

由美が美春にメニューを指を指しながらたずねる。

「この『サンパチラーメン』ってなあに？」

由美が指さす先には『サンパチラーメン 600円』とある。

「ああ、これはねえ、サンパチラーメン」

「いや、名前じゃなくて・・・」

「あつくんが作るラーメンなんだけど、あつくん以外作り方知らないからあつくんいないと食べれないんだよ？」

「いいの？そんなの出して・・・？」

「おいしいから良いんだってさ」

美春が能天気な笑みで答える。しかし、働いてる身でオリジナルラーメンを出せるとは、どうやら旭は両親にもよほど気に入られているらしい。

「こっちはなんですか？」

今度は圭太が聞く。そこには『黄金ラーメン800円』とある。

「そっちはねえ、あつくんと私が作った奴で、カレーラーメンだよ？しかもライスが付いてくるから食べた後のカレーをご飯と一緒に食べれると言うつ優れ物！」

「へえ・・・」

圭太が頷くと、翔子が聞いてきた。

「あの・・・これは？」

聞くと、そこはテーブルに備え付けの調味料。そこには醤油、酢、こしょう、そして謎の黄色い粉が置いてある。

「それもあつくんが作ったカレーパウダーだよ？」

「ねえ、美春ちゃん？」

由美が恐る恐る聞く。

「旭さんって、そんなにカレーが好きなの？」

「うん」

「うわあ・・・」

結局、昨日嫌というほどカレーを食べた3人は圭太が醤油、由美と翔子が味噌。美春は黄金ラーメンを1つ頼んだ。

しばらくしてラーメンが現れた。食べてみると普通に美味しかった。

「醤油の味がさっぱりしていて、美味しいです」

圭太が感想をもらす。

「でも、旭さんって本当になんでもできるのねえ・・・」

由美が味噌ラーメンを食べながら話す。

「うん、あつくんはなんでも出来ちゃうよ!」

美春が自分のことのように自慢する。ちなみに黄金ラーメンは、スープがまんまカレーだった。

「今日もこれからバイクの修理ですもんね」

翔子が味噌ラーメンをちびちび食べながら言う。

「繋がりがたくさんあるんだろーな」

由美がスープを飲みながら言う。ちなみに濃い味だった。

「私達、近いようで遠いのかなあ？」

由美が言うと、美春が「違うよお」と言う。

「あつくんは、頼まれると断れないんだよお。だからいるんな人と

繋がりがあるんだけど、本当に親友って言えるのははぐつちと他数人しかいなかったし、ゆーちゃんとけーちゃん達に会えてよかったって言ってたよあ？」

美春がスープ・・・というかカレーにご飯をぶち込みながら言う。

「本当！？」

美春が言うと、美春はうれしそうに笑いながら頷いた。

「最近、あつくん。けーちゃん達が弟とか妹に思えるって」

美春が言うと、由美と圭太、翔子は喜んだ。しかし、

「本当の妹は、まだ認めてないのに・・・」

誰にも聞こえない、小さな声で美春が呟いた。

ラーメンを食べおわり、店を出た。美春は母が帰りが遅いので店を手伝わなければならなくなり、ここでお別れになった。

「ありがとうございます」

「また遊ぼうね！美春ちゃん！」

「ご馳走様でした」

圭太、由美、翔子は店主の昌行と美春に挨拶して出発した。

「結局！私達3人が残っちゃったね！！サンゴちゃんはどうか！？」

由美が走りながら叫ぶ。ゼファーは今日はガスを確認したから止まることはなさそうだ。

「はい！絶好調です！」

翔子も笑顔で返す。350Fourは絶好調で、ストレスなく回っている。

「じゃあ、高尾までもうちよつとだけど楽しく行きましょう！！」

由美の合図で、残り数キロの道を進む。途中、順番を入れ替えしながら進む3台は楽しそうにランデブー走行をしている。

楽しい時間はすぎるのが早い。気付けばもう高尾だった。

3台は一度南口のロータリー付近でバイクを止めた。もちろん邪魔になるので歩道まで押して行って隅にきれいに並べた。これなら邪魔にもならないだろう。

「じゃあ、今日はお別れね」

翔子が言うと、由美が笑顔で握手を求めた。

「また近いうちに遊びましょう！連絡してね！！」

「僕も楽しみにしてる」

由美と圭太と握手して、翔子も笑顔で頷く。

「本当に、昨日と今日でお世話になりました・・・！ありがとうございます！！」

翔子はうれしそうに、そして一時とはいえ別れを惜しむ。

「また連絡します！次は旭さんと美春さんと、洋介さんと、みんなでツーリングしましょう！」

翔子が言うと、バイクに跨がりセルでエンジンを掛ける。吹かすとタコメーターが綺麗に踊る。

「じゃあ、またね翔子ちゃん！」

「旭さん達にも、よろしく言っておいてください！」

「わかったわ！なんか嫌な事があつたら、連絡してね！」

そして、C B 3 5 0 F o u r は走りだす。翔子は片手を振って走って行った。

ぶあああああ！！

やがて姿が見えなくなり、エキゾーストも消えた。

それを最後まで見ていた由美は最初こそ心配そうだったが、やが

て自信満々な顔で圭太に振り向いた。

「じゃあ！私たちも帰りましょ！？」

「そうだね。ところで由美？」

「なに？」

「そのミラーに付いてる紙、何？」

見れば昨日、由美が結んだおみくじが解けそうになっていた。

「あ！しまったー！」

あわてておみくじを結ぼうとしたが、突然風が吹いておみくじは飛ばされてしまった。

「あああ〜！？」

飛ばされたおみくじは、そのまましばらく滞空していたが、しばらくしてすぐに落下。落下先は・・・

「工事現場！？」

しかも、下は生コンである。

「待ってえー！！」

由美の願いむなしく、おみくじは生コンにダイブ。そしてその上に新たな生コンが・・・

「私の、大吉があ・・・圭太との赤い糸があ・・・」

「どうしたの？ぶつぶつと・・・」

事情を知らない圭太が聞くと、由美は半泣き半怒り顔で圭太に迫る。

「もう嫌！圭太のバカー！！」

「え！？なんで僕なんだよ！？」

「うるさいうるさい！」

2人が騒いでいるとき、街道をさらに進むCB350Four。

それを操る翔子は、由美と圭太達に感謝しながら走っていた。

「ありがとう、由美ちゃん、圭太君、みんな・・・そして」

アクセルを思い切り開ける。少しスピードを上げて、フォアの音

を聞きながら空を見た。

「お母さん、ありがとう！」

第16章 楽しいツリーリング！？（前書き）

幼稚な文章ですが、どうぞ！

第16章 楽しいツーリング？

ある少女（というのも限界の歳だが）が、部屋にこもって1人心の中で悪態をついていた。

「全く、最近の奴らはなんだ？」

ただ便利だけでビツクスクーターに乗ったりアメリカンに乗ったり……。旧車に乗れば旧車會ばかり！私達のバイクはそんな風に見られたくない。

そもそも、変なバイクに乗ってるヤツはウザイくらい私に声を掛けてくるのに、なんで普通のバイク乗りは私に声を掛けないのか！？旧車だから！？なんでだ！？

旧車乗りはチャライし、ビクスク、アメリカンもウザイし。普通のバイク乗りには引かれるし……。でも……

あの日会った、FXの彼……

会った瞬間わかった！これは運命だつて！可愛い顔して私達と同じカワサキ旧車。しかもドノーマル。運転も丁寧でいいじゃない？彼こそ現代の紳士よ！よし、また道で検問張つて待つしかないわね』

そう言つて、彼女は1枚の写真を取り出す。写真は、背景にバイクが1台。車種はFXのノーマルでカラーは青。そしてライダーであろう人間は高校の制服を着た美少年。

「待つてなさい！必ず私の物にするんだから！」

おーっほっほっほ！と1人部屋の中で高笑いする少女（というのも限界の歳だが）の声を、夕食が出来たから知らせに来た妹が外でびびりながら聞いていたのは隠れた不幸だ。

「へっくし！」

時は同じ頃。圭太は家の車庫で愛車を洗車していた。「大丈夫？風邪？」

由美が横から心配する。ちなみに今日「バイク洗車しましょう！やっぱり綺麗にしないとね！もちろん圭太の家で！！」と無理やり決めたのも由美である。

「いや、大丈夫。なんか人に見られてる気がした」

圭太が後ろを振り返るが、当然そこには誰もいない。両親はまだ帰ってきてないし、姉はいまは懸賞に飽きて新たな趣味を模索中らしく、部屋でなにかやっている。

「ホラーなこと言つてないで、さっさと洗車終わらすわよ」

由美はそういうと、また圭太のFXを磨きはじめた。ちなみにゼファーの方はすでに洗車が終わっている。

「明日は朝早いだよ！ガンガン磨かなきゃ！！」

言いながらフロントのフェンダーを磨く由美。明日は休日なので、旭や翔子達と横浜の方にツーリングに行く予定になっている。

「何時出発だっけ？」

顔が写り込むくらい磨きあげたブルーのタンクを覗き込みながら圭太が聞く。

「旭さんの家に朝10時よ。翔子ちゃんとも2週間ぶりかあ」

磨き終えた箇所をもう一度、磨き忘れが無いか確認して由美が立ち上がった。

翔子と前回別れてから2週間。たったの2週間だったが、由美は翔子に会える日を楽しみにしていた。それは圭太も一緒だし、もちろん翔子もだ。

「同じ県内だけど、横浜って行ったことないのよね！中華街見て海見て船を見て！やることいっぱいあるわよ！」

うれしそうに立ち上がる由美を尻目に、圭太はトラブルが起こらないでくれと願った。

そして翌日。

「おっはよーゆーちゃん！けーちゃん！」

旭の住むアパート、『雪風荘』の駐車場についた2人を美春がいつものテンションで出迎えた。2人のGT380も、いつもはオイルで汚れているリア周りを含めビカビカに輝いている。

「後は翔子ちゃんだけか」

旭が腕を組んで立っている。今日は珍しくサングラスをまだ掛けていなかった。そして・・・

「早く来ないかなー、翔子ちゃんー！」

横でなにやら変なテンションで洋介がくねくねしてた。

「お前黙れよ」

旭が呆れながら言うと、洋介は少し怒り気味で旭に訴える。

「翔子ちゃんは俺の心の癒しなんだよ！天使なんだよ！」

「そーか、黙れ」

涼しい顔でスルーした。

「まあまあ、旭さんも洋介さんも落ち着いてよね」

由美が輪に加わり、3人は今日のルートの確認をはじめた。

「今日は快晴だし、楽しく走ろーね」

「そうですね」

美春と圭太も笑いながら話していると、駐車場に1台のバイクがゆっくりと入ってきた。

「あ、翔子ちゃん!!!」

由美がバイクに歩み寄るとライダーがヘルメットのゴーグルを上

にずらした。

「由美さん！久しぶりです！！」

愛車、CB350Fourから降りてきた翔子に抱きつく由美。

翔子は2週間という短い期間だけしか間を開けていなかったのどこか変わった気がする。以前のどこかオロオロしていたり人を恐がっていたあの少女が、今では胸を張って堂々と愛車から降り立った。

「元気してた！？大丈夫！？」

同じ年なのに、まるで姉のように心配する由美を見て、翔子は笑顔で由美に頷いた。

「はい。以前よりも全然大丈夫です！」

「しーちゃん！久しぶり！！」

美春も翔子に抱きつく。3人はみな笑顔で再開を喜んだ。

ちなみに、どさくさに紛れて翔子にダイブしようとした洋介は旭と美春の奇跡のツープラトンにより地面に伏していた。

「じゃあ、みんなそろったことだし出発すっか！」

しばらく皆と話していたが、旭が言いながらサンパチのエンジンに火を入れると、それが合図になって皆もそれぞれの愛車に跨がりエンジンを掛ける。

「ルートは国道を上って、大黒埠頭のサービスエリアまで行って休憩。そしたらまた戻って横浜に行く感じな！」

1度大黒埠頭に寄る理由は昼食を取るというのもあるが、それ以外にも土日祝日には旧車やハーレー、クルマもたくさん集まるのでそれを見るのも目的らしい。ちなみにルートを決めたのは旭と由美である。

「今日はカメラのバッテリーも予備持ってきましたから、たくさん撮れますよ！」

翔子もうれしそうに言うとかバンを見せる。小さなカバンにはカメラやバッテリー、フィルムやらなんやらがたくさん入っていた。

「よし、それじゃ出っ発すんぞ！」

こうして、横浜ツーリング大会（命名由美）が開始された。

街道と国道を結ぶ道路を、6台もの旧車が走り抜けていく。先頭は旭のGT380で後から美春、圭太、由美、翔子、そして後ろは洋介である。途中2回信号に引掛かったが、それはもう目立っていた。特に先頭と1番後ろのバイクが。

しばらく走り、国道に出た。ここから先はひたすらに真っ直ぐ走るだけで高速に乗れる。道も広いので走りながら何回か順番を替えたりしながら走っている。

「なんかすごい迫力のある集団だね」

圭太が隣を走る由美に叫ぶ。ちなみに今先頭は洋介になっていて自分達が1番後ろになっている。

「こういう、大人数のツーリングって初めてだけどみんなのバイクはやっぱりカッコいいわね！」

由美は愛車、ゼファー改FX仕様を軽快に走らせている。巡回速度は60キロ台。本当はもっと飛ばしたいが下道のためそうも行かない。6台はのんびりと走っていく。

途中、信号で旭、洋介、翔子が先に行ってしまう残り3人が信号に引掛かってしまったが、なんとか高速入り口で追い付けた。

それぞれが料金所を通過すると渋滞になるので、出発前に旭が皆から預かった高速代をいっぺんに払い、スムーズに進む。

「ここからは由美ちゃん達は後から、俺達が先頭走るからゆっくりでいいから付いてきな」

旭が入り口のすぐ目の前の路肩でみんなを一旦止めて確認する。由美達は高速道路初走行なので、最初は慣れてもらうため、また危ないのでゆっくり付いてくるようにと注意してからまた発進した。順番は最初とだいたい同じで先頭は旭、後ろは洋介だ。

「これが高速道路かあ！」

圭太が普段走る道とは全く違う高速道路をよく見る。歩道が無く、左には白い壁が、右には反対車線を猛スピードで走っていくトラッ

クがいる。電光掲示板には今の高速の交通情報が書かれている。自分たちが行くところでは無い場所で渋滞が起きている。興味深げに見ていたが、やがて電光掲示板は後ろに流れていき、あの情報も自分たちには関係ないので気にしなかった。制限速度80キロ。

「け、圭太あ・・・！」

見ると、由美がこちらを見ている。自分もだが、初めての高速道路に緊張しているのか。なにか声を掛けようとしたその時、自分の横を何かが抜いていった。

「え・・・？」

抜いていったのは由美だった。直管マフラーから爆音をとどろかせながらあつという間に先頭に並んだ。

「楽しいー！！！」

由美は叫びながら旭に並ぶ。旭も圭太も「ダメだこりゃ」というような意味で諦めた。

しかし、放っておくわけにも行かないので旭がとりあえずスピードを落とすように手でジェスチャーを送るとししぶ引き下がったが、たまにギヤを落として甲高い直管サウンドを響かせた。

「圭太！翔子ちゃん！すごい楽しいよ！？」

由美がまた並んで叫んでくる。しかし翔子は転ばないように走るのが精一杯で、圭太も余裕がなかったので頷く程度に終わらせた。

さらに進むと、大きな橋が現れた。横浜ベイブリッジである。

「みんなー！海だよ！海！！！」

由美がうれしそうにはしゃぐ。下には横浜の工場地帯と海。遠くを見れば横浜の街並みやビッグタンカーを見ることがもできる。

「写真撮りたかったですねえ」

翔子が残念そうに言う。そういえば翔子のバイクはこの中で一番古いバイクなのに、ものすごく安定して走れている。どうやら直安静は抜群らしい。

橋も終盤に差し掛かると、旭が左にウインカーを出した。看板を見ればもう大黒埠頭の入り口らしい。皆もウインカーを出して左に

寄る。

入り口に入ると道路がものすごく狭くなった。さらにずっと先まで右コーナーになっている。

「渦巻きみたいな道路だ」

圭太が1人感想を漏らす。延々走っていると、「大黒パーキングエリア この先右側」とある。旭も右にウィンカーを出したので皆一斉に右へ。やっと大黒埠頭パーキングエリアに到着した。

「着いたあ!!!!!!」

由美が到着するなり叫んだ。圭太もその隣にバイクを停める。

「私、最後の方で目が回るかと思ったわよお」

笑いながら近づいてくる由美。歩き方がおかしいのは多分長時間バイクに乗っていたからだろう。

「みんな大丈夫かあ？」

旭が皆に聞こえるように聞く。皆余裕の表情なので安心した。

「いや、しかし混んでるなあおい」

洋介が駐車場を見ると、いろいろな種類のバイクやクルマが所狭しと集まっている。まだ昼前だというのに珍しいことだ。

「でも早く場所が取れたからよかったよお」

美春がほっと一息付く。6台のバイクは駐車場に並ぶとやはり迫力がある。

「あつちにてつかい集団がいる!!!」

由美が指差す先は、黒い鉄の塊が何十台もの数いる。ライダーはだいたい革ジャンかジーンズジャケット。渋いおじさま方が多数。

「ありや、どつかのハーレーのオーナーズクラブだろ」

旭の言うとうり、そこはほとんどがハーレーだった。

「でけえなあ」

洋介が自分の愛車、ヨンフォアと見比べて呆れた。中に1台サイ

ドカーの着いたハーレーがいるが、もはや化け物である。

「あちらは？」

翔子の視線の先にも集団がいた。

「ありゃあ、多分トライアンフだな」

洋介が言う。カフエレーサー仕様のトライアンフを遠目に、「俺のフォアのかぜってー速えぞ」と言っていた。

他にも、クルマの集団が多数いたり、ただの休日家族サービスで来ただけの親子連れなどで溢れかえっていた。

「とりあえずなんか食うか」

旭の提案に皆賛成し、サービスエリアの食堂に入っていく。中も混んでいたが、運良く窓際の6人座れる席が空いたのでそこに陣取り、朝食を調達してきた。

「翔子ちゃん、サンゴちゃんの調子はどう？」

翔子と並んでご飯を食べている由美が訪ねると、翔子はスパゲッティをフォークで巻きながら「そうですね」と前置きする。

「最初は怖かったんですけど、落ち着いて走ってたらだんだん楽しくなってきました。まあ、ちょっと皆さんに置いていかれそうにもありませんが」

翔子が言うと、排気量こそ違いがベースは同じエンジンに乗る洋介が間に入ってきた。

「ついていけなそうな時に、頑張ってアクセル開けすぎないように注意な？」

「なんでですか？」

翔子が聞くと、少しうれしそうに顔を赤くして説明する。

「みんなそうなんだけど、俺たちのバイクは古いからオイルクーラーが無えんだ。急にアクセルのON、OFFしたり長時間全開にするとエンジンがついていけなくなって最終的にブローするからさ」

洋介の説明を聞いて、旭、美春以外の3人はなるほど感心した。さすがに車屋さん。

「やっぱり気を付けなきゃね」

由美は先ほどの高速道路での自分を思い返す。急にアクセルを開けて全開にしたりギヤを上げ低回転に落ちたりまた上げたりとを繰り返した。

「次から気を付けなきゃ」

1人何か反省したらしい。「じゃあ、私食べ終わったから先にバイク見てるねえ」

美春が食器を下げて席を立った。

「じゃあ、1時まで自由行動にするから1時にはバイクのところな」

旭の言葉を合図に、皆一様に自由時間になった。

「圭太！翔子ちゃん！いつしよに見て回りましょう!？」

由美が圭太と翔子を捕まえた。

「なんだかいよいよなあ、こーゆーのもよお」

洋介が旭に話し掛ける。

「昔は鬼とか悪魔とか足が臭いとか言われていたお前が、あんな普通な子らとつるむなんざ思ってもみなかったぜ」

洋介は旭を中学時代から知っているので最初は驚いていたらしい。

「んな昔の話忘れたわい。ついでに足は昔っから今まで、いたって清潔だ」

「ケンカすりゃリーゼントひとつ崩さずに先輩ともタイムン張ったモンが、今じゃあいつらのアニキみてえだかな、はっはっは!」

腹を抱えて笑う洋介を、旭は無視した。

「美春ちゃんに会ってから変わったよな？ケンカもなんも止めて更生してよ？」

「アイツにやマジで感謝してんよ」

旭は駐車場で自分のサンパチの前でしゃがんでいる美春を見る。

「そんなお前も、妹はまだまだ認められねーんか？」

洋介が口にした瞬間、旭がサングラス越しに睨み付ける。

「るせーぞ？何が言いてえ？」

しかし、そんな旭に一步も引かず洋介は対峙する。

「ま、わからねーでもねーけどよ」

そう言つと、2人は黙ってしまった。

時間が過ぎるのは早い。もう1時になってしまった。

「おう、みんな集まってるんか？」

旭が確認を取ると、皆揃っていた。

「んじゃあそろそろ出発すんけど、ゆっくりついて来およな」

そういつと、旭はサンパチに火を入れようと跨がった。すると

ギョワァアン！ギョワァアン！！

入り口から、3台のバイクが入ってきた。

「何！？凄い音！」

由美達が驚いていると、その3台がこちらに向かって走ってきた。

「あ……！！」

突然、圭太がなにか思い出したかのように叫ぶ。

「もしかして……」

「どうしたの圭太？」

「圭太さん？」

由美と翔子が圭太に話し掛けるが、圭太が答える前に3台はすぐ脇に停まった。旭と美春のサンパチと同等か、それ以上の白煙を撒き散らしてエンジンを切る。

「ありゃあ、400マツハじゃねーか？」

旭が見ていると、ライダーが3人降りてこちらに向かってきた。

先頭の1人がカフェエヘルを脱いだ。

「女がマツハだあ・・・？マジかよ？」

洋介も驚きを隠せない。

「・・・真子さんだ」

「え！？圭太知ってるの!？」

圭太の発言に、由美は驚きを隠せない。圭太が真子と呼んだ人は、長髪のロングヘアー、革の上下のライダースジャケットはスタイルの良さをうかがわせる。顔だちも抜群だ。

「・・・？圭太君・・・!？」

向こうも気付いたらしい。ものすごく驚いている。が、次の瞬間・

「え・・・?」

「あ・・・!？」

真子が圭太に抱きついていった。

空気が、凍り付いた。

第17章 トリップル姉妹登場！（前書き）

今回はギャグ多めです。それではどうぞ！

第17章 トリップル姉妹登場！

「え・・・!?」

圭太は驚いた。それもその筈、少し知っているとはいえいきなり女の子に抱きつかれたのだ。驚かない方がどうかしている。

しかし、圭太の驚き以上に怒りのパロメーターを上げている人間がいた。由美だ。

「ちよつと！！圭太になにしてるの!?」

いきなり現れていきなり圭太に抱きついた少女（敵）に由美が激怒した。

「圭太君・・・会いたかつたわ・・・」

しかし、目の前の女狐はそんな由美を完全無視。恐らく彼女の視線には圭太1人しか写っていないだろう。

「ちよつと真子さん！放して・・・!」

圭太が慌てて彼女、真子を引き剥がす。しかし真子と呼ばれた少女は離れはしたものの依然として圭太しか見えていない。

「圭太君！久しぶりね!」

「は、はあ・・・」

もう今すぐ死んでも後悔しなさそうなくらいまぶしい笑顔の真子に、少し戸惑う。すると、自分の後ろからなんかものすごく恐ろしい空気を感じた。振り返るとそこには

「け〜い〜た〜!?!」

般若みみたいな顔をした由美が怒り心頭中だった。

「ちよつと圭太！なに鼻の下伸ばしてるのよ!?それに・・・!」

由美は右人差し指を真子に突き付けて

「あんた！いきなり現れてなにやってんのよ!?」
キレた。

「な、なんで由美ちゃんあんなキレてんのよ・・・?」

洋介が聞くと、美春が片手で洋介に耳打ちする。それを聞いて洋

介は「なるへそね」と納得した。

「なにつて、圭太君に抱きついてたのよ」

見て分らない？とでも言いたげに真子が腕を広げる。さらに

「あなたこそ、人様に指を差すなんて失礼じゃない？」

火種に油を注ぐようなことを言う。

「な、なによ！人にいきなり抱きつくのは失礼じゃないの！？」

「そ、そうですよ！あなたと圭太さんの関係はわかりませんが、やりすぎです！」

由美の言葉を翔子が援護する。確かに第三者である由美や翔子達から見れば、いきなり真子が圭太に抱きついたという事実しかわからない。

「私と圭太君の関係は、そうねえ・・・」

真子はあごに手を当てて少し考えてから

「運命の人よ」

と答えた。

「う、運命つて・・・!?」

「言葉のまんまよ。彼は私と運命の赤い糸で結ばれてるの」

真子が自信満々に頷く。瞬間、

「圭太！！どーゆーこと!？」

「ちょ、落ち着いてよ由美！」

暴走する由美を圭太がなだめる。

「けーちゃん？どーゆー関係なの？」

美春が珍しく落ち着いて理由を問う。圭太は少し頭を掻きながら

「実は・・・」と話始めた。

事は3日前。圭太は1人で地元を走っていた。理由は姉の茶子に頼まれたおつかいと、借りていた本を市立図書館に返すためである。

「さーて、帰ろうかな」

全ての用事を終わらせて、ついでに新しい本も借りたので、さて帰るかと帰路につくと、途中信号待ちで前に2台のバイクがいた。

1台は真子のバイクで、もう1台はゴリラみたいなイカツイ男の乗ったビツクスカーターだった。なにか話しているみたいだが、圭太はさほど気にせず今日新しく借りた本を家に帰ってゆっくり読むことしか考えていなかった。つまりぼーっとしていたのだ。

なので、気付いたら2台の間に割って入ってしまった。2台はいきなり現れた圭太のFXに驚く。

「おいてめえ!!」

ゴリラが圭太に怒鳴りつけた。いきなり怒鳴られた圭太は驚いてゴリラと真子を交互に見合う。そこで初めて自分のしてしまった行為が恐ろしいことだったのだと理解する。

「おめえ俺のナンパの邪魔しよーてのかわよ？ 勇気あんなあ小僧？」

そういつてゴリラは圭太のバイクを見る。すると・・・

「青のFX・・・!？」

顔色を真っ青にしたゴリラは信号も赤だというのにビツクスカーターのアクセルを全開にして逃走した。

「・・・あれ？」

同じく圭太も驚いた。圭太は彼がナンパしていたのではなく、真子がゴリラの彼女だと思っていたので、そこに割って入って行ったことに対して怒鳴られたのかと思っていた。しかし、蓋を開けてみるとただのナンパだったらしい。

ちなみになぜゴリラが圭太のFXを見るなり逃走したのかと言うと、旭が地元のヤンキー繋がり人間に「青いFXに乗ってんヤツ、普通のヤツだけどオレんダチだから手え出したら殺すぞ」と話を回していた。まさかこんな所で役に立つとは・・・。(ちなみに圭太はその話を知らない)

そして、真子から見ると、しつこくナンパしてくる人外から、自分を守ってくれた騎士ナイトのように見えてしまった。

「あの・・・」

啞然とする圭太に真子が話し掛ける。

「は、はい・・・？」

未だ啞然としていた圭太だが、真子に呼ばれて我に返って振り向いた。

（この子・・・制服着てるってことは高校生？しかもヤンキー臭くない・・・可愛いし・・・）

真子がわずかコンマ3秒で思考を巡らす。とたん、顔を赤くして黙り込んでしまう。しかしそんな彼女の考えなど鈍感人間である圭太に解るワケも無く、信号は無情にも青になった。

「あ、信号青になりましたよ？それじゃあ・・・」

「ま、待って！」

突如、叫びを上げて圭太を呼び止める。なんだろう？と思つて圭太が振り返ると、真子が少しモジモジしながらこちらを見ている。少し怖い。

「あの、今のお礼がしたいから、よかつたら喫茶店にでも・・・」

しかし真子が言い切る前に万人が認める鈍感人間である圭太はあつさり

「いえ、お構い無く」

と言つて走り去ってしまった。すげー。

「あ、待って！」

いきなり意表を突かれた真子。信号はすでに赤になるための点滅と言つ名のカウントダウンを始めた。

「このまま、諦められないわよ！！」

ガチャン！とギヤを入れ、ロケットスタート。信号はギリギリ間に合った。

「はぁー疲れた。早く家に帰って本でも・・・」

「待ちなさいーい！！！」圭太が走っていると、後方からさっきの女性の叫びが聞こえた気がした。バックミラーで確認すると

「ん・・・？ええっ！？」

後ろから物凄い勢いで加速してくるバイクが1台。そして白煙。圭太が驚いているうちに気付いたら横に並ばれていた。

「待って！話を聞いて！2分だけでもいい！！」

「わ、わかりましたから、とりあえずあそこのコンビニに入りましょー！！」

さすがの圭太も彼女の必死の追い上げ&なぜか顔に恐怖して頷くしかなかった。

コンビニの駐車場に入り、圭太と真子はエンジンを切った。2人はとりあえずバイクから降りた。

「あの、さっきは助けてくれてありがとうね・・・」

真子は頭を下げた。実際、あそこで圭太が現われていなくても相手のバイクなど真子の愛車の敵では無かっただろうが。

「いえ・・・僕なにもしていませんけど・・・」

確かに、圭太はただぼーっと走っていて偶然真ん中に割って入ってしまっただけだ。特別なことなどなにもしていない。

「そんなこと無いわよ？あなた名前は？」

「な、中山圭太です」

「圭太君、ね」

脳内に名前インプット完了。

「私の名前は赤城真子。年は今年で19歳、趣味はバイクと占い。ちなみにフリーよ」

無駄に細かい説明を終えた真子が圭太を見ると、圭太は自分の後ろにあるバイクを興味深げに見ていた。

「どう？私のバイク」

真子に言われて、圭太ははっ、となった。そう言えば自己紹介あんまり聞いてなかったな・・・。

「す、凄いですね・・・」

圭太は見ながら頷く。真っ白なタンクに緑色のレインボーライン、

KAWASAKIのロゴ。マフラーは右2本、左1本出しのチャンバー。あたりに立ちこめるカストロールの甘い香り……。

「今日時間あるかしら？こんなところじゃなんだし、どこかお店にでも……」

バイクを観察していた圭太に真子が話し掛けてくる。はっとなって圭太はこの後のスケジュールを思い出す……。本読みたい……。

「あ、僕ちよつと用事がありました……」

「あらそう……」

残念そうに、本当の本当に残念そうに真子がうなだれる。しかし、そんなことで諦めるほど真子は生易しくなかった。

「じ、じゃあ今度暇な時に連絡でもちようだい！」

そう言って、真子は1枚の紙キレに自分の携帯の番号を書いて渡した。

「は、はあ……」

圭太は紙を受け取り、とりあえずポケットにしまった。

「じ、じゃあ僕そろそろ……」

「うん またね、圭太君！」

真子は最後にこれ以上無いぐらいの笑顔で圭太を見送った。

「ふふ、相模ナンバーってことはこの辺りに住んでるのね……」
言って、真子は自分の愛車のシートに寄りかかる。後部シートに手を乗せて愛車に語り掛ける。

「これは運命よ……！絶対に圭太君と仲良くなってみせるわ！私に追い付けないものなんて無いわよ！」

そして、愛車に火を入れる。白と緑のレインボーラインのカワサキ MACH2に。

「・・・というわけなんだ」

上の説明を8割以上省略した圭太なりの説明が終わると、由美は「むう・・・！」と悔しそうに膨れている。

「・・・」

由美はもう一度真子を見る。間違いない、女の感が警告している・・・真子も圭太を狙ってる・・・！

「おーい姉貴」

すると突然、真子の後ろから2人の少女が歩いてきた。1人は上はレザーで下はジーンズ。長い髪をポニーテールにした気の強そうなボーイッシュな女の子。もう1人は服装は同じだが髪型は短いツインテール。しかし見るからにやさしそうな、それでいていじめたくなるような・・・気弱そうなオーラ全開である。2人ともどことなく顔が真子に似ているので恐らく姉妹だ。

「凜、紗耶香。どうした？」

真子が少女達に振り向く。凜と呼ばれた少女はつまんなそうに頭の後ろで手を組ながら真子を見る。

「そんな奴らに構ってねーで早く給油して走り行こうぜ？退屈だぜ」

女の欠片も無い、完璧な男口調で喋る。こちらをつまらなそうな顔で見ている。

「あ、あの・・・姉さん、この人達も少し困ってるみたいだし・・・その・・・」

たいして、由美達を気遣ってか、もう1人の少女が申し訳なさそうに言う。しかし由美が目線を合わせると、とたんに真子の背中に隠れてしまった。

「凜・・・圭太君は私の運命の人よ？つまり私の未来の旦那だ」

「ちょっと待てー！！！！」

今の真子の発言に、しばらく黙っていた由美がとうとうキレた。そりゃもう睨んだだけでカラスの一個大隊を粉碎する勢いで。

「なに勝手言ってるのよ！圭太はあなたの運命のなんたらじゃないわよ！！」

由美がすごい形相でまくしたてる。なぜか関係無い紗耶香が「あうあう・・・」と言って気の強い凜の背中に隠れた。

「いいや、圭太君は私の物だ」

「違うの！圭太は私の所有物なんだから！誰にも渡さないわよ！」

「あの、僕は物ですか・・・？」

圭太がおそろおそろツツコミを入れるが、もはや誰も聞く耳持たず。由美と真子は互いに睨み合っていると・・・

「じゃあ、バイクで決めたらいいんじゃない？」

美春が場の空気とは180度違う笑顔で間に入った。

「2人ともバイク乗ってるし、それなら後腐れないでしょ？けーちやんが困ってるから早く決めようよお」

ニコニコしながら言う美春に、真子はふつと鼻で笑った。

「良いだろう・・・私のマツハはそんじょそらの旧車とはワケが違っぞ？」

真子が自信満々に自分の愛車を指差す。しかしそこには・・・

「3人ともマツハってすげーなあ。おう洋介え、見るよこれ。BEETの当時モンの3本チャンバーだぜ！？」

「コイツ、フルトラ化して！？プラグがダイナマイトって・・・シブすぎだぜ！」

話に飽きていた旭と洋介が舐めるようにして真子のマツハを見ていた。

「コリアー！！！！」

真子がツツコミつつ旭達に近づいてきた。

「人のバイクをじろじろ見るな！触るな！私のマツハが汚くなる！！」

怒涛の怒り具合だ。

「なんだよー、優しいのは圭太にだけかよー」

「そーだぜー？悲しくなるぜー？」

汚れ扱いされた旭と洋介がイジケはじめる。2人がボケるとはまた珍しい。

「うるさい！私はリーゼントとか見るからに頭の悪そうな人間に興味なんて無いのー！」

真子がぶちギレると、その背後から・・・美春（覚醒状態）が現れた。

「ふふふふ・・・あつくんの悪口はいけないんだよ・・・？」

笑顔なものもの凄く怖い。翔子と紗耶香がタイミング良く「ひい・・・！」と言つてそれぞれ、由美の背後と凜の背後に隠れた。

「なんだてめえ？頭イカしてんのか？」

そんな美春を見て凜が煽る。

「壊しちゃうわよ・・・？ふふふふ」

「なんだよ？やろうつてののか？」

2人は臨戦体制に入ってしまった。由美と真子も依然として睨み合っている。

「どーすんべ旭？」

「どーすんかな？」

洋介と旭は腕を組んでこの状況をいかに打破するか考えていた。

辺りは一触即発。些細な火種でも大爆発間違い無しだ。そんな時・・・

「み、みんな止めてよ！ケンカはダメだつて！」

この事件の被害者でありさらに原因でもある圭太が睨み合う由美と真子の間に立つ。

「よくわかんないけどケンカしたらダメ！僕だつて怒るぞ！？」

圭太が叫ぶと、2人はとりあえず互いに睨み合うのを止めた。その流れで美春も正気に戻り、凜も舌打ちしながら引き下がる。

「お、圭太あ。良くやった」

旭が後ろから圭太の肩を叩いた。そして、

「じゃあ、決着はレースで付けようや」

旭がまた話をもとに戻した。

「ルールは簡単。この先の高速突っ走ってもと来た国道の入り口に入るまでに前にいたヤツが勝ち・・・どうよ？勝ったら圭太は晴れてアンタのモンだ」

旭が由美と圭太の肩を叩きながら真子に提案する。その提案に真子はふっ、と笑った。

「いいわよ？私のマツハが負けるワケがない」

自信満々に言う真子。対して由美は・・・

「ちよつと旭さん・・・!!」

旭と、ついでに圭太をぐいーつと後ろに引っ張って行った。真子に聞かれないくらいの位置についてから耳打ちする。

「ちよつと・・・！私レースなんてやったことないわよ!？」

さつきまで強気だった由美だが、さすがにレースとなると話は違う。しかも今日初めて走った高速道路だ。しかし旭は

「心配すんな。洋介と2人で魔法使ったからよ・・・?」

まるで新しいイタズラでも思いついた子供のようにニヤニヤしながら言う。そして作戦を伝える。

「・・・と言うわけだ」

「・・・わかったわ!」

「・・・」

旭の提案に、乗り気になったのか由美はグッと立ち上がって真子に向かって歩いていく。

「レース、するの？しないの?」

「いいわ！受けて立つわよ！私のゼファーちゃんが負けるわけ無いもの!」

先ほどまでの弱気はどこへやら。由美は自信満々に言い放つ。

「ついに始まるデスレース！自信たっぷり満タンの真子ちゃんのマツハに、由美ちゃんはどうか戦うのか!?次号をお楽しみに!」

「おい美春。オメーなにやってんだ？」

第18章 ハイウェイバトル!? (前書き)

あとがきは登場人物紹介です!

第18章 ハイウェイバトル！？

かくして、2人のレースが始まろうとしていた。

「ルールはさつき話したとーり！こっから国道の入り口まで！！先に行ったら勝ちだ！」

旭が再度説明をしている。

「な、なんでレースになるんですか・・・？」

圭太がワケがわからないと言った感じで旭に聞くと、美春が横からニコニコしながら肩を叩く。

「けーちゃん・・・？無自覚ほど怖いものは無いよ？」

「は、はあ。一応しつかりしてるつもりなんですけど・・・」

「わかってないなあ〜ゆーちゃん大変だあ」

ガツクリため息をつく美春。それでも圭太はなぜこんなレースが行われることになったのかわかっていない。

一方、レースに出る2人は旭の説明を聞くのに集中していた。由美は相手のバイクを盗み見る。

カワサキが70年代に生んだじゃじゃ馬、マツハシリーズ。その中でも500SSマツハ？をしのぐリッターあたり130馬力を誇る350SSマツハ？の後継マシン。400SSマツハS3。パワーは初期型350の45馬力に劣る42馬力だが、排気量が上がったためトルクがアップ、車軸も伸びたりと足回りも洗練された400マツハは単なるエンジンパワーと装備増加による車重以外は全ての面で勝っていると言って過言ではない。

「で、勝負になったワケだが・・・」

その時、洋介が真子のマツハの目の前に来て話しはじめる。

「由美ちゃんは今日初めて高速走った子なんだけどさあ、君はよく走るのか？」

いつもの変な態度ではなく、普通に話し掛けている。対して真子は「むむ、毎週2回は走るようにしているけれど・・・高速経験がないの?」

少し驚いたように真子が由美の方を見て言う。

「ああ、そうなんだよ。だから負けちゃうかも知らないね、むしろ無理だよ、うんうん」

なぜか空を見ながら1人納得して話す洋介。なんか嬉しそうだ。

「そうなの・・・」

真子が自分の愛車と由美の愛車を交互に見てつぶやく。真子自身が手塩に掛けて組んだこのマツハが、見た感じ外装とショート管以外ノーマルの由美のマシンに負けるわけが無いと心の中で断言していた。

だが、ここに来て彼女は迷い始めた。これは、女と女の意地を賭けたレースだ。自分は走り慣れている。マシンも完調、エンジンも綺麗に回る。しかし相手は高速初走行のほぼノーマルゼファー。これでは正々堂々とは言い難い。むしろ弱いものイジメだ。

「・・・てあげる・・・」

「へ?」

真子がかつぶやいたが、由美には聞こえなかった。そんな由美を見て、真子は大声で言った。

「ハンデつけてあげるって言ったのよ・・・!!」

「え・・・!?」

真子の言葉に、由美は驚く。先ほど旭の話した計画に無かった話だ。

「考えてみたら、私のマツハが初心者の乗るゼファーに負けるわけ無いのよ。だから、あなたがスタートして30秒待ってからスタートしてあげるって言ったのよ!？」

「むっ・・・」

さすがの由美もこの上から目線の発言にカチンと来た。負けず嫌いの由美は悔しくなり真子にそんなものいらないと言おうとすると、

旭が「まあまあ」となだめる。

「あちらさんがそれでいいならいいじゃねーか。こちとら、走りだした時から有利なんだからよ」

旭がこそこそ耳打ちする。

「わかつたわ・・・！」

由美は真子のそのルールでいいと伝えると、気合いを入れるためと緊張を解すため屈伸を始める。

「姉貴！ブツチギレよ!？」

「お姉ちゃん・・・」

凜と紗耶香が後ろから姉の応援をする。

「じゃあ、俺達もみんな由美ちゃんについていくから準備すんべえ」

旭が言うと、皆自分の愛車に向かって歩いていく。

「ちなみに俺と洋介はちゃーんとそつちが30秒遅れでスタートするか見てなきやならんから、しばらく待機すんわ」

「・・・いいわよ」

真子がぶつきらぼうに返事する。

「じゃあ決まりな」

そう言うと旭は由美達になにかこそ話している。まあ、なにかレースのアドバイスだろうと真子達は余裕を持って見ていた。

「・・・つーことで、がんばれよ」

言って旭は洋介の方に戻って行った。

「じゃあ、スタートすんぞ！10秒前!!」

旭がカウントを出す。由美達が1人ずつエンジンに火を入れていく。周りから旧車のエンジン音聴きたさに野次馬が集まり始める。

「5、4、3、2、1、」カウントが2になった瞬間、由美がギヤを1に入れた。

「GO!!」

「コアアアアアア!!!」

スタートと同時に、由美のゼファー改FXの直管から爆音が轟く。全開だ。後から圭太や美春達が続く。

「音だけはいいわね」

真子が遠ざかっていく由美のゼファーを見つめる。

「音だけかい？」

「クラッチ繋ぐのは下手だし、急に全開にしすぎよ。半クラの時間が長いからウィリーはしなかったけど、危ないわね。飛ばなければいいけれど・・・」

話にならない、しかし心配している感じの真子を見て旭は少し胸が痛くなった。元々この計画は実行しなくなかったが、まっとうなレースとなれば、負けるとわかってても由美はムキになるだろう。それで事故をしてもraithたくなって取った作戦だが、真子の真っ直ぐすぎる心を見て少し罪悪感が生まれた。

「そろそろ30秒前だ！」

洋介が騒いでいる。時計を見るとあと14秒だ。

「よし、圭太君に良いところを見せるためにも、がんばるわよ!!」

「俺達3人でトップは総なめだぜ！」

「り、凜お姉ちゃん・・・」

姉妹は仲良く話し合っている。それを横目に旭達も愛車に跨がる。

「じゃあ、スタート10秒前!!」

旭のカウントが始まる。周りには先ほどの野次馬がマッハやサンパチ、ヨンフォアの音を今か今かと待ち構える。しかし・・・

しゃここここここ・・・しゃここここここ・・・しゃここここここ・・・
ぶすん。

1台キックしても掛からないマシンが1台。それはなんと真子のマッハだった。

「姉貴!どうしたんだよ!!」

「くそ！なぜ掛からないの！？」

進んでいくカウン트에焦って一心不乱にキックする真子。

「3、2、1・・・」

「・・・この！！」

真子が苛立つてキックするが掛からない。それを見ていた旭がカウン트를止めた。

「じゃあ、先に行ってんわ！！！」

カーンカーン！！！！カアアアアアン！！！！

「よ、がんばりな？」

フォンフォン！！！！ドオオオオオ！！！！

旭と洋介は一足先に加速して行った。それを悔しそうに見ながら、凜が姉に駆け寄る。

「どうしたんだよ姉貴！？さっきまでバツキバキに決まってたじゃんかよお！？」

凜は姉のマツハを見る。一見変わったところはなにも無い。キックも降りている。

ちなみに彼女、メカのこととはあまり詳しくない。ただ適当に怪しそうなところを探すだけだ。

「お姉ちゃん！」

紗耶香がマシンに駆け寄ると、真っ先にマフラーの出口に軽く触れる。

「1番、2番、3番・・・ちゃんとさっきの余熱もあるし・・・」
意外なことに、彼女がこの中で1番メカに詳しい。マフラーエンド

の温度は3本揃っている。先ほどまでは綺麗に回っていたと言つくとだ。

「……!?お姉ちゃん!キック止めて!!」

すると、紗耶香は突然プラグを見る。すると……

「嘘……!?」

「どうしたんだよ紗耶香!？」

凜がわからないと言う風に訪ねる。

「普段のお姉ちゃんなら絶対に気付いてた……プラグが半分だけ抜けてるの!3本共全部!!」

「な……!?」

言つて真子は軽くキックを下ろす。

「確かに……圧縮が無い……!」

キックは僅かだかいつもより軽く、片手でも簡単に降りてしまった。

「あいつら……!」

真子の目に怒りの炎が宿る。その目はまるで怒れる獅子そのものだ。

「そうまでして圭太君を渡したくないか……だが舐めるな!私のマツハが負けるわけが無いのよ!!」

再度3本のプラグを挿し直すと、エンジンは呆気なく生き返った。

「待つてなさい!ぶち抜いてあげるから!!」

ガチャガチャ……!!

クアアン!!クアアン!!!!ギヤワアアアアン!!

カワサキ特有のメカノイズの混じったマツハの爆音が辺りに轟く。辺りは白煙だらけになり、白煙が消えた後、そこには3台のマツハの姿は無かった。

「上手くいったのかしら？」

後ろを振り向きながら美春がつぶやく。

現在、ベイブリッジ中間あたりを先頭を由美が。2番手が圭太。少し遅れて翔子と美春が続く。

「それにしても、もう由美さん見えないです・・・！」

翔子が前を見ながら美春に叫ぶ。翔子は愛車、CB350Fourにムチを打って飛ばすが、先頭2台についていけない。唸るエンジン音と振動、道路の継ぎ目に気を付けながら頑張っ走っている。

「ゆうちゃん、意外と速いねえ」

美春がのんびりしながら翔子に返す。ちなみに、美春のサンパチは本気で走ればそこそ速い仕様だが、後から来る旭を待つためにスピードを落としている。

「ゆうちゃん大丈夫かなあ？」

「多分、圭太さんがいるから大丈夫・・・かな？」

「だよねえ・・・」

2人は圭太のことを思い出してため息をした。全く、無意識で鈍感とはこんな恐ろしいのかと思いつた2人である。

「楽しいー！！！！」

ゴアアアアアアアア！！！！！！

一方、ベイブリッジを渡りきる寸前の位置まで来ていた由美のテンションは最高潮に達していた。

「速い速い！あんな女のマツハなんか目じゃないわ！！」

あはははは！！とか笑いながらゼファー改FXを走らせる由美。

「由美・・・！少しペース落として！！」

その後ろを、FXに乗る圭太が追い掛ける。しかし・・・

「は、速い・・・」

全く追い付けないワケではないが、パワー差がデカイためなかなか差が縮まらない。

橋を渡り切ると、下り坂になっている。圭太が後ろから見ていると、由美は下りに入ってさらにスピードを上げた。

「速い速い速い！！！！」

きゃっきゃと笑いながら加速する由美。しかし・・・

「危ない・・・！！」

圭太が叫ぶ。その先には・・・

「右カーブ！？」

由美も慌てて減速する。目の前に迫る白い壁に恐怖しながらも懸命にエンジンブレーキやフロント・リアを効かせてコーナーに侵入する。

「よし・・・！行ける！！」

そう思ったその時・・・

ズリっ・・・！！！！

「由美ーーーーー！！！！」

由美のゼファーのリアタイヤが継ぎ目に取りられて一瞬浮いた。目の前は白い壁。速度は現在100前後。絶望的だ。しかし・・・

ギョギョギョギョギョギョギョ……！！！！！！

「!?!」

跳ねたリアタイヤは着地した後、まだ回転を続けていた。そしてそのまま空転、横滑り。壁にそって流れていく。

「嘘……!?!」

由美はドリフトしてコーナーをクリアした。その後の姿勢の直し方も綺麗に出来ていた。

「由美……!?!」

圭太が目の前のゼファーに並んだ。スピードを落としたゼファーに乗る由美の顔を覗き込む。

「由美!大丈夫……!?!」

圭太が言い掛けて黙ってしまった。由美は目を見開いて呆然としていた。

「け、けいたあ〜」

ガチガチガチと震えながら振り向く由美。圭太の顔を見て安堵したのか、泣きそうな顔である。

「こわかったあ……」

そして泣いた。

圭太はため息をついて

「とりあえず、安全運転。ほら、前見て」

「うん……」

半泣きの由美の横を、圭太はゆっくり走った。出口はもう近い。

「大丈夫かね〜由美ちゃんらは」

旭と洋介もベイブリッジの中間手前に着いた。結構なスピードで飛ばしているののでこの分ならそんなに遅れずに追い付けそうだ。

「しっかし・・・！あのマツハ姉妹大丈夫かあ？」

洋介が旭と並びながら走る。

「しっかたねーべ！あんなんと高速でヨーイドンしたらオレらだって勝てねーよ！！」

旭は苦笑いで洋介に叫ぶ。峠なら、トルクがあつてなおかつそのトルクを補える幅広いギヤ比のサンパチやホイールベースの短いヨンフォアでも戦えるかも知れないが、あのパツと見たただけであんなにイジッているマツハにストレート勝負など、分が悪すぎるどころの話ではない。

「しかし、プラグを抜くなんてよく考えたなー」

あつはつはと笑いながら洋介が言う。

実は旭と洋介は真子のマツハを観察していたとき、すでにプラグを半分だけ抜いていたのだ。あれなら圧縮もスツカスツカになりすぎることもプラグコードが浮きすぎるということも無い。さらに言うなら、マツハ系のエンジンはフィンが高いので、真横や真上から見たただだとプラグがちゃんと挿入されているか非常に分かりにくい車種なのである。

「あれじゃキックしたって火しか飛ばねーし。焦ってたから今もまだ気付いてねーんじゃねーか？」

洋介が笑いながら言う。しかし・・・

「いんや、そーでもねーみてーよ？」

「・・・？・・・！？」

旭にバックミラーを見ると手でやられたので洋介も見てみると、後ろから凄い勢いで1台のバイクが追い上げてきた。

「嘘だべ・・・！？」

洋介が度肝を抜かれたと言わんばかりの表情でミラーを見ている。

「ありや、本当にじゃじゃ馬だな・・・！」

旭も舌打ちしながら後ろを見る。

マツハが、すぐそこまで来ていたのだ。

「まずお前等からだ・・・！」

真子が恨むように呟く。マツハの特技であり、当時の同クラスのバイクの中でもずば抜けた性能であるストレートでの加速性能を十二分に発揮した走りでの前の2台に迫る。

「お、おい・・・！速えぞ・・・！」

洋介がミラーで後方を見ながら旭に叫ぶ。

「でーじよぶだ・・・いくら速くたってこんだけ差がありやあ・・・！」

しかし、旭は舌打ちしてサンパチのギヤを落とす。

「勝てるとは思えねーが、いっちょよう張ってみますか・・・！」

旭のGT380はシヨットガンチャンバーからマツハに負けない白煙と爆音を発生させながら加速していく。GT380の『RAM AIR SYSTEM』を搭載した2スト3気筒エンジンは、よく『おとなしい性格の2スト3気筒』と言われていたが、実際はマツハの後継車であるKHよりも鋭い吹け上がりを見せる。それに旭の積極的なまでのライディングが合わさってかなり速いペースで走ることが出来る。しかし・・・

「チイっ・・・！」

軽く舌打ちをする。確かにKHをしのぐレスポンスの良さや旭のライディングテクニックがあっても、勝てる要素があるのは峠やワインディング。しかしここは直線、ストレートなのだ。

「バイバイ・・・！」

ギャアアアア・・・！！

横をマツハが通り越して行く。

「チツ・・・！」

目の前に躍り出た、GT380と同じ2スト3気筒マシンの白煙とオイルを浴びて、旭は舌打ちした。距離はぐんぐん離れていく。

「旭・・・！」

洋介がケツについてくる。洋介のヨンフォアは機動力が良いが加速、最高速はこの中では翔子のCB350Fourに次いで悪い。かなり最悪な組み合わせだ。

「まず2人……!!」

真子が勝ち誇ったかのように1人つぶやく。

ちなみに、後の2人。凜と紗耶香は旭達のさらに後方にいる。2人の仕様の関係で真子ほど飛ばせないのだ。ちなみに凜がコーナーなどが得意なワインディング仕様。紗耶香のは250のノーマル仕様だ。

「姉貴……!負けんなよ……!」

凜は紗耶香のペースに合わせながら走る。そして紗耶香も姉の勝利を願いつつ、事故はしないで欲しいな、と思った。

「美春さん!なにか後ろから……!」

同じ頃、橋の出口付近を走っていた翔子が隣を走る美春に叫ぶ。

「あれ、あつくんじゃない……!!」

バックミラーを覗いた美春も嫌な予感を感じた。まさか旭が抜かれるなど考えてもいなかった。が、よくよく考えれば、サンパチがマツハに高速バトルで勝てる訳が無い。美春は最初はそう思い直した。しかし

「なら!あつくんの敵を取らなきゃ!」

美春はやはり、旭のことしか考えていなかった。

しかし、エンジンの仕様は旭と同じ。旭が勝てなかった相手に勝てるとは思っていなかった。ならば……

「問題は、どうやって格好良く負けるか……よね」

語尾に締まりが無い独り言をつぶやいた。

すると目の前に先ほど由美が危うく壁の餌食になるところだった右コーナーが見えた。そして大型トラックが1台。そこで少し考えて・

・
「しーちゃん！無理に付いてこなくていいからね！」「え・・・！？」

驚く翔子を1人置いて行き美春は残りのストレートを全力で駆けてく。しかし、すでに真子のマツハは翔子を捉えていた。

「3人目・・・！」

真子は間髪入れずに翔子のすぐ横を抜けていく。

「きゃ・・・！！！」

翔子が為す術無く追い抜かれる。

「・・・！！！」

美春はそれをミラーの片隅で捉えたが、すぐに目の前のコーナーに集中する。後ろにマツハが着いた。

「4人目行くわよ！」

マツハがさらに加速する。しかし

「トラック・・・！！？」

真子は先のコーナーと目の前のトラックと、そのすぐ後ろにいる美春を見て驚く。なぜなら、ブレーキをまだ掛けていないのだ。

目の前のトラックがコーナー手間で減速のためにブレーキを踏む。

そして美春も踏むハズなのだが・・・

「げ、減速しない!？」

真子が驚きの声を上げる。真子はすでにコーナーへの侵入の為に減速していた。しかし、2ストの為にエンジンブレーキは使えず、前後輪のブレーキで減速しつつトラックの外側、つまりアウトに進路修正した。スピードを落とさず、立ち上がりを重視した結果だ。しかし目の前の美春はトラックの真後ろにいて減速しない。徐々に前のトラックとの距離が縮まる。真子はもうダメだと思った。しかし。

グアアアアアアア！！バリバリバリバリ！！

ここにきて一気に美春のGT380が減速体制に入る。そして強引

に車体をインに向ける。

「いつけえええ！」

美春のサンパチがトラックをインから抜いた。突然現れた美春と目のあったトラックのドライバーが驚いた。が、美春はそのままコーナーに侵入。真子のマツハもコーナーに入ったが未だアウト側。そのままコーナリングを続けてコーナー出口でようやく前が出る。目の前には・・・

「・・・なんでよ!?!」

美春が先頭を走っていた。美春はあのままトラックのインから前に出ていたのだ。

「このおおお！」

真子が絶叫しながらストレートで思い切り加速。途中フロントが浮き上がりそうだったがなんとかこらえて美春のサンパチを追い抜いた。

「4人目・・・!?!どう!?!思い知ったかしら!?!」

マツハの加速力を最大限に使いぶち抜いた真子が美春を見ると、なんと美春は笑顔で手を振っている。

「なっ・・・!?!」

1人頭の中で考える。

(あの女がもし私のマツハより高性能なバイクに乗っていたら、私は負けていた・・・!?!?)

しかしすぐに頭を振った。あれはまぐれだ。あのマツハより重たいサンパチが私以上の速度であるトラックの内側を『狙って』回れるはずがないと。

しかし、美春のGT380には旭以上にある特徴があった。それは足回りである。

美春のGT380はフロント周りがGTシリーズの最高峰、GT750後期のフロントフォーク及びダブルディスク。リアはGT550のシングアームにドラムブレーキはノーマルワイヤー式からロッド式に変更されている。どの足回りも現代のバイクに比べたら性

能は下だが、当時のバイク、それも中型車に装着すればかなりのストッピング能力を発揮する。

そして・・・

「美春さん！」

翔子がCB350Fourにムチを入れて追い付いた。

「だ、大丈夫ですかあ!？」

泣き顔で叫ぶ翔子。後ろから見ていた翔子からは、美春がトラックに並んだ瞬間、コーナーの奥に消えた瞬間「転倒した・・・!？」
と思ったらしい。心配しながらかつ、泣きながら叫ぶ翔子に、美春は笑顔でこう答えた。

「女の子はね、強いんだよ」

そう。美春はまさに気合いと根性と愛で曲がり切ったのだ。恐るべしだ。

「格好いい負け方・・・だったかなあ？」

美春は1人呟く。そして、今になって自分が凄く怖いことをしたんだと思うと急に怖くなった。偶然上手くいったものの、失敗していればコンクリートのシミに化けていたかも知れない。その時・・・

「美春ー！」

後方から自分と同じサウンドを響かしながら、旭と洋介が追い付いてきた。

「美春！大丈夫だったか？」

旭が美春の隣に並ぶと、さっきまで自分の中にあつた恐怖がどこかに吹っ飛んだ。

「大丈夫だよお！あつくん」

そして美春は、自分には彼がいればなんでも出来ると再確認した。

一方、真子はぐんぐん加速していく。前には何台かバイクがいるが、

あれは圭太や由美では無い。2人はどこまで先に行っているのか。考えて止めた。

「どこまで走ったって、私のマツハからは逃げられないわよ圭太君
！！」

言っつて、真子はハイウェイを飛ばした。

その先に2人がいないとも知らずに・・・

第18章 ハイウェイバトル!? (後書き)

登場人物紹介

赤城 真子

職業 大学1年生

誕生日 4月22日(現在19歳)

髪型 ロング(黒)

身長 170?

愛車 KAWASAKI 400SS MACH?改

家族構成 父・母・凜(妹)・紗耶香(妹)

好きなもの 圭太・姉妹・マツハシリーズ・カストロールの香り

嫌いなもの チャラチャラした奴・軽い男・汚いことをすること

マツハ3姉妹の長女。曲がったことが大嫌いな性格でいつも正々堂々をモットーにしているという『硬派カワサキ』を体現している。

しかし圭太の事になると我を忘れてしまうことも多々あり。悩みはよくへんな男に絡まれること。マツハのことが大好きでマツハに乗れることを誇りに思っている。ストレート勝負やゼロヨンなどの高速バトルを得意とする。

赤城 凜

職業 高校2年生

誕生日 5月22日(現在17歳)

髪型 長いポニーテール(黒)

身長 167?

愛車 KAWASAKI 400SS MACH?改

家族構成 父・母・真子(姉)・紗耶香(妹)

好きなもの 姉妹・マツハ・強い奴、速い奴・プロレス

嫌いなもの ナヨナヨした奴・理論的に物を言う奴・お化け、ホラ

Ⅰ・小説・メカ

マツハ3姉妹の次女。口調が男のように乱暴なので可愛さのかけらもないが、顔は真子の妹だけあって可愛い。が、本人はそう言われるとキレる。自分の愛車のメンテナンスは他の姉妹にまかせっきりのためメカの事には疎いが、峠などコーナーを攻めさせたら姉妹で1番上手い。紗耶香とは双子であるが、性格は真逆で凶暴なので紗耶香は苦勞している。

登場人物紹介

赤城 紗耶香

職業 高校2年生

誕生日 5月22日（現在17歳）

髪型 短めのツインテール（黒）

身長 166？

愛車 KAWASAKI 250SS MAHC？

家族構成 父・母・真子（姉）・凜（姉）

好きなもの 姉妹・バイク全般・平和・長距離ツーリング・バイクイジリ

嫌いなもの もめ事、ケンカ・お酒・煙草

マツハ3姉妹の三女。その性格は姉妹の中で1番おとなしく平和的。愛車のマツハは唯一の250ccノーマル。ノーマル仕様ということでなめられてしまいがちだが、実は全て紗耶香が自分で完璧にオーバーホールしたマシンなので、へたな改造をした族車より断然速いので、絡まれたらすぐ全力で逃げる。姉妹のマシンのメンテはすべて彼女が見ている。凜とは双子であるため顔はすごく似ているが性格は真逆。

第19章 横浜 港風（前書き）

今回はバイク少なめです汗

第19章 横浜 港風

ギヤアアアア！！クアアアアアン！！！！

真子はひたすらに高速を走らせていた。しかし走れども走れども一向に由美達の姿は見えない。正直、これだけ飛ばすとガスが危うい。燃費の悪さも同年代のバイクでトップクラスのマシンを減速させる。

「まさか・・・いや、ここまで来たら間違いない・・・！」

2人はすでに高速を降りているのではないか？もし先を走っているならば、なぜハンデが必要なのか？これだけ速ければ逆に自分がハンデを貰わなければならない。ならば、2人は高速を降りたと考えた方が正しいと真子は考えた。

「私としたことが・・・！」

真子は悔しそうに目を細めながらつぶやいた。

「仕方がない・・・今はガスが重要・・・！」

真子は舌打ちして、高速を途中で降りた。高速での立ち往生は危険なうえ、姉妹にも迷惑を掛けてしまう。真子は恨めしそうな顔で今降りた高速の高架を見上げながらスタンドに向かった。

一方、由美と圭太はやはり途中で高速を降りていた。しかもかなり速い段階で降りていた。あの由美が転倒しかけたコーナーから近い「本牧産業道路」付近の出口で2台のカワサキが停止していた。その側で由美と圭太が座って待っていた。

「上手くいったかしら・・・？」

由美が出口を見つめながら問う。旭の作戦内容は

「まともに張るのは得策じゃないから、途中本牧の出口で降りる」だった。ちなみに「エンジンのプラグを抜いて時間稼ぎをする」と

は由美も圭太も聞いていなかった。

「多分大丈夫だよ。それより由美・・・」

「なに？」

「さっきのアレだけど・・・」

さっきのアレとは由美が高速コーナーで飛びかけた話である。

「ああ、あれね・・・」

由美が少しバツが悪そうにする。自分の腕の過信が誘発させた事故寸前の出来事に、圭太は少しキツめに注意する。

「ダメだよ、調子に乗っちゃ！今回はたまたま無事だったけれども無茶しちゃダメだからね！！」

圭太が珍しく怒った。由美を心配しているからこそ、圭太は力を込めて由美に言った。

「ご、ゴメン・・・」

由美は圭太の気迫に押されて素直に謝った。あれはどうしたって完全無欠に自分が悪い。今回は由美が素直に謝った。

「まあ無事だったからよかったけど・・・」

圭太がため息をつく。由美もつられて「はぁー」とため息。

「でも、やっぱり旭さんには内緒にしといた方がいいよね・・・？」

圭太が由美にたずねると、由美はそれこそマツハ並みのスピードでコクコクうなずく。もしこれが旭の耳に入ったりなぞしたら・・・

「考えただけでも恐ろしすぎるわ・・・！」

「だよね・・・」

それから2人はバイクがどこか壊れていないかを確認する。

『古いバイクは、高速走ったら確認したほうがいいですよ』

と翔子に言われたのだ。古いバイクはいろいろなところでガタが来ているので高速走行の振動などでネジやウインカーが取れて配線で繋がったままぶら下がっていたり、オイル滲みが目立ったりすることがある。

2人が一通り確認を終えた時、出口から聞き覚えのあるエキゾース

トが数台分聞こえてきた。

「ゆーちゃん！けーちゃん！」

美春が叫びながら手を振る。いつも元気な人だ。

由美達の前で4台が停まった。ようやく皆そろった。

「作戦は！？」

由美が旭にたずねると複雑そうな顔をしながら答える。

「あんまし、完全に成功とは言えねえなあ」

「何ですか？」

由美が不思議そうにたずねると、旭が先ほどの出来事を説明する。

あの狂暴的な加速で4人をごぼう抜きにしたあのマツハの話を……

「ありや、高速でバトるのは無理だわ。作戦は成功だが、もし本当
に出口まで走ってたら、間違いなく誰も勝てなかつたろーよ」

旭が不機嫌そうに言う。いくら相手がマツハだったとは言え、相手
は女。しかもマツハと同じ2ストリップルのサンパチが為す術なく
ぶち抜かれたとなれば、機嫌も悪くなるだろう。

「まあ、何事も無くてよかつたですよ！」

翔子が場を明るくしようと声をかける。

「確かに翔子ちゃんのゆーとーりだぜ？これで事故つてたらアウト
だもんな」

洋介も賛同した。ちなみに洋介が機嫌がそこまで悪くないのは、最
初から高速で勝負して勝てないと解っていたためだ。

「ま、峠なら負けねーけどな」

洋介が付け足す。

「そりやともかく、ようやく邪魔がいなくなったコトだし、とりあ
えず本来の目的を遂行すんか」

旭が気を取り直した。サンパチのシートに腰掛けてタバコを吸いな
がら皆を見る。

「そうですね。気を取り直して横浜観光に行きますか！」

圭太が締めて、6台はまた下道を走り始める。
途中ガソリンスタンドで給油に立ち寄り、6台全員が給油するものだからガソリスタンドの店員も苦笑いであったが、それは些細な事件である。

満タンになった愛車達をまた走らせる由美達。

「みなとのヨーヨーコハマヨコスカー」

由美が走りながら歌い出した。すかさず圭太が

「それは横須賀の歌」

とツツコミを入れると今度は美春が

「真夏のお夜にバリバリ」

「それは横浜違いです！ていうかさつきからネタが古すぎます！！」

最近、圭太のツツコミスキルが上がってきた気がする。

「あつくん好きだよね」

「あ？俺は『キャロル』のが好きだよ」

どうやら微妙に違うらしい。見た目は銀蠅、好みはキャロルの旭の説得力の無い言葉を無視して

「とおばすぜいべ こおんやはれいで」

と美春は歌い続けたが、信号待ちでも止めないので旭が無理やり止めさせた。てかなんで知ってるんだ美春・・・歌が気になる人はよ一つべで見てみてください。

「もうすぐ山下公園だからよ？そこから回るべ」

「氷川丸があるところですか？」

翔子が訪ねる。すると洋介が

「おうよ！どうよ翔子ちゃん、タイ○ニックごっこやらない？もちるん、俺がディカプリオで・・・」

「バカかおめーは？」

旭のツツコミも挟みつつ、一同は山下公園にたどり着いた。

山下公園のシンボルと言えば、やはり『氷川丸』と『赤い靴の少女

の像』が有名だ。

氷川丸は第二次世界大戦で病院船として活躍する前までアメリカ行きの客船として活躍。戦後も郵便船として活躍した後、現在は静態保存されて山下公園に繋留、博物館として街のシンボルになっている。

「大きいわね！」

由美がその優雅な姿を見て感嘆する。

「いやーでけーなー・・・とりあえず行くか？」

旭が皆に確認を取ろうと振り向くと、皆すでに入り口に向かって歩いていた。

「俺を置いてくなくー！」

こうして船内に入場した。中の通路はなかなか狭く、扉も小さい。豪華な食堂や客室などを見て周り、最下層の機関室に入った。

「うわあ！！なんかゴツゴツしててかっこいい！！」

由美がいちいちはしゃぐ。

「このシヨベルカーの手みたいなのってなんですか？」

翔子が旭にたずねると

「こりゃ、コイツのエンジンだ。ちなみに俺達の單車にも付いてるぜ？」

「へえ、やつぱり船のは大きいのね」

由美が興味津々に見ている。ちなみに今旭が説明したのはバイクで言うところのコンロッドにあたる部分だ。

やかて外に出た由美達は、少し自由にデッキを歩くことにした。

「圭太！どこ行く！？やつぱり船首！？」

「それもいいけど、上の方を見学したいなあ」

圭太が指差す先にあるのは船を操る舵輪などがある、要は船の頭脳のような場所だった。

「ロマンチックじゃない」

「なんでロマンチックしなきゃいけないのさ？」

ガスっ！！

由美が足を蹴っ飛ばした。

「痛っ！」

「ふん！」

「ゆーちゃん、可哀想だね」

「ですね・・・」

後ろから女性陣2人が聞こえないようにささやいた。

「計器類がたくさんあるね」

圭太達が内部に入ると、そこは舵輪や伝声管や計器やらなんやらが
たくさんあった。

「見てみて！『取り舵いっぱい』があるよ！」

由美がテンションを高くしてはしゃいでいる。先ほどとは大違いだ
が、

「それは舵輪だよ。ていうか触っちゃダメだよ」

「固いなあ・・・」

そんなやりとりをしながら、2人はまたデッキに出ると・・・

「あつくうん えへへ」

「引っ付くな！！」

デレンデレンになっている美春と、恥ずかしがりながら美春を引き
剥がす作業をしている旭に遭遇した。

「美春ちゃん・・・何やってるのよ・・・」

美春の大胆な行動を呆れながら見ていた由美が一応聞くと

「豪華客船でイチャイチャしてるの えへへ」

と締まらない顔でのたまう美春を見て由美は少し不機嫌になる。

「いいところ来た・・・！由美ちゃん！ちよっと手伝ってくれ・・・
！」

恥ずかしがりながら由美と圭太に頼む旭を一瞥して、由美はっーん

とした後

「圭太、いこ！」

「え、ちよつと由美・・・！いいの？」

圭太が心配そうに聞いてくると

「いいのいいの！」

と、なにやら怒りながら踵を返して去って行く。

「ちよ・・・！助けるよ！！！」

「あつくうん へへへ」

旭の必死の救難信号は何故か由美を不快にさせたらしく、美春という氷山に激突、沈没した。

しばらく歩いていると、前方のベンチに2人の男女が座っていた。

「あははは！面白いです！洋介さん！」

「だろ？そんでさあ・・・」

翔子と洋介が楽しそうに話していた。会話は弾んでいるようだ。

「他にはなにか面白い話ないですか？」

「じゃあ次はオレの特技！物まねだ！由美ちゃんの物まねやるぜ！

・・・『さあ！早く行きましよう圭太！？』・・・どう？」

「あはははは！似てます！」

「似てないわよ」

「「！？」」

由美の登場に激震が走る2人。そりゃ本人の物まねをしている時に後ろからその本人に声を掛けられればそれは驚くだろう。

「ゆ、由美ちゃん・・・に、似てなかった・・・？」

冷や汗かきながら洋介がたずねる。

「1ナノも似てないわよ」

「な、ナノつてあんた・・・」

洋介が己の物まねの再現レベルを全力否定されてへこんでいると「翔子ちゃん？ずいぶん洋介さんと仲良くなったじゃない？」

由美が翔子の肩を掴んでささやく。笑顔なのに笑っていない目を見て翔子はたじろぐ。

「そ、そんなことは……！あの、その……ゆ、由美さん……？」

「ふん！」

かなり不機嫌になる。そして

「さあ！早く行きましょう圭太！」

「あ、由美……！」

怒ってその場から圭太を従えて去っていった。残された2人は……

「い、今の由美ちゃん……似てたよね……？物まねと……」

「は……はい」

不思議な雰囲気に含まれていた。

「ちょっと由美……！」

スタスタ先に行ってしまう由美に圭太が声を掛ける。

「なによ？」

「いや、さつきからどうしたの？急に機嫌悪くなったり……」

「そんなこと無いわよ」

「いや、あるよ」

むすつと否定する由美に圭太がさらに否定する。やはりさつきからなにか変だ。

「別にイ〜？そんなことないわよ」

「いや、絶対変だよ。なんで怒ってるの？」

圭太がとりあえず質問すると、由美は船の手摺りに捕まって海を見ていたが、悲しそうにこちらに振り向いた。

「じゃあ聞くけど……今日いきなり出てきたあの女……どう思ってる？」

由美の質問に圭太は一瞬考える。あの女とは恐らく真子のことだ。

「どうって・・・別に」

「あの人、スラツとしてるし美人だし年上だし・・・綺麗よね」

由美が笑いながら言う。が、それはいつもの向日葵みたいな笑顔では無く、自嘲の笑みだ。

「圭太？私とあの女なら・・・どっちを選ぶ？」

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

由美の質問の意味が全くわからない。

「別に選ぶ必要なんかないじゃないか」

「あるわよ！」

圭太の声を遮って由美が強く言う。

「私・・・圭太があの人に連れて行かれるんじゃないかって不安だったんだから！」

恥ずかしそうに、しかしはつきりと圭太に叫ぶ。

そして今の宣言を聞いた、鈍感を極めた圭太もさすがにこれは恥ずかしかつたらしい。が、

「べ、別にどこにも行かないよ！確かに真子さんは知り合いだけど、僕はどこにも行かないよ！」

今の由美の発言以上に恥ずかしいセリフを言ってしまった。

「あ、いや・・・その・・・」

「圭太・・・！」

一方由美は今ので満足したらしい。さっきまでのくらい顔から一転、いつもの向日葵みたいな笑顔が咲いた。

「け、圭太にしては上出来ね・・・！じゃあ、今回はこれで許してあげる！」

そう言って笑った。圭太としては、なにが由美をあんなに怒らせたのかよく解らなかったが、今回はこれでいいかな？と思った。

そんなこんなで船を降りた。美春が「まだあつくとタイ○ニツク
ごっこしてなあい!!」とかほざいたが皆一斉にシカトした。ナイ
スチームプレー。

「次は目の前にあるマリントワーと中華街だな」
歩きながら旭が次の予定を言う。ちなみにすぐ目の前が目的地なの
で徒歩だ。

しばらく歩くと、マリントワーの足下に着いた。そこから皆エレベ
ーターで上っていく。

「うわあ!!海の方こうまで見えますよ!!」

翔子がカメラ片手にガラスの向こう側の海の景色や上から見下ろし
た氷川丸、山下公園なんかも撮っている。

「こっちは街並みだな。中華街もあるし」

洋介が反対側から街並みを見下ろす。なにかを我慢してるかのよう
に見えたが、ついに限界がおとずれた・・・

「・・・はっはっはっはっ!!見ろ!ひ・・・」

「人がゴミのよーだあ」

美春においしいところを取られた。

「お、オレが言いたかったのに・・・」

へこむ洋介に旭が

「お前がゴミのようだな・・・」

とトドメをさし、翔子が笑いながらそんな3人をフィルムに収めた。

「なーんにも見えないわね」

「由美、それお金入れなきゃ見れないよ?」

一方由美と圭太は海側のガラス窓の前にある双眼鏡の前にいた。先
ほどからずーっと双眼鏡を覗いているのだが、この双眼鏡は有料な
のでただでは見れないのだ。

「し、知ってるわよ・・・!ただやってみただけじゃない!」

絶対知らなかったな、と思いつつ圭太はそれは言わないであげた。

由美がコインを入れて再度覗くと

「あ！見えた見えた！すごい！あんな遠くまで！！」

とか騒ぎはじめた。そんな由美を温かい目で見ていた圭太だったが、突然由美が黙って双眼鏡から目を離れた。

「どうしたの？」

「・・・酔った・・・」

どうやら四方八方に双眼鏡を動かしているうちに酔ってしまったらしい。

「圭太・・・代わりに見ていいわ・・・」

テンションが下がった由美が双眼鏡の前から下がり、今度は圭太が見る番になった。

「すごいなあ・・・対岸のほうまで見えるし、夜だったら夜景が綺麗そうだなあ・・・」

初めて見る横浜の街を興味深く見ていると、急に視界が暗くなった。コイン切れかと思いレンズから目を離すと・・・

「由美・・・なにやってんの？」

「圭太ばかり楽しんでるから、つい・・・」

見れば反対側のレンズに顔をピツタリくっつけている由美がいた。そしてコインが切れてしまい無用の長物になってしまった双眼鏡を挟んで笑っている2人も翔子のカメラに収められた。

最後に皆で中華街に来た。あたりは休日ということもあり人でごった返している。

「ここが中華街かあ・・・」

旭が街並みを見て楽しそうにして（例によってサングラスで解りにくい）いる。

「あの肉まんデカイなあ！」

洋介が屋台の肉まんを見て驚きの声をあげる。コンビニの肉まんの

3倍はある。

「オレ食っちゃお！」

洋介が500円玉を出して屋台に走っていく。肉まんを買って大事そうに抱えて帰ってくる。

「では・・・！」

早速一口。しかし・・・

「具がねえ・・・」

中はスカスカで具は真ん中に普通くらい量があるだけだった。見れば向こうの屋台のおばちゃんがかなりダーティな笑顔を送っている。

そんなこんなで中華街を満喫し、6人はバイクを停めている場所まで戻ってきた。

「ねえ！せつかくだからバイクと一緒にみんなで記念撮影しましよーよ！」

由美の提案に翔子が待つてましたとばかりにカバンからカメラを取り出した。

「いいけど、翔子ちゃん写らないじゃんか」

洋介が言つと、翔子は何も言わずにカバンから折り畳み式の三脚を取り出した。

「これなら大丈夫ですよ！」

翔子が胸を張った。折り畳み式とはいえ、そのバッグのどこにそんな余裕があるのだろうかと一同考えたが、途中でやはり思考放棄した。

「じゃあ並んで並んで！みんな自分のバイクに跨がって！」

皆でバイクを山下公園の冰川丸の近くまで押した後、海を背中にバイクを並べた。

「じゃあ！写真撮りますよ！！」

翔子がカメラのセットを終えた。オートシャッターのオレンジ色のランプが点滅している。

翔子が走って自分のバイクに跨がる。ちなみに順番は左から洋介、

翔子、由美、圭太、旭、美春そしてその隣には氷川丸が鎮座している。

『カシヤツ』と音がして、皆がバイクから降りて写真を確認する。

「おお、よく撮れてるじゃんかよお」

「本当だあ」

旭と美春がデジカメの画面を見て言った。写真は実によく撮れていた。

「出来たら皆さんに焼きますね！」

「よろしくね」

翔子の肩を叩きながら由美が嬉しそうに笑った。こうして、第1回横浜ツーリング大会の幕は閉じ、一同はまた高速を目指して走りはじめた。

第20章 圭太のいない1日、由美と真子の決意、他2名（前書き）

遅れました汗

少し文量は多めです。

第20章 圭太のいない1日、由美と真子の決意、他2名

「ふあゝ！朝かあ・・・！」

もぞもぞ動く布団。その中からなんとも間の抜けた朝イチの第一声が聞こえてきた。

「今日は昨日が横浜だったから・・・日曜かあ」

布団を未練がましく頭までかぶって今日の曜日を確認する。

昨日はあの後相模まで一緒に走り、途中流れ解散。幼なじみと一緒に帰って来たのは覚えている・・・

「・・・なんにしても、とりあえずトイレに行こう・・・」

布団から這い出た少女、三笠由美はとりあえずトイレへとフラフラと歩いていった。

「ねーちゃん！寝癖スゲーことになってる！」

トイレからでて居間に入ると、弟のタカが寝ぼけ眼の由美の髪を見て笑っている。

「え・・・？」

鏡を見ると、セミロングの髪の毛の右側が盛大に跳ねまくり、頭の上にはマンガみたいなおアホ毛が一本天に向かって伸びていた。

「本当・・・！直さなきゃ！」

由美はとりあえず寝癖を直し、歯を磨いて顔を洗った。

「目が覚めたー！」

由美が叫んだ。どうやら復活したらしい。

「タカゝ！？お父さん達は？！」

洗面所から居間にいる弟に叫ぶと

「2人して朝から出かけたー！」

と返ってきた。

「じゃあ、今日も圭太と遊んであげますか……!」

言いながら由美は階段を上り2階の自室に入る。『真剣勝負』とプリントされたパジャマ兼Tシャツを脱ぎ捨て、タンズやクローゼットから今日1日の服装を選んでゆく。今日は前に買った普通の長袖のTシャツにジーンズという結局いつもの服装になってしまった。

「じゃあ行く……!」

机の上に置いてある財布とジェットペルを掴んで部屋から出ていった。

「ねーちゃん、どっか行くの?」

居間に降りてきた由美の出で立ちを見たタカが床に寝そべりマンガを読みながらたずねた。

「バイクに乗ってくるのよ。圭太も呼んでね!」

由美が食パンを食べながら玄関へ。スニーカーを履き、下駄箱の上にある鍵置場から自分の愛車、ゼファー400改Z400FX仕様のキーを取ってから外に出ていった。

「最近、よく遊びにいくなー」

タカが不思議そうにつぶやいた。

びんぽーん　びんぽーん

「けーいーた!遊ぶわよ!」

小学生みたいな態度で玄関のチャイムを鳴らしまくる由美。家がすぐそこなのにバイクを目の前に停めて待ち構えるが……

「いないのかな?」

由美は考えた。インターホンを2回も押して、外から叫んでも出てこない。本当はなんども叫んでやろうとも思ったがまだ午前中。そろそろ近所の目が痛い。

「そっついえば……」

由美が昨日、圭太との別れ際に彼が言っていた事を思い出す。

『明日は家族とおじいちゃん家行くから遊べないよ』

そんなことを言っていた。「そうかー圭太いないのねえ・・・って良いわけじゃないじゃない！せつかく遊びに来たのになんでいないのよバカー！！！！」

遊びに、と言うより遊んでもらいに来た由美が玄関に叫ぶが、当然返事は無い。。

「くっそー！圭太のバカ！鈍感！鈍チン！！」

何やら酷いことを叫びながら由美はゼファー改FX仕様のエンジンに火を入れ、直管仕様のショート管から爆音を辺りに響かせて去っていった。非常に近所迷惑だ。

「圭太めえ・・・！つまらないじゃない！！」

ゴアアアアアアン！

ゼファーは由美の気持ちを体現したような爆音で加速していく。

「はあ、仕方無いわね・・・旭さん家でも行ってみよう・・・」

なんとか1人納得して、由美はゼファーを旭の家に行く道に向けた。

こああああああん・・・

走り初めてから5分位で旭の家、『雪風荘』に着いた。エンジンはゆっくり回転を落としていき、エンジンを切った。

「あれ？旭さんいないのかしら・・・？」

駐車場を見回すと、いつも旭と美春のGT380が停めてある場所に、美春のGT380しか停まっていない。

「まさか2人でタンデムデートとかしてたりして・・・」

あの2人ならあり得そうだ。しかし不安を抱きながら玄関前まで

くるとドアの横にある台所の窓からなにやら声が聞こえる。

「なーんだ！美春ちゃんはあるのね！」

ぴんぽーん

・・・

「あれ・・・？」

ぴんぽーん　ぴんぽーん

・・・

「入ってもいいわよね・・・？」

誰に言うでも無く由美が言いながら、ドアに耳をつける。すると・・・

『あはは・・・えへへ・・・へへ・・・』

「み、美春ちゃん・・・!？」

なにやら美春の変な笑い声が聞こえた。テレビでも見ているのだらうか・・・

「いや、でも聞こえてくるのは美春ちゃんの声だけ・・・ええい！もう入っちゃえ!!」

ドアノブに力を入れてボタンと音を立ててドアをあける。そこには・・・

「えへへ・・・　あははは・・・」

美春が布団の上に座って、緩みきった顔で見上げて、天井を見ながら笑っていた。

「み、美春ちゃん・・・!?!」

明らかに『キメちゃってます』オーラ全開の美春を見て、由美が慌てて部屋に入ると。

「あれえ・・・? ゆーちゃん・・・? 来たんだあ・・・えへへへ」

「ど、どうしたのよ美春ちゃん!? ヒロ ン!? それともエクスシー!?!」

由美が心配しながら腕に注射器の跡や錠剤ケースなどが無いかを確認していると、美春が緩みきった顔でヨダレをたらしたまま由美の肩をさわった。

「今日ね〜あつくんがねえ〜? えへへへ」

「旭さんがどうしたの!?!」

「朝ねえ私の事をねえ〜 ギュツて抱いてね〜 起こしてくれてねえ・・・あはは チューしてくれてねえ〜 私どうしょー、嬉しすぎて・・・あははははは 嬉しすぎてえ どんな顔したら良いかわかんなくて・・・ 締まんにゃい顔でゴメンねえ えへへ・・・」

「なーんだ、ただのノロケかあコノヤロウ」

「そーなのお でへへへ」

嫌みたっぷりという言葉すらも効かない美春を見て、由美はため息をつくしかなかった。相変わらず旭さえいればどこでも生きていけそうな美春だった。

「ゆーちゃんはあ・・・? どうしたのお?」

「圭太がおじいちゃん家行ってていないのよ。それでここに来たのよ。旭さんは?」

「あつくんはねえ、バイトお」

「それって美春ちゃん家の?」

「そだよお」

由美はなんだか小学生と話しているような気分になってきた。

「じゃあなんでここにいるのよ? 真田屋なら美春ちゃんも行けばい

いじゃない。あとヨダレ拭きなさいヨダレ」

由美が思った事を口にする、美春はニコニコしながらヨダレを拭いた。

「あつくん、私がいるとしゅーちゅー出来ないんらつてえ・・・
だからやわらひはお留守番にゃのお」

あ、なんかダメだ。幼児退化化し始めた。

「み・・・美春、ちゃん？」

「だかりゃあ、わらひはあつくんに『お帰りなしゃい』って言う
てあげりゅのお、だから今は寝るのお・・・」

ガシツ！

「え・・・ちよつとお！？」

美春が由美の袖をがっちりつかんで、布団の中に引きずり込んだ。

「ちよ、美春ちゃん・・・！」

「えへへ・・・ ゆーちゃんはかぁいいなあ」

「ヤバイ・・・目がイツちゃってる・・・。く、食われる・・・！」

「ちよ、美春ちゃんダメ！私には圭太が・・・！ってあれ？」

「すう・・・」

「つて、寝てくれたわね・・・よかつたあ・・・！！」

どうやら寝てくれたらしい。見れば幸せそうな寝顔だ。

「ふう・・・じゃあ私も・・・少し寝ていこうかしら・・・まだこ
んな時間だし」

時計は午前10時を少し回ったばかり。ならば少し寝ていっても
大丈夫だろう。由美は起きたら美春が正常に戻っていることを願っ
て

「おやすみ」

2人同じ布団で眠りについた。

「うあ．．．？」

由美が起きた。いったい自分はどのくらい寝ていたのだろうか。時計を見ると、まだ1時間くらいしか経っていなかった。

「．．．さすがにこれ以上は寝れないなあ．．．」

考えてみれば昨日も早く寝たのだ。そんなに寝れるはずもない。とりあえず布団から出ようとすると．．．

「．．．？」

出れない。なにか後ろからがっちり掴まれているかのような．．．

「ってやつぱり！」

後ろをみれば美春が寝ながら腰に抱きついていた。しかも．．．

「なんで腕の組み方がジャーマンなのよ！！美春ちゃん！！」

何度呼び掛けても、全然起きない。

「仕方ないわね．．．強行手段よ．．．！」

言って身体を思い切り擦る、がっちりホールドされた手をなんとか解き脱出した。

「すぴー．．．」

「あ、あれだけ動いたのにまだ起きないなんて．．．」

美春は未だに幸せそうな寝顔を浮かべて爆睡中だ。

どうしたものかと辺りを見回すと、布団の一部がすごく硬くなっている。なにかと思つて見てみると．．．。

「に、日本酒．．．？」

日本酒の空き瓶が美春の寝ている後ろに置いてあった。どうやら美春の様子がおかしかったのは（いつももおかしいが）この酒のせいらしい。なぜ気付かなかったのだろうか。

「旭さんから禁酒令が出てるのに美春ちゃん．．．」

ちなみに由美は知る由もないが、美春がこんなになつた経緯はいたって簡単。今朝旭に起こされての流れの後、テンションが上

がって1人ニヤニヤしていた美春は「こんな素晴らしい朝は無いよ
お そうだ！お酒飲もう」と下町の酔っぱらいでも言わなそうな
ダメダメ発言の後、押し入れに隠して取っておいた日本酒に手を伸
ばしたのが原因だ。ちなみに飲まなくても美春は多分ああなってい
たが、あそこまで酷くはなっていなかっただろう。

以上、回想おしまい。

「幸せを壊すのも可哀想だし・・・日本酒は私が責任をもって処分
してあげよう」

由美は立ち上がってビンを引つ掴み、幸せそうな寝言（全て旭関
係の）を言う美春を優しい目で見ながら部屋から去っていった。

「私もあれくらい積極的にならなきゃダメかしら？美春ちゃんくら
いの勇気が欲しいわよ・・・」

由美は言いながらゼファー改のエンジンに火を入れて、一応静か
にその場を去った。

「美春ちゃんは遊んでくれそうな状況じゃないし・・・そろそろお
昼だし、行ってみようかしら・・・」

また1人になってしまった由美は、街道にフロントを向けた。目
指すは美春の実家兼旭の職場でもある『真田屋』である。

コアアアアア！ヒュルヒュルヒュルヒュル！！

カムチエーンノイズを交じらせながら快走するゼファー改FX仕
様。少しガタつくFRPで出来た自慢のテールカウルがまるで走る
のを喜んでいるようだ。メーターに照りつく太陽が眩しい。

そして走らせること数10分。ようやく美春の実家であるラーメ
ン『真田屋』にたどり着いた。

「いらっしやいませー！！・・・て、なによ由美ちゃんじゃねえか
あー！」

店に入ると、厨房から旭が顔を覗かせてきた。自慢のリーゼントはバンドナが巻かれて隠れており、服装はTシャツに前掛け、ズボン、長靴のラーメンスタイルだ。

「こんにちは！なんか普段と全然印象が違いますね！」

「まあ、仕事だからな。とりあえず座んな！」

旭にカウンター席に案内された。とりあえず水を飲んでからメニューに目を移す。

「さあ、何すんよ？」

「旭さん、この『サンパチラーメン』って・・・？」

すると旭が笑顔で説明を始めた。

「そいつあ、オレが編み出した自慢のラーメンだよ。まあ、具はいつもバラバラの適当なだけだよ？めっちゃ美味しいよ」

「じゃあこれにしてみようかしら？」

「あい毎度！じゃあチイと待つてな！」

嬉しそうに厨房に戻っていく旭。由美は店内を見回すと、もうすぐ昼なのにあまり人が入っていない。奥のテーブル席にサラリーマン風の男が2人と、今ちようど入ってきたドカタ風の男が旭に案内されて、由美とは離れたカウンター席にいただけだ。

そしてカウンターから厨房を覗くと、昼どきなのに旭しかいない。最低でもあと2人くらいはいないとキツイのではないかと思って聞いてみることにした。

「あの、旭さん？」

「あ？なによ？」

「この時間に店員が1人つて、キツくないですか・・・？」

由美がたずねると、茹でている麺から目を離さずに旭が質問に答える。

「ああ？大丈夫だよ、オレだけいりゃあなんとでもならあ。そりゃあ駅から近けりゃ大変だけど街道沿いじゃあ昼は混まねえよ？混むのは夕方だからよ」

なるほど、そういうことなのかあ、と由美が1人考えていると

「はい、『サンパチラーメン』!!おまつとさん!!」

どうやら出来たらしい。目の前に置かれたどんぶりの中を覗いてみると……

「うわぁ……!!」

スープは醤油ベースなのだろうか？油は結構多めで麺は細麺だ。

具はチャーシュー3枚、海苔3枚、メンマ8本、ほうれん草約一掴みに青ネギ、味付け卵が3個。これだけ見れば普通のラーメンより少しグレードが高いだけだが、カマボコを見ると……

「こ、このカマボコの形って、旭さんのサンパチのエンジンの形よね……!?!」

カマボコは、GT380の最大の特徴であるラムエアシステムと呼ばれるヘッドの形をしている。さらにご丁寧フィンまで刻まれている。

「おうよ！具もトリプルを意識した豪華仕様！スープも2ストの油つばさを表現した最強のラーメンよ！食ってみ!?!」

自信満々の旭に言われなくとも、由美は麺を一口食べてみる。すると……

「こ、この麺の固さ加減……!?!ダシの煮干しの匂いが程よく絡まってすごくおいしい!!チャーシューも脂が乗っててなかなか……!!スープは煮干しベースで油多めって異色な組み合わせのハズなのに全然違和感無く、しかも油がしつこく無いわ!?!」

由美が食べながら夢中になって語っていると、旭が

「フツ……そこまでわかつちまうか。さすがじゃねーか由美ちゃん……」

「旭さんもね……!私は今小宇宙を見たわ……!」

2人はがっちり握手した。

数分後……

「ふう……美味しかったぁ……けふっ」

由美が満足顔で水を飲んでた。どんぶりはスープの一滴まで飲

み干してある。

「今度は、圭太と翔子ちゃんも連れてきてあげましょう・・・」
ふう、と一息ついてみると、突然隣から怒鳴り声が聞こえた。

「おい！店員ちよつと来い！！」

「なんすか？」

見れば先ほどカウンターで離れて座っていたドカタ風の若い男が
キレながら旭に怒鳴り付けていた。

「どんぶりン中に髪が入ってんじゃねーか！こんなモン客に食わせ
る気かあ！？」

どうやら髪の毛がどんぶりに入っていたらしい。客の男は店員で
ある旭にまくし立てる。

「作り直せよ？あと代金は負ける！！」

男が調子のいいことを言う。いくらなんでもそれは無いだろう。

由美もゼファーを買う資金を集めるため過去に喫茶店でバイトし
ていたからわかるが、髪の毛が入っていたら作り直したりはするが
代金を負けるなどは出来ない。それに旭はバンダナをしている。髪
の毛など入るはずが無い。由美が反論してやろうと思っていると、
1つ忘れていたことを思い出した。

「おう・・・テメエ？」

そう・・・

「このキッタネエ金髪があ・・・！？」

「この店員は・・・」

「オレの髪だっつーのかよお！？コラア・・・！？」

アノ『霧島 旭』だって事を・・・！！

しかし時はすでに遅く、旭は自分よりガタイも背も大きな男の胸ぐらを掴んで片腕で持ち上げる。

「よお、パツキン野郎！？ テメエ誰の店で調子くれてんだよコノヤロウ！？」

「ひ、ひい・・・！？」

その後、延々とその客に説教をする旭。相変わらず説教が長い&怖い。ドカタの男は最後、半泣きで店から追放された。

「つたくクソヤロウがよお・・・ってどうしたよ由美ちゃん？」

「い、いやあ、そろそろ帰ろうかなあーって・・・」

「ああ、マジかあ。じゃあまた食いに来てくれよ？あ、お代はいらねえから」

「いや、払うわよ！というか払わせてください！！」

さっきのやり取りを見ていたら払わなきゃ悪すぎると思ったのだが。

「いいっていいって。由美ちゃん達ならいつでもタダでいいよ」

旭がすごくいい笑顔で言う。さっきとは大違いだ。

「じ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

「おう！気をつけてな！！」

旭の声を背に受けて、由美は店から出た。

「やっぱり旭さんて強すぎよね・・・客の胸ぐら掴んで説教する店員なんて旭さんくらいよね・・・」

由美は変に感心してまたゼファーを走らせた。

「なーんか遊んでくれそうな人いなかしら？」

エンジンは絶好調だ。直管独特の低回転で地響きのような、高回転でレースカーのような快音を轟かせながら走る。完璧に違法改造だが族のようにコールを切っているワケではないので派手には目立

っていない。

「翔子ちゃんは遠いし．．．うーん．．．」

宛てもなくウィンカーを右に出して曲がる。学校の友達は皆彼氏がいるかカラオケなどで遊びたいというのがほとんどで、今猛烈にバイクに乗りたい気分の由美には乗り気ではない。信号に捕まってしまうと考えると．．．

ギヤワアアアアアアン！クアアアアアアア．．．！

後ろからものすごい爆音が聞こえた。何かと後ろを振り向くと、真っ白のタンクに伸びる緑色のレインボーライン。後ろは煙で真っ白け。それにライダーの着てる黒い革ツナギ．．．

「む．．．お前は確か．．．！」

「ど．．．どおもお．．．」

由美の隣に、じゃじゃ馬マツハ。赤城真子が現れた。

「き、今日はどーしたんですか．．．!？」

思わず敬語になる由美。なぜ？って、そりゃあ昨日の今日だ。いくら由美でもあのインチキレースの後では気まずくなるのも仕方がない。

「圭太君を探しに流していたんだ。ついでにあなたとあの忌まわしいリーゼント野郎ね」

「ヤバイ．．．怒ってるう．．．!？」

そんな事を思っていると、反対の歩行者用信号が点滅を始めた。

「あ．．．じ、じゃあ、ここで信号変わるみたいですし．．．」
「さようなら〜！」

と言おうとした由美の肩を真子が逃がすまいとがっちり掴んだ。

「ちよーっと付き合ってよ？」

「いやあ、でもお．．．」

なんとか拒否の言葉を探していると

「私は年上、先輩よ？先輩の言うことが聞けないかしら．．．？」

「うぐっ・・・」

「ちょうど良いところに喫茶店もあるし・・・ね?」

「ね?」と言われて断れるハズも無く、由美はあきらめて喫茶店へハンドルを向けた。

「・・・」

喫茶店の店内は明るい雰囲気だ。陽気なポップスが流れ、客は皆笑顔でそれぞれの話題で賑わっているが、窓際のテーブル席はかなり気まずい空気が流れていた。

「で・・・昨日の話だけど・・・」

いきなり確信に迫ってきた!? 等と由美が驚いていると

「昨日のプラグの件と高速を途中で降りた件は、全部昨日のリーゼント野郎とそのツレの仕組んだことよね?」

「・・・へ?」

ものすごい間抜けな声が、自分から出た声だと由美が気付くのに数秒かかった。

「あー、リーゼント馬鹿に口止めされてるの? だったら無視していいわ?」

「あの・・・その前にいいですか? その、ぶらぐってなんですか・・・?」

「・・・」

由美の質問に、真子が呆れ顔でたっぷり10秒くらい間を開けた。

「まあ、プラグ抜いたことを知らないなら、高速を途中で降りるって作戦は・・・?」

真子が静かにたずねると

「そ、それは旭さん・・・! あ、そのリーゼントの人ですよ? あの人と私が共謀して・・・あの時はごめんなさい」

由美が焦りながら言うと、真子は安心した顔で一息着いた。

「素直に言ってくれて嬉しいわね。同じカワサキ乗りで同じ殿方を愛する者として嬉しいわ」

「と、殿方って・・・！」

「とりあえずあなたへの誤解は解けた。全く、あのリーゼント馬鹿野郎・・・！スズキなんて乗ってる奴は信用ならないわ」

さりげなく旭のあだ名（？）が増えてるし、さりげなく全国のスズキ乗りを馬鹿にしながら真子が言う。

「とりあえず、今私はあなたの真のライバルになれたわ・・・」

「は、はあ・・・」

とりあえずうなずく由美。

「ところで、圭太君とはもう付き合ってるの？」

「そ、そんな・・・！圭太となんか・・・！」

「圭太君となんか・・・？じゃあ私が貰っても・・・」

「ダメです！！」

由美が即座に否定する。

「なんで・・・？あなたにとって圭太君は『なんて』って付いちゃうくらいの存在でしょう？ならいいじゃない」

「よく無いわよ！！圭太は私がいなきゃ何にも出来ないんだから！私と一緒にいるほうがいいのよ！！」

由美が目には涙を溜めて声を荒げる。すると・・・

「合格・・・やはりあなたは私のライバルね。負けないわよ？」

真子が笑いながら握手を求める。由美も涙を溜めながらその手を握り返した。

「こっちこそ・・・！」

こうして、2人は互いにライバルと認めあった。

その後2人の空気は一転、楽しそうな雰囲気になっていった。いろいろ話しているうちにバイクの話になってきた。

「あなたのゼファー、外装綺麗よね」

真子が窓から真っ赤なバイクを見て話す。由美もニコニコしている。愛車を誉められて悪い気がする人間などいないのだ。

「あの外装はドレミ？高かったでしょう？」

「いや、あれは最初から付いてきたのよ。圭太と同じカワサキのバイク探してただけど、なかなかしっくりしたの無くて・・・そしてたらまたま寄ったバイク屋さんにあの子が・・・」

「ふうん・・・いいわねエ」

「真子さんのマツハは・・・？」

由美は自分の愛車の隣にある、同じ排気量なのに一回り小さく見えるバイクに目を向ける。

「あれは私達が小学校の時から好きなバイクだったのよ。昔は親戚のおじさんも乗ってたね。ただ、やっぱり旧いからよく壊れるし手入れは大変」

いいながらマツハに目をやる。

「で、私は高校の時からバイトで働いて、2年経った頃によく買えたの。それから部品があつたらコツコツって感じであの仕様になつたわ」

真子が苦労したという感じで話す。

「ちなみに凜達・・・下の妹達もバイト頑張つて親名義で手に入れたのよ」

困つたように、しかしどこか嬉しそうに話す真子を見て由美も嬉しくなつた。

「ゼファーも早くあなたの色に染めてあげなさい？」

「そうねえ、確かに変えたパーツって前のタイヤの上にあるカバーみたいなのとマフラーのサイレンサー抜いただけだしね」

「追加・・・知識も貯えなさい・・・」

そんなこんなで時間は過ぎていった。2人はここで話しているのもいいのだが、やはりバイク乗り。せっかくなので2人で走りに行こうということになった。

「私はこのあたりの道詳しくないから、由美ちゃんが頭走ってね？」

「うん！」

元気よく返事をして由美がセルを押すと

キュルキュルキュル・・・ボアアアアアン！！

「本当にいい音ネ・・・」

「そう？やっぱりこの子の音は最高よ！」

真子の言葉に素直に喜ぶ由美。続いて真子もチョークを思い切り引いてキックする。

グアアアアアアアアアアン！！バンバンバンバン！！！！！！

「うわ！」

キックと同時に旭のGT380に負けないそれ以上の白煙を吐き出し、かつ旭のGT380よりもすさまじい振動に由美が驚く。

「マツハもなかなかでしょう？」

涼しい顔で真子が言う。硬派力ワサキの象徴とも言えるマツハに跨る真子は同性の由美から見ても格好いい。

「じゃあ行きましょう？」

2人は駐車場を後にした。

「どこに連れてってくれるの？」

真子が尋ねると、由美は少し悩んだ。由美自身いつも圭太達としか走ったことがない。1人で走ることがなかったのでどこへ行こうか考えていると、ひとつ良い所を思い出した。

「ついてきて！ダムOf峠道に行くわよ！」

由美の思いついた場所。そこは初めてゼファー改FXで走りに行った、あのダムだ。

しばらく2人でランデブー走行。前後入れ替えながら楽しそうに走った。そしてついにダムの入り口に辿り着いた。

「ここからは一本道で信号も何もないから自由に走りましょう！」

由美の提案に真子が親指を上あげた。そしてその瞬間・・・

カチャ・・・ギャワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アア・・・！！！！！！

「・・・！？」

ギヤを1段下げてフル加速していくマツ八に由美が度肝を抜かれた。白煙は最初はまるで蛇のように低い位置に流れ、しばらくするとそれが広がり霧のようになる。由美は完全に出遅れた。

「このぉ・・・！！！！！！」

別にレースしているわけではないのに悔しくなり後を追う由美。ゼファアのエンジンは唸りを上げる。が・・・

「なんで・・・！？」

由美は愕然とした。全然追いつけない。長いストレートで突き放されていく。コーナーに入っても全く追いつけない。むしろコーナーでも離されているがそれはそこまで離されるわけではない。ストレートが桁違いに速い。

「峠は苦手だけど・・・！！このコースならなんとかなるわ・・・！！」
姉妹の中で直線番長仕様セツティングの真子だが、さすがにマツ八に乗っているだけあってテクニクはハンパじゃない。白線を超えないギリギリのラインにマツ八を奇麗に乗せる。

「ダメ・・・！離されて・・・！？」

懸命に後を追う由美。しかし次のコーナーを抜けた先に真子ほマツ八の姿はなく、白煙が残るだけだった・・・

「真子さん・・・速過ぎよ・・・」

2人はダムの道の途中にあるファミレスの駐車場で休憩した。由美が見ついたとき、真子はすでにマツ八から降りて自販機でジュースを買っていた。

「そんなんじゃあまだまだ。私に勝てなきゃ凛にはもっと勝てないわよ？」

真子が由美を見て言う。その目はさすが3人姉妹の姉と言ったところか、余裕を感じられる。

「いいわよ・・・！いつか勝ってやるんだから！」

由美がフンッとそっぽを向いてしまった。相当悔しいのだろう。ただ由美は30年以上前のバイク相手に一度も前に出れなかったことに悔んでいるのではない。真子に負けたことが相当悔しいのだ。

「楽しみにしてる・・・そろそろ帰りましょう？私はこのまま流れで国道に出たらお別れね」

真子が空き缶をゴミ箱に投げ入れる。2人は今度はのんびりと走ってダムを出て国道に出た。真子は手を振って挨拶して去って行った。由美も反対方向に走っていく。

「私も・・・」

由美が走りながらつぶやく。心なしかアクセルの開度がいつもより大きい。

「私も・・・速くなりたい・・・!!」

そう叫んだ瞬間、ゼファアのエンジンが咆哮した。夕暮れの国道をゼファア改FX仕様が加速していく。それはまるで、由美の心の叫びのような爆音を響かせて。由美の気持ちを表現したようなひたすらに真っすくな走り・・・

第20章 圭太のいない1日、由美と真子の決意、他2名（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！今回はマツハ3姉妹の長女、赤城真子さんです」

真子「なんだここは・・・？」

作者「ここは・・・まあ夢の中ですよ。で、ここであなたのバイクを紹介してもらうんです」

真子「なぜ？」

作者「気にしたら負け」

KAWASAKI 400SSMAHC?改 赤城真子仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル（焼きつきのため一度オーバーサイズ）

BEE T当時モノ3本出しチャンバー キャブレターは350S

S用

足回り BEE Tキャスト

外装 FXテール

色 白×緑 レインボーライン

作者「おお！今まで出てきた奴らより弄ってる！」

真子「当たり前だ・・・あんな変態スズキやら優等生ホンダに負けられないわ。硬派カワサキはダテじゃないわ」

作者「もしかしてカワサキ以外興味なし・・・？」

真子「愚問ね・・・眼中にも無い・・・」

作者「心が狭いと友達いなくなる・・・ぐえ！」

腹殴られた。

真子「うるさい。カワサキが1番なのよ！ていつか早く帰してよ！」
作者「結局こうなるのか・・・じゃあまたね！」

ガバツ！ 起きた

「さて、今日は圭太君でも探しにブラっと・・・」

というわけでとうとう20話！がんばります！
感想等ありましたら是非！

第21章 千尋の唄（前書き）

こんな時間に更新です汗

第21章 千尋の唄

由美と真子のツーリングから一夜明けた。今日は月曜日なので由美と圭太は学校だ。

今は三時間目の歴史の授業だ。『ハゲ川』という屈辱的なあだ名で生徒から呼ばれている滑川剛志教諭45歳独身が室町幕府について説明している。

圭太は室町幕府という歴史の授業の中では比較的地味な時代の成り立ちや文化を綺麗にノートにまとめている。一方・・・

「なにになに・・・手っ取り早くパワーを上げるなら『きゃぶれたー』と『まふらー』を換えて・・・？『吸排気ちゅーん？』・・・ナニソレオイシイノ・・・？」

机の下でバイク雑誌を読みながら独りごちていた。ノートにはゼファア（と思われる物）の落書き以外白紙だ。しかも雑誌の内容をほとんど理解出来ていない。

「由美・・・！授業聞いてないと後で苦労するよ・・・？」

圭太がヒソヒソと由美に忠告する。しかし時すでに遅く・・・

「えーじゃあ、三代目将軍の名前は？簡単だろう？三笠！」

ハゲ川が由美に問題を当てた。しかし・・・

「えつとお・・・耐久性を上げるなら『おいるくーらー』を換えて・・・？」

全然話を聞いていない。

「三笠あー！！」

「は、はい！？」

ハゲ川の怒声にさすがの由美も返事をした。が

「早く答えを言わんか！！」

「え、えとお・・・おいるぽんぷ・・・？」

話を聞いていなかったため、見事な大ボケをかました。

「三笠あ！話を聞いとらんからワケわからなくなるんだあ馬鹿タレ

め!」

ハゲ川がキレた。確かに室町時代の三代目將軍は誰?と云う問題で『オイルポンプ』などと答えられたらキレもするだろう。

「罰として、今日は全部お前に当てるからな?覚悟しとけ!」

「そ、そんなあゝ!」

由美の嘆きにクラス全体にドツと笑いが起きる。圭太だけが1人ため息をついていた。

そして昼休みがやってきた。皆が購買や教室で弁当を食べたり、早弁してしまいやることが無くなったりタバコを吸いに行く者などがガヤガヤ騒ぎだす。

由美と圭太は席が隣なのでそのまま昼食を一緒に取る。

「昨日さあ、街を走ってたら真子さんに会ったのよ」

由美がコンビニで買ってきたおにぎりを食べつつ、圭太の弁当のおかずを横取りしようとする目を見せながら言う。

「え?真子さんに?なんでまた・・・?」

圭太は弁当のおかずを取られないように目を光らせながら続きを促す。

「なんかさあ・・・」

由美が昨日の出来事を話す。真子と和解したこと、でも旭のことは嫌ってるっぽいということ、そしてダムでブツキりで負けてしまったこと。全てを話した。

「そうなんだあ・・・やつぱり速いんだね」

圭太が感心しながら弁当を食べる。

「でね、私悔しくて悔しくて仕方がなかったから昨日勉強しようと思っってこんな本買って見たのよ」

いいながらカバンから先ほどまで読んでいた雑誌を取り出す。

「なに?『特集!バイク改造マニュアル初心者編 仕組みを理解しよう!』・・・?」

圭太がタイトルを読み上げる。

「読んでみたんだけど全然わからないのよ。圭太はわかる？」

由美が紙パツクのコーヒー牛乳を飲みながらたずねると、圭太は雑誌を読みながらため息をついた。

「僕だつてわからないよ。わかっているのは由美がバイクを速くした
いって事だけだけど……」

「……？」

微妙な顔をする圭太を見て、由美がなんだろうと思つてみると、圭太は静かに雑誌を閉じた。

「別に由美のゼファーを速くする必要は無いと思つたよね」

「え！？なんでよ！？」

圭太の一言に由美は多少驚いた。じゃあどうしろと言つのだ？と思つていると弁当を食べ終えたのか片付けながら圭太が雑誌に目を向ける。

「だつて、僕達がバイクに乗ってるのつているんな所に行つたりみんなと楽しく走るためじゃん？だつたら速く走る必要は無いでしょ？速く走つたら速く景色が流れちゃうし、速く時間も過ぎるし……なら、程よくでいいと思つんだ」

「圭太……」

由美は思い知らされた。自分は速く走りたいワケでは無い、と。圭太といろんな所に走りに行きたいのだと。

「まあ、僕みたいなき考えの人なら最近のツーリング向けのバイクに乗つてなきゃ説得力が無いけど、FXしかないからさ」

「なに言つてるのよ？圭太はFXしか無いわよ！」

由美が背伸びをしながら言う。

「よし！私も目が覚めたし、今日もゼファーちゃんどこか行きましよう？」

由美が紙パツクをゴミ箱に投げ捨てながら言う。

「でも今日は平日だし、月曜日だし……」

圭太が言う

「旭さん家ならいいでしょ？」

「う、うん。まあ……」

圭太は心の中で『由美、宿題とか課題やらなくていいの?』と言いたかったが、キラキラ輝く由美の目を見て言えなかった。

学校が終わり、2人は部活もなにも無いので真っ直ぐ家に帰った。話題は学校でのことが中心で、そのあたりは本当に普通の高校生だ。

やがて圭太の家の前についた。すると……

「圭太!制服のまんま待つてて!!」

言いながら、由美は向かい隣の自分の家に駆けていく。するとすぐに由美が戻ってきた。制服のまま。

「一回やってみたかったのよね」

制服のまま由美はゼファーに跨がり、ヘルメットをかぶった。

「制服で行くの?」

「そうだけど……?」

由美の返答に圭太は呆れた。

「由美?うちの学校の規則に『バイク、車の免許取得禁止』ってあるじゃん。見つかったら大変だよ?」

そう、最近の学校規則は厳しく、免許の取得が禁止されていることが多く、それは圭太達の通う南高も同じことだ。

「あ、そうか……!じゃあ、着替えてからまたここに集合ね!」

由美も今回ばかりは何も言わず戻っていった。やはり学校はクビになりたくはないだろう。戻って行く由美を見て、圭太も自宅のドアを開けた。

「おまたせ!!」

圭太が自宅の前で待つこと数分。由美が再びゼファーに乗ってやってきた。服装は昨日とあまり変わらずだ。

「じゃあ行きましょう?」

「うん」

2人はギヤを入れて圭太が先頭で走り始める。

2台のカワサキが走ると街では凄く目立つ。信号で停まると2台は中年のおじさんからコンビニに溜まる不良まで皆がじっくり見ている。が、誰も手を出さない。FXには憧れるが手を出したら旭に殺されることを、街の不良はだいたい知っているのだ。

「皆の視線が熱いわよ!」

「本当・・・旭さんがいなかったら安心して乗れなかったよね・・・」

この地域には、『旧車に乗るなら地元で名前が売れてなきやパクられても文句無し』みたいなワケのわからない決まり事がある。自由に乗る事が出来るバイクだが、旧車に限ってはそんな決まりがあったりする事が多い。この一般市民にとって迷惑極まりないルールを壊そうとしているのが、霧島旭や羽黒洋介といった『街の顔』である。

「人のバイク盗むヤツって、きつと人間じゃ無いわよね」

由美が怒りながら言う。まあ、前に一度旭の家でやられかけたので警戒は普段からしているが・・・

「一生懸命働いて手に入れた思い出の詰まったバイクを盗むのって最低だわ!」

「由美の気持ちはわかるけど、とりあえず信号青になったから」

そんなこんなで、2人は旭の家に辿り着いた。するといつも旭と美春が停めている場所に2台ともバイクが停まっていなかった。

「2人ともいないのかしら・・・?」

「まあ、バイクが無いからねえ・・・」

2人が話していると、1台違うバイクを見つけた。

「あれ・・・凄いわね・・・」

由美が指差す先に、1台の単車が停まっていた。派手なカナリヤイエローに羽根付きテール。アップハン絞りにロケットカウル・・・完全な族車である。

「アレって間違いなく旭さんの知り合いよね・・・？」

「多分ね・・・」

2人が話しているとアパートの入り口から1人の女の子が出てきた。

「あの・・・！霧島の知り合いの人達ですか・・・？」

「え・・・？霧島って？」

由美がなんの話かと思っていると圭太が小声で

「旭さんの名字だよ」

と言つと

「ああ・・・！そうよ！私達旭さんの知り合いだけど・・・」

「本当ですか!？」

すると女の子が近づいてきた。背はめちゃくちや低く、まるで中学生のようだ。

「どこにいったかわかりませんか？」

「さ、さあ・・・？多分仕事だけどどこに行ったかまでは・・・」

圭太が困っていると、聞き覚えのあるエキゾーストが遠くから聞こえてきた。

カーンカーン！バリバリバリ！！！！

「あ、帰ってきた！旭さんよ！」

由美が言つと、駐車場の入り口に、2台のGT380が姿を現した。

旭と美春だ。

「来た来た。おい旭さん！美春ちゃん！！」

由美が叫ぶと2人も手をあげて応える。2人はそのままいつもの場

所までGT380を停めて、こちらを見る。

「よお！圭太、由美ちゃん。元氣してつか？」

旭がヘルメットを脱ぎながら言う。今日もラーメン屋だったのかりゼントは少し崩れている。

「ゆーちゃん！けーちゃん！かぁいいなあ！！」

美春はヘルメットすら脱がずに2人に抱きつく。

「美春さん……！！」

「美春ちゃん離してよ！！」

美春の奇襲に2人が困っていると……

「おにーちゃん！！！！！！」

「へ？」

「おにーちゃん？誰が？」

「あ……」

圭太、由美、美春がその声が聞こえた方を見ると……

「おにーちゃん！私……！！」

先ほどの女の子が旭の前で泣きそうな、しかし嬉しそうな顔で旭の前に立っていた。

「てめエ、なんでココにいやがるんだよ……？」

それに対して旭はまるでキレた時のような顔で女の子を見ている。

「どういうこと……？おにーちゃんて……」

由美が美春に聞くと、美春は辛そうな顔で呟いた。

「霧島千尋ちゃん……チーちゃん。あつくんの妹だよ……？」

「そうなんですかぁ……って！？本当ですか！？」

珍しく圭太が取り乱した。由美も「え？嘘！？」と旭と千尋を交互に見ているが

「うん。2人はねえ、ちょっと複雑なんだ……」

美春が悲しそうな顔で言う。その表情を見て2人は本当に兄妹なんだと思った。

「私……！おにーちゃんが住んでる場所わかんなくて……！
いろんな人に聞いたらここと聞いて……！それで……！！」

少女・・・千尋が矢継ぎ早に旭に言う。よほど嬉しいのだろう次々に言葉が出てくる。しかし・・・

「黙れよ・・・？」

「・・・!？」

千尋の言葉を、旭がまるでうざったそうに止めた。

「旭さん・・・？」

圭太が言うが旭は無視して千尋を上から見下ろした。

「何回言えばわかんた？てめエは・・・？」

「ちよ・・・旭さんてばあ!!！」

由美が後ろから旭の肩を叩く。しかし次の瞬間凍り付いた。物凄く恐ろしい顔で千尋を睨み付けていたのだ。

すると千尋も旭と対峙しながら言う。

「なんで・・・？私はおにーちゃんの妹だよ？だって・・・」

「ウルセエ!!黙れよテメエ!？」

旭が怒鳴り付ける。さすがの由美もビビって手を離してしまう。

「誰に聞いたか知らねえけどよお・・・二度とここに来るんじゃないぞ!？」

言うて、旭は足早に部屋に戻って行った。

「ちよ・・・!旭さん!？」

追い掛けようとする由美を美春が制する。

「ダメだよーちゃん・・・」

「でも・・・!この子が・・・!」

由美が言うて、美春は首を横に振った。

「こうなっちゃったら、私だってあつくん部屋に行けないよ・・・これはあつくんが自分で考えなきゃいけない事だから・・・」

真面目な顔で言う美春を見て、由美は少し迷ったが美春の言うとおりにした。

「美春ちゃんがそうまで言うなら、私にどうこう出来ないわよね・・・」

「
由美は次に足下で泣いている少女に手を差し伸べる。

「千尋ちゃん……だよな？大丈夫？」

「は、はい……」

顔を上げると、涙でぐしゃぐしゃだった。

「私は三笠由美……あつちは中山圭太ね。2人とも旭さんの友達なんだけど……」

「おにーちゃんの……？」

「そうだよ？ここじゃなんだし、詳しい話……よかつたら聞かせてよ？」

圭太も優しい笑みで千尋に言う。すると涙を拭きながら千尋が立ち上がった。

「いいんですか……？」

「もちろん！」

「当たり前よ！」

圭太と由美が一緒に言った。

「ちーちゃん、大丈夫……？」

美春が千尋に話し掛ける。

「美春さん……いつもゴメンなさい……」

「いいの、気にしないでよお」

謝る千尋に抱きつき頬すりする美春。相変わらずだ。

「じゃあ、ここじゃなんだしどこか移動しましょうよ？」

「じゃあ近くにいい感じの喫茶店があるからそこに行こお」

由美が言うと、美春が千尋に頬すりをしながら由美に言う。こんな時でも明るいので皆はこの時は美春のテンションの高さに助けられた。

「じゃあそこに案内してください。その、千尋ちゃんは誰の後ろに乗せて行きますか？」

圭太が千尋と美春を見ながらたずねると、千尋が美春の攻撃から脱出した。

「私は自分の単車があるから大丈夫です」

「え・・・？」

言いながら千尋が向かった先は、なんとあの族車だった。

「それは旭さんの友達のじゃあ・・・？」

「ううん？私のだよ？」

圭太の間に、千尋は笑って答えた。まさか、千尋がこんな派手なバイクに乗っていたとは・・・

「なんか・・・凄いわね・・・」

「そーですかあ？まだまだですよあ？」

由美も驚いていると、千尋が嬉しそうに笑う。

「とりあえず出ようよお 話はそこでしよう」

美春が言いながらカフェヘルをかぶって自分のGT380に跨がる。

「じゃあ美春さん。道案内よろしく」

「はい」

かくして一同自分のバイクのエンジンに火を入れる。が・・・

カシャン・・・！カシャン・・・！

「あ・・・あれえ？」

千尋がエンジンを掛けるのに苦労していた。しばらく見ていると・・・

カシャン・・・！カシャン・・・！ゴロオ・・・ゴロオオオオン！！クアアアアアアアア！！！！

2スト集合管特有の甲高くもくぐもったエキゾーストが響く。煙も旭ほどでは無いが出ている。

「ふう・・・掛かったあ。待っててください！今そっちに向き変えますから」

ホツとしたような顔で千尋が言う。次にバイクを駐車場出口に向き

を変えていくが・・・

「おつとつと・・・重いよお・・・前見えないよお・・・」

よちよちと移動する。バイク自体は大きくは無いが、ロケットカウルのせいで視認性が悪い。しかも身体が小さいのでかなり苦勞している。

「なんか、バイクに乗せられてるって感じね・・・」

由美がハラハラしながら見ていると、ようやく方向転換を終えたらしい。

「お待たせしました！行きましょう！」

千尋が元氣良く言った。

「じゃあ行くよお」

美春を先頭に、皆が駐車場を後にして行った。

一方、その様子を窓から見ていた旭は

「あの馬鹿・・・！なにやってやがんだよ？」

千尋のバイクの乗り方を見て悪態を付く。

「どこで手に入れてきやがったんだよアイツ・・・！？バカヤロウ・・・」

しかし、どこか心配した顔で千尋のバイクが出ていくのを最後まで見ていた。

ゴロオオア！ゴロオオア！！

「す、凄い音ね？ソレ・・・？」

由美が隣を走る千尋を見て苦笑いする。由美のゼファーだって直管だが、それよりもデカイ音をたてる。

「腹下直管ですから！」

千尋が笑いながら言う。アクセルを入れるたびにロケットカウルが振動でガタガタ揺れる。

しばらく裏道を走ると、なんてこと無い住宅街の中にある小さな喫茶店についた。4人はそこにバイクを停めて店内に入った。

「とりあえず、あなたの自己紹介をお願い」

席に案内されて早速由美は千尋に質問する。

「霧島千尋です・・・おにーちゃんの妹です」

千尋が自己紹介を始める。隣の美春が窓から見える千尋のバイクを見て質問した。

「あのバイクはどうしたのお？」

「欲しいなあって言ったたら、先輩が安く譲ってくれました」

千尋が笑いながら言う。まあ、アノ手のバイクに乗る人間が旭の妹に欲しいと言われて、拒否することも出来るはずは無い。

「安くって・・・だってちーちゃんまだ・・・」

美春が心配しながら聞く。話が見えない圭太と由美は単刀直入に聞いてみることにした。

「千尋ちゃんは今いくつ？」

由美が水を飲みながら聞く。すると千尋はバツの悪そうな顔で静かに答えた。

「まだ15歳です・・・」

「じゃあ中学生だよね・・・!？」

圭太が聞くと千尋は無言で頷いた。

「てことは無免許!？」

「よねえ・・・」

由美が驚き顔、美春が呆れ顔で言う。

「無免許じゃ捕まっちゃうよ?止めたほうがいいよ?」

圭太が真面目な顔で忠告する。無免許はバレたら1年間免許を取り

に行けないのだ。が・・・

「わかってます・・・けど、私近づきたいんです。おにーちゃんに・・・」

言いながらバイクを見る。カナリヤイエローの目立つ外装にロケットカウルはまるで千尋には似合っていない。

「あれってなんてバイクなの？」

由美が千尋にたずねる。

「あれは、RG250っていう、おにーちゃんと同じスズキの2サイクルのバイクです」

スズキ RG250はGT380の弟分、GT250からの発生車であり、後のレーサーレプリカブーム時に活躍したRG250の元になったバイクである。性能も同時代のヤマハRD250やカワサキKH250にも劣らないモノがあるが、時代は2ストから4ストに移り変わる時代だったせいで知名度はあまり高く無いので、よほどのマニアか族関係の人間しか乗らないバイクになってしまっている。

「おにーちゃんと同じ、2サイクルのスズキのバイクがよくて・・・でもサンパチは高すぎて買えなくて・・・そしたらRGがあったから」

千尋が嬉しそうに話す。しかし隣的美春は嬉しくなさそうな冷めた顔で千尋に言う。

「あつくんは、無免許でバイクに乗る人なんて絶対に認めてくれないよ？」

美春のキツイいひとことに、由美と圭太が頷いた。いくら旭が街の不良でも、スジを通さなければ認めない。それが旭のいいところなのだ。

しかし美春の言葉を聞いた瞬間、突然千尋が泣き出した。

「だってえ・・・！わかってるよぉ・・・だけど・・・おにーちゃんがあ・・・嫌だぁ・・・！」

泣きながらなのであまり聞き取れないが、由美達は安心した。どうやら無免許で運転することを平気な気持ちでやっているわけでは無いということがわかった。

「じゃあ、バイクに乗るのはもうやめましょう？旭さんも話せばわかってくれるし・・・」

由美が言うと、鼻水までたらしている千尋が由美に言う。

「ダメえ・・・おにーちゃん・・・私、本当の妹じゃないから・・・嫌いなのお・・・」

「へ？どーいう・・・」

「そこが問題なんだよお・・・」

わからないという顔の由美に、美春がため息をついていう。

「実はあつくとちーちゃん。本当の兄妹じゃないんだあ」

言って美春が水を飲む。店員にコーヒを4つ頼んでから話を続ける。

「あつくんが生まれてすぐにお母さんが死んじゃって、小学5年の時までお父さんに育ててもらってたんだけど、6年生の時に再婚したんだ。その時に出来たのが、妹のちーちゃんなの」

「じゃあ、血が繋がってないのね・・・」

由美の言葉に頷いたあと、美春は続けた。

「あつくんのお父さんは、なかなか仕事が忙しくてあんまり家族っていうものを知らなかったから・・・なんだろう、多分それで家族に馴染めなくて・・・」

美春が考えていると、まだ泣き止んでいないが千尋が話を始める。

「おにーちゃん昔言ってた・・・自分は悪い奴だから、お前なんかキライだって・・・えぐ・・・」

千尋がたどたどしく言う。そんな話を聞いていた由美と圭太はどうしたらいいのだろうと頭を悩ませている。

「あのお・・・コーヒ・・・」

店員のおばちゃんだけが、状況がわからずテーブルの前に立ち尽くしていた。

場所は変わって、旭のアパート。その駐車場に、旭のGT380と、反対側に真っ赤なCB400Fourが停まっていた。

「旭ー、なーに怒ってんだよオメーはよお？」

「オメーだろ？千尋にここ教えたのよお？」

旭はあの後、洋介を呼び出した。洋介は昔の話を知っている数少ない人間だし、千尋とも面識がある。なので彼を呼び出したのだ。

「お？なんだよ千尋ちゃん来たかよ？どーだった？」

「どーだったじゃねーんだよバカヤロウ！？なんで教えやがった！」

旭はキレながら洋介の胸ぐらを掴む。

「だってよお、泣きながら聞きに来られたら教えるつかねーべや。

それとも、なんでお前が千尋ちゃん遠ざけてんのか、理由を話したほうがよかったか？」

「テメエ・・・！」

旭が悔しそうに叫ぶ。が、洋介がかまわず続ける。

「お前はバカだよ。大バカヤロウだ。嫌われ役を演じようとして失敗するなんざ、本物のバカだよ」

洋介の言葉に、旭は悔しそうに顔を歪めた。

「仕方ねーだろ・・・！？オレはろくでもねえ奴だったんだ・・・千尋に辛い思いさせたくねーだろ！」

旭が吠えた。旭は、自分が不良だったので妹に悪影響を与えたくないかったのと、当時は敵が多かったので巻き込みたくなかったからという理由で千尋に近づかない、近づかせなかったのだ。実際に嫌っ

ているワケではなかったのだ。

「アイツはオレに近づかなきゃ普通に暮らせんだよ！だってのに、さっきもRGなんざ乗って来やがってよお、オレの真似ばっかしやがって！！」

「だからバカつつつてんだべがあ！！」

ガスっ・・・！

洋介が思い切りぶん殴った。旭は胸ぐらを離して後ろに飛んだ。

「確かにオメーは悪イ奴だったぜ！？ツツパってて気合いの入ったワルだったぜ！？でもよお！？まだそんなこと言ってるなら翔子ちゃんや由美ちゃんや圭太、そして美春ちゃんはどーなんだよ！？」
洋介が叫ぶ。それは旭にとっては何も言い返せないほど正論だ。なぜ千尋がダメで由美達はOKなのか。どちらも不良などとはかけ離れているのに、何故違うのか。

「もうガキじゃねーんだから、素直ンなって・・・千尋ちゃんともさあ、仲良くしてやれよ？」

洋介が手を差し伸べる。旭はしばらく目を瞑って考えたが、やがてその手を取った。

「この借りはぜってえ返すかな・・・！？」

「おうよ！じゃあ今度フォアのセッティング手伝いやがれ！」

「けっ・・・！」

2人はヘルメットを持って部屋から出た。

「じゃあ、とりあえず旭さんにその辺の事情を聞くとして、今日はもう解散しましょう？」

由美が外を見ながら言う。結構暗くなってきたので、帰り道を考慮

しての提案だ。

「皆さん・・・今日はすみませんでした・・・」

千尋が頭を下げる。ちなみに千尋のコーヒーはまだまだたくさん残っていた。千尋にはまだまだ苦い大人の味だ。

「気にしないでよおちーちゃん 絶対仲良くなるかさあ」

美春が肩を叩く。やっぱりいつも元気だ。

「千尋ちゃんのバイクはどうしよう・・・？」

圭太が悩んでいると、由美が悩みながら答える。

「仕方がないから今日は乗って帰ってもらって・・・明日は私が迎えに行くから」

「はい・・・家はここから近いですから、多分大丈夫です」

由美の提案に、千尋が頷く。

「じゃあ出ましよう。明日また放課後迎えに来るからね！」

由美達はレシートを持って会計をした後、店の前でエンジンを掛けた。

「とりあえず、千尋ちゃんの家までついて行きましよう？」

「そ・・・そんな！悪いですよお！！」

「いいからいいからあゝ テリーを信じてえ」

千尋を無視して美春が中途半端に古いネタを披露する。

「じゃあ行きましよう！！」

由美のひとことを合図に、皆が一斉に走りだす。

ゴロオオア！ゴベ！ゴベえ！！バキヨ！！

「なんか、変な音が・・・？」

先頭を走る千尋が自分の愛車から聞こえる異音に気付いた。しかしどこを見ればいいのかもわからずマフラーなどを覗き見ている。

「そつえば、さつきより煙が・・・」

後ろを走る圭太が言った。見れば確かに白煙の量が減っている。

「白煙が減って・・・？まさか・・・！ちーちゃん！ストップ！」
一番後ろを走っている美春が叫ぶ。しかし、自分の音や周りの音もあつて先頭の千尋に声が届かない。次の瞬間・・・

バキヤ！！！！

「あ・・・れ？」

千尋を乗せたRGが宙に舞っていた。

「千尋ちゃん！？」

「ちよつ・・・？なんで!？」

「ちーちゃん！！！！！」

圭太、由美、美春が同時に叫ぶ。ぶつ飛んだRGはそのまま地面に落つこちた。が、投げ出された千尋は反対車線に飛んでいって、まだ浮いている。そこには・・・
パパア！！！！！！

運悪くトラックが走ってきていた。

「ちーちゃん！！！」

美春が全開加速するしかしここは狭い。由美達を避けながら進まなければならぬし、なによりぶつ飛んだRGが邪魔で先に行けない。

千尋は、自分の状況を理解した。

「私・・・助からないんだ・・・」

近づくヘッドライトを見て、千尋は思った。もうどうにもならないと。

「おにーちゃん・・・さようなら・・・」

目を瞑ってその時を待つ。なぜか冷静に「死ぬ時ってこんな感じなんだ」と思ってしまう。

トラックは急に反対車線から飛んできた千尋に気付いてブレーキを

去りぎわにトラックのドライバーが叫んで行ったが、皆それどころでは無く、RGを避けて旭のもとへ走る。

「千尋ちゃん!?!」

「ちーちゃん!?!」

由美と美春が泣きそうな顔でバイクから降りて千尋の顔を見る。

「気を失ってるだけだ……」

旭が真剣な目で千尋を見る。

「よかった……」

圭太も安心して胸を撫でる。すると千尋が目を覚ました。

「うっん……あれ……おにーちゃん……?」

「千尋!?!」

旭が千尋の顔が目の前まで来るぐらい近くに抱き寄せる。

「ここは……天国かなあ……?おにーちゃんが、暖かい……」

涙を流しながら旭だけを見つめる千尋。その涙を見て、旭は自分のしてきた事が間違이었다のだと気付く。

「バカヤロウ……生きてるよ?千尋……」

「初めて……ぐすっ……おにーちゃんに……名前であ……」

おにーちゃん!?!」

千尋が泣きながら旭に抱きついた。旭もなにも言わずに抱き締めた。

「悪かったな……今までよお」

「おにーちゃん!おにーちゃん……!?!」

抱き合う2人を見て、由美達も安心した。

「よかった……仲直り出来てよかったわ……!」

由美がもらい泣きしながら言う。涙を拭きながら兄妹を見つめる。

「このバイク達が、全てのきっかけなんだね……」

圭太が皆のバイクを見て言う。バイクに乗っていなかったら、この出会いはなかったと思うている。

「そこは私の場所なのぉ……!?!」

「まあまあ美春ちゃん・・・」

ただ1人、美春だけが羨ましいという視線で旭と千尋を見ていた。まあ、本心は泣きたいくらい千尋の無事を祝っていたのだが、ここで明るくならなければとワザとやっているのだが・・・そしてそんな美春を、冗談だとわかっていながらなだめる洋介。

「それにしても・・・なんで急に飛んだのかしら・・・？」

由美が不思議そうに、ぶっ飛んでロケットトカウルもぶち折れたRGを見る。

「こりゃ、オイル切れで焼き付いたな・・・そこでタイヤロックしてぶっ飛んだんだな」

バイクに近づいて見ていた洋介がひとこと。

「仕方ねえな・・・俺が今からトラックで旭ん家に引っ張ってくんからよ？待ってるよ」

洋介は言うつと、そのままフォアで走っていった。

「全くよ・・・あのバカ・・・」

旭が走っていくフォアのテールを見ながら呟く。

「コイツあ、オレがバツキバキに治すからよ？乗りたかったら免許取ってから乗ればいいし、いらなきゃ捨てちまえ」

旭が千尋に言うつと、千尋は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになってしまった顔を拭いて、笑顔で言った。

「うん!!」

こうして、2人の絆が初めて結ばれた。が・・・

「あつくん!!私もお!!」

旭大好き娘の美春も旭に抱きつき、千尋と美春で旭争奪戦になったのはささやかな事件だった。そんな2人を見て、由美と圭太は笑っていた。そして、皆の愛車がヘッドライトでそんな由美達を照らしていた。

第21章 千尋の唄（後書き）

人物紹介

霧島 千尋

職業 中学3年生

誕生日 4月29日（現在15歳）

身長 157？

愛車 RG250

家族構成 父・母・兄（旭）

好きなもの 旭・美春・家族・平和な日常

嫌いなもの 旭を悪く言う人・虫全般・ピーマン

旭の父が再婚してできた旭の妹。子供心に旭に好意を持って接していたが、当の旭はそんな彼女を遠ざけて、まるで嫌ってるかのよう
に接していた。実は当時旭が超ワルで名前が売れてきていた時だっ
たため、彼女を巻き込みたくないと思つての行動だったのだが・・・
。ちなみに、彼女の旭に対する好意は恋愛的なものではなく、普通
の兄妹愛からである。

というわけで21話でした！

なんかバイク小説じゃなくなってきたような・・・

あと！近いうちにもう少し話が増えてきたらキャラクターとバイク
で人気投票的な何かをやりたいなあ・・・と思います。まだ全然何
も決まっていませんが、いつかやってみたいですね・・・
そんな感じで、これからもがんばっていきますので、感想やお叱り
の声がありましたら是非お願いします！それでは！！

第22章 由美の妄想、旭の勉強会、圭太の言葉（前書き）

今回のメカ描写は、自分の経験を元に描いたのですが、なにかおかしな点があればご指摘お願いします。

タイトルは適当。。。汗

第22章 由美の妄想、旭の勉強会、圭太の言葉

次の日も、由美と圭太は旭の家に来ていた。学生なのでそんなに遊んでもいられないが、今日は学校側の都合で授業が半ドンだったので、昨日ぶつ飛んだRGを治す手伝い、という名目で遊びに来ていた。

場所は、やはり旭の家『雪風荘』の駐車場。今はエンジンを降ろす作業中だ。本当なら屋根の下でやりたいところだが、ボロアパートの駐車場にそんな物を求めてはいけない。

「なんとか降りたな・・・」

旭がフレームから外されたエンジンを見て一息。ツナギ姿でサンングラスはしていない。

「これがエンジンの全体像ね・・・!」

由美が新聞紙の上に置かれたエンジンを見て、まるで子供のように純粋な、ワクワク感溢れる笑顔を見せる。本来フレームにくっついたエンジンしか見ることが無い由美達には興味深い状況だ。

「こうして見ると結構小さいんだね」

圭太もしゃがんだりして見ている。2スト2気筒エンジンのコンパクトさに驚いた。

ちなみに、2人ともツナギ着用だ。白いツナギで、圭太が着ているのは旭の予備、由美の来ているのは美春の物だ。こうしてみると2人ともメカニックに見えないことも無い。

「車体は駐車場にカバー掛けて置いておくとして、とりあえずエンジンは部屋に持っていくぞ?」

旭がいいながら、エンジンを持ち上げて台車の上に置いた。

「重く無いんですか?」

圭太がたずねると、旭がパワーの割に細い右腕を見せながら

「普通だよ」

と答えた。ちなみにエンジンは2スト2気筒といえど重い物だが・

部屋までエンジンを運び、床に敷いた新聞紙の上に置いた。狭い部屋がさらに狭くなる。

「じゃあ由美ちゃんと圭太あ……お前らにも手伝ってもらおうか？」

「やつと出番ね！」

由美がはしゃぐ。旭が使っている工具箱の中でピカピカに輝く工具を見て興奮気味だ。

「じゃあ、エンジンバラす前に、この工具でプラグ抜いてくれ」

旭が圭太に工具を渡した。

「これは……？」

「ソイツはプラグレンチっつーんだ。クルマやバイクのプラグを抜く専用工具な。抜き方は差し込んだらネジと同じで左に回せば取れるからよ」

言われて、圭太はプラグにレンチのソケットを差し込み左に回す。しばらくクルクル回していると中から白いプラグが姿を現した。

「コイツがプラグ。エンジンに火を飛ばしてガソリンとオイルを爆発させんだ」

「これが？」

圭太が興味深くプラグを見ていると

「圭太！私にもやらせなさいよお！」

由美が子供みたいに圭太に言うので、圭太は由美にプラグレンチを渡した。

「そんながつつかなくなっただって、これから嫌つつーほどやることあるんだからよ？」

「よし！取れたわ！」

旭の話をもっと聞かず、由美がプラグレンチを回してプラグを取った。

「あーあ、全然綺麗に焼けてねーな……」

旭は2人からプラグを受け取ると、プラグの先端を見てぼやく。

「ここ見てみ？ここから火花が出るんだけどよ？焼け色が違うだろ？」

言って2人にプラグを見せる。1つはオイルまみれであり焼けて無く、1つは焼けすぎて焦げている。

「なんか全然違うわね・・・」

「これが違うとどうなるんですか・・・？」

2人が旭に聞くと、旭はプラグを隅に置いた。

「焼け色が違うってコトは、片方でシリンダーでの爆発の仕方とかオカシイんだよ。オイルだらけのはほとんど燃えてない・・・生ガスがゲロゲロってこたーオイルが濃すぎ。焦げてんのあちゃんと燃えてるが燃えすぎだ。キツネ色になるっくれーがいいんだ」

旭の解説に、2人も「おお」と頷く。初心者の2人はエンジンの中の爆発など、普通に行われて当然の事だと思っていた。

「ま、プラグは終わったから次はヘッドか。とうとうエンジンバラしだ」

2人を見て旭が続ける。空冷2ストのヘッドは部品が少ないのでフィンカバーの取り外しにかかる。2人にやり方を説明しながら作業を進める。

「ナットは対角線状に外すんだ。いつきに緩めずに少しずつ均等に回していけよな」

旭の説明を聞きながら由美と圭太が順々にナットを緩めてく。最初は固着している箇所もあったがネジ山を舐める事無く、ついにナットを外した。

「じゃあ、フィンカバーを上を持ち上げて・・・ゆっくりな」

2人は左右を一緒に持ち上げると、ついにピストンヘッドが姿を現した。

「これがピストンね！初めて見た！！」

由美と圭太はフィンを隅に置いてエンジンの中を見る。

「すげーカーボンが溜まってらあ・・・」

旭はピストンヘッドを見てため息を付く。

作業は続いて、旭がシリンダーブロックを外す。焼き付きを起こしたので固着したピストンリングに苦労したが、なんとか慎重に上に持ち上げて、各シリンダーを外せばついにコンロッドが現れる。

「うわぁ……！」

「凄いなぁ……」

由美と圭太が初めて見るエンジン内部に思わず声を上げる。小さなエンジンだがなかなか迫力がある。

「あーあー、ダメダメだぁ、こりゃ……」

旭はシリンダーの中を覗いて呆れ顔。見ればシリンダー内部はズタズタに傷だらけだ。

「が……単車がぶっ飛んじまう程のダメージでもなし……」

普通、単車が飛ぶ程の焼き付きはピストンがシリンダーブロックを突き破ったりしない限りほとんど無い。今回の場合はシリンダーブロックは傷だらけだが、突き破ってはいない。何が原因かとコンロッドまでバラしていくと……

「な……？これってまさかよぉ……」

1番シリンダー側のコンロッドとクランクシャフトをつなぐ内部部品、クランクメタルが割れてうまい具合にシャフトに挟まっていた。よく見れば腰下のケースに薄くヒビが入っている。普通じゃあり得ないケースだ。

「どうしたんですか？」

圭太が旭のしている場所を一緒になって覗き込む。素人の圭太にはコトの重大さがわからない。

「クランクメタルだ……焼き付いて割れるコトはあるが、それが落ちるなんて……？んなのアリかよ……？」

よくわからないが凄く驚いているらしい旭を見て、圭太と由美もオイルにまみれたクランクケースを覗き込んだ。

「治るの？」

「無理だな……シリンダーとピストンだけなら腰上だけ換えればなんとかかなったが……クランクケースにヒビ入って、しかもクラ

ンクシャフト自体欠けてるし歪んでるか知んねー……このエンジンは死んでるよ」

「そんな……!?!?」

旭の説明はよく理解出来なかったが、最後の言葉に由美は悲しい顔でエンジンを見た。

「もちろん、蘇生させることも出来る。クランクケースのヒビ割れは極小だ……誤魔化せばイけるかしんねーしクランクシャフトも換えて腰上もボーリングすればなんとかなるが……」

「じゃあ……!」

期待を込めて由美が旭を見る。圭太も次の旭の言葉を待つ。しかし

・

「ヒビが入ったってことは、そこから割れていくっつーコトだ。シヤフト本体は換えればいいが、腰上をボーリングに出せばこの傷だ……かなりの費用がかかる」

その言葉を聞いて、2人は下を向いてしまった。旭もエンジンを見て悔しそうに顔を歪める。その時……

『ぴこーん　ぴこーん　』

暗い雰囲気の室内に場違いな軽い電子音が流れる。旭がツナギの胸ポケットからケータイを取り出し、電話に出る。

「オレだけど……おう……」

旭が電話している時、由美はエンジンの心臓とも言うべき存在、クランクシャフトを見ていた。

「エンジンなんて、頑張ればどうにでもなる物だと思ってたわ……

」

確かに、頑張ればどうにでもなるが、費用や手間を考えたら得策ではない。ただでさえ部品が少ない旧車の謳い文句である『壊れたら金が掛かる』とはこういう事態があるからだ。

「なんとかならないかな……?」

「無理よ、旭さんがお手上げなら……」

2人が話していると、旭が電話を終えたらしい。

「おう！オメーら！！」

「ど、どうしたんですか・・・？」

旭のテンションに圭太が驚いていると、ニコニコしながら旭が立ち上がった。

「洋介からだ！！RGのエンジン見つかった！！」

「ええええ！？」

2人同時に驚いてしまった。なんとというグッドタイミング！

「洋介のオヤジが仕事関係で世話になった会社の社長がよ？趣味でそういう古いバイク集めてるらしくてな！予備パーツをしまってる倉庫に、RGのエンジンあるから3万でいってよ！」

興奮気味に旭が叫ぶ。

「で、場所なんだが・・・どーやら隣の市内らしい。向こうさんの都合で、今週土曜なら空いてるってよ！」

旭が街の名前を言う。以前話したとおりここは県境なので、隣の市は東京だ。

「じゃあ土曜にはエンジンが復活するんですか？」

「いや、細かいチェックやらなんやらあるから、即日復活は厳しいが・・・復活は近いぜ！」

圭太の肩をバンバン叩きながら旭が言う。叩かれた圭太は強すぎる力に負けて少し後ろによろけた。

「じゃあこのエンジンは？捨てちゃうの？」

由美がピストンを眺めながらたずねると、再び工具を掴んだ旭が

「もっかい組み立ててしまつとく。なんか壊れたら予備で使えるパーツもあるしな」

またパーツを組み込みはじめた。それを見て、2人も旭に教わりながら作業を手伝った。

エンジンの組み立ても終わり3人が休憩していると、嬉しい来客がやってきた。

「やつほー！あつくん ゆーちゃん けーちゃん」

美春が騒がしく部屋に入ってきた。手には差し入れのカレーパンやらの食べ物とジュースが入ったビニール袋が握られている。そして美春の後ろからもう1人、背の低い少女が緊張した面持ちで入ってくる。

「おにーちゃん？は、入るよ？」

制服姿の千尋がゆっくりと玄関に上がる。

「あ、千尋ちゃん！昨日は大丈夫だった？」

由美が千尋を心配していると、申し訳なさそうに由美と圭太に頭をペコリと下げた。

「昨日はすみませんでした・・・私のせいで迷惑をかけてしまって」

「本当に無事でよかったよ」

「そうよ！それに私達はなにもしていないしね？旭さんと洋介さんに感謝しなきゃダメよ！？」

圭太と由美が笑顔で言うと、千尋の視線は自然と奥にいる旭に向いた。

「おにーちゃん？」

「なんだよ？」

緊張しながらも、勇気を出して話し掛ける千尋に、旭がぶっきらぼうに返す。が、旭も緊張しているのか表情が固い。

「昨日は、本当にありがと・・・それと、ごめんなさい・・・」

「昨日何べんも聞いたよ。そんな言わなくてわかってんよ」
頭を下げる千尋に旭が恥ずかしそうに言う。

「あつくん、ちーちゃんのRGは・・・？」

美春が組み立て終わったエンジンを見てたずねると、旭がいつもの

真面目な顔で現状を伝えた。

「フーワケで、エンジンは土曜に。残りの車体なんかのチェックは引き続きやる感じだな」

「よかったねちーちゃん」

「うん！」

旭の説明を聞いていた美春と千尋がハイタッチをする。

「じゃあ！今日はこれにて作業終了のお知らせだよ！食べ物と飲み物あるから今日はみんなでお話しよー」

「お酒はダメですよ？」

圭太が美春に注意しつつ、今日の作業は中止。急ぎよ宴会になることが決定された。

「じゃあ、かんぱーい！！」

美春の音頭で、宴会が開始された。ちなみに座席順は圭太、由美、美春、旭、千尋の順で円陣になって飲み物や食べ物で囲んで座っている。

「そーいや、美春。今日はサンキューな」

「気にしないでよお あつくんのためなら仕事の代わりだろうが人殺しだろーがなんでもやっっちゃうよお」

美春がさらりと恐ろしいコトを言う。

「今日は旭さんの代わりだったんですか？」

圭太がたずねると、美春が「そーなの！」と言ってコーラを一気に飲んだ。

「RG治すから、あつくんが代わってウチの手伝い！子供の時から店番してたから得意だよ？・・・けふっ」

げつぶなのは何故か可愛く聞こえるげつぶをしてから美春が笑顔で言う。

「それから千尋ちゃんを？」

「うん！集場所決めるの面倒だったから、中学の近くで後ろに乗せて買い物してから来たの。」

またコーラをコップに注ぎながら美春がニコニコしながら言う。

「千尋ちゃん！旭さん！今日はあなた達兄妹の為の宴会なんだから、もっと盛り上がりなさい！？」

由美が千尋にオレンジジュースを注ぎながら笑うと、千尋も笑いながらこたえる。

「ここが、おにーちゃんの家・・・」

千尋は部屋を見渡す。初めて入った兄の部屋は、狭くてすこしオイルの匂いがするが、綺麗に物が整頓されている。

「狭くて悪いな。今どき風呂も共同だかな・・・」

旭が言う、「ううん！」と首を横に振る。

「すっごく素敵な部屋だよ！また遊びに来ていい！？」

千尋が緊張した面持ちでたずねると、横から由美が割って入る。

「いつでも来てよ！私達もいるかも知れないけど！！」

「オイオイ由美ちゃん。そりゃオレンセリフだ」

旭がツツコミを入れて、コーラを一口飲むと、改めて千尋に向い直った。

「まあ、いま由美ちゃんが言ったけど、来たかったらいつでも来な？まああんまりもてなしは出来ねーが・・・」

言うが早く、千尋は笑顔で「うん！」と頷いた。

「あ・・・そういえば」

突然、由美がなにかを思い出したのか手を打った。

「どしたのお？」

「昨日言おうとして言えなかったんだけど、おととい真子さんと会って・・・」

「真子で・・・あのマツハのか？」

「うん」

眉を潜めて旭が問うと、由美がコクリと頷いた。やはり同じ2ストトリプル乗りとしては気になる存在らしい。

「ゆーちゃん、あの人と何があったの？」

「あのね、実は・・・」

おとといの出来事を、由美は旭と美春に手振りを交えながら話す。2人は黙って聞き、たまに相づちを入れて聞き、話を知らない千尋もなんとなく聞いていた。

「というワケなのよ」

大体全てを話し終えた由美がオレンジジュースを一口飲みながら一息つく。

「なるほどな。で、あの直線バカは速かったか？」

真子に『リーゼント馬鹿野郎』と呼ばれていたコトを知らされた旭が不機嫌そうにたずねる。

「私のゼファーちゃん、カーブを曲がる度に離されちゃって・・・」

「ま、あそこはほとんど高速コーナーだからな、しゃーねーべ」

カレーパンを一口頬張った。

「しかし、いくら速いって由美ちゃんのゼファーならマツハとタメ張れるし、練習すりゃどこで走ったって勝てるぜ？マジでよお」

「え!？」

驚く由美に、旭が「わかんねーか？」と聞く。

「いくら速くたって、30年前のバイクがどうあがいたってちょっと前まで作ってたバイクにや負けるってコトだ。70年代と90年代じゃあ技術が全然違うわな」

「な、なるほど・・・!じゃあ私も練習すれば・・・!？」

「ああ、もしか勝てるかしんねー」

旭の言葉に、由美は目を光らせる。無理も無い。おとといは為す術

も無く惨敗したのだ。しかしバイクが対等ならば練習次第で勝てるかも知れないのだ。

「私が速くなればマツ八なんて遙か彼方・・・いや、旭さんや洋介さんにだって・・・!?!?」

由美は自分がゼファーを巧みに操って皆を抜き去るシーンを想像してみた。以下想像・・・

「やっぱりサンパチじゃ由美ちゃんには勝てねーわ!」

「オレのフォアなんかこのゼファーの前じゃ霞むぜ・・・」

由美の脳内で、旭と洋介が悔しがる姿が浮かぶ。そして・・・

「由美様!わたくしめのようなマツ八などと名ばかりの鈍足バイクに乗っている人間が圭太君のような素敵なお方と付き合おうなどと図々しい考えを持っていて申し訳ございませんでしたあ!どうかわたくしめの頭を踏みつけてください!」

「ふっふっふ!私のゼファーちゃんのタイヤでもお舐め!!このメス豚あ!!」

「ありがたき幸せですう!」

脳内で土下座する真子が頭を踏み付けられながら自分のゼファーのフロントタイヤをペロペロと舐めているシーンを想像・・・いや、ここまで来ると妄想・・・をして顔を緩ませる。

「へへ・・・はへへへへ・・・」

「ゆーちゃん?だいじょーぶ?」

どこか別の次元にぶっ飛んでしまった由美の顔の前に美春が手を伸ばしてひらひらさせるが反応無し。肩を揺さ振ってもダメだった。そもそも普段から常にどっか別次元にぶっ飛んでいる美春がやっても説得力が無い。

「ゆーちゃんかぁいいなあ」

ぶっ飛んでいる由美を見て、美春もニコニコ笑いながら由美のほっぺたを突きはじめ。部屋は少しカオスな空気に包まれた。

「由美〜！起きて〜！」

圭太が肩を思い切り揺らした。しばらくすると由美はハツとして目を覚ました。

「あ……危ない危ない……というか私にあんな願望があっただなんて……」

「どうかした？」

「な、なんでもないわよ！！」

由美が圭太の肩を叩きながら笑って誤魔化す。さすがにあの妄想は話せまい。

「まあ、変な気は起こさないでね」

「へ、変な気って!？」

先ほどまでの考えがバレたのかと思いきや一瞬ビビる由美。しかし圭太は真面目な顔をして由美を見る。

「真子さんのマツハとレースしようなんて変な気を起こさないでつてコト」

瞬間、カチンと来た。由美は機嫌の悪そうな顔で圭太に詰め寄る。

「なによ？私じゃあ勝てないってコト!？」

「違うって、昨日話したじゃないか。勝ち負けなんて関係無く楽しく走るって……!」

「そりゃあそうだけど……あれはゼファーちゃんを速く改造するって話だったし……!」

「まあまあ2人共！ケンカは良くないよお」

美春が事態を収集しようとなだめると、2人とも静かになった。

2人が気まずそうに座っていると、旭がコーラを飲みながら2人を見る。

「まあオレは峠か街中だったら負ける気しねーけどな」
自信を持って断言した。

「確かにマツハは真っ直ぐが異常に速え……車体が軽いのに加えてエンジンがハイパワーだからアノ暴力的な加速力があるけどよ……?しかも本来なら足周りとブレーキが貧弱だからコーナーが不得

意なんだが、アイツのはイジってんからそこはさして問題じゃねえ」

「じゃあ無敵じゃないの」

由美がため息をつく。聞く話では自分はおるか、旭のテクがあってもサンパチでは勝負にならないと思っている。しかし・・・

「アイツのエンジンが空冷2ストトリプルってのが、オレが峠で勝てる唯一のポイントだ・・・!!」

「え!? だって旭さんのサンパチだって・・・?」

由美が言いたいコトはもつともだ。旭の話ではGT380も400SSマツハも同時代のバイクで、同じ2ストトリプル。それなのに、どこに勝てる要素があると言っのだからか。

「ポイントは熱対策だ・・・」

「熱対策・・・?」

「説明すんぜ? マツハは当時の典型的な空冷2ストだ・・・走行風をエンジンのフィンに『当てて』冷やさなきゃなんねえ。しかも3発のシリンダーのうち真ん中のシリンダーには風が行きにくい・・・」

旭が両手で説明する。エンジンに走行風が当たるということをジェスチャーした。

「ところが、GT380はラムエアーステムつつー風を積極的に取り入れるカバーがある。コイツが風を『取り込んで』くれっから、3発全部のシリンダーがバランス良く冷やされる・・・」

手の形を変えて説明を続ける。しかし由美は疑問に思ったコト口にする。

「でも、だからってサンパチのエンジンが速くなるワケじゃないのよね? そんなに凄い要素じゃ無い気が・・・」

「まああせんな・・・ところで由美ちゃん、エンジンで風で冷やしてんけどよ? シリンダーとピストンの摩擦熱ってなんで冷やしてると思っよ?」

「え・・・?」

考えてみるが、エンジンを風で冷やすと言つことを今知つた由美に分かるワケ無くうーんと考えていると・・・

「エンジンオイルですか？」

横から圭太が手を上げて答えた。旭は学校の先生のように「正解だ」と言つて説明を始める。

「風を『当ててる』だけのマツハと風を『集めている』サンパチ・・・どつちが余裕よ？」

「それはサンパチよ！」

今度は由美が小学生のように答える。

「んで、さっきのオイルの話だが・・・2ストつてのはオイルも燃えてんだ。だからアクセルを開ければオイルポンプからオイルが吐き出される。んでアクセルを戻せばオイルは出ない・・・アクセル戻してもオイルが出てたらエンジンカブっちゃうからな・・・でもオイル出したたって峠道じゃあ高速みてーにアクセル全開とはいかねーだろ？」

「そうねえ・・・こないだ走つたダムの道ならアクセル戻さなきゃ曲がれないし・・・」

「コーナー曲がる前、由美ちゃん何したよ？」

聞かれた由美は少し首を傾げて思い出す。

「えっと・・・ブレーキかけて・・・ギヤ落として・・・」

「そう、エンジンブレーキだ・・・！単車あ減速させんなら信号もコーナーもエンジンブレーキを使うつてのは教習所でも習つたよな？」

「・・・分かつた！分かつたよ由美・・・！」

突然、横で話を聞いていた圭太が由美に言った。それを見て旭もフツと笑つた。

「つまりオイルポンプだよ！」

「説明してみ？」

旭に促されて、圭太が自分の考えた解答を披露する。

「曲がる時にエンジンブレーキを使うと・・・オイルポンプが開か

ないから回転が上がったエンジンの熱が下がりにくいんです・・・
！減速するから・・・風が弱くなるからエンジンが冷えない・・・
！」

「正解だ！マツハは風を当ててんだだけだから高速回転の時はその風
+オイルで冷却だからコーナーで減速すると一気に熱がヤバくなる
が、ラムエアーステムで風を集めるサンパチは少し余裕が出来る
だから全開で走っててコーナーで減速すんとき、サンパチの方が風
で冷やせていた分エンブレしても少し余裕が生まれる！」

旭の説明に、皆が「おお・・・！」と唸る。

「エンジンブレーキして熱くなつたらどうなるの？」

由美の質問に、旭が押し入れを開けてさっき閉まったRGのエンジ
ンを指差す。

「シリンダーとピストンの摩擦熱でピストンがシリンダーブロック
を突き破ってタイヤロック・・・千尋みてーに投げ出されるだろー
よ？」

その言葉に、皆が一斉に恐怖した。昨日、一歩間違えれば死んでい
たかも知れない千尋にとっては笑えない話だった。そんな皆を尻目
に旭は続ける。

「オレンサンパチも、ヤツのマツハもオイルポンプは恐らく全開は
ねーがかなり濃い目のセッティングだが、長い峠道なら中盤で絶対
向こうが先にへたる。しかもサンパチのギヤは6速だ・・・守備範
囲も広れえかんなあ、これが峠でサンパチがマツハに勝てる要素だ」

「な、なるほどお・・・」

由美が啞然となって旭に言う。本当にこの人はバイクのコトはなん
でも知っているのだと思ひ知らされた。

「ちなみに、サンパチはエンジン広いからバンク角が無ねえって言
うが、そりゃノーマルの話だ。跳ね上がったシヨットガンチャンバ
ー付けてセンタースタンド取っばらえば大したことねえ」

「ば、バンク角・・・？ナニソレ・・・」

この後、由美の疑問など完全に無視して説明を始める旭を止めるのに、4人はかなりの時間をかけたコトはいうまでもない。止まった後はしばらくバイクの話題から離れて別の話題へと移って行き、夕方になり解散となった……。

「圭太……?」

「なに……?」

由美と圭太が帰り道の途中の信号で停まっていると、由美がなにやら恥ずかしそうに切り出した。

「さ、さっきはゴメン……!速くなるうなんて考えちゃって……」

言って頭を下げる。そんな由美のコトを優しい目で見ながら圭太が言う。

「僕こそゴメンね?強く言っちゃって……後、ありがとう」

「え……?」

由美がなぜお礼まで言われるのかと考えていると、反対の信号が点滅を始めた。圭太はギヤを入れながら由美に言った。

「今日、由美が旭さんにいろいろ聞いてくれたおかげで、僕もバイクがもつと好きになったよ。バイクの怖さと……それ以上にバイクの楽しさをまた確かめられた。ありがとう」

言って、信号が変わった。圭太は少し恥ずかしそうにして、由美を置いて走りだしてしまった。

「え……ち、ちょっと圭太!待ってよ!!!」

由美もワントンポ遅れて走りだす。2人の少年少女は、自分たちのお互いそっくりなバイクに乗って帰路に着く……

第22章 由美の妄想、旭の勉強会、圭太の言葉（後書き）

作者「あー、またそろそろみんなのバイクを紹介してもらおうべく誰か呼ばなきゃなあ・・・次は赤城姉妹の双子の姉でも・・・」

???「ちよいまてやーーーーー!!!!!!」

がしゃーん!

作者「うわ!何奴!!て!責様は!」

洋介「てめー!オレのフォア紹介しないってどーいうことよ!?!?順番的に翔子ちゃんのあとは真子のマツハじゃなくてオレのフォアだろっ!?!」

作者「いや、ごめん。忘れてた」

洋介「殺す!!!」

HONDA (旧)CB400FOUR改 洋介仕様

スペック

エンジン ノーマル

吸排気 ヨシムラ当時モノ手曲げ管 CRキャブレター

足回り 純正補強スイングアーム フロントダブルディスク

外装 ヨーロピウインカーカチ上げ、タックロール、バックステ

ップ、トマゼリセパハン(たまにマー坊ハン)

色 純正赤

洋介「これが俺様のフォアちゃんよ!ヤバイベえ!?!」

作者「ふ・・・ふあい・・・」殴られすぎてしゃべれない。

洋介「ま!満足したし飽きたし・・・今日は帰るわ。また来るからよ?じゃなみんな!」

作者「・・・」

朝

がばっ！！ 起きた

「何か成し遂げた気がするぜ！」

というわけで22話です・・・速いですね汗

あるお方に、「残すはYAMAHHAのバイクですね」とのメッセージを頂きました。ちゃんとだす予定はあります！むしろ翔子より先に出そうとしたのですが、厳しかったです・・・汗

というわけでこの小説を読んでくださっているYAMAHHAファンの皆様！今しばらくお待ちください！そして他の4メーカーが好きな方は続けてお楽しみください！そして何かご意見等ありましたらぜひ！

第23章 圭太初バトル!? (前書き)

お待たせしました汗

なかなか時間が無くて執筆が遅れてしまいました。申し訳ございません(。ー。)

今回は少し長めです!お楽しみください!!

そして後書きは新コーナーです!

第23章 圭太初バトル！？

旭の家での出来事から2日・・・今日は木曜日だ。圭太も由美も今日は学校へ行き、6時間授業をこなし先生から「お前ら受験生なんだ、そろそろ進路についてマジメにやっついていくぞ」、そこ話聞いているか？」などと言うこの時期にありふれた話を聞いて学校は終了。ちなみに由美は今日、学校の補修で居残りさせられている。科目は数学、歴史。帰り際に由美に数学のノートと歴史のプリントを強奪されたが、圭太は諦めて「がんばってね」と言っただけで帰宅した。

今日、圭太にしては珍しく1人でバイクに乗って出かける用事あった。制服から普段着の半袖とジーパンに着替え、その上からジャンパーを羽織ってカバンを手に持ち部屋を出る。途中、姉の部屋から「ふみゃー！！」とか奇声が聞こえたが、また何か変なことでもしてるのだろう。無視して階段を下る。

「じゃあ、忘れ物も無いし・・・」

玄関で忘れ物が無いかを確認して、下駄箱の上の鍵置場から家の鍵とバイクの鍵を持って家を出た。

「途中で給油して・・・遠いなあ・・・はあ」

ため息をして愛車のキーを捻った。スターターを押すと、『キュルキュル』っとセルの音が鳴り、すぐにエンジンが掛かった。

ブアアアアアン・・・！ファン・・・！ヒュルヒュルヒュル・・・

ノーマル2本出しのマフラーから響く4ストツインカムマルチの、カムチェーンの音が混じるカワサキ特有のエキゾースト。Z400FXを車庫から出して、サイドスタンドを立てた後、カバンをシートベルトに挟んで固定。圭太はポジションを確認した後、ヘルメットを被りそのまま発進した。

「まさか、借りた本を忘れるなんてなあ・・・はあ」

圭太はブックサ言いながらFXを走らせる。今日圭太が向かうのは相模湖より手前の、でも高尾山より奥の方の微妙な場所にある母の弟、つまりおじさんの家だ。

この前、圭太がおじさんの家から帰ってカバンを開けるとカバンの中に図書館から借りた本が無くなっているコトに気付いた。それでおじさんに確認すると、おじさんの家にあることが判明した。すぐに行こうとしたが、月曜、火曜は旭達と遊んでいて、昨日は宿題におわれていた為、今日しかなかった。今日取りに行かないと、全て読む前に貸し出し期間がすぎてしまうので平日の夕方に1人そんな場所に向っていた。

「しばらくは真っ直ぐ走れば着くし、いいかな、たまには」

言って、圭太が自分の愛車のタンクを見る。純正色には無い、艶のある濃いブルーの外装に、青空とジェットペルを被った自分の顔が映る。

「由美・・・バイクに乗り始めて最初の頃は僕がFXなんて、背伸びしすぎな気がしてた・・・今も少しあるけど・・・」

軽く呟いた。皆はそれぞれ自分にあったバイクに乗っているしそのバイクを心のそこから愛している。由美はゼファー改FX仕様につきこんだ。しかも元気のある由美に、あの赤い外装は似合うと思う。旭や美春のサンパチも爆音を立てて堂々と進む様はあの2人らしい。なのに、自分はどうかだろう？『硬派カワサキの象徴！』『名車！』

などと呼ばれるFXに乗る自分は硬派でも無い普通の人間だ。それも成り行きでもらったバイクに乗っているのだ。別にFXが嫌いだったと言っわけではない。これはカッコいいバイクだ。圭太が嫌なのは自分だ。身体は細く力も無い。顔はなんか女みたいで弱そうな貧弱な顔・・・（ちなみに、本人はわかっていないが、かなり綺麗な顔立ちをしている）

それでいてFX・・・圭太はそれが嫌だったのだ。

「でも・・・やっぱり」

そんな自分も、最近ではFXでよかったと思いはじめた。これに乗っていなかったら、自分は免許を取らなかつただろうし、由美も今のゼファーとも会わなかつただろう。旭や翔子達にも会えなかつたと思う。

「まあ・・・早い話、僕も愛着がもつともつと湧くように、自分のカタチを作ってみようかな・・・」

昨日旭の話聞いて、エンジンに興味を持った。この鉄で出来た四角い箱の中で4つのピストンが綺麗に爆発して回っている・・・オイルがエンジン中を駆け巡り、バルブが空気を吸い込み、排気する。その話を聞いた時に、圭太は非常に惹かれるものがあった。今もシートの下で唸るエンジンの音を聞いて、ピストンの1発1発の爆発を感じようとしながら走る。

ノーマルFXは街道を順調に走る。街道では、その地元の中学生だろうか、FXを興味ありげに見ていく。

途中、ガソリンスタンドに寄って給油。走りだすと高尾方面の道はガラガラだ。

「よし・・・！」

前に車も信号も何もないコトを確認して、ちよつと緊張しながらアクセルを開けた。

フアアアアアアアア・・・！！！！

途中、エンジンが一息ついたが加速は止まらない。FXはノーマルマフラーは由美のシート管に比べれば全然大したことはないが、なかなか大きな音を立てて走る。

60・・・65・・・70・・・80・・・100・・・

スピードはどんどん上がっていく。圭太はエンジンの唸りを感じながら走る。強風が顔に当たり、狭い道路脇の歩道や道の標識が恐ろしいスピードで後ろに流れていく。

「は……速い……！」

風に顔を歪ませながら走る。向こうの歩道をおろく老人を確認したと思うと、すぐにミラーに映る。圭太はその速度に恐怖した。今現在のスピードは110キロ。そろそろ信号も出てくる頃だ。ギヤを落とし、エンジンブレーキとブレーキを使って減速。50キロ代までスピードを落とす。

「ふう……やっぱり、スピード出したら怖いなあ……」

圭太は視線を前に向けて1人つぶやく。しかし、なにか心がモヤモヤする。

『もし、あのまま加速を続けてたら……？』

圭太は、さっきの加速時の景色を思い出す。ものすごい早さで流れる歩道や建物、人間……圭太は怖くなって減速した。

しかし、減速する前、あの瞬間。一瞬……ほんの一瞬だけ、メーター越しに見えた道路標識が、止まって見えた。

それは……凄く不思議な感覚だった。

「あれは……まあ、いいか」

圭太はその後、いつもの安全運転でおじの家を目指した。

高尾も越して、峠道に入る。この短距離で小さな峠道を越えれば目的的地はすぐそこだ。圭太はFXを法定速度で走らせる。山は青い木々で賑わっているが、夕日も沈み掛けているのでそれもよくは見えない。

「夜の峠って・・・なんか嫌に静かだなあ・・・」

対向車は1台もない。前も後ろも、自分のバイクが走り過ぎるといつきに暗闇になる。街灯はほとんど無い。

山にエキゾーストを響かせながら峠を上る。コーナーはキツイが、上りなので大したことは無い。

そして、下りに入った。小さな峠道は距離は無いものの、坂が急なのでアッパダウンで走りがかかり違ってくる。先ほどの上りはスピードを出さなければまったく余裕で曲がっていける。しかし、この下りは・・・

「え・・・!?!?」

上り切った瞬間、いきなり下りのコーナーが待ち構えていた。急勾配をなんとか抜ける。

「危ない危ない・・・」 法定速度以内に速度を落とし、コーナーをクリアしていく。

「こうやって走っていると、コーナーじゃあやっぱりエンジンブレーキ使っちゃうなあ・・・」

先日の旭の話が頭をよぎる。法定速度でもエンジンブレーキを使わなければ曲がれないのだから、確かにエンジンにかかる負担は相当な物なのだろうと思う。

「それにしても・・・直線がほとんど無いなあ・・・」

そして、峠を走るのはほとんど初めての圭太がFXを傾けながらつぶやく。キツイ勾配のコーナーを曲がったと思えば、すぐにまた逆コーナーの切り返しだ。道も悪いから危険だ。

「早くおじさん家行こう・・・」

圭太はとりあえず安全運転で先を急いだ。

「じゃあ圭太、安全運転で帰れよ！」

「はい！お邪魔しました」

おじさんの家に着いて、本を受け取った後、少し話してから出発の準備に取り掛かった。おじさんは玄関先まで見送りに来てくれた。

「しかし、圭太がバイクに乗るとは・・・似合わないなあ？がはははははは！！！」

おじさんが言つて圭太も苦笑いする。確かに本が好きなおとなしい圭太がバイクというのは、親族だからこそ似合わないと思つてしまふ。

「このバイクは佑太さんのお下がりか？」

「まあ・・・」

佑太とは圭太の父親である。おじさんはFXをまじまじと見つめる。

「まあ、なんにしても安全運転でな」

「はい、失礼します」

挨拶をして、ヘルメットを被りエンジンを掛ける。短いセルの後、エンジンが掛かった。

「じゃあ、また遊びにきます」

「おう！娘と楽しみにして待つてるからな！！」

おじさんが豪快に笑う。圭太はギヤを入れてゆっくり発進。片手を振つて挨拶をしながら走つていった。

「FXか・・・懐かしいなあ」

おじさんは走つて行くFXのテールランプを見つめながらぼやく。

「俺のバイクも、復活させたいなあ・・・」

「もう真っ暗だし、早く帰らなきゃ・・・」

圭太は少し焦り気味に走り抜ける。

帰り道も先ほどと同じ道なので、先ほどの峠を越えなければならぬ。圭太は自分の他にも峠を越えるバイクが車がいるコトを願っていた。が、この田舎の道を使う人間はほとんどいないため期待薄だ。

しかし、ため息をつきながら峠の入り口前の信号に差し掛かると、なんと1台のバイクが信号で停まっていた。しかもウィンカーを点けていないということはこのまま直進、峠に向かうということだ。

「よかつた・・・他にも峠越える人がいて」

小さな声で言いながら、ゆっくり隣に並ぶ。圭太はとりあえず隣の人のバイクをのぞいてみる。

「・・・あれ？」

見覚えのある細いタンクはキャンディーレッドにレインボーライン。スワローハンに集合のショート管・・・そして吐き出されるバリバリという排気音・・・。

「ま・・・まさか・・・」

ライダーの顔を見ると、向こうもすでにこちらを見ていたらしい。フルフェイスのシールド越しに驚き顔でこちらを見ていた。

「・・・」

「・・・」

たつぷり10秒以上見つめあつた後、2人は一斉に声をあげた。

「あ！！てめえは！！確か圭太とかいう・・・！！」

「あ！！君は！真子さんの妹の・・・?!」

圭太の前にマツハ3姉妹の次女、赤城凜が現れた。

「なんで君がここに・・・？」

「あ？関係ねーだろ？ていうか、お前！」

「は、はい・・・？」

ビシッと圭太に指をさして凧が怒鳴る。今会ったばかりなのに、なぜかかなり怒っている。そしてヘルメットを脱ぐといかにも不機嫌そうな顔で圭太を睨む。

「今から俺と勝負しやがれ！！もちろんバイクで！！」

「はあ！？」

凧はなんと圭太に単車の勝負を挑んだ。挑まれた圭太は頭が？でいっぱいになった。なぜいきなり勝負しなければならないのかまったくわからない。

「てめえのせいで、姉貴の頭がバカになった！どーしてくれんだよ！！」

凧がエンジンを掛けたままサイドスタンドを下ろしてこちらに歩いてきた。信号はとつくに青だ。

「えと・・・どういうこと・・・？」

話が見えてこない圭太がたずねると、凧は圭太の胸ぐらを掴みながら、しかしなんかちよつと可愛い声でまくしたてる。

「てめえのせいで最近姉貴がおかしくなっちまったんだよ！気付いたらヘラヘラ笑ってたりなんか変なポエム書いてたりするし・・・！！どーすんだよ！！？」

「だからなんで僕なんだよ・・・！？」

「このニブチンがあ！！」

2人の噛み合わない変な言い合いが続く。凧はかなり怒りながら圭太に詰め寄る。

「だから！俺とレースしろ！お前が勝ったら俺はなんにも言わねえ！だが！お前が負けたら姉貴には1ミリも近づくなよ！！」

「だからなんで・・・」

「うるせえ！！姉貴におめえは釣り合わねえんだよあ！！」

なにやら1人興奮気味の凧の暴走にため息をつく。よくわからない

がレースしないコトには解放してくれないらしい。圭太は胸ぐらを掴まれていて苦しいがなんとか声を出す。

「わ、わかったよ・・・やるよ、やるから放して・・・!」

「よし!!じゃあこの峠を先に越えたほうが勝ちな!信号変わったら容赦無くスタート!!」

言って圭太の胸ぐらを放して自分の愛車に跨がる凜。スタンドを上げて右足で愛車を支える。

ブアッパアアアアン!!クアアアアアア・・・

アクセルを吹かすと、マツハの集合ショート管から出た爆発音が山に響く。白煙も出ているが辺りが暗いため分かりにくい。テールランプに照らされた白煙だけがあたりを陽炎のように漂う。

「ケ・・・ノーマルFXなんざ、ブツチギリよ!!」

凜がバンバカ吹かす。辺りが爆音に包まれると、信号が変わる寸前になっていた。そして・・・

フアアアアアアン!!

バアン!!コアアアアアアン!!

青になった瞬間、2台のバイクは峠へと加速していった。

最初の右コーナーで頭を押さえたのはやはり凜だった。車体を綺麗に傾けてセンターラインギリギリを抜ける。圭太もFXをコーナーで傾ける。

「ついて来いよ・・・!!」

続くコーナーも、赤いマツハが壁ギリギリに走り抜ける。圭太も追いつこうとするが凜ほどインの壁には寄せれなかった。

そして上りの急勾配。3連ヘアピンが見えてきた。ここはかなりキツイコーナーなのを、先ほど走った圭太は覚えていた。いくら上りでもこのコーナーなら減速は免れないと圭太は考えた。

「なら、絶対ここでエンジンブレーキを使うはず・・・！」

先日の旭の話思い出した。2スト、とくにマツハはエンジンブレーキに弱い・・・マツハ乗りならば絶対多用しないはず。追いつくならそこしかない！

そう思った圭太は、FXを加速させる。前のマツハとコーナーが近づくと、一気に距離を詰める。しかし・・・

「げ、減速しなきゃ・・・！」

コーナーの前で、凜は減速しない。逆に後ろの圭太が先に減速、エンジンブレーキまで使ってしまう。

「行くぜ・・・！！！」

凜は1人叫ぶ。車体を一度左に寄せてから一気に右コーナーに倒す。軽いフットブレーキの後そのままアクセルを開けてコーナーに侵入していく。

「な・・・！？」

凜の走りに圭太が驚いた。この急勾配を上りとはいえ、ブレーキだけで・・・しかも一瞬のタッチでコーナーを抜けるその走りに。圭太は詰めが甘かった。エンジンブレーキが使えない車種に乗っている人間なら、なるべくエンジンブレーキを使わずして曲がるテクニクを身につけているということを考えていなかった・・・

コアアアアアン！！！！

マツハはそのショート管から雄叫びを上げて走る。センターラインのすぐ横をタイヤが、その上を凜の膝が通り過ぎる。ハングオンが世界一似合わないマシンでコーナーを走る凜はニヤリと笑った。

「オレはマツハで速くコーナーを抜ける為に、毎日毎日練習してんだ……！ノーマルFXなんかには負けるか！」

続いて切り返しのヘアピンでもマツハはかなりのスピードで走っていく。世間一般のマツハの走りのイメージである『真っ直ぐのストレートを白煙なびかせながら走り抜ける』姿とはかけ離れた、コーナーの度に車体をしならせて曲がる凜のマツハ。そしてそれを追いかけるFX。

圭太はなんとかマツハについていこうと頑張っている。しかし今日初めてコーナーを攻める走りをする圭太に為す術は無い。徐々に離されている。それに……

「くっ……！？」

先ほども走ったこの峠が、コーナーを曲がる度に牙を剥く。自分の中の目一杯のスピードでコーナーを曲がると、すぐに次のコーナーが口を開けて待っているのだ。圭太は恐怖した。呆気なくコーナーに飲まれてしまいそうな感じに背筋が固くなった。

「これは……ムリだね、やっぱり……」

圭太はあきらめて減速しようと思った。命がいくつあっても足りないと思ったのだ。情けない話だと自分で思う。もし旭に知られたらなにか言われるなあと苦笑いしながら圭太はアクセルを絞るとFXは減速を始める。前を走るマツハとは距離がさらに開くハズだった。しかし……

「な……！？」

圭太は目を疑った。凜のマツハが、すぐ真横にいたのだ。ヘッドライトも消えていて、エンジンも掛かっていない。凜が立ちながらキックをしているが蘇る様子は無い。

「どうしたんだろう……？トラブル？」

バックミラーで確認してみると、なかなか掛かる様子も無い。圭太はFXを路肩に停めてサイドスタンドを立てて凜のもとへ走っていく。

「大丈夫……！？」

圭太が行くと、凜がマツハのエンジンの前でしゃがんで死んでいる。プラグを手に持ち「最悪だぁ・・・」とうなだれていた。

「ど、どうしたの・・・？」

おずおずとたずねると、凜は先ほどの勢いはどこへやら。ガックリしながら圭太に言う。

「プ、プラグが死んだぁ・・・」

「え？」

プラグが死ぬの意味がわからない圭太がそれをたずねる前に凜がぶつぶつ言い出した。

「オイル濃いからなぁ・・・でもなんだってこんな時に・・・」

途方に暮れる凜に、今の独り言でなんとなく事情がわかった圭太がマツハと凜の横に立って言う。

「す、スペアとか無いの？」

「前に交換したから無えんだよ・・・はぁ」

ついに地面に寝転がりだす始末。「ヴぁ・・・」とか「だく・・・」とか言いながらぶつ倒れてる凜を見て、圭太はとりあえずなんとかしようと思いついた考えを凜に提案することにした。

「じ、じゃあ僕が今からプラグ買ってくるから少し待っててよ・・・」

「あ！？てめえ！か弱い女の子をこんな峠道に放置して行くうってのによ！？」

か弱いと言う言葉とは程遠い言葉使用で怒鳴る。

「じゃあ僕の後ろに乗って町まで出る？」

「マツハ置いてけるか！帰ってきて無くなってたらどーすんだよ！」

「じゃあどうするんだよ！？」

「知らん！！どうにかしやがれ！！」

かなり自分勝手な凜に圭太も呆れるしかない。一瞬、もう帰ってもいいかな、とも思ったがその考えはすぐに頭から消えた。こんな場所置いていったら次にクルマが通るのはきつと朝になるだろう。

それまで放っておくことなど、圭太に出来るハズもないのだ。

「やっぱり僕が街のバイク屋に行つてプラグ買つてくるしかないよ。置いていったら盗まれちゃうかも知れないし、君はマツハを守つて……」

とりあえず納得してもらおうとまた説明してみる。すると、凜はやつぱり怒りながら圭太に食つて掛かる。

「こんな所でオレひとりぼっちかよ！嫌だつつってんだろ！？」

「仕方ないだろ？もうやり様がないよ」

言つて、圭太はFXに向かつて歩き始める。プラグ買うだけの余裕が財布にあつたかどうか考えていると、ジャケットの袖をなにか弱い力で掴まれた。

見るとあの凶暴な凜が弱々しく、泣きそうになつて圭太の袖を掴んでいた。

「た、頼むから行かないで来れよ……！？オレ、1人になつたら……！」

さつきまでの威勢はどこへやら。目に涙を溜めて、訴えるように話す凜は先ほどまでの凶暴な態度とは違う少女らしさで圭太に言った。

「よ、夜の峠に1人だなんて……グスッ……怖すぎるんだよお……！」

半分泣きながら凜が言った。圭太が辺りを見回せば、なるほど確かに街灯は無い。暗闇の中置いていかれてしまったら確かにそれは怖いだろう。

「は、走つてる時は……大丈夫だけど……ヒグッ……！1人じゃ嫌だよお……」

形の良い顔で半泣きの凜。いつものつり目が弱々しい。そんな彼女を見て、圭太は少し考えた。そして……

「わかつた。僕もここにいろよ」

「へ……？」

圭太の言葉に、凜は間抜けな声を出してしまった。

「い、いいのか・・・？」

「うん、ちよつと頼んでみる」

「だ、誰に・・・？」

凜が絞りだすように声を出す。圭太は少し考えた後、ケータイを取り出した。

「友達が、高尾にいるんだ」

その時、高尾某所某宅。

少女が1人部屋でくつろいでいた。机に座って少し分厚い写真の束を手に持ち、1枚1枚ゆつくり眺めてはニコニコと笑みを漏らす。つい先月までなら考えられない笑顔だ。

トゥルルルルル　トゥルルルルル

家の電話が鳴りだした。今日も父は仕事で義母が旅行、義兄は友達の家に行っていて誰もいない。狭い部屋から出て階段を下り、電話の受話器を取る。

「もしもし、衣笠ですけど・・・あ！圭太さん？どうしたんですか？はい・・・はい・・・ええ！？場所は・・・！？大丈夫です！行きますよ！じゃあ少し待っていてください！」

カチツ・・・

受話器を置いて、少女は少し楽しそうにして部屋に戻る。今日誰も

家にいなくてよかったと心の底から思う。

「あの人達が家にいたら出れないですから・・・」

独り言を言いながら、夜は寒いだろつと少しあったかい格好をして部屋から愛車のカギとヘルメットとゴーグルを持って外に出た。

キュルキュルキュルキュルキュル・・・ブアアアアアアア・・・

・・・！！

長いセルの後、エンジン始動。シングルカム4気筒のサウンドをBGMにヘルメットにゴーグルを掛けて、少女は家を出た。

「あそこのガソリンスタンドに行けばあったはず・・・」

スタンドを下ろしてギヤを入れる。完調になった愛車は良い音だ。

「行きますか！」

少女、衣笠翔子は、本当の母の遺したCB350Fourのアクセスを開けて夜の街を走りだした・・・

時は同じく、某峠。

圭太は翔子に連絡を取り終えて、凜と2人で道路に座って話していた。ちなみにFXはマツハの後ろに停めておいた。

「その翔子つてのは、あの横浜にいたヤツの誰かか？」

先ほどの弱々しさ&女の子らしさをどこかにぶっ飛ばしてしまった凜が圭太にたずねる。

「うん。CB350Fourに乗ってた・・・」

「ああ、あれかぁ・・・」

凜は嬉しそうに笑った。

「少しくたびれてたけど、愛情を感じるよな、あのサンパンフォア・・・」

そうして、今は動かない自分のマツ八を見る。

「オレのマツ八も結構大事にしてんつもりだったんだけどなあ・・・
なんか上手くいかねーよ」

圭太もマツ八を見る。集合管出口より後ろはオイルで真っ黒だが、
外装、そしてなによりエンジンはビカビカに仕上がっている。

「そんなことない。マツ八だって十分大事にされてるよ。エンジン
なんかすごい綺麗で・・・」

圭太の言葉に、凜は笑いながら圭太の肩を叩く。

「だろお！？オレのマツ八は外装じゃあ紗耶香に負けるし、チュー
ンアップじゃあ姉貴に負けるけど、エンジンの綺麗さじゃ誰にも負
けねーよ！なんたって一番気に入ってるパーツだからな！！」

マツハシリーズの象徴ともいうべき、2スト3気筒のエンジンのフ
インを撫でた。まだ先ほどの熱が少し残っている。

「僕も、FXをそれくらい大事にしたいよ」

愛車を見て、圭太も言う。凜もFXを見て笑いながら圭太にたずね
た。

「このフェックスはどんな経緯で手に入れたんだよ？」

凜の質問に圭太は自分がFXに乗るに至るまでと自分がFXに乗っ
ているコトをどう思っているのかを軽く説明した。聞いていた凜は

「ふーん」とか「それで？」とか適当な相づちを入れながら聞いて
いたが、話が終わると「うーん」と言ってから話す。

「手に入れるまでの経緯は、まあいいや。あのゼファー女のおかげ
ってワケだ」

体育座りを崩して、地面にあぐらを掻いて、話を続ける。

「でも、FXが似合わない自分がどうこう・・・なんて、どうでも
良くねえか？最初は成り行きで仕方なく、かも知れねーけどお前が
気にするコトじゃねーだろ？周りがどう言おうが思おうが、そのフ
ェックスはお前にしか似合わねーよ」

「そ、そんなものかな・・・？」

「そだよ。大体、お前の考えで言ったら、旧車は不良か元気有り余

ってんヤツだけしか似合わねーって感じじゃね？普通のヤツだって堂々と旧車に乗っていてもいいだろが。確かに面倒クセえ時もあるけど、そんなん知ったこつちゃねー。貰い物だろーがなんだろーが自分がどれだけ胸張ってそのバイクに乗ってるか。それが大事じゃねーのか？」

凜がいつもの男っぽい口調で言った。その目はすごく輝いていて、圭太は今の話を聞いて、そして前に由美に言われた「FXのおかげで今のゼファーちゃんに会えたんだから！」という言葉も思い出して自分が恥ずかしくなった。

「そうだね・・・理由なんていらなんだよね。好きなら好きで、それでいいんだよね」

「そうだよ、バカヤロー」

その後、2人はどちらともなく笑いあった。

それから40分が経った。2人は座って話していると、向こうからバイクが1台下ってきた。2人がヘッドライトの光を見て手を振ると、向こうのライダーも手を振って減速。FXの横にピタリと停めた。

「こんばんわ！圭太さん！」

翔子がゴーグル越しに笑顔であいさつした。

「わざわざゴメン。こんな所まで・・・」

圭太が申し訳なさそうに頭を下げる。すると、ビニール袋からプラグの入った箱を取り出して笑う。

「気にしないでください！おかげで外に出れました・・・あ、プ

ラグってこれでいいんですよね？」

言って見せたプラグの番手を見て、圭太はうなずいた。

「多分大丈夫・・・だよな？」

圭太が後ろに顔だけ向けてたずねる。翔子もその後を目線で追うと、マツハのアクセルを握って申し訳なさそうにして凜が立っていた。すると凜は顔をうつむけたまま、翔子の前に立って頭を下げた。

「本当にすまねえ・・・もうなんて言ったらいいか・・・」

「き、気にしないでくださいよ・・・！私は全然構いませんから・・・！」

頭を下げる凜に、翔子が手をブンブンと振って言う。

「おかげで圭太さんやあなたに会えましたし、全然気にしません」

「お、オレに・・・」

凜が顔を上げてたずねると、翔子は「そうですよ」と言う。

「あなたとは話してみたかったです。マツハについてもいろいろ聞きたいですし・・・あ、写真撮らせてもらってもいいですか・・・？」

翔子はカメラをカバンから取り出して、顔を左斜めに傾けてニコニコしながらお願いした。

「え・・・あ、まあいいけど・・・」

「じゃあ、とりあえずプラグ換えようか」

「はい！」

「お、おう・・・」

凜はシート下の工具入れからプラグレンチのソケットだけ取り出して、プラグキャップの外れたプラグを交換していく。作業は数分で終わった。凜はシートに跨がりキックした。

「シャコ！！・・・シャコ・・・！！」

「ゴロゴロ！！グアアアアアアン！！！！」

「よっしゃ！！復活したぜ！！」

凜が思わずガツポーズを取る。

「すごい音ですね・・・！」

翔子が目をキラキラさせながら言う。旭のサンパチのショットガンチャンバーのようなバリバリという音ではなく、空気砲のような爆発音が耳をつんざく。

「よし！！じゃあ峠越えるぜ！向こうについたら、プラグ代とジュース奢るからよ！」

凜の合図で、2人もエンジンを掛けて走りだす。数分間のランデブーの後、ゆっくり峠を越えた。

下について、3人は凜の奢りで缶ジュースを飲んで話していた。圭太は翔子に最近の出来事を聞かれ、旭の妹の千尋の話をしたり、凜も姉妹の話やマツハの話をして翔子と笑いあっていた。

「あ、もうこんな時間だ・・・」

圭太がケータイを確認すると、時刻は22時を回っていた。

「明日学校ですし・・・そろそろ帰りますか？」

「あー・・・かったりいなあ」

2人は残念そうな顔でそれぞれ言った。

「あ、でも私は土曜日に旭さんの家に行きますから、圭太さん達とはまたすぐに会えますね」

翔子は手をポンッと打って笑いながら言う。

「そうだね。あ・・・そうだ。赤城さんも来ない？もちろん姉妹揃ってで！」

「そうですよ！もっとお話したいですし！」

「凜って、下の名前呼び捨てでいいよ。おまえ等より1つ年下だし・・・」

圭太と翔子は彼女が自分たちの1つ下だと言うことを初めて知った。

しかし「年下だから・・・」と言った凧は今までどうりタメ口で、残念そうな顔で言いにくそうに言った。

「ありがたいんだけどよ、土曜は親父の都合で姉妹みんな用事あるんだ・・・また誘ってくれよ」

凧が言うと、圭太と翔子は残念そうに頷く。親の都合ならば仕方がない。そう思つて2人はとりあえず納得した。

その後、3人は連絡先の交換をした。例によつてケータイを持っていない翔子は紙に番号を書いてもらった。

「じゃあこのまま流れ解散かな？」

「だな。また遊ぼうぜ！」

「次は由美さん達も一緒ですよ!!」

3人は笑顔で言いながらそれぞれの愛車に跨がる。エンジンを掛けるとそれぞれの愛車のエキゾーストが辺りに響く。

「じゃあ行くぜ！」

凧の合図で、3台は走りだした。

高尾に入り、街道に入ると、翔子が道を折れた。手を振つて別れのあいさつをする。向こうもそれにホーンで答えた。

そこから街道を一直線。ひたすら真っ直ぐ進む2台はとうとう神奈川県に戻ってきた。ここから隣の市まで行く凧は真っ直ぐ。圭太はここで右折する。相模近くの交差点、つまり2人の分岐点で信号待ちをしていると、凧がヘルメット越しに圭太を呼んだ。

「あ、圭太・・・！」

「なに？」

圭太が凧に顔を向けると、フルフェイスなので圭太にはわからなかったが、顔を真っ赤にした凧が彼女らしくないモジモジした態度で圭太を見る。

「き、今日はありがとな・・・だ、だからってまだ勝負はついてねえからな!! 借りを返したらまた勝負だ!!」

凜が早口で言うと、圭太も困ったように笑った。

「よくわからないけどわかったよ・・・後、僕からも君にお礼を言わなきゃ。君のおかげで、FXが大好きになれたよ。ありがとう」
圭太も頭を下げた。後、心の中で由美にもお礼を言った。凜のおかげで、由美が笑顔で言っていた言葉を思い出せたのだ。

「ふん・・・！わかりやいいんだよ！！じゃあな！！」

信号が変わると同時に、恥ずかしそうに顔をさらに真っ赤にさせて凜のマツハは加速していく。圭太もそれを見て自分も自宅への帰路についた。家はもうすぐそこだ。

「FX・・・君に乗れて僕は本当によかった。これからよろしくね？」

圭太がFXに向かって呟くと、まるで機嫌を良くしたかのよう鋼鉄の馬は元気良く加速した。

第23章 圭太初バトル!? (後書き)

真田美春の！オールナイトニッポン！！

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。

美春「やつほうーう！みんな元気かなあ！？」

作者「なんだこれは・・・！？」

美春「ここでは、美春おねえさんがこの作品、旧車物語やキャラクタのイメージソングを紹介していくコーナーだよ！解説は自身もバンドでギターを弾いていたんだけど、最近なぜかドラムをやらされてる作者さん！ちなみに不定期放送だよ」

作者「いや、聞いてないし。つか、絶対反響無いだろこれ」

美春「いいからいいから 無かつたらあなたのせいということ・・・」

作者「良いわけねえだろ！！」

美春「というわけでみなさんよろしくねえ！じゃあ早速紹介しまーす えーと・・・」

ペラペラ・・・(台本見てる)

美春「まあ、第一回ということ、先ずはこの作品のイメージソングの発表です」

タイトル FAIRY

作 SOHW-YA

美春「またすごくシブいのが・・・！？」

作者「いや、まあ・・・この前バンドでやって、『カッコいい曲だなあ』と思って『まあ、いいかあ』と・・・」

美春「いいのかなあ、決める基準がこんなのって・・・あ、でもこ

のイントロからサビまでの速いビートがイイ感じだねえ」
作者「だろっ？なんかいかにも加速していくようなこのビートが良
いよね」

美春「姐さんの声もオトナな感じ！カッコいいなあ！！」

作者「お前も見習え。まあ、ギターを弾いているボクとしては、こ
このギタリストとベーシストがライブの時に楽器を同じタイミング
で『グルっ！』て回すところとか、パフォーマンスも最高にいいよ
ね」

美春「ヘタレギタリストのあなたの言うことにしてはまともね」

作者「地味にぐさつとくるなあ」

美春「曲が気になる人は、YOUTUBEなどで調べてみたりレン
タルしてみたりしてねえ！それと、なにかお便りがあったら、メッ
セージなどでお送りください！音楽とか関係なくても全然大丈夫！
どしどし応募まってるよお」

作者「こんな感じでやっていくと思いますので、ぜひお願いします。
・・・」

美春「じゃあ私はあつくんとべたべたしてくるよお またねえ！」

と、いうわけで、ここまでご覧頂いた読者の皆さま、ありがとうございます。
ざいます。

感想やお叱りの声などありましたら是非！それでは失礼します！

第24章 不思議な再会

圭太と凜の一件から2日。

今日は土曜日。千尋のRGの新しいエンジンを取りに向かう日だ。昼過ぎに圭太と由美は旭に家に到着した。

「旭さん！美春ちゃん！こんにちわ！」

「お邪魔します」

由美と圭太が玄関に上がると、6半の部屋で旭と美春、そして千尋の3人がコタツ机を囲んで昼食中だった。

「おお、来たかよ？」

「ゆーちゃん！けーちゃん！やつほお」

旭と美春が笑顔で由美達を見る。かなり機嫌がいいらしい。まあ美春はいつものことだが……。

「……こ、こんにちわです」

一方、千尋はなぜか辛そうに顔を歪めながらあいさつする。机に顎を乗せて、握られたスプーンを下に下ろしてぐったりしてる。

「ど……どうしたのよ千尋ちゃん……」

由美が心配して近づくと、すぐに理由がわかった。コタツ機の横に20ごうは裕に炊ける業務用ガス式炊飯器とかなり大きな鍋が置いてあった。

「ま、またカレー……？」

由美が呆れながらたずねる。千尋の皿にはあと2口分くらいのカレーが残されていた。

「カレーだろ？どーみたつてよお？」

「匂いでわかるでしょお？」

スパイス中毒者の2人はなにがおかしいのか全くわからないと言っような感じで由美に言う。

すると、今まで死にかけたかった千尋が最後の力を振り絞ってなんとかスプーンを持ち上げる。最後のひとくちを無理矢理詰め込む。

「もぐもぐ……ゴクツ……た、食べたよ……」

たったのひとくちをかなり時間をかけて食べ切った。スプーンを皿に戻して旭と美春のコトをまるで仔犬のようにウルウルした瞳で見つめる。

「おー、食ったかあ」

旭が感心して頭を撫でながら千尋に言う。頭を撫でられた千尋は嬉しさ半分、苦しさ半分の顔で旭を見つめる。

「ぜ、全部食べたから……もういいよね……？」

祈るように言う千尋を見て、旭は笑みを浮かべながら千尋が食べていた皿を美春に渡す。一瞬安堵した千尋だったが、次の美春の行動を見てしまった。

「じゃあ最後の一杯だよお」

美春がかなり大量にご飯をよそい、カレーも滝のようにぶっかけてたさっきの皿を旭が千尋の前に笑顔で出すと、千尋はその場にぶっ倒れた。

「も……む、無理だよお……今のでよ、4杯目だよお……？」

「よ、4杯!？」

千尋の訴えに、由美と圭太が声をそろえて驚いた。皿の上にまるで山のように鎮座する黄金色の物体を見て由美が美春を見る。

「ちよつと美春ちゃん……？」

「なあに？」

罪悪感の欠片も無い笑顔の美春。

「なんでそんなに千尋ちゃんにカレーを……？」

由美の質問に、旭が「やれやれだぜ……」とか言いながら質問に答える。

「いやな、ウチは出されたカレーは絶対に5杯は食わなきゃなんねえ掟があんだぜ？ちなみにダチは3杯だ。知らなかったっけか？」

旭がまるで今のアメリカの大統領の名前を言うくらい気軽さで

言う。そういえば食わされたなあ・・・前に。などと由美と圭太が考えていると、突然ぶつ倒れていた千尋が笑いだした。

「私・・・このままカレーにされちゃうんだ・・・えへへ・・・」
なんかカクカクしながらファービー人形みたいに笑う千尋を見て、由美が慌てて千尋の肩をゆすった。

「ち、千尋ちゃん！？しつかりして！！」

「旭さん！ドクターストップです！これ以上はもう無理ですよ！！」

圭太が2人に言うと、カレーを食べながら旭が

「しゃーなーな・・・じゃあ今日はこんなモンでいいか？」

と言う。ちなみに由美達は知らないが、旭と美春はすでに8杯目のカレーである。

「そーだねえ！ちーちゃんも頑張ったもんねえ」

美春もニコニコ笑いながら言う。

「あ、ありがとうございます・・・2人共・・・がくっ・・・」

由美と圭太にお礼を言つて、千尋が力尽きたかのように床に突っ伏す。みんなが大好きカレーライスでこんなに不幸な顔を観せたのは千尋が初めてであろう。

「カレーで虐待が出来るっていうのを、今初めて知ったわ・・・」

「うん・・・」

2人が恐怖しながら旭と美春を見ると、美春がニコニコしながらカレーを食べていた。

「ちーちゃんには愛情が強すぎたかなあ・・・？」

本気で悩む美春を見て、2人は千尋に手を合わせた。なーむー。

それから30分くらいで、ようやく千尋が復活した。が、未だにダルそうで横には胃薬が置かれている。

「洋介が来るまではダベるべ」

旭がタバコを吸いながら言う。今日はショートピースでは無くショートホープだ。

「そういえばどこにあるんですか？その倉庫」

圭太がたずねると、旭も首を傾げた。

「詳しく聞いてねーんだけどよお？隣町にある『アカギ建設』とか言う会社の支社の倉庫らしい」

「え！？アカギ建設ですか！？」

旭が言うと、圭太が驚きの声を上げた。美春や千尋、由美ですら驚いている。

「な、なんかあんのかソレ・・・？」

1人コトの重大さがわかっていない旭がきよとんとしながら皆を見ると、圭太が旭を見て答えた。

「テレビでCMとかもやってますし、かなり有名な建設会社ですよ。社長はたまにテレビなんかにも出ていますよ？」

「あつくんアレだよ！『みんなの街の〜幸せ作り〜 お家のコトならアカギにおまかせ〜』って！」

美春が下手くそな歌唱力でCMソングを歌う。普通に生活している人なら、この歌を聞けば口ずさめるほどメジャーな歌を聞いて、旭は少し考えた後、皆を見た。

「ウチ、テレビねえからわかんねーや」

旭の発言の後、皆が部屋を見回す。そういえばテレビが無いんだつた・・・

「あつくん、今度テレビ買おうね」

ただ1人、美春はまた1つの目標を見つけたと言わんばかりの笑顔で言った。

「まあなんでもいいけどよお・・・とりあえずお偉いさんの所に行くわけだ」

「じゃあちゃんとキチツとした服装で行かなきゃ！」

由美が言うと、皆自分の服装を見る。

由美はお気に入りのＴシャツ、ジャケット、そしてスリムタイプのジーンズ。

圭太は長袖の黒いＴシャツに普通のジーンズ。

旭はいつもどりのスタイルだし、美春は何故か『京都パープルサンガ』のキャラクターとロゴが印刷されたシャツにジーンズ。千尋に至っては何故か制服だ。

「なんかみんなバラバラじゃない・・・」

由美が呆れながら言う。

「つーか、オレだんだん悲しくなってきた・・・」

周りが一般人の格好ばかりの中、１人だけ昭和のツツパリスタイルの旭はがっくりしている。普通にみたら一番浮いている。

「オレもそろそろ普通の髪型に戻そうかな・・・」

「ダメだよお！あつくんはリーゼントじゃなきゃ！！」

美春が旭に言うと、旭も美春のシャツを見て呆れ顔である。

「つーか、なんでパープルサンガよ？」

旭の間に、美春は「え？これ？」と言って首を傾げる。

「よくわかんないけど、ウチのタンスに入ってる、これなら汚れてもいいかな？って」

「パープルサンガファンに殺されんぞ？」

２人の会話をとりあえず聞き流す由美達も、このままではいけないと思った。

「有名な会社の社長に会うのに、格好だけでもちゃんとしなきゃダメよ！」

由美の発言を元に、皆あれやこれやと工夫を開始。美春が旭の家に置いてある服やらなんやらを試行錯誤で着替えていく。着替えている時は、旭と圭太は外に出て着替えを待ち、２人も旭の手持ちの服やらなんやらで着替える。そんな作業が１時間ほど行われた・・・

「ふう・・・軽トラはダリいな・・・」

洋介が駐車場についてため息する。いつものフォアなら楽なのに、仕事用の軽トラで来たのでストレスが溜まる。鍵を挿したまま、ドアを開けて部屋に向かおうとした時、駐車場入り口から聞き覚えのあるサウンドが響いてきた。

「お、翔子ちゃん!!ヤッホー!!」

両手を上げて飛び上がっている洋介に、翔子も手を振って答える。バイクを停めて洋介に向き直るとあらためてあいさつした。

「こ、こんにちわ・・・!由美さん達は?」

「いや、オレも今着いたばかりかだわ。もういるんじゃないかな?」

洋介が言うと、翔子も「そうですね」と言って駐車場を見る。バイクはちゃんと人数分、それぞれの愛車が停まっている。

「じゃあ行きますか?」

「行くかあ」

2人は並んで玄関に向かった。

「よう!来たぞ?・・・なにしてんだお前ら・・・?」

「お、お邪魔します!・・・って、え・・・?」

2人が部屋のドアを開けると、そこには5人ちゃんと座っていた。そこまではよかったのだが、格好がおかしい。というか変態だった。

由美は美春に借りた黒のヒラヒラスカーにこれまた黒い上着は

胸元が少しはだけてる派手なゴスロリ系な物（美春いわく取っつきらしい）で、美春はちよつとキツそうな着物。ちなみに胸元はかなり際どい。

圭太は旭に借りたスーツだ。が、今どきありえないニュートラ・ルックの縦じまストライプの怖面タイプで、旭も紫のスーツ上下に派手な柄のネクタイ。頭はリーゼントのまんま・・・

「あ、来たわね翔子ちゃん！洋介さんも！」

由美が笑顔で手を振る。翔子もとりあえず手を振る。

「み、みなさん・・・なにやってるんですか・・・？」

翔子が恐る恐るたずねると、どこか変な次元にぶっ飛んでいると思わしき目の由美が笑いながら説明した。

「いやあ、今日は千尋ちゃんのエンジン取りに行くじゃない？」

「は、はい・・・」

「で、場所がアカギ建設つて言うからちよつとしつかりしなきゃってみんなで着替えてたのよ！可愛い！？」

立ち上がってくるりと一回転する由美。確かに似合ってはいるが・

・

「おう見るよ洋介！この素晴らしいスーツ姿を！」

旭も派手派手な紫色のスーツを誇示する。

「お前・・・それでヤクザ屋さんでもやるのか・・・？」

「なーに言ってるんだよ！んなわけねーべ！？」

旭が笑いながら肩をバンバン叩く。ちなみに圭太は恥ずかしそうに隅で丸くなっている。圭太は着替えの段階ですでにこの格好はありえ無いと思っていたが、旭のテンションに巻き込まれてしまい今ではヤクザみたいなのスーツ姿である。唯一、千尋だけがまともな制服である。

「あのかなオマエら・・・」

洋介は旭の肩と由美の肩に手を置いた。そして思い切り深呼吸する。そして・・・

「ギャハハハハハハハハハハ！！！」

「ぶっ!!!」

いきなりバカ笑いする洋介と吹き出した翔子。旭と由美はきよとんとするしかなかった。

「バカじゃねーのおめーら!? ヒヒヒヒ・・・!! そんな格好でなにすんだよ・・・チンドン屋かよ・・・!! ギャハハハハハハハハ!!!」

洋介が指を指して目に涙をためながらバカ笑いする。翔子ですら必死に笑いを堪えていた。

そんな状況の中、当のコスプレ4人はただただ呆然とするしかなかった・・・。

騒ぎも収まり、4人はもとの服装に着替えていた。

「暴走しちゃうとなにも見えなくなるっていうのは本当だったのね・

・・・」

ため息混じりに由美が言う。言い出したのは自分だが、後半はもうひたすらに目的と我を失っていた。

「ちえっ・・・私はあれでもいいかなあって思ったんだけどなあ」

美春は少し不満げだ。まあもとからぶっ飛んでいるから仕方がない。一方男性陣は・・・

「死にたい・・・」

「ですね・・・」

2人そろって部屋の隅で死んでいた。

「だいたい、大手企業の社長がクソ忙しい中来るわけねーだろ?」

洋介があきれ気味に言った。考えてみれば当然のコトだ。

「あ・・・」

すると、先ほどから隅のほうで座っていた千尋が旭にたずねる。

「そちらの方は・・・?」

聞かれて千尋の目線の先を追うと、「ん? ああ」と言っつて旭が紹介する。

「こっちは衣笠翔子ちゃん。翔子ちゃん、コイツ、妹の千尋な?」

旭が2人ずつ紹介すると

「は、はじめまして……」

「こ、こちらこそ……!」

千尋と翔子のぎこちない挨拶が交わされた。

一方、洋介は今日これから向かう場所の説明をしていた。

「聞いて驚け。今日は社長の娘が待っていてくれていているらしいぞ?」

洋介の話に、由美がハツとなって顔を上げる。

「し、社長の娘!?!」

「ということは……」

「社長令嬢……?」

翔子と美春も後に続く。

「ま、向こうに行くのはオレと後1人くらいだけだな」

洋介がニヤリと笑って言う。

「エンジン乗っけるだけだし、助手に1人いれば十分だろ」

言いながら皆の顔を見る。旭以外の皆は大手企業の社長令嬢とやらを見たさにキラキラした面持ちだ。しばらく考えた末、洋介は圭太を指差した。

「圭太で決まり。たまにはそんな組み合わせも悪くねーだろ?」

洋介が言うと、圭太もうなずいた。

「そう言えば洋介さんと2人っていうのは今までなかったですからね」

圭太も笑いながら言うと、洋介が手を差し伸べた。圭太もそれに応える。

「いいなあ、圭太ばかり……」

「お土産夜露死苦ね」

指を加えてうらやましがる由美と、なんか言葉がおかしくなっているが、美春がニコニコしながら洋介に言った。すると……

「あ、あの……!私も一緒に……」

洋介の説明を遮って、翔子がおずおずと手を上げる。

「いや、力仕事だし、翔子ちゃんは無理しなくても・・・」

洋介は内心嬉しかったが、この娘に力仕事をさせるワケにはいかない。それに、エンジン1基くらいなら自分で持ち上げられるので、道中の暇潰しの相手を探しているだけだったのだが・・・

「私、皆さんに助けられてばかりだから・・・今度は私も協力したいんです・・・!」

翔子がギョッと拳を握って言う。前にCB350Fourが壊れてしまった時の借りを、いつか返したいとずっと思っていたのだ。

そんな翔子の真っ直ぐな気持ちに、洋介は首を横に振ることなど出来なかった。

「わかった。じゃあよろしくな」

洋介が握手を求めると、元気良く握り返した。

「よろしくお願いします・・・!」

「あ、でも軽トラ2人乗りだったわ・・・」

洋介が肝心なコトを忘れていた。

「じゃあ僕はFXで行きますよ」

「いいのか圭太?」

圭太の申し出に洋介が聞くと、圭太は「はい」と言って笑う。

「最近、バイクに乗るのが楽しいですし、お手伝いだけならバイクで行きます」

「そうか、サンキューな」

「すみません、圭太さん・・・」

「いいなあ圭太・・・」

由美がうらやましそうにして圭太を見る。こうして、出発の準備を始める。まあ圭太はヘルメットを持つただけだし翔子も手ぶらなのですぐに終わる。

「じゃあ行つてくんべ」

「おう、向こうにはよろしく言つていてくれや」

洋介と旭が互いの拳をぶつけなからいう。もう昔からの2人の儀

式になりつつあるが、それはまた別の話だ。

「圭太、お土産買ってきなさいよ!？」

「おっみやげおっみやげ」

由美と美春も笑って圭太に言った。別に隣町に行くだけなのになぜかまるで修学旅行前夜の姉妹のようなテンションの2人に圭太はため息した。

「わ、私からもよろしく言っておいってください!」

そして今回最も皆に世話になっているであろう千尋が皆に向かって頭を下げる。「気にしなくていいわよ!困ったときはお互い様よ!」

由美が笑顔で千尋の肩に手を置いて以前翔子にも言ったセリフを千尋に向ける。皆も一樣に首を縦に振った。

「気にすんな千尋。まただれか単車で困ってたら次はおめえが助ける番だからよ?それまで皆に借り1だ」

優しく頭を撫でられて、千尋は真っ赤になる。

「じゃあ行ってくんわ」

洋介が言って部屋を出る。後から2人がついて出ていった。

「じゃあ圭太には鈍い軽トラの後ろで申し訳ないがついて来いよ?」

「はい、大丈夫ですよ」

圭太がエンジンを掛けたのを確認して、洋介も軽トラのエンジンを掛けた。そしてそのままクラッチを踏んで1速に入れてゆっくり発進していった。後から圭太もついていく。

「私のがままに付き合わせてしまつて本当にすみません」

翔子が謝ると、洋介は「大丈夫大丈夫」と言ってハンドルを切る。

「困った誰かを助けたいってなら話は別だよ。それに翔子ちゃんの方から・・・」

「なんですか・・・？」

「い、イヤあ！なんでもないなんでもない！」

「ははは、と焦りながら笑う洋介。そんな洋介の隣に座る翔子もついつい笑ってしまう。」

「サンパンは調子どうよ？いい感じ？」

洋介がギヤを3速に入れながらたずねる。軽トラはあちこちギシギシいつてて頼りなさげだ。

「まあ年の割りには調子いいですよ。これも由美さんや洋介さん達のおかげです！」

「そーかい？ありがとな」

「い、いえ！それは私のセリフですから・・・！」

「恥ずかしそうに顔を窓に反らす。」

「サンパンもヨンヒヤクも、どんなに現行車に負けててもやっぱフオアはいいよな？」

ハンドルを切りながら洋介がつばやく。

「近々さ、オレのフオアを超改造しようとしてんだ」

「ほ、本当ですか！？」

洋介の言葉に翔子は驚きとワクワクの入り交じった声を上げる。

「ヨシムラキットでボアを上げて458ccにしてハイカムやらなんやら入れて足回りはリヤにウエダスイングアームでさ」

自分の愛車の未来予想図を嬉々としながら語る洋介。

「でも、そのパーツって全部高いですよね？」

サンパンだが、バイクには少し詳しい翔子が洋介に心配そうに言う。確かにヨシムラキットやウエダスイングアームなどはかなり高額なパーツだ。昔ならいざ知らず今ではお金に余裕のある大人でしか出来ない仕様である。しかし

「まあ仕事頑張ってるし、いろいろ伝手があるからヨシムラキットは安く譲ってもらったんだ」

と笑う洋介を見て、翔子はすごいと思った。

「あの、洋介さんのフォアは398ccですか？」

翔子は少し気になっていたコトをたずねる。普通の400ccのバイクなら排気量は398〜399ccが基本なのだが、ヨンフォアに限っては違っただ。

ヨンフォアが出た当時、まだ『大型』や『中型』と言った免許証制度が無かった時代。CB350Fourのセールの失敗を受けたホンダが、次のFourを作るべく考えた末、『350ccだと変化がわかりずらく、450ccだと500と併合してしまう。ならば400ccにしよう』というような考えで作られた（それまでの中型に当たるバイクは当時はほぼ350ccが当たり前）初の400ccバイクがCB400Fourであった。排気量は408cc。

しかし、世間では暴走族問題が騒がしくなり、翌1975年に『自動二輪免許制度』が改正。排気量400cc以上のバイクは全て限定解除、すなわち今の大型免許がなければ乗れなくなってしまった。その煽りをもろに受けてしまったのが当時大人気だったCB400Fourだ。

排気量408ccのエンジンはたったの8ccの差で『大型』に分類されてしまい、普通免許では乗れなくなってしまうのだ。

当時、限定解除は『東大試験より難しい』と言われていた時代。ホンダは打開策としてスケールダウンした398ccとして売りに出したが、コストは上がり性能は下がり、さらに値段は据え置きとしたために生産は長く続かず国内では77年を以て生産を終了した悲劇の名車である。（ちなみに当時主要輸出国であったアメリカには免許制度が無かったのとオイルショックで2ストが不人気だったので408ccが最後まで生産されていた）

「オレのは逆車だから408だよ」

洋介が信号で停車しながら答える。ギヤをニュートラルに入れて一息つく。

「408ccと398ccの外見上の違いって解るかい？」

洋介の質問に翔子は少し考えてから

「サイドカバーの色、ですよね？」

とたずねる。確かに408ccのサイドカバーはタンクと同色で398ccのサイドカバーは黒塗りなので外見上の大きな違いではある。

「正解。でもオレのカバーは黒塗りだったろ？」

「そうですね。私あれを見たら絶対398ccだと思ってました」

「塗つちまえばわからなくなる違いもあるが、ほぼ絶対にわかる違いもあるんだぜ？」

「えー!？」

洋介の問に、翔子が考えるが、全く違いがわからない。どんなに頑張つて考えてもコレと言って思い当たらない。ついにダツシユボードに額をつけて考え込んでいる翔子を見て、洋介が翔子の肩を叩いて笑う。

「はっははは！わかんないよな。外見上の違い、実はタンデムステップの取りつけ位置なんだよ」

「タンデムステップ・・・？」

翔子が疑問の声を上げると、洋介は「そうだよ」と言ってギヤを入れて走り始める。

「408ccはスイングアームに、398ccからはフレームに付けられてんだ。オレのはスイングアームにタンデムステップがついてるんだよ」

ミラーで後ろを走る圭太に手を振る。

一方翔子は凄く感動していた。排気量は違えどエンジンは同じフオアの翔子はかなり衝撃を受けたのか珍しくかなり興奮している。

「すごいです！勉強になりました!!」

「いやいや！それほどでもー!!」

車内は一気に賑やかになった。一方

「……」
圭太はただただ黙々とZ400FXを走らせる圭太だった。

走り出して30分。2台はそろそろ目的地にたどり着くところまで来ていた。

「この辺だよなあ？」

洋介が電信柱の住所を確認しながら道を進む。

「あ、あれじゃないですか？」

助手席で周りを見回していた翔子が指す方向には、確かに大きな看板に「アカギ建設」と書かれていた。

「お、あれだあれだ」

洋介もその看板を見つけた。ウィンカーを左に出して後ろの圭太に気を付けながら左折。駐車場に入ると、警備員が素早く運転席に近づいてきた。洋介が軽トラの窓を懐かしのクルクルハンドルで開けると、中を見た警備員がしかめっ面する。

「ここは関係車両以外立ち入り禁止です」

「関係者なだけどさ？」

洋介の言葉を聞いて警備員はさらに顔をしかめる。まだ20歳にもなっていないような男女2人、しかも男は少し態度が悪い。オマケに後ろにはバイクが1台。

「今日ちゃんと来るってこの社長さんに話通してますよ。羽黒自動車のカギですわ」

洋介が言うと、警備員が今日の来客予定を確認する。そして顔を真っ青にした。

「ししし、失礼致しました！！こちらへどうぞ！！」

警備員の焦燥を見て、洋介は心の中で「勝った」とかワケのわからない勝負の結果に満足して、軽トラのエンジンを3回吹かしてから駐車場に侵入した。圭太も後から続くときに警備員の顔を見ると、

警備員はかなり冷や汗をかいていた。

適当なスペースに軽トラを停める。圭太もその横に停めた。

「うし、じゃあいよいよ社長令嬢とやらとご対面だぜ」

「ですね！」

「そんなに張り切るコトかな・・・？」

洋介と翔子のはしゃぐが、圭太は普通に洋介の後に続いた。先ほどの警備員が入り口まで案内してくれた。その時・・・

「あれって・・・？」

圭太の視線の先に、見覚えのあるテールカウルを装着したバイクを発見した、テールのみで分かりにくいのが、真っ白なFXテールに緑のレインボーライン。もう1台はきれいなブルーにこれまたレインボーライン。

「どうした圭太？」

立ち止まった圭太に声をかける洋介。

「い、いや、大丈夫です」

言って後に続く圭太。

『まさかそんなことはね・・・』

頭に浮かんだひとつの可能性を否定した。もしそうなら、それはタイミングが良すぎるし・・・

しかし、圭太の考えは現実となって実現することになる。

会社に案内されて、受付の女性に案内された部屋にたどり着くと、しばらくそこで待つように言われた。

「どんな人なんでしょうか？」

翔子がワクワクしながらたずねると、洋介は真面目な顔で

「多分相当お嬢様ボケしてんだろうな、『パンがなければケーキを食べればいいじゃない』とか言ってるな」

アホなコトを言った。

「あ、来た来た！来やがったぜ！」

外から数人の足音が聞こえてきた。

そして扉が開かれた。

「ようこそ、羽黒様。私がアカギ建設社長、赤城博彦の娘、赤城真子で・・・あ」

そこで今入って頭を下げた女性、赤城真子は3人を見て挨拶をやめてしまった。

3人も座ったまま、表情すらも固まってしまっている。

「どうしたのお姉ちゃん・・・あ！」

「姉貴・・・？あ、」

姉、真子の後ろからも2人の少女が現れると、2人も固まった。

長い時間を感じられる、俗に言う『永遠の10数秒』の後、時は動き出す・・・！！

「あー！」

「け、圭太君！？え、なんで?!夢!？」

「やっぱり真子さんか・・・はあ」

「テメー圭太コノヤロウ!!」

「あわわわわわ・・・!!」

「はうあう・・・!!」

ちなみに上から洋介、真子、圭太、凜、翔子、そして紗耶香である。

赤城姉妹と、二度目の再開である・・・

第24章 不思議な再会（後書き）

真田美春の！オールナイトニッポン！！

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。

美春「ヤッホー！反響無いけど構わずやっちゃえ！今日も元気に美春お姉さんです！」

作者「ホントにびっくりするくらい反響ねえな、どうも、尖閣諸島は日本のものだ！作者です」

美春「うるさいよ」

作者「はい・・・」

美春「今日は主人公のけーちゃんのイメージソング的な何かを紹介するお」

タイトル Don't Stop Me Now

唄 QUEEN

美春「どんとすとっぴんなーう」

作者「いや、この曲は最高！ブライアンのレッドスペシャルの音の入り方が最高デスネ！」

美春「俺はまだ走っていたいんだ！止めないでくれ！』っていうのは？あんまりけーちゃんぽくないけど？」

作者「まあ、圭太のというよりは愛車のFXの歌かな？」

美春「ああ、止めないでくれ！俺はまだ走っていたいんだ！』って言うところは確かに！」

作者「あいつ主人公のくせに積極的じゃないから困る・・・」

美春「あなたより積極的よ」

作者「・・・」

美春「そんなわけで、曲に興味のある方はYOU TUBEで見
みて下さいね〜!!それでわ〜!!」

第25章 真の和解。そして、動かないバイク達（前書き）

お久しぶりです汗

第25章 真の和解。そして、動かないバイク達

なんとか落ち着いた6人は、とりあえず一旦席に座った。真子はぼーっとした感じで圭太を見ているし、洋介は面倒くささと気まづさを混ぜたような顔だ。凜は洋介を睨んでいるし、圭太は下を向くしかない。翔子と紗耶香はとりあえずガタガタ震えながら座っている。

翔子は洋介を見ていた。翔子は正直こんな場所でのこの姉妹と出会ったコトにも驚いた。正直この前の横浜の一件が翔子を不安にさせる。旭と洋介が真子のマツハに細工をしたことはすでにバレているだろう。そのことについてはこちらが完全無欠にこちらが悪いのだが、それが原因で全然関係の無い千尋がRGのエンジンを譲ってもらえないという事態もあり得る。

翔子はとりあえず頭の中身をフル活動させて打開策を考えて・・・出されたお茶で緊張して乾いた喉を潤す以外に出来ることは無かった。

「ま、まあな・・・なんとも不思議な偶然もあるもんだよな、うん、なあ圭太!？」

気まずい沈黙を破ったのは洋介だった、焦りながらこの状況を収拾しようと笑いながら圭太に向かって笑うが、やがてその笑いも失笑と化してしまった・・・。

「今くだらねーコト言ったテーマ、名前なんて言うんだよ・・・?」

一方、凜はかなり洋介を睨み付けていた。横浜での一件は、圭太と翔子は許したが、それ以外の人間、特に旭と洋介のことはまだ許していない。

「このバラエティーに富んだ話題の宝庫と呼ばれたオレに対してくだらねーとはなんだ、くだらねーとは?」

話題の宝庫などとは一度も言われたことの無い洋介が反論するが、

すでにやる気無しである。

「だいたい、人に名前聞くなら、自分が最初に名乗りやがれよな」
なんとなく最もなコトを言う洋介を見て、ぶちギレそうになる自分をなんとか押さえ込んで、凜が立ち上がった。

「オレは赤城凜だ！さあ言ったぞ！」

乱暴な自己紹介を終えた凜を見て、洋介はニヤリと笑った。

「そんな顔に力入れて自己紹介されちまったら、こっちも自己紹介しなきゃなあ」

言って立ち上がると、しごくマジメな顔を作って洋介が自己紹介する。

「あー、オレの名前はだな・・・羽黒・マーティン・アレキサンドリア・ウル・ブリュンスタッド・洋介様だ。ギャハハハハハ！」

自己紹介を終えて1人爆笑する洋介。しかし周りは誰も笑っていない。3人は呆れ顔で、1人はぶちギレそうな顔で、もう1人は圭太ばかり見ているという状況だ。

「まあ・・・コイツがバカ野郎だ、ってのはわかったな・・・」

今にもぶちギレそうな自分を泣きそうな顔で見つめている紗耶香を見て平静を装う凜。

一方、真子はずーっと圭太を見つめ続けていた。それはもう圭太に穴が開くのではないかというほどの勢いだ。

「圭太君・・・」

「あの・・・真子さん？」

見られ続けている圭太は、横浜での一件を思い出す。やはりあのインチキで怒っているのかと思い、謝ろうとした時に、真子が突然立ち上がった。

「圭太君・・・！」

「は、はい・・・！」

いきなり叫ばれた圭太はなにがどうなっているのか理解出来ない。洋介達も真子をじっと見つめっていると、真子はまた椅子に座ってしまった。

「ど、どうしたんですか？」

若干ビビりながらたずねる圭太。

「FXの調子はどう・・・？」

真子がいきなりFXのことをたずねてきた。圭太は拍子抜けしな
がらも

「まあ、いいですよ」

と答える。すると真子は満足そうな顔でうなずいた。

「それはよかった。私のマツハも絶好調よ」

「そ、そうですね」

苦笑いで圭太が言うと、真子が胸の前で腕を組んで独り言を言
出した。

「同じカワサキ乗りで出会いはいつも突然・・・そしてバイクの調
子も2人とも好調だなんて、これは運命なのかしら・・・？」

妄言を吐き出す。

「ほら見る・・・姉貴壊れてんだろ？」

凜が呆れ顔で圭太にささやく。普段真面目で品行方正でカッコい
い姉が今ではゆるみ切った顔で変なコトをのたまっているのを見て、
凜がため息していると、横から紗耶香が入ってきた。

「で、でも真子お姉ちゃん幸せそうだし・・・」

「でも見るよ紗耶香、アレだぜ？」

指差す先には未だにどこか新世界にトリップしたまま帰ってこな
い姉がいた。

「まあ・・・確かにそうだけど・・・」

「あ、あの・・・！」

突然、横から今まで黙っていた翔子が凜と紗耶香に話かける。

「どーした？あ、一昨日はサンキューな」

「え、あ、まあ・・・じゃなくて私達の用件なんですけど・・・」
一旦ソレにソレまくった話を翔子が元に戻そうとすると、「あ、
そーいや・・・」と凜も思い出した。

「おい姉貴、どうする？エンジンコイツ等に譲ってやってもいいの

か？あとヨダレは拭こうな」

言つてハンカチを真子に渡すと、新世界から現実世界に引き戻された真子が

「危ない危ない・・・私としたことが、威厳が・・・」

などと言つてヨダレを拭うが、すでに威厳など無いコトはいうまでもない。

「で・・・本題のエンジンなんだが・・・まあ、前のことは由美ちゃんと圭太君に免じて許してあげるわ」

「ヨッシャ！ラッキー！」

椅子から立ち上がつて喜ぶ洋介。しかし真子は真面目な顔で睨み付ける。

「あなたとリーゼント野郎のコトはまだ許してないのだけど・・・？」

普段の凜々しい態度で言う真子に、洋介は「そうだったな・・・」と言つて、姿勢を正した。

「あん時はすまんかった。ただ、オレ等モメ事は好きじゃねーんだけど変に負けず嫌いだからさ、あつこでレースなんてマトモにやつて、初心者の由美ちゃんや圭太なんか事故つたらつて考えたら旭と2人でやつちまつてたよ・・・このとうりだ、許してくんねーかな・・・」

そう言つて頭を下げる洋介。それを見て、真子もため息をした。

「まああの時は、私も少し理性のタカが外れてた・・・いいわ、許してあげる」

真子が洋介に言つと、洋介は「すまん」と言つた。圭太や翔子もそれを見て頭を下げると、凜と紗耶香が笑顔で2人に頭を上げるように促す。

「気にすんなつて！もう一昨日水に流したたる？」

「そうですね、私達も凜お姉ちゃんを助けてもらったお礼をしなければいけませんし・・・」

2人が言つと、圭太と翔子も顔を上げた。

「別にお礼なんていいよ。困った時は助けあいだつて、旭さん達にも言われてるからね」

「私も、凜ちゃん達と仲良くなれたし、よかつたかなあつて」
言つて、4人は互い々に笑いあつた。

「そういえば、凜が助けてもらつたつて言つてたわね・・・」

「オレは聞いてねーが、まあそうらしいな」

真子と洋介がつぶやく。

「じゃあ、お礼つて言つたら変な話だけどエンジン、タダでいいわ」

真子の提案に、圭太と翔子が驚いた。

「そ、そんなに気を使わなくても・・・！僕達はただ・・・」

「プラグを買つてきただけです・・・」

2人が言つと、真子は圭太と翔子に優しいな笑みを浮かべて続ける。

「圭太君と翔子ちゃんは優しいわね・・・？でも、これは私達の気持だし、受け取つてくれないかしら？実際、ウチの父のコレクシヨンにRGは無いの。だから大事にしてくれるなら、私はそのほうが良いと思うのよ」

真子の言葉に2人が気まずそうにしていると洋介が横から入つてきた。

「嬉しい話だけどさ、それじゃあ旭も千尋ちゃんも・・・あ、旭の妹な？まあ、納得出来ないと思うんだよ。だから、気持ちだけ受け取つておくからさ？金は払わせてくれよ」

「なんやかんや、いつもふざけたことしか言わない洋介も、ここは譲りたくないらしい。元々昔から旭と2人で硬派で通してきたのでスジは通したいらしい。」

「このエンジンの為に、中坊の女の子が貯めた金のほとんどを使つて、足りない分を旭に借りてまでしてるんよ。いろいろ欲しいモンもあるだろーに。だから、そこはオレ達もその気持ちを汲んでやりたいからさ？」

そう言っつて真子を見つめる洋介。真子は少し考えてから「わかつたわ」と首を縦に振った。

「でも、中学生がなんでエンジン治すんだよ？」

RGと千尋の話を知らない凜がたずねると、洋介は少し考えてから旭と千尋の2人の話をした。ただし、2人が本当の兄妹では無いコトは伏せておいた。そういうプライベートな話を誰彼構わず話すほど、洋介はバカではないのだ。バカだけど。

一通り話し終えると、真子は少し驚きつつも感心していて、凜と紗耶香も目を閉じて何かを考えていた。

「そう・・・そういうコトなら、私の提案は通しちゃダメね・・・」

真子が静かに言う。

「わかつたわ、エンジンは予定通りの値段で売ってあげる」

「サンキューな」

真子が握手を求めると洋介もそれに答えた。

「それにしても、あなたもあの旭とか言うリーゼント野郎も、なかなかカッコいいところあるのね？」

真子が見なおしたとばかりに言っつと、洋介は「んなこたねーつてと照れた。

「ま、圭太君の方が1億5000万倍良い人だけれど」

「なにその差は・・・？」

洋介が呆れながらたずねると、真子はそれを無視して圭太に向き直った。その目はちよつとヤバイ。

「というワケで圭太君、これから社内案内してあげる！も、もちろん2人きりで・・・」

「いや、僕は・・・」

腕に抱きつく勢いで迫る真子に圭太がビビっている

「姉貴、そんないいから、早く渡すもん渡そうぜ？話はそれからだろ？」

凜が助け船を出した。真子は少し膨れっ面で凜を見るが、やがて

普段の冷静さを取り戻したのか、椅子から立ち上がりドアを見る。

「それもそうね、じゃあエンジンを渡すからついてきて」

「任せろよ」

「あ、ありがとうございます」

「です……」

洋介と圭太と真子が順に言いながら真子の後に続く。凜と紗耶香も真子の左右に並んで歩く。

社内を出て、駐車場の向かいうて少し大きめな倉庫の前まで来た。真子はシャッターの脇にある扉の鍵を開けると

「シャッターを開けるから、ここで待っていて」

と言つて先に入った。すると大きなシャッターを内側から操作して、自動で開けた。

「うわぁ……」

「こりやすんげえな」

圭太と洋介が思わず舌を巻いた。中には所狭くにバイクが並べられていた。奥の壁際には棚があり、そこには無数の外装パーツやエンジン、補機類が置かれていた。

「さぁ、入って」

真子に言われて、啞然としていた3人は取り敢えず中に入る。

「ここには、私達のお父さんが集めたバイク達が沢山保管されているのよ」

真子がバイクを見ながら言う。

「よぉ、なんで本社じゃあ無いんだ？こんな東京の端っこに置くよ、親父さんの目に届くじゃないかよ」

洋介が質問する。確かに、父のコレクションならば本人の近くに置けばいいのだ。なぜこんな東京の端にある場所に置くのかをたずねると、真子が説明する。

「お父さんも私達もこの街出身で、この土地に凄い思い入れがあるのよ。さすがに本社をここにしたら仕事が成り立たないから仕方がないけど、バイクはこの場所に置いておきたかったのよ」

真子の説明を聞いて「ふーん」と関心なさげに言う洋介。

「洋介さん！凄いバイクがいっぱいありますよお！！」

翔子が興奮しているのか、ピョンピョン跳ねながら叫ぶ。洋介も

「おお、傷つけんなよ！」と言っただけで真子に見学の許可を取る。

「いいわよ、ただし傷はつけないでね？」

真子が言うと洋介はすっ飛んでいった。やはりバイク好きだ。そんな洋介達を見て、一瞬複雑そうな顔をした真子だが、すぐに洋介達とバイクを見ていた圭太を見つけ笑顔を後を追いつけた。

「おー！この列はホンダかあ。すげえなおいおい」

言っただけで洋介が見ているのは、ホンダの旧車と現行車の交ざった列だ。

「おお、コイツあC L 7 2！？やべえな！！」

目の前にあるのはピカピカのC B 7 2。60年代の名車である。

カブのようなフロントフォークにクジラタンクが目から鱗だ。他にもC B 7 5 0 F o u r K 0 やらエアラやらC B 4 0 0 F o u r やらC B R 4 0 0 F 3 やら多数のバイクが並べられている。

洋介は自分の愛車と同じ車種である濃紺のヨンフォアを舐めるように見ていた。

「おお・・・！めちやくちや綺麗じゃん！？この408！やつぱしバーニッシュブルーもいいよな・・・ノーマルマフラー・・・スバラシイ・・・！！」

なにやら自分の世界に入ってしまった洋介は、ずっとそのヨンフォアを見ていた。

「こっちはスズキとヤマハですね」

圭太が目の中の列を見て言った。そこにはスズキとヤマハのバイクが多数並べられていた。

「あ、これ旭さんと美春さんと同じサンパチですよ！」

翔子が指差す先には、G T 3 8 0 が置かれていた。

「あれ・・・ノーマルなのにマフラーが4本もある・・・」

圭太がリヤからサンパチを見て首を傾げていると翔子が得意顔で

圭太に説明をする。

「サンパチはですねえ、3気筒であえて真ん中のマフラーを割って左右に出してるんですよ。」

「へえ・・・翔子ちゃん詳しいね」

「ありがとございます。でも、ヘッドの形が違いますね？」

翔子がエンジンを見ながら自分もわからない所を指摘した。

すると、サンパチを眺めていた2人に真子が近づく。

「このサンパチは初期型なのよ」

「初期型？」

真子の言葉に翔子が聞き返すと、真子がエンジンヘッドを指差す。

「この形状のラムエアシステムはサンパチの初期型から2型までの形なのよ。あのリーゼントのサンパチは多分それ以降のモノだから形が違うのよ」

言いながら違う所を指差していく。メーターやフォークブーツ、フロントブレーキ、サイドカバーなど、よく見れば確かに違う形をしている。

「真子さんも詳しいですね」

圭太が言っと、真子は体をくねくねさせながら「そんなことないわよ」と言う。若干引く2名。

そして、またいつもの真面目な顔で真子がサンパチのグリップを握った。

「まあ、同じ3気筒だし、ライバル意識はあるから」

グリップを握る力が強くなる。

「確かに快適性は遥かに劣るけれど・・・マツハの自慢はパワーと軽さ・・・！あんなまぐれさえ無ければ・・・！！」

真子が忌々しそうな顔で言う。2人にはわからない話だが、真子は今だにあの高速でのバトルで美春を抜けなかったことを気にしている。

「圭太ー！こっちあカワサキだぞ！」

突然、洋介が叫ぶ。それを聞いた圭太達は取り敢えずそちらに向かっていた。

洋介は1台の白いバイクの前に立っていた。タンクには青いラインにエグリの入ったデザイン。長いホイールベースに3本出しアシンメトリーのデザイン。

「まさか、こんなモンまであるとはよ・・・」

洋介が呆れと憧れの眼差しで見つめるバイク。それを見た圭太にはよくわからないが、翔子ですら驚いていた。

「これはなんて言うバイクなの？」

圭太が翔子にたずねると、代わりに紗耶香と凜が圭太を見ながら説明した。

「これはカワサキの名車・・・500SSマツハ？っていうバイクです」

「通称、カミナリマツパ・・・オレ達の400より数倍速えぜ？」

2人もワクワクしながら説明した。すると真子も真面目な顔で圭太達に言う。

「私達3人の憧れのバイクよ・・・？いつか3人でこの初期型マツハに乗るのが夢なの」

真子の言葉に、凜と紗耶香もうなづく。

マツハシリーズは、紗耶香の250ccから350cc、真子と凜の400cc、このカミナリマツパの500cc、そして750ccがラインナップである。トップに君臨する750ccもものすごい人気を誇るが、この初期型マツハ？の人気にはかなわない。マツハシリーズトップバッターであったこの500SSマツハ？は69年に発売された。スツキリしたタンクラインにエグリの入ったデザイン、一文字ハン。『曲がらない止まらない』と言われたじゃじゃ馬の、アクセルを開けるとすぐにウイリーして、白煙をなびかせながらストレートをロケットの様に加速して走り去っていく姿に、当時の若者は狂喜した。やがてモデルチェンジでデザインが変わり、パワーも落ち着いていった後期型のマツハ？よりも依然として人気

が高い。

「しかしよ？オメーン家つて金持ちじゃん？なんで今じゃなくいつかになるんだよ？」

洋介が不思議そうにたずねると、真子が洋介を睨み付けた。

「親に頼りたく無いのよ・・・」

真子が絞りだすように言うと、凜と紗耶香も頷いた。

「私達はね、自分の愛車くらい自分の力で手に入れたいのよ・・・！そうでなくちゃ意味が無いのよ」

「お前だつてそうだろ？自分で働いた金で手に入れた方が」

「愛着も増えると思いますし・・・」

3人の想いを聞いて、洋介は自分はなんて愚かなコトを聞いてしまったんだと思った。

親の七光りだと思われたく無い気持ちは自分でも十分知っているのに・・・

「すまねえ、女だと思ってナメた口きいちまった・・・カッコいいよ、お前等・・・」

洋介が頭を下げた。

「わかつてくれたならいいわよ」

真子が言うと、後ろの2人もウンウンと頷く。しかし・・・

「どうせ・・・僕のFXは貰い物だよ・・・」

「私のサンパンも・・・」

圭太と翔子が後ろで体育座りで地面の埃に文字を書き始めたのを見て、真子が焦る。

「ち、違つたよ圭太君・・・！私達は勝手に親に頼りたくないだけで・・・」

「そ、そうだぞ圭太！翔子！気にすんなよ！」

真子と凜が2人に言うと、2人は立ち上がって笑った。

「冗談ですよ。全然気にしてませんから！」

「そうですよ、私のフォアはお母さんから貰った最高の宝物です！」

2人が笑顔で言った。

「・・・よかったあ・・・もう少しで圭太君のために割腹しなければいけないところだったわ・・・」

「なに言ってるんだよ、お前は」

ほっとした顔で目に涙すらためた真子がなにか大げさなコトをほざく。洋介が取り敢えずツツコミを入れた。すると、後ろでそんなやりとりを見ていた紗耶香が小さくつぶやいた。

「後、私達はあまりこの場所が好きじゃないんですよ・・・」
「なんで？」

圭太がたずねると、紗耶香は少しうつむき気味で、マツハのシートを手で撫でた。

「だって、バイクって走るために生まれたモノじゃないですか。それなのに、ここにいるバイク達はほとんどが走ることが無いんです」

「そーなんだよなあ・・・親父は買うだけ買って、乗らないで見るだけ・・・なんかやっぱ寂しいんだよなあ」

凜も残念そうにつぶやく。確かに、これだけのバイクは1人では乗り切れない。それが人より多忙な人間ならば尚更だ。

そんな話を聞いた圭太達も視線を先ほどまで見ていたバイク達に向けた。

ヨンフォアもサンパチも、マツハやその他のバイクが悲しげな表情を浮かべているように見えた。『まだ走りたい』・・・そんなふうに訴えているかのようなその光景は、残酷に見えた。

「私達はあまりこの場所には来ないし来たくないの。あそこにあるCBも、そこにあるZも、このマツハも・・・見ると悲しくなるのよ」

真子が悲しげな顔で言う。もう長らく動いていないタコメーターとスピードメーターを見てため息をつく。

「まあ、気持ちは痛いほどわかったよ。確かに、あんまりいい気しねえな」

洋介も腕を組んで真子を見る。

「まあ、見るもんは見たし。そろそろエンジンとご対面といくか？」

洋介がたずねると、真子は「そうね」と言っただけで一番下の棚にあるカバーをめくる。すると中からプラスチックで出来た半透明な箱が3箱出てきた。その中の1つの蓋を開けて中身を見せる。

「確かコレよね？」

真子が見せた箱の中身は、RGのエンジンの腰下だった。他の箱も確認すると、1つはヘッドやシリンダー。もう1つはキャブレターなどの補機類の入った箱だった。

「ん、全部揃ってんな」

洋介が中を確認して頷いた。

「ガスケットとかはどうするつもり？」

「紙から切り出すよ」

「そう」

真子と洋介が2人で話しているのを横目に、圭太と翔子は凜と紗耶香と話していた。

「今日遊べないっていう用事は、この事だったんだね」

「そーだよ、全く。まさかお前らだったとはなあ」

「思ってるより世間って狭いです」

凜がため息をつき、紗耶香が苦笑していると、翔子がポンっと手を打った。

「じゃあこの後は暇なんですよね？」

「ああ？まあ、暇っちゃ暇・・・」

「じゃあ決まりです！遊びましょうー!!」

凜が言い終わる前に、翔子がニコッと笑って凜と紗耶香の腕を取った。

すると紗耶香はそのまま翔子の意見に同意したのか顔を縦に振った。

「実は・・・私、会ったときから仲良くしたかったんです。だから、

こちらからもヨロシクお願いします」

「紗耶香ちゃん・・・！」

翔子が嬉しそうにして紗耶香に抱きつく。翔子にしては珍しく積極的だ。

そんな光景を見ていた凜も「けっ、しょーがねえなあ」と言いながら、圭太と紗耶香に抱きついていている翔子を見た。

「べ、別に遊びたいから行くんじゃねえからな！この前のプラグの借りを返すだけだからな！」

照れ臭そうに顔を背けながら言われては説得力もなにも無い。3人が笑うと「わ、笑ってんじゃねー！圭太テーマーこのー！」とか怒りだした。

すると、後ろで真面目な話をしていた真子と洋介がやってきた。

真子は怒る凜の後ろから首に両腕を回しながら抱きつく。

「あ、姉貴・・・？」

「圭太君を困らすなんて、凜は悪い子なの？」

なんか艶っぽい声を出しながら、徐々に腕に力を入れていく。

「ちょ、待て姉・・・ぐえ！」

「そんな悪い子には、首絞めの刑ね」

言うのが早く、凜の首を絞めた。完全に入っている。

凜がギブアップと言わんばかりに腕を叩く。その顔はいつもの強気で生意気なモノではなく、苦しそうに歪めて涎も少し垂らしている。さすがにヤバイと思っっているとかわれなくともいった感じで真子は絞めを解いた。

「ふあ・・・ゴメン、姉貴・・・！」

「私じゃなくて、圭太君に謝りなさい」

言うつと、凜は早速圭太達の方に向き直り、日本人最終奥義、土下座をした。

「う、ゴメンなさい・・・！ゆ、許してくれ！！」

顔を上げると、もう泣きそうである。圭太達がなにか言おうとしたとき、後ろから真子が土下座している凜の頭を踏みつけた。

「誰が頭を上げて良いって言ったの？」

グリグリグリ

「あの、真子さん・・・？」

「ちよっと待っててね圭太君。今からこの愚妹を賤るから」

「いや、僕達全然怒ってないんですけど・・・」

圭太がおずおずと言つと、真子は足を退かしながら「そうなの？」
と言つてから笑つた。

「私の勘違いなら凜？なんで早く言わないのよ？」

何か言つ前に凜をこんな状態にしてしまった本人に、凜が顔を上げた。

「ご、ゴメンなさい・・・」

泣きながら、顔は恥ずかしそうに真っ赤になっている凜が真子に謝るといふ奇妙な光景を目の当たりにして呆然としている圭太と翔子に、紗耶香が小さな声で耳打ちした。

「真子姉さんは、怒ると究極のどSになっちゃうんです・・・」

耳打ちした本人もガタガタ震えていると、いつもの姉に戻ったのか、真子が圭太の肩をつかんで言う。

「ゴメンなさい。お見苦しい所を見せてしまつて。凜には後でキツく言つておくわ」

真子の言葉に、後ろでまた泣きそうな凜と目が合った。

「で、それはそれとして、羽黒君とも話をしたんだけど、私達もあなた達に付いていくわ。よろしくね」

真子が手を差し出す。その顔は先ほどのどSな顔ではなく、スゴい爽やかな笑顔であつた。圭太と翔子が握手した。（圭太との握手は10秒以上）

真子が満足そうにしていると、後ろから洋介が腰下に入った箱を持ちながら叫ぶ。

「おい圭太！トラックの荷台まで持つてくぞ！腰上頼む！」

言いながら出ていく洋介を見て、圭太は本来の目的を思い出してエンジンの腰上に入った箱を持ち上げると・・・

「圭太君！そんな重いモノ、あなたが運ぶ必要ないわよ？」

真子が優しく言った。そして

「ホラ、いつまで寝ているの？圭太君の荷物、早く持ちなさい」

後ろで先ほどの土下座の体制のままの凜に真子が罵るように言う。凜の顔はまだだらしなく涙と涎を垂らしていた。

「いや、大丈夫です・・・！僕がやりたくてやるんですから！！」

そんな凜を見てヤバイと思い圭太が言う。真子は少し不満そうだが、納得したらしい。「そう？」と言って、倒れてる凜を起こしていた。

荷台に箱を載せ終わり、出発の準備も整った圭太達3人は駐車場で真子達を待っていた。なんでもバイクに乗る時の服装に着替えてくるらしい。しばらく待つことになった。

「まあ、この前の件を許してもらえだし、よかったよね」

「そうですね、でもこんな場所で会うなんて最初は驚きましたけど・・・」

2人が話していると洋介が腕を組ながらうなずく。特に洋介は、前回の件は自分と旭が主犯だったので、絶対に許されないと思っていたのだ。

「しっかし・・・ここ最近でオレの周りに旧車乗りがとんと増えたよ」

圭太と翔子を見て、ジジ臭くしみじみと言う。

しばらく会話していると、向こうから真子達がやってきた。

「お待たせ」

真子達の格好は、以前の横浜ツーリングの時と同じ服装だった。

「それじゃあ道案内するから、イライラすんだろーが軽トラの後ろ

ついて来いや」

「わかったわ」

真子は短く言うと、凜々し顔で愛車、400SSマツハ?に跨がる。その横には、青いマツハが1台。

「紗耶香、ケツ乗るぜ?」

凜が紗耶香に言いながら、リアシートに座った。それを見て紗耶香がため息した。

「お姉ちゃん?セル無いんだから、降りてくれなきゃ掛けられないよ?」

「あ、わりいわりい」

リアシートに人がいてはキック出来ないコトをすっかりわすれていた凜が謝りながら降りる。紗耶香はスタンドを上げてチヨークを思い切り引くとキックペダルに足を掛ける。そしてゆっくりと踏み下ろした。

しゃこ・・・

クアアアアアア!!

なんと一発で見事にかかった。純正マフラーから吐き出される青白い白煙の程よい量が完調を物語っている。

「そのマツハは紗耶香ちゃんの?」

圭太がたずねると、紗耶香は恥ずかしそうに「はい」と答えた。

「250ccの、マツハ?・・・私の宝物です」

アクセルを吹かせば軽快な2サイクル音。綺麗なブルーのレインボーライン。紗耶香のマツハ?である。

「すごい綺麗だなあ」

洋介が関心しながら見ている。外装は当たり前として、エンジンのネジ1つからフェンダーの裏まで綺麗に磨かれたマツハ?はまる

で新車のようである。

「来た時はボロボロだったのを紗耶香が頑張ってここまで治したんだよな！」

凜が嬉しそうに言う。紗耶香もニコニコと笑う。

「部品も自分で手に入れて、やれる所は全部自分でやったんです。錆どころか線傷一つ無いタンクを眺めながらニコニコしている。

「さて、んじゃあそろそろ出るぞ。旭ん家に行ったらまたダベるーぜ」

軽トラに乗り込みながらの洋介の言葉に、皆も賛成して各々の愛車に跨がり、心臓に火を入れた。

駐車場を出ていく間際、先ほどの警備員が緊張した面持ちで見送った。

第25章 真の和解。そして、動かないバイク達（後書き）

バイク紹介&自慢広場！

作者「このコーナーでは、登場人物に自分の愛車をを紹介してもらいます！今回はじゃじゃ馬マツ八を乗りこなす赤城3姉妹の双子の姉と妹！凜さんと紗耶香さんです！」

凜「あ・・・？なんだここ？」

紗耶香「夢かなあ・・・？」

作者「おーい、ボケてないで。まあここは夢みたいな空間なんですけどね」

凜「なんでもいいけど、ここで何すんだ？プロレスか？」

作者「そんな物騒なことはリングの上でやってくれ。ここではあなたちの愛車を自慢してもらおうところです。真子さんも来ました」

紗耶香「真子お姉ちゃんが・・・？」

作者「はいな」

紗耶香「私たちの愛車のことなら、全然かまわないですよ！！」

凜「あーあ、おめえ知らないぞ？紗耶香にマツ八のこと語らせたら・・・」

作者「いやいや、紹介してくれるのであればいくらでもどうぞ」

紗耶香「やったー！やろうよお姉ちゃん！」

凜「はあ・・・」

KAWASAKI 400SSMACH?改 赤城凜仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル

マフラー 集合ショート管

足回り ノーマル

外装 バックステップ、コンドルハン、タックロール
色 レインボーライン 赤

KAWASAKI 250SSMAHC? 赤城沙耶香仕様

スペック

エンジン 本体ノーマル

足回り ノーマル

外装 ノーマル

色 レインボーライン 青

すべてレストア

作者「凛ちゃんのが峠仕様で沙耶香ちゃんのがニーハンのノーマル仕様なんだね」

沙耶香「そうなんですよー」

凛「ふん、峠なら負けねえよ」

沙耶香「マツハの良いところはですねえ、暴力的な加速と白煙とスリムな車体！」

作者「はあ・・・沙耶香ちゃん、なんか熱くなってるね・・・」

沙耶香「当たり前ですよ！いいですかマツハの素晴らしさはそのパワーに対しての車重の軽さにあってですね・・・（以下略）・・・だからいいんです！！」

作者「は、はあ・・・」

沙耶香「350や400に至っては同時期のGTやRXなどのライバル車にパワーでも車重でも勝っていてですね？でもそれだけじゃなくて初のテールカウルの装着された・・・（以下略）・・・デザインの種類もレインボーラインからポートライン、カタナライン、ナメクジライン・・・（以下略）・・・このとおりバリエーションも豊富で、以降のKHだって・・・」

1時間後

沙耶香「……ですね？マツハのマフラーは本当は……」

作者「あの……？沙耶香さん？」

沙耶香「なんですか？」

作者「そろそろ時間なんですけど……」

沙耶香「あれ？もうですか？これからだったんですけどねえ……」

作者（まだ続くのかよ……）「あ、凜さん寝てる……」

沙耶香「あ！お姉ちゃん！起きて起きて！」

凜「うあ……なんだよ、ようやく終わったかあ」

沙耶香「もう！また途中で寝ちゃったの？」

凜「もう何回も聞いているから眠くなってくるんだよお」

沙耶香「うー」

作者「まあ、また何かありましたら遊びに来てくださいよ」

沙耶香「はい！」

凜「ダライ……」

がば……！！ 起きた

凜「疲れた……耳がジンジンするぞ……」

沙耶香「なんかすごくいっぱいしゃべった気がする……」

というわけで、今回でようやくRGのエンジンを手に入れました。
次回、真子達3姉妹が旭の家に！どんなハチャメチャになるのか！
予定は未定！！ 駄目だ。

第26章 旧車乗りのプライド！

圭太達がアカギ建設を後にしてしばらく経った時、旭の家では暇潰しカードゲームの代表、UNOが行われていた。が、美春と由美が何やら議論していた。

「えー？ ゆーちゃん、それダメだよお」

由美が捨てたカードを見て美春が指摘すると、由美もなかなか譲らない。

「ダメじゃないわよ、これはこうやって返せるもの。ほら美春ちゃん、10枚引いて」

由美が山のように積まれたデッキを指差す。

「違うよ、この場合はゆーちゃんが8枚引くんだよお？」

美春も頬を膨らませて断固譲らない。先ほどからこの話で2人は言い争っているのだ。その理由はもうお分かりだろう。

「ドローフォーはドローツーじゃ返せないんだよお？」

「返せるわよ。私は家でも小学校でも中学校の時だって、このルールでしかやってないもの」

ちなみに旭と千尋はすでに上がっている。2人はかなり早い段階で抜けているあたり、かなりカードゲームが上手いのだ。

そして、こんな理由で言い争っている由美と美春の手には山のようにカードがある。2人とも下手くそなのにこんなコトでごたいそうに言い争っている。

「だってえ、それじゃあおかしいよお？ ドローフォーで色を選べるんだから選んだ時点で違う色は出せないし、それにドローフォーとドローツーじゃ違うカードだよ？」

「ドロー系は同じカードって認識だから、色違いでも返せるのよ。

ほら、美春ちゃん10枚引いてよ」

「そんなルール聞いたことないよお！」

2人が今だに揉めているのを、先ほどから横で見ていた千尋がおず

おずと由美達の会話に入ってきた。

「あの・・・もういいんじゃないかな・・・？ゲーム・・・」

「え？」

「なんでちーちゃん？」

2人が千尋にたずねると、ため息をしながら千尋が2人の手札を指さす。

「だってもう手札山々ですよ？これじゃあなかなか終わらないです。そろそろ洋介さん達も帰って来るし・・・」

千尋が言うと、由美と美春は己の手札を見た。もう10枚では収まらないカードの束は、なぜか一向に減らない。そんな現実を見せ付けられて、由美と美春は手札を捨てた。

「確かにそうね・・・こんなカードゲームにいつまでもこだわってたらキリが無いわ」

由美が清々しく言う。美春もウンウンと頷く。

「そーだよな、これでいいんだよね！私達デュエ ストはお互いに頑張ったもん」

もうワケがわからない。わかるのは要するに2人は飽きていたと言うことだ。某pegasusもビックリである。

「と言うわけでえ、あつくーん！！」

どういふ訳なのか全くわからないが、美春が隅で寝転がる旭に叫ぶ。旭は隅で寝ながら雑誌を眺めていた。

「何読んでるんですか？」

由美がたずねると、口角を釣り上げて笑った。

「サンパチちゃん特集の古雑誌だよ。サイコーだよなあやっぱ！」
眺めていた雑誌の表紙を見せてきた。特集は「GTシリーズの魅力！徹底調査！！」だ。

「やっぱしょお、サンパチちゃんが一等カッケエよなあ・・・」

「ウンウン、あつくんの言うとうりだよ」

サンパチオーナーの2人が声を揃えて言う。ふと、由美は旭に聞いてみたいコトがあったのを思い出す。

「そういえば旭さんて、なんでサンパチを選んだの？」

由美がたずねると、旭は「うーん」としばらく考えてから結論を話した。

「別に深い理由なんか無えよ？タダよお、スタイルがいいんだよなあ、スタイルが。中坊にはシブく見えたんよ」

前髪を弄りながら笑った。

「最初はそんな理由だったな。ただ、実際跨ると以外とタンクがデカくてなあ、バブ？なんかと比べたらドツシリしててよ？で、走ってみたらすんげー音だし白煙バキバキだよ！周りの奴等あみんなビーエックスやらGSやらが好きだったケド、オレはもうコイツっかねーって思ったっけえ」

昔を思い出しながら懐かしむ様にして語る。

「高校行ってもバイトばっかして、サンパチんコトばっか考えてたよ。納車前なんざ眠れなくてよ、メット持って部屋ン中ですーっとそわそわしてたな」

「なんか可愛いわね・・・」

「な、ワリイかよ・・・！？」

「そんなこと無いわ、イイ話じゃない！」

由美が笑いながら言うと、ニコニコしながら美春の肩をポンツと叩く。

「美春ちゃんは何でサンパチにしたの？」

「んー？私？」

人差し指を唇に当てて考える素振りをした。

「私はねえ、まあ最初はあつくんと同じのがいいなあって思ったたよ」

「だと思っただわ・・・」

由美が笑うと、美春は「えへへ」と照れた。

「でもサンパチに限らずバイクって高いでしょ？だから買えなかったんだあ」

美春が残念そうに言う。サンパチの相場は平均65万くらいなので確か

に当時普通の高校生の美春に手の届く代物では無い。

「じゃあ、あのサンパチは？」

「拾ったの。」

由美の質問に、いつもの笑顔でなんてこと無いようにとんでもないコトを言った。

「ひ、拾った・・・？」

「うん。」

その時のコトを思い出しているのか、美春は懐かしそうにつばやいた。

「川原の土手でね、錆びてボロボロで捨てられてたあの子を見つけ、あつくん家まで運んだんだあ。怒られちゃったし、いろいろ面倒なこともあったけど、あつくんとはぐつち達が頑張って治してくれたんだよ。」

美春の話を聞いていた由美は美春の強運とあの綺麗なGT380がズスタのガラクタから再生されたことなどでいると驚いた。

「あつくんが頑張って組んでくれて、みんなが協力してくれて・・・だからあのサンパチは他のどんなバイクにも替えられない、誰がなんて言っただって私の宝物なんだ、絶対に」

美春のひとことひとことに如何にあのサンパチが大事なのが伝わる。話を聞いていた由美と千尋はすごく関心した。

「美春ちゃん、あなたは素晴らしいわ！！変態だけど・・・私も圭太と2人でFXとゼファーちゃんに乗り続けるわ！」

「うん・・・美春さんは凄いです！ちよつと変態だけど・・・私もRGが治ったらそういう風に言えるように頑張る！」

2人が言うのと、美春は2人の手を取った。

「私もみんなのお姉さんになれるようにもつと頑張るよ！あと、所々酷いこと言っちゃメっ！だよ？」

そんなこんなで3人が笑いながら戯れあっていると、外からエンジン音が聞こえてきた。

「あ、はぐつち帰ってきたあ。」

はしゃぐ美春の声。軽トラのエンジン音に続きFXの音、そしてすぐに違うエンジン音が響いてきた。

「この甲高い音あ・・・2スト・・・？誰よ？」

旭が窓を覗くがよく見えない。

驚く由美に、旭がさらに続けた。

「単車が4台もいやがる・・・しかもこの爆竹チャンバーの音・・・もしか・・・」

その時、外からエンジン音が消えた。しばらくして廊下から足音が近づいてきた。そして部屋の前で止まるとドアが開いた。

「よおみんな！帰ったぞ！」

洋介がいつもの無駄に高いテンションで玄関に入ってきた。後ろから翔子と圭太も続けて入ってきた。

そして3人が玄関から部屋に入ると、そこに見覚えのある人物が3人いた。

「失礼する」

1人が頭を下げてからひとことと言って彼女達はとりあえず玄関に通された。

「おめえら・・・何でココに・・・!？」

予想通りだったとはいえ、驚いている旭を見て、彼女はフツと笑った。

洋介は旭に手を合わせた。

「とりあえず入ってもいいか？そいたら事情を話すからさ」

旭の部屋に、赤城3姉妹が現れた。

6畳半の部屋に10人も入るとかなり、いや、めっちゃくちゃ狭い。とりあえず詰めてみたものの玄関まで全部使ってとりあえずなんとかなったというところになった。

そんな狭苦しい室内で洋介が旭達に事情を話す。話をまとめるのは得意では無いが、アカギ建設にいったら実は赤城姉妹が令嬢だったコト、とりあえず和解したコト、エンジンは無事に譲ってもらったコト。で、トドメにこの後みんなで少し走りにいこうという話をした。

「まーったくよお・・・」

旭はコタツ机の上に座ってため息をついた。部屋を見渡せば人、人、人である。

「別に構わねえけどよお、来過ぎだろ、この人数・・・」

「すまないわね、いっぺんに押し掛けてしまっただけ」

真子が頭を下げると、旭は「いっていいって」と顔を上げるように言った。

「前回のインチキ許してくれたんなら、何にも言えねえよ」

旭が言うと、真子は笑った後、圭太と由美に顔を向けた。

「由美ちゃん、久しぶりね」

「真子さん達もね！元気だった？」

「もちろんよ」

互いに圭太を狙うライバル意識があるが、こうしてみんなという時はそんなコトを気にせず話せる。今は友達同士だ。

「ところで、ツーリングはどこに行くんだよ？ヤマカ？」

凜がワクワクしながらたずねる。凜はここに来る途中に皆に待っていてもらって、自分の愛車を取ってきていた。彼女としては前回の圭太と走った峠でのリベンジをしたいらしい。

「峠だったら市外だなあ。構わねえよ？」

「山道もたまにはいいねえ」

旭、美春は賛成した。

「つーことはあの峠だろ？今が2時半過ぎだから・・・今出たら4

0分くらいで向こうに着く感じか？時間は余裕あるぜ」

「山道を走るのは気持ちいいですからね・・・私も賛成です」

洋介と翔子も迷わず賛成。2人には高速ツーリングなどより峠などの方がバイクの性能的に余裕があるので賛成だった。

「じゃあ決まりね？」

「うっしや！ヤマだったら負ける気しねえ！」

「凜お姉ちゃん？競争じゃないんだよ？」

紗耶香が喜ぶ凜に釘を打つ。凜は「わりいわりい」と笑いながら謝るが、紗弥加はそんな凜の目を見て多分ダメだと思った。

「そんなら、早く出ようぜ？オレン家息苦しいしよ」

旭の合図に皆も頷く。旭には悪いが、この人数でこの部屋にいますかなり息苦しい。皆、我先にとばかりに部屋を出ようと玄関になだれ込んだり巻き込またり・・・

「ち、ちよつとみんな・・・！」

「詰めすぎ・・・」

「あつくーん」

「美春押すんじゃねえ・・・！」

「あ！軽トラのキー忘れてた！」

「よ、洋介さん・・・今はとりあえず戻らないで進んで下さい・・・！」

「おにーちゃん・・・苦しいお・・・」

「凜、踏み台になれ」

「姉貴・・・さらつと言つなよ・・・ぐえー！」

「あうあう・・・」

この後家を出るまで約7分の時間を要した・・・

「なんとか出れたな・・・」

玄関の外で、皆に踏み潰された自分の靴の山を見てこめかみを押さえて怒りを静めながら言う。

「で、ルートは？」

真子がたずねると、洋介が軽トラのキーシリンダーを捻ってエンジンを掛けた。

「とりあえず国道を越えて、そのままずっとまっつぐだ。オレは今から自分の単車取ってくるから途中合流だ」

「あなたは確かヨンフォアよね？」

ヘルメットを被った真子が聞くと、洋介は軽トラの窓越しに渋味をキかした顔で答えた。

「オレの自慢さ」

言つて、一足先に駐車場を出た。

「軽トラでもカッコいいですね」

軽トラが曲がついていった道を見ながら翔子が呟く。すると由美と美春がニヤニヤしながら翔子に絡む。

「あつれえ〜？翔子ちゃん、もしかしてえ」

「ホントにはぐつちのコトを・・・？」

「な・・・ち、違いますよ！そんなワケ無いです！！」

翔子が否定するが、すぐにその話題に話が進む。

「同じフォア乗りだし、いいいと思うよお？」

「でも洋介にやもつたいねえな？」

美春と旭が言うと、今の今まで自分の愛車のチェックをしていた真子も会話に入ってくる。

「そういえば、ウチに来た時もその子はずっと彼を見ていたような・

・・・

「ちよ、真子さん！！」

「ああ、オレ達も見てたぜ？」

「頑張ってください・・・！！」

赤城姉妹の間違った激励を受けて、翔子はもうおろおろするしかない。そんなピンチの時、翔子に救いの手が差し伸べられた。

「由美も美春さんもやめようよ、翔子ちゃん困ってるし」

圭太が翔子の前にかばうように立つ。それを見て、翔子は目をウルウルさせながら助かったと思っていると、

「あんまり言ったらダメだよ。こういうのは遠くからそつと見守ってあげるのが友達だよ」

それを聞いて、翔子はギャグ漫画並みに盛大に転けた。

「そういう話には鈍感なのになんでこんな時に限ってありがた迷惑な行為をするんですかあ・・・！！圭太さんのバカあ！！」

翔子はキレると、圭太の肩をポカポカと叩き始めた。

「ちよつと！痛いって！」

圭太が悲鳴を上げると、由美が笑顔で

「翔子ちゃんずるい！私も圭太叩く！！」

と言つて、この非情なる暴力に加担する。

2人がポカポカ殴っていると、後ろから旭が早く出るぞと言わんばかりの威圧的オーラをビンビンに飛ばしながら

「オレも殴つていい？」

と聞いてきたので、とりあえず2人は殴るのをやめた。

「つたくよお、早く行くべえよ。洋介に先越されんぞ？」

別に競争しているわけでは無いのに旭が急かす。なんかウキウキしているように見えたので不思議そうにして見ていると、美春が小声で圭太と由美に耳打ちした。

「あつくん、最近サンパチちゃんに乗ってないからウズウズしてるんだよお」

「あ、なるほど」

圭太は納得した。見ればすでにエンジンを掛けて甲高い爆音で今にもコイルを切りそうな勢いである。

「じゃあそろそろ行きましよう？私も早くゼファーちゃんに乗りたいしー。」

そして皆自分の愛車に跨がりエンジンを掛けた。千尋は美春の後ろに乗って行く。

「これだけ旧車が集まってるってやっぱり迫力と言っか・・・ね？美春さん」

「だねえ 楽しくなるよお」

美春もキャンディブルーのB4ライン外装のGT380のアクセルを嬉しそうに吹かす。

「じゃあ行くぞ？ついて来いよ！」

そして8台の旧車達は駐車場を後にした。

「走りだしたら止まらないぜ どよーのー昼の天使さー」

国道を抜ける道を8台もの台数で走っていると、確かにそんな替え歌が思い浮かぶかも知れないが、美春はなぜかバイクに乗ると歌を歌うクセがある。しかも古い。

「あ、その歌・・・昔おにーちゃんが聴いてた」

後ろの千尋が美春と楽しそうに話しているのを見て、圭太は微笑ましい光景だと思った。こうして見ていると本当に姉妹の様だ。

「圭太君。君はFXを改造したいと思わないのか？」

途中の信号で横に並んだ真子がフルフェイス越しに話し掛けてきた。

「特に今は・・・今の時点で不満は無いです」

「そうか。カワサキのバイクはフルノーマルで十分なのかも知れない・・・」

「まさかノーマルに・・・？」

足回りから何まで手を入れられたマツハを見て圭太が驚くと

「いや、残念だけどここまで来てしまうと難しいわ」と苦笑した。

そしてそのまま国道を突っ切り真っ直ぐ進んで行くと、後ろから1

台のバイクが追い付いてきた。

「あ、洋介さん！」

翔子が嬉しそうに手を振ると、洋介もそれに応えて手を振り返す。洋介のヨンフォアは今日はセパレートハンドルだった。

「ヤツホー翔子ちゃん！」

洋介がアホみたいに笑いながら翔子の横を加速していく。前を走る旭の隣に並ぶと、旭がフォアを見てニヤリと笑った。

「なんだよ？セパハンてこたあ、今日は攻めんのかあ？」

「いんや、雰囲気よ雰囲気。ヨンフォアが峠でマー坊ハンじゃあ雰囲気出ねえだろ？」

前傾姿勢で下からニヤリと笑った。

一方、真ん中を走る圭太と由美も前を見ながら話していた。

「そつえば・・・」

「どうしたの由美？」

由美が何か考えてから、今気づいたという感じで圭太に言った。

「私達の集団で、なんか車種が固まってるわよね？」

由美に言われて圭太もああ、と思った。

「旭さんと美春ちゃんはサンパチでしょう？翔子ちゃんと洋介さんは350Fourと400Four。真子さん達は同じマツハシリーズだし・・・私と圭太だって車種は違えど同じ外見だし」

「そつえばそうだね」

「なんかまとまって良いわよね、それでいてみんなそれぞれの個性があるから奥が深いわ」

由美が感心しながら自分の愛車のタンクを上から見つめる。自分の愛車も、それなりに個性が溢れていると思っている。

「ま、どんなバイクだって私のゼファーちゃんには勝てないけどね！」

言ってアクセルを開ける。ショート管から吐き出された爆音が山にこだました。

峠に入つて、9台そろつてのんびり上りのツーリングを走り終えた。峠にはほとんど対向車もいなかった。

旭や洋介達は飛ばすものだと思つていた圭太と由美だったが、2人ともものんびりと景色を見ながら、時折冗談交じりに蹴るふりをして走り歩いていたら、赤城姉妹もゆっくり走り歩いていたので意外だった。

ちなみに旭達が飛ばさなかった理由は、この峠ではたまたまネズミ取りが行われていて、その取締まりの餌食にならないように道全体の確認をすることが目的であった。どうやら警察は出ていないようだ。

しばらく楽しく走っていると、やがて平らな道になり、駐車場が現れた。旭達先頭組がウィンカーを出したので駐車場に侵入する。

「ここが頂上だぜ？」

駐車場についてサンパチのエンジンを切った旭が圭太達に言う。

「山が開けてて景色がいいわね！夜に来たら綺麗かも・・・」

駐車場から見える景色に由美が感想をもらす。由美の言うとおり、ここは夜になるとかなり綺麗な夜景が見える。そのため少し有名なデートスポットでもある。

「皆さん、今日もカメラ持って来たので集合写真撮りましょうよ！」

翔子がリアシートにつけているアーミーバックからカメラと折り畳み式三脚を取り出す。

「今日はこの景色を背景に皆さんを撮って、バイク達は停めた場所と一緒に撮りましょう」

翔子が提案すると、皆その景色の見える場所まで行って並ぶ。ちなみに今回の並び順は左上から洋介、美春、旭、千尋。左下から紗弥

加、凜、真子、圭太、由美である。

翔子は皆がレンズに収まったのを確認してタイマーをセット。そのまま急いで走って洋介の横に並んだ。

「圭太君。もつとこっちに寄って」

ランプが点滅を始めた時に真子が圭太を自分の側に寄せないようにして引つ張ると、反対側の由美も負けじと圭太の肩を掴む。

「圭太はこっち！私の側よ！」

グイッ

「ちよつと由美痛い」

「ほら、圭太君が嫌がつているわよ？」

グイッ！

「真子さんもやめましようよ、痛いですって」
シャッターの点滅が早くなる。

「圭太は私と一緒になの！渡さないんだから！」

グイッ！

「圭太君は物じゃないわ」

グイッ！

「ちよ、ちよつと・・・！うわっ！！」

2人に引つ張られていた圭太はバランスを崩して1人で倒れてしまった。そしてその瞬間にシャッターが切られた。出来上がった写真のコトを想像して翔子は笑ってしまい、圭太は恥ずかしそうに下を向いてしまった。

その後翔子はそれぞれの愛車の写真を撮ったり、みんなの姿をそれぞれデジカメに収めていった。

「あつちでジュースでも飲むかあ？」

旭の提案で停めている場所から少し離れた駐車場のベンチで、自販機のジュースを飲むことにした。

「空気がいいよね、こういう場所はさ」

圭太がフアントングレープを飲みながらつぶやく。すると隣にいた由美もジンジャーエールを飲みながら景色を見る。

「眺めもいいし、みんなで走るっていうのもすごい楽しいわ」

2人が峠の景色を眺めながら談笑していると、突然入り口から4台のバイクが入ってきた。

「あっちもツーリングか？」

旭が集団を横目につぶやくと、真子はその集団を見て缶を置いた。

「違う、あれは走り屋よ」

真子の言うとおり、4台のうち3台がレーサーレプリカだった。フルカウルでライダーは皆レーシングスーツを来ていた。

「ふーん、ま、関係ねーや。便所行つてくんわ」

「あ、オレも」

言つて、興味なさげに旭と洋介はトイレに行つてしまった。

「あ、私達の隣に停まりました！」

紗耶香が見ていると、集団は自分達の隣に停まった。最初にバイクから降りたのは少し太り気味の20代後半の男だ。他の仲間とバイクを降りるなり圭太達のバイクをじろじろ眺めながら何か話している。

「何話してるのかしら？」

由美が耳を傾けるが、ここからではよく聞こえない。

男達は駐車場に並んだバイクを眺めながらなにやら議論していた。

「うひひ、見てよこのサンパチ。珍走団仕様ですよ」

目の下にクマをつけたガリガリの男が旭のGT380を指差して笑う。

「旧車會とか言つて昼から走つてる珍走団でしょ？ 恥ずかしくないんですかねえ、ふひひっ！」

太り気味の男が不気味に笑いながら他のバイクも見ている。

「あ！これケッチですよ！結構イジってる」

「でも旧車に金かけたって速くならないし、無駄だよな」

「ヨンフォアも遅いつていうし・・・でゆひひひ！！」

皆、口角から唾を飛ばしながら皆の愛車を酷評して笑っている。

「このFXなんか直管だし、うるさそう」

「ロケットカウルと3段はいないんだねえ、へへ」

いいながら男がメーターを覗き込むと、意外そうな顔で驚いた。

「これゼファーですよ？外装だけFXですよ！」

太り気味の男が由美の愛車の正体を見破って笑う。

「きつとFXが高すぎて買えなかったんでゴザる、珍走団には……
ふひふひひー！」

そんな様子を遠くから見ていた由美達は、彼らが何を話しているのかわからない。しかし由美はなんとなく彼らの表情を見ると、何故かいい気分がしない。

「なに話してるのかしら？」

「なんか笑ってますけど……」

翔子が不安そうに見ていると、太り気味の男が由美のゼファーのタンクを思いきりさわった。

「あ！私のゼファーちゃんに……！」

見ればもうひとりには真子のマツハのアクセルを触っていたりする。

「あいつら……！我慢できん……！」

真子が睨み付けながら言うと、それが引き金となり由美達は彼らに近づいていった。

「あの！すみません！」

由美が彼らに声をかけると、彼らもそれに気付いてこちらを見てきた。

「ん？なに？」

「お！可愛い女の子達でゴザルよ！」

太り気味の男がぶひひ、と笑いながら手を振る。

「そのバイク、私達のバイクに触らないでください！」

由美が言うと、彼らは一瞬キョトンとしたが、すぐに爆笑に変わった。

「これがチミ達のバイクう！？」

「嘘はダメでゴザルよお！君達みたいな可愛い女の子が珍走団！？」

「一種の萌〜ってやつですね、わかります」

「うひひ、うひひ!!」

男達が下品に笑う。それを見て由美がキレた。

「ちよつと！なに失礼なこと言ってるのよ！私達のバイクになにか文句でもあるの!？」

由美が叫ぶと、男達はニヤリとイジの悪い笑みを浮かべた。

「いやね、困るんだよねえ・・・こーゆーバイクで峠走られると・・・」

「僕たち走り屋まで珍走団に見られてしまうからねえ・・・でゆひひ！こんなケツちみたいにセパン付けたりしたって速く走れないし、ゼファーをFX仕様にして珍走団まがいのことされたら困るんだよ」

ガリガリの男が真子と凜のマツハと由美のFX仕様のゼファーを見て笑う。

「それにしたって、この子可愛いよお」

「うひひ、なんかハルにゃんみたいでいいよねえ・・・うひひ!」

男達は由美達を見ていやらしく笑う。

「な、なによ気持ち悪いわね！そんなことより、私達に謝ってよ!」

「そつだテメエら!!オレ達の単車にベタベタ触りやがって!!」

由美と凜が怒鳴ると、猫背の男が笑った。

「この子はオレっ娘ですよ!貴重ですよ!!」

「だあーっ!うるせえ!ぶん殴るぞ!テメエ!!」

「しかも、男はその彼1人ってなんですか?ハーレムですか?」

猫背が圭太を見てニタニタ笑う。

「しかも可愛い感じのいい男だし、もしかして男の娘?」

そう言うと、彼らはバカ笑いする。圭太は悔しくなつてなにか言おうとすると、由美が男の右手を掴んで捻り上げた。

「あんた・・・!圭太に謝りなさい!!」

「イタタ！痛いよ・・・！」

「あ、お前！放すでゴザルよ！」

太り気味の男が、腕を捻り上げた由美を突き飛ばした。

「きゃっ・・・！」

由美はその場で転んで、後ろにあった彼らのバイクにぶつかった。

「ゆーちゃん!？」

「由美ちゃん！大丈夫ですか!？」

美春と翔子が由美に駆け寄る。由美はお尻を摺りながら立ち上がる。

「何するのよ！」

由美がかなりキレて怒鳴ると、ガリガリの男が近づいてきた。

「ああ！僕のバイクにぶつかったな!？」

言つて、由美などお構い無しに自分のバイクのカウルに傷が付いていないかを確認する。

「もうこのバイクに傷ついたら君たちどうにかしてくれるの？」

ガリガリがぶつぶつ言つと、由美と美春と真子、凜の4人は頭の血管がぶちつとキレた音を聞いた。

そして彼らにぶちキレようとしたその時・・・

「いい加減にしろ・・・」

皆が熱くなつた空気の中で、その静かな声はよく響いた。

「け、圭太・・・？」

今さっきまでキレていた由美を見ると、圭太が今まで見たことも無いような恐ろしい顔で男を睨み付けていた。

「僕達のバイクに勝手に触ったり、由美達にひどいコト言つて・・・
拳げ句、由美に手を上げた・・・謝れ！」

圭太が叫んだ。その目はしっかり彼らを睨み付けていた。

「な、何を言いだすかと思えば・・・先に手を上げたのはその子で

あつて・・・」

「ふざけるな！あなたが由美に手を上げたのは事実だ！由美達に、バイクに謝れ！！」

ものすごい剣幕でまくし立てる圭太。その迫力に男達が慌てていると・・・

「よし、圭太あよく言つたあ・・・テメエら2秒でクシャクシャにしてやつかんか？」

「調子乗りすぎたなあオメエら？」

旭と洋介が彼らの後ろから現れた。

「な、なにを！？」

小太りの男が旭に首根っこを捕まれて悲鳴をあげる。後ろを振り向けない彼には後ろの旭が見えないが、凄まじい怒りだけは確実に伝わってくる。

「テメエ、このまま地面にぶん投げてやんかあ！？」

「ひい！！」

旭と洋介の2人が現れたことによつて、男達はかなり狼狽していた。今にも血の雨が降りそうな状況の中、旭に圭太が飛び付いた。

「旭さん！やめて下さい！！」

「な！？圭太・・・」

圭太が真剣な顔で旭の手を握る。

「ここでこの人達を殴つたら、由美を突き飛ばした奴とやってることに変わりありません！」

「でもよお・・・」

圭太が言うつと、旭もなにも言えなくなつた。普段の圭太からは想像出来ないほどの怒りだが、言っていることはいつもの圭太と同じである。圭太はあくまでも暴力だけは極力避けたいのだ。

旭が男を離すと、男は荒い息で呼吸を整えて旭を見た。

「なんなんだあなたは！！今のは暴力だ！警察に突き出してやる！！」

太り気味の男が叫ぶと、男の肩が強く捕まれた。

「おい・・・？今あ圭太が止めてくれてんけど、まだゴタゴタ言うならオレも旭を止めらんねーぜ？」

旭より背は低い、ガタイが良い洋介がギロリと睨みを効かすと、男は黙った。

「じゃあ圭太よ、コイツ等どーすんよ？」

旭がたずねると、圭太は今洋介が黙らせた太り気味の男に向かって静かに言った。

「由美達に謝って下さい・・・それだけでいいです・・・」
それだけ言つと、相手はもう反論もなにも無くなつたらしい。

「す、すみませんでした・・・」
男達はそれぞれに由美達に謝ると、圭太はいつもの優しげな雰囲気に戻った。

しかし、圭太はこれで終わつたと思つて目を瞑ると、真子と凜がなにやら納得していないようで、声を上げた。

「貴様・・・お前だ、そのガリガリ」
真子が痩せている男に声をかける。男は一瞬ビビりながら振り向く。

「な、なんですか・・・！？」

明らかに動揺している男を真子が睨み付ける。

「貴様・・・私達のコトを珍走団とか言つてくれたな？」

「オマケにオレらの単車、KHじゃなくてマツ八だしよお、中途半端な知識でモノ語つてんじゃねーよ！」

凜が詰め寄ると、ガリガリ男はひい、と悲鳴を上げて後ろに下がる。

「走り屋なら、腕で勝負だろう？私達と勝負しろ」

「ちよつと真子姉さん！？」

収まりかけていた話を穿り返そうとする真子を紗耶香が止めようとするが、この2人はもう止まらなかつた。

「良いじゃねーか、乗つたぜ姉貴！」

「そんなワケで、貴様ら勝負だ」

凜も真子も臨戦体制に入ってしまった。紗耶香と圭太がおろおろしている、次は後ろから甲高いシヨットガンチャンバーと地響きのような集合シヨート管の爆音が響き渡る。

「その話、オレも乗ったあ!!」

「フオアの底力見せてやるぜ!」

旭と洋介もノリノリで自分の愛車に火を入れていた。

「ぼ、僕達と勝負・・・?」

「どーすんだよ豚あ? 鬼ハンのサンパチに勝負挑まれて逃げるってのあねーよなあ?」

「私達のマツハが遅いなどとほざいた貴様らの罪は重い・・・拒否権は無いわよ?」

旭と真子が相手を煽ると、男達は集まって小声で会議を始めた。

「どどど、どうしよう・・・!」

ガリガリ男がビビりながら言うと、デブと猫背はイジの悪い笑みを浮かべる。

「でゅひひひ・・・! 向こうは勘違いしてその気になってるだけでゴザル・・・! あんな珍走団が我らのバイクに勝てる見込みなんてゼロでゴザル・・・でゅひひひひ!!」

「しかも勝つたらそのまま逃げれるし・・・」

ガリガリ男もさつきまでの暗い表情からまたイジの悪い笑みが復活していた。確かに、レーサーレプリカが鬼ハんに負けるなどということはあり得ない。そう考えて、ガリガリ男も自信がついたらしい。

会議を終えたらしく、デブがニヤニヤ笑いで旭達に歩み寄る。

「そのレース、やるでゴザルよ!」

デブの言葉に、真子が頷いてからひとこと付け足す。

「貴様ら、負けたらその場で全員私達のバイクに土下座してもらおう」

その迫力ある言葉に、デブは少しひるむが、すぐに外道な案を考え付いた。

「いいでひゅよ、ぶひひ・・・ただ、そっちが負けたら男達は僕達に土下座+女の子は全員メイドコスプレしてご奉仕してもらってゴザル!!」

デブがフザけたコトをほざくと、旭が単車から降りてデブに怒鳴りちらした。

「メイドだあ！？先にテメエから冥土に送ってやんゾ？コラあ!？」

「反省が足んねえみてえな、オメエら」

洋介も今にも殴りそうな勢いでキレている。

しかしデブはシレっと、こちらにひとつ条件を付けてきた。

「その代わり、そっちが勝ったら何をしても良いでゴザル。それなら対等でひ？」

その言葉を聞いて、旭も真子も一層闘志を燃やした。ニヤリと笑ってデブを睨み付ける。

「今の言葉あ・・・」

「忘れるな・・・!？」

旭と真子が揃って言うのと、デブはそれだけで、今自分が凄く調子に乗ってしまったコトに気付いて少し後退りした。が、何度考えても負ける気はしない。ここは地元の峠で走り込んでいるし、向こうは鉄フレーム、こちらはアルミフレームのレーレブだし、さらに言えば相手は自分より年下・・・だと思う。負けるワケが無い・・・そう自分に言い聞かせて、デブはなんとか自分の中の不安を押し潰した。

一方、旭や真子の周りでも圭太や由美達が集まって話合いをしていた。

「ちょっと旭さん・・・!あんな勝負受けて大丈夫なの!？」

由美が不安そうに旭を見る。もし負けたらあんな奴ら相手にメイドコスをしなければならぬのでかなり不安になっている。

「大丈夫だよあゆーちゃん あつくんが負けるワケ無いってえ」

一方、美春はニコニコ笑いながら由美の肩を叩いて笑う。そんな美

春を見て、今まで隅で事の流れに身を任せるしかなかった千尋が美春を不安そうに見つめる。

「も、もしおにーちゃん達が負けたらどうするの?」

千尋がたずねると、美春はニコリ笑いながら

「んー、舌噛み切って死ぬかなあ」

と答えたので、由美と千尋は一瞬ビビる。しかし、すぐに千尋の肩を叩いて笑った。

「ちーちゃん? あっくんは自慢のおにーちゃんでしょ? 負けないよ

お

諭すように言うと、千尋も

「そうだよね・・・! あんな人達なんかに負けないよね!」

と自信を持ったらしい。そんな光景を見ていた由美が先ほど、ここに来る途中の2人を思い出して笑った。

「こつやつて見てると、さつきも思ってたけど、美春ちゃんって本当に千尋ちゃんのお姉さんみたいね」

由美が笑いながら言うと、美春は「うにゅ?」とか言った後、由美と千尋を抱き寄せた。

「そーだよ? 私はみんなの優しいお姉さんだもん」

ニコニコしながら2人を抱き締める美春は、頭の中で旭の勝利を願った。

愛車に異常が無いかを点検している洋介に、翔子が近づいた。

「洋介さん・・・」

「お、翔子ちゃん! どうしたの?」

洋介がいつもの笑顔で翔子に話掛けると、翔子は少し不安そうな顔で洋介にたずねる。

「勝てるんですか・・・!?」

翔子がたずねると、洋介は一瞬きよんとしたが、すぐに鼻で笑っ

た。

「心配してくれるの？」

「あ、当たり前です……！負けたらコスプレも嫌ですけど……洋介さん達が負けるのはもつと嫌です！！」

翔子は不安げに言う。目には少し涙さえ浮かべながら必死に言うと、洋介は翔子の肩にポンつと手を乗せた。

「確かに性能じゃあ、あいつらのバイクに負けてる……けど、ホントに無敵なんだぜ？このフォア……！」

「洋介さん……」

翔子がうるうるしながら洋介を見つめるが、すぐに普段の顔で

「それ、不運と踊っちゃう某ヤンキーマンガのフォア乗りのセリフじゃないですかあ……」

「あ、バレた……？」

洋介がのんきにボケていると、翔子はまた泣きそうな顔で洋介を見た。

「頑張ってください……」

「ああ……」

2人はそれだけ言うと、その場で出来る簡単な愛車のコンディションチェックに入った。

真子と凜もウキウキしながら自分の愛車のポジションやらなにやらを見なおしている。紗耶香も手伝っていた。

「オイルポンプよし……真子姉さん！点検終わったよ！」

紗耶香が言うと、真子も頷いた。

「さすがね、紗耶香……私のマツハはあなた以外には触らせたく無いわ」

姉に誉められて、えへへと笑う紗耶香。隣では凜が指をバキボキ鳴らしながら相手を睨み付ける。

「負けたらなんでもアリつつつたもんな？アイツらボコボコにしてやる！！」

凜が勝つコトを前提にして呟くのを見て、2人は笑ってしまふ。以前も凜はレーサーレプリカと走ってぶつちぎってしまったことがある。心配はないだろう。

「絶対、勝つぞ」

「頑張つてね、真子姉さん！」

真子と紗耶香は互いに笑って時を待った。

「旭さん・・・」

「あ？なんだよ圭太あ？」

圭太はサンパチの調子を見ている旭と話していた。

「僕達があの人達に近づかなければ、あんなモメ事にならなかったのに・・・ゴメンなさい・・・！」

圭太が謝ると、旭はタバコに火を点けながら呟いた。

「でも、奴らに愛車バカにされて悔しかっただろ？」

旭の質問に、圭太は首を縦に振った。それを見て旭はニヤリと笑う。

「愛車はマブダチだかな・・・笑われっちまったら、怒るのが当然よ？ダチをバカにされてキレイない奴はいねーべ？」

煙を吐き出して、サンパチのエンジンを見る。

「お前が責任感じるこたあねーよ？これは笑われたマブダチのための勝負だからよ？」

旭が笑いながら言うと、圭太は何がひとつ、肩に乗っかっていた重みが無くなった。

「お願いします・・・負けないでください・・・！」

圭太が、珍しく真剣に勝負事の話で熱くなる。それを見て、旭はフツと笑った。

「任せろ」

それだけ言つて、旭はまたサンパチに向かい直つた。

「じゃあ地元の僕達がルールを説明するから、集まって欲しいでゴザルよ！」

デブがニヤニヤ笑いで集合を掛けた。旭達4人はそれぞれの面持ちで彼らの待つ場所に歩いていった・・・

第26章 旧車乗りのプライド！（後書き）

真田美春の！オールナイトニッポン！！

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。
美春「おはようからおやすみまで！元気ですかー！！美春お姉さんだよ」

作者「相も変わらず反響無いなあ・・・ども、最近寒くなってまいりましたね！作者です」

美春「そう言えばもう年末！12月だよ？」

作者「4月にこの作品が始まって、途中早くも挫折しかけたりしてたけど、まだまだこうして続けていられるのは、本当に読んでくれている皆さんのおかげです。ありがとうございます！これからも宜しくお願いします」

美春「シェイシェイ！」

作者「黙れって・・・ところで、今日は？」

美春「今日はゆーちゃんだよお」

タイトル Just One More Kiss

唄 BACK-TICK

美春「キヤー！今井さん！」

作者「ちなみに私、イメージソング決めるときに歌詞で決める時と曲のリズムで決める時が多々あります。今回は後者で決めました」
美春「作者君、結構この曲聴きながらこの物語書いてるよね」

作者「この曲に限らず大体BACK-TICKだね。やっているジ

ヤンルは違っただけだね」

美春「聞きやすいし、櫻井さんの声が魅力たっぷりでいいね」

作者「今のB-Tも好きだけど、個人的には初期B-Tが好き」

美春「聞いて無いよ？」

作者「たまには聞いておくれよお・・・」

美春「うん、それムリ・・・ってのは冗談にして、作者君、さっ

きも言つてたケドこの曲はイメージで決めたんでしょう？」

作者「はいな」

美春「じゃあ、この先もまた変わることがあるかもしれないってこ

とかな？」

作者「そうだねえ・・・もしかしたら、これから先何かあつたら変

わってくるかも・・・」

美春「とりあえず今後、変わってしまった場合はこのラジオでまた

お知らせするから楽しみにしててね」

作者「ラジオが残つてたら・・・な」

グシャ！！（踏まれた

美春「うふふ 次回はおっくんの曲を紹介するお！なにかラジオに

お便りなどあつたら作者さんにご連絡を！今なら即採用！ご感想も

まってまーす！それではまた！ばいばーい」

というわけで、26章です。

ここまでこれたのも、本当に読んでくださっている皆様のおかげです。これからも『旧車物語』を宜しくおねがいします。

追記

今回登場した、レーザーレプリカ及び峠の走り屋はイメージであり、私はレーザーレプリカが嫌いなわけでは御座いません。レーザーレ

プリカに乗られている読者の方がいらっしやいましたら申し訳し
ぎません。

第27章 音速の4人

かくして、旭達4人と自称走り屋達のバトルが開始されようとしていた。駐車場の出口にバイクを移動させて、最初の走者が1組スタンバイしている。

「最初は僕だよ？」

フルフェイス越しにニタニタ笑いながら、猫背の男が愛車に跨がる。

「なら、こっちはオレが行くぜ！」

凜が気合いを入れてマツハのキックを踏み下ろす。甲高くもくぐもつた集合管の2スト音が山に響く。

「テメエのそのガンダムみてえな単車、オレ様のマツハの敵じゃねーぜ！」

「お、お姉ちゃん・・・」

紗耶香が挑発する凜を宥めようと声を掛けると、猫背もスターターに手を掛けてエンジンをスタートさせる。

キュル・・・ボヒユウ！ファアアアア！！

掛け始めこそ静かなアイドルリングだが、回したら恐ろしく速そうな秀囲気のレーサーレプリカ的な音を出す。

「そんなコト言って、僕のCBR250RRが怖いんじゃないの？」

ニタニタ笑いながら凜に囁く。しかし凜はフンツと鼻を鳴らした。

「るっせえ！負かしてやるからな！！」

凜が吠えると、紗耶香は

「あわわわわ・・・！！」

とか言っておるおるするしかなかった。

「ルールは簡単！さつき話したとおり、左車線のみ使ってこの下にある駐車場まで一気に下るだけでゴザル！！先頭と後追いに別れて先頭を抜くか食い付けば後追いの勝ち！離されたら後追いの負けでゴザル！！」

なにやら鼻息荒く張り切って太り気味の男が説明する。

「そして、前がスタートして10秒間隔で後の組が走り出す！！いいでふ！？」

太り気味の男が確認すると、皆首を縦に振った。

「審判はそちらが先に下に行かせたあのサンパチの女の子2人とサンパンフォアの子！それじゃあ始めるでひ！！」

語尾がおかしいが、とりあえず言っているコトは分かった。

「スターターは紗耶香にやらせるから。紗耶香、頼むわよ？」

真子が紗耶香に言っていると、紗耶香はうんと返事した後、「事故はしないでね？」

と言って出口に歩いていった。

一方、旭は下で待機している美春にケータイで連絡を取る。

「そっち、対向車は？」

『今のとこいないよお』

「わあつた、サンキユ」

『頑張つてねえ』

美春の間延びした声を聞いて、旭はふつ、と笑って通話を切った。

「対向車無しだ。始めんなら今だぜ？」

太り気味の男に言う。

「じゃあ始めるでひ！！」

「おっしやああ！！」

凜がフルフェイスの中で気合いの叫びをあげる。

「じ、じゃあスタート10秒前です・・・！！」

スターターの紗耶香が両手でカウントを始める。左手の指が全て折られ、最後の5本目で紗耶香もわかりやすいような言葉も併せてカウントを始める。

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・GO!!」
紗耶香が腕を下ろすと、予め決めていた前後順に凜達が飛び出す。
ちなみに、今回のレースは凜が先頭、猫背のCBR250RRが後
追いで始まる。

クアアアアア！アアアアアアア！！！

フアアアアアアア！！！！！！！

2台がコーナーを抜けて見えなくなると、次の走者も準備する。

「ヨンフォアなんか負けるハズが無い・・・コッチはかなりイジ
つているんだ・・・！」

ガリガリがヨンフォアを見ながら、しかし洋介には聞かれないよう
に小さな声で呟く。ガリガリの愛車はこれまたレーサーレプリカの
RG250、通称『ヤツコ胤ガンマ』、2ストマシンだ。

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・GO!!」

紗耶香が叫ぶと、2台は先ほどと同じように飛び出す。今度は洋介
が後追い。ヨンフォアが相手に加速していった。

「おうおう、洋介の野郎・・・マジだな」

「凄く上手いクラッチの繋ぎ方ね・・・」

旭と真子が関心して見ていると、次は旭の番だ。

「・・・レープレじゃいからって舐めるな・・・!!」

旭に聞こえないように小さな声で呟いている彼の愛車は、カワサキ
のバリオス？型。それでも低めのハンドルにビキニカウル。マフラ
ーも砲弾型で走り仕様だ。

そんなコトを呟きながらこちらを見ている彼に気付いた旭は、サン
パチのアクセルを乱暴に吹かし余裕な目で睨み付けながらコーンを

切る。

クアンコアカ・・・！！クアンクアンコアカカン！！バリバリバリバリ・・・！！！！バン！！！！

紗耶香のカウントも聞こえないくらいの爆音に男がビビっているうちに、紗耶香の腕が振り下ろされた。

「アバヨ！」

旭が叫びながらサンパチのギヤを入れて加速。フロントを軽く上げながらスタートすると、相手も焦りながら加速を始めたが、少し差が付いてしまっていた。今回は旭が先頭だ。

「アイツう・・・！！ズルいでひ！あんなに睨みながら脅すなんて！！！」

太り気味の男が真子に文句を言うが、真子は彼をまるでゴミでも見るかのような目で見つめた。

「そういうコトは、私じゃなくて彼に直接面と向かって言って」

真子がピシヤリと言うと、男は何か言いたそうにして口を開けて・・・
すごすご引き返した。

「まあいい・・・ボキのNSR250Rタソがあんなマツ八なんかに負けるワケが無いし・・・！」

スタンバイしながら呟く彼のマシンはNSR250R。峠御用達の名マシンだ。

「頼むわよ・・・マツ八・・・！」

真子は自分の愛車と会話するように話し掛ける。峠が嫌いな真子だったが、相手にとって不足は無し。ヘルメットのシールドを下ろして戦闘態勢に入った。

「3・・・2・・・1・・・GO！！！」

紗耶香の腕が振り下ろされた瞬間、真子のマツ八と太り気味の男のNSR250Rがかっ飛んで行った。先頭はNSR250Rだ。

真子のマツ八も白煙をモクモクと上げてフル加速。NSR250R

に続いてコーナーの向こうに消えた。

「ついにみんな走り始めちゃったわね・・・」

由美が不安そうに呟く。バイクのコトは詳しく無いが、素人目に見ただけでもわかる・・・あのバイクは自分たちの愛車より性能は絶対の上だと。

「こうなったら、旭さんや真子さん達を信じるしか無いよ・・・僕達も追い掛けよう！」

FXに跨がりエンジンを掛けながら圭太が言う。それを見て由美と紗耶香もエンジンを掛けて、3人は峠を下り始めた。

「凜お姉ちゃん・・・真子姉さん・・・頑張つて・・・！」

ヘルメットの内側で祈りながら紗耶香はマツハ？を走らせた。

その頃、最初に出たグループは未だに凜が先頭、後追いCBR250RRのままレースは終盤戦に入っていた。

「よっしやー！！」

凜が叫びながらセンターラインギリギリを狙ったハングオンでコーナーを抜けていく。曲がらない止まらないというのが定評のマツハシリーズとは思えない走りの後続のCBR250RRを寄せ付けない。

「くそう・・・あり得ない！僕のダブルアールがあんな旧車ごときに負けるなんてあり得ない・・・！！」

猫背がフルフェイス内で苛立ちながら叫ぶ。しかしコーナーでは差が開くばかり。それでも付いていけるのは、ストレートでのパワーの違いだった。

CBR250RRはレッドゾーンがなんと19000回転からという超強力な高回転型エンジンを積む。パワーは凜のマツハとあまり変わらないが、伸びのある加速でストレートだけは離されないうで付

いていけている。しかしこれはレーザーレプリカ乗りとしては屈辱だった。

猫背は舌打ちした。パワーも車重も然程変わり無いが、70年代のマシンと現代のマシンでは全く違うのだ。向こうは走りに向かないスポークホイール18インチ、鉄フレームにリヤはドラムブレーキだ。ここまで来たら間違いない。しかし猫背は認めたく無かった。

「僕があんな女の子にテクニクで負けてるだなんて……!!」

そんなことばかり考えていたためか、連続ヘアピンの入り口で減速が間に合わずフルブレーキ。優秀なブレーキは車体をなんとか減速させたが、大回りになってしまいラインが崩れる。それに慌ててしまいつの間のヘアピンでもラインが定まらない。さらに先ほどの減速が響いてスピードが乗らず、ヘアピンを抜けると、目の前にはマツハの残した白煙しか残っていなかった……

「ねえねえ圭太！」

一方、後ろを走る由美が圭太に叫ぶ。

「洋介さんのヨンフォアって速いのかしら!？」

「僕だつてわかんないよ！」

圭太が叫びながらコーナーを曲がる。頭の中では内側を走った方がいいと思っただけでも、なかなか思い通りにならない。

すると紗耶香がストレートで圭太と由美に並んだ。

「性能自体は翔子さんのサンパンフォアの次です……中でも1番重いですし、トルクもパワーも現代の車種に比べたら比較になりま

せん・・・」

「じゃあ勝てないじゃない！」

由美が叫ぶと、紗耶香はギヤを3速に上げてから由美に叫び返す。

「でも・・・！あの人は多分速いです・・・！凜お姉ちゃんと同じ雰囲気があります・・・！」

その言葉を聞いて、由美と圭太は一瞬ぽかんとしたが、すぐに笑顔になった。

「そうよね！洋介さんが負けるワケ無いわ！！」

「そうだよ・・・！洋介さんは絶対に勝つよ・・・！」

由美と圭太が笑いながら言うと、紗耶香も笑顔になった。どういうワケか、あの人ならガンマが相手でも勝つかもしれない・・・そんな風に思ってしまう。

「みんな・・・私達も競争よ！誰が1番に付くか勝負よ！」

皆のレースの話をしていて興奮したのか、由美がいきなり叫んだかと思うと、加速していった。圭太と紗耶香は互いに顔を見合わせて笑うしかなかった。

そんな洋介の勝負は、実は圭太達が峠を下り始めた時にすでに勝負がついていた。時は戻って3分前。

「見よ！この美しいライントレースを！！」

ガリガリがヘルメットの中で自画自賛しながらガンマを走らせる。マシンは綺麗にアウトインアウトのラインに乗って走っていた。しかし・・・

「そんなもんかよ・・・？」

後ろにはピタリと洋介が張りついている。ラインも一寸違わぬ走り
でガンマを付け狙う。いつでも撃墜出来る状態にあった。

「ラインはいいが、絶望的なまでにスピードが遅い・・・減点10
0!!」

洋介が叫ぶ。この先はストレートが少し多くなる区間。ここで決
めないで終盤まで持ち込むことになってしまう。洋介は次のS字で決
めるコトにした。

「どげやあ! ヨンフォア様のお通りだあ!!」

「えひゃい・・・!?」

ガリガリのガンマにコーナー手前で並んだ。ガリガリは自分の走り
に酔っていたため、洋介のヨンフォア存在に気付いていなかった。
いや、すでにヨンフォアなど突き離れたと思っていた。

「で・・・でも僕がインにいるんだ・・・抜けるワケが無い・・・
いや、まぐれだ!!」

叫びながらコーナーに侵入する。アウトには洋介が、ピタリと並走
していた。

「な、何でえ・・・!?」

「遅いからだよ」

驚くガリガリに、洋介がポツリと呟く。アウトからぶち抜き態勢、
コーナー出口で洋介が並んだ。

「よ、ヨンフォアが速いとか・・・!?どこの暴走族マンガだよ!
ありえないありえないありえないいいいい!!」

ガリガリが叫びながらストレートをフル加速する。しかし、すぐに
ハツと我に返った。すぐ目の前がコーナーだということに・・・
そして、自分のポジションがアウト側で、洋介がインを走っている
ことに・・・!

「あばよ!!」

フォアアアア!!クオオオオ!!

雄叫びを上げながら加速するヨンフォア。ガリガリはアウト側でア

クセルを開けられず離された。そしてコーナーを抜けた時、目の前にヨンフォアのテールがそこにあった・・・

「そ、そんなバカなあゝ!!!」

ガリガリは戦意喪失、洋介はそのままかつ飛んでいった。

「美春さん、皆さん大丈夫でしょうか・・・？」

こちらは、下で待ち受ける美春達のグループだ。翔子が美春にたずねると、「んー？」と唇に人差し指を当てて考えて即答した。

「大丈夫だよ みんな勝つよお」

「でも、旭さんだけアップハン・・・それも1番乗りにくい鬼ハンです・・・相手はバリオス、心配で・・・むぎゅ・・・!？」

言い終える前に翔子はなにか柔らかいモノに顔を押しつけられた。

「もう、しーちゃんは心配性なんだあ 大丈夫だよお、あつくんが負けるワケ無いよお」

「ふがふが・・・!んー!」

美春の胸に押しつけられて翔子がじたばたするが、美春は一向に放そうとしない。むしろさらにギュツと締めた。

「でも美春さん・・・おにーちゃんて峠で走ったりすることあるのかなあ？」

千尋が疑問に思っている事を言う。確かに旭はどちらかと言えば族系の走りが得意だ。それが鬼ハンで峠のレースとなれば、確かに厳しい、いや絶望的かもしれない。千尋は不安そうに呟いた。

「負けないでね・・・おにーちゃん・・・」

すると千尋の肩に美春が優しく手を置いた。

「美春さん・・・？」

「おねーちゃんって呼んで？」

美春の言葉に、若干戸惑いながら千尋は少し緊張しながら口を開いた。

「お・・・おねーちゃん・・・？」

「ちーちゃんは、おにーちゃんのこと信じられないの？」

美春の言葉に、全力で首を振った。

「そんなこと無い・・・！私はいつでもおにーちゃんを信じてるもん！！！」

「なら、おにーちゃんを信じて待とう？おねーちゃんと一緒にね」

「お、おねーちゃん・・・！」

なんかワケがわからないが、千尋が美春に抱きつくと、美春は優しく抱き締めた。まるで本当の姉妹のような2人だけを見ていればかなり和やかな感じだ。

しかし、千尋はそこで気付いてしまった・・・

「お、おねーちゃん！翔子さんがあ！！！」

「あ・・・」

見れば、翔子が美春の胸に顔を押しつけられたまま手足をぷらんとさせていた。

「し、翔子さん・・・しっかり・・・！」

「・・・やっちったあ」

「やっちったあ じゃないよおねーちゃん！翔子さーん！！！」

「ピッタリ付いて来やがんなあ・・・！」

バックミラーの中で依然として離れないバリオスを見て、旭は笑った。まだ本気では無いがそれなりのペースで走っているにも関わらず、付かず離されずといった微妙な間隔で付いてくるバリオス。

「それに・・・なかなか粋なマネしてくれちゃってよあ・・・！」
中盤。ストレートの多い区間で、抜こうと思えばいくらでも抜けるチャンスがあつたのに、バリオスに乗る彼はそれをせずにコーナーでの勝負を挑んできたのだ。

そんなバリオスを操る男は、ヘルメットの中で苦し気に声を上げた。

「ナメてた・・・！速い・・・ウチのチームの誰よりも・・・！」

レース前、彼は前から思っていたことでイラついていた。それはチームの人間の軽率な行動・・・

もともと、峠の走り屋に憧れて、昔から速いと言われていた地元の名門であるこのチームに入った。しかしいざ入ってみると、彼らはテクニクを身につけたりタイムを縮める努力もせず、ただ毎日集まっては自分達の愛車の自慢にふけて、違うジャンルのバイク乗りをけなしているだけの集団だった。今日の出来事だつて自分たちが一方的に悪い。

そして、彼らはどうだ・・・？

自分のバリオスに比べたら、本当に何世代も前の旧車チーム。フルノーマルもいれば、今日の前を走る彼のような族っばいのから走りを意識した感じの物まで、旧車というカテゴリは同じでも、皆それぞれ別々のジャンルでいて、ウチのチームには無い物だ。それに・・・

「速い・・・！」

彼は素直に思った。やる前まで、今日まで毎日毎日走り込んで、チームではおそらく1、2を争うくらい速くなった自分が、鬼ハント

ここまで競り合うコトになるなどとは思ってもいなかった。走りの姿勢などメチャクチャなのに、重たいGT380を速く走らせる彼を見て素直に尊敬の意を込めて思った。

「負けない……！負けたくない！！」

そして、コーナーに進入した時、勝負はついてしまった。

右コーナー、なんてことない場所に拳大の石が落ちていた。旭のサンパチがギリギリで回っていったが、彼はモロにフロントに引っ掛けてしまい……

ガツチャーン！！！！

バキヤバキヤ！！！！！！

見事に転倒してしまった。

バリオスは火花を散らして地面を滑走し、ガードレールに当たって停止。ぶっ飛んだ彼はガードレール手前に上手く転んだ。

「痛たた……！」

頭は打っていない……が、左足を打ち付けてしまったらしく、かなり痛い。折れてるかもしれない。ガードレールに手を付いてなんとか右足で立ち上がり、さっきまで一心同体だったバリオスを見る。ビキニカウルが割れ、ステップやミラーがぶっ飛んでハンドルも曲がっていたが低速だったためか、外装の傷以外は走行に支障は無さそうだ。

安心して溜め息を吐くと、先ほどまで競っていた赤いマシンがわざわざ戻ってきた。

「大丈夫かよテメエ……！？」

旭が彼に近づくと、彼は笑いながら言った。

「バイクは大丈夫だけど……足がね……」

それを聞くと、旭は彼の肩を支えた。

「ケツン乗れよ？下まで運んでやつから・・・」

旭が言った時、2台のエキゾーストが近づいてきた。コーナー入り口を見ていると、先頭に白いマツハ。後ろにだいぶ差を付けられてトリコロールカラーのNSR。勝負は付いたらしい。

旭はカツ飛んで行く真子と目が合った。真子も旭も、それだけで全てを悟った。

「た・・・大変申し訳ございませんでした・・・!」

峠の麓の駐車場で圭太達の前で太り気味の男を始め、後の2人も土下座をした。バリオスの彼は折れてこそいなかったが足にヒビは入っているのだろう、座れないので彼らの横で立っていた。

「これからは旧車だと思つて変に煽るんじゃないぞ!？」

「り、凜お姉ちゃん・・・!」

紗耶香が凜をなだめる。

「あなた達、次また今日みたいに他のバイク乗りにちよっかい出してるのを見つけたらどうなるか教えてあげるから?」

真子が仁王立ちで彼らにキレる。まあもともと赤城姉妹の2人が言い出したレースなのだが・・・

「おゝい、2人とももう十分だろ?許してやれよ?」

見兼ねた洋介が2人に声をかけると、真子が怖い笑みを浮かべながら言う。

「まだまだこんなもんじゃ済まないわよ・・・私達の愛車をバカにしたあげく、圭太君にもひどいこと言ったのよ?これからたっぷり

イジメてあげるんだから・・・？蠟燭垂らして鞭でシバいて・・・
ふふふ・・・」

なにやらどSモードになりかけの真子がニタリと笑う。男達がビビ
っている、圭太がおずおずと真子に言う。

「真子さん・・・もう許してあげましょう・・・僕達はもう怒って
無いですし・・・」

「わかったわ。圭太君に免じて許してあげる」

「「早っ!!!!」」

急にけるつと態度を変えた姉に妹2人が突っ込む。

「圭太君が言うなら、私は言うことを聞くのみ・・・私は圭太君が
望まないコトはしない主義なの」

胸の前で手を組ながらのたまう。そんな真子に圭太はよく分からな
いが苦笑いし、土下座してた男達は圭太に感謝の眼差しを向けた。

「じゃあ、オレらはもう帰るか？」

旭が皆に言うつと、皆うなずいた。

「途中ガソスタに寄っていいかしら？私のゼファーちゃんもうお腹
ペコペコなのよ」

由美が言うつと、真子と凜も頷く。マツハは恐ろしく燃費が悪いのだ。

「わあつた。じゃあ途中ガソスタ寄るら、みんなヨロシク！」

「ヨロシク」

旭と美春が言いながらエンジンを掛ける。

「翔子さん・・・大丈夫？」

千尋がサンパンフォアに寄りかかってグッタリしている翔子を心配
して声を掛ける。

「どうしたの翔子ちゃん？凄くやつれた顔してるわよ？」

由美も心配になってたずねると、翔子は

「大丈夫ですよ・・・ははっ」

と力なく笑った。まさか美春の胸で圧迫死しかけたなどは、恥ず
かしくて言えない。

「あ……！そうだ！しーちゃん！」

由美が突然思い出したかのように翔子に話し掛ける。

「明日休みでしょ？今日私の家に泊まりで遊ぼうよお」

「え……？良いんですか!？」

「もちろんだよお」

美春がニコニコしながら言う。

「さっき圧死させかけちゃったお詫びに」

「み、美春さん……！」

翔子が慌てて美春に言う。美春の胸に押しつけられて涙とよだれを垂らしながら数秒とはいえ気絶していたなどは、恥ずかしくて誰にも言えない。

「あ！来たい人いたら、手え上げてねえ　ウチ広いから何人来ても大丈夫だよお」

美春がはしゃいで手をあげながら言う。

「じゃあ私もいいかしら美春ちゃん!？私も明日暇だし!!」

由美が勢いよく手を上げた。

「もちろんだよ　あ、マコリン達はあ？」

美春が言うつと、真子が溜め息混じりに言った。

「マコリンで……それつてもしかして私のこと……？」

「そだよお　ちなみに凜ちゃんはリンリンで紗耶香ちゃんはサヤリン」

「オレはパンダがあっ!？」

「サヤリンで……」

ノリツッコミする凜と苦笑いする紗耶香を見て、美春が上目遣いで2人を見つめる。

「ダメ、かなあ……？」

いつも笑顔の美春が悲しそうな顔で見つめると、2人は観念したらしい。凜が下を向いて呟く。

「ベ……別にそこまでイヤってわけじゃねーけどさ……!」
すると、美春がいつもの笑顔でけろつと言った。

「じゃあ決定ね」

「・・・ハメられた・・・!!」

凜が1人悔しがっている、真子が残念そうに美春に言う。

「ごめんなさい・・・私、明日は仕事で・・・」

「仕事って、アカギ建設の仕事ですか？」

圭太がたずねると、真子はそうなの、と言って続けた。

「大学に行きながら、合間を縫って父の会社で働いているの。といっても、ほとんど経営学の一環だけだね」

真子がいうと、圭太が尊敬の眼差しで見つめる。

「す、すごいですね！僕の姉にも見習って貰いたいです！」

「ああ・・・茶子姉えじゃ無理よ」

由美が圭太の姉、茶子を思い出しながら言う。小さな時から仲は良いが、なかなか掴めない所がある。由美は幼心に「茶子姉え」変態だけど優しいお姉ちゃん」で認識している。

「あれ、圭太姉貴いたんかよ？」

それまでサンパチの調子を見ていた旭が圭太に聞く。

「あれ・・・？言いませんでした？」

すると美春も横から「聞いてないよお」と言う。

「私達の一個上だから、旭さんや真子さんと同い年だったわよね？」

由美が言う、皆もへー、とうなる。

「会ってみてえなあ・・・」

「そだねえ」

旭と美春が顔を合わせて言うと、旭と由美が微妙な顔をした。

「会わないほうがいいと思いますけど・・・」

圭太が遠慮がちに言うと、旭がなんでよ？とたずねると、言いにくそうに切り出した。

「えと・・・変人？変態？だから・・・」

「大丈夫だ、変態なら美春で慣れてンから」

「へえ 酷いねあつくん」

後ろで美春が旭の死刑執行が行っている中、旭の悲鳴をBGMに真子が話を戻した。

「残念だけど・・・そういうワケで私は無理ね・・・」

「オレもだ・・・学校サボりまくっちまったから課題がてんこ盛りだ・・・」

真子に続きうんざりしながら凜が言う。

「紗耶香は？課題もなんも無える？」

凜が言うと、紗耶香はあたふたしだす。

「わ、私1人で・・・!?」

「大丈夫だよサヤリン？食べたりしないからあ」

旭の処刑を終えた美春がニコニコしながら言う。ちなみに旭は美春にひっぱられた耳を涙目でさすっていた。

「で、でもお・・・」

それでも不安なのか、紗耶香がおろおろ考えていると、紗耶香の手を翔子が取った。

「私、紗耶香さんともっと仲良くなりたいです・・・!」

「翔子さん・・・?」

翔子の目を見て、少し考えてから紗耶香は迷いを捨てた。しっかりと翔子を見ながら

「わかりました・・・!私も、皆さんと仲良くなりたいです・・・!」

翔子の手を握り返した。そんな妹を見て、真子と凜が驚いた。

「あの人見知りのプロと呼ばれた紗耶香が・・・」

「アイツが1人で泊まりなんて、初めてじゃねーか・・・!?」

姉妹2人が恐怖すら感じながら言うと、紗耶香が

「失礼だなあ・・・!」

と反論する。

「圭太君達は どうするのかかな?」

美春がたずねると、圭太は残念そうに言った。

「すみません、明日はちょっと用事があった・・・」

「そうかぁ・・・」

美春が残念そうに言う。

「旭さんと洋介さんは？」

「オレも明日は千尋のRG治さなきゃならねえからな。パス」

「オレもだ。今日サボツちまったからさ、明日は仕事しないと」

旭と洋介が言うつと、美春は千尋に抱きつきながらたずねた。

「ちーちゃんは？」

すると千尋は恥ずかしそうにもぞもぞ動きながら兄を見る。

「明日はおにーちゃんがバイク治してくれるから・・・私も・・・」

すると、旭が千尋に抱きつく美春を慣れた手つきで剥がしてから、千尋に言った。

「気にすんな、泊まりいつていいぞ？」

「ええ？でも悪いよ・・・？」

「たまには羽伸ばしてこいよ？明日来たけりゃ、いつでも来りゃいいでしょ？」

旭に言われて、千尋はかなり悩んだ。が、やがて兄の顔を見て決心したらしい。美春に向き直ってひとこと、

「よろしくお願いします」

とだけ言う。美春はニツコリ笑つてまた千尋に抱きついた。

「そうと決まりゃ、さっさと行くかぁ？」

旭が言うつと、皆頷く。そして誰かがセルを押しした瞬間、皆一斉にエンジンを掛ける。

あたりが様々なエンジン音に包まれ、ルートを確認した洋介が先に走りだす。後から翔子のサンパンフォアなどが続き、由美達も走りだした。全員が出ていく中、圭太と最後まで残った旭に先程のバリオスの彼が近づいてきた。

「す、すみません・・・！」

その声に旭と洋介が振り向くと、バリオスの彼が旭に腕を差し伸べた。

「今日は無様に負けてしまいました、いい勉強になりました……！また会ったら一緒に走ってください！」

すると、旭は笑いながら彼の手を取った。
「中盤、ストリートで抜かなかつた所、オメエは走り屋だよ。この街走つてりやまたどっかで会うだろ。またな」

それだけ言つて、旭は走りだした。圭太も後から続く。出口で旭はホーンを短く2回鳴らして彼に別れの挨拶をして、圭太も軽く頭を下げてから走り去っていった。そんな2人を、彼は最後まで見送つた。

「いつかあなた達のような……素晴らしいチームにしてみせます！もちろんテクニクも……！」

そして、彼も仲間が待つ場所に歩いていった。チームも自分も、これからやることはたくさんある。彼はため息混じりに笑ってから彼らの輪に戻った。

第27章 音速の4人（後書き）

真田美春の！オールナイトニッポン！！

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。

美春「やあやあやあ！皆さんお元気ですか〜！！目標アニメ化！旧車物語の裏番組！真田美春のオールナイトニッポン！！のじかんだよ」

作者「こんな作品がアニメ化したら、いよいよ日本は終わりだろ・・・どうも、上のようなことは1ミリたりとも思っておりません、作者です」

美春「さてさて、今回は私のあつくんのテーマソングだよね！？」

作者「そうだなあ」

美春「今回はどういう基準で決めたの？」

作者「うーん・・・彼の雰囲気と見た目で決めました」

美春「そうなんだ〜！楽しみだなあ」

タイトル ファンキーモンキーベイビー

唄 キャロル

美春「君はファンキーモンキーベイビー」

作者「いかれてる〜よ〜」

美春「またまたマニアックな選曲・・・」

作者「いや、旭君にはぴつたりかと・・・」

美春「そだね 歌のなかで『だけど恋しい俺の彼女』って私のことかなあ??？」

作者「ご想像にお任せします」

美春「やったー！！見直したよ作者君！死に際に改心した南斗鳳凰拳の使い手と同じくらい見直したよお」

作者「あんまり嬉しくないな・・・まあ、君たちの外伝を書かせてもらったからね」

美春「へ・・・？」

作者「いやあ、あれだよ。君がサンパチを入手した経緯を・・・」

美春「そんな話書いたの・・・？」

作者「いや、だいぶ前に君の愛車紹介コーナーで書いてもいいみたいな前フリがあつたから・・・」

美春「いや・・・私はいいけど・・・」

作者「いいけど・・・？」

美春「旭君に殺されちゃうよ・・・？」

作者「・・・」 血の気が引いた

プルルルル

美春「あ、あつくんから電話だ・・・、もしもくし・・・え？作者君？いるよ」 今ラジオの・・・へ？逃がすな？・・・ギタギタにする・・・？わかつた」

ピッ 電話を切った

美春「今から遊びに来るつてえ」

作者「逃げよう・・・北へ・・・」

美春「それでは皆さん！作者君が生きていたらまたお会いしましょう！ラジオのリクエストはなんでもOK！随時受付中だよ！カモン！」

ガンガン！！！！ 戸を蹴る音

美春「……………もう会えないかも……………」
作者「北に……………ああ、海がきれいだろうなあ……………」
現実逃避

というわけで、27章。どうでしょうか？

レースの描写は、文字だけで表現する長非常に難しく苦戦しました汗

と、いうわけで押し絵を描いてくださる方を随時募集中！こんな小説に押し絵を書いてくださる心優しい絵師さまがいらっしやいましたら是非ご一報を……………！

それと短編小説、『旧車物語外伝 旭と美春 GT380 LOVE SONG』を掲載しました！！

よろしかったらそちらも宜しく願います！感想は本編、外伝共に受け付けております！！それでは！！

第28章 楽しいお泊まり会！（前書き）

お久しぶりです！遅れてしまって申し訳ありません！

すこし遅れましたが、クリスマスプレゼントということではのぼのとした本編をよろしく願います。

第28章 楽しいお泊まり会！

あの後、走りだしてから1時間。美春の実家である『真田屋』に着いたのは日も暮れた夕方だった。

「ただいまあ！」

美春が店先からカウンターの中间にいる両親に叫ぶ。

「あらあら、お友達？」

美春の母が後ろにいる由美達を見てたずねる。

「うん、今日みんなでお泊り会するんだ」

美春が笑いながら言うと、母は優しいな笑みを浮かべて了承した。

「始めまして！今日はお世話になります！」

由美が挨拶すると、美春母はニッコリ笑って皆を見る。

「いいのよ、今日はゆっくりして行ってね」

「よおし、じゃあ行こう 付いてきてえ！」

美春が言うと、由美達は美春の後に続いていった。

「友達か？」

美春達が家の玄関に向かっていているのを見ると、店から店主である父が出てきた。

「お泊り会ですって」

「そうかあ・・・友達かあ」

2人は夜空を見上げて呟いた。

「ここが美春ちゃんの部屋ね！」

「そだよお」

由美達が案内された美春の部屋は、旭の家より広く約10畳はある。部屋には勉強机、コタツ机、ベッド、タンス、奥にはクローゼットがある。そして本棚にはこれでもかというほどマンガが並べられている。ジャンルもなにもバラバラだが、かなりの量だ。

「美春さん・・・すごいマンガの数ですね」

翔子が本棚にあったマンガを手に取った。

「コジコジからちびまる子ちゃんまでバッチリだよ」

「それ作者一緒じゃないですか・・・」

呆れる翔子に美春が胸を張る。まあ、ほとんどが母の持ち物で、母の部屋はそれこそマンガの図書館のようなのだが・・・

「で、今日みんなで泊まって何する？」

由美が皆を見ながら言うのと、紗耶香がおずおずと手を挙げた。

「あの・・・皆さんとお話したいです・・・」

緊張しているのか、若干表情が固いが、無理も無い。自分の意志とはいえ、今日初めてちゃんと話したような人の家に急に泊まりに来ているのだ。しかも紗耶香は凜とは違いかなりの、それこそ翔子以上に人見知りするタイプなのだ。頼りになる姉達がいらないこの状況では仕方がないかもしれぬ。

そんな固い表情の紗耶香を見て由美はいつもの笑顔で紗耶香の肩をぽんと叩いた。

「そんなに緊張しなくてもいいわよ？私達には年とか関係ないからね！仲良くしましょう？」

しかし由美に言われても、まだ少し表情は固い。少しはマシになった程度だ。かなり筋金入りの人見知りだ。

しかし、そんな彼女に唯一懐かれている人間がいた。

「私もお話会がいいです。紗耶香さんともっと話してみたいですし・・・」

「翔子さん・・・!」

翔子の言葉に、紗耶香が笑顔を見せた。それを見て由美は笑いながらうなずく。

「じゃあバイク乗りのガールズトークといきますか！みんなもいいかしら？」

由美が言つと、美春も千尋も意義はないらしい。あつさりと可決された。

「じゃあ最初はなにから話すのぉ？」

「みんなとの共通点はバイクだから・・・やっぱりバイクの話かしら？」

「バイクと言えば・・・私最近思ったんですけど、私達の周りにヤマハのバイクに乗ってる人がいないっていうのもいろんな意味でスゴいですよね」

翔子が言つ。確かに由美と紗耶香はカワサキ。美春と千尋はスズキ。自分はホンダだ。

「でも私は皆がみんな旧車に乗ってるっていうことの方がすごいと思うわ。まあ私のゼファーちゃんは平成生まれだけど・・・」

由美が勝手に1人でへこんでいると、美春が千尋で遊びながら笑顔で言つ。

「私とちーちゃんは同じスズキなんだよ　やっぱりスズキが1番だよぉ」

「おねーちゃん・・・！くすぐりたい・・・」

千尋のほつぺたをぶにぶにしながら笑う。が、そんな美春の発言に、翔子と紗耶香が反論する。

「美春さん・・・？それは聞き捨て出来ません！」

「・・・」　首をコクコク縦に振る。

「確かにGTシリーズは素晴らしいバイクです・・・！でも、当時は普通だった2スト3気筒よりも・・・未来を見越して世の世界に初めて4ストマルチを送り出したホンダが1番スゴいんです！！」

翔子がなにやらいつになく熱くなっていると、翔子の肩を後ろからぼんと叩く者がいた。

「紗耶香さん……?」

「違います……!翔子さん……!」

先ほどまでの固い表情はどこへやら。かなり自信満々な顔で美春と翔子を見る。

「1番は最高時速200キロ、ゼロヨン12,4秒という怪物市販車を初めて世に送り出したカワサキ……!これしか無いです!!」

その目には炎がうつすらと浮かび上がっている。そんな紗耶香を見て、翔子はふつといつもの態度からは想像も出来ないような不敵な笑みを浮かべた。

「紗耶香さん……あなた、バイクの話になると人が変わるんですね……?」

「お互い様ですよ……?」

2人がバチバチと火花を散らしていると、由美が復活したのか誰ともなく言った。

「そういえば……バイクのメーカーにもなにかこう……特徴ってあるのかしら?」

由美の問い、翔子が少し考えてから言う。

「特徴は時代によっていろいろ変わってはいますが……いや、基本的にはあまり変わりませんか。人間の性格に例えると分かりやすいんですよ?」

「人間の性格……?」

由美が頭上に?を浮かべながらたずねると、翔子はバッグから紙とマーカーを取り出す。そして色を4色使って表のようなモノを書いていく。時折紗耶香に紙を見せて相談しながら書いていく。

「こんな感じですね」

出来上がった紙を皆に見えるように真ん中に置く。由美達が上から覗き込むと、紙には赤字がホンダ、緑字がカワサキ、青字がヤマハ、黄色でスズキの順で以下のように書かれていた。

『バイクメーカー特徴図 性格編』

作 衣笠翔子 赤城紗耶香

・ホンダ

いろいろなユーザーに対応できる幅広いラインナップ展開。技術も高く、対応も良い。デザインも丸い優等生タイプ。

・カワサキ

クセのある車種が多く、乗り手を選ぶことが多い。クランクケースからのオイル滲みとカクカクしたデザインは硬派な性格の証。

・ヤマハ

デザインはおしゃれで色使いが綺麗。昔から流れるような流線型なデザインが多い。お洒落な性格だけどレースは速い。

・スズキ

変態

「こうしてみると・・・確かにメーカーの特徴がわかるわね・・・」

「ですから、乗ってる人の性格もなんとなくわかるんですよね」

由美と翔子が話していると、突然美春が叫んだ。

「しーちゃん！これどーゆーことお！？」

美春がある場所を指差す。そこにはスズキについて書いてあるのだが・・・

「これは酷いよお！」

残酷な漢字2文字で終わっている場所を見てキレる。

「いや・・・だってスズキって少し変態さんじゃないですか・・・？」

翔子がいうと、紗耶香も深くうなづく。

「サンパチだって、同じレイアウトのマツハや同時代の2ストマシンに比べたらモーターみたいなエンジンとか、他にもRE5とかカタナとか隼とか・・・一癖も二癖もあるというか、変ってるバイクばかり作ってます・・・」

紗耶香の言葉に美春がなんとか反論しようとしていると、由美がぽんと手を打った。

「ああ！だから美春ちゃんも変態なのね・・・！」

「おねーちゃんを悪く言っちゃダメ！まあ・・・少し変態だけど・・・」

「確かに・・・美春さんも変態さんですね」

「そうなんですか？確かに少し変態なところもあるような・・・」
4人の攻撃（悪意は無い）を食らった美春は、なにか反撃しようとして開けていた口をパクパクして・・・コロンと倒れた。

「ひ、ひどいよ・・・みんな・・・寄って集って言葉の暴力・・・
某ライフ並に酷いイジメだよ・・・」

どうやら撃沈されたらしい。ダンゴ虫みたいに丸まって床で不貞腐れはじめた。

「まあ、スズキと美春ちゃんが変態っていうのはわかったけど・・・」

美春のコトなど気にせず由美が先ほどの図を見ながら呟いた。

「カワサキとホンダは結局、どっちが上なのかしら・・・あー！」
言ってから由美は急いで口をふさいだ。まさか地雷を踏んでしまった・・・！？恐る恐る翔子と紗耶香を見ると・・・

「・・・！！」

「・・・！？」

2人はかなりニッコニコしながら睨み合っていた。2人の後ろには80年代の近鉄と西武、わかりやすく言えば某マー坊君と某武丸さ

んが見えているような気がする。

「ま、まあ・・・分切り切ってるようなコトだと思えますよ・・・？」

翔子が言うと、紗耶香もニッコリしながら呟く。

「そ、そうですね・・・アタリマエですよね・・・？」

先ほどまでの暖かい雰囲気はどこへやら。傍から見れば2人がニコニコしながら見つめ合っているだけだが、よく見れば背後で守護霊と化した某マー坊君と某武丸さんが殴り合っている。今変に話し掛けられれば不運と踊つちまうコト間違いなしだ。

「技術のホンダが・・・負ける訳ないですからねえ・・・!？」

「陸、海、空・・・全ての乗り物を制覇しているカワサキに勝てるとでも・・・!？」

「強気ですねえ・・・?」「ビキビキ!？」

「そちらこそ・・・?」「ビキビキ!？」

2人は不敵に笑みを浮かべながら見つめ合う。最初に口を開いたのは翔子だった。

「現代のホンダのバイクの性能はCB400SFで確証済みです。教習所での採用率やセールスはそのまま扱いやすい優れた性能を具現化させているんです・・・!」

それを聞いて紗耶香も目を細めた。なにかスイッチが入ったらしい腕を組んで自信満々に言い返す。

「逆に言えば・・・それほど面白みに欠けるバイクというコトですよね?カワサキの武骨な・・・ゼファアのFXから続く伝統的なエンジンは乗り手との一体感を産み出す・・・ライダーと一緒に成長出来るような素晴らしいモノです。ホンダにそんな真似が出来ますか?」

「・・・っ!?じゃあ言いますけど・・・!それはただ単に新しい技術を身につけていないだけなんじゃないですか!?よくカワサキの音って言いますが、それって昔から作りが変わっていない、つまり技術の進歩が無いだけでは・・・!？」

「そ、それは方便です・・・！カワサキ特有の音を敢えて消さず、技術も日々進化しています・・・！ホンダなど、新ヨンフォアなんて初代を無視した水冷だったじゃないですか？旧き良きモノを少しでも再現しようとせず、ヨンフォアを語っておいて4本出しマフラーなど、片腹痛いですよ」

「逆にカワサキは過去の栄光にすがり付いていなければ何も出来ないというコトですね？ゼファーもZRXも過去の名車のデザインを踏習して、カラーリングまで揃えて・・・そんなメーカーがあるからバイクの販売台数が増えないんですよ」

「・・・なかなか面白いことを言ってくれますね翔子さん・・・バイク業界の足を引っ張っているのは実はホンダでは・・・？エコに走りすぎて皆が欲しがるようなバイクを作らず、作ったと思ったらビッグスクーター・・・鉄の馬を作る気が無いのなら変なロボットでも作ってたら良いのに・・・ア　モでしたか？」

ゴゴゴゴゴゴ・・・！！！！

荒木作品だったらこんな効果音が流れているであろう。2人が睨み合っていると、復活した美春と千尋が見兼ねたらしく、2人の間に入って仲裁を試みる。

「しーちゃんもサヤリンも、熱くなっちゃメツ！だよ？お姉さんのお願いだよお、そんなコトでケンカしないでよお」

「わ、私も・・・！よく分かんないケド・・・おねーちゃんが言うなら止めたほうがいいよお？仲良くしようよお？そんなどっちが1番とか、どうでもいいよ・・・」

「そんなコト・・・！？」

「どうでもいい・・・！？」

2人が和やかに言うと、翔子と紗耶香が般若のような顔でキレた。

「ヤンデレとブラコンの変態特殊属性のマニアなお2様は黙ってて

ください！」

「そうです・・・！スズキなんて変なバイクに乗ってる変態にこの議題の重要さがわかるとは思えません！！」

翔子と紗耶香がいつもの控え目な態度から一変。何かに取りつかれたかの様に大声で一喝すると、2人は何か言おうとして・・・またダンゴ虫の様に地面に転がりながらぶつぶつと泣きはじめた。どうやら2人ともしばらく復活する気配は無さそうだ。

そんな彼女達に見向きもせずに、2人の議論は加速。由美は止めるに止められず・・・美春達と一緒に床に転がり始めた。

修羅場と化した美春の部屋で、翔子と紗耶香の討論（鬭論？）が終わったのは美春の母が晚ご飯を持ってきてくれた時で、時間になると由美達が寝転がり始めて30分経った頃だった。

2人とも、先ほどまでの険悪な態度は何処へやら。今では2人仲良くラーメンをすすっている。

「いや、紗耶香さん。なかなか話が合いますね」

「そ、そんな・・・翔子さんこそ・・・」

そんな2人をのけ者にされていた由美と、いじめられた美春と千尋が不気味な目で見つめる。

「ふ、2人共・・・バイクの話になると急に熱くなるのね・・・？」

由美がスープを飲みながら2人に言うと、翔子が由美にニコニコしながら話す。

「いえいえ、まだまだ全然普通ですよ？まあ確かに、バイクのお話になると少しだけおしゃべりになってしましますが・・・」

遠慮がちに言うが、先ほどの討論はマジだったたる、と由美はツツコミたかったが堪えた。

「翔子さんとは、多分3日あっても会話が尽きませんね・・・その位話していて楽しいです」

紗耶香も嬉しそうに呟く。姉妹では、真子は仕事や大学が忙しく、さらに真子自信もカワサキ乗りなのでこういう討論自体出来ないし、凜はマツハは好きだが、メーカーに強い拘りも無ければ知識も疎いので論外。紗耶香にとつて、翔子はうつつつけであった。

「翔子さん・・・そ、その・・・これからも・・・よろしくお願いします」

「こちらこそ」

2人ががちり握手したその手はオーラを纏っていた。

「まあ、2人が仲良くなってくれてよかったわ」

由美が苦笑いしながら言うと、今の今まで黙って人生で何度も食べてきたラーメンをすすっていた美春が立ち上がりタンスを空けて、奥に入っていた物を取り出した。

「次はお泊まり会の定番！お酒だよお！・・・て痛い・・・」

美春が日本酒を取り出した瞬間、由美がニコニコしながら美春のほつぺたを軽くつねる。

「未成年はアルコール禁止！」

「しょ、しょんにゃ〜!?!」

ほつぺたをつねられた美春が反論しようとする。が、由美が日本酒の瓶を奪い取って口を開く。

「いつもいつも美春ちゃんがお酒飲んで苦労するのは私なんだから！これは没収！だいたい、タンスからお酒が出てくるってどれだけお酒が好きなのよ!?!」

「いっぱい好き・・・」

「子供か!?!」

「浴びるほど飲みたい……」

「オヤジか!!」

2人の下らない漫才は皆のどんぶりが空になるまで続いた。

「で、ご飯も食べたし……次は何をする?」

由美が日本酒の瓶を持ちながら話す。先ほどまで美春が何度か奪い取るうと隙をうかがっていたが、由美の気迫に押されて、今では静かにしている。

「そーいえば、みんな好きな人とかいたりするのかなあ???」

美春がニマニマしながらたずねる。

「しーちゃんは? ナニやらはぐつちとの熱愛疑惑が浮上してるみたいだけど……!?!?」

「そ、そんな……! それは皆さんの勘違いでして……!! 私は別に……!」

皆の容疑者を見るような目を受けて、翔子が焦りながら否定する。

「でも羽黒さん、昔からあんな感じで優しいんだよ? 翔子さんにはピッタリだと思っただけど……」

千尋が言うと、美春も大きく頷いた。

「あっくんに比べたら身長は少し足らないケド、中身はすごい友達想いだから、しーちゃんと付き合ったら絶対尽くしてくれるよお」

美春が笑いながら言うと、翔子は顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「もう! 違うんですってば! 私は別に……!!」

焦っていると、千尋と目が合った。翔子はとりあえず自分から目を

反らさせるために千尋に話題を振った。

「ち、千尋さんは・・・！？す、好きな人とかいないんですか!？」

「私・・・？」

いきなり振られた千尋は「うーん・・・」と唸りながら考えだした。

「今の所いなかあ？出来ても多分、おにーちゃんがいるからみんな恐がって逃げちゃうと思う・・・」

千尋が言うと、皆一斉に頷いた。以前ならともかく、今の旭が千尋に彼氏が出来たと聞いたらその彼氏を半殺しくらいにしてしまうだろうコトくらい容易に想像出来てしまう。

「紗耶香さんは？好きな人とか、興味ある人とか」

千尋が紗耶香に話しを振る。

「私ですか・・・？んー、そうですね・・・うーん・・・」

「そんな難しく考えなくてもいいのよ・・・？」

由美が言うと、紗耶香は「あ・・・」と言って手をポンと叩いた。

「私は翔子さんが好きですね」

シーン・・・

「あれ・・・？なにか変なコト言ってしまったか・・・？」

静まり返る皆を見て、紗耶香は不安そうに皆を見る。すると由美達が残念そうな顔で紗耶香を見つめた。

「ああ・・・紗耶香さんは、その・・・」

千尋が言いにくそうにしていると、いつも素直な美春も遠慮がちに言った。

「その、いわゆるスピードの向こう側の人だったんだネ・・・お疲れ様です・・・」

「え？え・・・？翔子さん？」

皆の雰囲気不安になってしまった紗耶香が翔子に視線を送ると、翔子は顔を真っ赤にして紗耶香から目を反らして床を見つめていた。

「紗耶香ちゃん・・・？」

由美がゆっくり肩を叩く。

「今はその・・・好きな男の子とかいるの？っていう話だったんだけど・・・」

「え・・・？あつ・・・！！」

やっとコトがわかった紗耶香は顔を真っ赤にさせて皆に慌てて叫ぶ。

「ち、ちちち違うんです！か、勘違いですっ！！好きな人って、その、友達とか・・・！そういうのかなあ？って・・・！！だから・・・！！」

言いながら翔子に土下座する。それを聞いて、一同は安心した。

「よかったあ・・・。まあ、どんな人を好きでいようと、私達は応援してあげるけど・・・」

由美が呟くと、紗耶香はまだ違うんですと言った。

「わ、私は・・・す、好きな異性の方はまだいません・・・！ずっと女子校だったので、あまり男の人とお話したことも無いですし・・・！！」

「あ、そうなんだ・・・よかったあ」

由美達が安心のため息をつく。が、美春はまだ興味津々らしい。変な視線を紗耶香に送る。

「女子校って、確かアツチ側の人とか多いんじゃないかなかったっけ？」

美春の呟きに、紗耶香は少し考えてから話をする。

「まあ・・・いるには、いますね・・・凜お姉ちゃんはよく学校でそういう人達に告白されてますし・・・ファンクラブもあるみたいですよ」

その言葉に、皆一様に頷いた。気の強い男勝りな凜なら、女子校でそういう人達に告白されることもあるのだろうと。

「で？凜ちゃんは？」

由美がワクワクしながらたずねると、紗耶香はため息しながら話をする。

「なんでそんなにワクワクしてるんですか・・・凜お姉ちゃんは、マツハ一筋なのでそういう誘いは全部その場で断ってるみたいですよ。」

それを聞いて、皆ガツカリした。そして紗耶香はそんな皆をみてガツクリした。

「なるほどねえ・・・で、美春ちゃんはいいとして・・・」

由美が美春を飛ばそうとしていると、美春が「ちよつとお！」と焦りながら手を挙げる。

「私にも話させてよお・・・自慢させてよお・・・！」

美春がウルウル目を輝かせながら言うと、由美達は少し呆れ顔で美春を見つめる。

「だって、美春ちゃんと旭さんの関係なんてみんな知ってるもの・・・」

「じ、じゃあ最近の悩みを聞いてよお！！！」

「何？」

「最近あつくん・・・夜の情事の・・・」

「はいアウトー！スリーアウトチェンジ！没シュートー！チャラツチャラツチャー！！！」

由美が強引に終わらせた。

「じゃあ、次は・・・」

「由美さんは？最近圭太さんとは・・・？」

翔子がどこかソワソワしながらたずねると、由美は少し恥ずかしそうにうつむいてから口を開いた。

「見てのとうりよ・・・圭太のばか・・・」

由美が言うと、紗耶香がポツリと呟いた。

「真子姉さんも・・・どうやら圭太さんのコトが好きみたいですし・・・」

真子の名前を聞いて、由美はハツとなつて紗耶香の肩を掴んで顔を近付けた。

「真子さんは圭太について普段どんなコトしてるの・・・!?正直に言いなさい!？」

あまりの勢いに、紗耶香は秘密にしててと言つていた真子のコトを思い出したが、由美の気迫に負けて洗い浚い話してしまった。

「な、なんかポエムみたいなものを書いていたり・・・隠し撮り写真見てニヤニヤ笑いだしたり・・・後は・・・」

他にもあるのだが紗耶香が言い終わる前に由美は肩から手を離して額の汗を拭っていた。

「なんてことなの・・・!?隠し撮り写真・・・!?なんてうらやま・・・いや、汚らしい・・・!今度燃やして・・・いや、没収してやるわ・・・!」

なにかを決意したらしい。固く握られた拳には闘志がかいま見えた。

「そーいえば・・・なんで由美さんは圭太さんが好きなの?」

今まで死んでいた美春の介抱をしていた千尋がたずねると、由美は少し考えてから懐かしむように言った。

「幼稚園の時から一緒だね?圭太つてば昔から泣き虫で・・・なんか放つて置けないのよねえ」

目を閉じて、昔の思い出を思い浮べる。

姉の茶子が砂団子を作るのに夢中になつていて遊んでくれなくて泣いていた圭太に声をかけたのが最初の出会いだったのをよく覚えている。

「でも私になにかあつたら、自分だつてすごく怖いんだけど助けてくれるのよ・・・」

昔、近所にいた犬が襲ってきた時、恐がっていた自分の目の前に立つて必死になつている圭太。小学校の時に嫌がらせしてくる男子生

？べらんめえ！てやんでえ！ここが誰の部屋か教えてあげやう！！
てやや〜！！」

完璧に酔っ払いに成り下がった美春が由美にへ口へ口パンチをくりだすが、由美は余裕でかわす。

「お、おねーちゃん・・・？」

千尋が恐る恐る美春に話かける。が、美春はすでに聞こえていない。今美春が考えていることはただひとつ。誰でもいいから口の中に酒を流し込むことだけである。

「ちーちゃんも飲むのだだだ」

「わっ・・・！危ないよお！？」

美春の攻撃をかわしてなんとか難を逃れる。気付けば美春を中心に皆美春から離れている。美春は完全に孤立した。

「犯人に告ぐ！ただちに武装解除しておとなしくしなさい！！」

由美が叫ぶと、美春は泣きそうな顔で由美達を見る。

「み、みんな・・・またそうやって離れていつちやうんだ・・・」

目には薄ら涙を溜めて、静かに言った。由美も静かに繰り返した。

「武装解除しなさい。あなたは完全に包囲されているわ。今ならまだ間に合うわ、酒を捨てて投降しなさい」

「わかったよお・・・」

美春は静かに日本酒を置いた。それを由美が爆弾でも扱つかのよう
に慎重に手に取る。しかし・・・

「か、空・・・！？」

中身は一滴も無かった。そして・・・

「ゆーちゃん！てや〜！！」

美春が特攻してきた。由美は避けれるハズもなく、美春に抱きつかれる。

「酒臭っ・・・！！」

「でへへ〜 捕まえたあ」

がっちりホルドされた由美がなんとかこの酔っ払いを振り払おうともがくが、酔っ払いは放す気配が全く無い。

「ゆーちゃん、いじめるから淋しかったよお・・・」

美春が泣きながら由美に抱きしめる。泣き上戸らしい。

「美春ちゃん、わ、わかったから・・・ちよつと離して・・・!」

「もう放さないよお」

「みんな助けて・・・!」

由美の叫びの後、皆は美春を引き剥がすべく奮闘するも、結局美春が離れたのは10分後、美春が寝てからだった。

「すぴー」

美春をベッドの上に移動させてからさらに10分後。4人は疲れ切った表情でやつと一息つけた。

「まったく・・・美春ちゃんの酒乱癖には参ったわね・・・」

隣で幸せそうに眠る酔っ払いに由美が困ったような表情を向ける。

「美春さんには、アルコール禁止令を徹底しないとダメですね・・・」

翔子が言うと、皆一斉に頷く。

「でもみんながおねーちゃんをイジメたのもいけなかったんだよ、多分」

千尋が言うと、3人は「ごめんなさい」と千尋に頭を下げた。

「とりあえず疲れちゃったし、もう寝ましよう?」

「でも、せつかくお泊りに来たんですからもうちよつとだけ夜更かししませんか?」

由美の提案に翔子が意見する。確かにせつかくのお泊り会。まだまだ話したいコトはたくさんある。

「バイクの話になると翔子ちゃんと紗耶香ちゃんが暴走するし・・・
そういうえば、みんな学生よね？」

由美がたずねると、皆頷いた。

「私はまだ中学生だけどね」

「千尋ちゃんは何う進路とかは決めたの？」

「まだ少し早いかな・・・でも早い子はもういろいろとやってるみたいだけど・・・」

千尋が言うと、由美は「懐かしいわねえ・・・」と呟く。すると翔子が由美にツッコミを入れる。

「由美さん、私達ももうすぐ受験ですよ・・・？」

「あ・・・そうだったわ・・・」

由美が全く忘れていたと言いながら笑う。

「私は来年ですけど・・・翔子さんは進路どうするんですか？」

紗耶香が翔子にたずねると、翔子は外跳ねの髪の毛を指でイジリながら紗耶香に答えた。

「出来れば専門学校ですね・・・写真などを学びたいので・・・」

しかし、表情は浮かない。困ったように苦笑いしながら続ける。

「義理母さんが認めてくれればいいのですが・・・」

「ああ・・・翔子ちゃんにはそんな障害があつたわね・・・」

由美も少し知っているのでため息する。

「私の進路のコトなんて、あの人にしてみればどうでもいいことなのですが・・・体面を気にしてるので進学なら大学以外はお金を出してくれないでしょう・・・」

力なく笑う。

「あの・・・話がよく見えないんですけど・・・」

紗耶香が言うと、千尋も頷く。翔子は自分の家族について話しはじめた。本当の母は他界していること、父が再婚したこと、義理母と義理兄に好かれていないこと、父は医者で家族とは疎遠になりがちなこと、そして愛車、C B 3 5 0 F o u r は実の母が遺した形見であること。

「由美さん達に出会う前・・・数ヶ月前の私だったら、こんな話を人前ですることはおろか、人の目を見て話すことだって出来なかったでしょう・・・」

翔子が由美と後ろで寝ている美春を見て言う。そしてポケットから親子2代に渡って乗り継いでいる愛車のキーを取り出した。キーは手垢や傷でくすんでいる。

「バイクに乗っていたからこそ・・・私は皆さんとこうしてお話が出来るんです。明るくなれたんです・・・」

そう言って話を締めた。翔子はキーを見つめる。由美達に出会わせてくれたCB350Fourは、時を越えて母が遺してくれた希望なのだ。キーに反射する光に、一瞬笑顔の母を見た気がした。

話終えた翔子が紗耶香と千尋を見ると、2人とも感動していた。紗耶香にいたっては瞼を押さえて涙をこらえていた。

「翔子さん・・・私、翔子さんに会えてよかったです・・・！」
とうとう涙を押さえきれなくなった紗耶香が翔子に抱き付く。

「私もすごく感動しちゃった・・・！翔子ちゃん、ありがとう！」
千尋も笑顔で抱き付く。2人の少女に抱きつかれた翔子はバランスを崩しかけながらもなんとか堪えた。

「そ、そんな大げさですよ・・・！」

翔子が言っつと、後ろから由美がささやいた。

「翔子ちゃんも・・・みんなも、これからよろしくね！」

「由美さん・・・！こちらこそ・・・！！」

翔子も笑顔で言った。

それからしばらくして、4人はさすがに眠くなってきた。が、布団を出そうにも部屋の主である美春がダウンしているため、4人は家

宅捜査の名の下部屋探しを実行。押し入れから布団を見つけて引張りだすと3組しか無かった。

「うーん・・・1つ足りないわね・・・」

由美が困ったなあと思っていると、千尋が笑いながら言う。

「じゃあ私はおねーちゃんと一緒に寝るよ！ベッド広いし、私ベッドで寝たことないんだ」

言いながら、美春のベッドに潜り込む。ベッドは余裕の広さで、千尋と美春を迎えた。

「じゃあこれで無事寝れるわね！」

由美が言うと、皆一斉に布団に潜り込む。

「じゃあ電気消すわよ？おやすみ！」

由美が電気を消して豆球のみにする。そして布団に潜り込んだ瞬間、翔子が布団から立ち上がる。

「あの・・・豆球消しません・・・？明るくて眠れないですよ・・・？」

「ダメよ、私はまっ暗だと眠れないもの」

由美が言うと、紗耶香もむくりと布団から出て抗議する。

「私も豆球は消したほうがいいと・・・」

「紗耶香ちゃんも・・・？千尋ちゃんは？」

「どっちでも・・・眠い・・・お酒臭い・・・」

由美の問いに、早速寝ぼけ気味の返答が帰ってくる。

「2対1対1・・・多数決で豆球は消しますよ？」

「意義無しです」

由美と紗耶香が言うと、由美は不満そうな顔で2人を見つめるが、了承した。

「それでは・・・皆さんおやすみなさい・・・」

翔子が電気を消す。瞬間、部屋は真っ暗になった。

「く、暗い・・・」

慣れない暗闇の中、由美が呟くと、隣からクスクスと笑い声が聞こえる。

「ちよつと2人共・・・！なに笑ってるのよ・・・！？」

由美がたずねると、翔子が暗闇で表情が見えない中、顔をこちらに向けて言う。

「由美さん、暗いの苦手なんですね・・・」

声からして、翔子は笑っているのだろうと思い、カチンと来た由美が反論しようとした瞬間、紗耶香がケータイの画面の明かりで顔だけ映して由美に向ける。

「キヤアアアア！！！！！」

由美がびっくりして布団から飛び上がる。そんな由美の反応を見て2人が笑う。それを見て由美は怒りが込み上げてきた。

「ちよつと2人共！！いい加減にしなさい！！」

すると紗耶香がケータイのライトで由美を照らす。

「由美さん、あの壁見てください」

紗耶香が照らした壁に目をやると、そこには・・・

「い、犬神家え・・・！？」

壁に足が2本、がに股で立て掛けられていた。

「い、い、嫌ああああ！！キヨスケええ！！」

悲鳴を上げながら布団に潜り込む由美を、紗耶香とキヨスケに扮していた翔子が笑いながら見ていると、ベッドから千尋が這い出てきた。

「3人共！！うるさい！！寝れない！！静かにしろーっ！！！！！」

まだ幼い顔立ちの千尋が、旭に負けるとも劣らない顔で怒鳴ると、3人は恐怖に土下座した。血はつながっていないなくてもさすが兄妹。眠い時の機嫌悪さは同じらしい。

結局、豆球は消すが静かにすること、と千尋が条約を結ばせて解決した。

すると、千尋はすぐに寝てしまった。中学生には夜更かしが過ぎたか。

さらにしばらくは起きていたが、翔子と紗耶香の布団からも寝息が

聞こえてきた。由美は暗闇に慣れた目であたりを見回す。

ベッドでは美春が千尋に抱きつきながら寝言で「あつくくん……
」とか言っている。千尋も寝言で「酒臭あい……うん……」
とうなされている。反対側を見れば、翔子と紗耶香が互いに手を握
りながら眠っていた。

「翔子ちゃんが言ったからってワケじゃないけど……本当に、み
んなのバイクが、私達を出会わせてくれたのかも……」

思えば皆、バイク絡みで出会い、成長してきた。美春もそうだし、
翔子も千尋もそうだ。自分だって、ゼファーに乗っていなかったら
この場にはいなかっただろうし、皆とは他人のまま一生を過ごして
いただろう。由美は皆の愛車を思い浮かべながら目をつむる。1台
1台、皆の愛車を思い浮べては心の中で感謝した。そして、自分と
ゼファーを結んでくれた圭太のFXを思い浮かべた。

「圭太……FX……ありがとだね……」

小さく呟いて、そしてこれからも出会うであろうまだ見ぬバイク乗
り達を想像しながら……由美も深い眠りに落ちた。

外はもうすぐ日の出だ。紫色に染まった空の下にある彼女達のバイ
クの真上を流れ星が飛んだ。バイク達はそれを何事も無くただただ
見つめていた。

第28章 楽しいお泊まり会！（後書き）

真田美春の！オールナイトニッポン！！

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。

美春「こんばんわ！今日も始まりました真田美春のオールナイトニッポン！みんなのお姉さん美春だよー！！」

作者「……………」

美春「あ……作者君は今ちよつと口をきけない状況でして……前回のあつくんの攻撃で包帯ぐるぐるの松葉杖の状況でして……なので今回は1人で出来るもん！」

作者「……………」

美春「そんなわけでいってみよー 今日私のイメージソング！作者君が残してくれたメモを見ながらの紹介です！」

タイトル 半拍ずれてるお前に夢中

唄 横浜銀蠅

美春「『そうさ完全半拍ずれてるウー』 いいねえ、お母さんがよく聞いてたから歌えちゃうよお 歌詞が可愛いよねえ」

作者「……………」

美春「なになに……歌詞は違えど、この人は半拍ずれてるし、旭のイメージもあるからこんな感じかと……なるほど、ひどいな作者君。私ズレてなんかないよう？」

作者「さらさら……」

美春「おおっ、残った左手で何やら書き始めたよ……？なになに、

『申し訳ございませんでした、訂正しますのでどうか旭さんには言わないでくださいお願いします』……」

作者「……」ガタガタいつてる

美春「そんなに怖がらなくても……言わないから安心してね？さて、作者君が泣きだしたので今日はこのあたりで！お便りヨロシクねえ バイバーイ！！」

と、言うわけで、今回も「旧車物語」をご愛読くださって誠にありがとうございます。

おそらく年内の更新は厳しいと思われ、次回は年明けになってしまいう可能性が高いです。

なので今のうちに挨拶しておきます！来年も旧車物語をよろしくお願いたします。それでは、良いお年を！！

第29章 ガス代を稼げ！

「いらつしゃいませー！2名様ですか？おタバコは・・・？それではあちらの席へどうぞ」

男女のカップルを喫煙席に案内して、由美がため息する。

「はぁ・・・こんな時期になにやってるのかしら、私・・・」

はぁ、とまたため息。先ほどの客にお冷やを出して注文を受け取る。そしてお決まりの挨拶と笑顔で厨房にオーダーを通す。

「こんなウエイトレスみたいな格好、二度とすること無いと思ってたのになぁ・・・はぁ」

ウエイトレスとメイドの間みたいな少し派手な制服を見てまたため息。しかしすぐに気を引き締めると、男性客が帰りの支度をしている。レジに立ち、呟く。

「これも愛するゼファーちゃんの為・・・やるっきゃ無いわー！」

由美が働いているのは、去年まで働いていた親戚の喫茶店だった。なぜこんな所でバイトしているのか。それは昨日にさかのぼる・・・

「ガスが無い・・・!?!」

お泊り会から3日。学校が終わり、今日は学校の友達の家に遊び

に行くと言つときによ美は悲鳴を上げた。

「そ、そんな……！ツーリングの帰りに給油してまだ1週間と経つてないのに……！」

言いながら、スターターを連打するが、無駄にセルが鳴るだけで無情にもエンジンはかからない。タンクの中には雀の涙ほどのガスすら入っていない。

「まてまてまて……落ち着くのよ由美……！確か……」

お泊り会の帰りに、翔子を高尾まで送りに行った帰り、かなりのスピードを出した気がする。

一昨日は近所のコンビニまで。昨日は少し遠出して隣町まで買い物にいった。そこで好きなブランドのTシャツを2枚買った。テンションが上がってかなり吹かしたり回したり遠回りで帰った気がする……

「ちよつと調子に乗りすぎたかしら……」

またガソリンを入れなければならない現実に、由美は自分の財政のコトを思い出す。

「横浜とか峠にツーリングに行ったから、今月はもうピンチなのに……」

気付けば5月ももう終わり、月末まで後少しだ。由美は母から毎月5000円のお小遣いを貰っている。それに自分の貯めていた貯金を切り崩しながら日々生活していたが、バイクを購入し大幅に減った貯金はすぐに無くなってしまうので、なんとかあまり手を付けずに小遣いだけでやりくりしていたのだが、バイクに乗って2回も中距離ツーリングに行ったり、それでなくても普段乗り回す由美に普段の生活費込み5000円程度の小遣いでは雀の涙。貯金はさらに少なくなり、小遣いは潰えた。そして、由美は財布の中身を確認して愕然とした。

「お、お札様が……1枚も無いですつて!？」

札入れにあるべき札は無く、小銭入れに銅色の硬貨と銀色のギザギザ硬貨が3枚しか無かった。

「こ、これじゃあいくらも走れないじゃない……！」

昨日買ったTシャツ2枚を本気で恨む。

「なんてこと……これじゃあお小遣いの日までゼファーちゃんに
乗れないじゃない……！」

シートを叩きながら叫ぶ。いつそ、どこかの幼なじみにして想いを
寄せる彼にお金を借りようかとも思ったが、負けず嫌いの由美は
すぐにその考えを捨て、握り拳を作って空を見上げる。

「私は甘えていたわ……ゼファーちゃんを維持するにはお金が
かかる……そんなことも忘れて遊び惚けていたのよ……！」

そして、ラオウが如く拳を天高く突き上げた。

「お金を稼いで、ゼファーちゃんのガス代を稼ぐわよ……！」

こうして、由美は早速友達に連絡をつけて遊べなくなったことを
詫びて、一応母にねだってみて玉砕してから、親戚に電話した。

「ありがとうございます……！」

帰っていくサラリーマンのくたびれた背中を見送り、ため息した。

「由美ちゃん、頑張ってるかね？」

後ろから、店主にして親戚のおじさんがニコニコしながらたずね
る。

「はい！それはもう、ゼファーちゃんの為なら……！」

「そうかそうか！素直だねえ由美ちゃん。心配しなくても、今日
ちゃんと働いてくれたら日当は出すよ」

おじさんが笑いながら言うと、由美も笑顔で「ありがとうございます

ん！！」と言った。

この喫茶店、「Yesterday」は由美の母の弟が営業している。住宅街の中にあり、店内はジャズが似合うようなシックな作りで、ジュークボックスが今でも稼働しているレトロ感が好評。その為午後になると近所の主婦や近くの大学生がよく利用しにやってくる。今日は客はまだ少ない方だ。

「じゃあ、今日は頑張ってたね？」

おじさんは言いながら店の奥へと消えた。

「まだ5時半・・・あと4時間半かぁ・・・というか、この時間だともしかしたら学校の友達とかが偶然遊びに来るかも・・・こんな格好、死んでも見られたく無いわ・・・」

ヒラヒラのスカートを摘んで1人呟いた。

学校上がりで直接来たので、まだ仕事を始めて30分しか経っていない。混む時間は終わっていて、これから閉店22時までかなり時間を持て余す。まあ、客が来ない間はテーブルの掃除をしたり床を拭いたりとやることはあるが、忙しくは無い。そのせいで集中力がキレて時間が進むのが遅く感じてしまうのだ。

「ま、とりあえず頑張りましょう！待っててねゼファーちゃん！」

1人気合いを入れて『さあやるぞ！』と言う時に、外から聞き覚えのあるエキゾーストノートが近づいてきた。

カアアアアア！！バリバリバリバリ・・・！！バン！！！！

「このカミナリみたいなバリバリ音・・・まさか・・・」

恐る恐る窓から店外の駐車場を見ると、そこには見覚えのありすぎる真っ赤なバイクが白煙を辺りに撒き散らして停車していた。

「な、なんでよりによつてこんなトコに来るのよ……!？」
やがて乗っていた2人の男女が店内入り口に向かって歩いて行ったのを見て、由美は何故か隅に隠れた。

カランカラン……

入り口の鈴が来客を知らせる。入って来た2人の客は入り口で店員を呼んだ。

「おい、2人なんだけど？あれ、店員さん？」

男性客が言う。壁に隠れているつもりなのだろうか、店員がしゃがみ込んでいる。が、文字どおり頭隠して尻隠さず。バレバレだ。

「あんなにやっつてんよ？早く案内してくれ」

男性が若干イラつきながら言うと、その後ろからひよこりと顔を出した女性が声を上げる。

「あれれ？あつくん、あれゆーちゃん……？」

「はあ？なんで由美ちゃん？違あーべえ」

「んー？あのお尻の形はゆーちゃんだと思っただけどなあ……」

「オメーてやっぱバカだろ……つかなんで由美ちゃんの尻の形なんざ覚えてやがんだてめえは。しかもあれスカートはいてるのによくわかんない……」

「いやあ、ゆーちゃんのお尻は小ぶりで可愛いんだよお お泊り会の時も思わずスリスリしちゃった」

そんな2人の客の会話を聞いていた由美は、とうとう我慢出来なくなつて立ち上がり叫んだ。

「なに私のお尻にスリスリしてんのよ!!!」

「ほら、やっぱゆーちゃんだよ」

由美がスカートごとお尻に手を当てて叫ぶと、ニコニコ笑いながら女性……真田美春が得意顔で言った。

「マジかよ……つかなんで由美ちゃんがんなトコで……？」

驚き顔で男性・・・霧島旭がたずねるが、由美はそれには構わず美春に詰め寄った。

「美春ちゃん・・・！なにスリスリって！どういうこと!?!?」
かなり恐ろしい形相で詰め寄るが、美春はニコニコしながら言った。

「んー？お泊り会の時、朝起きたらみんなまだ寝てたからみんなの可愛い寝顔を観察してたんだけど・・・そしたらうつ伏せで寝てたゆーちゃんはお尻が可愛いかったからほっぺたでお尻スリスリしちゃったのだ」

しちゃったのだとかほざきながら笑う変態を前に、由美は自分の血管がキれる音を確かに聞いた。が、キれるワケにはいかない・・・全てはゼファーちゃんのため・・・!!

「ま、まあいいわ・・・その件については後日問い質すとして・・・旭さん達は喫煙席よね？」

由美がたずねると、旭はうなずいた。

「店員さん、よろしくな？」

旭もニヤニヤ笑いながら言うと、恥ずかしがりながらも由美は2人を案内した。

2人のオーダーはアメリカンコーヒーとウインナーコーヒー、それとホットケーキが2つだった。奥の席に陣取る2人を店の入り口にあるレジで見つめていると、先ほどのやりとりを見ていたおじさんが由美に話し掛けてきた。

「由美ちゃん、あそこの2名様はお友達かな？」

「あ、はい」

2人が旭達を見ていると、なにやら静かな店内で旭の大きな声が

所々聞き取れた。

「んでよお・・・っわけでき・・・クシヤクシヤにしてやったワケよ・・・血だらけでよお、笑っちゃうべえ・・・」

所々しか聞き取れなかったが、間違い無くいい話ではないだろう。美春はニコニコしているが・・・

「彼らはその・・・暴走族かなにかかな・・・?」

おじさんが問うと、由美は苦笑いして否定する。

「優しいお兄さんと、ちよつと変態だけど可愛いお姉さんよ」

由美が言うと、おじさんはふむ、とうなずいた。しばらく2人の会話を聞いていると、今度は美春の声が所々聞こえてきた。

「でねえ・・・ゆーちゃんはあ・・・で、しーちゃんは・・・が綺麗でえ・・・ちーちゃんはマニア向けだねえ」

所々しか聞き取れなかったが、ろくな話ではないだろう。

「訂正するわおじさん・・・怖いお兄さんとただの変態だったわ」

「そのようだ・・・」

2人はとりあえず仕事に戻った。

「お待たせいたしました」

旭達のテーブルにカップを2つとホットケーキを2枚置いて、伝票を下に向けて置いた。

「ありがとゆーちゃん」

美春が笑顔で言う。

「ところで・・・なんでんなトコで働いてんよ?」

旭がアメリカンコーヒーにミルクと砂糖を入れながらたずねる。どうやら甘党らしい。

「親戚のおじさんのお店なのよ。で、ゼファーちゃんのガソリン代

を稼ぐために期間限定で働かせてもらってるの」

由美が言うと、旭はニヤリと笑った。

「由美ちゃん、なにげ回す乗り方すつからなあ？エンジンにも財布にも悪いからやめときな？」

「お互い様ですよ」

由美が小さく舌を出す。

すると旭が急にソワソワしながら由美にたずねた。

「んなコトよか由美ちゃん・・・あのジュークボックスって動くんか？」

旭が指差す先に、古いジュークボックスが鎮座している。ジュークボックスとは、中にレコードが何枚も入っただけでお金を入れて好きなレコードを選ぶとそのレコードを流してくれるのだ。

「ああ、あれは1000円で確か4曲くらい聴けた気がするわ・・・多分まだ動くと思うけど・・・」

由美が去年働いていた時のコトを思い出す。おじいさん2人が懐かしいと言いながらお金を入れて音楽を聴いていたと思う。

「マジか！？おっしゃあ！オレイツペンで良いからジュークボックスで音楽掛けてみたかったんよ・・・！！」

言いながら立ち上がり、ジュークボックスの前に立つ。1000円を投入して曲目を見ながら選択すると、軽快な音楽が流れだす。

「おお！きたきた！！ビートルズの『ロールオーバー・ベーターベーン』！！」

ピアノとバンドミュージックが続いてヴォーカルが入る。

「コレコレ！最っ高！！」

言いながら、旭が踊りだした。片側の足と上半身を反対に捻りステップを踏む。

「なにこれ・・・」

いつになくハイテンションで踊りだす旭を見て由美が美春に問う。

「ツイストダンスだよ？こーゆるロックンロールに合わせて踊るん

だよ。私も踊ろ」

言いながら、美春も席を立つと旭の側で踊りだした。周囲の他のお客さんもなんだなんだと目線を送る。

「イヤッホーウー!!」

旭が叫びながら踊っていると、おじさんも何事かと見に来た。

「あ、おじさん・・・!」

「なかなか懐かしいもんだねえツイストなんて・・・」

おじさんが感心しながら見ている。

「いいんですか、踊らせちゃって・・・?」

「いいんじゃないかい? 他のお客さんもまんざらでもなさそうだし、見れば他のお客さんも手拍子を送ったりしている。旭が踊りながらクシでリーゼントを流すとおばさん客2人が盛り上がった。

2人はそんな旭達を眺めていると、やがて曲が終わり拍手が起きる。次の曲を旭が選んでいるときに由美達の後ろ、すなわち入り口から男の声が響いた。

「んなトコでなに踊ってんだよ旭あ」

由美達が驚いて振り向くと、そこには洋介が立っていた。

「あ・・・? なんだ、洋介か」

旭が曲選びに夢中になりながら適当に挨拶すると、洋介は由美には気付かず笑いながら続けた。

「偶然通りかかったら、どっかでみたよーな単車があったからさ、店内見てみたらリーゼントが踊ってんの、笑っちゃったよ」

へへへ、と笑いながら言う。店内のポリウムが大きすぎて洋介のフォアの音に気付けなかったらしい。GT380の隣に真っ赤なCB400Fourが停まっている。

「で、オメエはなにきたんよ洋介?」

「いやあよ、オレのフォアのエンジン、今の状態で走るの今日で最後だからさあ」

それを聞いて、旭はジュークボックスをいじる手を止めた。

「なるほどお・・・? なんだ?」

旭がたずねると、洋介は不敵に笑った。

「オレのフォアが君たちとは比べものにならない別次元への究極進化を遂げる前に、一度お前と白黒はつきりつけようと思ってな……？」

それを聞いた旭はジュークボックスのボタンを軽く押した後、怒りすぎて逆に笑顔になった恐ろしい顔で振り向いた。

「なるほどお……ついにかあ……？」

「ひとつ走り、どうよ？」

洋介の問いに、旭は当たり前前というように答えた。

「じゃあ今から早速ヤルかよお？フォアなんかに負ける気しねーけどなあ……？」

「今まではいい勝負してやってたけどよ……？それも今日までだ！」

2人は睨み合いながら店外に出ていった。そして自分達の愛車に火を入れると、爆音を辺りに轟かせながら走り去っていった。

「み、美春ちゃん……？」

残された美春に由美がたずねると、美春なニコニコ笑いながら「ヒーを飲んでから言った。」

「あつくん嬉しそう」

「い、いや……あれキレてたじゃない？何するの？」

「仲良く走るだけだよお？」

美春が笑いながら言った後、「ちゃんと迎えに来てねえ」と消えていった道に呟く。店内はジュークボックスから流れる『監獄口ツク』のみが支配していた。

しばらく由美は自分のすべき仕事をキッチンとこなし、美春もウオ

「クマンで音楽を聴きながらマンガを読んで時間を潰していた。しかし、外からまた聞き覚えのある別のサウンドが響いてきた。

ブワッパアアアア！！カンカンカンカン……！！！！
パインパイン！！パンパンパン……！！

「このくぐもった爆音と軽い音もどこかで……」

由美は嫌な予感に襲われた。

「まさかね……まさか、そんな偶然はあり得ないわよ……」

由美は呟く。しかし窓を見ないあたりもう諦めているのか。

カランカラン……

「あ！見るよ本当にいたぜ紗耶香！」

「あ、こんばんわ……」

「だあああから！！なんであなた達まで来るのよ！！」

今しがた入り口から入ってきた凜と紗耶香に、由美がキレた。ズカズカと歩いていき抗議する。それにたいして凜はいつもの偉そうな態度で口を開いた。

「いやな？姉貴達と流してたら、リーゼント達と遭遇してさ、3人でレースするコトになったから2人はこの喫茶店に行けって言われてよ。オレもやりたかったんだが、姉貴の顔が怖くてさ……イジメられたくないし、お前がここで働いてんの見て笑うのもアリかなってな！」

がはははは！とポニーテールを揺らして豪快に笑う凜。それを見て由美は頭を押さえた。悪い夢なのかと疑いたくなる。

「由美さんの着てる制服、可愛いですね？」

一方、紗耶香は紗耶香で笑いながら由美の着ている制服を見て言

う。同じ双子なのに、紗耶香の瞳にはからかひや嘘偽りと言った邪念が無いのだから不思議だ。

「由美ちゃん・・・？彼女達もお友達かい・・・？」

今にも発狂しそうな由美を見かねて、おじさんが声を掛ける。

「おうよ！オレは由美の大親友、赤城凜様だ！」

はっはっは！と笑いながら勝手に自己紹介する。

「あー、とりあえずあそこで自分の世界に入ってマンガ読んでる奴の席でいいや」

言って紗耶香の腕を引っ掴んでズカズカと美春の席に歩いていく。

「由美ちゃん・・・」

「おじさん言わないで・・・うるさくしないようには言っておくわ・・・」

こめかみを押さえて精神を落ち着かせる由美の肩を、おじさんはやさしく叩くことしか出来なかった・・・

「お冷やどうぞ。ご注文はお決まりですか？」

由美が美春達の席に行くと、美春と双子の姉妹は楽しそうに話していた。

「あ、由美ちゃん見てえ！リンリンとサヤリンが来たんだよあ！！」

「とつくに知ってるわよ・・・」

由美が呆れながら言う。もはや彼女達には普段の接客は必要無いのではと思い始めていたが、他の客の眼もあるのほどほどにする。

「あ、由美！あれやってくれよあれ！！」

「あれってなによ？」

「はしゃぐ凜に由美が問うと、凜は笑いながら言った。

「お帰りなさいませご主人様 とかさ・・・ぎゃははははは！！」
完全にバカにしている。

「あ、いいねえゆうちゃん やってやってえ」

美春もニコニコしながら由美に言う。

「それでは、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください。無いなら帰ってください」

由美は華麗にスルーした。後ろからブーイングが聞こえるが、それも無視。由美はまた自分の仕事に精を出すことに集中した。

少しの間仕事に専念していると、おじさんに呼ばれた。

「由美ちゃん、休憩行って来なさい。15分ね」

「ありがとう！」

由美が言つと、おじさんは笑いながら由美にもう一言言った。

「なんなら、あそこにいるお友達と一緒に席で休憩してもいいよ？」

おじさんが美春達の席を指差す。が、由美はそれを見て断った。

「大丈夫よおじさん、あんなのいたら休憩で疲れちゃうわよ」

「そうかい？じゃあコーヒーでも飲んで休んでいなさい」

「え、いいの？」

由美がたずねると、おじさんは笑いながら厨房に入っていく。

「今入れてあげるから、裏で待ってなさい」

「ありがとう！」

由美はおじさんにお礼を言ってから、厨房裏にある事務室のような場所で休憩を取ることにした。

それから15分後、由美は仕事に戻った。時計を確認すると、時間は20時を指していた。

「あと2時間・・・頑張るわよ私！」

今まで旭や美春や凜達に邪魔をされて少し忘れていたが、これもゼファーちゃんの為・・・由美はそう思い直してまた仕事を始めた。すると・・・

「おい店員さん！！」

その声に一気にテンションが下がる。振り返ると、奥のテーブル席から凜が呼んでいた。

「ご注文は決まりましたか？」

由美がたずねると、凜がオーダーを伝える。

「カプチーノとアメリカン。それから・・・この日替わりケーキ
つ」

「3つ？」

「ああ、美春にも奢ってやるからさ。紗耶香が世話になった礼にな

凜が言うと、美春はパアツと笑顔になった。

「リンリン優しいねえ」

「抱きつくな・・・！まあ、それだけだ」

凜が照れながら美春を引き剥がすのを見て、由美はフツと笑った。

「案外優しい所もあるじゃない？」

「き、今日だけ特別だ……！二度と無いからな……！？」

照れながら言う凜に、由美は好印象を抱いて、オーダーを厨房に通す為には踵を返す。

（ただ邪魔しに来たのかと思ったら……美春ちゃんにお礼するためだったのね……可愛い所あるじゃない）

由美が1人考えに耽っていると、後ろから凜達の声が聞こえた。

「あれ……？つてもしかして……」

「けーちゃんかなあ？」

「おお間違いなえ、圭太だ！」

「嘘っ！圭太が……！？」

由美が慌てて彼女達の席に振り返って窓際に走る。暗くなった外を目を凝らして探るが、圭太は愚か人つ子1人いない。

「あれ？どこ……？」

由美が外から視線を隣の美春達の席に向けると、美春と凜がテーブルに突っ伏して笑っていた。

「くくくく……！！た、単純すぎる……！！くふふふ……！！」

「ゆーちゃん可愛い……ぷぷぷぷ……！」

もはや言うまでも無いが、2人は由美をからかっただけである。必死で窓の外を探す由美を見て笑っていた。

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「あー可笑しかったあ ゆーちゃんナイスだったよあ」

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「まさかあんな簡単に引つ掛かるなんてさ……！ひひひ……！」

「わーい、ケーキだケーキだー」

「わーい、おいしそうだなー」

「あうあう・・・」

テーブルに座る2人の反応と、頭に来た特大たんこぶを見て紗耶香がオロオロしている。

由美は真つ赤になった拳をさすりながらお盆を脇に抱えてテーブルを後にした。

「うう・・・ちよつとからかっただけなのに・・・」

美春がたんこぶを擦りながら呟く。

「由美を怒らせるのもほどほどにしないとな・・・」

凜も目に涙を溜めて誓った。そして2人はモンブランを口に運ぶと・・・

「か、辛ひいひいひいひい！！！！」

「み、水水水うううう！！！！」

叫びながらコーヒーを一気に口に運び・・・

「あつちいいいい！！！！」

「冷たいお水ちよーだい・・・！！！！」

美春が叫ぶ。紗耶香が2つのコップに急いでお冷やを注ぐと、2人は一気に飲み干す。

「あ、熱辛かったよお・・・」

「はあはあ・・・！おい由美！！ケーキに何入れやがった！？」

凜が向こうで作業している由美に怒鳴ると、由美はこちらに歩いて来た。

「なにか用ですかお客様？」

けるつとした態度で立っている由美に凜が怒鳴る。

「お前、ケーキになにしゃがった！？」

「お客様、私はケーキになにもしていません。それから他のお客様の迷惑になりますのでお静かに願います」

仕事顔で接する由美に凜が怖じけつく。目がマジだ。

「あ・・・それから」

由美がポンと手を叩いていつもの笑顔で凜の耳元でささやく。

「もしこれ以上邪魔するなら、真子さんに言っただけからあなたの躰を厳しくしてもらうかも・・・なんでもあの人・・・究極のどSらしいじゃない？鞭とか縄とかローソクとか・・・大変なコトになるかも知れないわねえ？」

それを聞いた凜は、その事を想像してカチンコチンに固まった。

「あと美春ちゃんもちよつと・・・」

美春の耳元でも、同じようにささやく。

「この前美春ちゃん、旭さん家で朝から内緒でお酒飲んで、遊びに来た私のこと襲ったのよねえ・・・あの後お酒処分したのは私なのよ・・・？それと、こないだのお泊まり会でもお酒飲んだわよね？禁酒令が出るのに、旭さんに報告したらどーなるかしらねえ・・・？」

由美の言葉を理解した瞬間、美春は泣きそうな顔で固まった。由美はニッコリ笑って2人の肩をぽんぽんと叩いた。

「まあ、そういうことだから！わかったわね？」

「は、はい・・・」

2人はかなり小さくなつて由美に頭を下げ、絶対服従するしかなかった。

「それではごゆっくり・・・あ、紗耶香ちゃんのモンブランは甘くて美味しいわよ？このお店の自慢なんだから！」

由美がいつもの笑顔で言っただけから立ち去った。紗耶香は姉と美春とモンブランを交互に見つめて口を開いた。

「わ、私のケーキ等分して分けて食べよう？ね？」

「私は大丈夫だよ・・・気にしないで・・・？」

「オレもいい・・・今のオレには甘すぎる・・・」

すっかり怯えてしまった2人を見て、紗耶香はあたふたすることしか出来なかった。

それから30分後、外から近所迷惑な爆音を轟かせて3台のバイクが駐車場に滑り込んできた。そしてしばらく経つと3人の客が店内に入ってきた。

「バツカオメえ、オレンサンパチがイットーだつてのー!!」

「ヨンフォアだつて・・・」

「ま、誰が来たつて直線ならマツハが1番よ」

「いらっしやいませ、どうだったの？」

由美がたずねると、旭がため息して答える。

「いやあ、街道爆走してたらオマワリ来ちゃつてよお・・・バツクしたから勝負つかずだ」

信号守つてんのによ、とぼやく。

「危ないからやめてくださいよ？なにかあつたら美春ちゃんだつて心配するんだから」

由美が言つと旭は申し訳なさそうに頷く。

「由美ちゃん、うちの妹達がお世話になつてるわね」
後ろで真子が手を振る。

「ホントに、同じ双子であも違つんだから、驚いちゃったわ」

「全くね・・・」

2人が苦笑いしていると、奥の席から声が上がった。

「あつくーん、おかえりい」

「姉貴い、早く来いよ!!」

「あそこのとなりの席についてね。すぐお冷や持つていくから!」
由美が言つと、3人は笑いながら席に歩いていった。

それからしばらくして席を見ると、相変わらず奥の客席は賑やかだった。

「だから言ってるじゃんか、ビーエックスなんざすぐにブーム終わるぜ？」

「いやあ、わかんねえぜ？2型なんか軽く200万いく時あるし・・・」

旭と洋介が話していると、真子と紗耶香も会話に参加する。

「確かにCBXは人気が高くなったが・・・他のホークやヨンフォアなどは徐々に下がって来ているみたいだな・・・」

「意外と昔数が出回ってたみたいですし、輸出もされてましたからね・・・逆にマツハやKH、RZの250にも最近は高額な値段がつくことも増えましたよね・・・」

「ああ、でもそれをさらに逆手に取っちゃえば、一般の奴や若い奴らもヨンフォアやホークが乗りやすくなるっつーこつたな」

「盗難が多いのが難点だけさ・・・」

旭と洋介が悩む。価値ある旧車は常に窃盗団との睨み合いだ。

「他の人達が安全に乗れるような社会になればいいんですけどね・・・」

「紗耶香がミルクたっぷりのコーヒーを飲みながら言う。」

「族が狙ってくるのはもちろん、最近是一般人を名乗る旧車會の人間もそのマナーが問われているみたいだから・・・」

真子が言うつと紗耶香も気弱に頷く。

「ウチん地元あ現役のガキはオレらが押さえてんから、現役の盗難事件は少ないけど、顔も知らねえよーな旧車會の先輩らには口出し出来ねえかなあ・・・」

「ま、それでもウチん地元の旧車會は大丈夫だろう。今ん所、そういう話聞かないだろ？」

洋介が言くと、旭も「まあな」と頷く。

「もつというんな人に、旧車の楽しさを知って欲しいですね・・・そのために出来ることがあれば・・・」

「新車が売れない時代だし、1番元気があつた、熱かつた時代の日本のバイクに乗ってみたら何かが変わるかも知れないしね」

紗耶香と真子が言くと、旭と洋介もコーヒーを飲みながら考える。

「どうやらかなりマジメな話のようだ。一方・・・」

「うう・・・赤僕は何度読んでも泣ける話だよ・・・」

「ああ・・・この兄弟愛は、今の時代の子供達にも読み継がせたい素晴らしい作品だぜ・・・」

持参したマンガを美春と凜が泣きながら読んでいた。

そんなこんなで時間は過ぎて、時刻は閉店10分前の21時50分。

「いやあ、由美ちゃん今日はサンキューな」

「ゆーちゃんまたねえ」

店先で旭と美春が挨拶すると、洋介も手を振った。

「気を付けて帰ってね！また近い日に遊びましょう！？」

由美が言くと、旭達はエンジンを掛けて手を振って去っていった。

「じゃあ、私達も行くわね。次はあなたともゆっくり話したいわ」

「由美、長い間邪魔したな！また来るぜ！」

「次は静かにしなきゃダメだよお？」

赤城姉妹と由美は1人1人握手すると、3人もまた白煙をなびかせて帰路についた。

「ふう・・・疲れたあ」

皆が去った場で一息ついていると、中からおじさんが出てきた。

「お疲れ由美ちゃん、今日は頑張ったね」

言いながら茶封筒を由美に渡した。

「頑張ったご褒美に少しだけ色つけといたから」

「ありがとうございます！」

由美は茶封筒を受け取っておじさんにお礼を言った。

「じゃあまた困ったら相談に来なさい、今日は気を付けて帰ってね」

「うん！」

言って、2人は店内に消えていった。

「よし、それじゃあ帰りますか」

由美は自転車に跨がって1人呟く。今度は自分も今日のようにみんなと話してみたいと考えながらペダルを漕ぐ足に力を入れて踏み込もうとしたその時、遠くから聞き覚えのある・・・いや、1番好きな音が聞こえてきた。そしてだんだん近づいてくる。

フアアアアアア・・・！ヒュルヒュルヒュル・・・！！！！

そして由美の目の前に、ブルーで美しいラインを持つバイクが止まった。

「あれ・・・？自転車だったの・・・？」

「どうしてここに？」

由美が笑顔でたずねると、バイクの上でヘルメットを脱いだ少年が困ったような顔で答えた。

「旭さんと美春さんから電話が掛かってきて、由美が今日帰り遅いし歩きだから迎えに行けって・・・」

第29章 ガス代を稼げ！！（後書き）

と、いうわけでして・・・今日はラジオの放送はお休みします。

前回投稿した時、『今回が最後の投稿になってしまふ可能性が高い・
・』などと言ってしまいましたが、結果はご覧のとおりでして・

・汗

実はわたくし、風邪を引いてしましまして、お仕事がお休みになっ
てしまったんですね・・・

それでおとなしく寝ていたのですが、ふと気づけばもう次話が出来
上がっていました・・・

なので、訂正します！今日こそ最後の更新です！前フリとかでは御
座いません！今回が今年最後の更新となります！！今回は温かい感
じのお話を書きました！いかがだったでしょうか！

それでは、皆さんからのご意見ご感想沢山お待ちしております！！来
年も『旧車物語』を宜しくお願い致します！！それでは良いお年を
！！

3気筒

第30章 KAWASAKI Old Bike Meeting(前書き)

新年あけましておめでとございます！

遅れてしまいましたが今年も宜しく願います！

第30章 KAWASAKI Old Bike Meeting

アルバイト翌日の金曜日。

由美と圭太は学校から帰宅路を歩きながら話していた。

「それでさあ、私言っちゃったのよ・・・」『好きで寝てるわけじゃありません！睡魔が奇襲攻撃してくるんです！』って！」

由美が笑顔で言うと、圭太は「はあ」とため息。

「そんなこと言うから、そんなに課題もらっちゃうんだよ」

パンパンに膨れた由美のカバンを指差して言うと、由美はぷーっ、と膨れながらカバンを蹴った。

「全く・・・日本史なんて無くなってしまえば良いのよ！」

そのままなんの罪も無いカバンをリフティングしながら抗議する。日本史と、日本史の担当ハゲ川に対する負の意識は高まるばかりらしい。

「別に刀狩とか知らなくても生きていけるわよね!？」

ちなみにスズキのGSX750Sカタナが発売された当時に流行ったセパハン改造を警察が取り締まった、俗にいう『カタナ狩り』では無い方の刀狩である。念のため。

「あーあ、圭太はいいわよ。頭も良いし寝ないし課題も出されないし・・・」

「別に、そんな・・・」

「よし!こんな時はゼファーちゃんに乗ってイヤなコトは忘れるに限るわ!!明日は土曜日!圭太、ツーリング行きましょう!？」

由美がニツコリ笑いながら言うと、圭太は「ああ、また来週課題やってこないな・・・」とツツコミを入れたかったがなんとか堪えて答える。

「僕はいいんだけど・・・旭さんと美春さんは明日用事あるって、この前言ったよ」

「嘘っ!?!なんてこと・・・やられたわ・・・!」

由美が何やら悔しがる。圭太にはわからないが、明日2人の用事とはおそらく、誰にも邪魔されずにデートをする為の偽装であろうことは予想がつく。『ゆーちゃんもがんがれえ』とか言ってる美春の顔が容易に浮かぶ。

「じゃあ対抗して、私達も明日は2人きりで……!!」

ピリリリリリ!ピリリリリリ!

由美が握り拳を作って宣誓するように叫んでいる途中、圭太のケータイの電子音が響き渡った。由美が「もう少しだったのに……誰よこんな時に……!」と舌打ちするが、それには気付かず圭太が電話に出た。

「はいもしもし……あ、真子さん、どうしたんです……ってうわあ!!」

圭太が真子の名前を出した瞬間、由美が圭太からケータイを奪い取った。

「もしもし真子さん?電話代わって由美ですけどなんの用ですか?」

由美が言うと、受話器の向こうで真子が笑った。

『あら由美ちゃん?相変わらず独占欲が強いわね?』

「な……!!?そんなこと無いわよ!!」

真子の軽い挑発を由美が否定すると真子はふふっ、と笑った。

「まあそんな話はさておき……いつたいたいの用!??」

『実は明日、あなたと圭太君を誘おうと思ってるね?大黒のパーキングでカワサキ旧車のミーティングがあるの』

真子の言葉に由美と受話器に近づいていた圭太は目を丸くさせる。

「ミーティングって会議……?そんな教養は持ち合わせて無いわよ??」

由美が聞くと真子は笑いながら答えた。

『ふふっ・・・そんなに畏まったコトはしない。ミーティングって言うのは名ばかりで、実際は集まった同士がバイクについてお喋りするだけよ？ 集合時間も解散時間も個人の自由。何十台というカワサキ旧車が集まるのよ？』

真子の言葉をスピーカーモードにしたケータイが流す。

「楽しそうですけど、残念でした〜！ 明日は圭太と2人つきりで・・・」

「僕行きます！！」

「デートに・・・って、ええ！？」

由美の言葉を遮り、圭太がマイクに叫んだ。

「カワサキの古いバイクが集まるイベント・・・！！是非参加させてください！！」

うきうきとした顔で圭太が言うと、某パラガス並みの擬声を発した由美が慌てて圭太の肩を掴む。

「ち、ちよつと圭太・・・！」

電話越しの真子に聞かれぬ様、耳元で話す。

「明日は私達2人でって言ったじゃない・・・！ 行くなら2人で行きましょう！？」

「え、でも人は多い方が・・・」

「ダメ・・・！！ 明日は2人なの！」

由美が凄まじい剣幕で言うと、圭太はまるで捨てられた小さな仔犬のような、それはそれは母性本能を擽る様な悲しそうな顔で由美を見つめた。

「よくわからないけど・・・由美がそこまで言うなら、残念だけど・・・」

意識はしていないが、上目遣いで見られる。圭太の形の良い顔でそんな悲しそうな表情をされた由美はたまらない。今にも泣きそうな（由美にはそう見えてしまう）圭太を目の前に、由美は判断を誤った。

「し、仕方無いわね！ じゃあ私も行ってあげるわよ・・・！！」

「え……いいの……?」

圭太がたずねると、由美は照れ臭そうにして言った。

「別に……!? 私達はいつだって2人であるし……!? ツーリングなんかいつだって2人つきりで行けるもの、明日は真子さん達と一緒に行くわよ!」

由美が受話器の向こうにいる真子に聞こえる様に大きな声で言うと、受話器からくすり、と笑い声が聞こえた。

『由美ちゃんは可愛いわね? フフフ……』

由美の話聞いていて、真子は笑ってしまった。由美は何気に真子に対して失礼なコトを言っていたが、それには好きな男の子を取られたくないと言う可愛らしくも素直じゃない愛情を感じたので何も言わなかった。ただ……

『まあ、負けないけど……!』

真子も聞かれないように呟いた。

『話はまとまったようね? そしたら、明日午後12時に高速の入り口で待っているわ』

真子はそれだけ言うと、『じゃあ明日ね』と言って電話を切った。

「由美ありがとう……!」

圭太は明日の予定を変えてくれた由美に満面の笑みでお礼を言う。そして由美と言えば、まんざらでも無さそうだった。

「別にいいわよ。その代わりに、次こそ2人きりなんだからね!」腕を組ながら言い放つ。そこで圭太は、先ほどから聞きたかったコトを言った。

「それだけ……由美はなんで僕と2人で走るコトにこだわるの? 普段学校でも一緒なんだし……痛っ!」

圭太の質問を、由美は圭太の頭に空手チョップを繰り出すコトで阻止した。その時の由美の顔は真っ赤になっていたとか……

斯くして後日土曜日。

「高速の入り口って言ってたわよね・・・？」

由美が安物の腕時計を見ながらたずねると、圭太も頷いた。

「うん。しばらくここで待てばいいんじゃないかな？」

2人は高速入り口ですでに待機していた。端にバイクを寄せて待っているが、休日ということもあって車通りは多い。また1台、大型トラックが2人の横を排気ガスを撒き散らしながら高速に入ってしまった。

「それにしても、また大黒ねえ・・・」

由美が苦笑いする。その訳は、真子と大黒で初めて会った時に行われたインチキレースの時。調子に乗っていた由美が自爆しかけた際、奇跡の2輪ドリフトを決めた時のコトを思い出したからである。

「今日は絶対に安全運転だよ？また飛ばしたら僕だって怒るから」
圭太が念を押すと、由美は苦笑いして返事をした。圭太が怒るとどうなるか、長い付き合いだけあって由美は心得ていた。

そんな感じで、今日のミーティングとはどんな物なのだろうと2人が話していると、車やトラックの音をかき消して、聞き覚えのあるサウンドが近づいてきた。

ギヤワアアアアアア・・・！！！！クァンクァン・・・！！

ブアツパアアアアアア・・・！！！！ゴァンゴァン・・・！！！！

パアアアアア・・・！パンパン・・・

車種は同じでも、マフラーの違いから別々の音がする。が、間違
いなくどれもマツハの音である。

「お待たせ圭太君、待ったかしら？」

革ツナギを着た真子がヘルメットを脱いで言う。

「いえ、全然待つてませんよ」

「真子さん、昨日は来てくれてありがとうね！」

圭太と由美が挨拶すると、真子の後ろから、凜と紗耶香もヘルメ
ットを脱いだ。

「よお由美！一昨日は邪魔したな！！」

「一昨日はご馳走様でした」

「うん！凜ちゃんは、次回からはもうちょっと静かにしてくれたら
嬉しいわ。じゃないと・・・」

「ゆ、由美！わかってるから・・・！許してくれよお！！」

一昨日の激辛モンブランと、由美の脅しを思い出して必死に謝る
凜を、何も知らない真子が不思議そうに見つめるが、気にせず本
題に入った。

「今から高速に入るわけだけど・・・圭太君達はそんなに高速経験
は無いって聞いたから、今日は私達も普通の流れで走る。安全運
転で気持ち良く大黒入りしましょう」

「はい！」

「楽しく走りましょう！！」

2人が良い返事をする、真子は2人が本当に仲が良いのだなと
思い、クスッと笑ってしまう。が、同時に自分も遅れを取らぬよう
にと気を引き締めた。

「それじゃあ、こんな場所で長話もあれだしそろそろ行くわよ？ 圭太君、私についてきてね？」

それだけ言うと、真子はヘルメットを被って入り口に走りだした。「圭太、真子さんなんかについていたら、FXがオイル塗れになっちゃうから近づかない程度でいくわよ？」

由美が真子にジト目で視線を送りながら言うと、圭太はよくわからないがとりあえず頷きながら高速に入る。後から凜と紗耶香も続く。

こうして一同は大黒埠頭パーキングエリアに向けて走りだした。

5台はのんびりとしたペースで高速を進む。前を走る真子は後ろを走る圭太達に気を使って少しズレたレーンを走る。2スト車は白煙とオイルの飛沫を後続ライダーに掛けないように気を使わなければ先頭を走れないのだ。

「真子さんって、やっぱり気遣いが出来るのねえ・・・旭さんや美春ちゃんなんて後ろの人のコトなんか気にしないもの」

由美が感心して呟く。育ちや性格が現れるのか、確かに旭は後ろに人がいようがいなかろうがアクセルを吹かしまくるし、美春も気にしない。それに比べて真子はかなり気を遣っていて、走るレーンもそうだが、アクセルも一定に開けたままで無駄な吹かしをしない。

「さすが社長令嬢・・・でも、圭太は渡さないんだから・・・！」
由美が目の前にいる恋敵を睨み付ける。そして睨まれている真子はと言えば・・・

「私のテクニクで、圭太君にオイルも跳ねない・・・私にこれだけ気を遣わせるなんて、罪な人・・・責任取ってね・・・？なんつって!？」

いつもの真子からは想像も出来ないようなコトを口走っていた。これが凜の言う「姉貴が壊れた!」状態である。

「いつか・・・いつか圭太君の目を私に釘付けにしてみせる!」

バックミラーを見ながら呟くその顔は、もう緩みまくっていた。

それから何事も無くレインボーブリッジも通過して、一同は大黒埠頭入り口に差し掛かった。真子が左にウインカーを出すと、皆もそれに従ってウインカーを出す。後方確認をしながら圭太がFXを左に傾けると、すぐ後ろに凜のマツハが走っていた。ミラー越しに圭太と目が合った凜は、手を振りながら軽くアクセルを吹かす。今日も赤いマツハは好調のようだ。

入り口に入ると、大黒名物の渦巻きに入る。行ったことのある人ならわかると思うが、初めてあそこを走ると馴れていないので目が回ってくる。作者だけだろうか？すみません。

「ここって前も思ったけどどれくらい倒して走ったらいいのか分からないんだよね」

圭太が呟く。先頭を走る真子と、前を走る由美と自分の走りを見比べる。真子は綺麗に円を書いて、安定した走りを見せるが、自分達は真つ直ぐ走ってまた倒してと下手くそな走りを繰り返している。これは馴れるまで時間が掛かりそうだと圭太はため息をついた。

そしてやっと大黒埠頭パーキングエリアに到着した。先頭の真子についていくと、そこにはかなりの台数のバイクが集まっていた。その数は軽く50以上にものなるだろうか。

真子はある場所でバイクを止めると、由美や圭太達もその横に順番に停車していく。

「圭太見て見て！！すごい台数よ！！」

由美がサイドスタンドを立てながら圭太に言う。

「ここにいるのは、ほとんどがカワサキの旧車よ？」

「わぁ・・・これが・・・！」

真子の言葉に、圭太はなんと云っていいのか分からなくなってしまう。右を見ても左を見てもバイクばかり。そして辺りではそのオーナー達が自分達の愛車を自慢したり、他のバイクを見て笑顔で話している。中にはチームがあるのか、それぞれのチーム名が入ったジャケットを着ている人もちらほら。

これが、首都圏で1番カワサキの旧車の集まるミーティング。『KAWASAKI Old Bike Meeting』だ。

「いやあ、何度来たってワクワクするぜえ！カワサキの名車がたくさんいるんだぜ！？」

「ワクワク・・・！ワクワク・・・！」

凜が笑顔で言っていると、紗耶香がツインテールをひよこひよこ揺らしながら何時に無くウズウズしている。紗耶香にとって、この場は自分の教養を得るための場と言って過言ではない。

「圭太見て見て！！あそこに旭さん家にあつたカモノハシみたいなヤツ付けてるバイクがいる！！」

意味不明なコトを口走る由美の指差す先を見ると、圭太は思い出した。旭と出会って次の日、初めてのツーリングの後で由美のゼファーに使いそうな部品を貰うために旭の家に行った時にあつたテールカウルだ。名前はその時に起きてしまった騒動と美春の暴走で忘れてしまったが・・・。

「あれが会長さんのZよ」

「会長？ぜつと？」

説明する真子に由美がちんぷんかんぷんになっていると、圭太は思い出した。

「あ・・・確かZ750RSでしたっけ？」

圭太が言っていると、真子はフツと笑いながら言った。

「あれはカワサキの900Super4・・・通称Z1」

「Z1・・・？」

圭太が復唱すると、真子は「そうよ」と言っつて説明を始める。

「カワサキはマツハを超える最速市販車を世に送り出すべく、当時

最先端の技術だった4サイクル4気筒ツインカムエンジンを搭載したバイクを造った。それがZ1。最高速は200キロオーバーのモンスターマシン。ただ、当時国内ではナナハン以上のバイクは売らないと言うメーカーの自主規制があったの。そこでカワサキが国内に合わせたのが今圭太君が言ったカワサキZ750RS、通称Z2よ」

「その通りなんだゼエエエツト!!!!」
「うわぁ!?!」

真子が説明を終えた直後、見知らぬ男が圭太と由美の後ろで雄叫びを上げた。

「な、なんなのよこの人!?!」

由美がまだ驚いたまま真子にたずねると、真子は笑顔で彼に挨拶した。

「あら会長さん、今日も元気ですね」

「会長!?!この変な人が!?!」

由美が言くと、由美に変な人と言われた彼はそんなコトを気にせず続けた。

「カワサキの伝説が集まるこのミーティングにようこそ・・・楽しんで欲しいんだゼエエエツト!!!!」

「だから!?!叫ばないでよおじさん!」

「ま、待つて由美・・・!!」

「どうしたのよ圭太・・・?」

「この人・・・!!」

圭太は目の前にいる中年の男を凝視する。首に巻かれた真っ赤なスカーフ、横に流した変な髪型、そして革ジャン、特徴のあるどこかで見たような顔・・・

「ま、まさか・・・!?!」

圭太は息を呑んだ。口調からなにもまで全て似ている・・・まさか!?!

「紹介するわ、この人はこの『KAWASAKI Old Bike

e Meeting』を主催しているツーリングクラブ、『Z・S
TYLE』の会長、水木一郎太さんよ」

「だあつ!?!」

「あら?」

真子の紹介を聞いて、由美と圭太はマンガのようにすっ転んだ。

「一郎太・・・?一郎じゃなくてですか!?!」

なんとか立ち上がりながら圭太がたずねると、彼、水木一郎太は豪快に笑った。

「間違えるのも無理は無い・・・が、聞け少女少女よ!!オレは偽物では無い!テレビで歌ってる一郎がオレの真似をしているんだぜエエエエツト!!!!!!」

「まあ、ちよつとテンションが高い人だけど、みんなヨロシクね?」

叫ぶ一郎太を真子が制止しながら言うと、2人は苦笑いするしか無かった。

「おい姉貴!、圭太達!先に行ってるぜ!」

一方、そんなことに慣れているのか凜と紗耶香は先に行ってしまった。

「少女少女よ!!せつかく来たんだ、じっくり見ていくんだぜエエエツト!!!!!!」

一郎太もワケの分からない叫びを上げて、どこかに去っていった。

「なんか・・・元気な人だね」

「美春ちゃんと互角に濃いキャラね・・・」

圭太と由美が呆気に取られていると、真子が2人の目の前に立って改めて説明を始める。

「もうわかったと思うけど・・・ここでは情報交換やパーツ売買、コミュニケーションを取ったりする場よ。だから2人も、今日はたくさん楽しんで行ってね。私は少し挨拶がてら回ってくるから、しばらくは自由行動にするわ」

「わかりました」

「じゃあ圭太！早速見て回りましょう！？」

「ち、ちよつと由美・・・引つ張らないでよ・・・！」

由美に襟首を捕まれて後から引きずられていく圭太を見て真子は
呟いた。

「引きずられる圭太君・・・可愛い・・・」

しばらくの間、真子は動かなかつたとか・・・

「あ！圭太これ見て！圭太と同じFXよ！？」

「本当だ・・・！」

見回っていると、すぐに圭太のと同じFXを見つけた。ライムグリーン
のE4ラインアレンジで往年のエディ・ローソンを彷彿させるカラーリングに、
コミネのロケットカウルを低く装着。セパレーターハンドル、トマゼリ生
ゴムグリップ、バックステップ、白いセミシングルシートがシブみを効かせた
シンプルなスタイルだ。

「この前についてるパーツカッコいいわ！色も綺麗ね！」

由美はロケットカウルを眺めながら圭太に問うと、圭太も次第に興味
深げに相づちを打つ。

「これが僕のFXと同じだなんて・・・カッコいい・・・」

普段は改造に無頓着な圭太も、初めて見る自分以外のFXに興味奮
気味。ハンドル周りを中心にじっくり眺める。

「もしかして・・・！圭太もやつと改造に興味を持つたり！？」

「少しね・・・僕と同じバイクって見た時無かつたし、興味は沸く
よね・・・」

カウルのスクリーンを見れば『Z - STYLE』のステッカー。どうやら一郎太のチームの所属らしい。

「Z - STYLE・・・ていうことは、さっきの変なおじさんのチームよね？」

「そ、あれが自分達の愉快的な会長さ」

「へ・・・!？」

「あの・・・あなたは・・・?」

由美が驚いて振り向くと、人が良さそうな恰幅の良い中年の男が立っていた。圭太がたずねると、おじさんはニコニコしながら続けた。

「僕はZ - STYLEのメンバーにして、このFXのオーナーだよ。よろしく」

彼は軽く頭を下げ、一旦ズボンで拭いてから右手を差し出す。

2人は迷うことなく彼とがっちり握手した。

「ところで今、偶然立ち聞きさせもらったけど・・・君もFXのオーナーなのかい？」

圭太と握手しながら彼が問うと、圭太は苦笑いして頷いた。

「旧車會や暴走族には決して見えないが・・・君達みたいな普通な若い子は珍しいよ」

笑いながら言うと、圭太は少し離れた場所にある自分の愛車を指差した。

「あそこにある青いのが僕のです。まあ見ての通りノーマルですけど・・・」

「あ、因みに私のはその隣にあるあの赤いゼファーちゃんよ！」

由美が後から続くと、彼は顎に蓄えた髭を指でイジリながら感心した声を出す。

「そのコは君の彼女かい？ゼファーのFX外装とは、またマニアックで良いセンスしてるよ！」

「いや、別に彼女でも何でもありません。ただの・・・痛!!」

質問に対して否定の言葉を述べる圭太の足を由美が踏み潰した。

それを見ておじさんは「なるほど・・・」と苦笑い。彼は由美の恋が結ばれることを祈りながら、また圭太に向き直った。

「ノーマルは良いものだよ。僕のこのFXはもうここまでやってしまったから戻しようがないんだけどねえ」

言いながらカウルに手を置く。ここまでやってしまえば、確かに今更ノーマルに戻す手間も掛かるので難しい。圭太は「あの～」と言ってから質問する。

「この・・・大きなカウルとか・・・マフラーを戻したりすればノーマルに戻るんじゃないか・・・？」

すると彼は「んー・・・」と言って首を傾げる。

「出来ないことは無いけど、僕のはエンジンがゴンゴーンなんだ」

「「ゴンゴーン？」」

聞き慣れぬ言葉に圭太と由美が声を揃えて言うと、彼はそのことにクスリと笑いながら続ける。

「550ccのコトを、ゴンゴーンって言うんだよ。下から二ーハン(250cc)サンパン、またはサンゴ(350cc)ヨンヒヤク(400cc)ゴンゴ(550cc)そしてナナハン(750cc)ってね？」

彼が得意顔で説明を終えると、2人はここでも声を揃えて「「お・・・！」」と言って拍手を送った。

「あ、だから旭さん達のはジーティーサンビヤクハチジュウじゃなくてサンパチなのね！」

今さらながら、由美がポンと手を叩く。どうやら今まで『GT380』を何故サンパチと呼ぶのかを考えた事が無かったらしい。また1つ知識を得たとはかりに手を打つ。

そんな由美に圭太はまた呆れ顔。すると、おじさんが会話の軌道修正のために話を戻す。

「このFXはしばらくはこのまま・・・実はまだ2台、家に部品取り用不動車のJとノーマルフルレストアのFXがあるんだ」

「ええ!？」

「2台も!？」

圭太と由美が悲鳴をあげる。すると、こういつ反応を待っていたのか、彼は得意になって話を続ける。

「やっぱりFXはどこから見ても不満が無い素敵なバイクだからね。何台あったって足りないくらいだよ」

笑顔で言うおじさんを前に、2人は苦笑いするしか無かった。

それからしばらく話していたが、やがておじさんは誰かに呼ばれて向こうの集団に行ってしまった。とりあえず握手してその場を立ち去った。

「いやぁ・・・やっぱり大人はお金があるのねえ・・・」

由美が感心しながら呟く。まあ、実際は少ない小遣いをやりくりしてやっている人がほとんどだが・・・

しばらくいろいろいるなバイクを見てみると、あるバイクの目の前に立つ凛とそのバイクの前にしゃがみ込む紗耶香を発見した。

「凛ちゃん紗耶香ちゃん!」

「おお、由美と圭太か・・・」

由美が声をかけると、凛だけが顔を上げて返事を返す。

「ちよつとお前ら2人からも言つてやつてくれよ・・・」

ため息混じりに言う。凛の視線の先には、そのバイクを隅々まで眺めている紗耶香がいた。

「紗耶香ちゃんがどうしたの?」

圭太がたずねると、両手を上げて「参った」と言わんばかりに説明した。

「紗耶香のヤツ・・・この単車にへばりついて離れねーんだよ」

その先にあつたのは、またまたライムグリーンの、赤城姉妹の乗るマツハに似たデザインのバイクだ。

「これって・・・?」

圭太がたずねると、凛はシート後部に書かれた文字を指差す。

「ケー・・・エイチ・・・?」

「KH・・・だね」

由美と圭太が言うと、凜が珍しくバイクについて説明した。

「そ。コイツはKHのヨンヒャク。通称『ケッチ』。マツハのモデルチェンジ版っか、なんっか・・・」

「????」

どもる凜の説明に2人が？マークを浮かべると、その視線に気付いた凜が頭を押さえて上手く説明しようとする。

「えーっと・・・なんっか・・・モデルチェンジって要は進化形じゃん？でもマツハシリーズって何故かだんだんエンジンスペックが下がるんだ・・・オレには難しいことはわかんねーけど、それだけマツハが危険なバイクだったんだろ？で、そのマツハが名前を変えて新しくなったのが・・・コイツ？」

ビシッとKH400を指差す。が、自信は無いようだ。

「へえ・・・性能が下がるって確かに珍しいかもしれないわね・・・？」

由美が納得しながら頷く。今説明した凜を含め、この3人には見ただけでは違いがわからないので、凜の説明でも十分な納得が出来るしまうのだ。しかし、そんな時。カワサキを語らせたら右に出る者はいないと言われる紗耶香がガバツと顔を上げた。

「凜お姉ちゃん！！今の説明じゃ何も伝わらないよ！！」

「し、しまった・・・!？」

凜があちゃーっと手を額に乗せるが、もう遅い。なにかのスイッチが入ったのか、紗耶香は3人に1から説明を始めた。

「こほん・・・KHはですね？マツハシリーズの後継車で、確かにエンジンの出力は下げられてます。ちなみに初期型350SSマツハは45馬力。S2と呼ばれるマイナーチェンジ版350SSマツハは1馬力ダウンの44馬力になりましたが、フロントブレーキがドラムからディスクへ。フロントフォークのボトムがアルミになり近代化します。そしてS3・・・お姉ちゃん達の400SSマツハになつて排気量が上がったにも関わらず馬力は42馬力にダウン・・・!しかし!!足回りの見直しやフィンの大型化によって、より信

頼の置けるエンジンに進化……！！エンジンはパワーが落ちても、中型クラスではそれでも依然としてずば抜けた性能！！ゆえに素人には扱えず事故が多発する始末……！！カワサキトリプルはいつしか腕に覚えのあるものしか選べないモノになって行ったんです……」

「そ、そんなに危ないバイクだったんだ……」

圭太が呟いた。紗耶香は頷いてまた説明を始める。

「しかし……！！初期型からS3マツ八までは暴力的加速が乗り手を選んでいたのを、いろんな人が乗れるようにとデチューンしてそれ+車重増加でカワサキトリプルを誰もが気軽に楽しめるようにしたのが……このKH400です……！！」

ズビシ……！！と目の前のKHを指差す。

「最高出力38馬力、トルク3.9！車重は162キロですから、パワーウェイトレシオから考えてもクラス中ならトップクラス！！それでいて誰もが気軽に楽しめたKHは瞬く間に人気になり、79年まで生産、新車販売はなんと81年まで続けられたベストセラー！！長いトリプル時代に幕を閉じた名車なんです！！！！！！」

3人に極限まで顔を近付けて力説する。いつもの可愛いツインテールは恐ろしげにゆらゆらと揺れていて、迫力がある。

「わ、わかつたわ紗耶香ちゃん……」

由美が言くと、紗耶香は満足げに笑って顔を離れた。

「わかつて貰えましたかぁ……よかつたぁ……」

先ほどの恐ろしい顔から一変、いつもの気弱な顔で胸を撫で下ろす紗耶香を見て、凜が2人に耳打ちする。

「アイツ……カワサキの話になると急に迫力が増すんだよ……前なんかオレの部屋で話し出したら、コイツ朝までノンストップで話すから、オレ途中で寝ちまったもん」

「こそこそと耳打ちする。」

「でも紗耶香ちゃん……このケッチ、何か珍しいところもあるの？」

圭太がKHを見ながらたずねる。別段、マフラーが旭のサンパチと同じようなショットガンチャンバーになっている以外あまり派手な所も無いし、改造具合なら真子や凜の方が凝っている気がするのだ。

すると紗耶香は無言でエンジンを指差した。

「エンジンがどうか・・・？」

「よぉーく見てください」

紗耶香に言われて、3人はエンジンを凝視する。プラグコードの色が赤色な以外に不審な箇所は無かった。

「実はですね・・・このエンジン・・・！なんとH2・・・750

SSマツハのエンジンを積んでいるんです・・・！！」

「え・・・？」

「ナナハンって・・・？」

「乗らねーだろ・・・？」

紗耶香の言葉に、3人は驚きを隠せなかった。排気量が2倍近く違うエンジンを載せるなど不可能だと。

由美が手を上げて説明を求めた。

「紗耶香ちゃん・・・？私よくわからないんだけど・・・そんな大きなエンジンが載るって・・・あり得るのかしら・・・？」

すると紗耶香はキツパリと言った。

「はい、無理です」

「無理って・・・じゃあこのKHはなんで・・・！？」

由美がまた質問すると、紗耶香は改めてこの改造の凄さを思い知ったかのように、ゆっくり説明を始めた。

「KHもマツハも、250ccに400ccエンジンを載せるのなら車体が同じなのでエンジンの積み換えは簡単に出来るのですが・・・400クラスの車体に大型・・・それもナナハンのエンジンを載せようと思ったら、普通は無理です。400クラスのエンジンスペックに設計された車体に、それより大きくて重いエンジンはフレームに収めるのも載せるのも難しいですし、何よりもし載ってもマト

モには走れないんです」

紗耶香が言うと、由美はふむふむと頷いた。

「つまり焼き肉で例えるなら・・・まだ弱い火の上にたくさんお肉を敷いちやったら真ん中のお肉しか焼けなくて、端のはいつまで経っても半焼け状態・・・しかもそれはホルモン系・・・つまり火力不足+お肉の選択ミスっていうコトかしら？」

「待つて由美・・・初期設定がおかしい・・・」

圭太がツツコミを入れると、紗耶香は説明を続けた。

「まあ、当たらずとも遠くは無いですが・・・もつと簡単に例えるなら凜お姉ちゃんがあの成績で東大入試を受けるのと同じくらい無謀であり得ないコトというわけです」

「おい待て紗耶香？」

凜がツツコミを入れるが、バイクの話の時の紗耶香はキモが据わっているのか、いつものひ弱さをどこかに吹き飛ばして話を続ける。

「でもこのケッチは、フレームをかなり理想的な方法で溶接、補強していてですね・・・？特にエンジン周りのフレームなどはもう化け物のような補強が入っているんですよ・・・」

そして紗耶香の指す場所を由美達が覗くと、確かにエンジン下のフレームにはかなり溶接されたプレートがエンジンを支えているし、ピボットフレームもかなりの溶接を施されていた。

さらに2人には分からないのだが、紗耶香も凜も驚いたのがただ『ナナハンマツハのエンジンを載せた』ワケではないと言うことだ。

ナナハンマツハとKHではエンジンのフィンの型がまるで違うのだが、このナナハンマツハのエンジンはわざわざKH同様にフィンの角を立てさせたデザインにされているのだ。これによりパツと見ただけではどうしたってKHにしか見えない。由美のゼファー改FX仕様よりもバレにくい仕上がりになっている。

「これを作った人は、よほど遊び心がある人か、よほどのKH好き

「なんでしょうねえ・・・」

紗耶香がうつとりしながら呟く。が、3人はついていけなかったのかさほどテンションは高くない。むしろカワサキのバイクの話をするときの紗耶香の気迫に引き気味ですらあったのだが、紗耶香は気付かずに話しまくったとか・・・

「さて、みんなはどこにいるかな・・・」

挨拶周りを終えた真子が歩きながら呟く。いつものことだが、このイベントは集合時間も解散時間も個人の自由なので会場になっっている大黒は常にバイクの出入りが多いのだ。また1台、ガラの悪そうなゼファーが入ってきた。コルク半にジャージを着た2人組で、おそらくこのイベントを知って見に来た地元の族関係の人間だろう。

「硬派は好きだが・・・彼らは違うな・・・」

このイベント自体派手な旧車は多いが、それは70年代の『走り屋仕様』で低く構えたロケットカウルやセパレートハンドル、シングルシートのレーサー仕様や、風防を絞り絞りハンドルでプレスライダー仕様などのいわゆる『大人の不良改造車』が多く、先ほどのゼファーの様な『現役or旧車會仕様』はあまり来ないイベントなのだ。まあ来たとしても浮いてしまいそうだが・・・

「揉め事が無ければいいけど・・・」

そんなことを思いながら、真子は皆を探しながら歩いていると、目の前にいた。

「みんなここにいたのか」

「あ、姉貴……!!」

「真子さ〜ん……!!」

声をかけると、凜と由美が抱きついてきた。

「な、なんだいきなり……!？」

いきなりのことで真子は慌てた。凜ならともかく、由美まで抱きついてくるとはいつたい……

その時、目の前に紗耶香が現れた。が、それを見て状況を把握した。紗耶香の目がぴかーん!!と光る。

「由美さんも凜お姉ちゃんも……逃げちゃダメじゃないですかあ……?」

「ひい……!？」

「えぐえぐ……」

紗耶香が真子に抱きつく凜と由美の襟首を掴んで引きずると、由美は怯えて悲鳴を上げ、凜はもう半泣きである。

「2人もカワサキ乗りなら……もっとカワサキのすばらしさを知るべきです!!」

言いながら2人を引きずっていく紗耶香の顔は、それはもう幸せそうな顔だったという……

「ああ……疲れたわ……」

「大丈夫……?」

ゼファーに寄り掛かって死んでいる由美を気遣って圭太がコーラを渡すと、由美はプルトップをパキッと開けてごくごくと飲んだ。

「でも紗耶香ちゃんて凄いいよね。旭さん達と同じくらいバイクに詳しいし、僕も少しは見習いたいよ」

そう言ってファンタを飲む圭太の顔は笑顔だ。

「全く・・・圭太は勉強熱心よねえ。私なんかさっき聞いた話の8割は忘れたわ」

「いや、威張れないから」

そんな話をしていると、向こうから赤城姉妹が歩いてきた。1人死にかけてるが。

「圭太君・・・楽しんでる・・・?」

真子が笑顔でたずねると圭太は笑って頷いた。

その時、圭太達の後ろから若い男が2人近づいてきた。

「あの2人・・・」

真子が呟いた。あれは先ほど見たゼファーに乗っていた2人組だ。なにやらこちらに向かっていているらしい。

「よお姉ちゃん達! FXなんてシブイの乗ってるの!？」

頭にコルク半を乗せた1人が由美に声を掛ける。

「おいおい見るよオメエ、ここにいる娘達みんな可愛いぞ・・・」

もう1人が相方に耳打ちするが、声が大きいので皆に筒抜けだった。

「今日みんな単車?それとも彼氏連れ!?もしそうじゃなきゃ、オレ達と遊ばねえ!？」

コルク半の男が交渉する。

「オレ達ここらが地元だからあ、いろいろ案内出来るし、単車無い娘達は今からセンパイ達呼んで車に乗ればオーケーだろ!？」

グイグイ近づいてくる男に、由美達はキツパリと言った。

「残念ね!私達みんなバイクに乗ってるし、今日はイベントを楽しみに来たからあなた達とは遊べないわ」

言いながら、相手に見えないように圭太の手をぎゅっと握る。いくら気が強くてもやはり女の子。由美も少し怖いのだ。

「ええ〜!じゃあそこの彼氏連れはいいや。そっちの3人!どう!

？」

男達は諦めずに今度は真子達に声を掛ける。

「すまないが・・・私達はロケットカウルに3段シートを付けたバイクが好きじゃあない」

真子は臆するどころか、堂々と言い放った。

「私達はノーマルやカフェレーサーが好きなんだ。すまないが」

「なにカフェって？お茶？」

男がたずねると、真子はフツと笑った。

「そういうワケだから、私達は遠慮しておく」

真子が言つと、コルク半の男はもう諦めたのかそのまま通りすぎようとする。が、もう1人の男がまだ諦め切れないのか紗耶香にちよっかいを出しはじめた。

「オメエもマツハ！？やべえな！！」

言いながら紗耶香と紗耶香のマツハをじろじろ眺める。が、そのうちマツハには興味を無くしてすぐに紗耶香にちよっかいを出してきた。

「あの・・・その・・・」

「おいコラ！！紗耶香が嫌がつてんだらうが！？離れやがれ！！」

凜がキレると、男が反応した。

「あ？何オメエ？気持ちワリイ男言葉使いやがつて・・・？もしかして今流行りな性同一障害かよ！？」

「な、なんだと・・・！！」

凜が顔を真っ赤にして言う。もはや血管がぶちギレるのは時間の問題と思われたその時・・・

「男の真似してんじゃねーよ！！気持ち悪っ！！！！」

男はそれだけ言いつて歩いていった。

「なによアイツ・・・！旭さんがいたら説教よ説きよ・・・」

「由美待つて・・・！！」

由美の口を塞いで、圭太が止める。

「もがもが・・・なによおいきなり？」

由美が聞きながら圭太の視線の先を目で追うと、そこには震えながら立っている凜がいた。

「ち……ちくしょう……!!」

そして泣きながら走って行ってしまった。

「凜……」

「凜お姉ちゃん……!?!」

2人の姉妹は、それを見るだけしか出来なかった。

「僕、様子を見てくる……!!」

「ち、ちよつと圭太あ!?!」

圭太が走って凜の後を追い掛ける。すると紗耶香も後から続いていた。

「え?え!?真子さん……!?!」

由美がおろおろしていると、真子は由美の肩に手を置いた。

「凜は2人に任せておこう……私達はさっきの2人を捕まえよう……!!」

それを聞いて、由美はしばらくポカンとしていたがやがていつもの強気な由美の顔になっていた。

「わかったわ真子さん!!さっきの2人なんて旭さん達に比べたらなんてこと無いわよ!!」

そして2人は、先ほどの男達を探しに走りだした。

第30章 KAWASAKI Old Bike Meeting(後書き)

真田美春の！オールナイトニッポン！！

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。

美春「みなさん！あけましておめでとうございませう！美春おねえさんだよ」

作者「本年も、宜しく願います」

美春「今日は新年初更新ということで！いつもとは違うことをやっていきたいとおもいます！！」

作者「なにをするの？」

美春「とりあえず、この作品『旧車物語』の人氣が無いことの責任を取って、作者君には死んでもらおうかと・・・」

作者「いや待てよ！もともと需要なんか無いんだしこんな駄作、読んでもらえているだけでも本当に土下座モノだよ！？」

美春「まあ冗談なんだけど・・・」

作者「それより僕は考えた」

美春「なあに？」

作者「このラジオを裏番組にして、なんか作品に関係のあるようなラジオを作れば・・・」

美春「・・・へ？」

作者「もともとのコーナーは僕のやつてる趣味の『音楽』を題材にしたんだけど・・・全く反響が無い。これはゆゆしき事態だ。でも内容がバイクになれば・・・」

美春「嫌だ嫌だ嫌だあ！！！！このラジオがいいのお！！」

作者「美春君、世の中は結果が全て・・・このラジオの結果はどうだね？」

美春「く・・・くううう！！！！」

作者「というわけで、こういう新年めでたい初更新の日に新ラジオの話を・・・」

美春「新年早々鬼かキサマーーーーー！！！！！！」

作者「というわけで、アンケートをば」

美春「へ・・・？」

作者「いや、もしかしたらこのコーナーも楽しみにして読んでくれている人たちがいるかもしれないから、潰すのは酷だという人もいるかもしれない。僕もその1人だ」

だん！！！！ 目安箱を置いた

作者「で、目安箱を設置してこの番組を潰して完全新番組にするか、それとも裏番組にするか、それともこのままにするかを、読者の方々に決めてもらうというのはいかがか？」

美春「作者君・・・それいままで成功したことあったっけ？」

作者「お便りが来なかったら、自動的に『真田美春のオールナイトニッポン』は裏番組へ、新番組をスタートさせるよ」

美春「読者のみんな！ぜひこの番組に1票ください！」

作者「そのほか、作品の感想もお待ちしております！」

美春「いづれもメッセーじボックスか作品感想、はたまた活動報告コメントでもいいからみんなヨロシクねえ」

作者「それではみなさま、今年もいい年に・・・美春さん、どこに電話してるんですか？」

美春「あつくん」

作者「じゃ、じゃあ僕はちょっと遠出するので！それでわあ！！！！！！」

というわけで、アンケートも感想、苦情、アドバイスお待ちしております！

ことしもヨロシクお願いします！！

今年も『旧車物語』を宜しくお願いします。

追記、作中の団体、イベントは実在しません。もし同じ名前の団体やイベントがありましたらご報告ください。

それと、お話に出てきた750ssエンジン搭載KH400はZENSHINというショップのマシンで実在します。1月号のBGで影響を受けて使わさせてもらいましたが、なにか不都合があればこちらもご一報ください。

それでは・・・

第31章 ドタバタ!

ねえ真子さん・・・!?」

大黒の広いパーキングエリアを走る由美が真子に話し掛ける。

「もしかして・・・!凜ちゃんは男勝りなの昔から気にしてたの!?」

しばらく走っていなかったのを息を上げながらたずねる由美に真子は道行く人を1人1人確認しながら悪態をついた。

「原因は・・・全て祖父にあるのよ・・・!!」

「祖父つて・・・おじいちゃん!?」

「そう・・・それは後に話すとして、二手に別れましょう・・・!見つけたら誰か呼んでから声を掛けて・・・!」

「わ、わかつたわ・・・!」
そして2人は左右に別れた。走っていく由美を見て、真子は舌打ちした。

「まさか・・・あんなことをまだ気にしていたなんて・・・」

そして心の中で今は亡き祖父に悪態をつきながら、真子は混雑する駐車を駆けた。

「はあはあ・・・!待つて凜お姉ちゃん・・・!」

「凜ちゃん!」

紗耶香と圭太が息を荒げながら叫ぶ。前にいる凜は走る足こそ止めないが、息が上がったのかペースは次第に落ちていき、ついに駐

車場の行き止まりで来てしまい、3人はそこで止まった。

「はあはあはあ……！」

「凜……お姉ちゃん……」

肩で息をしながら呼吸を整える凜を気遣い、紗耶香が声を掛ける。

「まだ、気にしてたんだね……？」

「……！？」

紗耶香の言葉に、凜がビクッと身体を震わす。するとその場で崩れるようにして泣きはじめた。

「うう……！ち、ちくしよう……！お、オレが……！オレ達
が、何をしたって言うんだよお……！？」

そこに居たのは、いつも強気で笑顔な凜ではなく、心に傷を負った1人の少女だった。

「紗耶香ちゃん……それって……」

泣き続ける凜を見て、理由がわからない圭太が紗耶香にたずねると、紗耶香は複雑な顔で説明を始めた。

「実は……凜お姉ちゃんが今みたいな男勝りな話し方になったのには原因があるんです……」

「原因？」

圭太が聞き返すと、紗耶香は肩を震わせて泣く姉の肩をそっと押さえながら説明を始める。

「今泣いている原因……祖父にあるんです……」

すると、凜が肩に置かれた紗耶香の手を握りながら、まだ涙が溢れている瞳を圭太に向けた。

「オレは……！き、気持ち悪いって……！ひ、必要無いって……
いらないうって……！」

「凜ちゃん落ち着いて……！？誰もそんなこと思っていない！」

圭太が言うが、凜は首を横に振って「いららないんだ……！オレは、オレは……！」と言っただけだった。

すると紗耶香はそんな双子の姉を抱き締めながら圭太を見る。

「さっきの2人組が言った『性同一障害』なんかじゃ無いですよ・
・?こうなってしまう理由は、そんな簡単な話じゃ無い
んです……」

「さっき祖父つて……じゃあ原因てまさか……」

圭太の顔を見て、紗耶香は首を縦に振った。おそらく圭太の推理
は間違えていないと思ったのだ。そしてそれは正しかった。

「祖父は……アカギ建設創設者、赤城一郎は……私達の父の次
……3代目の跡継ぎに男が生まれなかったことを酷く嫌ってしま
した……」

そして紗耶香は話始めた。双子として生まれ、家柄をこだわる祖
父に邪険に扱われた過去を……

最初の孫である真子が生まれた時、赤城一郎はまだ上機嫌であつ
た。女ではあるが、まだ子供を作らせればいいだけの話と思ってい
た。

が、次に生まれてきた双子を見て、一郎は怒り狂った。双子は元
気な姉妹だったのだ。そのコトで彼は息子や息子の嫁に激しく憤慨
したが、彼女はもう子供を産める身体では無くなってしまったのだ。

息子達家族は気にせずとも、一郎はそれが気に食わなかった。自
分がここまで築き上げてきた会社を、将来どこの誰とも知らない男
に取られるコトを嫌ったのだ。

それからというもの、彼はこの3姉妹……特に双子を徹底的に
無視した。

物心ついた小学校2年の時。凜は偶然祖父の部屋の前を通った時に祖父の電話を聞いてしまった。

「全くだ！修一も華恵さんも役にたたん！！1人も男の子を産めないとは全く・・・！」

それを偶然聞いてしまった凜は思った。

「私が男の子になったら、おじいちゃん優しくなるかなあ・・・」

普段優しくもされなければ、話し掛けるだけで睨まれていた。それが怖くていつも怯える気弱な妹を想い、凜は決意した。

「男の子みたいになれば、おじいちゃんも優しくなるんだ！」

その日から、凜は変わった。もともと活発でわんぱく少女だった凜は、学校で今まで以上に男子と交ざって遊ぶことが多くなり、言葉使いも真似した。たまに男子とケンカして泣いてしまうこともあったが、小学校を上がる頃には男子にも女子にも人気のある明るい少女になっていた。凜はそれで楽しかったし、紗耶香もそんな姉が自慢だった。

そして、中学に上がる時に事件は起きた。

皆の行く市立中学では無く、私立の女子校に通うことになった凜と紗耶香。その日は2人の進学祝いで親族も集まってパーティーが行われた。

「凜、紗耶香！おめでとう！」

父が2人に祝福の言葉を贈ると、2人は照れ臭そうに笑った。

「ありがとうございます！」

紗耶香が父に抱きつくと、凜が呆れながら言った。

「おいおい・・・オレ達もう中学生だぜ？いつまでも父さんに甘えたりすんなよなあ？」

「ええ？ダメなお！？」

紗耶香がたずねると、凜は腕を組んで堂々と頷く。

「大人はもう甘えちゃいけないんだぜ？」

「まだ胸無いもん・・・」

「そーいうもんだいじゃねー！！」

2人が騒いでいると、姉の真子も笑顔でやってきた。

「確かに凜の言ってることも合っているけど・・・甘えちゃいけないなんてことは無いわ？」

「あ、真子姉さん！」

「姉貴！次からまた同じ学校だからな！！」

2人がそれぞれ言うと、そんな可愛い双子の妹達の頭を撫でながら真子は「まだまだ子供ね」と言った。

「な、なんだと姉貴・・・！オレは大人だ！」

凜が叫んだ時だった。

「うるさいのお・・・！ちつとは静かにせんか！」

奥で酒を呑んでいた一朗が凜に怒鳴った。

「ご、ゴメン・・・」

凜が謝るが、一朗は一杯煽るとまた口を開いた。

「大体、お前のその言葉使いはなんなんだ・・・？男の真似事なんてして・・・」

久しぶりに自分に向けられた祖父の言葉に、凜は笑顔で答えた。

「じいちゃんが昔『男がよかった』って言ってたから、それでオレもそんなこと考えてたらこうなってたわ」

はっはっはと笑う凜。その笑顔には邪心ひとつ無い。が、それを聞いた一朗は次の瞬間凜を怒鳴り付けた。

「バカたれがぁ！！」

それだけで、辺りがシーンとなる。怯える紗耶香を真子と2人で隠す。が、一朗の狙いは最初から凜だった。凜の目の前に来ると、酒臭い息を撒き散らして声を荒げた。

「いくら男の真似事しても！男じゃなかったら意味が無いんじゃないこのダラズがぁ！！」

言つて、凜を突き飛ばした。飛ばされた凜は何が何だかわからない。すると今度は胸ぐらを捕まれた。

「人を不機嫌にさせてくれるのぉ・・・！普段見てるだけでも頭に来るといふのに・・・気持ち悪い！お前なんて役立たずのいらん子

じゃ！！！！それに・・・！！」

「か、会長・・・！落ち着いてください・・・！！」

すぐに一朗の部下が止めに入る。2人係りで一朗を引きずり部屋を出ていく。が、一朗は部屋を出ても叫んでいた。

「凜・・・！！」

「凜お姉ちゃん！？」

真子と紗耶香が凜の肩を叩く。が、その瞬間。

「気持ち・・・悪い・・・？」

バタつと音をたててしゃがんでしまった。その顔には、涙があふれていた。

集まる家族、姉妹、親戚が見守る中で、凜は大泣きした。ただ優しくして欲しかったのに・・・それだけすら、自分が男で無かったから叶わなかった・・・そう思い、凜は悔やんだ。自分がいくら真似事しても、意味が無いのだと悟った瞬間だった。

それからしばらくの間、凜はひどく落ち込んでしまった。学校では今まで通りの振る舞いをしていたが、家ではそれをするまでにかなり時間がかかった。

しかしそれから復活してからは、そんなコトでへこんだり傷つくようなコトは全く無かった。

「そんなことが・・・」

話を聞いた圭太はその複雑な環境が悲しくなった。

なぜそんな理由で凜が辛い想いをしなければならなかったのか。

がら続けた。

「いやあ！お前らの言葉聞いてたらさあ、悩んでるの馬鹿らしくな
つちまつたぜ・・・！考えてみりゃ、あのジジイは今ごろ地獄だし
・・・悩むのはオシマイ！サンキューな！！」

2人の肩をパンパン叩きながら笑う。もはや完全復活だった。

「よおし！そうと決ればさっきの2人組をぶつちめに行こうぜ皆の
衆！！・・・ってあれ？」

1人叫んでいたが、2人の視線に気付いて黙ってしまふ。2人共
怒りと呆れの交じった顔で凜をじつと見ている。

「まあいいや・・・それでこそ凜ちゃんってことで・・・」

「ご迷惑をかけてしまつて・・・圭太さんすみませんでした・・・
まあ、確かに凜お姉ちゃんらしいですけど・・・」

圭太がため息まじりに呟くと、紗耶香が圭太に頭を下げた。

「お、おいちよつと待てよ・・・！！なんだよその目は！？」

「別にくい？」

2人の反応を見て、凜は何か腑に落ちなかったが、取り敢えず心
の中に閉まつておいた。

「ま、圭太と紗耶香のおかげできれいさっぱりしたし・・・本当に
ありがとな・・・」

そう言つて、凜は2人に頭を下げた。2人がいなかったら、きつ
と今頃まだ泣いていただろうことは、凜が1番わかつているのだ。

「オレさ・・・バカなクセに1人で溜め込んで、1人で考えるから
実はいつつもストレスが溜まつてたんだ・・・だからさつきもあんな
になつちやつてさ・・・これからもしこういう事があつたら、そ
の・・・頼つてもいいか・・・？」

凜が恥ずかしがりながらたずねる。すると同じ顔をした妹が凜に
抱きついた。

「凜お姉ちゃん？私達は姉妹なんだから・・・なんでも溜め込まな
いで相談してよ・・・」

紗耶香がぎゅっと抱き締めると、凜は照れながらも頷いた。

「僕や由美、旭さん達も・・・みんな友達だから・・・困ったらみんなんで助け合おう。僕に出来ることがあったら、いつでも言つてよ」

圭太も凜と紗耶香を見つめて笑いながら言つと、凜はふと、前から気になつていたことをたずねる。

「前から言いたかつたんだけどよお・・・その『凜ちゃん』てやめてくんねえか？なんかよくわかんねえけど男に『ちゃん付け』って昔っから苦手なんだ・・・」

凜が言つと、圭太は少し首をかしげる。

「オレなんか年下なのにお前らのこと呼び捨てなんだ・・・オレの事も呼び捨てにしてくれよ」

笑いながら言つと、圭太は少し考えてから「うん、わかったよ」と言つて首を縦に振つた。

「じゃあそんなわけで、これからもよろしくな圭太」

「よろしくね、凜・・・」

2人は握手して、笑つた。そして3人はもとの場所に戻るべく、他愛の無い話をしながら歩き始めた。

「あーもう！なんでこんなに人だらけなのよ！」

その頃由美は駐車場内にあるファーストフード店を駆け回つていた。さすがに土曜日は人が多く、人ごみの中を探すのは至難だ。

エスカレーターを下ると、下で真子と合流した。

「由美ちゃん、そつちは？」

「いないわよ・・・!?もう人がいつぱいで・・・」

「取り敢えず一回戻ってみましょう・・・もしかしたらもういなくなってるかもしれない・・・」

真子の提案で、2人は一度駐車場に戻ることにした。真子はあたりをキョロキョロ見渡しながら2人組のバイクを探す。

「あの2人は青の玉虫カラーに3段、風防のゼファーで来てたから、見つけたらそこで待ち伏せする・・・!」

「わかったわ真子さん・・・同じゼファー乗りの私に任せて!」

由美はぐつと親指を出して答える。が、すぐに申し訳なさそうにして真子に呟く。

「あの・・・真子さん」

「なに?」

「普通のゼファーって、その・・・どんな形だったかしら・・・?」

「・・・はあ」

真子は呆れてため息すると、由美は両手をブンブン振りながら弁解する。

「ち、違つたのよ!?別に忘れちゃったわけじゃなくて、だからその、ホラ・・・!私のゼファーちゃんはFX仕様だから・・・!」

「とりあえず青色で白の3段つけてるバイクを見つけて・・・」
すると由美はまた少し考えてから。

「あの・・・3段って・・・?」

「もういいわよ・・・」

真子はもう諦めて、自力で探すことにした。

しばらく2人は辺りを早足で歩きながら並ぶバイクをしらみ潰しに見ていく。真子は途中、「Z・STYLE」のメンバーに情報を聞いたり、見つけたら教えてもらうように話をした。

「わかりました・・・見つけたら連絡してください、ありがとうございます
ざいます」

挨拶をしてまた早足で探しに行こうとした時だった。ガスタウン

ドの前にあのゼファーと2人組を見つけた。見ればガスを給油し終えたのか、すでに2人はゼファーに乗って発進する寸前だった。

「居たわ・・・！あんな所に！」

真子が走りだすと、由美も後に続いた。

「あ！思い出した、あんな形してたわね・・・！」

ぼん、と手を打ちながら呟くが、すぐにマジメな顔になって追い掛けた。

「凜ちゃんを泣かすなんて、ゼファー乗りの風上にも置けないわ・・・待ちなさい！！」

由美が叫ぶと、2人組のうち、リアシートに乗っていた1人が慌てて発進を促した。

「やべえ！さっきの女だ！」

するとハンドルを握っていた男が振り向いて言った。

「だったらどーしたん？フラれたじゃ・・・」

「さつきちよっかいかけて1人泣かしちまったんだよ！！早く出せよ・・・！！」

「ばっ・・・！この野郎は・・・！」

言って、男はアクセルを開けた。ゼファーはカットされた集合管から汚い音を吐き出しながら発進する。

「ちっ・・・気付かれたか！？待ちなさい！」

真子が走りながら叫ぶが、待てと言われて待つバカは無しとばかりに出口へとゼファーは走っていく。人間が走ってバイクに追い付けるわけも無く、ゼファーはどんどん出口に向かって走っていく。

「なんとか逃げ切れたな・・・」

男がアクセルを吹かしながら呟く。しばらくは大黒は来れないなと、1人考えていると突然、目の前に真っ赤なバイクが出口を封じるようにして飛び出してきた。

「うわぁー！！」

叫びながらフルブレーキ。ゼファーは車体を暴れさせながらも、なんとかギリギリ停車した。

「んだよテメエあ!？」

後ろに座っていた男が文句をつけると、目の前の赤いバイクのリアシートにいた革ジャンの男が降りてきた。運転している男もアクセルを吹かしながら彼らに言った。

「正義の味方!ただいま参上!」

追い付いた真子と由美は、その赤いバイクに乗る2人の男を見て驚きの声を上げた。

「な・・・!？」

「なんでここに!?!今日は用事があるって・・・!？」

真子と由美が言っていると、ゼファアの2人組はそんな真子達を無視して、目の前に現れたバカ2人を威圧的な目で睨みながら叫んだ。

「正義の味方あ!?!ザけんなよタコお!!!」

「横濱の『舞闘會』舐めてんかよ!?!」

言いながら、ゼファアの2人組が降りてきて自称正義の味方に殴り掛かる。

「ぶとうかいだあ?知らねえなあ!」

革ジャンを着た男が言っていると、『舞闘會』を名乗るゼファア乗りの男が殴り掛かる。

「クシヤにしてやんよ!」

右の拳を振り上げながら叫ぶが、拳は革ジャンの男に当たる前に捕まれてしまう。

「クシヤになんのはオメエだよバアカ!!!」

ドスツ・・・!

掴んだ相手の腕を引き付けて、革ジャンの男は相手の腹に蹴りを一発入れる。

「おえ・・・!?!?ぶひゅ・・・!」

腹に入れられた男は、その場でうずくまるようにして崩れ落ちた後、胃液を吐きながらのたうち回る。

「て、テメエあ．．．!!」

やられた仲間を見て、もう1人は少し戸惑った。

(こ、コイツら．．．バカだけど強え．．．!!?)

「おいそこの悪党の下っぱ、今ひどいこと考えただろ?」

男の思考を読んだように、自称正義の味方が睨みながら言うと、男は焦りながら叫んだ。

「テメエらナニモンだあ!?!これ以上ジョートー切んなら、テメエら『舞闘會』と戦争だぜ!?!」

自分達のバツクの名前を出しながら男が叫ぶ。

「ウチのチームは武道派のケンカチームだからよお?テメエら困んでクシャにすんくれえ．．．!!!」

そこまで言うと、自称正義の味方はヘルメットを脱いだ。

「舞闘會?ケンカチーム?だったら?」

全く余裕な顔で頭を掻きながらたずねる。

「オレ達正義の味方がそんなチンケなチームに負けるって?バカじゃん。なあ正義の味方の部下その1?」

すると革ジャンの男が自称正義の味方を睨み付ける。

「誰が部下だこの野郎、オレの方が偉いに決まってるべ」

「あれあれあれ!?!ここまで乗せてきてやったの誰だつけえ!?!」

「うるせえバアカ!カンケーねえべ!?!」

「デートの約束破って美春ちゃんにビンタくらって腕噛まれた挙げ句．．．単車の鍵取り上げられた甲斐性無しのカカを乗せてきてやったこのオレ様に、そんな口きいていいのかなあ?」

自称正義の味方が言うと、革ジャンの男はヘルメットを脱いで自称正義の味方の胸ぐらを掴む。

「テメエ、覚悟の上で言っただべなあ．．．!!?!」

「覚悟の上は覚六覚七覚八覚九．．．」

「ぶっコロす!!」

「ジョートーだあ!!」

突如仲間割れを起こす2人組を見て、真子と由美は完全に呆れてしまう。

「ねえ由美ちゃん……」

「なに真子さん……」

「あの2人、仲悪いの……?」

「ただのバカだと思っわ……」

そんなこんなで仲間割れをし出す2人のバカを見ていると、忘れ去られたゼファアの男がキレた。

「て、テメエら無視してんじゃねえよ!舞闘會ナメてんなよ!!」

言いながら2人めがけて殴り掛かると、2人は同時に振り向きながら右ストレートを繰り出した。

「邪魔すんじゃねえ!!」

2人同時に言っつて、男の顔面を左右から挟むようにしてぶん殴ると、ゼファアの男は顔面を押さえて崩れ落ちた。

「あ、なんか当たった……」

「弱っ……!」

2人が言いながらゼファアの男を見下ろしていると、ようやく真子と由美が2人に声を掛けた。

「助かったわ……2人とも」

「旭さんも洋介さんも……なんでここに!?!」

由美が話し掛けると、自称正義の味方……洋介が手を上げながら近づいてきた。

「よお!真子ちゃんに由美ちゃん!!元気!?!」

「ま、まあ元気だけど……それよりどうしてこんな所に?」

由美がたずねると、革ジャンの男……旭がぶっ倒れてるゼファアの男を、どこからか拾ってきた木の枝で突きながら言った。

「そりゃあこつちのセリフだ……なんだってこんなダサ坊なんて追っ掛けてたんよ?」

旭の質問に、由美は聞きたいことが沢山あったがとりあえず答えた。

「ま、まあいろいろ・・・その2人が凜ちゃんを泣かして、それで謝らせようと真子さんと追い掛けてたら・・・」

「あなた達が出てきたってわけよ」

真子も言っと、洋介は笑いながら旭を指差した。

「所で聞いてくれよ・・・コイツさあ・・・!」

「あ、バカデメエ・・・!?!」

旭が洋介の口を封じようと身を乗り出すが、すでに遅かった。洋介は某いっこく堂の操る腹話術人形のようにペラペラと話しはじめた。

「コイツさあ・・・今日美春ちゃんとの約束すっぱかしてこのイベント行くつつつたらさあ、美春ちゃんに『あつくんのバカあ!』ってビンタくらった後手え噛まれて、おまけにサンパチのキー取り上げられてさあ!!」

「わーわー!!や、やめるこの野郎!!」

旭が叫ぶが、洋介はしっしっしと笑いながら続ける。

「そんでオレに電話してきてさあ・・・頼むよあ・・・連れてってくれよう・・・洋介様あ!」とか言っちゃってさあ・・・!!」

「なに脚色してんだよバカヤロウ!!んなコト言っつてねえだろ!!!!」

旭がキレると、洋介は「まあまあ、そんな怒るなよ」と言いながら逃げる。そんな逃げる洋介を、旭が鬼の形相で追い掛ける。少し危険な鬼ごっこが今始まった。

「バカね・・・」

「真子さん・・・とりあえず、2人のゼファーと洋介さんのヨンフオアどかしましょう?後ろが・・・」

言いながら振り返れば、後ろは車やバイクが渋滞していた。出口を封鎖されていたので、出るに出れなかったのだ。2人は車のドライバーに頭を下げつつ、バイクと男達を移動させた。

そんなこんなで、4人はゼファアの2人を連れて自分達の愛車のもとへ歩いていくと、すでに圭太達が戻っていた。

「あ、おかえり由美」

圭太が言つと、由美は「はぁ・・・」とため息をして愛車のシートに腰を下ろした。

「大変だったわよ全く・・・」

「さっきの2人組は？」

「あそこ」

言いながら指差した。圭太がその場所を見れば、見覚えのありすぎる2人の男がゼファアの2人組を蹴飛ばしながら歩いていた。

「な、なんで旭さんと洋介さんが!？」

驚きながら圭太がたずねると、由美は説明しようとして・・・面倒になつてやめた。

「おう圭太、調子はどーよ？」

ゼファアの2人組を蹴りながら旭がたずねると、圭太は「ま、まあ・・・」と言つた。

「凜・・・連れてきたぞ」

真子が自分のマツハに座る凜に言つと、凜は苦笑いしながら謝つた。

「ごめんな姉貴・・・」

「気にするな、姉妹だろう？」

真子が言つと、凜は恥ずかしそうに笑つた。

「ほら、早くワビ入れろやコラア」

旭がゼファアの2人組を凜の目の前に連れてくると、まるで引き

立てられた囚人の様に2人は凜の前で土下座した。

「す、すみませんでしたあ!!」

そんな土下座する2人を見て、凜は笑った。

「別に？オレはもうなんとも思ってたねえよ」

「いいの凜？」

真子がたずねると、凜は清々しく笑った。

「だってよお、コイツらのおかげでオレは吹っ切れたし、なんていうか・・・大事なモン手に入れられたし、なによりあんまりワビとか好きじゃねーし」

言いながらポリポリと頬を搔く。そんな凜を、皆は暖かい目で見つめる。

「じ、じゃあオレ達は・・・？」

「ゆ、許してくれるんですか・・・!？」

男達は土下座したまま顔を上げると、凜は頷いた。が、最後にひとこと付け加えた。

「これからは人にちよっかいかけんなよ？もういいよ」

「は、はい・・・!!」

言いながら、2人は立ち上がってもう一度頭を下げしてから立ち去ろうとする。すると、旭と洋介がその2人を呼んで、なにやら遠くでひそひそと耳打ちをした。すると男達は顔を真っ青にして旭達に頭を下げた走り去っていった。

「何を話してたんですか？」

圭太が旭にたずねると、旭は「なんでもねーよ」と言って誤魔化した。

「じゃあ問題も解決したことだし！またバイク巡りしましょう!!」

由美が言つと凜と紗耶香、洋介が「おーっ!」と叫んだ。時間はまだまだある。7人はそれぞれに『KAWASAKI Old Bike Meeting』を楽しむことになった。

「洋介これすげえな！」

「ああ、車種からしてセンスいいな！」

旭と洋介は1台のバイクのを舐めるように見ていた。

「隠れ名車、Z400RS族仕様！この赤いショート管がなんとも・・・！」

洋介が呟くと旭も頷く。当時のカワサキ4ストミドルの主力マシンであるZ400RSは2気筒のシングルカムと、メカ的な要素は普通だが、当時人気絶頂だったZ750RSを似せたそのスタイルは、当時Z2を買えなかった高校生達を中心に人気を集めた玄人好みのバイクだ。

「FXのアルフィン流用とか、なかなかだよなあ」

2人はそんな感じでバイクを見てみると、そのすぐ近くで赤城姉妹が白いバイクの前でうつとりしていた。

「ああ・・・このバイクこそ、マツハの名にふさわしい・・・」

「オレのマツハの次にカッコいいバイクだよな・・・！」

「エグリが！CDIが！全てがあ・・・！」

うつとりする真子と凜。興奮のあまり叫ぶ紗耶香の目の前には、説明不要の伝説の名車。カワサキ500SSマツハ？がその威風を漂わせていた。

「私も、BEE Tチャンバーからこのデンコーチャンバーに換えようかな・・・」

真子が惚けながら見つめるのは、真っ黒に塗られ真っ直ぐ後ろに伸びるチャンバー。カミナリマップと言えばデンコーチャンバーなのだ。

「いやあ、デenkoーは高いぜ!？」

「探す……!いつかならず……!」

凜の言葉に、真子は何かを誓ったらしい。ぐっと拳を握る。

「エグリ……タマゴウインカー……一文字ハンドル……最高のエンジン……止まらない曲がらない……」

その横で、紗耶香は何かに取りつかれたかのようにずーっと呟いていた……

「やあ!少年少女達!!楽しんでるかね!!!???」

「あ、また出たわね!」

「どうもです」

由美と圭太の目の前に、水木一郎太が現れた。一郎太は豪快に笑い2人の肩を叩きながら言った。

「オレのゼエエエツト!!も見てくれた!？」

「い、いえ……まだ」

圭太が言つと、一郎太はそんな2人の背中を押しながら歩き始めた。

「じゃあ是非見てくれ!?オレの自慢のゼエエエツト!!」

「お、押さないでよ!うるさいわね……!」

由美が文句を言うが、一郎太はまるで気にせず2人を自分の愛車の前に案内した。

「これだゼエエエツト!!」

そこには、真っ黒にオールペンされたZ1が堂々と鎮座していた。『鞍シート』と呼ばれる純正アンコ抜きシートに、少し絞りを入

れたハンドル。手曲げのヨシムラシヨート管に5本キャストホイール等、まさしく『Z1カスタムの手本』のような代物だった。

「うわぁ・・・大きいなぁ・・・」

ナナハンの存在感に圧倒された圭太が言うと、由美も興味深く見つめる。

「でも・・・タンクになにか書いてあるんだけど・・・『Z』?」

由美がタンクを上から覗くと、そこにはエアブラシで薄く『Z』と描かれていた。

「よおく気付いた! オレのZにはカスタムペイントが施してあるんだぜエエエツト!!!!」

1人叫ぶ一郎太を2人は無視して観察していると、やはりそのスタイルの良さに気付いていく。

「なんだろう・・・このタンクからテールまでのラインは、全然形は違うんだけど僕のFXと雰囲気似てて本当にカッコいいなぁ・・・」

圭太が少し離れて見ていると、由美もなにかを呻きながら言った。

「んー・・・やっぱりカワサキのバイクは1番カッコいいわね・・・センスが・・・」

そんなことをつぶやきながらZ1を見ている。

「『これがバイクだ!』って見せれば、今のバイクみたいにごちやごちやしてないからみんな納得するぜエエエツト!!!!」

一郎太が得意になって言う。その言葉はかなり説得力がある。確かにカワサキが嫌いな人間はいるが、Zが嫌いという人はあまりいない。それほどバランスのいいデザインなのだ。

しばらくすると、一郎太は誰かに呼ばれてどこかへ去っていった。主催者だけあって忙しいらしく、かなり動き回っていた。

「そろそろ僕達も戻ろうか? みんな帰ってきてるだろうし」

「そうね、そうと決めれば早く行きましょう!」

2人は戻り際も沢山のバイクを眺めながら歩いていった。

戻つてくると、前からは赤城姉妹が。横から旭達が合流した。皆いろいろ見回れたのか、満足そうな顔だ。

「圭太君も由美ちゃんも、今日は楽しめたかしら？」

真子がたずねると、2人は笑顔で頷いた。

「本当に今日は誘ってもらって嬉しかったです」

「ありがとね真子さん！」

すると凜と紗耶香も笑って答えた。

「オレも楽しかったぜ！まあ迷惑も掛けたけど・・・圭太達のおかげで吹っ切れたしな！？」

「本当に今日はありがとうございました！」

そんな感じで話していると、旭と洋介も笑って頷いた。2人は力ワサキ乗りでは無いが、メーカー問わず旧車が好きなので満足のようだ。

「それじゃあ、暗くなる前に帰るわよ？」

真子が言うと、皆それぞれ自分の愛車に跨がってエンジンを掛ける。それぞれの『音』を奏でながら出発の準備をしている。

圭太も自分のFXに火を入れてアクセルを開けて吹かすと、横から凜が歩いてきた。

「あ、あのさ圭太」

「ん？どうしたの？」

たずねると、凜は少し顔を赤くさせて頭を下げた。

「き、今日は本当にありがとうな・・・！？そ、それだけだ・・・！」

すると圭太は笑いながら言った。

「僕は大したことしてないよ。でもなんか困ったコトがあったら誰でも良いから、相談してよ？」

すると、凜は少し下を向いて「わ、わかったよ・・・」と言った。

「僕も困ったら凜ちゃんに相談することもあるかも知れないしね」

「圭太・・・！さっきも言ったけどその『ちゃん付け』はやめろっ

て！」

凜が言うつと、圭太は「あ、忘れてたよ」と笑いながら訂正した。

「ゴメンね、凜」

すると、凜は満足したのかニコニコ笑いながら立ち去っていった。

圭太がそんな凜を見ていると、後ろから殺気を感じた。振り向くとそこにはかなり殺気だった由美がいた。

「圭太あゝ!?!」

「な、どうしたの・・・?」

圭太がたずねると、由美はじとつと睨み付けながら言った。

「いつのまに呼び捨てで言い合う仲になったのかしらあ?」

「なんか男にちゃん付けされるのが嫌なんだってさ」

すると、由美は圭太の頭をヘルメット越しに打つ叩いた。

「痛っ・・・!?!?な、なにすんだよ由美い!?!」

圭太が涙目で訴えるように言うつと、由美はふんつ!とそつぽを向いて無視。なにやら怒りを買ってしまったらしいが、鈍い圭太には全くなんのこトかわからなかった。

「それじゃあ出るわ!洋介君、後ろよろしく」

真子が言うつと、ヨンフォアに跨がる洋介が「任せろ!」と張り切る。後ろに座る旭がつまらなそうにしているのは、やはり自分が走れないからだろう。

「それじゃあ、出発よ!」

由美が叫ぶつと、皆ギヤを入れて発進した。先頭を真子が、後から紗耶香、凜、圭太、由美、そして洋介が続いた。

入り口同様に特徴的な道を走り高速に乗る。レインボーブリッジに差し掛かる6台の旧車は、それぞれに景色を楽しみながら走っていく。途中、圭太達の目の前を走る凜のマツハがゆっくり左右に口ルした。どうやら気分が良いらしい。

夕日に照らされた橋の上を進む6台は、愛車が愛車同士、それぞれの音で会話でもしているようだとに思える。

今のコンピューター絡めのバイクでは感じ取れない、まるで意志を持っていくかのようなその『声』を圭太も由美も僅かだが感じていた。そしてその全てを感じ取った時が、旧車乗りの最大の喜びであり、自分の分身になりうるのだ。

圭太と由美の愛車が2人の分身になる日が来るのも、近いかも知れない。

第31章 ドタバタ！（後書き）

試験放送！

『翔子と紗耶香のマニアック旧車談議！』

この放送は『旧車物語』の読者の皆さまの提供でお送りします。

翔子「あの・・・その・・・よくわからないんですけど・・・？」
紗耶香「その・・・聞くところによると何かバイクについて私たちが話せばいいみたいです・・・」

翔子「いや・・・それはわかるんですが・・・き、緊張でうまく喋れるかどうか・・・」ガタガタ

紗耶香「だ、大丈夫ですよ！で、今日のバイクはなんですか!？」

翔子「き、今日はその・・・このバイクです!!」

SUZUKI RE-5

1974年～1976年まで発売

紗耶香「ちょ・・・いきなり・・・!？」

翔子「ききき、今日紹介するバイクを必死に考えていたら・・・き、緊張のあまりなぜかこのバイクを選んでしまいました・・・」

紗耶香「しかしまた・・・すごいバイクを・・・」

翔子「と、とりあえず進めましょう・・・!!その前に深呼吸しましょう!!」

紗耶香「は、はい・・・!」

すーっ……はーっ……

翔子「で、では……このバイクはですね、世界的に見ても珍しいロータリーエンジンを積んだバイクなんです！70年代に発売され、それ以前は国内4メーカーがそれぞれロータリーエンジンの研究、試作をしたのですが、販売にこぎつけたのはなんと意外なことにSUZUKIだけでした」

紗耶香「まず滅多にお目にかかれないバイクですよね……！なんですかねえ……」

翔子「その理由としては、ロータリーエンジン特有の理由があります」

紗耶香「理由ですか？」

翔子「このRE-5……総排気量は約500ccなのですが、これを普通のエンジンに置き換えて計算すると、750ccを超えてしまつんです」

紗耶香「あ……！？もしかして……」

翔子「そうです……当時の国内では『750cc以上は売らない』という自主規制があつて国内では販売できなかつたんです……」

紗耶香「不憫ですね……かわいそう……」

翔子「さらに当時、75年には世界的なオイルショックが起こります。日本ではティッシュや紙製品を買いだめする人が増えたりして、2ストエンジンにも黄色信号が灯りました……」

紗耶香「あ！もしかしてRE-5も!？」

翔子「そう、ロータリーエンジンの弱点である燃費の悪さが災いになってしまい、主要輸出国であるアメリカでも受け入れられず……画期的だったロータリーエンジンを載せた夢のバイクは、わずか2年間で生産を打ち切られてしまいました……」

紗耶香「か、悲しすぎます……」

翔子「では実際に見てみましょう！悲運の名車、RE-5です！」

バン！！ 写真

紗耶香「何度見てもすごく無骨なデザインですね・・・」

翔子「どちらかというと当時併売されていたGT750のような雰囲気がありますよね」

紗耶香「今は見慣れていますが、エンジンの前にこんな大きなラジエーターがあるんですから当時はGT750と並んで驚かれたでしょうね・・・」

翔子「エンジン以外の特徴としては、初期型に見られるこの『茶筒メーター』ですね」

紗耶香「本当に画期的というか・・・今にも昔にも無いデザインですよね」

翔子「私がスズキで1番評価しているところは、今言ってくれた『今も昔もオンリーワンなデザイン』ですね」

紗耶香「確かに、特にスズキはそういうバイクが多いですね」

翔子「それだけに好みははっきり分かりますが、私はそういう個人的なスズキは好きですね」

紗耶香「私もですね！」

翔子「さて、それでは今回はこのあたりで締めましょうか」

紗耶香「最初は緊張しましたが・・・話してたら忘れていましたね！」

翔子「そうですねえ、次回は紗耶香さんですけど、大丈夫ですか？」

紗耶香「がんばります！次回はカワサキの名車を紹介します！」

翔子「それではみなさん！次回をお楽しみしてみてください」

紗耶香「放送中に間違ったことを言っていましたら、作者さんにそつと教えてあげてください。それと、私たちに紹介してもらいたいバイクや知りたいバイクがありましたら、是非お便りを！」

美春「そして！！『真田美春のオールナイトニッポン』にも愛のお便り！待ってるよお」

翔子&mp;紗耶香「うわぁ！！??？」

翔子「な、なんで美春さんがここに!?!」

美春「ふっふっふ・・・！しいちゃんとサヤリンばかり目立ってたから、お邪魔に来たんだよお」
紗耶香「まあ、よくわかりませんが、それではまた次回！ごきげんようです！」

そんなわけで、31章です。

実際にこういう感じのミーティングに行くと、いろいろの人たちと交流が持てて、情報などが入りやすくなるので自分はよく行きませんが、RE-5は未だに対面したかとは無いですねえ・・・汗
感想やご指摘、両ラジオのお便りなど随時受け付けております！それでは！！

追記

今回登場した団体、名称は実在しません。もし被っていましたら、連絡をください。修正致します。

3気筒

第32章 ツーリングチームを作ろう！（前書き）

今回も宜しくお願いします！

第32章 ツーリングチームを作ろう！

前回の『KAWASAKI Old Bike Meeting』から2日。今日は月曜日だ。

6月に入り数日、季節はもうじき梅雨になる。バイク乗りには連日の雨により遠距離ツーリングにはしばらく向かないという、なんとも辛い時期である。まだ雨こそ降ってはいないが、それも時間の問題だろう。

「もうじき梅雨入りねえ……」

昼休み、由美は学校の教室で圭太と昼食を取りながら呟いた。

「梅雨と言えば……雨……はあ……」

ため息をついて、ミートボールをぱくりと口に頬張る由美を見ながら、圭太も卵焼きを箸で割ながら言った。

「そういえば由美は昔から梅雨とか雨とか嫌いだよな」

「梅雨が好きな人がいる……？せいぜいな所、農家の人と田んぼにいるタニシくらいよ……」

「タニシはともかく農家の人に失礼だよ」

言ってから圭太は卵焼きを頬張る。今日のは砂糖が効いていて甘くて美味しい。

「今まで梅雨でいいことなんてほとんどなかったわよ……中学の時には1週間前から準備して前日は眠れなくらい楽しみにしていた遠足が延期になったり、朝は靴下までびちよびちよになるし……それに今年からは私の好きなゼファーちゃんに乗る時も雨が降るのよ……?はあ……」

言いながら、自分の弁当のおかずが残っているにも関わらず、圭太の弁当箱にある卵焼きに手を伸ばす。が、圭太が由美の箸を自分の箸で払い除けながら何ともないような口振りで由美に言う。

「まあ確かに……それは僕も嫌かなあ……ていうか、自分の弁当食べてよ」

「たははは・・・いや、ちょっと美味しそうだったからつい、ね」
笑いながら言う。

しばらく無言の状態が続く。圭太が弁当を食べ終わり弁当箱を包んでしまいなから目の前の由美を見ると、由美は弁当を食べながら前回買っていたバイク雑誌を見ていた。

「ねえ圭太」

「ん？」

「これを見て」

由美が雑誌を指差した。それを圭太が覗き込むと、とあるツーリングチームの投稿したツーリング先の写真とレポートが載せられた特集ページだった。

「一昨日の横浜のミーティングとか、こういう雑誌に出てくるツーリングチームを見てて思ったのよ・・・」

「何を・・・？」

圭太がたずねると、いつになく真剣な眼差しで由美が言った。

「私達で・・・ツーリングクラブを作りたいのよ・・・！」

圭太を見つめる由美の目は大真面目だった。圭太は「ん・・・」と考えながら口を開いた。

「すごい良い提案だと思う・・・けど、別にチームにする必要は無
いんじゃないあ・・・？」

すると由美はバンツ！と机を叩いた。

「する必要があるのでよ！！！」

「例えば？」

圭太がたずねると、由美はびしっ！と圭太を指差しながら立ち上がった。

「例えば・・・！！！」

「うん・・・」

「・・・」

「・・・？」

「・・・カッコいいからよ！！！」

「聞いた僕が間違ってた・・・」

言つてため息をつく。圭太ははしゃぐ由美に説明を求める。

「作つたとして、リーダー・・・責任者は？」

「それは当然、作つた私よ！私がリーダーよ！」

由美がたいして無い胸を張りながら言う。そんな由美に、圭太はまたため息をつく。

「リーダーっていうことは、ツーリングの計画から行くまでの道のり、行った先でもしトラブルが起きたらその対応とか、みんなが家に帰るまで責任を持って行動しなきゃいけないんだよ？そんな大変なことが由美に出来る？」

圭太が言い終わると、由美は先ほどの胸を張つた偉そうな姿勢から一転、へにゃへにゃへにゃと脱力して机に突っ伏した。

「そ、そんなに大変なの・・・？」

「大変だと思うよ？」

圭太の答えを聞いた由美は唸りながらどうすれば良いのかを考えていると、ふとあることに気付いた。

「そういえば・・・圭太、やけに詳しいわよね・・・？」

「うつ・・・!？」

由美の言葉に圭太が一瞬震えた。が、すぐに笑つてごまかした。

「そ、そんなことは無いよ・・・！全く由美は・・・僕がそんなこと考えるわけ・・・」

「ふん、つまり圭太も私と同じこと考えてたのよね？」

言い逃れする圭太を遮つて由美がトドメを刺すと、圭太は顔をわずかに赤くさせて恥ずかしそうにうつむいた。

「やっぱりね」

「ご、ゴメン・・・僕もちよつと懂れて、少し調べたんだ・・・」
白状した圭太が頭を下げると、由美はまた偉そうにふんぞり返つて言った。

「ま、圭太が嘘付くの苦手っていうのは私が一番よく知ってるわよ!??」

今回は珍しく由美に軍配が上がった。最後まで取っておいたミートボールを口に入れて、ミートボールと勝利の味を文字どおり噛み締める。

「大丈夫よ！私がリーダーで圭太が副リーダーをすれば、上手く行くわよ！」

そういうと、圭太はまだ唸りながら答えた。

「まあなんにしても、旭さんや真子さん達が入ってくれれば・・・それ以前に賛成してくれるかどうか・・・」

「入ってくれるわよ！そうと決まれば！！今日も放課後に旭さん達を集めて緊急会議よ！！」

由美が弁当箱を包んで乱暴にカバンに投げ入れながら勢い良く言う、圭太は『また明日宿題やって来ないな・・・』と思ったが、言っても無駄なのは小学校の時から知っているので諦めた。

「そうと決れば！早速みんなにメールを打つわよ！」

一人叫びながらケータイを取り出してメールを打つ由美を見て、圭太は困ったような笑いを浮かべながら教室を後にした。

時を同じく、相模の某所某道を、旭と洋介が歩いていた。

「ったくよ・・・なんでオレがオメエのフォアのパーツを取りに行くのにつきあわなきゃなんねーんだよ？」

旭がぶつくさ言っていると、洋介がニタリと笑いながら言う。

「この前のミーティングでケツに乗せてやったのはあ？誰だったかなあ・・・!？」

「そ、それとこれとは・・・！」

「バーカ、一緒だよ！文句言わずに歩けよ」

洋介が言うと、旭はまだぶつくさ言いながら歩き始める。

「あーあ、徒歩とかけたらしいぜ・・・軽トラどーしたんよ？」

旭が小石を蹴飛ばしながらたずねると、洋介はため息して答えた。

「ウォーターポンプがイカしてパアツ・・・しばらく動かねえよ、全く」

機嫌悪そうに短髪頭を掻き毟る。そんな洋介の横で旭も自慢のリーゼントパーマをイジっていると、後ろの方から爆音が轟いてきた。

ファン・・・！！ファアアアアア！！ファンファン！！！！

「おう洋介・・・」

「なんだよ、シヨーブすつか？」

2人はニヤリと笑いながら目を併せた。

「この音は・・・間違いねえな・・・」

「ああ、引き分けかな・・・」

そして2人は「いつせーのーせ！」で同時に言った。

「「ビーエックスつかねー！！」」

そしてバツと振り向く。

「この独特なエンジン音は・・・やっぱりビーエックスつかねーべなあ」

「だよな・・・なんだ旭も同じ答えかよお」

どうやらエンジン音で車種当てクイズをしていたらしい。因みに2人の予想はホンダのCBX400F、通称『ビーエックス』だ。

2人が音の聞こえる先を見ていると、近づいてきているのかコー

ナーのガードレールにヘッドライトの光が反射した。

「来たあ！」

「どーなんだ!?!」

2人が見つめていていると、爆音でコイルを切りながら1台のバイクが走ってきた。ブチ上げロケットカウルにアップハンドル、3段シートに出口の細いマフラーを付けたいわゆる『族車』が旭達の前を走り抜けていった。

「なっ……!?!? ビーエックスじゃねー!?!」

旭が叫ぶと洋介も驚きを隠せないらしく、「そんなバカな……!?!」と悲鳴を上げた。

「見たかよ洋介!今の野郎の単車!?!」

旭が言うつと、洋介も頷いた。

「ペケジエーだって……?どーしたらあんな音が出せるんだよ……?」

2人の目の前を突っ走って行ったのは、白ベースのカスタムカラーで塗られたヤマハのXJ400。通称『ペケジエー』だったのだ。

「なんでペケジエーがビーエックスみてえな音させれんのよ……?」

旭も唾然としていると、ふと洋介が何かに気付いて旭の肩を叩く。

「なあ旭……」

「あ……?んだよ?」

「うちの地元によお……あんなペケジエー乗ってる奴いたか……?」

マジメな顔でたずねる洋介。それを見て旭も「そーいやそーだべ」と呟く。

「さつきチラツと見たらよお、ナンバーヨソだったし、多分オメエの言うつおりだな」

旭が言うつと、洋介は未だにマジメな顔で呟いた。

「『金剛會』以外の族に捕まんなきやいいけどな、あのペケジェー・
・・」

洋介が言ったのは、2人の後輩が仕切る暴走族である。

「バアカ、長良達はオレ達が気合い入れたんだ・・『金剛會』だ
ってヨソ者が走ってたらとっ捕まえてクシヤにしちまうよ」

旭がタバコに火を点ける。一息吐き出してから再び口を開く。

「パンピーならともかく・・その筋の者にや容赦しねーよ」

すると洋介も笑いながら頷く。

「まあ、な・・ただ、オレ達はなんだかもうそんなこと思わなく
なってきたよな」

「そうだな・・」

旭が呟く。タバコを驚異的な肺活量で一気に根元まで吸い、地面
に投げつけた。

「美春や・・圭太達と走ってたら、んなクダラネーこたあ、もう
どーでもいいよなあ」

「ああ・・」

2人が空を見上げながら頷く。

「オレ達、もういつまでもガキじゃいらんねーな」

旭が言うと、洋介は黙って頷いた。

「じゃあその伝説のリーゼントも、そろそろ引退だな」

洋介が笑いながら言うと、旭は唸りながら「そうかもなあ」と言
う。すると洋介は驚きを隠しきれずに叫んだ。

「あ、あのお前が・・リーゼントをやめるだなんて・・！悪い
夢だぜ・・」

すると旭は笑いながら言った。

「パーマをやめるべえ、リーゼントはやめねーよ」

言いながら笑う。洋介もほっと胸を撫で下ろす。そんな洋介を見
て、旭は言った。

「オレ達ももう、バカみてーなことやクダラネーこと、辛いことも
含めて沢山やってきたし・・ここらでそろそろガキ卒業して大人

の不良になんねーと……な」

「ああ……」

すると、旭のケータイが鳴り響いた。旭はポケットからケータイを取出して画面を覗く。

「あ、由美ちゃんからだ……」

「え？なんだって……？」

洋介も覗き込むと、画面にはこう書かれていた。

ハロー！エブリニヤン！！

どうも皆さん！

今日、時間空いてるかしら？空いてるわよね！？

少し話したいことがあるの！素敵なお話だから、みんな是非来てよね！

場所はこの前の喫茶店、『Yesterday』で！翔子ちゃんには私から電話しとくわ……！！

オーバー……！！

どうやら一斉送信された物らしい。

「ったくよお、こー見えて忙しいんだぜ？」

旭が言うと、洋介は笑った。

「こういう可愛い弟や妹がいたら、確かになあ」

「……ああ」

旭はメールを返信すると、再び歩き始めた。

「オレらぁオトナンワルになるべえ洋介……！！」

「おつよ……！！」

そして一気に放課後になった。いや、実際にはかなりの時間があつたのだが、昼休みからホールームまで爆睡していた由美からすると一瞬の出来事であつた。

「ほら由美、いつまでも寝てないでさあ・・・」

圭太が呆れながら声をかけると、寝ぼけた由美が呻きながら呟く。

「あれ・・・？授業は・・・？」

「とつくに終わったよ・・・」

「んー・・・またやつちやつたわね・・・」

言いながら、身体を起こそうとして力を入れた瞬間、由美が奇声を上げた。

「うぎゃあああああ！し、痺れたあ！！」

どうやら長時間座つたまま寝ていたためか、かなり痺れているらしく手すら動かせずに突つ伏した状態から動けないらしい。

起き上がることも寝ている間に垂れたヨダレを拭くことも出来ずに苦しむ由美を見て、圭太はニヤリと笑つた。そして

「えい」

と人差し指で由美の腕を突いた。

「ふぎゃあああああ！！」

痺れた腕を突いた瞬間、由美が面白い悲鳴をあげるので圭太は楽しくなつてもう一度突こうとしたが、なんとか復活した由美に虐待を受けて撃沈したのは言うまでもなかった。

「・・・痛い」

帰宅道で、圭太が真っ赤になった頬をすりながら歩いていると、ようやく機嫌を直したのか由美が言った。

「さっきメール見たら旭さんと洋介さん、美春ちゃんも来るって！」

「他の人達は？」

圭太がたずねると、笑いながら由美はケータイの画面を見せた。

「真子さんと凜ちゃんね。紗耶香ちゃんは用事があるみたい。翔子ちゃんは遠いから少し遅れるって」

「それでもそれだけ集まったんだね」

圭太が言くと、由美はニコニコしながら言った。

「それじゃあ早く行きましょう！？夢への第一歩よ！！」

そして走りだす由美を、圭太は困ったように笑って追い掛けた。

それから一度帰宅した2人は、すぐに身支度をしてバイクに乗って、喫茶店『Yesterday』へ向かった。到着したのは集合時間5分前だった。

「もうみんな来てるね」

圭太がF Xを店の前に停めて言った。隣には洋介のヨンフォアと美春のサンパチが仲良く停まっていた。

「おじさんこんにちわ!!」

由美が店のドアを勢い良く開け放つと、店からおじさんが出てきた。

「ああ由美ちゃん。元気かい？」

「ええ！また手伝いに来るから呼んでくださいね？」

「はははっ、それは助かるよ！友達はあその奥にいるから、ゆっくりしていきなさい」

言ってまた厨房に戻っていった。

「ゆーちゃん！けーちゃん！こっちだよお！」

店の奥にある1番広い席から、間の抜けた美春の音が響く。隣には旭と洋介も座っていた。

「やあやあゆーちゃんにけーちゃん！久しぶり」

「久しぶり！……でも無いじゃない」

由美が言いながら席につく。圭太も3人に挨拶して席についた。

「赤城姉妹は？今日は来るんだべ？」

旭がたずねると、美春は時計を見ながら言った。

「2人はまだ少しかかるわね。隣街だしね」

「そーかい」

言ってコーヒーを飲む。由美と圭太もそれぞれコーヒーを注文した。

「そっついえば美春ちゃん、旭さんのこと許してあげたのね」

由美が先日のミーティングの時のコトを思い出しながら言うと、美春はニッコリ笑いながら言った。

「うん！そのかわりに日曜日に沢山遊んでもらったよ」

「許してもらえて良かったわね旭さん」

するとコーヒーを飲みながら旭が顔を少し赤くして言った。

「ま、まあな……」

「あ！あつくん照れてるう
「るっせえ！」

旭が「けっ！」とそっぽを向き皆が笑っていると、外から軽くも爆音の2スト音が響いてきた。しばらくして店の扉が開くと、真子と凜が姿を現した。

「真子さん！こっちこっち！」

由美が呼ぶと、真子と凜はこちらに気付いて歩いてきた。

「遅れてすまないわね。道が混んでたのよ」

真子が申し訳なさそうに言うと、後ろで凜がコソッと呟いた。

「それでもすり抜けしまくりだったけどな」

2人は席について同じようにコーヒーを頼むと、本題に入った。

「で、今日ここに集まったのは？」

真子がたずねると洋介と旭も頷いた。

「またどっかツーリングでも行くのか？」

「トオハツならこの時期向かねーぜ？」

すると由美は「ふっふっふ……」と不気味に笑う。「今日集ま

ったのは他でもないわ……今日は重大な提案があるの」

「提案？」

真子が言うと、由美はまた不気味に笑ってから立ち上がった。

「そう……！！私達でツーリングチームを作るのよ……

！！！！！」

そして手を広げて堂々と言い放った。

「つ……ツーリングチーム……？」

旭が言うと、由美は「そうよ！」と言って説明を始める。

「せっかくみんなバイクに乗ってるんだもの！チームにしたほうがカッコいいじゃない！！！」

「あの、ゆーちゃん」

「なあに美春ちゃん？」

由美が指名すると、美春も立って質問をした。

「ツーリングチームにすること事態は賛成だけど……名前は？」

「美春ちゃん、気が早いわね！まずは賛成か反対かアンケートを取ります！！まず、賛成の人は挙手！！」

すると皆一斉に手を上げた。

「楽しそうだしなあ、オレはいいと思うぜ」

凜が言つと、旭も頷く。

「オレもだ。揃いの服とか着て走ったらカッコいいしな・・・問題は、誰がアタマあやんのかっつーことだが・・・」

すると、洋介が声を上げた。

「オレやるオレ！アタマはオレ！！」

「バアカ、オレがやるに決まってるべ」

すると由美はバン！と机に手を置いて言つた。

「ちよつと待つてよ2人とも！リーダーは提案した私よ！」

3人が睨み合っていると、真子がため息しながらやれやれといった感じで言つた。

「こんなに早く仲間割れするなんてしょうがないわね・・・私が責任を持つてリーダーを・・・」

「な！？待てよ姉貴！！オレもやりてえ！！」

「だあかああ！！その2人も！私がリーダーって言ってるじゃない！！」

「ちよい待てよ由美ちゃん、ここは単車歴の長いオレが」

「歴なんて関係無いわよ。そーいうのなんていうか知ってる旭さん？年功序列って言つたのよ？」

「いや、由美・・・それは全然全くもって関係ないから・・・」

圭太が呆れてツツコミを入れるが、聞こえていないのか聞いていないのか。皆でギャーギャー言い合っている。つまりみんながみんなリーダーになりたいらしい。

「よおし！じゃあここは間を取つて私がリーダーをやつてあげやう」

美春が言つと、圭太を除く5人が一斉に「「「それはありえない！！」「「「と叫ぶ。

「そ、そんなにやあ・・・！」

そして1人落ち込む美春を放置して討論は白熱。ついに埒が明かなくなってしまう。

それからしばらくずーっと皆が騒いでいると、店の外からまたエンジンの音が聞こえたのに圭太が気付き店の入り口を見てみると、からんからんとベルが鳴った。ドアから外はねの髪の毛をした少女が入ってきた。

少女はすぐにうるさい奥の席に気付いてこちらに歩いてきた。

「あ、圭太さん。遅れてすみませんでした」

翔子が圭太に挨拶すると、圭太もそれに応える。翔子はギヤースカギヤースカ騒ぐ皆を見て圭太に質問した。

「あの・・・皆さんどうしたんですか？」

「実は・・・」

圭太は今までの経緯をさらっと話した。

「なるほど・・・ツーリングチームですかあ・・・素敵です！」

「でもみんな誰がリーダーをやるのかでずーっと揉めているんだ」

呆れながら言うと、それまで騒いでいた由美がやっと翔子に気付いた。

「あ！翔子ちゃん、久しぶりね！」

「どうもです」

すると皆も翔子に気付いて一旦騒ぐのをやめて、とりあえず落ち着いた。

「全く・・・みんなワガママで困っちゃうわよ」

由美がぼやくと、旭がジロツと睨みながら「そりゃあ由美ちゃんもだべ」と言う。

「でも考えてみたらリーダーとかいらないうような気が・・・」

圭太が言うと、翔子もウンウンと頷く。

「リーダーを決めるよりも、なにか役割を分担したりしたほうがいかも知れませんか。例えば・・・」

コーヒーに砂糖とミルクを入れてくるくる掻き混ぜながら旭と洋

介を見る。

「旭さんと洋介さんは、皆さんのバイクが壊れた時などに指示や修理を行う『メカニック』・・・真子さんと凜さんは行き先までの道のりなどを計画する『ナビ』とか・・・」

「なんか・・・地味だな・・・」

翔子の提案に凜が微妙そうな顔で呟く。そんな凜を見て、圭太は笑って言った。

「僕はそれでも良いと思うよ？そうすればリーダーが1人でやらなきゃいけないことをみんなが協力してやるからスムーズに事が運ぶし・・・僕は賛成だよ」

圭太が翔子の意見に賛成すると、場の空気が変わった。皆それぞれで話しながら意見を出す。

「よし・・・！オレと洋介あその話に乗ったぜ！」

まず旭と洋介が賛成側に回った。

「私は最初からどっちでもよかったからそれでいいよあ」
美春も翔子にニコツと笑みを向ける。

「私達も賛成だ・・・圭太君が賛成して、私が賛成しないワケにはいかない」

「お、オレは別に圭太がどうかじゃねーからな・・・！？ただ、なんとなく姉貴が賛成だからそれに乗っかったただだかな・・・！？」

真子と凜も、なにやら怪しげな感じがぶんぶん臭うが賛成に回ったらしい。残るは由美1人だ。

「由美は？みんな賛成だけど」

「はあ・・・仕方無いわねえ、私もそれでいいわよ」

少しがっかりしながら言う。そんなにリーダーになりたかったのだろうかと圭太が思っていると、すぐにニコニコ笑いながら翔子に詰め寄った。

「じゃあ翔子ちゃん！早くそれぞれの役割を考えましょうよ！」

何故か急にテンションが上がっている。どうやらリーダー云々は

由美や旭達の中ではもう過去の話らしい。皆期待の眼差しを翔子に向ける。

「あの・・・そんなに見ないくださいよ・・・」

皆にガン見されている翔子は少し恥ずかしがりながら小さな声で呟いた。やはり小動物系らしい。

「じゃあ、とりあえずみんながやってみたい役割を挙げていってください」

顔を真っ赤にして撃沈した翔子の代わりに、圭太がノートとシャープンを取り出してメモを取る。

「オレ達はさつき翔子ちゃんの言った修理担当で良いぜ？」

旭が言つと、洋介もコーヒを煽ってから圭太を見る。

「地元ならともかく、ヨソの道なんかわかんないしな。オレ達は修理担当でよろしく」

笑顔で言つ洋介と旭に、圭太も笑つてノートにきれいな字で『修理担当 旭さん洋介さん』と書いていく。

すると次に凜が手を挙げた。

「逆にオレはさつき翔子が言つたナビ役は向かないと思うから、オレの代わりに翔子が姉貴とナビ役をすればいいんじゃない？」

「確かに・・・凜は方向音痴だし、私としても翔子ちゃんがやってくれると嬉しい」

「いや、そんなに言つなよ姉貴・・・」

真子の言葉に軽くへこみながら凜が呟く。

「じゃあ翔子ちゃんと真子さんがナビ役ね！」

由美が翔子の肩をポムッと叩くと、翔子は気を引き締めて真面目な顔で頷いた。

「わかりました・・・！責任重大です！！」

そう言つて拳を握り締める。いつになく燃える翔子を横目に、圭太は『ナビ担当 真子さん 翔子ちゃん』と書き加える。

「後はどんな役がありますか？」

圭太がたずねると、真子は「そうね・・・」と言つて圭太を指差

す。

「ツーリング先で掛かる費用を皆から集金したりする『会計役』・・・これは圭太君が適任だと思うわ」

真子の意見に、皆が一斉に驚きの声を上げる。確かに大勢で高速道路やガソリンスタンドに行った時に別々に支払うと時間も掛かるし何より後続の人達に迷惑を掛けてしまう。皆から費用を集めて管理する『会計役』は確かに必要役職かもしれない。

「で、でも僕がそんな大任を任されてもいいんですか・・・!?」
一方、選ばれた本人は自信無さげに皆を見るが、反対意見など出るはずも無かった。

「確かに、圭太は頭も良いししっかりしているからそういうの向いてるわ!」

由美が笑いながら言うと、皆も頷く。この状態で拒否など出来るわけも無く、圭太はノートに『会計役 自分』と書き込んだ。

「では取り敢えず『修理担当』『ナビ担当』『会計担当』・・・一通りの役割が決まりましたね」

翔子がノートを覗き込みながら言うと、由美と美春と凜と一緒に手を挙げた。

「ちよつと待ってよ翔子ちゃん! 私達の役割が決まってないわよ!」

由美が言うと、美春と凜も意見する。

「私もあつくんみたいにかっこいい役につきたいなあ」

「オレを忘れんじゃねー! オレは何すりゃいい!」

そんな3人を見て、一同は首を傾げたり上を向いて唸ったりしながら考える。

「由美に美春さんに凜・・・」

「また微妙な組み合わせだな・・・」

圭太と旭が頭を悩ませる。確かに、一見してなにか任せれそうな役職が見当たらない。

すると真子が手を挙げた。

「・・・3人にぴったりな役職を思いついたわ」

「え！？本当真子さん！！」

「なになにマコリン！教えてよお！」

「期待してんぜ姉貴！！」

3人の期待の眼差しを受けて、真子はフツと笑ってからその役職を言い渡した。

「その名も・・・おバカ担当」

真子の口から出た言葉を聞いて、由美達3人はぼかーんと口を開けて固まってしまった。圭太達も啞然とするが、真子はかまわず続けた。

「この役職だけ特別にグループ名もあるのよ？ほら」

言って、圭太のノートにすらすらと文字を書き込んでいく。

「ほら、こんな感じよ」

呆然としている3人にノートを見せる。そこには『おバカ担当
ろくでなしーず（由美ちゃん、美春、凜）』と書き記されていた。

「お・・・おバカ担当・・・？」

「ろ、ろくでなしーず・・・？」

美春と凜がシヨツクのあまり茫然自失になっていると、一足先に復活した由美が『ろくでなしーず』と書かれたページをビリビリと破き捨てた。

「ちよつと真子さん！なんなのこの『ろくでなしーず』って！！酷いじゃない！！」

まるで鬼のような形相で真子に詰め寄る。後ろの方ではやつと復活した2人「そーだそーだ！！」と声を上げる。

「ろくでなしーずは美春ちゃんと凜ちゃんだけ！！なんで私まで入ってるのよ！！」

「・・・」

「・・・」

今の由美の言葉で、ろくでなしーずは一瞬で仲間割れした。3人がギャーギャー言って揉めはじめると、真子は「やっぱりろくでな

しーずね」と言いながら頷く。その顔はどSモード時の怖い笑みを浮かべている。

「あの、真子さん……」

そんな真子に恐る恐る声をかける圭太。

「ん？どうしたの圭太君」

「いくらなんでも、『ろくでなしーず』は少し酷い気がしますよ？確かに間違っていないかも知れませんが……」

圭太が言つと、旭と洋介も後ろでウンウンと首を縦に振る。

「圭太君が言うなら……それなら『ろくでなしーず』はまた別の機会にして、普通の役職を考えましょう」

真子が言つと、圭太達も頷いた。やはりろくでなしーずの名前は返上出来ぬまま話は元に戻った。

「そーいやさあ、美春つて以外とケガとかの治療に詳しいんよ」

相変わらず仲間割れでギャーギャー騒いでいるとろくでなしーずを無視して旭が言つ。

「確かに美春さん、旭さんがケガした時に的確な処置をしてましたね」

圭太が最初に会った時のコトを思い出しながら言つ。

「じゃあ美春さんは『応急担当』ですね」

言つて、圭太が紙に書いていく。

「残るろくでなしーずのメンバー2人は？」

洋介がたずねると、翔子がおずおずと手を挙げた。

「あ、あの……！由美さんと凜さんには『外交担当』とかどうですか……？」

「外交？」

圭太が聞き返すと、「そうです！」と言つて説明する。

「由美さんも凜さんも行動力がありますから、他のツーリングチームと会った時やイベントに行った時にフロントに立つ重要な役割です！他にも例えば……ホームページを作って宣伝したりとか……」

「

「わかったわ！私がその役やるわよ！！」

「任せろ！！」

翔子が説明していると、いきなり横から由美と凜が割って入ってきた。

「で、では・・・由美さんと凜さんは『外交担当』で決まりです」

翔子が言うと、皆首を縦に振った。考えてみれば確かに2人に向いている仕事である。

圭太もノートに『外交担当 由美、凜』と書いて一息ついた。

「ではこれにて、役割分担決めを終了します」

圭太が言うと、皆それぞれに息をついたりコーヒーを飲んだりして一段落つく。

そこでショートピースに火を点けた旭が紫煙を吐きながら誰にともなく呟いた。

「で、このツーリングチームの名前は？まさか獏羅天とかじゃねーべな？」

「なんだその微妙なチョイス・・・」

旭の言葉に洋介が軽くツツコミを入れる。が、確かにそこは気になるところだ。

「なにか・・・私達に関係のあるモノを入れたいわね・・・」

真子が考えながら呟く。

「関係があると言えばもちろんバイクだろ？」

凜が言うが、それはみんなわかっている。なので他のコトで考える。

「みんな古いバイクだよね・・・旧車旧車」

美春が窓の外にある自分達の愛車を見ながらはしゃぐ。

「旧車・・・旧車・・・」

洋介がぶつぶつと呟く。

「なんつーか・・・難しいな・・・」

灰皿にタバコを押しつけて旭も頭を悩ませる。なかなかいいアイデアが出てこない。

「僕達に関係のある旧車っていうワードを名前にするのは難しいか

も・・・」

さすがの圭太もお手上げのようで、他に使えそうなワードを探っていく。

「何か他に無い・・・私達ならではの名前がいいわ。絶対にあるはずよ・・・!」

由美はすでに頭を抱えている。中途半端な気持ちで無く、これからもずっと一緒に走っていきたい友達とやるチームの名前を、適当や思い付きで決めたくない。由美と同じく、皆も同じ想いで考える。

しばらくの沈黙。今日はもうダメかと由美が思い出していたその時、翔子がおずおずと手を挙げた。

「あ・・・あの・・・」

「何？翔子ちゃん」

由美が言つと、皆の視線が翔子に向く。

「あ・・・あの、その・・・やっぱりいいですっ!!」

視線に耐え切れずに緊張してまた座ってしまった。

「翔子ちゃん、いいから言ってみなよ。オレらじゃもうなんも出てこないからさ」

洋介が優しく言つと、翔子はまだ少し緊張気味な表情だが立ち上がった。

「あの・・・わ、笑わないでくださいね・・・?」

「魔羅羅蛇とか鬼雷党とか言わなきゃ大丈夫だよ」

緊張をほぐすために、洋介が軽いジョークを飛ばす。

「じ、じゃあ言います・・・!!」

いよいよ決心したのか、深呼吸をしてからその名前を紡いだ。

「き、『旧車物語』・・・です・・・その、皆さんとの共通点の『旧車』と、私達がこうして出会つまでの『物語』・・・そしてこれから作っていく『物語』で繋げてみたんですけど・・・」

言つて皆を見ると、みんな黙つて翔子を見つめていた。翔子は慌てて両手をブンブン振つて言った。

「あ、その……!! ゴメンなさい! やっぱり安直でしたよね・
……!! やっぱり今のは無しで……!!」
「ちよつと待つて!!」

慌てて自分で自分の案を否決する翔子を由美が慌てて止める。そ
して驚きと嬉しさがごちゃ混ぜになったような表情で翔子に叫んだ。

「その名前……凄いいじゃない!!」
「……へ?」

絶賛する由美。そして啞然とする翔子。そんな翔子を置いて皆も
絶賛の声を上げた。

「それいいよお、すつごくいいよお」
「おお、確かに……オレ達を作る物語……スカしてんじゃねー
か! バリよバリ!!」

「『旧車物語』……他には絶対にいないし、意味も私達にピツタ
リだ……」
「さすがだぜ翔子……!! サンゴーフォアは伊達じゃねーな!!」

旭や真子達のかなりの大絶賛に、翔子は未だ啞然としている。

「こ、こんなので……いいんですか……?」
「変に格好つけるより全然いいよ! 『旧車物語』……スゴいい
名前だと思うよ?」

圭太が啞然とする翔子に言った。柔らかに曲げられたその目は優
しげに翔子を包んだ。

すると席の奥にいた洋介が近づいてきて固くなっている翔子の緊
張をほぐすように肩を叩いた。

「さっすが翔子ちゃん……!! オレは感動すら覚えたぜ!？」
「で、でも……私なんか考えた名前で良いんでしょうか……
?」

ここまで来て、まだ自信が無さそうに呟く。が、洋介はそんな翔
子の頭に手を乗せてわしゃわしゃと撫でた。

「もつと自信持ちな！こんな良い名前、翔子ちゃんしか出て来ないさー！」

「そうよ翔子ちゃん！」

すると由美も翔子の手を握って強く言った。

「こんなに素敵なお名前を考えるんだもの……もつと堂々としなきゃダメよ！特に、私達はチームにしてそれ以上に友達なんだから！遠慮はダメよ？」

由美が言って後ろを振り返る。翔子もそれに習って由美の後ろを見れば、そこには暖かい視線を送る仲間がいた。

「それじゃあみんな！チーム名『旧車物語』で決まりでいいかしら！？」

由美が叫ぶと、皆それぞれに賛成の声を上げた。

「しーちゃん、素敵なお名前ありがとうね」

美春の言葉がきつかけになり、皆が暖かい拍手で翔子を迎える。

すると翔子は啞然とした表情から一変、皆の暖かさに涙が出てしまった。嬉し泣きに顔を染めながら泣き出してしまった。

「おいおい由美ちゃん、翔子ちゃん泣かすなよなあ」

「わ、私じゃ無いわよ旭さん！洋介さんの頭を撫でる力が強かったから泣いてるのよ！」

「え！？オレ！？」

洋介がオーバリアクションを取って驚いている。

「み、皆さん……！あ、ありがとう……ご、ございます……！」

翔子が途切れ途切れながら、皆に言う。圭太や旭達もうんうんと頷きながら見ていると、突如由美が「よおし！そうと決れば！」と言いながら圭太のノートから一枚切り取った。

「今から私達のチーム……！！『旧車物語』のロゴや書体を決めたいと思うのだけど、どうかしらみんな！？」

「お？いいじゃねーか！！漢字の当て字なら得意だせオレあ……！」

「おいおい旭あ、族じゃないんだぜ？」

「わ、わかってんよ・・・！！あ、千尋も入れてやるのかな・・・」

「もちろんちーちゃんも入れてあげやう あっくんもみんなも嬉しそうだね お姉さんも嬉しいよお」

「よし凜・・・紗耶香に連絡を」

「言われなくてもメールしてる途中だぜ姉貴！」

由美の掛け声に皆も笑みをこぼして話し合う。あれがいいだこうしたいだ、ステッカーとか作りたい、いつかチームでジャケットを作りたい・・・少年少女達はそれぞれの想いを形にするべく意見を出しあう。そんなみんなを翔子が見ていると、圭太と由美が声を掛けてきた。

「見てよ翔子ちゃん・・・もう僕達の『物語』が始まってるよ」

「私達にしか描けない『物語』・・・！一緒に作って行きましよう！？」

そんな2人の暖かさに触れた翔子は一度下を向いて涙を拭き、満面の笑みで2人を向き直る。

「はい！！」

そして辺りは一気に騒がしくなった。

「よお旭あ、書体はもつとシンプルでいいんじゃないか？」

「バツカ洋介オメー、格好いい方がイイベヤ？」

「ちよつと旭さん！？それはみんなで決めるのよ！？」

「しーちゃん 泣き足りなかつたらこの適度に豊満なお姉さんの胸で泣いてえ」

「え！？いや、そのパターンはもう大丈夫で・・・ぶっ！？」

「紗耶香から連絡は？」

「来たぜ姉貴、今から急いで来るつてよ！！」

そんなこんなで皆が皆、思うように言い合ったり提案したりと一気に活気付いた。それを見ながら由美と圭太は互いに笑顔で見合っ

た。
「まさか本当にチームが出来ちゃうなんて・・・思いもしなかった

わ・・・」

冷めてしまったコーヒーを一口飲んでから呟くように言った。

「こうして僕達も・・・新しいことをいっばい見つけて行けたらいいね」

「そうよね！私達だけの物語にしましょう!？」

由美が嬉々として言う。そんな由美を見て圭太は頷きつつ、ふと翔子と美春を見て2人を指差した。

「とりあえずあれなんとかしないと・・・」

圭太が指差した方を由美も見れば、美春の胸の中でぐったりしている翔子が・・・

「あー!?み、美春ちゃん！翔子ちゃんが・・・!」

由美が驚愕しながら美春に叫ぶと、美春は胸の中でグッタリしている翔子を見た。

「あ・・・またやつちった」

「もう三度目じゃない・・・!翔子ちゃんしつかりして!？」

瀕死の翔子に必死で呼び掛ける由美、原因を作った美春の頭を拳骨でグリグリする旭と洋介、心配そうに見つめる赤城姉妹を見て圭太は呟いた。

「最初から読み疲れる物語になりそうだなあ・・・」

こうして、10人からなるメンバーが集まり『旧車物語』は新たな物語の1ページを捲った。未だ白紙のページに彼、彼女らはどんな物語を書き綴るのか。それは先にならなければわからない。

第32章 ツーリングチームを作ろう！（後書き）

今回は両ラジオともにありません汗

さて、今回のお話はいかがだったでしょうか？

ご意見ご感想ご指摘等、ありましたら宜しくお願い致します。 >)

— —) <

第33章 ろくでなしーずの逆襲！？勉強会！！

「ふあゝあ・・・」

朝の教室で、由美がそれはそれは見事なあくびにした。昨日のツリーリングチーム結成会議が終わった後、その日は皆解散。また別の日に機会を設けて話を進めることになったのだが、由美は家に帰ってからもずっとチームの事で頭がいっぱいに。文字どおり宿題など放って夜遅くまでチームの今後を考えてはニヤニヤ笑っていたためあまり寝ていないのだ。

「ちよつと由美い？あんたも女の子なんだから少しは遠慮とかしなさいよ」

近くにいた友達の女子生徒に注意されるが、由美は構わずに語りしだした。

「バイクに乗らない夕工は、今の私の幸せな気持ちを知らずに生きていくのよね・・・可哀相に・・・」

「宿題もやらず授業中も寝てばっか・・・あくびもデカくなるならバイクなんて乗らないわよ」

「それは昔からだって、中学から一緒だから知ってるでしょう？」「・・・自覚はあったのね」

そんなこんなで、夕工と呼ばれた女子生徒はどこかへ行ってしまったが、これはいつものコトである。由美はそんな女子生徒に手を振って・・・寝だした。

「と、いうわけで。来週は待ちに待った中間テストだ。みんな普段から真面目にやっていたいれば、簡単な話だよな？」

日本史担当のハゲ川が黒板の前で生徒1人1人を舐めるように見ながら言う。

「が……しかしだ。真面目にやっていない者もたくさんいるのも、また事実……可哀相に、そういう生徒は次の中間テストで痛い目を見ても仕方が無いよなあ？」

言って、ハゲ川が個人的にブラックリストに乗せている生徒数人を見ながら言った。その中には、今もボーツとしている由美も含まれる。そんな由美を見て、ハゲ川は集中攻撃……吊し上げの敢行を決定した。

「中山のノートを丸写しにしてるような奴ではそうなってしまいうよなあ、三笠？」

挑発するように言った。何故か名前を出された圭太は、ハゲ川の由美に対する集中攻撃を見て「また始まっちゃったよ……」と咳く。まあ、日本史だけなぜか不真面目な由美を目の敵にするのも自然な流れかもしれないが……。

一方、話を聞いた由美はボーツとしていたかと思うと、不敵に笑った。

「……タエのも写してます！」

しばし沈黙。そして

「………うるせえバーカ!!」

ハゲ川がキレた。

「お前……! 罰として今日から中間テストまで課題を毎日3枚だ! ……1枚でもやってこなかったらその場で居残り+今までやったプリント全てやらせるからなあ!!」

きしゃー!! と少ない髪を振り乱しながら言う。それを見て、生徒全員が「またハゲ川祭りが始まったよ……」とため息。

しばらく発狂していたハゲ川だったが、運良く終業時間が来た。

ハゲ川は由美のいる列にすわる男子生徒に「三笠に渡せ」と言っ

プリント3枚を渡して足早に教室を出ていった。

ハゲの居ぬ間になんとやら・・・圭太は由美の席に歩いていった。

「ほら見る由美・・・とうとう罰もらっちゃったじゃないか・・・」

因みに今までこの被害に遭った人数は由美を除く5人。

「大丈夫よ・・・日本史なんて楽勝よ楽勝」

言いながら今しがた配られた課題プリントを見る。そしてぐったり。

「はぁ・・・嫌になるわね・・・」

「自業自得」

因みに由美の日本史の成績は万年2。どうにも苦手な科目らしい。

「来週のテストまで毎日プリント3枚・・・はぁ・・・」

そうして由美は、仕方なしにシャープペンを手に取り・・・圭太のノートを強奪してプリントを開始した。

そしていつものように放課後がやって来た。圭太は自分の荷物を手に持ち由美の席に目を向けると、由美は机に突っ伏していた。

「どっ？さっきの課題」

言いながら圭太が上からのぞき見れば、1枚のプリントは出来上がっていた。

「なんとか1枚・・・はあ」

シャーペンやプリントをカバンに雑に入れてため息。残り2枚のプリントが恨めしい。自分で巻いた種だが・・・

「もう！こんなプリントの相手してる場合じゃないのに！！」

「でももうすぐテストだし・・・僕達も受験生だし頑張らないと」

圭太が慰めるように言うと、由美は「あ」となにかを思いついたようだ。

「じゃあ今日一緒に勉強会しましょう！？2人でやったらお互いわからないところとか一緒に出来るわよ！」

由美がニコニコ提案する。まあ、圭太のお知恵拝借&丸写しが目的なのだが・・・

そんな由美の良からぬ企みを長年の経験から読み取った圭太は首を横に振った。

「やめておく・・・今まで一緒に勉強会とかいって由美が真面目に勉強したところ見たことないし」

「な、なによ！私がダメな子みたいな言い方しないでよ！」

「いや・・・ダメな子な気がする・・・」

すると怒った由美はむくれっ面で席を立つと、「もういいわよ！」と言って圭太をにらむ。

「そこまで言うなら私の本気を見せてあげる！次のテスト見てなさいよ！？圭太なんか頼らなくなったって絶対に良い点取って見返してやるんだから！！」

そう怒鳴ってから、先ほど強奪したノートを圭太に渡して由美は教室を出ていった。

「そ、そんなに怒ることかな・・・」

一方、教室に置いていかれた圭太はぼつりと呟くしかなかった。

「よし……！それじゃあやるわよ……！」

家に帰宅した由美は制服を着替えもせず真つ直ぐ机に向かったが、すぐに立ち上がりどこかに電話をしまじめた。

「あ、もしもし？ちよつと聞きたいんだけど、美春ちゃん高校出るわよね？……うん、日本史わかる？あと数学と……うん、まあいいわ。暇なら手伝って欲しいのよ！……ええ、場所は……」

家の住所を相手に伝えて、電話を切った。

「次は……」

そしてまたどこかに電話を掛けはじめた。

「あ、もしもし？実はお願いが……え、今大学なの！？……え……凜ちゃんもテスト期間で……？……もうなんでもいいわ！助っ人が欲しいから……！」

そしてまた住所を伝えてから電話を切った。

「見てなさいよ圭太……！絶対に見返してやるんだから……！」

由美は不敵に笑いながら部屋の窓から見える圭太の家を見て言った。そして……先ほど玄関から取ってきたセファアのキーを一番下の引き出しにしまつて鍵を掛けた。

「今日からテストまでの1週間……！ゼファアちゃんには乗らない……！禁ゼファアちゃんするわよ……！」

由美の決意は固かった。拳を握り締めて禁バイクを誓った。が……

「……最後にゼファアちゃん見ておくくらい、いいわよね……？」

自分以外に誰もいないのに、誰かに言い訳するように呟いてこそぞ部屋を出ていった。

カアンカアン！！バリバリバリバリ・・・！！

由美の家の前に、ショットガンチャンバーの爆音と白煙を響かせ、ブルーのサンパチが停車した。

「ハローゆーちゃん ないすばでーの美人かてーきよーし！美春お姉えさんが助つ人にやってきたお って・・・なにしてるのお？」
相変わらず地球と逆回転で世界が回っている美春がなにかタワけたコトを吐かすと、そこには愛車ゼファアの横で耳をふさいでいる由美がいた。

「み、美春ちゃん！早くバイクのエンジン切って！！」

「あれれ・・・？そんなにうるさいかなあ？ゆーちゃんの直管と同じくらいだけど・・・」

言いながらサンパチのキーを捻りキーシリンダーからキーを抜く。爆発が終わったエンジンは走行熱でキンキン言っている。

「私・・・テストまでの1週間、禁ゼファーちゃんすることにしたのよ！でもバイクの音を聞くと・・・！！」

美春の胸ぐらに縋りついて、今にも泣きそうな情けない顔で言った。

「走りたくなつちやうのよお・・・！！」

「ちよ、ゆーちゃん落ちついてえ・・・！！」

いつもは落ち着かされる側の美春が由美を落ち着かせる。なんと

か落ち着くと、ぜえぜえと息を切らしている。

「身体に毒だよお？無理しちゃダメだよお・・・？」

美春が心配して言うと、由美は首を横に振った。

「ダメよ・・・！絶対に圭太を見返してやるんだから・・・！！」
言つて、由美は自分から見えなくさせるためにゼファーにカバ―を掛けた。

「だから・・・今日から勉強漬けよ・・・！！！！」

「よおしわかった！私も出来る限り協力してあげやう！！」

由美と美春ががちり握手する。なに、たったの1週間、なんでもないさと2人で言っていると、遠くから特徴的な爆音が響いてきた。

ブアツパアーン！！コアンコアン！！

「よう由美！オレも来週テスト期間なんだ。今日から1週間勉強しようぜ！」

真っ赤なタンクにレインボーラインをあしらった細身のマツハを停車させて、凜が現れた。

コアンコアン・・・！！

凜が数回アクセルを吹かす。すると・・・

「あ・・・あ・・・あー！！！！」

由美が発狂した。ゼファーのカバーを掻き毟るようになしてしゃがみ込んでいる。

「あ？どうしたんだよお前・・・」

「リンリン！早くマツハのエンジン切つてえ！！」

美春が由美をかばいながら必死の形相で叫ぶと、事情を知らない

凜はただ事では無いと、とりあえずエンジンを切った。

「なるほど『禁バイク』かぁ・・・」

その後、由美の家の駐車場にバイクを並べてから部屋に上がって、ようやく凜は納得した。

「しかしなあ、由美がそこまで言うなんで・・・圭太とケンカでもしたのか？」

凜がたずねると、由美は首を横に振った。

「ケンカなんてしてないけど・・・悔しいから見返してやるのよ！」

「はぁん・・・まあいいや。とりあえず勉強しようぜ勉強！」

言って、凜はカバンの中から大量のプリントを雪崩のように出した。

「どうしたのこのプリントの山・・・」

美春がたずねると、凜は投げやりに言った。

「これ全部課題だ・・・はぁ」

「こ、こんなにあるの・・・？」

由美が一枚手にとって内容を読む。問題自体は簡単だが、なににより量が半端では無い。例えるならマリオでノコノコが100匹出てくるくらい面倒だ。出てこないが。

「紗耶香は頭も要領も良いから余裕なんだけど、オレは頭悪いしサボリ屋だからさ・・・」

ふう、とため息。が、いつまでもへこたれてはられない。由美達は気合いを入れて勉強することにした。

「ねえ美春ちゃん。ここがわかんないんだけど・・・」
開始5分。早くも由美が美春に質問した。
「ん？どれどれ」

言いながら、美春は由美のノートを覗き込む。つい数ヶ月前まで同じ女子高生だった美春はノートを見てうーん、と唸る。

「織田信長が城下町に作った・・・なんだったかしら？」

由美がたずねると、美春はニコニコしながら言った。

「そういえば、いつかの大河ドラマに出てた織田信長って、ちょっと役者が合ってなかったよねえ・・・」

「ああ、○○○○でしょ？確かにあんまり迫力無かったわよね」

「そうか？オレは気になんなかったけどな」

そう言つと、凜はふと気になったコトをたずねる。

「なあなあ由美。信長って何城にいたんだっけ？」

すると由美は「そんなコトも知らないの？」と言いたげに自信満々に言い放つた。

「信長は大阪城よ！それくらいならみんな知ってるわよ？」

「ああそうだ大阪城！！」

由美の答えに、凜が大きく頷く。すると美春が「えー、違つよお」と言った。

「ゆーちゃん、大阪城は信長じゃなくて秀吉だよお？」

「あれ・・・？そうだったかしら・・・」

首を傾げる由美を見て、余裕の表情で美春は言った。

「信長は姫路城だよお、間違いないよお」

美春が胸を張つて言う。すると、2人は「おお・・・！！」と言っ

て拍手した。

「さすが1つ年上なだけあるわね！姫路城なんて名前、頭が良くなきゃ出てこないわよ！」

「ああ！ただのバカじゃなかったんだな！！！」

「いやあ、もつと誉めてえ」

3人はあははははは！と笑い合いながら話を戻した。

「じゃあその信長がやった政策ってなに？」

由美が再度問題を見せると、美春は少し考えてから言った。

「んー・・・出島！！！」

「・・・おお！！！」

「美春スゲー！！！」

そして由美はプリントに「出島」と書いた。

「なあ由美。この問題の数式がわかんねーんだけど・・・」

次は凜が由美にたずねる。由美がノートを覗き込むと、それは二次方程式だった。

「ああこれはねえ・・・こうやって・・・ここをひっくり返して・・・

ほら！」

「おお！」

由美が導きだした答えを見て、凜は喜びの悲鳴を上げた。

「やっぱ年上の奴と勉強するとわかりやすいよなあ！！！」

「いやあ、もつと誉めてえ」

美春と同じように調子つく。

しばらく答えを見ずに、皆で協力しあいながら問題を解いていく。

「安土城を作ったのは？」

「大工さんだよ」

「おおさすが！！！」

由美がプリントに大工と書き込む。

「なんかだんだん楽しくなってきたわ・・・！」

「なあ由美、ここ教えてくれよ？」

「これは・・・3の3乗よ！」

「ってことは・・・9だな!!！」

「そう!そういうことよ!!！」

この時、3人の少女達は地獄へと堕ちていることにまだ気付いていなかった・・・

「な、な・・・なによこれー!!!!！」

1時間後、教科書で答え合わせをしていた由美は悲鳴を上げた。

「『出島』じゃなくて『樂市樂座』・・・『姫路城』じゃなくて『

安土城』・・・!!? ついでに大工じゃないし・・・!! 姫路城にいたのは羽柴秀吉!?! なんて秀吉が2人もいるのよ!!！」

自分の力でやった問題から美春の助言を受けてやった問題まで、

ほとんどが間違っていた。ちなみに秀吉は1人しかいない。さらに・

・

「おい由美!! 答えが全然全く合ってねえぞ!! 擦りもしねえ・・・!!！」

凜も頭を抱えて悲鳴を上げた。特に凜の数学は間違った数式で解いていた為、1問も合っていなかった。

「ちよつと美春ちゃん! 全然違うじゃない!!！」

由美がバンっ!と机を叩くと、美春も抗議する。

「そんなぁ・・・! 私のせいなのぉ・・・!?!？」

「おい由美! 3の3乗は9じゃなくて27じゃねーか!!！」

「なによ！私が悪いって言うの！？美春ちゃんの言うとおりにしたからじゃない！」

「ゆーちゃん横暴だよお！」

「あーもう！！またやり直しじゃねーかあ！！！」

ギャーギャー言い合う3人。もう皆さんお気づきだろう。バカは3人集まってもバカ。しかもそれが『ろくでなしーず』なら尚更仕方が無いと……

騒ぎは10分後に鎮火。が、3人は机に突っ伏して死にかけていた。

「ははは……考えてみたら分かる話しじゃない……」

由美が言うと美春と凜も力なく言った。

「いくら私達3人集まっても……」

「頭が良い奴がいなきや意味がねえ……」

そしてどんよりとした雰囲気の中、重いため息。そんな中、由美がシャープペンを転がしながら呟いた。

「もう諦めようかしら……無理してゼファーちゃん封印して、圭太を見返すなんて……私には出来ないのよ……」

「由美……」

弱気になる由美を見て、凜が呟く。すると美春がガバツと起き上がった。

「諦めたらそこで試合終了だよ……？」

そして由美の手を取った。

「昔の偉い人の言葉だよお？諦めないで、頑張らなきや……！」

「そ、そうだったか……？」

凜がどこかで聞いたようなセリフに疑問を持つと、美春は立ち上がった。

「諦めるなよそこで！？どうして諦めるんだよ！？もっと応援してくれてる人のこと考えてみるよ！だからこそネバーギブアップ！」

「ど、どうしたんだよいきなり……！？」

いつもの間の抜けた美春とは思えぬセリフと態度に凜が驚くと、美春はまたいつものようにニコッと笑った。

「今日日本で一番熱い人の言葉だよお　ゆーちゃん！頑張ろう！負けたら負けだよ！！」

美春が笑うと、由美は一度うつむいて・・・顔を上げた。

「美春ちゃんの言う通りだわ・・・負けたら負け・・・！諦めたら試合終了・・・！！ネバーギブアップよ！！！！」

言って、力強く立ち上がって拳を握り締める。2人は由美の背後に龍神を見た。

「ゆーちゃん！！」

「由美・・・！！」

「よし！やるわよ2人とも！！ただ、美春ちゃんは教えてくれなくていいからこれで大きいコーラ買ってきて！もちろん徒歩で！！」

言って500円玉を渡すと、美春は「わかったよゆーちゃん！凜ちゃん！頑張つて！」と言って走っていく。

「コ○・コーラ買ってきてね！？ペ○シは許さないんだから！！」

由美は走っていく美春に声を掛けた。美春は親指をぐっと上げて去っていった。

「よしやるわよ凜ちゃん！！もう圭太にも真子さんにもろくでなし！ずとは呼ばせないために！！」

「よっしゃあ！やってやるぜ！！」

こうして、ろくでなし！ずは勉強を再開した。その名を返上するために・・・そして圭太を見返すために・・・！！

次の日から、由美は変わった。授業中はちゃんと授業を聞き、どうしても眠い時には目をセロテープで無理矢理広げて目が乾いても授業を聞いていた。もちろん、ノートもバツチリ取っている。

「ゆ、由美・・・？どうしちゃったの急に・・・？」

おそろおそろ圭太がたずねる。が、由美は不敵に笑っただけだった。

由美は決めていた。次に圭太と言葉を交わすのは、テストが返却されてからだ・・・

「美春さんが・・・？」

次の日の夜、圭太のケータイに旭から電話が掛かってきた。

「おお、なんでも由美ちゃんの勉強の手伝いって言って、毎日由美ちゃん家通ってんみてーな」

電話の向こうで旭が言った。

「なんでも由美ちゃん。テストが返ってくるまで圭太と口聞かねえらしい。オメなにやったんよ？」

「いや・・・特に身に覚えが無いんですけど・・・あ」

そこで思い出した。そういえば「見返してやるんだから！」とか言っていた気がする。そして自分が由美を「ダメな子」と言ったことを・・・

「ま、よくわかんねーけど。由美ちゃんが勉強終わるまでチームの話し合いは中止だからよ。じゃあな」

電話が切れると、圭太はケータイを机に置いて窓から由美の家を見る。2階にある由美の部屋には灯りが灯っているが、カーテンは

閉められていて中の様子は分からなかった。

「あー！また間違ってる！！」

その頃由美は、答え合わせをして悲鳴をあげる。横には美春と凜が連日の勉強疲れで倒れていた。

「ゆーちゃん・・・」

「もう今日は終わりにしましょう・・・また明日、ここに集まりましょう？」

由美が言う。ちなみに時刻は22時を廻っている。

「わかった・・・また明日頑張ろうぜ・・・」

「そうだねえ・・・」

凜と美春はそういうと立ち上がり、帰宅準備を始める。

「下まで送るわ」

由美も立ち上がり、3人は部屋を後にした。

「じゃあゆーちゃん、また明日ねえ！」

「明日は科学頑張るぜ！」

美春と凜が言うと、由美も頷いた。3人は軽く挨拶をして、美春と凜は愛車を押して去っていった。由美に気を遣って、最近では少し離れた場所からエンジンを掛けて帰っていく。

2人が見えなくなるまで見送り部屋に戻ろうとすると、遠くで2台のエキゾーストが響く。夜だと尚更だ。

「・・・ゴメンねゼファーちゃん」

由美は自分の愛車を見つめて呟いた。カバー越しにシートに手を置いて、由美は続けた。

「私が普段から真面目にやっていたら、毎日乗ってあげられるのに……」

強がってはいるが、やはり乗りたい。出来るならば今からでもゼファーと共に走り回りたい。そんな衝動に駆られるが、由美はその想いを首を振って振り払った。その時……

「由美……」

「!？」

いきなり呼ばれ驚いて振り向くと、そこには片想いしている幼なじみ、圭太が立っていた。

「ど、どうしたの圭太……？」

なんとか動揺を押さえて冷静にたずねると、圭太はいきなり頭を下げた。

「ゴメン由美！僕が余計なコトを言っただけで無理させちゃって……!」

その声はいつも以上に真面目な、心の底からの謝罪だった。

「旭さんから話を聞いて、由美はゼファーを封印しててみんなも頑張ってるって……だから、僕にも手伝わせてくれないかな……!？」

そこまで言うと、圭太はまた頭を下げた。

「ち、ちよつと圭太……!？そんなに気を遣わないでよ！」

一方由美はそんな彼に驚いて、とりあえず顔をあげるように言うのと、ため息をついた。

「全くもう……そんなに心配しなくても大丈夫よ？」

「で、でも……」

「嬉しいけど、圭太の提案は却下するわ」

「え……？」

驚く圭太を横目に、由美はゼファーのシートに手を置いた。

「私はいつも圭太に迷惑をかけていたわ……でも今回、みんなで勉強していてわかったのよ。今まで圭太に頼ってばかりで自分から真面目に勉強なんてしたことないなあ、って」

そこで一息ついてから由美は笑った。

「勉強は嫌いだけど、逃げてたらダメって気付いたのよ・・・授業中寝てばかりで何もしない私に、ゼファーちゃんに乗る資格は無いから・・・だから、今回は私達だけでやりきるまでゼファーちゃんには乗らないし、圭太にも迷惑は掛けないって決めたのよ」

「由美・・・」

由美の決意に圭太が呟く。

「わかった・・・勉強、頑張ってね！！応援してるから！！」

「うん！ろくでなしーずの名前を返上してやるんだから！！」

いつもの笑顔で由美が言った。そして、もうひとつ・・・

「ねえ圭太・・・？お願いがあるの」

「ん？なに」

圭太はなんだろうと思って由美の言葉を待つ。ちなみに、暗くてわからないが由美は真っ赤になっている。

「て、テストが終わって・・・良い点取ったら・・・つ・・・つ・・・
・ツーリングに行きましょう！2人きりで！！」

由美が言い切ると、圭太も笑って頷いた。

「うん！2人で行こう！」

次の日から由美は、まるで鬼人のようなオーラを放ちながらますます勉強に力を注いだ。今話掛けたら殺されるのではというほどの、まるで旭のように怖い顔でシャープペンを走らせる。

そしてついにテスト最終日前夜になった・・・

「ゆ、ゆーちゃん・・・？」

横に待機している美春がおずおず話し掛ける。すると由美は短く一言だけ言った。

「汗・・・」

「は、はい・・・！」

美春がすばやく由美の顔をハンカチで拭く。そんな由美に感化されて目の前の凜もかなり気合いが入っている。

「美春、消しゴム」

「はい・・・！」

「美春ちゃん、マーカーの赤」

「はいはい・・・！！！」

そしてそんな2人に扱われる美春も頑張つて2人のサポートをする。由美は数学のノートをパサリと閉じて美春に言った。

「美春ちゃん、コーラ！」

「はい・・・！て、あれ・・・？もう無い！？買ってくるよぉ！！！」

「○○・コーラだぞ！」

「わかつてるよりリンリン　ちょっと待つてねえ！！！」

笑顔で部屋を飛び出す美春を見送り、2人はまた机の上に広がる地獄に視線を落として再び勉強を開始した。

しばらくして美春が帰ってくると、コンビニの袋の中にはコーラの他に栄養ドリンクやチョコレートも買ってきていた。

「コーラにもカフェインが入ってるんだけどコーヒーみたいにそこまで入ってないから、もし眠くなってきたら栄養ドリンクだよ？あとチョコレートにもカフェイン！！それに勉強中に甘いものを食べると頭の回転が良く回るようになるんだあ」

チョコレートを割って由美と凜の目の前に置いた。

「ありがとう美春ちゃん！さすが救急担当ね！」

「ちょうど今甘いものが欲しかったんだ！サンキュー美春！！！」

2人は美春にお礼を言うとチョコレートを一口頬張り、その後に栄養ドリンクを1本煽った。味的には最悪の組み合わせだが、ここまで来たら背に腹は代えられない。

「だけど由美？もうすぐ深夜0時だぜ・・・明日のこと考えたら2

時までが限界・・・大丈夫かな？」

凜がたずねると、由美は不敵に笑った。

「なによ凜ちゃん、弱気なの？」

「な・・・！？バカ、自信満々だぜ！？」

凜がクマだらけの目を擦る。ここにいる3人はこの1週間毎日勉強漬けで実際はかなり辛いのだが、それぞれの瞳に輝く光を見て3人は言った。

「・・・まだ2時間ある・・・！！」「」

そして少女達は再び勉強に集中した。由美が今やっているのは、日本史。全ての元凶が最終日の、それも最後にやってくることにすると内心笑った。

「やってやるうじゃない・・・！！」「」

言って、最終チェックに入る。歴史で重要なのは年号と名前とあらゆる政策だ。そこを押さえれば確実なわけだ。由美は資料集片手に年号を確認。凜も明日は数学がある。些細なケアレスミスに気を付けて、文章問題などの応用をひたすら繰り返し返す。美春は由美には日本史の問題や、同時に行われる英語のテストに備えて単語帳から問題を出し、凜に対しては数式の確認や同時に行われる古文の勉強に付き合った。が、集中しているときほど時の流れは早い。時間はあっという間に深夜2時を過ぎて気が付けば3時を指した。3人はシャープペンや消しゴムを放り投げて一息ついた。

「あうう・・・疲れたよう・・・」

「こりゃあ完璧に腱鞘炎になるかもしれねえ・・・」

美春と凜が自分の体を揉み解しながら呟くのを見て、由美はふう、と一息ついてから美春を見た。

「ありがとうね美春ちゃん・・・私達の勉強に付き合わせちゃって・・・」

由美が頭を下げる。すると美春はニコツといつもの笑顔で由美の肩をポンツと叩く。

「私こそありがとうだよお！もう2度と勉強なんてしないだろーな

「ーって思ってたから、また勉強したら久しぶりに楽しかったよ」「えへへ」と笑う美春に由美は「ありがとう」ともう一度お礼を言っ
つてから、今度は凜に頭を下げる。

「凜ちゃんも・・・手首辛かっただろうけど、今日まで付いてきてくれてありがとう！」

すると凜は右手首に巻かれたテーピングと、その下にある湿布を撫でながら笑った。

「それはオレのセリフだぜ？お前が軽く腱鞘炎になって手首に湿布して、それでも勉強を続けたからオレも続けられたんだ！」

言っつて、2人はテーピングを見せ合う。2人のテーピングにはマーカーで『目指せ100点満点!!』と書かれていた。

「普段寝てばかりでいつも圭太に迷惑掛けて・・・みんなからは『ろくでなしーず』なんて呼ばれたけど・・・!!！」

そこで句切つて、由美は皆を見つめた。

「私達だつてやれば出来るんだって・・・みんなに見せてやりましよう!？」

「うん」

「まかせろ！」

そして3人は笑いあつた。ここまでやって、ダメなハズは無い。

由美も凜も今日までのテストで不安な場所も特に無い。後は最後までやり抜くだけだ。

「それじゃあ明日は最終日!!頑張りましょう!!」「おう!!」「応援するよお」

「たたいまあ・・・」

由美は家に帰ってきた。

そのまま部屋に上がり、制服も着替えずにフラフラと机に座ってカバンからノートを取り出してからふと気付いた。

「そうだ・・・今日は美春ちゃん達、来ないんだわ・・・」

今日までの努力の証が消しカスや破れたノート、栄養ドリンクの空き瓶などで型を残している部屋を見渡して由美は笑った。

「明日・・・明日のテスト返却で全てがわかる・・・」

由美はそのままバフッとベッドに身体を預ける。天井を見つめながら、今日のテストに不備が無かったかを何度も確認する。が、やはり大丈夫だ。由美は目を瞑るとすぐに寝息を発ててしまった。由美の寝顔にはどこか達成感があった。

そして運命のテスト返却日がやってきた。この学校のテスト返却方法は、最初の授業で担任教師が全教科のテストを返却。間違えた箇所の疑問や採点ミス等は担当の教師に後の時間にたずねるというシステムだ。

「えー、次、三笠」

「ははははは、はい・・・!!」

今の今まで指を組んで祈るようにしていた由美がすっとんきょうな声を上げて担任から答案用紙の入った封筒を受け取る。由美は震える手で封筒の封を開けた。

「由美・・・」

圭太が声を掛けると、三笠はガチガチに固まっていた。

「けけけけ・・・圭太ぁ・・・どうしよう・・・」

「どうしようもなにも・・・」

圭太が言うと、由美は首を横にブンブン振った。

「見るのは放課後 Yesterday に行く前に美春ちゃんと凜ちゃんとうちでするんだけど・・・もし低かったらどうしよう・・・!?!?」

「大丈夫だよ、あんなに頑張っていたんだから」

圭太が励ます。ここ1週間・・・由美の努力を見ていた圭太は断言した。

「とにかく・・・今日は Yesterday にみんな集まるからそこでみんなに自慢するくらいの勢いで大丈夫だよ!自信持って!!」

圭太が言うと、由美は「そうよね・・・!」と言って封筒を握り締めた。

「あんなに頑張ったんだもの・・・!!絶対大丈夫よ!!」

そしていよいよその時が来た。

「みんな・・・準備はいい・・・!?!」

「うん・・・!」

「頼むぜ・・・!」

由美達は由美の部屋でそれぞれのテストを持って集まっていた。見届け人として圭太もその場にいた。

「じゃあいつせーのーせー!で出すわよ・・・?」

緊張に包まれた雰囲気の中で由美が言うと、2人は頷いた。そして・・・

「「「いつせーのーせー!!!!」」」

3人が言つと、由美と凜が一斉に答案用紙を机の上に突き出した。全7教科合計14枚の紙が宙に舞い、机に落ちた。

「あ……！英語が82点……!?!?」

由美が高得点に思わず声を上げた。他にも見てみれば科学、古文、現文、数学も今まで見たことも無いような高得点だった。

「おお……!!やつたあ!!見るよみんな!!数学!!!!」

凜が悲鳴を上げながら皆に答案用紙を見せる。なんと1番苦手科目の数学が80点だった。

「おめでとうりんりん……！私も嬉しいよお!!」

今日まで2人を支えた美春は、もう泣きそうになっている。そして……

「う……嘘……」

由美が1枚の答案用紙を見て絶句した。その表情は凍り付いていた。た。

「ど……どうしたんだよ由美……?」

凜がたずねると、美春が不安そうに呟いた。

「ま、まさか日本史……?」

由美は1番不得意な教科……日本史の答案用紙を見ていた。圭太も不安になり由美を見つめる。

「ど……どうしよう圭太あ……」

「ゆ……由美……?」

そして絡繰り人形のようにカタカタした動作で答案用紙を皆に見せた。そして……

「ひ、ひゃ……ひゃくてん……とつちやった……」

「……」

「……」

「……」

しばし、皆絶句した。そして……

「……えええええええ!!!!!!???」

由美も含め、4人は絶叫した。

圭太は信じられないというように答案用紙を見る。そこには間違
いなく『100点』と赤ペンで書いてあった。

「すすすす……！！すっげえぜ由美！？やったじゃねえか！！！」

凜が由美に抱きついた。その瞳は濡れていた。

「ゆーちゃあん……！すごいよぉ……！！！」

美春など号泣しながら抱きついていて。ここまでの苦勞を分かち
合った3人は抱き合いながら喜んだ。

「み……みんなぁ……！！ありがとう……！！！」

由美もボロボロに泣いた。テスト用紙を握り締めて3人は泣き合
った。残り1週間と無い状況で今日まで必死に勉強してきた苦勞が
報われた瞬間だった。

そんな3人を見ていた圭太も、嬉しそうに笑った。

「みんな……よく頑張ったね！おめでとう！！！」

圭太が言うと、3人は泣きながら頷いた。が、いつまでも泣いて
いられない。由美は涙を拭くと立ち上がって、今日まで封印してい
た1番下の引き出しのカギを開けて、中から愛するゼファアのキー
を取り出して言った。

「それじゃあみんな……！！Yesterdayで打ち上げよ！
！おじさんに言ってタダでたくさんケーキ食べて！！明日はこの1
週間走れなかった分、たくさん走るわよ！？」

由美が言うと、2人は頷いてキーとヘルメットを持って立ち上が
る。圭太も後に続いて部屋を出た。

家を出て圭太がZ400FXを押して由美の家の前に来ると、そ
こにはキャンディブルーのGT380とレインボーラインのマツハ
がすでに暖気していた。そして……

「お待たせゼファアちゃん……やつと乗ってあげられるわ……」

初期型の真つ赤なゼファア400改FX仕様に跨がる由美がいた。
久しぶりにカバーの外に出て日の目を見るゼファアは光輝いていた。

「行くわよ……！」

キュル……ボアアアア……！！

セル一発。ゼファーはショート集合管から爆音を鳴らし、エンジンは歓喜の声を上げる。そのショート管から吐き出される排気音で、由美はまた涙が出そうになる。

「じゃあ行きましょう！？よろしくねゼファーちゃん……！」

「これで気兼ね無く走れるよおサンパチちゃん……！」

「この調子でいつか姉貴のマツハだってブツチぎってやるぜ……！」

3人はそれぞれの愛車の吐き出す音色に何か幸せな物を感じて走りだした。圭太も後ろから付いていく。

「あははははは サンパチちゃん、ぜっこーちよー……！」

美春が言いながらアクセルを開けて言うと、凜も白煙とオイルをぶち撒けながらマツハを走らせた。そして……

「圭太！やっぱり私達にはバイクが1番よね……！」

由美が微笑みながら言った。圭太も頷くと、今まで走れなかった鬱憤を晴らすように楽しげに走る3台のバイク達を見て笑った。

「よかつたね……由美……！」

笑顔の由美を見て、誰にも聞かれないように呟いて、圭太もFXを走らせた。

第33章 ろくでなしーずの逆襲！？勉強会！！（後書き）

今回もラジオはありません・・・申し訳ないです。

まああまり期待している人はいないと思いますが・・・（あ

今回のお話、勉強などほとんどしなかった作者が書いたのでどこか間違いがあるかもしれません汗

メインのバイクもほとんど出てきませんでしたが、宜しく願います（・・）

ご感想ご指摘、お待ちしております！！

第34章 旭の悪友！？（前書き）

遅れてしまいました汗
それではどうぞ！

第34章 旭の悪友!?

由美が野球で例えるならば近鉄時代の北川の代打逆転サヨナラ優勝決定満塁ホームラン（お釣無し）並みの快拳を成し遂げ、Yesterdayにて皆とケーキをバカ食いして帰路について2時間後この街を通る国道と街道を結ぶストリートである異変が起きていた。

「おう！『暴威』にツナギ入れたんかよ!？」

「押忍!!『Night Walker』もじきに到着します!！」

スキンヘッドで木刀を担いだ少年が頭を下げ報告すると、リーダーらしき少年が單車から降りて笑う。

「で？そのコナマイキなペケジーヤロウってのは？まだ来ねえのか？」

幹部の1人が拳をバキバキ鳴らす。その拳は常に人を殴っているのか、殴りタコのかさぶたが生乾き状態という恐ろしいものだった。

「考えてみりゃあ、『Night Walker』も情けねえよな？下のモンかなんか知らねえけど、『相模連合連れてこい』とか言わせやがってよ？」

「けっけっけ、と笑いながら幹部の少年は角刈りの頭を弄る。」

彼らはこの街を仕切る暴走族の連合隊、『南部連合』のトップを張るチーム・・・第十四代『金剛會』だ。歴史的に見ると特に長くはないが、この時代には珍しく走りのチームとして活動をしている。一般人には手を出さず、相手チームにケンカも売らないが、売られたケンカは全て買うという古風で筋の通ったチームだ。

「しかも『頭3人とタイムン張らせる』たあナメてんぜ」

「でもよ、旭さんや洋介さんほどじゃねーにしろ、賢もなかなかのモンだし・・・まあ今回も楽勝だろ」

横にいた幹部の少年が言うと、『金剛會』十四代目頭の長良賢は

苦笑いした。

「バカ、お前さあ。あの2人にやあ勝てる奴なんかいねーぜ？こんな下らない話の中であの人達の名前出すなよな？」

笑いながら言って、彼は愛車のシートに腰を下ろした。

「このGSだつて、オレが本当の男になれたら見せに行くつもりだしな」

言つて、パープルメタリックと赤フレームのコントラストが輝くGS400Eを見つめる。本人は地元で1番のGSだと思っている。

すると遠くから何台かのバイクの音が響いてきた。

「押忍！會長！『暴威』『Night Walker』来ました！！」

部下の少年が叫ぶと、金剛會のバイク12台の横に19台のバイクが並んだ。年々暴走族の数が減り、連合3チーム集まっても31台しかないがそれでもヨソに比べれば多い方だった。

「おう、菅井呼んで来およ」

長良が言つと、白い特攻服を纏った少年がやってきた。背中には『Night Walker』の文字が入っていて、胸のポケットには『伍代目総長』と書かれていた。

「よお菅井い・・・テメエントコのパシリが舐められたおかげで、オレらまで重い腰上げなきゃならなくなつたじゃねーか？」

長良が言つと、菅井と呼ばれた男は悔しそうに拳を握り締めた。

「オレら金剛會はよお、オメエらんみてえに軟派チームでも無きゃ、『暴威』みてえなケンカ屋集団でもネエえんだわ？」

「す、すまない・・・！！」

菅井が頭を下げる。が、次の瞬間には菅井は後ろにぶつ飛んでいった。

「テメエのパシリのケツも拭けねえような軟派ヤロウが！！ナニ堂々遅刻してやがんだ！？」

そしてもう1発みぞおちに蹴りを入れると、菅井は呼吸が出来な

くなり辺りを這いずり回った。

「おう、『Night Walker』の頭あ今日は休みだ・・・オレと『暴威』だけで殺んぞ？」

長良が言つと、人垣の中からかなりデカイ男が出てきた。金の刺繍で『極悪非道少年 暴威』と飾られた赤い特攻服を着た巨漢な少年が笑った。

「おう長良あ？あんましチョーシこくなよ？」

「あ？なんか言つたかよ、小杉？」

すると大柄な少年・・・『暴威』二十代総長の小杉が睨みつけながら言つた。

「そのペケジーヤロウを殺つたら・・・次はオメエだかんよお・・・？」

手に持つ固いコーラ瓶を、握力だけで粉碎した。

「ケンカしか能がねえゴリラ野郎が・・・」

長良が悪態を付く。

御覧のように、『南部連合』は1枚岩では無い。先代が『金剛會』出身で、走りもケンカも無敵だった為、現在も長良達『金剛會』が連合のトップに君臨するが、今ではこうして連合總會長の座を狙う人間も出てきている。

「ま、オレは負ける気しねえけどよ？」

長良は笑いながら言つた。小杉よりも遥かに小さいが、腕っぷしには自信があつた。連合の頭にいることが何よりの証拠だ。

今にも爆発しそうな現場。だがそこに、今日のメインゲストが現れた。

ファンファン！！ファンファンファア！！ファアファアアア！！

！！！！

こ気味良いコールに、長良が呟く。

「あ……？誰よ、小杉？チームにビーエックスなんて贅沢な單車乗ってん奴いんのか？」

長良が話を振ると、小杉はもうほとんど見えない首を横に振った。

「いや……ウチにあいねー」

連合全員が見ているとヘッドライトが1つ、ユラユラと近づいてきた。そして目の前に止まったバイクを見て、2人は唾然とした。

「な……！？ペケジエーだぁ！？」

長良が驚いた。目の前に現れたのがCBXでは無く、今日の相手であるXJ400……ペケジエーだったからである。

「おう！！オメエがこの『南部連合』にケンカ売った奴か！？」

が、メカの事などどうでもいい小杉はそのペケジエーの前に迫った。

「おいおい？随分手厚い歓迎じゃないの……」

ペケジエーの男がフツ、と笑う。愛車と同じホワイトに塗られたコルク半を脱ぐと、続けた。

「お前……誰だっけ？悪い、覚えてないわぁ」

「あぁ！？」

小杉はペケジエーの男の胸ぐらを掴んで引き寄せると、睨み付けながら言った。ちやうど長良達からは男の顔が見えなくなる。

「誰に口効いてんだよこのヤロウ……？」

「いやぁ、紅の豚にさ」

そして、小杉はキレた。

「ぶっ殺してやんかぁコラぁ……！！」

言って、ペケジエーのエンジンを思い切り蹴飛ばした。瞬間……

ゴキヤッ……！！！！

鈍い音が辺りに響いた。

「はごおっ……!?!?」

「豚足一本ゲーツ」

見れば、小杉の左腕があらぬ方向に曲がっていた。あまりの激痛に小杉が胸ぐらを掴んでいた腕を離すと、男はバイクに跨がった状態で小杉の顔面にコルク半をごと裏拳を入れた。

「ったくよお……ペケ子ちゃんに蹴り入れるなんざ……後輩じやなかつたら死んでも文句言えねーよ?」

地面をのたうち回る小杉を見て笑う。

「て、テメエ……!!よくもやりやあつたなあ!?!?」

残された『暴威』のメンバーや、『金剛會』『Night Walker』のメンバーが威勢よく叫ぶと、ペケジエーの男は単車から降りてから「あつれえ〜?」と首をひねった。

「み、みなさんなんでそんなに殺気だつてるの?」

おちゃらけながら言うが、皆キレていて今にも暴動が起きそうな状況だった。

「ありやまあ……さすがに3チーム相手はキツいなあ……」

が、尚も軽口を叩く男を見て、長良はふと思立った。

「ペケ子ちゃん……?見た時無いマフラー……?それにこの声……?まさか……!?!?」

そして今にも襲い掛かるうとして居る群衆を殴って道を開けさせた。皆が「総長!」「ぶつ殺してください!」「と声を上げるが、長良は男の姿を見て絶句した。

「あ……あなたは……!?!?」

「ん……?おお!長良じゃねーか!?!やつと知ってる奴に会えたぜ!?!」

うひょーい!とか言いながら、男が長良に近づくのを見て全員が啞然とする。

「いんやあよ!旭ん家忘れちまつてさあ、洋介ん家は工場の場所変

わったみてえで、行ったら工場でカマボコ作ってやがったからさあ
！！！いやあ、やっと知ってん奴に会ったぜえ！！」

長良の肩に腕を回して一気にまくし立てる男に、長良はため息し
た。

「帰ってきたんすか・・・？相変わらずっすね、伊勢さん」

長良が言つと、ペケジェーの男・・・伊勢俊一は笑いながら頷い
た。

「マフラー作る修行の旅に出て丸3年！！いやあ、この街も変わん
ねーなー！！いや変わったか！わっはははははは！！」

「どつちすか？はあ・・・」

長良がため息をつく。すると肩に手を回していた伊勢が長良の胸
ポケットを見て「あ・・・？」と呟いた。

「なによ、お前が『金剛會』の総長なん？」

すると、長良は急に真面目な顔になつて俊一の腕を退かした。

「そのことっすけど・・・伊勢さん。なんで『南部連合』にケンカ
を？コトと場合によっちゃあ、オレらも引けないっすから」

長良が俊一を睨み付けながら言つと、俊一は「へ・・・？ケンカ・
・・・？なんで・・・？」と言つた。

「はあ！？だ、だつて・・・伊勢さんが『Night Walker』
のパシリブツ潰して、『頭とタイムン張らせる』って言ってきたん
じゃ・・・！！？」

長良がたずねると、伊勢はしばらくぼーっとしていると、「ちや
うちやう」と手を横に振つた。

「オレっちはただ『南部連合の頭に会わせてくれよ』って頼んだだ
けだぜ？そしたらペケ子ちゃんのシートに蹴りくれやがったからさ
あ・・・教育してやつたら『じゃあ今週末に来て下さい』って・・・」

まさか長良が頭だったとはなあ、と笑う俊一。そして怒りと恥
ずかしさに顔を真っ赤に染める長良。そんな長良を見てビビる菅井・

「テメエ菅井ー!!!」

「ひ、ひい……!!!」

そして長良が菅井を半殺しにし、『Night Walker』と『暴威』のメンバーがそれぞれの頭を担いで帰って行くのを終始見ていた俊一は、長良の肩を叩いた。

「強くなつたじゃねーか長良あ。まさかお前が総会長とはなあ……」

「い、いえ……! 旭さん達のお陰ツスよ……!!」

ビツと背筋を伸ばす。見れば他のメンバーもビツとしている。

「てことは……やっぱ先代は旭か洋介が頭だったのかい?」

俊一が嬉しそうにたずねると、長良は首を横に振った。

「いいえ……あのお2人は違います」

「え?」

俊一があっけに取られていると、長良が続けた。

「旭先輩と洋介先輩は現役にはならないで、好きな時にケンカして好きな時に暴走ってたんですよ。それでも、旭先輩は去年彼女が出てケンカはほとんどしなくなって、洋介先輩も今では実家の跡継ぎの為に気合い入れて頑張ってるみたいっす」

長良の説明を聞いていた俊一は、時折「はあはあ……」とか「へえ……」とか適当に相槌を打っていたが、やがて「そうかあ」と笑った。

「アイツらも、頑張ってたんだな」

「そうっすね……カッコいい『不良』すよ……」

長良も頷くと、俊一は後ろにいたメンバー達にも「まあまあ座れや」と言っけてリラックスさせる。

「長良あ。旭ん家の場所かなんかわかる?」

俊一がたずねると、長良は「わかりますよ」と言っけて話す。長良はそれをケータイのメモ帳に書き込むと、閉まった。

「さんきゅ、明日行ってみるわ……よし! じゃあ久しぶりに会ったこつたし!!! 楽しいトークでもすつかよ!!!」

こうして、長い夜が幕を開けた。

次の日。

「ねえ旭さあん見て見てえ〜」

「あつくんあつくう〜ん」

「うつせえ・・・仕事の邪魔すんじゃねえよ。ラーメン作ってやんねーぞ？」

昼を少し過ぎた時間に街道沿いにあるラーメン『真田屋』に、由美、圭太、美春がカウンターに座り、旭が中でラーメンを作っていた。

「だって旭さん、1000点よ？1000点！」

「そうだよお！もつと褒めてあげてよお！」

由美達が騒いでいるのは、昨日も散々見せびらかした日本史の答案用紙だった。

「昨日さんざ褒めたじゃねーか！！」

旭が叫びながらスープを作っていると、2人はニコニコしながらお構い無しに言った。

「足りない足りない〜」

「もつともつとお〜」

「ああもつづるせえな！！すげーな！！1000点！！よかつたな！！」

呆れながら怒鳴る旭だが、2人はそんな褒め方でもよろこんだ。

2人はキヤツキヤ言いながら笑いあうと、圭太が今までの話を元に

戻した。

「・・・で、昨日からこんな調子で決らなかつたですけど・・・最初のツーリングはどこに行きましようか？」

圭太がたずねると、旭は茹でている細麺を指で潰して、芯の残り具合を見ながら言った。

「ろくでなしーずのせいで昨日は決まんなかつたかなあ・・・また近い日に決めるべえ」

言いながら、ザルを3つ持ち上げて一気にお湯を切る。

「あ！旭さん酷いわよ！私達はもうろくでなしーずじゃないのよ！？」

「そーだそーだあ！」

由美と美春が抗議するが、旭はしれつとした態度で言った。

「お前らまだまだ余裕で現役だぜ？・・・ほら！圭太は真田屋ラーメン醤油！ろくでなし1号はサンパチラーメン！3号はカレーラーメンー！！」

言いながらラーメンを出す。ちなみに1号は由美、2号は凜、3号は美春と昨日喫茶店でうるさかつたので真子がそう決めた。

「ああ！まだ言うのね！？」

「私達頑張つたんだからもうろくでなしーずじゃ無いよう！」

由美と美春が1000点の答案を突き付けながら言うが、旭はため息するだけだった。

「ほら由美も美春さんも・・・早く食べなきゃ麺が伸びるよ？」

言いながら、醤油ラーメンという1番無難でシンプルなラーメンを啜りながら圭太が言うと、由美と美春は慌てて食べはじめた。

「しっかし・・・話戻すけど、最初のツーリングはやっぱりそんな遠く行くのはなあ・・・」

旭が厨房の中なのにタバコを堂々と吸いながら呟く。

「昨日真子さんが言ってたんですけど、箱根とかどうですかね？県内ですし、観光地ですよ」

言うてから、圭太は海苔と麺を絡ませて口に運ぶ。

「箱根かぁ・・・確かに楽しそうだなぁ・・・」

「芦ノ湖に行つて温泉入つて、駅伝コースを使つて帰つたりしたら楽しいですよ」

「ああ、芦ノ湖つてネツシーならぬアツシーがいるのよね」

「見てみたいねえゆーちゃん！」

「・・・ダメだコイツら・・・」

「はい・・・」

ろくでなしーずに呆れながら2人はため息をつく。今日はいつにもましてレベルが高い。連日の勉強のせいで逆にバカになったのはと2人が考えていた時であつた。

ファンファンファンファン！！ファンファンファンファンファン！！

ウンバー！！ンバンバンババー！！！！

「なにこの音・・・」

由美がラムエアヘッド型カマボコに穴を開けて遊んでいると、外からバイクのエンジン音が聞こえてきた。

「2台ともなんか今まで聞いたこと無い音だ」

圭太も聞いていると、旭は耳を澄ませて呟いた。

「はぁん・・・ビーエックス並に甲高い音ぁこの前聞いたペケジエーと同じ・・・ウンバー言つてんのぁ、GS系ツインだべな」

言いながら店の入り口を見ていると、引き戸が開いた。店内に男2人が入ってきた。

「らっしゃい！！2名様で・・・ぁ・・・」

いつもの様に客に声を掛けた旭が固まった。由美達はもちろん、

美春ですら見覚えの無い男が、旭の目の前に立っていた。

「よお旭！元気してた？」

「お・・・オメエまさか・・・俊一！？」

旭が名前を叫ぶと、目の前にいる俊一と呼ばれた男は頷いた。

「1週間だけ帰ってきたんだ。久しぶりだな、旭！」

俊一は笑顔で手を差し出す。すると・・・

「テメエ！ち、ちっと待つてる・・・！」

旭はそんな俊一を放って厨房に駆け込んだ。

「あら・・・？久しぶりの再開に涙したかなもしか」

俊一がニヤニヤしながら待っていると、旭が厨房から飛ぶ勢いで出てきた。その手にはかなり物騒なものが握られていた。

「お・・・おい旭・・・？」

「なんだい俊一君？」

「その・・・手に持つてる奴はなあに？」

「わかんねーか？・・・包丁って言うんだぜ？」

言つて、旭は包丁を俊一に向けた。良く磨いであるらしくかなり

切れ味は良さそうだ。切れ味ゲージMAX。

「テメエ！前に貸した3万！！早く返しやがれコノヤロウ！！」

言いながら包丁を向けると、俊一は悲鳴を上げた。

「わっ、バカ止めれ！！刺さったら死ねるぞ！！？」

「うるっせえ！死にやがれ！！！」

そして、狭い店内で危険な鬼ごっこが始まった。旭は包丁を振り回し、俊一は必死に逃げていた。

「な・・・美春さん、あの人は・・・？」

圭太がたずねると、美春は笑いながら首を振った。

「私も知らないあい」

「知らないあい って・・・美春ちゃん、放っておいていいの！？」

由美がたずねると、美春は「うん！」と言つてカレーの中にライスをブチ込んだ。

「だってあつくん、楽しそう」

美春が嬉しそうに言った。同時に、旭の振り回す包丁が俊一の脇を擦ったのは内緒だ。

その時、店の入り口で暴れる2人と、そんな状況でラーメンを啜る3人を呆れながら見ている人物に美春が気付いた。

「あ！長良っち！！久しぶりい！」

すると、長良は美春達に近づいていきその場で頭を下げた。

「ご無沙汰してます美春さん！！」

「ご無沙汰あ！」

美春の笑顔を見てもなお頭を下げたままの状態で、次は圭太達の方に向いた。

「はじめまして、自分、旭先輩達の舎弟にして、『南部連合』のトップ、『金剛會』第十四代総會長をしてる長良賢です！」

言って、圭太と由美と握手した。

「な、『南部連合』・・・？」

由美が聞き慣れぬ単語に疑問を抱くと、それには気にせず長良は由美を見た。

「いやあ、噂には聞いていましたが・・・！あなたが由美さんですね！？フェックス仕様のゼファーに乗っている素敵なヒトとは！！」

「え・・・あ、まあ・・・」

ドカタスタイルでガタイの良い長良のマシニングのような問い掛けに由美がたじろぐ。そんな長良を見て、美春は2人には聞かれないうように長良に耳打ちした。

「・・・へへへえ ダメだよ長良っち、ゆーちゃんは好きな男の子がいるんだからあ・・・」

笑顔全開で耳打ちする美春。すると、長良は地獄に叩き落とされたかのような、期待全壊悲しみ全開な顔になった。

「そそそそ・・・そつすか・・・あ、自分これから現場なんで・・・それでは・・・」

それだけ言って、長良はフラフラと真田屋から出て・・・

キョカツ！・・・ブバー！！

「うわああああああ！！！！！！」

ウンバー！！ウンバーウンバアバア！！ブアアアア・・・！！

悲痛の叫びを上げた後、湘○コールを響かせて去っていった。

「美春ちゃん？なにかあったの？」

由美が不思議そうに問うと、美春はニコニコしながら言った。

「長良つちドンマイ！！」

それから30分後・・・由美達はカウンター席に座り、先ほどまで地獄の鬼ごっこをしていた俊一を見ていた。

「つたく・・・コノヤロウがよお」

1人厨房に立ってタバコを吸う旭を尻目に、由美が手を挙げた。

「あの・・・それで、この人は？」

「ああ、コイツは伊勢俊一。中坊ん時のダチだ」

旭に面倒臭そうに紹介された俊一は、軽い口取りで自己紹介をはじめた。

「ども！伊勢俊一です！特技は溶接！仕事は手曲げマフラー職人！！茨城の方で見習いやつてまつす！」

「まあバカだけど、ヨロシク頼むわ」

旭がため息をつく。

「ヨロシクね 私は真田美春だよー！」

美春がニコニコしながら言うと、俊一はニヤニヤしながら美春を見つめた。

「ほお〜・・・なるほど」

「ん？どうしたのお？」

「いやあ、長良から聞いてはいたけど・・・可愛いな」

「え？本当！？やったあ」

俊一の言葉にまるで子供のようには喜ぶ美春。

「本当、旭には勿体ないくらいだよ。このリーゼントバカクソ野郎のどこが・・・ゴメンナサイ包丁八危険デス・・・」

旭がまた包丁を取り出したのを見て、俊一は沈黙した。

「僕は中山圭太です。よろしくお願いします」

「私は三笠由美！ご覧の通り天才よ！！」

続いて2人が挨拶した。由美は長良の目の前に先日のテストの答案を自信満々にぶら下げながら自己紹介した。

「ヨロシク！・・・アレ・・・？」

笑顔で応えた俊一だったが、すぐに何か違和感を感じたらしい。

旭と2人を交互に見比べている。

「どーかしたんか？」

旭がたずねると、俊一は恐る恐る耳打ちした。

「なんでこんな真つ直ぐな子達が・・・？どういう関係？」

長らく地元を離れ暫く連絡を取っていなかった俊一は、昔の旭しか知らないのでちんぷんかんぷんだ。あの極悪非道だった旭が、こんな普通な子達とつるんでいるのが全く謎だった。

「まあ言いたいコトあわかんけどよ・・・ひとことではいやあ、オレも丸くなったんよ」

旭が言うと、「はえ〜・・・」とか言いながら驚くしかない。

「もしかして、表のFXとゼファーは2人の単車？」

俊一がたずねると、旭は頷いて笑った。

「おう、オレのいるツーリングチームのメンバーだよ」

「ツーリングチーム？旧車會か？」

俊一の言葉に旭は首を横に振った。すると美春が俊一に説明をした。

「あつくんと私とけーちゃん、ゆーちゃん、はぐつち・・・友達と始めた普通のツーリングチームだよ」

水を一口飲んで、にっこり笑う美春を見て俊一は確かにと思った。そして成長した旭を見て笑った。

「本当・・・大人になったじゃんかよ旭あ！！」

「まあよ・・・」

そんな褒められた旭は照れ隠しするように店の奥に引っ込んで行った。

「確か俊一さんよね？旭さんとはいつからの付き合いなの？」

今まで見ているしかなかった由美が俊一に話し掛けると、俊一は「あー、そうだなあ・・・」と記憶を思い出しながら笑って言った。

「アイツとは、中学ん時に会ったんだ」

呟いて、懐かしそうに由美達を見つめる。

「中学ってさあ、他の小学校からも集まるじゃん？アイツとは別の小学校だったんだけど・・・中学に上がる前にはもうみーんなアイツの名前は知ってたなあ」

「え・・・？やっぱり極悪だったの？」

由美が言うと、俊一は「本当に知らないんだなあ」と言って続ける。

「悪ガキでさあ、小学校ん時にはすでに中坊とやり合って勝ってたコトもあったし、なかなか過激で有名人だったんだ。入学式なんか短ランにボンタンでさあ。いきなり先輩にシメられたかと思えば次の日の朝にはすぐにやり返すんだ。いつも暴れてて学校なんか来ないし、来たってケンカしてすぐに強制帰宅させられて・・・補導歴なんか星の数って感じでマッポもマークしてたくらいだ」

「か、過激ですね・・・」

「今の旭さんからは想像出来ないわね・・・」

圭太と由美が今聞いた昔話と、現在の旭を重ねて驚いた。確かにケンカは強いし見た目も悪っぽいけど優しくしてバイクに詳しく、面倒見の良い兄のようなイメージの旭からは考えられない悪さだ。

が、そんな2人を見て俊一は優しげに笑った。

「まあ、そんな極悪非道な旭君ですが・・・！イジメられてる奴を助けたり普通の奴に手は出さず、同じ世界にいる奴とだけケンカしてた。おまけに・・・ぷぷっ、子猫に餌やったりしててなあ・・・！」

途中、耐え切れずに吹き出した俊一。昔、ケンカの後だったのか血だるまの旭が子猫に餌を上げて微笑んでいたのを思い出して笑ってしまった。

一方由美達ははあ、と一息。圭太はホツとした顔で由美と顔を見合わせる。

「やつぱり旭さんだね・・・」

「昔も今も、優しい所はカッコいいわよね」

そんな2人の間に美春も割って入る。

「やつぱりあつくんはあつくんだねえ 私も嬉しいよお」

そんな3人を見ている俊一も、根は変わっていないコトを再認識してほえむ。暫く4人で話していると、旭が長ネギの入った段ボールを持って奥から帰ってきた。

「あつくんやつぱりカッコいいねえ」

「旭さん、改めて見直したわ！」

帰ってくるなりいきなりニコニコしながら笑っている美春と由美を見て、旭の頭に？マークが飛びかった。

それからしばらくいろいろな話をしていた時だった。

「あ、そうだ！表の赤いサンパチ、あれ旭のだよな！？」

水を飲んでいた俊一が思い出したかのように大声で言うと、旭は

ニヤニヤ笑いながら頷いた。

「激シブだべ！？オレのサンパチちゃんよお！！」

「あのチャンバーめちゃうくちや良い音出しそうだよなあ。見た目もシブいし」

俊一が言うと、旭もウンウンと満足気に頷いた。

「お前昔っから好きだったもんなあ、サンパチ！良かったじゃん！」

俊一がはっはっはと笑いながら言うと、旭も「あ」と思い出した。

「そーいやオメ、ペケジエー・・・」

「あ？おお！！さっき音聞いたかよ！？オレの自慢のペケ子ちゃん！！」

俊一が言うと、説明を始めた。

「知つての通り・・・オレは昔っからペケ子ちゃんが大好きだった・・・！！で、向こうに行つてしばらくして手に入れてからずっと乗っているワケだが・・・」

「ああ・・・オメ昔っからペケ子ペケ子ってうるさかったもんなあ」

旭が昔の俊一を思い出しながら呟く。そんな旭を尻目に俊一はまるで芸術家が自分の作品を紹介するように話始めた。

「あの音聞いたろ？マフラーから吐き出される音・・・」

「ああ、どーしたってペケジエーの出せる音じゃ・・・」

前に洋介と一緒に聞いた時を思い出しながら呟く。同じ時代の4気筒ツインカムとは言え、ヤマハのXJ400があんなCBX400Fのような甲高い音が出せるワケが無い。しかし悔しいが、実際旭も洋介も聞き間違える程似ていた。

「普段はもつとペケ子ちゃんらしい音のマフラー着けてるけど、見せたくつてさあ・・・オレの曲げた芸術品を！！」

そこで、俊一はバン！とカウンター席を叩いた。

「如何に綺麗にパイプを曲げられるか・・・集合箇所の位置やテ-

ルの長さ跳ね上げ角度、溶接箇所の数から出口の太さまでいろいろ作っては捨て作っては捨てを繰り返した結果生まれたRPM管すなわち『P管』ならぬCBX管略して『B管』！！ビーエックスのような甲高い音をXJで出す為のマフラーだぁ！！」

わっはっは！と笑いながら豪語する。どうやら相当苦労したらしい。旭は俊一を見て言った。

「お、お前が作ったんか？あの音・・・」

「モチのロンウィズリーだぜブラザー！」

おどけながら言い切る俊一。そんな俊一を見て、横にいた圭太も驚いた。

「マフラーを作れるんですか・・・？」

「ああ、まだ師匠みたいに単車のパワーを上げるマフラーを作るのは得意じゃないけど、音ならどこにも負けないマフラー作れるぜ」

堂々と言い張る俊一を見て、圭太は感動の声を上げる。

「凄い！一からパーツを作ってしまうなんて・・・凄いです！」

「はっはっは！お前楽しい奴だなあ、ありがとう！」圭太の尊敬の眼差しを受けて、俊一はやはり豪快に笑うのであった。

仲良く話す2人を見ていた旭は、ふと気になるコトをたずねた

「ところで俊一よお、お前いつまでこっちにいんのよ？」

すると由美も「あ、そうだわ！」と俊一を見た。

「もしよかつたら、今度私達と一緒に走りましょう！？近い日にチーム結成記念ツーリングをするんだけど、どうかしら！？」

「あ、いいねえ」

由美の提案に美春も大きく頷いた。圭太も期待の眼差しを向けるが、俊一は少しだけ悲しそうに口を開いた。

「凄い嬉しいんだけど・・・実はオレ、今日中に帰らなきゃいけないんだな」

「ええ！？」

俊一の言葉に、皆驚きを隠せない。そんな皆を見て俊一は申し訳なさそうに続けた。

「先週帰ってきて、2週間予定の帰郷だったんだ・・・本当はもっと早く会いたかったんだけど、いろいろあつて遅れた・・・すまない」

俊一が頭を下げる。その顔はつらそうに歪んでいる。

そんな俊一を見ていた旭は軽いため息を吐いた後、俊一の肩を叩いた。

「なあ俊一・・・」

旭の問いかけに、俊一がゆっくりと顔を上げる。目の前には旭が呆れ顔で立っている。俊一はさらに申し訳なくなり、ガツクリとなだれそうになった時だった。

「暗い顔してんじゃねーよ！タコ！！」

笑顔で俊一の肩を叩いて笑っている旭が目の前にいた。見れば由美や圭太達も笑っている。

「あ・・・あれ？」

変な状況に陥っているコトは理解しているが、頭がうまく働かない俊一を見て、旭はニカッと笑う。

「ったくよお、んなコトで暗くなってんじゃねーよ！今回がダメなら、また次帰ってきた時にでも走ればいいじゃねーか」

昔だったらワンパンの1つでも入れていただろうと思われるが、目の前にいる旭のその言葉を聞いた俊一はかなり驚いた。

「俊一さん！次に帰ってきたら、私達と一緒に走りましょう!？」

由美が言くと圭太も笑顔で頷く。

「それにもし僕達が茨城までツーリングに行く時があれば一緒に走れますし」

「あ、けーちゃんそれいいねえ！」

美春がワクワクしながらそれに賛同する。そんな中、俊一はこの温かい雰囲気の中で1人置いていかれているコトに気付いた。

「な、なあ旭あ」

「あ？なんよ？」

俊一は旭の顔を見て、素直に言った。

「お前が変わったワケがわかったぜ……！いいダチじゃんかよ！
！」

「……バアカ、変わってねーべ」

2人は互いに笑いあった。

「結構長居したなあ……」

あれから数時間。皆でバイクの話で盛り上がっていたのだが、そろそろ行かねばと俊一が言っていると、皆も外に出て見送りに来た。

「これがお前のペケジエーかぁ……」

旭が前にもチラッと見た白いXJを見て呟く。ブチ上げられた口ケットカウルにローレルウインカー。30センチアツパンに60センチの3段シート……かなり派手派手な仕様だ。

「で、これが自慢のマフラーだ」

俊一がニヤリと笑って指さす先には、左出しで長いマフラーが装着されている。エキパイは手曲げ特有のなだらかな曲線を描き、集合箇所から先にかけてかなり細い作りになっている。

「なんだか……凄い派手なバイクね……」

由美が3段シートを見ながらポツリと呟く。自分達の周りには決していないタイプの改造を興味深く見つめている。

「ところであつくん……なんで『ペケジエー』って呼ぶのお？」

美春がたずねると、圭太もウンウンと首を振る。すると旭はサイドカバーのエンブレムを指差した。

「XJのXをペケって読んでるからペケジエーなんだよ」

「ほえ〜そんな簡単なことだったんだぁ……」

旭の解説に美春が納得していると、今度は由美が質問した。

「そういえば・・・私がゼファーちゃんに巡り会う前に行ったバイク屋さんにも『XJR400』ってあつたけど・・・あれとは型が違うわね・・・」

ゼファーの形を覚えていなかったのにXJRの形は覚えていたらしい。

そんな由美に俊一は「ノンノン」と言いながら解説を始める。

「あつちは名前は似ても似付かない全く別のバイクだよ。フレームからデザインから何までね」

どうやらあまりXJRは好きでは無いらしい。俊一は他社が水冷で行く中、空冷エンジンを搭載したことは評価しているしデザインもキライでは無いのだが、ツーリング先で間違えられるのが嫌らしい。

一方そんなコトを知るはずも無い由美は「そうなのねえ・・・」と自己完結した。

「ん・・・？」

皆に自慢の愛車を見られて満足気になっていた俊一が、ふと目の前の単車に目を奪われた。

「このゼファー・・・」

俊一の目線の先には、FX仕様の由美の愛車があつた。が、見ているのはバイクではなく、真っ黒に塗られたメーカー不明の手曲げショート管だつた。

「あ、私のゼファーちゃん？カッコいいでしょう！何て言つたつて圭太と同じFX仕様よー！！」

由美が胸を張って威張る。が、俊一は別の点について由美にたずねた。

「由美ちゃん・・・このショート管、どこで手に入れた？」

「真剣な眼差しでたずねる俊一。聞かれた由美は「ああそれ？」と何でも無いように答える。

「買った時からついていたんだけど・・・私にもわからないわ。ただ、すっごく良い音がするのよ!」

自慢気に説明する。確かにこのゼファアの音はカワサキマニアの真子を始めとして、旭達も認めるくらい良い音を奏でる。俊一はそんなショート管を隅々まで眺める。

「この曲げ具合・・・溶接後の処理・・・出口までの持つていき方・・・スゲーいいマフラーだ・・・!」

言いながら隅々まで見ていく。職人の性か、集合箇所の溶接やフランジやネジの1本まで隅々まで見ていく。

「見れば見るほど・・・由美ちゃん、よかつたら音を聞かせて欲しいんだけど・・・」

俊一が申し訳なさそうに言うと、由美は「もちろんよ!」と快く頷いた。

キュルっ!・・・ボファアアン!!

セル一発で掛かった由美のゼファア。俊一は近所迷惑を考えたが、由美にある注文をした。

「ゴメン由美ちゃん・・・ゆっくりアクセルを開けて、7000回転くらいまで上げれるかな?」

すると由美はなんだかよくわからないが、とりあえず頷いた後、アクセルをゆっくり開けていく。

ボファアアアアアアア!!

軽く吹けていく。回転数は現在4000回転辺りだ。が、ここからがこのマフラーの本当の声であることを由美達は知っている。そのままさらにアクセルを開ける。

の『声』聴かせてやつからさー!!」

「帰り道気イつけるよなあ!」

「また遊ぼうねえ」

「次会うとき、楽しみにしてるわよ!」

「僕達も、そちらに行けるように頑張ります!」

4人の激励を受けた俊一は、愛車と同色のコルクをかぶり、エンジンに火を入れると笑った。

「なあ、最後にチーム名教えてちょ?」

「あ・・・そういえばまだ言ってなかったつけえ・・・」

旭が呟くと、由美が笑顔で堂々とその名を口にした。

フアアアアアアア! ファンファン!!

夜道を走るXJ400。それを操る伊勢俊一はフツ、と笑った。

「『旧車物語』・・・か。楽しそうじゃねーか旭・・・次会う時まで、楽しみにしてるぜ!!」

嬉しそうに叫ぶと、アクセルを全開にして突っ走る。新しいマフラーは、あのゼファアのマフラー並みの物を作ってみせると心に誓って・・・

皆が帰った店内で、旭と美春がまだ雑談していた。

「ねえあつくん・・・」

「あ？どーかしたんかよ？」

タバコをくゆらせていた旭が美春の呼び掛けに答えると、美春が笑顔で言った。

「あつくんは、いつだつてあつくんだねえ」

「はあ？意味わかんねーこと言つてんじゃねーよ」

旭が言つと、美春はそれでも「エへ」と笑つた。

「今日はまたあつくんの昔話を聞いたのだあ」

が、美春のその言葉を聞いて、旭は次こそ包丁で俊一の息の根を止めるコトを誓つた。

第34章 旭の悪友！？（後書き）

今回でなんと34章突破です！

ご感想ご指摘ご意見、お待ちしております！
それでは！

P・S

今回登場した団体名称は実在しません。何か不都合がありましたらご連絡ください。それでは。
3気筒

第35章 天国から地獄 初転倒（前書き）

遅れてしまいました汗

第35章 天国から地獄 初転倒

「圭太ー！早く起きなさい！」

コアンコアン・・・！！

日曜日の午前10時。圭太は外から聞こえる由美の叫び声とバイクの音で目を覚ました。布団から出て眠い目を擦りながら窓を開けると、外のじめじめとした空気が圭太を迎えた。空を見れば曇り空。そして下を見れば、幼なじみが自慢の愛車に跨がって笑顔でこちらに手を振っている。

「由美・・・朝から近所迷惑だからエンジン切ってね」

圭太が言うと、由美はとりあえずエンジンを切った。キーを抜いて愛車から降りるのを見て圭太は部屋を出た。

階段を下りて洗面所に向かう途中、玄関からインターホンが鳴り響く。すると居間からパタパタと足音を立てながら、圭太の姉である茶子が玄関に走っていく。

「おはよう由美ちゃん！今日も可愛いね！」

茶子が玄関のドアを開けながら言う。目の前には由美が笑顔で立っていた。

「茶子姉え！久しぶりね！！」

元気良く挨拶する由美を、茶子は笑顔で家に招き入れた。

「圭太ならもうすぐ来るからね。居間で今しばらく待っててね」

「お邪魔します！」

茶子に案内され・・・なくても場所はわかるが、とりあえず案内されて居間に来た。その時

「・・・！！！」

茶子がプルプル震えだした。そんな茶子を見て、由美は嫌な予感がした。そしてそれは的中する。

「由美ちゃん・・・!!」

「な・・・なによ・・・!？」

「ばっ!と振り返ったかと思えば、いきなり由美の肩を掴んで言った。」

「なんでツツコミ入れてくんないの!？」

「へ?ツツコミ・・・?」

由美がポカーンとしていると、茶子は「まだ由美ちゃんには早かったな・・・」と1人呟き、説明を開始した。

「さつき『居間で今しばらく待つてね』って言ったでしょ!？」
居間』と『今』で掛けたんだよ!？」

顔を近付けて力説する。どうやらかなり自信があつたらしいが、何故か八つ当たりを受けている由美は呆れるしかなかった。

「茶子姉え・・・懸賞の次はオヤジギャグでも始めたの？」

すると茶子は首をブンブンと横に振った。

「オヤジギャグ研究は小学校の時に終わってるよ。ちなみに懸賞八ガキももう終わったの」

「あら?懸賞は飽きるの早かったわね？」

由美がたずねると、茶子は頭をポリポリ掻きながら「まあねー」と言う。

「懸賞やってたけど、欲しい物が無いし、止めちゃったのよ」

「珍しくマトモな理由で止めたのね・・・」

言いながら茶子を見る。久しぶりの登場で忘れていた人も多いと思われるので紹介すると、茶子は常に変わった趣味を持っていて、幼稚園時代の『泥だんご職人』に始まり小学校は『紙飛行機職人』や『警道口達人』、中学に入ると『スライム制作同好会』、『ラジオ体操3番のみ張り切って踊る部』等々・・・数えきれない程下らないコトに情熱を捧げている生粋のバカだ。が、顔立ちやスタイルが良いので男子からは新学期に彼女の性格がバレる前の春のみモテル。因みに勉強などの頭はかなり良い。

「じゃあ今は何をしているの?」トランペットでラーメン啜り隊』

とか？」

由美がバカにしながらたずねると、茶子は「ふっふっふっふっふが3つ・・・」とワケのわからぬコトを言いながら由美に背を向ける。そして顔だけこちらに向けて言った。

「・・・由美ちゃんにも、そのうちわかるわ」

そして居間から立ち去っていった。

「なんなのかしら・・・」

1人取り残された由美が呟く。するとそこにタイミング良く圭太が現れた。

「おはよう由美・・・どうかした？」

「ううん、大丈夫よ。もう慣れてるわ」

何か悟りを開いたような表情の由美を見て、圭太は我が姉にため息をついた。

「で、今日の予定だけど・・・」

身支度を終え、2人が中山家の屋根付き駐車場の前で自分の愛車に寄りかかりながら今日の予定を確認する。

「今日はダムまで走ってからその近くにあるファミレスで昼食。その後その奥にある峠道を進み、ぐるっと回って国道まで出たら、Yesterdayでみんなと合流、と。大丈夫だよな？」

圭太が由美に確認すると、由美は大きく頷いた。

「大丈夫よ！今日はよろしくね、圭太！！」

実は今日、由美は久しぶりに圭太と2人きりでツーリングに行くことになっている。前回のテスト勉強時にした約束が今まさに果た

されようとしている。とは言っても遠出する時間もお金も無いので、お決まりのダムツーリングだが、由美にとっては幸せな一時に違いない。

由美はそれこそ普通のツーリング以上に気合いが入っている。ズボンはいつものジーパンではなく、細く股下の少ない蒼のローライズ。上着はバイクに乗る都合上薄着とはいかないので、黒いシャツの上から、合成革だがタイトなレザージャケットは由美のゼファアの仕様と見事に合っている。

「それじゃあ行きましょう！？2人だけのツーリングよ！」

2人だけをやけに強調しながら由美が叫ぶ。こうして2台のカワサキは走りだした。

コアアアアアアアア！！！！

ブアアアアアアア・・・！ヒュルヒュル・・・！

自慢の手曲げショート管から吐き出される爆音と、時折カムチエーンノイズが聞こえる純正2本出しマフラーの音が国道に響き渡る。交通量の多い片側2車線を走る2台は、車を運転する20年前に若者だった人達から、少し品の悪い少年達まで幅広い視線を浴びながら走っていく。

「日曜日なだけあって混んでるなあ・・・」

圭太が呟く。今も右車線を走っていた車が車線変更でこちらの前

に寄ってきたので軽くブレーキを掛ける。

「由美は大丈夫かな？」

サイドミラーを見ると、きちんと後ろから赤いバイクが付いてきている。圭太はそれを確認して、五嵯路を左にウィンカーを出した。後続の由美もそれにしたがって左折すると、ここで漸く圭太の隣に並んだ。

「ここから先は私が前よ!!」

言って、蒼いFXを抜いていった。抜き去る時の由美のゼファアの音を聞いていた圭太は「マフラー換えるのもアリかも・・・」と心揺らされた。

「やっぱり楽しいわね!!」

気付くと前にいた由美が隣に並んでいた。圭太が何事かと振り返ると、曇り空もどこかにぶっ飛ばしてしまう太陽のように笑顔の由美がいた。

「・・・うん!」

圭太も頷くと、2台のバイクはダム道を突き進んでいった。

「やっぱりゼファアちゃん最高よッ!!」

あれからしばらく走って目的地のダムに着いた。周りの峠道を走り、その近くにあるファミレスに2人は昼食と休憩がてら立ち寄っていた。

由美はタラコスパゲッティをフォークで巻き取りながら窓の外の景色と愛車を見つめながら呟いた。

「なんて言うのかしら・・・!見た目は言うまでもないけど、音や

乗り心地、全てが最高なのよ!!」

巻いたタラコスパゲッティを口に押し込むと、由美は圭太を見つめる。

「圭太は？FXはどんなのよ？やっぱり最高よね!？」

「まあ・・・好きだよ。デザインもいいし、乗りやすいし」

「何よその素っ気ない反応・・・」

由美がアヒル口で不満を垂れると、圭太はナポリタンをフォークで巻き取りながら言った。

「いや・・・別にそんなワケじゃないよ。確かに最初はそうでも無かったんだけど、由美やみんなのおかげで愛着も出てきたし、もうFX以外は考えられないよ」

自分の名前が出てきて、由美は少し面食らったような顔をした後、顔をほんのり赤くさせた。

「わ、わかっているならいいわよ・・・!そうよ圭太、もつとFXの良いところを探してみなさい?まだあるでしょう!？」

「そうだなあ・・・」

水を一口飲んで考えてみる。デザインや走りには文句のつけどころは無いと思う。調子も良いし、目立った不具合も今のところ無い。車重は教習で乗ったCB400SUPERFOURよりあるし癖も多少あるが、『鉄の塊』という現代のバイクでは感じ難いバイク本来の姿勢が見いだせるし・・・はつきり言って良いところだらけだった。

「教習の時のバイクより、なんていうんだろう・・・『バイクに乗っているんだ』ってより強く感じられるのも魅力だよな」

圭太が言うと、由美は「そうねえ・・・」と唸る。

「スーパーフォアだったわよね?確かに凄く乗りやすかったのは覚えてるわ」

由美は頭の中でゼファーとスーパーフォアを比べてみる。足付き性も抜群で車重も軽く、トルクもパワーもあって扱いやすいスーパーフォアが『乗りやすさ』では勝つが、空冷独特のエンジン音や少

し荒っぽい武骨な雰囲気など『バイクらしさ』ではやはりゼファーに軍配が上がった。

「なんて言うのかしら・・・ゼファーちゃんにある『乗りこなす感』と違って『素直さ』が印象的なバイクだったわよね・・・」

「お・・・由美にしては的確な意見」

「一言多いわよ?」

由美が圭太に釘を刺して、外の2台を見る。色違いのFX外装でキメた愛車を見てしばしうっとり。その後、隣のFXを見る。

「圭太はやっぱりノーマルのままが好きなの?」

由美にたずねられると、圭太は「うん・・・」と首を捻る。

「千尋ちゃんのRGのエンジンの件や昨日会った俊一さんの影響もあって、最近マフラーとか換えてみたいかなあとか、少しだけ思うときもあるけど・・・」

言って外を見る。父親から譲り受けたFXを見つめる。タンクからテールまでの直線的なライン、少し跳ね上がった純正マフラー、これほどまでにバランス良く美しい愛車に今更ながら見惚れてしまった。そして由美の質問に曖昧に答えた。

「まだ未定だね」

「ふうん」

由美がつまんなそうに言った。

昼食を食べ終わり、2人は駐輪場で自分達の愛車に寄り掛かりながら空を見ていた。

「結構危険かもしれないなあ・・・」

見上げる空はかなり曇っている。まだ雨こそ降ってきていないが、それも時間の問題だ。

「一応雨具は持ってきてるけど路面が滑って危ないし・・・残念だけど今日は雨が降ったら早めにみんなに連絡して今日の集まりは中止にしよう」

圭太が言うと、由美がかなり不満そうな表情で圭太の意見に反論した。

「まだ大丈夫よ！まだ午後になったばかりよ！？時間もあるし、最初の計画通りで大丈夫よ！それにもしかしたらそのうち晴れるわ！」

由美が必死に言うが、残念なことに晴れる見込みはなさそうだ。雲は厚くどんよりとっていて、天候回復の望みは薄い。

「でも雨の中を走るのは危ないよ？」

「大丈夫よ、私1回も転んだことないもの！はい決定！！さあ行きましょう！」

早口で圭太を丸め込む作戦に出た。が、しかし・・・

ピチャツ・・・ピチャピチャツ・・・

「あ・・・」

由美が空を見上げる。ポツリと雨が降りだした。

「だ・・・大丈夫よ！まだ小雨だし・・・！」

なんとか圭太を説得しようとして口に出してみるが、圭太はため息をついて由美を見る。

「また一緒に来ればいいじゃん。何も雨の中走ることには無いし、天気が良いときじゃないと楽しさも半減しちゃうよ」

手をかざして雨に触れる。いくら自然が綺麗でも、雨模様では台無しだし何より危険だ。しばらく圭太を説得しようとしていた由美だったが、ようやく納得したのか渋々ではあるが了承した。

「わかったわよ・・・確かに危ないし、今日は中止ね」

口を尖らせて不満そうにつぶやく。本当にこの雨が憎らしいのか空を見上げる由美の表情は険しい。

現在は梅雨時。それを思い出して由美はガツクリしてゼファーに寄りかかった。

「はぁ・・・早く夏にならないかしら・・・」

「本当だね・・・」

2人は雨具に着替える準備をしながら不満を言い合った。というか、圭太が由美の不満をなだめていた、の方が正しいかもしれないが・・・

そんなこんなで2人が走り出すと、いよいよ路面が全体的に薄らと濡れてきた。ダムから出て国道を走る2台にも雨が襲い掛かってくる。

「スクリーンに雨が当たって見えないわね・・・!!」

不機嫌そうに言ってスクリーンを上げると雨水が顔を打つ。由美はアクセルを乱暴に煽る。道の混み方に加え、この雨だ。2人だけのツーリングも台無しになり由美は眉間にシワを寄せながら走る。

「全く！空気を読みなさいよね！！」

雨雲に向かって叫んでみるが、雨は強くも無く弱くも無く、パラパラと一定量降り続ける。雨に濡れたミラーを見れば、FXが安定した走りや付いて来ている。それを見て由美は心の中でさらに天候に悪態をつきまくる。

国道を出た所の信号で停まる。由美の隣に並ぶ圭太が声を掛けた。

「由美、さつきからアクセルを煽り過ぎだよ・・・機嫌悪いのはわかるけどさぁ・・・」

「なにようるさいわね・・・！？雨のせいで気が立ってるのよ・・・！」

由美が圭太に怒鳴り付ける。どうやらかなり苛立っているらしい。空を睨み付けながらブツブツと文句を言っている。

「また一緒にツーリングに行こうよ？次こそ晴れた日にさ」

殺気すら伺える由美を圭太がなだめようとするが、由美は圭太を睨んだ後、またブツブツと言い始めた。圭太はため息をつく、信号は青になった。

それから家を目指して一路進む2台。住宅街に差し掛かる。あと一ヶ所曲がれば目の前は自宅だと言う時に事件は起きた。

由美は先ほどの信号で目の前を走る圭太の言葉を思い出していた。

「まったく・・・！圭太は悔しく無いのかしら！せつかく2人きりのツーリングなの・・・？」

言いながら今日の自分の服装を見る。張り切って着てきたレザーのジャケットもローライズのズボンも、ダボダボした雨具の下に隠れてしまっている。

「もう嫌になるわよ・・・！」

頭の中は今も仕切りに降り続ける雨に対するものから、圭太の態

度にまで文句を付け始めた。

だから気付かなかった。運転に意識していなかった由美が左折しようとして減速した時だった。

ズルツ・・・！！

「え・・・？」

視線が左に倒れていく。タイヤは雨に濡れた路面を掴み切れずに、まるでスケートのように滑っていく。

目の前の風景がスローモーションになる。まずステップから足が外れ、シートから浮き上がり、最後にハンドルから手が離れた。宙に浮いた由美が必死に手を伸ばすが、ゼファーは止まらない。ステップが地面に当たりゴムが削れ、クラッチペダルが接地。クラッチカバーは嫌な音を立ててアスファルトに削られていく。

『いや・・・やめて・・・！！』

由美が悲鳴を上げた。が、声になる前に地面に投げ出された。そして・・・

ズガガガガガ・・・！！

ゼファーが数メートル地面を滑走した。

「由美ツ・・・！？」

先頭を走っていた圭太が、突如バックミラーから消えた由美に驚きFXを停めて振り返ると、道の真ん中にゼファーがまるで通せん

ぼする形でそこに転がり、由美が道の端でうつ伏せに倒れていた。

「由美！！大丈夫！？」

圭太が慌てて由美に駆け寄る。が、由美は圭太には目を向けず、目の前に転がる愛車を見てまるで魂が抜けてしまったかのような。

「大丈夫・・・！？ケガは無い！？」

言いながら由美に肩を貸して立ち上がらせる。見れば、膝から少し血が滲んでいるし、打撲もあるのか右足が震えている。

すると突然、由美はハツとなって圭太の肩から離れて地面に転がる愛車に歩きだす。

「嘘よ・・・」

転じたことでエンストして止まったエンジン。ニュートラルランプだけが点いている。

「お・・・起こさなきゃ・・・」

由美はゼファアを起こそうとハンドルを握る。だが・・・

「あれ・・・？起こす・・・？」

パニックのあまり起こし方を忘れ、がむしゃらにハンドルを上上げる。が、打撲が響いて力が入らないうえに判断不足なのか無理な姿勢での起こし方では上がるはずもなくゼファアはただそこに転がっている。

「ちよつと・・・！早く・・・！早くしなきゃ・・・！」

「由美！」

何かに取りつかれたかのような由美を見て、圭太がゼファアを起こそうとハンドルを掴んだ。

「よいしょ・・・！！」

ハンドルを掴み身体をバイクに寄せて起こす。そのまま端に寄せながらサイドスタンドを下ろした。

「・・・っ！？」

左側面を見て由美は絶句する。タンクにダメージこそ無いが、カバー類はガリガリに削れて、フロントウィンカーはステーがへし折

れてレンズが配線だけでぶら下がっている。そして最悪なことに、どこをどう打ったのかサイドカバーが真つ二つに割れていた。

「そ．．．そんな．．．!」

どこか信じられないような表情で由美が傷ついた愛車に手を触れる。欠けたサイドカバーから、『Z400FX』のエンブレムが音を立てて雨水で濡れたアスファルトに落ちた。

「あ．．．あ．．．!」

由美は何かを呻きながら急いで拾い上げる。

「由美．．．」

傷ついたゼファーと由美とを見ながら圭太が声を掛けたが、由美はただただ愛車の傷を見つめるだけだ。圭太は何が原因で転んだのか、道を振り返ってみて納得した。

濡れたマンホール。

これにフロントタイヤを取られて転んだのだと圭太は確信した。

スピードは30キロも出していないただの丁字路。転ぶ要因はこれしかなかった。

ただ、それだけなのにこれだけの傷．．．

「とにかく．．．家はすぐそこだし、押して行こう。由美．．．」

呼び掛けて、圭太は黙ってしまった。由美が泣いていた．．．

「うう．．．私が．．．ひっ．．．ゼファーちゃ．．．ゴメ．．．なさい．．．!」

息も絶え絶えに、泣きながら愛車に謝る由美。そんな由美を見て、圭太はただ黙ってゼファーを押しした。由美はただただ泣きながら後を付いてきた。

「はあ！？由美ちゃんがコケたあ！？」

それから30分後、圭太からの電話に今日のミーティングの中止が発表されるのかと思って電話に出た旭はすつとんきような声を上げて驚いた。

「で！？どんなアンバイよ！？でえ丈夫か！？」

「由美は大丈夫です・・・膝を擦り剥いたのと軽い打撲ですんだんですけど・・・」

受話器の向こう側にいる圭太の元気の無い声に、旭が口を開いた。

「ゼファー・・・か」

旭の言葉に圭太は無言になってしまった。が、すぐに事故の詳細を説明し始めた。

「僕が先頭だったのでよく見えなかったんですけど・・・丁字路を左折する時にマンホールに乗っちゃったみたいで・・・十分スピードは落としていたんですけど・・・」

「で・・・？ゼファーは？」

「僕がわかる範囲だと、エンジンの横のカバーが削れてしまったのと、クラッチレバー曲がり前側のウインカーが折れて・・・」

破損状況を聞いて、旭はフレームへの影響などを考える。エンジンのカバーとはおそらくクラッチカバー・・・それが削れたということはフレームにも影響があるかも知れない。エンジンハンガーが歪んでいた折り折れていたらまずアウトだ。

「それと・・・サイドカバーが真っ二つに割れて・・・」

「ほお・・・タンクは？」

「タンクは大丈夫でした・・・」

圭太の元気の無い報告に、旭は深刻そうに頷くしかなかった。

『とりあえず、由美もケガしてしまいましたし……みんなも危ないですから今日のミーティングは中止しましょう……すみませんが他の人達に連絡をしてもらえませんか?』

普段の圭太ならば自分で連絡を回すだろう。が、由美のこともあるので自分に頼んでいるのだらうと、旭は2つ返事で了承した。

「ああ任せとけ。お前は由美ちゃんの傍にいてやれや」

『すみません……それでは』

「おう……」

電話を終えて、ケータイを握り締める。今の会話を聞いていた、同じ部屋にいた千尋が旭におずおずとたずねた。

「おにーちゃん……由美さん大丈夫かな……?」

バタバタ……!

「由美ちゃん自体は軽症ですんだみてえな……ただゼファーがダメージ受けてんみてえ……とにかく……今っからみんなにツナギ入れるわ……何人『集まつか』よ?」

バタバタ……!!

「やっぱり……中止の連絡なんかしないんだ……」

千尋がニツコリ笑った。そしてまだ幼さが残る瞳は燃えていた。握り拳を作つて兄に言った。

「今度は私が由美さんに恩返しする番だね……!」

「そつだな……今あるパーツで間に合えば良いんだが……それより……」

バタバタ……!!

「美春う……オメ、落ち着けよなあ……」

言つて、左腕を引つ張る。その手がつかんでいたのは美春の襟だ。電話が終わつた瞬間ドアに向かつてつつ走つていったので捕獲していたのだ。

「ゆーちゃん……！今……助けにい……！！！」

傍から見ればマヌケな光景だが、マジでやっているのだから呆れるしかない。美春は半泣きでバタバタと暴れている。

「はぁ……」

そんな美春を見て、千尋はため息をするしか出来なかった。

「由美……大丈夫？」

一方、場所は戻つて由美の家の廊下。由美が雨に濡れた服を着替えるため圭太は部屋の外にいた。

圭太は先ほどから声を掛けているのだが、由美からの反応は無い。部屋に入つてもうすぐ30分。さすがに着替えは終わっているのだろうが許可無く部屋に入るのも気が引けて入れずにいた。このままでは埒が開かないと思つて、圭太は最後に声を掛けた。

「……今は1人になりたいかも知れないけど、もしつらくなつたら呼んでね？僕が力になれるかはわからないけど、由美が悲しそうだと僕も悲しいからさ……」

言つてみて、圭太は少し恥ずかしくなった。顔が赤くなるのがわかつたが、由美からの返事は無い。1人ため息をついて、圭太は階段を下りて三笠家を後にした。

一方、部屋にいる由美は敷きっぱなしの布団の上で泣いていた。上着は脱いだし傷の手当ても下で済ませたがシャツとズボンは先ほ

どから着ているもので身体も冷えている。

由美は1人泣き続ける。今回の転倒は、防ごうと思えば簡単に防げた自分の不注意から生まれたミスである。2人きりでのツーリングが急きよ中止になり、子供のように不機嫌になっていた。さらに関係の無い圭太にまで悪態をついてしまった。

浮かれた心が空回りして不機嫌になつて、自分のせいでゼファアを壊してしまった……

「ゼファアちゃん……ゴメンなさい……！」

由美は1人泣きながら謝り続けた。

それからしばらくして、Yesterdayに旭達が集まっていた。驚くべきことにメンバー全員がこの悪天候の中集まった。

「それで……由美さんは大丈夫なんですか!？」

冷えた手を握り締めながら翔子が言った。

「聞いた話じゃあ、由美ちゃんはピンピンしてるらしい。ただ……精神的にヤバイみてえ」

旭が報告すると、皆一様に顔を伏せた。

それから旭は圭太から聞いた由美の事故の様子をそのまま話した。と言っても事故を起こす前の由美の状態は誰にもわからないのであるが……

「マンホールに引つ掛けたのか……災難だったなあ」

洋介がしみじみと言った。長年バイクに乗っているとわかる、濡れたマンホールの恐ろしさにウンウンと頷く。

すると真子がコーヒを飲んでから話し始めた。

「実は私も先日危うくなつてな・・・なんとかコントロールして立て直したが・・・雨の日のマンホールや排水溝は危険の塊だ」

「フーかオメ、マツハは雨の日走らせたらダメだべ」

旭がツツコミを入れる。

「でもまさかなあ、聞いた時はさすがのオレもビビっただぜ」

「私も心配しましたよ・・・由美さん、元気になればいいんですけど・・・」

凜と紗耶香が心配しながらつぶやく。特に凜はつい先日までに勉強していた仲なので、内心かなり心配している。

「なんかさあ・・・オレ達に出来ることってなーのかよ・・・!?」

「リンリン・・・」

相変わらず暗い表情だった美春が凜を見る。

「例えば・・・ゼファーをみんなで治すとかよお！しようぜ!？」

「それナイスだよ！私も手伝うよお！」

2人が力強く言って手を握る。そして立ち上がって言い放った。

「オレ達全員協力して・・・!!」

「ゆーちゃんのゼファーを治してあげよう!!」

すると、皆一斉にため息をついた。

「凜・・・なんのためにみんなが集まったと思っているんだ？」

真子が呆れながら言うと、皆一斉に頷いた。

「最初っからそんなつもりで集まってんだよ、笑かすなよなあ美春？」

「へ？そうなのあつくん・・・？」

キョロキョロと皆を見回す2人を見て、全員ガクツと力が抜けるのを感じた。

「まあ・・・こいつらのボケは今に始まったわけじゃなーか・・・」

「まあな。ところで旭、ゼファーのパーツは持ってるのか？」

たずねられて、旭はうなずいた。

「うちにあるエンジンはゴンゴーだけど、カバーとか流用利くからなあ、事故を契機にB E E T仕様になんぜ？」

すると、次は真子が手を挙げた。

「タンクに傷が無いなら、多分ハンドル周りにもダメージがあるでしょう？」

「ああ、多分な。誰かいらねえハンドル持つてねえ？」

「あ、私持つてます！！」

翔子が思い切り手を挙げる。自分の愛車が壊れた時の恩返しとばかりに張り切っている。

「後はウィンカーやらなんやら・・・みんなで作業するにはちいと物足りない作業だが、いっちょようやるか！！」

洋介が立ち上がると、皆一斉に声を上げた。ここに『由美のゼフアー復活委員会』が発足された。

それからさらに時間が経った頃。未だ降り続ける雨がアスファルトに叩きつけられる音を聞きながら、由美の部屋に圭太はいた。

「由美・・・少しは落ち着いた？」

圭太は心配そうな表情でたずねると、由美は涙を拭いた。

「まだ・・・でも、少しだけ落ち着いたわ・・・」

そうして、またうつむいてしまった。圭太はいまだかつてここまですべて傷ついて元気の無い由美を見た記憶が無い。圭太が何か言おうと

考えていると、由美が顔をあげた。

「圭太……ごめんなさい……」

「え……?」

見れば由美が頭を下げ、謝っていた。なぜ由美が自分に謝るのか。圭太が考えていると、由美が口を開いた。

「圭太が帰ろうって言ったとき……私、勝手に機嫌悪くなって、うう……そ、それで酷いこと言ってえ……八つ当たりも……! 転んだ時も、迷惑……かけてえ……! ごめんなさい……!」

ボロボロ泣きながら謝罪する。今日出発前に太陽のようにまぶしい笑顔だった少女と同一人物とは思えないほどに泣いている。

そんな由美に、圭太が手を差し伸べた。

「謝らなくてもいいよ、由美」

「え……?」

圭太は由美の手を握ると、そんな彼女を見つめて言った。

「僕は気にしてないよ? だからそんな気にしないでよ。僕はちょっとおバカで笑顔のいつもの由美が良いんだからさ」

笑顔で優しく言った。そんな圭太を見て、由美は口をパクパクとさせながら狼狽えた。

「え……あ、うん……その……あ、ありがとう……」

そして顔を真っ赤にしてお礼を言った。

「ち、ちよつとだけ……元気が出たわ……」

「そう? よかった……」

「ええ……でも……」

再び表情を暗くさせる。そしてポケットから割れたサイドカバーから脱落したエンブレムを取り出す。

「ゼファーちゃんには……謝っても謝りきれないわ……」

「……今なら雨脚が弱くなってるし、様子を見に行く?」

圭太が言うと、由美は首を横に振った。由美はエンブレムを握り

しめながら再び泣き始めた。

由美は恐れていた。自分のせいで傷ついてしまったゼファーを見るのを戸惑っていた。今の自分は、あのゼファーと顔を合わせられないと思ひ込んでしまっている。由美にとって・・・皆にとってバイクはただの『機械』や『道具』ではない。血の通った自分の分身であり、パートナーであり、友達なのだ。そんな愛車を傷つけてしまったという罪悪感が、由美を縛り付ける。

「ゼファーちゃん・・・！私のせいで・・・！」

また落ち込んでしまった由美を見て、圭太はなんとか元氣付けようと口を開こうとしたその時だった。

カーン！！カーンカーン！！！！

ブアアア・・・！！

ファンファン！！ファアアア・・・！！！！！！

外から、雨音を遮るようにしてエンジン音が聞こえてきた。そして遠かった音が次第に大きくなっていくと、その音ひとつひとつに覚えがあった。

「え・・・！！？まさか・・・！！！」

窓を開けて外を見る圭太の目に、不思議な光景が広がる。

雨のカーテンの中を、いくつもの光をユラユラと照らしながらやってくる数台のバイク。そしてその一団が家の前に停車する。圭太は見覚えのありすぎる少年達を見て驚きを隠せなかった。

「おう圭太あ！コイツら全員集まっちゃったかんよお！！！」

サングラスをぶら下げた少年が二階の圭太に叫ぶと、由美も外を見て驚いた。

「旭さん……!?!?みんな!?!?」

由美が言うつと、美春が笑顔で手を振ってきた。

「ゆーちゃん!おねえさんが来てあげたからもう万事オツケーだよ
お」

「由美さーん!大丈夫ですかあ!?!?」

言いながらサンパチのアクセルを数回煽る。後ろに乗る千尋も心配そうに叫んだ。

「話は聞いたぜ!!単車のことならオレに任せろよ!」

「私にも……!相模湖での恩返しをさせてください!!」

「洋介さん……!翔子ちゃん……!」

2人のフォア乗りを見て圭太が叫ぶ。すると奥にいるマツハ3姉妹も2人に手を振った。

「カワサキと言えば私達姉妹だ……大舟に乗ったつもりでいて
いわ」

「よっし!!ゼファーピッカピカにしてやるからなあ!!」

「凜お姉ちゃん……メカのこと全然分からないじゃない……」

「真子さん……凜ちゃんに紗耶香ちゃん……」

由美が驚きのあまり呆然としながらつぶやく。自業自得で事故を起こしたこんな自分のために、雨の中全員が集まってくれた……そんな光景を見て由美はただつつ立っているしか出来なくなった。

「こんで『旧車物語』メンバー全員だ……!みんなでゼファー治しに来たからよお!!ヨロシクウ!!」

旭が代表して言うつと、皆も大きく頷いた。皆の優しい瞳に見つめられて、由美はただただ涙が止まらなかつた。そんな由美の肩を隣にいた圭太が軽く叩いた。

「ほら由美……!みんな待ってるよ?一緒に行こうよ?」

そして由美の顔を覗くと、由美は涙と鼻水とでぐちゃぐちゃになった泣き顔でみんなに改めてお礼を言った。

「みんなあ……!!ありがとう……!!」

第35章 天国から地獄 初転倒（後書き）

『翔子と紗耶香のマニアック旧車談議！』

この放送は『旧車物語』の読者の皆さまの提供でお送りします。

翔子「お久しぶりです。もう忘れてしまっている人も多いのではと思いますか・・・」

紗耶香「今日も宜しく願います・・・！」

翔子「さて、紗耶香さん。今日はどんなバイクを紹介してくれるんですか？」

紗耶香「はい！今回はですね・・・みんな大好きカワサキさんが生み出した名車です！！それでは！！」

KAWASAKI W1S

1966年～1973年まで販売

紗耶香「今回はカワサキ初の最大排気量車！現在でも人気のあるW1シリーズです！！」

翔子「本当に旧車ですね・・・1966年！」

紗耶香「このバイク・・・実は元はカワサキさんのバイクじゃなかったんです」

翔子「え？カワサキじゃないというと・・・？」

紗耶香「もともと『メグロ』というメーカーの『K1』というバイクだったんですけど、メグロがカワサキさんに吸収されて、K1をベースに改良されたのが『W1』なんです」

翔子「また・・・波乱万丈な人生（？）ですね・・・」

紗耶香「しかもこのW1・・・なんと初期型は当時の英国式の左ブ

レーキ、右シフトチェンジ・・・今と真逆だったです」

翔子「あ・・・それは聞いたことがあります！」

紗耶香「そしてそのW1の改良型が、W1Sです。これは従来の右ブレーキ左シフトになって、タンクデザインも一新されました！！キャブレターもシングルからツインに変わり動力性能アップです！」
翔子「今では当たり前前のことも、当時は試行錯誤の繰り返しだったんですね・・・」

紗耶香「そうですね・・・それでは今回の紹介はこれで終了です！」

翔子「次回もお楽しみに！！・・・と言っても、読んでくれる人はいらるんですかねえ・・・」

紗耶香「それを言わないでください・・・」

というわけで、お疲れ様でした！！ ナニ

次回も宜しく願いします！！

ご感想ご指摘などありましたら宜しく願いします！！それでは！！

第36章 復活の序章！（前書き）

遅れてしまい大変申し訳ありません！
それではどうぞー！！

第36章 復活の序章！

その後、2人は集まってくれた皆に部屋に上がってもらった。皆びしょ濡れなのでタオルを借りて顔などを拭いてから由美の部屋に上がった。

「みんな・・・こんな雨なのに・・・」

由美が虫のような小さな声でつぶやく。

「雨具は着ていたんだけど・・・あまり用をなしていないわね」

「だからオレは着てねーけどなあ」

濡れて重くなった革ツナギを恨めしそうに見つめる真子と、いつもの革ジャンではなく青いスカジャンを羽織った旭が言う。無敵のリーゼントは雨だというのに崩れていない。

「にしてもよお由美。マンホールに引っ掛けるとは・・・災難すぎるぜ」

凜が由美の背中を軽く叩きながら言う。乱暴な言葉使いとは裏腹に、かなり由美を心配している。

「ゆーちゃん・・・っ！？おねーさん心配だったよお・・・！！」

美春がべつたり由美に引っ付いた。ふざけているようだが、こちらもかなり心配していた。半泣きで擦り剥いた膝の傷を見ている。

「うわぁ・・・痛そうだよぉ・・・」

「ううん・・・身体の傷は大丈夫・・・けど・・・ゼファーちゃんが・・・」

言って、由美はまたうつむいてしまった。

「任せなよ！オレらが集まったんだ、すぐ治る！」

「そうです！私も協力しますから！頑張りましょう！」

洋介が言つと、翔子も由美を励ます。

「しっかし・・・集まっておいてなんだが、今日は無理だべ。雨ん中じゃあイジれねえし、パーツもねえし」

旭が言つて、コキコキと首の骨を鳴らした。

「にしたって・・・なんでサイドカバーが真つ二つになつたんだろーな？」

「ツメが折れてて落つこちたんじゃない？社外品はそういうところ弱いし・・・」

真子が指でモノが折れる過程を再現する。すると由美が弱々しく言った。

「確かに・・・ゼファーちゃんのサイドカバー、ツメが欠けていたわ・・・」

「それだと新しいのと交換になるんですか？」

圭太がたずねると、洋介は頭をポリポリと掻いた。

「紫外線で硬化するFRPシートってのがあるけど・・・どの程度割れてるのがわからないとなあ・・・塗装がハゲてなけりゃイケるな」

言つてFRPシートの値段を口にする。高校生の由美にとっては意外と高いことに驚いたが、これもゼファーのため。背に腹はかえられない。由美はメモ用紙に「しがい線FRP」と略して書いた。

「あとウィンカーが割れたんだろ？ウィンカーも換えなきゃいけないし・・・」

「ううん、ウィンカーは割れていないんだけど・・・根元から折れてて・・・」

凜がたずねると、由美は悲しそうにうなだれる。由美からすれば、ウィンカーステーがもげただけでも一大事なのだ。が、そんな落ち込む由美に赤城姉妹の双子が少し安心した表情で見合つた。

「でも由美さんに大事が無くて本当よかったですよ。バイクは治せても、身体は治せませんし・・・」

「まったくだ」

紗耶香と凜が頷くと、由美も少しだけ笑顔で頷いた。

「バイクで転ぶって怖いよねえ・・・私もこの前投げ出された時は絶対に死んじゃうって思ったし・・・」

1月前にエンジンロックで投げ出された千尋がその時のことを思

い出して身震いした。しかしすぐ笑顔になって「まあおかげでおにーちゃんと仲直り出来たから・・・良かったかな？」とつぶやいた。

「とまあ・・・なんか勢いで押し掛けちまったけど、今日はゼファー治せねえかな。明日は晴れるみてえだから、そしたら明日また集まってゼファー復活させんべや」

旭が少し弱くなった雨を見て提案すると、今日は解散となった。

「お？んだよ・・・ほとんど止んでんじゃんか」

旭が空を見上げてつぶやいた。玄関から出て空を見ると、雨はすでに止みかけている。しかし路面が濡れていることに変わりはない。

「うーん・・・」

翔子が帰りのことを考えて頭を巡らしているとなにかピンと来た。そしてわざとらしく手をポンツと打ったあと、由美の肩をポンツと叩いた。

「由美さん、今日泊めてくれませんか？」

「え・・・？」

普段、泊まっていく？と聞いても遠慮がちな翔子が自分から泊めてくれと言ってきたことに由美が驚いていると、翔子はちょっと照れ臭そうに笑った。

「都合が悪かったなら遠慮します。ただ、由美さんが心配で・・・」

やはりいつものように遠慮がちな翔子のその言葉を聞いて、由美は嬉しくなっつてつい抱きついてしまった。

「ありがとうね！翔子ちゃん！！」

「でも2人とも・・・明日学校だけど・・・？」

揺るぎない友情にはしゃぐ2人に圭太がトドメを刺すような発言を投げ掛けた。すると2人は笑顔のままピタツと固まった。そしてなぜか2人ともロボットのようなきこちない動作でゆっくり振り向いた。

「あ・・・明日はその・・・そう！ケガとシヨックとで行けそうにないらしいのよね・・・！」

「ぐ、偶然にも私も明日学校が停電になる予定が入りまして・・・！！つまりお休みでして・・・！」

「いやいや！2人ともサボる気満々じゃないか！！『らしい』とか『停電になる予定』とか！！」

圭太がツツコミを入れると、2人はイヤイヤと首を振ってだだを捏ね始めた。

「いいじゃない！ゼファーちゃんが傷ついて精神不安定な私と、そんな私を介抱しようとしてくれてる翔子ちゃんが1日くらい学校休んだって！！」

「精神不安定な人はそんな堂々と自己申告しないからね」

はあ・・・とため息をついて圭太が頭を掻く。

「1日2日サボるつくれえたいしたコトねーべな？」

「うん あっくんほぼ毎日遅刻か欠席だったもんねえ」

「いや・・・それもどうかと・・・」

真顔でサボりを肯定する旭と美春にやんわりとツツコミを入れつつ、圭太は2人に向き直った。

「わかったよ・・・じゃあ明日は僕が先生に言っておくから・・・」

「本当！？ありがとう圭太！！」

「よかったですね！！」

2人が両手放して喜ぶ。今は明るいがよく考えれば先ほどまでいまだかつて無い程落ち込んでいたし、軽症ではあるがケガもしてい

るし、今回は大目に見ることにした。まだまだ甘いなあと思いきり笑している。突如美春がシートから立ち上がった。

「よしよし！じゃあ私も今日はゆーちゃんに付きっきりで……！」

「オメエは明日の朝店の仕込み手伝いあんだろ！？」

「しぎやああ！？」

旭のツツコミに美春が奇声を上げると、次は凜が身を乗り出す。

「それならオレも残るぜ！由美も心配だし！！」

「凜お姉ちゃん、この前もサボったよね？今回はダメだよ？」

「なんでだよ紗耶香！今回くらい……」

「ダメつてばダメ！！ただでさえ学校サボったり遅刻してくるんだから、凜お姉ちゃんは帰るの！！さもないと……！！」

「わ……わかったよ……わかったから落ち着け！」

凄まじい剣幕で迫る紗耶香に凜が慌てて言うことを聞くことにした。長年の経験上、紗耶香を怒らせると怖いコトを心得ているのだ。

「それなら明日の夕方、オレの家の工場に。そこなら雨が降っても屋根あるから大丈夫だし工具もあるし」

洋介がヘルメットを被って提案すると、皆も頷いて出発するためにエンジンを掛けたり支度を始めた。

「それじゃあ、私達は先に行かせてもらおうね」

サイレンサーから何かが発射しているような独特な音を発するB E E Tの爆竹チャンバーから白煙をバラ撒きながら真子が言った。

「何か必要なものがあつたら言つてちょうだいね？出来る限り用意するから」

「真子さんありがとう！！」

由美がお礼を言つと、凜と紗耶香もエンジンを掛けて軽く空吹かして暖気しながら由美を見る。

「心配すんな！すぐにまた走れるようになるからさ……」

「同じカワサキ乗り同士！困った時は助け合いましょー！！」

「2人とも・・・!!」

「それじゃあ、また明日ね」

言って、3姉妹は煙を吐き出しながら去っていった。残る3台もすでに暖気を終了している。

「じゃあ由美ちゃん、明日あ用意して欲しいもんを後でメールすつから」

「ありがとう旭さん！」

「けーちゃん、しーちゃん！ゆーちゃんをヨロシク哀愁!!」

「なに言ってるのおねーちゃん・・・」

ブルーのサンパチに跨がる美春が意味不明なことを言っていると、さすが千尋がツツコミを入れる。もはや本当の姉妹のようだ。

「じゃあまた明日！」

最後に洋介が言っていると、3台のバイクは赤城3姉妹とは別方向にハンドルを向けて走り去っていった。

「まだ知り合って日が経っていいのに・・・みんな優しいよね」

遠ざかるテールランプと爆音を見送りながら圭太がつぶやくと、

由美と翔子もうなずいた。由美はカバーの掛かった愛車のシートに手を置いてゼファーに語り掛けた。

「痛い思いさせてゴメンねゼファーちゃん・・・もうすぐまた走れるようになるからね」

そんな由美の言葉に応えるように、ゼファーに掛かったカバーが優しく揺れた。

「で・・・これがゼファーちゃんから外れたサイドカバーのエンブレムなんだけど・・・」

部屋に戻って由美は割れたサイドカバーとエンブレムを翔子に見てもらった。

「これはまた・・・見事に真つ二つですね・・・」

見ればカバー上にある固定する爪が割れていて、サイドカバー本体は真ん中からまるで芸術的に綺麗に割れていた。が、割れたことによる塗装のハゲなどがないのが幸いだった。

「エンブレムがガリガリに削れちゃったのよね・・・」

「サイドカバーが落ちたときにエンブレムが綺麗に当たってサイドカバー本体の塗装とかを守ってくれたんですかね・・・？だとしたらあり得ないくらいの奇跡ですよ」

Z400FXのエンブレムの削れ具合を見て、3人はエンブレムに感謝した。この縦横10センチにも満たないような小さなエンブレムが身を盾にしてサイドカバーを修復可能状態まで守ってくれた・・・実際は奇跡の重なった偶然なのだが、由美はエンブレムを優しく取り上げた。

「本当・・・ありがとうね」

削れて傷んだエンブレムに由美がお礼を言うと、翔子がハツとなつて由美にたずねる。

「由美さん、サイドカバーの爪の破片とかは拾いましたか？」

「え・・・？」

「破片が無いと修復が難しくなると思います。もしかして・・・」

「そ・・・そういうえば私、拾ってないわ・・・」

ここに来て破片が無い事に気付いて顔面蒼白になる由美。あんな小さな破片、事故当時にパニックになっていた由美に見つけられるわけも無く、由美がその現実にかたかたと震え始めた時、圭太がポケットから何かを取り出した。

「転んだ時に拾っておいたんだけど・・・これってサイドカバーの爪の破片かな？」

取り出したのは小指大の小さなFRPで出来た欠片だった。それをサイドカバーの爪の位置に合わせると、なんとぴつたりとフィットした。

「よかったです！これがなかったら治りませんでしたね！」

「ありがとう圭太！助かったわ！」

自分の事のように喜ぶ翔子と、顔色が一瞬にしていつものように良くなった由美が圭太にお礼を言うと、圭太は少し照れながら頷いた。

「拾っておいてよかったですよ・・・じゃあ、僕はそろそろ戻るね？」

「え、もう帰っちゃうの？」

「せっかくなんですからもうちよつと・・・」

立ち上がり部屋を出ようとする圭太に2人が言うと、圭太は困ったように頭を掻いた。

「今日ウチに親がいないんだよね。それで、僕が晩ご飯作らないと・・・」

「そこまで言つて、圭太はガクガクと震え始めた。

「・・・お姉ちゃんの手料理に・・・」

「あ・・・」

「そこまで言つて、由美はようやく納得した。それは圭太の姉、奇人茶子を作る料理が料理では無いからだ。それを思い出したのか、圭太は震えながらぶつぶつとつぶやきはじめた・・・

「違う・・・それはケチャップじゃない・・・絵の具は・・・．．．．．
アリは・・・」

「け、圭太さん・・・!？」

突如壊れた圭太に、翔子が慌てて声を掛けると、圭太はハッとこちらの世界に戻ってきた。そして苦笑いしながら謝った。

「ゴメンね・・・昔を思い出したら・・・」

「今日はもう帰ったほうがいいわよ圭太？」

「うん、そうさせてもらうよ・・・明日は僕が先生に適当に理由つけとくから、じゃ・・・」

そう言って部屋から立ち去っていく圭太の元気の無い背中を見て、翔子は由美にそっとたずねた。

「あの・・・圭太さん、どうしたんですか？」

すると由美は少し困ったように笑いながら話を始めた。

「圭太のお姉ちゃん・・・茶子姉えって言うんだけど、茶子姉えが昔作った料理を食べて、圭太は人生で初めて救急車に乗ったのよ」

「救急車っ!？」

「なんでもオムライスの上のケチャップが絵の具、しかもアリが3匹ほど入っていたらしくて・・・」

「絵の具・・・? 蟻・・・?」

由美の話に、翔子はしばらく絶句するしかなかった。

それからしばらく。

少しは回復し、翔子の前とはいえやはりどこか元気の無い由美を励まそうと翔子は明るく振る舞った。

「心配無いですよ、旭さんや洋介さんがいるんです!ゼファーもすぐに治りますよ!」

「うん・・・ただ、やっぱり自分の不注意で転んだのがすごく悔しいのよね・・・」

「誰だつて1回や2回は転ぶことはありませんよ!」

バイクに乗っていて、立ちゴケ級から車体全損&ライダー重症級の大転倒まで様々ではあるが、長くバイクに乗っていれば転んでしまふことは必ずある。翔子は自分の体験を話し始めた。

「私も免許を取ってから日が浅かった時に、フォアで油断していた

ら立ちゴケしてしまった事もありますし・・・それでウィンカーズ
デーが少し曲がって劣化したタンクキャップのゴムからガソリンが
漏れてタンクに付着してしまったり・・・それでしばらく1人で泣
いて・・・それから・・・」

そこまで言つて、今度は翔子もだんだん暗くなってきた。2人は
ため息をついて見合った。

「ごめんなさい・・・励ますつもりが暗くなつてしまいました・・・」

「ううん、そんなことないわ」

由美は少し笑つて翔子を見た。

「私の不注意でゼファーちゃんをボロボロにしちゃったけど・・・
今の悔しい気持ちる肝に銘じる。そしてゼファーちゃんが治ったら、
次こそ圭太と2人きりで楽しくツーリングに・・・!!」

握りこぶしを作つて力説する。そんな由美を見て翔子はやはり由
美は元気でなければと思つた。話題に圭太が出たことで少し違う角
度から話を進めることにした。

「そういえば圭太さんとは最近どうなんですか？」

「相も変わらずよ・・・今日だつて少しだけどせつかく服を変えて
みたりしたのに何の反応もなかったわよ」

「男の人はそういうことに無頓着つて言いますから、仕方無いです
よ」

少しずついつものペースに戻つてきた由美から出てくる圭太の反
応の鈍さに翔子は苦笑いした。ため息を付きながらサンドバッグに
なった枕を殴打している由美がそういえばと言つて翔子にニヤニヤ
した視線を送る。

「翔子ちゃん・・・洋介さんとは・・・？」

「なっ・・・!？」

いきなり洋介の話題を振られて驚く翔子に由美が遠慮無く畳み掛
ける。

「実は内緒で連絡取り合つたり会つたりしてゐるわけ？」

「だ、だから違つて言ってるじゃないですか・・・！私はそんなことひとつも・・・！！」

フルブレーキで加熱したローターのように顔を真っ赤にして否定する。由美はけらけらと笑ってから

「冗談よ冗談。でも、翔子ちゃんと洋介さんは結構似合つと思うのよね」

「え・・・？」

「普段優しいし、いざというときには頼りになるし・・・同じフォア乗りじゃない」

「た・・・確かに洋介さんはいい人ですよカッコいいですし・・・でも由美さんと圭太さん達みたいに長い付き合いでは無いですし、まだそんなアレは・・・」

最後はゴニョゴニョと聞き取りにくい小さな声になってしまったが、その内容を聞く限り翔子もまんざらでも無いと由美は思った。が、そこで彼女を唆すような真似はしない。

「と・・・とにかくこの話はオシマイです・・・！他の話題にしませんか！？」

言つて、頭の中で何かなかつたか考えると、自分のカバンが目に入った。

「あ！そういえば前のツーリングの時の写真、持ってきたんです！！」

「え、本当！？」

思わず身を乗り出す由美。翔子はカバンから小さなアルバムを取り出して差し出した。

「あ！これは横浜の時のね！」

最初のページを開くと、横浜に行った時の写真が出てきた。氷川丸の前で撮った記念写真を見て思わず笑みがこぼれる。

「この時に真子さん達と初めて会つたのよね」

「そうですね、首都高でレースになつたりいろいろありましたね」

「あ、この写真！洋介さんが肉まんの中身見てがっかりしてるとこ

るね！」

「こっちはマリントワーで由美さんと圭太さんのツーショットです！」

「どれどれ!？」

小さなアルバムに収められた数々のメモリー。由美は思わず笑みをこぼす。

「氷川丸の前で撮った写真、美春ちゃん変な顔してる！」

「くすっ、本当ですね」

一列に並んだバイク。それぞれの愛車な跨がる皆の表情を見て笑う。ページをめくっていくと高尾で初めて出会った時の写真や峠での写真、喫茶店でのひとこま等々たくさんの写真が出てきた。ひとしきり見終えた後翔子はさりげなく由美を見た。そこには・・・

「やっぱりバイクって楽しいわよね!!早くゼファーちゃん治してチームみんなでツーリングに行きましょう!!」

吹っ切れたような真っ直ぐな瞳で、写真の中に写る愛車を見つめる由美がいた。翔子は「はい!」と笑顔で言った。

そして次の日。

由美は予定どおり圭太に頼んで学校を休み、翔子も学校に病欠の連絡を入れた。由美の家の電話を借りて連絡を終えた翔子が苦笑いして受話器を置いた。

「学校をサボるって、なんかこれから悪い事をするみたいですね」

「まあいいことじゃないわよね、学校休んでゼファー治すんだもの」

2人はとりあえず玄関に出てゼファーの状態を改めて確認した。

「やっぱり見ちゃうと落ち込むわね・・・」

カバーを取ると、ぶら下がったウィンカーが現れる。

「でもステーは無事ですね、抜けてるだけですから」

「うん・・・だけどステップが歪んでるしクラッチレバーも・・・」

昨日より天気が良いのでよく見ると結構傷やダメージがある。由美はため息の後ケータイを取り出した。

「昨日旭さんから来た用意してほしいものメールを見なおしてみましよう」

確認すると、そこには『紫外線硬化FRPシートだけ買っておいとくれ、後タイヤラップ。両方ホームセンター行けばある』と書かれていた。

「ホームセンターね、近い所だとバイクで20分かしたら」

「じゃあ早速行きましよう！」

サンパンフォアを路上に出して早速出る準備に取り掛かる翔子。

由美が時計を見ると時刻は午前9時。

「今から出ても少し待つことになるわね・・・」

由美の記憶ではあそこの開店時間は11時から。今から行っても時間を持て余してしまふ。

「それなら少し寄り道しません？」

「寄り道？」

「集まるのは夕方からですし、かと言って出発まで家にいるのも由美さんに迷惑ですから」

「別に迷惑じゃないわよ、でも・・・」

翔子の提案はかなり魅力的だ。家においてやり尽くしたマ○オカートをやって暇を潰すよりそのほうが時間を有効に使っている気がする。まあ学校に行っていない時点で時間の使い方を間違えているの

だが・・・

「そうね！じゃあ寄り道して行きましょう！」

「じゃあ早速・・・！」

言ってチヨークを上げてセルに手を伸ばす。

キョカカカフ・・・！！ブルアアアーン！！

数秒のセルの後、4本マフラーからず太い排気音を響かせ、シングルカム4気筒C Bの特徴的なエンジンに火が入った。

「しばらく暖気したら出発・・・て、由美さん？」

「ん、なに？」

そこには愛車ゼファーに跨がり出発準備完了の由美がいた。

「ゼファーはお休みですよ？」

「あ・・・そうだったわね・・・」

言われて気付いた。今はゼファーには乗れないのだ。

「ステップとかウインカーとか・・・今日治ったらまた乗れますから」

「そうね・・・はあ」

自分の愛車に乗れない時ほど悲しい事はない。事故で故障となればさらにだ。

そんな落ち込む由美に翔子は「まあまあ」と慰める。

「今日は私の後ろで我慢してください。その代わり治ったらゼファーちゃんですから」

「迷惑かけるわね・・・今日はよろしくね！」

「はい！」

そして暖気が終わりチヨークを下ろす。タンデムステップを下ろし由美が座るとサイドスタンドを払いギヤを入れる。

「そういえば圭太以外の後ろは初めてね」

「私も後ろに人を乗せるのは初めてです。下手でも笑わないでくださいね？」

「まさか」

実際免許は翔子の方が先に取っているし歴も長い。翔子はクラッチレバーを半分つなげてアクセルを入れる。CB350Fourは滑るように発車した。

「2人乗るとやっぱりもたつきますね・・・」

ゴーグル越しにメーターを見て翔子がつぶやく。セコからサードに繋げ、4000回転あたりからようやくトルクが立ち上がってくる。

「乗り心地が違っわね、圭太より運転が丁寧。さすが翔子ちゃん！」

「いえいえ、ただパワーが無いだけですよ」

とは言っても、翔子の運転は上手かった。後ろに乗る人間は運転に関与出来ない。雰囲気でわかる人間ならともかく後ろに乗り慣れていなかったり乗り手の経験が浅いと急なシフトのアップダウンで振り落とされそうになったりする。しかし翔子はクラッチのつなぎ方からなにも後ろの人間に不安を与えないようにうまく繋ぐ。2人乗りが初めてとは思えないほどスムーズなのだ。旭や真子達の「上手さ」とは違う玄人好みの「上手い」走らせかただ。

「次からいろんな人の後ろに乗せてもらうのもアリね・・・」

「違う人のバイクに乗せてもらうといういろいろ変わるかも知れませんが。あ、赤」

言って信号を停止。青になると同時に例の運転で国道に出た。

「この時間でも下りの交通量結構あるんですね」

「そうねえ・・・あ、五差路を左ね」

言われてCBは左にウインカーを出して曲がっていく。すると一気に車がいなくなる。平日のこの時間からダムに向かうほど世間は暇でもないらしい。前も後ろもグリーンになったCBは快調に加速していった。

「うーん！気分がいいわねえ、貸し切りよ貸し切り！」

ダムに着くなり両手離して背伸びする由美。翔子も愛車にハンド
ルロックを掛けて一息ついた。

「ここまで来ると空気もいいですねえ」

「みんな今ごろ埃臭い教室の中なのに、私達だけこんな所にいるな
んて」

「後ろめたいですけど癖になりそうです」

言って2人はベンチに移動。自販機でジュース片手にしばらく話
をしていると、遠くから聞き慣れぬエキゾーストが山から響いてき
た。

バタバタバタバタバタ！！！！

「なにか来たわね」

「多分この音は単気筒ですね」

「たんきとっ？」

「私のフォアや由美さんのゼファアの4気筒と違って、ピストン1
つのバイクです」

「詳しいわね・・・」

「ピストンが1つしか無いのでマルチエンジンよりピストンの爆発
を感じやすいらしいですよ？まるで心臓みたいって」

「ふうん」

言われてみれば音が自分たちのバイクとはまるで違う。皆の音は
エンジン音も特徴的だがもっとも分かりやすいのはマフラーからの

エキゾーストだ。近づいてくるバイクの音はエンジン音の方がわかりやすく遠くからでもはつきりとわかる。

やがて音がだんだん近づいてきた。奥のコーナーから1台のバイクが見えてきた。由美達が見守る中、バイクは駐車場に入ってスピードを落とした。

バタバタバタバタ・・・！！ダン・・・ダン・・・ダン・・・！！！！

「ギター背負ってるわね・・・」

「しかも女性ですよ？」

「ちよっと思ってみましょう」

由美の提案に翔子も賛成。珍しい女性ライダーの登場に由美達が歩いて近づいていく。

一方彼女はそんな2人には気付かず風になびくダム水面を見下ろし、山を見上げた後、おもむろにアコースティックギターを取出して草原に座ってギターを弾き始めた。

きれいなコード進行の後、彼女は歌った。歌詞はまだ無いか口ずさんでいるだけだが、それでも綺麗な歌声と旋律に2人は声を掛ければ立ち尽くすしかなかった。

「綺麗なメロディね・・・」

「そうですね・・・」

聞こえないように小さな声でこそつと呟く。やがて歌はサビと思わしき展開となつた所で突然彼女は歌うのをやめギターから手を離れた。

「なにか用？」

びくっ！！

2人は驚いてから、邪魔をしてしまったかと思いなにか頭の中で言い訳を考えていた。

「え、えーっと思っすね・・・」

「う、歌お上手だなあと思いました・・・」

なんとか口に出すと、彼女はふっと笑ってから頭を下げた。

「ありがとう、そう言われると嬉しいな」

そしてふと目をやると、自分のバイクとは反対方向に赤いバイクがあるのに今気付いた。

「あれはあなた達のバイク？」

「あ、はい！私のです・・・！」

翔子が言くと、彼女は立ち上がり改めて挨拶した。

「挨拶が遅れたわ。私は加賀由希子。ユキでいいわよ。もうすぐハタチ」

ユキは手を差し伸べると2人と握手した。

「ユキさんね・・・私は三笠由美！由美で大丈夫です！17歳です！」

「私は衣笠翔子です。翔子で結構です。私も由美さんと同じ17歳です」

3人が自己紹介を終えると、ユキは自分のバイクを見た。

「あなたたち、バイクが好きなの？」

「はい！まあ私はまだそんなに長く乗っているわけじゃないんですけど・・・」

由美が言くと翔子がユキのバイクを見てわあ！と言った。

「SR400ですか？いいですね！」

ユキの愛車、ヤマハSR400。ヤマハお家芸の4スト単気筒エンジンを搭載し、発売から長い年月の中でほとんど変わらないシンプルなスタイルは初期型の78年から現在まで人気で今でも作られているほどのロングセラーバイクである。

「キャプトンマフラーとウインカー換えた以外は最初からこの仕様シンプルでしょう？」

ユキの説明に、翔子がウンウンと首を縦に振る。ノーマルタンクのままですミダブルシート、バックステップにコンチハン仕様のSRだ。

「このバイクはいいよ、単気筒独特の鼓動がまるでビートを刻んでいるみたいな感じで。私にはぴったり」

「スタイルもなんかおしゃれよね。ユキさんにぴったりね!」

由美が言うとユキは「ありがとう」と言ってギターをしまう。すると突然ユキのケータイの呼び出し音が響いた。

「出てもいい?」

「もちろんです」

翔子が言うと、ユキはケータイを取り出した。

「もしもし・・・ええ・・・15時からね・・・わかったわ、じゃあ」

短い通話を終えて、ケータイをしまつとユキは申し訳なさそうに言った。

「ゴメン、今からスタジオが入っちゃって・・・」

「そうですか・・・バンドですか?」

「ええ、私がボーカルでね」

「もう少しお話したかったけど、仕方ないわよね」

由美が残念そうに言うとユキはふつと笑った。

「あなたたちのおかげで、なにかいい曲が出来そうな気がする。それじゃあまたどこかで会いましょう」

「バンド頑張つて!」

「応援してます!!」

由美と翔子が言うと、ユキはギターケースを背負いヘルメットを被る。そのままSRに跨がりゆっくりとキックを下ろしてから踏み込んだ。

カシャッ!・・・ダン・・・ダン・・・ダン・・・ダン・・・!!

「それじゃ、またね」

「はい!」

「気をつけて！」

そしてギヤを入れて走り出す。駐車場から出て独特な音を発しながら遠ざかるSRを見つめて由美が一言。

「あ！連絡先を聞くのを忘れたわ・・・！！！」

「あ・・・」

もはや見えなくなったユキのSRの鼓動を聴きながら2人は立ち尽くすしかなかったとか・・・

それからしばらくして、2人は時間を確認するともう昼食時になっていた。すると今まで平気だったのに急に空腹間がやってきた。

由美はお腹を押さえて大げさに草原に倒れた。そしてゴロゴロ転がったのちムクリと上半身だけ起して何故か偉そうに言った。

「翔子ちゃん、お腹すいたわ！」

「そ、そんな堂々と言わなくても・・・」

「この近くに美味しいファミレスがあるのよ。そこでご飯にしましょうそうしましょう」

「なんかテンション高いですね・・・」

翔子が若干呆れながらツッコミを入れると何故かキツと睨まれた。

「テンションが高い・・・？どうやってたらテンションが高くなるのよー！！」

「ひっ・・・！？」

突然の咆哮。ビビる翔子。由美はけっけっけと笑いながら続けた。

「ゼファーちゃんは壊しちゃうしさっきの人の連絡先は聞き逃しちゃうしお腹は空いちやうし……！私もうダメえ……」

「あ、あの……由美さん？」

何故か急に壊れだした由美を対処する羽目になる翔子。

「あ……私も早く風になりたいなあ……ぶんぶん……」

どうやら空腹のあまり幻覚を見ているらしい。バイクに乗る真似をして走り始めた由美。どうしたものかと思案する翔子に妙案が浮かんだ。

「それなら私のCB、運転してみますか？」

「え……？」

「さっきも話したじゃないですか。いろいろなバイクに乗ってみたって……まずは私のCBでよければ……」

「な……！？そんなダメよ……！」

ニコニコ顔で提案する翔子をさえぎり由美が言った。

「私昨日転んだばかりよ！？それにサンゴちゃんはお母さんの形見なんだから……！」

どうやら先ほどまでの演技だったらしい。至って真面目な表情で由美が言う。しかし翔子は笑顔で「大丈夫ですよ」と離れた場所に停めている愛車を見た。

「由美さんならいいですよ」

「で、でも……！」

「それに私……リアシートに乗ってみたいって思っていましたし、お願いします」

言って、何故か頭を下げたまでお願いする翔子を見て由美は不思議そうにたずねた。

「どうしてリアシートに？」

すると翔子は照れくさそうに笑ってCBを見た。

「私はあのバイクの全てを知りたいと思っています。小さい時お母さんに乗せてもらったこともあるんですけど、お母さんに乗せ

てもらったっていうことくらいしか覚えて無くて・・・だから後ろに乗って今の私に見える景色を見たいんです」

そこまで言った翔子の目を見て、由美ははあとため息をつく。最後に1つだけ確認した。

「・・・最後にもう一度聞くわよ？私なんかでいいの？」

すると翔子は

「由美さんだからいいんです！」

「これがサンゴちゃん・・・小さいわね」

初めて跨がる古いバイクに由美が感想をもらす。自分のゼファアと比べると250ccなんじゃないかと思えてくる車体のサイズ。しかし迫力はゼファアにも劣らぬ歴戦の名機であるシングルカム4気筒エンジンの存在感がそれを否定するかのように鈍く光る。

「あら？キーシリンダーが・・・？」

メーター周りには燃料計は愚かキーシリンダーすら無い。由美が探していると翔子が車体左側に回ってフロントフォークの後ろを指さす。

「キーシリンダーはここですよ」

「あ、本当！なんでこんな場所に」

見たこともない位置にあるメインキーの場所に驚きつつ由美はキーを差し込みひねった。メーター周りにあるニュートラルランプが灯る。キルスイッチをオンにしてセルスターターに指を伸ばす。

キョカカカフ・・・！！ブルアアアン！！

「おお！！なんか全体的にゼファーちゃんと違う！！」

「見た目に騙されましたか？」

「ええ・・・もつとおとなしいのかと」

シートにも伝わるワイルドなエンジン音。感覚的に全てがゼファーと全く違うことに由美は驚いた。

「では、後ろ失礼しますね？」

翔子がリアシートに座ると、抜け気味のリヤショックが簡単に下がる。足でタンデムステップを出して乗せ、シートベルトを掴んだ。

「それじゃあ行きましょう、私もお腹ペコペコだったんですよ」

翔子がへへつと笑うと少し緊張気味だが、意を決したのか由美はギヤを1速に入れた。

「それじゃあ安全運転で行くわよ！サンゴちゃん！！」

いつもと違う愛車に跨がるライダーといつもと違うライダーに操られるバイクが走り出した。

第36章 復活の序章！（後書き）

こんばんわ、3気筒です。

前回活動報告にも書きましたが、先月の中旬に派手に転倒しました。幸いにも単独事故で他人を巻き込んだりはせず二次被害も無し、乗っている人間も〇〇キロでの転倒の割に人間は無傷のバイクは奇跡のステップ曲がり、ウインター割れ、ポイントカバー削れくらいの被害で済みホツとしていたのですが走りだすとフロントセンターがズレててそのの修理やバンドでの遠征ライブでなかなか投稿する時間が無く、今日やっと皆様にお届けできました！！

ちなみに事故の原因はタイヤのひび割れなどの劣化を放置、タイヤが性能を発揮せず誘発した起こるべくして起きた事故です。みなさん、フロントタイヤはイイものを履きましょう！！私はすぐにTT100を新調しました（笑）

話は戻り36章！ご意見ご感想お叱りもお待ちしております！！
それでわ！！

3気筒

第37章 難なく復活！その矢先！？

ダムを抜けて走ること数十分。由美が操るCB350Fourは何事も無く無事ファミレスに到着した。窓際に駐輪して翔子が降りた後、由美もエンジンを切ってキーを抜いた。スタンドを立てて降り立つとぐーっと背伸びをした。

「んー！やっぱりバイクっていいわね！」

ほくほくとした顔で言う由美。ヘルメットを脱ぐと翔子にキーを返した。

「私のバイクどうでしたか？」

翔子もどこかワクワクした様子で由美にたずねる。自慢の愛車の評価を自分以外の人間から聞くのもまた、バイク乗りの楽しみである。

「そうね・・・そんなに距離走ってないからはつきりとはわからないけど・・・真っ直ぐの時の安定感がすごく良かったわ」

「あ、思いました？私もそう思うんです！」

やった！と言わんばかりの喜びようで翔子が言うと、由美はしかしとひとつ付け足した。

「エンジンも調子良いから元気なんだけど、コーナーとかで車体が倒しにくいかも・・・」

「それは・・・確かに」

2人乗りと言うのもあるのだが、この時代のバイクはお世辞にも足回りが良いとは言い難い。翔子のCB350Fourはサイズの割に乾燥重量で184キロ。由美のゼファーは181キロ。20年くらい時代が違うバイクだが性能の違いと比較すると車重にほとんど変わりはない。しかし由美の感じた『コーナーでの倒しにくさ』はそのほとんどがその車重を支える足回りのレベルから来ている。

「とりあえず中で話しましょう？お腹も空いてきたし」

「そうですね」

2人はハンドルロックを掛けて店内に入った。

店員に案内され、窓際の禁煙席に座った。『お決まりになりましたこちらのボタンでお呼びください』というお決まりのセリフを言っただけで、2人はとりあえず水を取ってきてから改めて話を始める。

「由美さんの意見を聞くと、確かに私のフォアはコーナーが弱いですね。あとブレーキが弱くなかったですか？」

「あ、確かに・・・ゼファーちゃんの感覚でブレーキすると結構冷やっとしたわ」

由美はブレーキレバーを握るフリをしながら言うと、翔子は「そうですねえ」と言っただけで水を飲んだ。

「でも、乗っている時の感じ・・・なんて言うのかしら、よくわからないんだけど・・・あのバイクにしか見えない景色やわからない感覚っていうのかしら、ゼファーちゃんとは違う意味で凄く楽しかったわ！」

満面の笑みで由美が言うと、翔子も嬉しそうに笑った。

「ゼファーが治ったら、こんな感じで皆さんのバイクを取り替えてくれたら楽しいかも知れませんか？」

「あ、それナイスアイデアよ！！旭さん達のサンパチとか真子さん達のマツ八ってどうなのかしら？」

「エンジンが私たちとは全く異なる構造ですからね・・・でも乗せてくれますかね？」

翔子が言うと、由美もうんとうなる。バイク乗りにとって、自分の愛車を他人に乗せることは躊躇してしまう時が多い。そしてその傾向は新車乗りの人間と旧車乗りの人間に多く現れる。

「まあ、機会があったらやってみたいなあっていうことで。今度みんなに聞いてみましょう？」

「ですねえ」

2人は視線をメニューに移すと、ボタンを押してそれぞれ注文をした。

「はあ、食べた食べた・・・」

「お腹いっぱいですね・・・」

それからしばらく話していた2人は、料理が来ると同時に会話を少なくして食べることに集中した。食べ終わった皿を前に2人は水を飲んで一息ついた。

「ここって値段の割に量があるからいいのよねえ」

学生バイク乗りに贅沢は出来ない。由美が一番安くてその中でも量があるペロンチーノを、翔子はドリアを選んだ。有名なチェーン店だ。

「ガソリン代が毎月キツイのよねえ・・・翔子ちゃんは？サンゴちゃん燃費ってどう？」

「んー、そんな特別に悪いということは無いですけど・・・やっぱりキツイですよ」

基本的にフルノーマル仕様の翔子はさほど燃費は悪くないらしい。それでも現行車に比べれば良くなるが。

「圭太も結構キツイみたいだし、なんとかならないかしらねえ」

由美がぶつぶつ言っていると、翔子もため息した。

「学生身分だと維持費も大変です・・・はあ、来年は車検もありますし・・・」

「凛ちゃんも紗耶香ちゃん達はどうやって維持してるのかしら？不思議よねえ」

維持費が高い旧車の中でも最も燃費の悪いマツハに乗る1つ年下

の双子姉妹を思い出して由美はため息をつく。

「お家がお金持ちだからですかね・・・？」

「考えられなくないかも・・・いやでも、あの2人の性格からしてやっぱりそれは考えにくいわ。今日会ったら聞いてみましょう」

「ですね・・・2スト乗りと言えば、旭さんも凄いですよね。あの歳で1人暮らししてバイクも維持してるんですから」

「あの人はほら、きつと仕事で稼いだお金は家賃とバイクだけに注ぎ込んでるんじゃない？職場でご飯は食べれるし」

「あ、なるほど・・・」

身内話に花を咲かせるあたりはやはり現代の女子高生である。2人はしばらくいろいろな話をした。話が身内ネタから学校生活ネタになると、由美は翔子に聞いたことをたずねた。

「そういえば翔子ちゃん、家族とは上手くいつてるの？」

初めて会った時から聞いていた家族との不仲。翔子は少し苦笑いしてから首を横に振った。

「全然ダメです・・・義理母さんや義理兄さんは全然話を聞いてくれませんし、お父さんもあまり帰ってきません」

「そうなんだ・・・」

由美は少し気まずそうに言った。やはりグレーゾーンだったかと思い違う話題を頭の中で探していると、翔子がニッコリ笑った。

「でも、皆さんのおかげで以前より苦じゃありません！皆さんと集まったりする時がいつも楽しみで今日も学校サボっちゃいましたけどすごく楽しいです！！」明るく言った。心の底から今が楽しいと伝わってくる笑顔に由美は一安心だ。

「それならよかったわ。でも何かあったらすぐに私に相談しなさいよ？」

「はい！」

それからしばらく、長話をして時間を潰した。女子というのは話題がつかないのか2人の間で会話が止まることは無かった。内容はほとんどバイクの話なのでそこが普通の年頃の女の子とは少し違うが……。

由美が何気なく腕時計を確認すると時刻はすでに14時を回っていた。

「もうこんな時間？早いわね」

「本当ですね・・・楽しい会話は時間がすぎるのが早いですね」

「全くね。じゃあ行きましょう」

2人は支払いを終えると外に出て真っ直ぐCB350Fourに歩み寄った。

「じゃあ翔子ちゃん、運転よろしくね！」

「由美さんも道案内、よろしくお願いします！」

言ってから、2人を乗せたCBは発進。駐車場を出るとシングルカム4気筒の加速音を響かせる。対向車線から来た軽トラのおじさんが懐かしそうに振り返った。

20分くらい経ち、2人は無事にホームセンターに到着した。ここはこの辺りではかなりの大手で電池から発電機、ネジの一本から大型電動工具、はたまたハサミから芝刈り機までなんでも揃う。店

内に入ると、由美は店員を捕まえて紫外線硬化FRPがあるかをたずねると、店員に案内されていった。

「あつたわ。これね？」

手に持つと、縦横約50センチほどのゴムのように柔らかい板だ。これが今回のキーポイントだ。

「結構高いのね・・・はあ」

ため息をつくが致し方ない。これが無ければサイドカバーは治らないのだ。由美はそれを手に持ち隣にいる翔子を見ると・・・

「いない・・・」

辺りを見回すが見当たらない。となりの売り場をのぞくと、少女がある棚の前でしゃがんでいた。

「どうしたのよ？」

「いや、この工具いいなあって」

見るとそこにはラチェットレンチが数種類あった。その1つを手にとってみた。握るグリップがあり上の方には長い延長ソケットがはめられている。それを回してみると、

カチカチカチ・・・

「なんかいいわね・・・カッコいいわ」

「こつこつというのがあって、自分が凄くメカに強くなったような気分になりますよねえ」

グリグリと工具を回す由美を見て翔子が言うと、由美はさらに違う工具を見つけてきた。

「こつこつ・・・持っていた方がいいのかしら」

「うーん・・・どうなんでしょう・・・」

2人はしばらくその場でしゃがんでいたとか・・・

時刻は放課後。由美との待ち合わせのため、圭太は由美の家の前にFXを停めて待っていた。

「遅いなあ」

1人呟いてみる。由美1人ならいざ知らず、今回は翔子と一緒にいる。それでこれだけ遅れているというのは少しおかしい。圭太は昨日の由美の転倒を思い出して不安になってきた。

「まさか・・・」

不安な考えほど捨てきれない性格の圭太は嫌な予感を感じてFXに跨がりエンジンを掛けた。そしてギヤをローに入れてクラッチを繋いだ瞬間だった。

ブアアアアア・・・！！ブアンブアン・・・！！

昨日由美が転んだ曲がり門から、翔子のCB350Fourが姿を現した。そのまま横に並ぶと、翔子がギヤをニュートラルに入れてから頭を下げた。

「遅れてごめんなさい！」

「よかったあ・・・なにかあったのかと思っただよ・・・」

言っただけ自分もギヤをニュートラルに入れる。そして翔子の後ろに座る由美を見ると・・・

「・・・」

かなりご機嫌な表情だった。見れば翔子もニコニコしている。

「紫外線硬化FRPだっけ・・・買えた？」

「ええ！バッチリよ！」

由美が誇らしげにビニール袋を見せ付ける。中には板状の物と、なにか細長い物が入っている。

「あれ？それは・・・？」

圭太が問うと由美は誇らしげに中身を取り出した。

「安かったの！ラチエツトレンチ！」

差し出された工具を見て、圭太は首を傾げた。なぜ、今ラチエツトレンチが必要なのだろうか？

「あの、由美？なんでそんなの・・・」

圭太が問うと、由美はニコニコしながらラチエツト本体について説明を始めた。

「このレバーをクリツて回すと・・・ほら！今度は逆方向に首が回るように！！」

「いや、だから・・・なんで？」

「なんかあつたら便利かなって思ったのよ！カッコいいでしょう！？」

満足度MAXの由美がほくほくしながら見せ付ける。まあ見せ付けられたところでなんとも無いのだが・・・

「そーやって無駄使いばかりしてたら、またガソリン代が無くなるよ？」

「大丈夫！！必要だから！！」

何が大丈夫なのかよくわからないが、とりあえず今は無視することにした。

「ホームセンター楽しかったですよねえ、また一緒に行きたいです！」

「そうね！そうしたら次はメガネレンチセットが欲しいわ！！」

よくわからないが、2人はホームセンターにハマったらしい。圭太は今後の由美の無駄づかいを考えて頭を押さえた。

「学校はなんとかごまかせたよ。明日には来れるって言うておいたから」

「ありがとう！これで安心ね！」

「じゃあ早速行きましょう！」

翔子が意気揚々と言う。しかし圭太と由美は「あ」と言って固まった。

「集合場所が洋介さん家の工場って言うていたけど・・・場所わかんないよね？」

「そもそも・・・ゼファーちゃんはどしたらいいのかしら・・・」

「あれ？連絡来て無いんですか？」

ケータイを持っていない翔子が2人にたずねると、2人は首を振った。

「じゃあちよつと僕が連絡してみるよ」

「ありがとう！お願いね」

ケータイを取出して、洋介の番号にコールする。2人にも微かにコール音が聞こえる。しかしなかなか電話に出る気配が無い。圭太が諦めて旭か真子達に連絡しようかとケータイを切ろうとスピーカーを耳から離れた瞬間だった。

ガラガラガラガラ・・・

聞き覚えのあるシヨボい排気音が門から聞こえたかと思うと、そこからボロい軽トラが現れた。運転席には洋介。

「ヤッホー！みんな揃ってるか！？」

「洋介さん！わざわざ来てくれたの！？」

由美がたずねると洋介は「まあな！」と言って軽トラから降りた。

「壊れてただけだな、コイツ。昨日夜中に応急処置してなんとか走れるようにしたんだ。エンジン切ると掛からなくなるから早くゼファーを乗っけちまうぞ！」

言って、後ろの荷台を開けて踏み板を掛ける。

「ゼファーは？」

「今持つていくわ！！」

言つて、由美は玄関に停めてある愛車のカバーを外し路上に押し出した。サイドカバーは下駄箱の上に置いてあるのですぐに取つてからシートの上に乗せて軽トラの後ろまで運んだ。

「ありま・・・こりやまた随分・・・」

洋介がしかめっ面でゼファーを見つめる。なにか深刻なダメージでもあったのかと不安になって由美が口を開く。

「あの・・・なにか重度の不具合が・・・！？」

すると洋介は真面目な顔でこう言つた。

「軽傷すぎる・・・！」

「へ・・・？」

あんぐりする由美に、洋介がパツと笑いながら傷ついた箇所を指さしていく。

「ウィンカーステアはもげて無い。もげてたらフレームのネジ穴にも障害があるから身構えてたけど、ステア自体が折れているんだな。これなら交換で済むし、他の傷も大したこと無い。すぐに治るよ！」

その言葉に安心した由美はほつと胸を撫で下ろした。どうやら重症では無いらしい。

「じゃあ我がアジトまで！ちゃっちゃんか運びますか！」

言つが早く、洋介はゼファーのフロントタイヤを踏み板に乗せると、そのまま一気に荷台まで押し出した。不安定な状態になるこの作業を1人でなんなくこなし、見ただけでバイクの症状がわかる洋介と、先ほど買った1本のラチェットレンチを見比べてやるせなくなつた由美と翔子は酷く深いため息をついた。

「じゃあ出発するか！由美ちゃん好きな奴のケツかオレン隣ね！」

「あ、真子さん達は？」

圭太が言つと、洋介は笑いながらドアを閉めた後、くるくるハン

ドルで窓を開けて顔を出した。

「赤城3姉妹は街道で旭達と合流してから一緒に来るって。もしかしたら向こうはもうついてるかも知れないから少し急ごう！」

「じゃあ圭太、後ろ乗せてね？」

「うん」

FXのリヤシートに腰を下ろすと、軽トラとバイク2台は走り出した。

由美は前を走る軽トラの荷台に積まれた愛車を見る。固定されているとはいえやはり若干不安定に見えるのは仕方無い。注意してゼファーを見ていた時だった。

「あら・・・」

「どうかしたの？」

走りに集中しながら圭太が問うと、由美がへえーとか言いながら呟いた。

「いや、さつきまで翔子ちゃんのサンゴちゃんに乗せてもらってたじゃない？それで気付いたんだけど、全然乗り心地が違うわね・・・」

「

「どんな風に？」

「なんかFXの方が・・・固い」

「・・・」

由美の表現方法の大雑把さに何が違うのかいまいち疑問の残る回答だったが、圭太はとりあえず納得して走ることに集中した。

国道を越してすぐの交差点を右に曲がると、そのまま狭い抜け道になる路地に入る。しばらく走ると比較的交通量が多い道路に出る。その道路沿いにあるのが洋介の実家、『羽黒モーターズ』だ。ガレージ自体はそれなりに広いが、クルマ用のオートリフトや工具、預かった客のクルマなどが鎮座しているため今日来るメンバー全員のバイクは洋介のCB400Fourと由美のゼファアを覗き、ガレージの看板の目の前にまるで販売車のように並べられた。

「改めてこのゼファアを見ると、FXキット開発の苦勞が垣間見えるわ・・・」

何気なしに真子が由美のゼファアをまじまじと見る。ちなみにすでに旭や赤城3姉妹は到着していた。

カワサキ好きな3姉妹は由美のゼファアを見てなにやらマニアックな話をしている。その後ろでは洋介に借りた雑巾でカフェヘルを拭く旭と美春がいた。

「ったくよ・・・ただでさえマツハとサンパチの集団だつのによ、あの狭い路地でこれでもかって白煙とオイルバキバキに飛ばしやがってよ・・・」

「もう道路真っ白だったよねえ 歩道の人ビツクリしてたよ」

美春がニコニコしながら言うと、後ろにいた千尋が困ったように首をすくめた。

「ちよつと迷惑だったかも・・・だってもう、とにかく真っ白で火事みたいだったもんね」

すると、姉と妹のマニアックな会話についていけなくなり戦線離脱した凜が会話にまじる。

そんな中、洋介はてきぱきとゼファアを治すのに必要な工具一式を持ってきた。が・・・

「洋介さん？なにそれ？」

由美が啞然としてたずねる。洋介が持ってきた工具類は、かつて旭の家で見た数とは比べものにならない量だった。まあこれが本業なのだから当たり前なのだが。

「初めてみるだろ？これが現場の基本だぜ？」

二カつと笑って下準備をする洋介と、現場の基本達と、自分が買ったラチェットレンチを見て、由美と翔子はなんだかとっても申し訳なくなってきた。

「よし！それじゃあ由美ちゃんのゼファーを今から治していこうと思っ！」

準備を終えた洋介が勢い良く言うと、皆洋介の方を向いた。

「しかし重大な問題も生じている！」

「重大な・・・!?」

大げさに由美を見ながら言うと、由美は不安そうな表情でぎゅっと拳を握り締めた。

「うむ。みんな集まってくれたのはいい。それぞれ使えそうな部品の提供もあるし、バイクは治るのだが・・・」

そこで一旦句切る。そして困ったように集まってくれた全員を見た。

「作業内容に対して人数が多すぎるのだ」

そう言っつて、ゼファーをよく見てみる。確かに壊れてはいるがどれも軽症。昼間に1人でやっても最後は日が暮れる前に洗車も出来てしまいそうなくらい時間がかからない。そんなバイクに総勢10名もの人数が集まった。はつきり言えば無駄なのだ。

「確かに・・・これなら私が出ても邪魔になるわね」

「私はタイヤでもみがいあげやう」

せつかく来たのにあまり役に立たないとわかり落ち込む真子と、出来ればあまりメカに触ってもらいたくない美春が言う。一方由美は洋介の話を聞いてホッも胸を撫で下ろしていた。

「本当によかったわ・・・軽症で・・・」

「洋介さんが言うなら間違いないね」

圭太も由美のゼファーをみて一安心。どうやら心配するほどでもなさそうだ。

集まったみんながガヤガヤ話していると、洋介が手を上げた。

「そーゆーわけで、オレ、旭、由美ちゃん以外の中からゼファー修理チームをじゃんけんんで3人決めようと思う！」

「じゃんけん・・・これは勝たないと・・・」

「勝負事なら全てに全力！！早くじゃんけんしようぜ！！」

「凜お姉ちゃん・・・はあ」

じゃんけんと聞いて、何を出すか考えだす翔子。横では双子姉妹が熱くなっていたり冷めていたり。

「私も協力したいなあ」

「じゃあ私とちーちゃんて勝ち抜こう」

「千尋はともかくオメエは負けとけ」

旭が冷静にツツコミを入れると、洋介が「行くぜ」と言っただけじゃけんを開始した。

『出ーさなきや負けだよ最初はグー！じゃんけんぽんっ！！』

「あ・・・」

己の拳を見て声を上げたのは美春だった。美春の渾身のグーは、全員のパーによって握り潰された。

「負けちゃったよう・・・」

「負けるとは言っただけど・・・この人数で1人負けってオメエ・・・」

旭が突っ込むと、1人へこみながら輪を離れる美春。勝負は2回戦へ。

『出ーさなきや負けだよ最初はグー！じゃんけんぽんっ！！』

「負けた・・・！」

「僕も・・・」

「私もです・・・」

今度は真子、圭太、紗耶香が抜けた。これで勝ち残ったのは丁度3人・・・

「由美さんやりましたよ！！」

「よっしやあ！」

「おにーちゃん！勝った勝った」

翔子、凜、そして千尋がゼファー修理選抜チームに選ばれた。

「やっと思返しが出来ます！」

「そ、そんな気にしないでよ！今日だって十分だったわよ？」

嬉しくてテンションが高くなって踊っている翔子をなだめる由美。凜は1人勝利の舞いと称す変な踊りを踊っていた。

「勝った！勝った！勝ったぜわっしょい！」

「恥ずかしいから他人のフリだ」

「うん・・・」

頼れる姉と双子の妹に無視されていることにも気付かず、凜はくるくると踊り続けた。

「おにーちゃん！私もやっと思返して立てるよ！」

「よかったじゃねーか。ま、足引っ張んなよ？」

「いいなあちーちゃん・・・」

そんなこんなで話がまとまるといよいよ作業開始となった。まずは1番時間の掛かるサイドカバーから。これには旭、千尋、由美が充たった。

「割れちまったサイドカバーはこれで全部だな」

真つ二つになったサイドカバーの残骸と固定用の爪の破片を見て旭が言う。

「コイツはまずサイドカバーをマスキングテープで固定して位置合わせからすんぞ」

まず2つに割れた本体を合わせる。ぴったりになったらそこから千尋の出番だ。

「千尋、オメエこれを今から貼ってくれ」

「わかったあ！」

元気に返事をする、表から数センチ毎にちぎったマスキングテープを貼りつけていく。これをちぎらずにセロハンテープのように貼ると強度不足により固定作業中にズレるのだ。またマスキングテープの無駄使いにもなる。均等に貼り終わると、合わせ目を見ている。

「目の前で見るとわかるけど、少し離せばまるで新品ね！」

由美がホツとして呟くと、ここからが作業の本場になってくる。

旭は由美から受け取った紫外線硬化FRPを袋から出した。それをハサミで切って手に持つとサイドカバーを裏にした。

「で、今からコイツを貼っていくが・・・まず綺麗に貼ることが重要だ。あと爪の近くにはあんまり貼んなよ？フレームとかにハマって上手くつかねーかしんねーし。それとFRPは出来るだけ重たくすんなよ？」

「任せてよ！私、美術は5なんだ！」

「ゼファアーちゃんを復活させるんだから・・・！慎重にやるわよ！」

2人がFRPを貼りつける作業に入るのを確認してから旭がゼファアーを見ると、向こうでは洋介、翔子、そして凜が何やら作業していた。

「曲がったステップはとにかく曲げ直すしかない。幸いあんまり酷くは無いからすぐに治るな。翔子ちゃんと凜ちゃんは右側に立って単車押さえて！」

「は、はい！」

「任せる！」

言われたようにバイクの右に立ってハンドルを握る。すると洋介はどこからか長い鉄パイプを取り出した。それをステップに差し込むと2人に合図した。

「いつせーのせー！」

掛け声とともに鉄パイプに力を入れると、サイドスタンド側に引っ張られ転びそうになる。フロントに翔子、リアのクラブバーに凜がしがみついて車体を押さえ付ける。そして力作業に時間を掛ける洋介では無い。テコの原理で押されるステップはものの数秒で元の位置に戻された。

「よし！我ながら綺麗に戻せたな！！！」

足を掛けてクラッチペダルを操作してみる。足の甲はぴったりと

ペダルの裏に当たっていた。

「1回で元まで戻しちゃうなんて凄いです!!!」

翔子が感激しながら言うと、誉められた洋介は気分が上がったのか豪快に笑った。

「翔子ちゃん、あんましソイツ担ぎ上げんなよ?調子乗っから」

旭がボソツと言った。

「んじゃ、サイドカバーは硬化待ちだな・・・洋介、オメエ次何やんよ?」

「そだな・・・ウインカーでもやるかな」

「わあつた。純正だべ?ステアーなら袋に入っつから」

「おう」

短い会話で次の作業内容が決定した。これなら早く作業が終わるかもと由美が胸に期待を膨らませていると、表から真子のマツハの排気音が響いてきた。

「なにやってるのかしら?」

見ればマツハに跨がった真子が圭太になにやら話している。かなり気になるが、今は自分のバイクを治すのが先決。今すぐ飛んでいきたい気持ちを押さえて作業に集中することにした。

さて、旭を見れば袋から何やら取り出した。金色に光る丸い円盤のような部品だ。

「由美ちゃん、この傷気になんねえ?」

言って、旭が指を指したのは現在取り付けられている純正のジェネレーターカバー。転けた際に強く打ったのか削れてしまっている。

「別に換えたくなくさいいいんだけどよ?ドレスアップも兼ねてコイツに換えてみんのもアリかと思っつてよ?」

そう言っつて差し出したのはBEETのジェネレーターカバーとポイントカバーだ。フィンがついていて浮き彫りで『BEET』と書いている。

「いいの旭さん?こんな高そうな部品もらっつても・・・」

さすがの由美も遠慮がちにたずねると、旭はどうでも良さそうに

頷いた。

「オレは使わねえしな。役に立つんならその方がいいしよ」
ぶつきらぼうに言つと、由美は両手放しで喜んだ。

一方・・・

「次は負けませんよ！えい！」

カーン

「甘あい！てややあ！！」カーン

「わあ！またやられましたあ・・・」

暇になつた美春と紗耶香がこの時期に何故か羽子板をしていたのは、修理とは全く関係無い。

「じゃあちゃっちゃんべー！ハンマーと貫通ドライバー借りんぜ？」

言いながら工具箱の中から2つを取り出す。旭は左のジエネレータカバーの取り外しから取り掛かった。

「緩めて外すだけだかな。ただ事故つた時にネジ締まってるか知んねえから貫通ドライバー当てて・・・」

言つてハンマーでドライバーの柄を打った。軽く2、3回打つとハンマーを地面に置いてネジを緩めた。

「一定方向に衝撃を加えると簡単に取れんだよ。やってみ？」

由美にハンマーと貫通ドライバーを手渡す。

「これを叩くのよね？」

「ああ。ただクランクケースはアルミだからネジ山ナメたらオシヤカナ」

「ゴメンなさい、任せるわ」

オシヤカと聞いてビビった由美は工具を旭に返した。千尋を見る
と千尋も首を横に振った。はあとため息をして旭は残りの作業を続
けた。

洋介も折れたウィンカーステーを交換し終えたらしい。今はフロ
ント周りを中心にガタが出ていないかチェックしている。

「目視で大丈夫でもいざホイールを外してみるとベアリングとかシ
ヤフトにダメージがあることがあるんだ。まあこの程度の転倒なら
大丈夫だけど。押した時もブレーキの引きずりも無いし・・・」

「でもホント良かったよなあこの程度の傷で。昨日スゲー落ち込ん
でたし」

昨日の由美の絶望具合からしてどれほどの大破だったのかと思っ
ていた凜が呟く。

「ま、愛車が傷ついて落ち込まないヤツはいないってことだな」

「そうですね」

洋介が言っていると翔子も頷いた。

ここからはもう簡単な作業のみだった。曲がったブレーキレバー
にメガネレンチを掛けてテコの原理の応用で曲げ直したり、ジエネ
レーターカバーやポイントカバーの交換等。ハンドルやフロント周り
にダメージは無く、衝撃でズレたヘッドライトを戻したら作業は終
了。

「よっし・・・光軸調整までしてねーけどなんとか終わったな。後
は・・・」

「・・・ゼファーちゃん！」

作業が一段落して洋介がつぶやくと、それを遮るように由美がゼ
ファーのシートの上から抱きつきながら叫んだ。

「由美い、まだ最後の仕上げが残ってんだろ？」

まだ仕上がっていない場所を指さして凜が笑う。もちろんバカに

しているわけでは無く、愛車の復活に喜ぶ由美の笑顔が本当に幸せそうだったからである。

「今日は珍しく快晴だったかな、サイドカバーのシートも上手く硬化したし・・・これで総仕上げだ」

旭が先ほど固めたサイドカバーを取り出した。ガリガリになったエンブレムは交換も考えたが、由美の反対と、どうせ替えもないのでそのまま装着した。

「じゃあ由美ちゃん、最後任せんわ」

サイドカバーを渡され、それを受け取る。少し真ん中にヒビが入っているが少し離せばわからないレベルまで修復出来た。由美は改めて傷だらけのエンブレムを見て感謝した。

そしてフレームの上にある爪をかける場所に、紫外線硬化FRPシートで補強し直した爪を掛けた。上手くハマリ、そのまま固定する。サイドカバーは見事にその幅に納まった。

「よっし、まあまあ出来か？」

「由美さん！ゼファー、治りましたね！！」

フィッティング具合を確認する洋介と、由美の腕にしがみ付いて喜ぶ翔子。千尋も満足そうに頷いているし、他のみんなも改めて修理の終わったゼファーを見つめる。真っ赤な外装に、新たに着けたBEETカバーがまぶしい。

そんな中、とうの由美はふるふると身体を震わせて立ち尽くしている。そしてそのままゼファーに近づくと・・・

「ゼファーちゃん！！」

またシートの上から抱きついた。

「よかったわ・・・本当によかった・・・!!」

目に涙を浮かべながら愛車に語り掛ける由美。みんなもそんな光景を見て、修理してよかったと思った。

「よかったなあ由美ちゃん。じゃあ工賃合わせて金額出すから待っててな」

「洋介さん！冗談だってそんなのダメですよ!？」

「冗談だつて翔子ちゃん。オレがそんなセコい男に見える？」

「オメエはセコい男として有名だろーが」

「セコいーセコいー」

洋介達が冗談を言い合いゲラゲラと皆で騒いでいるとき、圭太を探していた由美は辺りを見回すと凜と紗耶香が工場の出口を見つめてつつ立っているのを見つけた。

「なにしてるのよ2人とも！凜ちゃんも紗耶香ちゃんも今日はありがとうね！！とここで圭太は？」

笑顔で2人の肩を叩きながら辺りを見回す。

「圭太・・・？さらわれたぞ」

「え？」

「真子姉さんがマツハに乗せて・・・さっき」

紗耶香が指をさすと、真子のマツハがいつの間にか無くなっていく。

「な、なんで！？圭太が真子さんと！？」

慌て道路に出てみるが、マツハはすでに見えない。消えかけの白煙だけがわずかに残っていた。先ほどからマツハのエンジン音は聞こえていたし圭太が真子と話していたのも知っていた。作業に集中していたので気にしていなかったのが仇となった。

「あ・・・私止めたんですけど、『5分で帰ってくるから』って・・・」

「どこ行つたのよ!？」

「わ、わからないですよ・・・」

由美の目線にビビりまくる紗耶香。その時、道路の向こうから明らかに近所迷惑な白煙と爆音を上げて近づいてくる1台のバイク。だんだんとギヤを落としていき、工場の前に滑り込んできた。

「姉貴、どこ行つてたんだよ」

マツハから降りた真子に凜がたずねると、長い髪を手でかき分けながらヘルメットをミラーに掛けた。

「少しな、圭太君を乗せて走ってきたんだ」

「いやいや、それはわかってるっての」

「ちよつと圭太！なんで真子さんに誘拐されてるのよ！！せつかく私のゼファーちゃんが治ったって言うのに！！」

一緒に降りた圭太に由美が食って掛かる。紗耶香が止めようとす
るめ、その剣幕に退くしかなかった。そんな暴れトラの様な由美に、
圭太はなんとか落ち着いてもらおうとコトの経緯を説明しようとし
た。

「ち、ちよつと落ち着いてよ由美っ・・・！！」

「落ち着いてるわよ！！なんで真子さんと一緒にどっかいつちゃう
のって聞いているのよ！！」

が、そんなコトで収まる怒りでは無いらしい。たかだか数分とは
いえ、自分の愛車が治った時にその場にいなかったことに憤慨して
いると、横から真子が現れた。

「圭太君と話していてね、興味があるみたいだから、ちよつと乗せ
てあげただけ」

さらりと言うと、真子はビシッと由美を指さした。

「あなたは圭太君の幼なじみでしょう？勝手に離れたのは悪かった
けど、そんな敵を見るような目で見られる筋合いは無いわ」

「な！？い、言わせておけば・・・！！」

睨み合う2人。本人達も忘れていたが2人は圭太を取り合うライ
バル同士。抜け駆け（？）されたことに怒り心頭の由美が口を開こ
うとした時、向こうでガヤガヤしていた美春達も何事かとやってき
た。

「どしたのゆうちゃん。ナニやら怪しい雲行きだよ・・・？」

「どーせアイツがらみだべ？ったく」

旭がため息をつく。

「どどど、どうしましょう・・・あっ！」

先ほどから隅で事情を聞いておどおどしていた翔子が、ケンカも
終わらせられて楽しくなれるアイディアを思いつき、2人の間に入
った。

「あの、由美さんも真子さんも！ちよつと待ってください！！」

「なによ！？今から真子さんと勝負するんだから！！」

「ふっ・・・私のマツハに勝てるのかしら？」

熱くエスカレートする2人。正直翔子は泣きたくなつたが、なんとか堪えて渾身のアイディアを口にした。

「こ、これからバイクを取り替えっこして乗ってみませんか・・・

！？」

「「はい？」」

第37章 難なく復活！その矢先！？（後書き）

大変遅れてしまいました、3気筒です！

最近、あの大地震の影響で計画停電などで不便です。汗がソリンもありません。今はなんとか入れられるようになりましたが、被災地などではまだ足りていないのが現状。ガソリンが無ければ走れないバイク、もう冬は越しましたがまだまだ春は遠いようです。

ただ、今回震災の影響のあおりを受けてどこにも走りに行けない中、旧車物語のメンバーは今日も楽しく走っておりますので、よろしかったら見てやってください汗

これからも一層頑張っていきますので、宜しくお願い致します。

3気筒

第38章 ワクワク試乗会！ 唸る関節技

「バイクの？」

「交換・・・？」

翔子がつっさに出したその提案に由美と翔子は思わず聞き返した。

「はい、交換してみんなでいろんなバイクを乗り比べてみるんです・・・！」

周りが注目するなか、緊張を押さえて翔子は続けた。

「そ、それに、これには旧車物語のこれからを考えたら、やった方がいいと思います・・・！」

「オレ達のこれから・・・？」

洋介が不思議そうに首を捻る。

「はい。あの・・・怒らないでくださいね？・・・その、私達のチームってみんなこ、個性が強いじゃないですか・・・もちろんバイクも・・・そこで、皆さんまだ出会って日が経っていないですし・・・わからないこともあると思うので・・・その、あの、だから・・・」

「つまり・・・単車の取り替えっこして、みんなとの性格や友情を深め合う・・・てこと？」

洋介が代わりに言うつと、翔子はコクリと頷いた。

「そ・・・そうですね！そうすれば、今以上にチームとしての・・・友情が深まると思うんです！」

翔子の言葉に周りはざわつく。

「どー思うよ？」

「悪くは無いと思うよお 私もゆーちゃんやしーちゃんのバイクに乗ってみたいよ」

「オレも・・・同じ2ストトリプルのマッハにゃキョーミあるしな。オレあ賛成だ」

旭達は賛成。特に旭は同じエンジンレイアウトの赤城姉妹のマツ八に興味深々のようだ。

「楽しそうじゃねーか！オレも賛成だぜ！」

翔子の肩に腕を回しながら凜が言う。紗耶香も頷いた。双子姉妹も賛成。ま、皆の愛車を見ながら「他のカワサキの性能は・・・」とか「ホンダの性能を知る時が・・・」とか「スズキのトリプルは・・・」とかヨダレを垂らしながら若干壊れ気味の紗耶香はとりあえず無視しておく。

「私も別に構わないが・・・スピードや走りの上限を決めないと危なく無いかしら？」

先ほどまで由美と睨み合っていた真子の意見は最もだ。旧車は個性の塊である。自分の愛車と同じ感覚で走れば事故や故障に繋がる可能性もある。

「じゃあその辺は場所を移動してから決めようぜ。街乗りだとわからないこともあるし」

そこで洋介が前に行った峠に行こうと提案。あそこならコーナーやストレートがたくさんあるし何より対向車が少ない。平日の夕方なら検問もないと洋介が言うと賛成一致で決定した。

「じゃあ今オレのフォア走れねーから誰かケツに乗せてくれ」

「あれね？壊れちゃったの？」

美春がたずねると洋介は工場の隅にあるシートを剥がした。そこにはリアの足回りのバラされたCB400Fourがセンタースタンドを掛けて鎮座していた。

「ご覧の通り、進化の途中でな」

「あ・・・前に言ってたウエダのスイングアームですか!？」

翔子がニコニコしながらたずねると洋介は笑って頷いた。

「運がよけりゃ、来月アタマには完全体になるからな、そしたらオレのフォアにもみんな乗ってくれよな！」

笑顔で満足そうな洋介。バラされたヨンフォアの復活は近いだろう。

「そんじゃ早く支度すんべ。日が暮れると面倒だぜ？」

旭がサンパチのチョークを引きながらキックする。それを合図に皆が支度を始める。

圭太もFXに跨がりキーシリンダーにキーを差し込むと、横に治ったばかりのゼファアを押してきた由美が不満そうに見てきた。

「どうしたの由美？つまんなそうな顔して」

「圭太のバカ・・・」

言って、そのままエンジンを掛けて走っていった。

「？」

史上最強の鈍感少年はなんのことだかわからないままエンジンを掛けた。

そのまま走り続けて一同は20分ほどで峠にやってきた。上りの途中で検問はないことも確認。頂上の駐車場で一同はバイクを並べて停車していた。

「さて！じゃあどうやって乗り比べるよ？」

サンパチに跨がったままタバコをふかす旭が言い出しっぺの翔子にたずねる。

「じ、じゃあ・・・興味のあるバイクに・・・」

「じゃあオレはサンパチで！旭のでも美春のでもどっちでもいいぞ！」

翔子の説明を途中で遮ると凜は空いていた美春のサンパチに跨がった。ドンと乱暴に座った凜を見て美春が不安そうに忠告した。

「転んじゃダメだよお？」

「わかつてるって！心配すんな！」

「壊したら・・・リンリンを壊しちゃうからね」

「やっぱり旭のにする・・・」

美春のダークな笑みを見て、凜はひよひよいと旭のサンパチに移動した。

「とにかく気を付けて走ってくださいね？」

「わ、わかつてるよ・・・！」

心配そうな翔子に凜がムキになって言った。

「じゃあ僕はどうしようかな・・・」

圭太は改めてみんなの愛車をみる。どっしりとしたスタイルで威風堂々とした美春のGT380。この中では間違いなく俊足のじゃじゃ馬マツハシリーズ。シングルカム4発の先駆けCB350For。皆カラーが違う車種達だ。

「圭太さん、私のマツハとFXで替えっこしてみませんか？」

珍しく紗耶香の方から圭太に話し掛けてきた。圭太はレインボーブルーのマツハ？を見る。

「うん、FXでよかったら喜んで」

「やった・・・！ありがとうございます！」

頭を下げて言うと、紗耶香は愛車のキーを圭太のFXのキーと交換した。カワサキのエンブレムをあしらったキーホルダーの付いたマツハ？のキーを受け取る。

「私、一度FXに乗ってみたかったんです。おつきいですね・・・」

FXの側に立ちながら紗耶香がつぶやく。写真や見た目だけだとスリムに見えるFXだが意外にも旭達のGT380よりも大柄な車体に紗耶香が緊張と期待でワクワクしている。

「そんなに大きいかな？」

「はい、私のマツハに跨がったら驚きますよ？」

ニヤニヤ笑う紗耶香。2人で注意点や乗り方を話しているのを、遠

くから見ている者が1人……。

「ふん、圭太のバカ……」

すっかりすねてしまった由美は圭太をにらみつけるのもそこそこに、自分はどうしようかなといういろい目を通していると、由美にとって宿敵が声を掛けてきた。

「由美ちゃん、私のマツハとゼファー、交換してみない？」

真子の提案に、由美は不機嫌そうに顔を向けた。

「私のゼファーちゃんど？」

「ええ、ゼファーって乗ったこと無いのよ。どうかしら？」

由美は真子のマツハを見る。白と緑のレインボーラインの美しいそのマシンを見て由美は思った。

（ライバルを知って、己を知れば活路が見いだせる……いつも抜け駆けされたり邪魔されたりするし、真子さんを知るうえでこれは美味しいわ……）

由美は自分のゼファーと真子のマツハと真子を交互に見比べて、しばらく考えた後ゆっくりと首を縦に振った。

「ありがとう。じゃあこれ、マツハのキー」

言われて受け取ったキーにはM&Kとアルファベットのキーホルダーがついていた。嫌な予感。

「真子さん……これは？」

「ああ、それは私のイニシャルと圭太君のイニシャルで、おまじないよ」

正直、ぶつ殺してやるうかと思った。が、由美はそれを顔には出さずに受け取ると、ゼファーのキーを渡して足早にその場を去った。

「なんなのよまったく！付き合ってるわけでもないくせに……！」

声を殺してつぶやくと、キーホルダーのリングを緩めるという工作に走る。取れてしまえこんな物と言った感じだ。

「それはともかくして……これがマツハ……」

跨がる前に上から覗き込む。かなり細い車体に低く装着されたセパレートハンドル、バックステップ。

「エンジンを掛けるときはハンドルにあるチョークを引いて、ステップを折り畳んでからキックするのよ」

いつからそこにいたのか、秘密工作を見られていないか不安になってキーを後ろに隠して由美が振り返ると、真子が立っていた。

「あ、ありがとうね真子さん・・・！」

「最初は視線が低いから怖いかもしれないけど、頑張ってね」

それだけ言々と自分の愛車であるゼファアの方に歩いていった。

よかった、バレて無かったようだ。次に翔子がニコニコしながらやってきた。

「由美さん！真子さんのマツハに乗るんですか？」

「ええ、ライバルを知るのよ！翔子ちゃんは？」

「私は美春さんのサンパチです！初めてですよ2ストなんて！！」
そう言っただけ嬉しそうに笑った。

「じゃあそろそろ順番に行くべ！」

旭が言うと、お喋りもそこそこにいよいよ試乗会の開始だ。ちなみに旭は凜のマツハ？だ。

「先に4スト勢からな、2ストは煙いから後からで」

「じゃあ私達が先だよお」

CB350Fourに乗る美春が前に出た。ちなみに後ろには千尋がいる。もはや美春と千尋はセットで1人の扱いになってきた。

「あんまり飛ばしちゃダメだよ？」

「任せてよお」

「行くぞ紗耶香」

「じゃあ圭太さん、借りますね？」

真子と紗耶香も前に出た。圭太達が見守るなか、3台のバイクが峠を下って行った。

「じゃあいよいよオレ達だな。先行くぜ？」

普段鬼ハンの旭がセパハンの凜のマツハでスタートすると、続い

て凜、翔子、圭太、そして由美とスタートして行った。

「・・・早く帰ってこねーかな」

1人取り残された洋介が誰もいなくなった駐車場で立ち尽くした。

「怖っ！何よこのバイク・・・!!」

由美は悪態をついた。地面の低さもさることながら、このポジションの窮屈さ。何よりその破天荒なエンジンポテンシャルに。

「アクセルを開けたらいきなりドカン・・・!!?なんなのよコレ・・・!!」

コーナーを抜けてアクセルを開けると同時に乾燥で159キロの軽量の車体はロケットのように加速する。シート下では今にもぶっ壊れそうにエンジンがうなっている。それでもエンジンの回転数はまだ5000rpm手前だ。

「これを楽しみなすなんて・・・!!」

さすがライバル！と続けようとした時だった。サードでこの長めのストレートを飛ばしていた由美にマツハの牙が襲い掛かる。タコの針が6000rpmを指した瞬間・・・

クアアアアアアアアアアア!!!

「ひっ・・・!?!」

いきなりその視界が変わった。今までギャワンギャワンと壊れそうな音を経ていたエンジン音が一変したのだ。まるでF1のよう

な快音で次のコーナーまでぶっ飛んで行く。

「ちよ、まっつて・・・！！！」

近づくコーナーにビビり、アクセルを抜く。フロントとリアのブレーキを掛けると、改造されたブレーキはキチンと減速。必死に暴れる車体を押さえ込み緩い左コーナーを回っていく。

「なんなのよコレ！！真子さんのバカア！！！！！」

バツタみたいになつたにしがみ付きながら、由美は叫んだ。

「由美大丈夫かな・・・飛んで行つたけど・・・」

後ろを走る圭太は、由美がコーナーから消えていくのを見てつぶやく。

紗耶香のマツハは250cc。マツハシリーズの中では末っ子だが、その走りはやはりマツハだった。エンジンはノーマル後期の28馬力だがその音やフィーリングは400にも引けを取らない。さらに・・・

「ドラムブレーキかあ・・・」

ブレーキレバーに掛かる指を見て呟く。前後ディスクのZ400FXに乗る圭太に、前後ドラムのマツハは新鮮だった。

「確か紗耶香ちゃんが言っていたなあ・・・」

試乗会の前に紗耶香の言っていた言葉がよみがる。

『私のマツハはブレーキが全部ドラムです！多分乗りにくいですがど侮つてはいけませんよ？この時代の他車種のディスクブレーキよりコントロール性は高いんです！保証します！！あとマツハはカワサキが誇るマルチの2ストエンジン！！高回転では他の追隨を許さ

ぬ走りです……」

そこから先はカワサキ狂いの紗耶香。話がマニアック過ぎてついていけなかったが、圭太は今さっき由美が悲鳴を上げながらクリアしていったコーナーでマツハをコントロールしてみる。油圧ディスクに比べ、機械式ドラムは止まるのは苦手だが、減速コントロール性では抜群の操作性だ。どれだけシユールを引きずっているのかが分かりやすく、力加減が付けやすい。乗り始めて歴の浅い圭太にもわかるほどだ。車体の細さもノーマルポジションだと気にならない。圭太は自分の愛車と乗り比べながら走っていった。

「お……帰ってきた帰ってきた」

頂上で暇潰しをしていた洋介は近づいてくる排気音を聞いて入り口で待っていると、まず最初に真子の操るゼファーが入ってきた。続いて紗耶香のFX、美春と千尋のCB350Fourが入ってくる。

「どうよ感想は？」

暇すぎて退屈だった洋介がニタニタ笑いながらたずねると、真子はウンと頷きながらゼファーを降りた。

「足回りもエンジンも想像以上にしっかりしてるわ。少しでも手を入れれば絶対化けるわよ、このバイク……」

「だろーな……今日改めて思ったけどそのゼファー、スゲーきちりやっつてあるんだよな。前のオーナーがやったのか知らないが……」

由美ちゃんは幸せモンだよなあと言いながら洋介が振り向いた時、

今度は2ストエンジンの音が聞こえてきた。

「マツハか・・・」

「サンパチもいるわね」

2人の予想は的中。旭の操る400SSマツハ？がカット飛んできた。その後ろから少し遅れて真っ赤なGT380が来た。

「あー！面白えなマツハもよおー！サンパチとは全然違うわ」

「ちつくしょう鬼ハン乗りづらくてしょうがねー！でもサンパチも面白いな！！」

2人でギャアギャア言いながら歩いてくる。

「どうだった？まあ聞くまでもなさそうだが・・・」

「オメー最高だぜマツハも！速い速い・・・」

「サンパチも6速もあるからギャアの範囲広くて乗りやすいぜ姉貴！」

「そうか・・・じゃあ今度私も乗ってみようかしら」

そんなことを話していると、次は美春のサンパチに乗る翔子が現れ、次に由美、圭太と続いてきた。

「どうだった？」

洋介がたずねると、満面の笑みで翔子がサンパチから降りてきた。

「凄く楽しかったです！！速いしトルクもあるし、ミラーで確認したら後ろは真っ白ですし、勉強になりました！！」

ペコリと美春に頭を下げると、美春もニコニコしながら

「私こそありがとうだよ サンゴちゃん、凄く乗りやすかったし安定するよ」

と言うと、2人な笑いあった。

一方・・・

「どうしたの由美ちゃん？すれ違った時は強ばっていた表情が疲れ切った表情に変わってるけど？」

「大丈夫よ・・・真子さん、マツハは体質的に私とは合わないわ・・・」

「あら残念。私は凄くゼファーが好きになつたけど」

生きて帰って来れてよかったわね、と言いたげな真子と生きて帰って来れてよかった、と言いたげな由美は短い会話に終わった。まあ、今現在燃え尽きている由美に長話しは無理と言うものだが・・・

「紗耶香ちゃん、キー返すよ。ありがとう」

一方圭太は紗耶香にマツハのキーを返しに行っていた。

「どうでしたかマツハは？」

キーを受け取りながら嬉しそうにたずねる。圭太は初めて乗ったマツハについての感想を言った。

「楽しかった。軽いから止まりやすいしエンジンも僕のFXとは全然違うし凄く新鮮だったよ」

「本当ですか!？」

自慢も自慢。自分の分身のように気に入っている愛車を褒められてニコニコ顔を隠し切れないようだ。紗耶香はFXのキーを返しなから今度は自分の感想を述べはじめた。

「FXって初めて乗ったんですけど、以外と素直なバイクなんです
ね」

「そうかな？」

「はい!なんだか安心して走れるバイクでした!さすがカワサキです!
す!..!」

やばい、紗耶香がカワサキという単語を出したら後は最後までノンストップで語りだす・・・危機感を感じた圭太は早速話題を変えようかと思つた時だった。

「まあた雲行きが怪しいぜ・・・?」

すぐ近くで凜達と話していた旭が空を見ながらポツリと呟いた。

先ほどまで快晴だった夕暮れ空がいつの間にか雲に覆われ、周囲に
温い風が吹き始める。

「これじゃあ今日はもう中止ね・・・」

真子がつまらなそうに呟く。雨が降れば峠道はとんでもなく危な

ら・・・出たら真子さんなんて・・・」

「自分で撒いた種だ・・・自分で枯らせる・・・！って痛い、ゆーちゃん、人の腕はそっちに曲がらないんだよぉ・・・！？」

「由美ちゃん止めて！！おねーちゃんのライフはもう0よ！？」

ドラ○ンボールと遊戯王の少々マニアックな漫才を繰り広げる騒がしい3人を、圭太と真子が何事かと思ながらため息をついた。ちなみに、由美のアームロックは完全に美春の肘関節を極めていたとか・・・

「じゃあ国道まで出たら、そこで解散、自由行動ってことで！」

洋介がまとめると、旭のサンパチの後ろに跨がると、1台、また1台と駐車場を出ていく。どんよりした雲の下を走る8台のバイクはスピードもそこそこにヤマを下っていった。

途中、信号で引つ掛かった時だった。相変わらず不貞腐れている由美の隣に翔子が並んできた。

「由美さんどうしたんですか？せっかくゼファーが治ったのに・・・」

「よく見なさい翔子ちゃん。あの圭太の間抜け面を」

ズビシっ！！と指を指すは赤城3姉妹と仲良く話す圭太の姿が。

「別に間抜けてないと思うんですけど・・・それはともかく、圭太さんと何かあったんですか？」

自分が試乗会を提案したのは、単に乗ってみたかったというものがあるが、こんな早くに踏み切った理由は由美と真子の陰険なムードを打開するためであった。それが何故か先ほどよりも陰険になって

いる気がする。(しかも由美だけ)

「あなたは気付かないの？」

「え……？」

由美に言われて考えてみるが、全く思い当たらない。

「わからないしら……？圭太、私のゼファーちゃんさせっかく治ったっていうのに何にも声を掛けてくれないのよ？」

「……ああ、なるほど」

若干呆れつつ、翔子は頷いた。なんだかかなり拍子抜けである。

まさかそんな低次元な理由でさっきからずっと膨れていたとは思っていなかった。

「しょうがないですよ、圭太さんって凄く抜けてますし……」

前を横切る道の信号が黄色になった。由美はギヤを入れていつでもスタート出来るように準備しながら

「抜けてる以前の問題よ……！」

と言うと、信号が青になった。メーカー不明のショート管から爆音をたてながら走っていった。

途中、この中でもかなり大食いのマツハに乗る真子と凜がスタンドに寄りたいたって来た。

「この人数で行ったら邪魔くせーな……スタンド行かねーヤツあスタンドの先にあるコンビニに行くべ」

旭が後ろにいるみんなにも聞こえるように叫ぶ。

「悪いわね。すぐに戻るわ」

真子が手を上げて言うと、信号が変わり一斉に走り出した。しば

らくすると左にガソリンスタンドの看板が出てきた。日も暮れ掛かった曇り空の中でウインカーがチカチカと点滅する。どうやら美春と圭太も立ち寄りらしい。2台のマツハとタンデムのサンパチ、FXがスタンドに入るために減速。その横を由美達がスムーズに追い抜いていった。由美は抜きざまに圭太をいまいましそうに睨み付けたが、圭太は気付かずに入っていた。

スタンドに寄った4人以外のメンバーはその2軒ほど先にあるコンビニに滑り込むように入っていた。田舎コンビニの特徴である駐車場の広さのおかげで駐車場を占領するコトは無かった。

「一服したらすぐに行きましょう。雨がいつ降るかわかりませんし」

今にも降りだしそうな天気不安そうに見つめる翔子。そんな翔子の肩を洋介がポンと叩いた。

「でももつすぐ7月じゃん？夏だよ夏！！」

「そうですねえ。そうしたら毎日いい天気ですよね」

「夏って言ったたら海だって山だってなんだってシーズンだぜ！？翔子ちゃん、どこ行きたい！？」

「うーん・・・私の家は周りが山ばかりなので、海に行きたいですね」

側で夏に向けて楽しそうに話す2人を、どこかつまらなそうに見ていた由美は1人コンビニに入った。

「なによ・・・あの2人の方がよっぽどそれらしく見えるじゃない・・・！」

どうにも機嫌が悪い。自分でもどこかおかしいと思う。圭太と真子が話しているだけでイライラするし、翔子と洋介が楽しそうにしているのを見ただけで嫌味を言ってしまう。自分はこんなに捻くれていたのだろうかと思うと嫌になってくる。せつかく自分のゼファーも治り、これ以上無いと思うような素敵な仲間達と走ったと言っのに、今の天気のようにどんよりしている心の中で由美はため息をついた。

「へこんでも仕方ないわよね・・・」

気を取り直し、どうやって圭太に話し掛けるか考えていた由美に一つのポスターが目に入った。

『あのKOSがオリジナルメンバー&フルメイクで再々結成日本上陸!! 武道館3Days!!』

「うわ・・・なんだか怖いポスターね・・・閣下かしら?」

顔面白塗りメイクに派手な衣装の4人が映るそのポスターに何か勘違いをしながら呟く。左端にいる舌の長いメンバーを見て驚きながら見ていると、その下にある日程表が目に入った。

『6月29、30、31日』

「本当、もう夏なんて目の前ね・・・」

時間が経つのは早いなあと1人呟きながら、外に出ようとした時だった。

「え・・・? 29日・・・?」

バツと振り返る。タヌキみたいなメイクをした(本当はネコのメイク)ドラマーの下の日付を確認する。

「6月29日・・・金曜日・・・!!」

やはりそうだ・・・!! 忘れていたがその日は!!

その時、いきなり肩を叩かれた。

「はひゃ・・・!?!」

「どしたのゆうちゃん? 変な声出して・・・」

振り返るとそこにはガソリンスタンドに寄っていたはずの美春が立っていた。外を見ると真子達も帰ってきていた。

「もうそろそろ出発だよ? 早く行かなきゃ・・・あ」

そこまで言い掛けて、美春は目の前のポスターを見た。そして由美を見た。

「ゆうちゃん・・・結構派手な音楽が好きなんだねえ・・・」

「な!?! ち、違っわよ!?!」

なにやら激しく勘違いしているらしい。1人ウンウンと頷き始めた。

「まさかゆーちゃんが口から血をダラダラ垂らしながら白目を剥くようなバンドが好きだったなんてお姉さんビックリだよ？悪魔のミサとかで蠟人形にされて『お前を殺す！！』って言うんでしょ？お怖い・・・怖いお・・・」

「だっから違うって言うてるじゃない！！」

もう勘違いのレベルの域を超え、もはや妄想レベル域に達した美春の強引な納得を由美が蹴散らす。

「私はこの日付を見ていただけだよ！！」

「地獄の皇太子が生き血を啜り・・・え？違うの？」

由美がライブ会場で乱暴に腕を振り回し『殺せ殺せ！！』と叫んでいるのを妄想して涙目になっていた美春がやっと現実世界に戻ってきた。

「よかったあ！もうビックリしちゃったよお」

「全く・・・」

「でもなんで日付を・・・？」

美春が顔に星を書いた男の胸毛に若干目移りさせながらポスターの下を覗き込む。

「・・・29日は特別な日なの・・・」

「うん？なんで？」

「実は・・・圭太の誕生日なの・・・」

「え・・・！？」

驚く美春。由美はここだけの話だと言ってからポスターの日付を見ながら話す。

「私も忘れてたんだけど・・・誕生日で金曜日・・・次の日は休みよね？だから私考えたのよ、この日は学校が終わったら圭太を独占して夜遅くまで祝って・・・夜遅く・・・！？」

ちよつとイケない想像をした所で首をふるふると横に振る。そんな不純なことは求めていない。普通に1日付き合えれば・・・誰にも邪魔されずに過ごせればいい・・・！そしていい雰囲気になったら自分から・・・ここに、告白・・・！？・・・！！イイネ！！

由美は1人テンションをあげると、29日の日付をビシッと指した。

「美春ちゃん!!このコトは他言無用で!!……ってあら?」

目の前にいるはずの美春がいなくなっていた。ふと外を見ると開きっぱなしになっている入り口の外で、美春がなにやら嬉しそうにみんなに話していた。

「みんなあ聞いて聞いてえ!!けーちゃんが金曜日に誕生日なんだよお!!」

「待てつつつてんでしょこのアンポンタンっ!!!!」

叫びながら店外へダッシュしていく。しかし間に合うハズも無く、みんなが圭太を囲んで話していた。

「本当か圭太君……!!?」

真子がなにやら張り切りながらたずねると圭太は頷いた。

「ええ……」

「んだよオメエ、18になんのか?」

旭や洋介がガヤガヤと話している。

「だから次の金曜日にけーちゃんのお誕生日会をやるうと思うんだ

あ どうかなあ?」

『賛成!!』

全員が一致で叫んだ。

「美春ちゃん……?」

「お?ゆーちゃん!よかつたね!みんな賛成だよお」

ぶちっ………

その瞬間、由美の頭の中でキレちゃいけない線が音を立てて切れた。

「きしやあああああ!!」

「痛い痛い!!ゆーちゃんぎぶぎぶ……!痛い!痛いぞポル〇レ

フ……!!」

「お、由美ちゃんすげえ」

「見事なコブラツイスト！！さすが由美！そこにシビれる！憧れるう！！」

自分の彼女が極められているのに呑気に見ている旭と、変に煽る凜。

「ち、ちよつと由美・・・！美春さんがヤバイって！早く止めてよ！！」

「うるさい・・・！この、この・・・！！」

圭太の制止を振り切り由美がコブラツイストから卍固めに移行した時、すでに美春は白目を剥いて短い舌をつきだし、ヨダレを垂らしていた。その姿は正にジオン・シモンズ。ちよつとした恐怖です。

こうして尊い犠牲を払った結果。金曜日に「圭太の誕生日を祝う会」が発足される事が決まった。

後日・・・図らずして和製ジーン・シモンズになった真田美春氏がこんな事を語ってくれた。

『いやあ、プロレスが最強っていう猪木イズムがわかった気がするよあ・・・うん、今度から話は最後まで聞くようにするよう・・・だから許してよあ・・・痛たた・・・』

第38章 ワクワク試乗会！ 唸る関節技（後書き）

お久しぶりです！

地震発生から1月。まだ暗い影が漂っておりませんが日本復興のために出来ることからやっつけていきましよう！

暗いと言えばお花見の自粛。確かに東北の方々の事を思えばやりにくいですが、自粛ばかりでは経済が回りません！すなわち復興ができません！桜が散る前に、出来る方はやりましよう！がんばろう日本！！

そして今回のお話。書いていて車種が固まりすぎていて表現しにくいですね汗

まあ表現能力が足りないだけなんですけど・・・汗

何が言いたかったのかと言うと猪木イズムです！（笑）

こんな作品ですが、宜しく願います！！

3気筒

第39章 誕生日会！！前半

学校の埃臭い教室。今日も空は曇っている。圭太は今日この後のコトを考えながらぼーっと空を見上げた。

今日は待ちに待った（？）誕生日会である。自分もとうとう18歳なのかと思うと時の流れの早さに驚くばかりだ。特にここ数ヶ月はいろいろなこともあり実に早く過ぎさった様な気がする。

「早いなあ・・・」

「どうしたのよ？」

1人呟くと、由美に話し掛けられた。

「いやさ・・・時間が過ぎるのは早いなあってね」

「そうねえ・・・特に楽しい時間なんてあつという間よね・・・」

何かを悟ったように由美がため息混じりに言う。そして机の上を指した。

「この課題も早く無くならないかしら・・・」

「頑張らなきゃ無くならないよ」

由美は一際大きなため息をついた。

そして放課後である。

教室は部活に出る生徒や自称帰宅部の生徒達で騒がしくなる。圭太と由美はとりあえず教室から出ると下駄箱に向かった。

「さあ今日は楽しむわよ！？なんて言っただって圭太の誕生日だしね！！！」

「あんまり暴れないでよ？」

「失礼ね、私は暴れないわよ」

誕生日会は圭太宅にて行われる予定なのだ。実は圭太の家は結構広いのだ。

「今日は親もいないから自由にやってもいいけど、ほどほどに・・・」

「え！？今日圭太のおばさんとかいないの!？」

まだ話している途中で由美が割って入る。

「うん。母さんと父さんは仕事みたいだよ」

ちなみに自分の息子の誕生日なのに仕事を優先しているわけではなく、どうしても抜けられなかつたらしい。昨日家族だけで誕生日を祝ったコトを伝えると、由美はふーんと言ってぶつぶつと呟き始めた。

「家族がいない・・・美春ちゃんめ・・・次はチヨークスリーパーで・・・」

よくわからないが圭太は聞かなかったことにした。

そのまま学校での生活や今日の誕生日会の話をしながら帰路についた。いつもと変わらぬ通い慣れた通学路。下り坂を歩く2人はまるで恋人のようだ。由美は内心満足顔で圭太との帰宅を楽しんでいた。この時までには・・・

ブアッパアアアアア!!!

クァンクァァン!!!バリバリバリバリ・・・

会って日もそんなに経っていないのに、すでに聞き慣れすぎたそのサウンドを発する派手なバイク2台が坂の下に停まりついていた。しかし下校する途中の生徒の視線を釘付けにしていたのはバイクでは無く、そのバイクに跨がるライダーである。

1人は美しい長髪をなびかせ、革ジャンが大人な雰囲気を持つ女性でもう1人はポニーテールで不敵な笑みを浮かべる、髪型の割にどこかボーイッシュな雰囲気纏う少女。

確かに女性が派手なバイクに乗っていれば目立つが、しかし下校

中の生徒（特に男子）の視線を掴んで放さないのはそれに加えてその2人が結構・・・いや、かなりの美人だからだ。思春期の男子のねっとりした視線を浴びるがそれすらも気にしない女性と、嫌そうにしている少女が坂を下ってきた圭太達を見て手を振った。

「やあ圭太君。迎えに来たわ」

「遅えぞ2人共!!」

赤城真子と赤城凜がそこにいた。

「あれ？2人共・・・なんでこんな所に・・・」

圭太が不思議そうにたずねると真子はさもアタリマエのように言っただ。

「今日は圭太君の誕生日・・・なら、こんな日くらい私が迎えに来てもいいでしょう？」

「え・・・どういう・・・」

「ちよつと真子さん・・・？」

意味のわからない返答に文字どおり意味のわからないと言った感じで返す圭太を遮り、由美が割って入る。

「なんでこんな場所に？集合は確か18時からだったと思うんだけど？」

「ええそうね・・・ただ歩いて帰るより、こんな日はバイクに乗ってひとつ走りした方がいいかと思っただのよ」

「あらそう・・・でもそれなら大丈夫よ？私達にもバイクがあるんだから、そんな気づかいはいらないわよ真子さん・・・？」

2人の距離は離れたままだが、睨み合っている。その視線の間だけ入っただけで別世界に飛ばされそうに空気がよどんでいる。

「ならこうしよう・・・私達が圭太君とあなたを家まで送ったら、時間に余裕があるまで走りに行きましよう？」

「ええ、それならいいわよ・・・？」

不敵に笑う2人を見て、圭太がおずおずと手を上げた。

「でもなにかと準備とか・・・まだ飲み物とかも買ってきて無いですよ？」

「言わなかったかしら？今日は各々がプレゼントを含め有志で食べ物や飲み物を持ってくるのよ？」

由美が言った。今日は楽しい誕生日会。しかただでさえ大人数が家上がるだけでも大変なのに食べ物や飲み物を用意させるのは悪いと先日決まっていたのだ。

「ならいいけど・・・」

「話はまとまったみたいね。なら早く行きましょう？圭太君は私の後ろで・・・」

「ちよつと待ちなさい・・・」

ずいつと真子の前が出る。

「なんで圭太が真子さんの後ろに？凜ちゃんの後ろでもいいじゃない？」

「凜の荒い運転の後ろに圭太君を乗せるなんて危険な真似、させられるワケ無いじゃない」

「それって私なら危険でも良いって言うことかしら？」

「・・・びゅい」

「無視するなあ！！」

完全無視を決め込み口笛を吹き出す真子に由美がツツコミを入れる。2人のやり取りを端から見ている凜はなんだかやるせなくなつた。

「あの、姉貴？オレの運転でそんなに・・・」

「危ないわよ」

「危ないわね」

真子と由美に間髪入れずに言われる。別に全然ヘタでも無いしむしろ運転歴では由美よりも長いし上手い。が、今ここで文句を言うほど凜はバカじゃ無い。もしここでそんなコトを口走れば、真子のどS魂に火を付け、由美の闘魂が唸るのは目に見えている。まあぶつちやけ由美のはたいしたこと無いのだが・・・

「じゃあ公平にじゃんけんにしない？僕はどつちでもいいんだけど由美が真子さんの後ろに乗りたいたなら・・・」

ここに来てやつと圭太が口を開いた。まあ2人が揉めている理由
はこれっぽっちも理解出来ていないので夕チが悪いが・・・

「そうね・・・じゃあじゃんけんで決めましょう？」

「じゃあ・・・最初は・・・」

「いや、圭太じゃ無くて私と真子さんで」

いきなりすんどめを食らった圭太。普通乗せてもらつ側がじゃん
けんするのに、乗せる側とのじゃんけんになるようだ。

「手加減しないわよ・・・？」

「望むところよ・・・！！最初はグーっ！！」

「じゃんけん・・・っ！！」

こうして、真子のリヤシートを賭けて由美と真子の勝負が始まっ
た。

「どう圭太君・・・？この前は少ししか乗せられなかったけど、私
のマツハは」

「やっぱり速いですね。発進から加速感がスゴいです。それにこの
暴れるマツハを丁寧に運転するのは本当にスゴいですよ」

「ふふふ・・・怖かったら腰に手を回してもいいわよ？むしろ・・・」

「

むしろ？」

「な、なんでもないわ・・・！」

前には車がない。マツハに乗る2人を邪魔するものは他にいな
い。後ろに流れる白煙は今の時代ではナンセンスだが、それは儂い

青春の残す足跡のようにいつまでも後ろに続く。

結局勝負は一度のあいこもなく勝負が決まった。真子は圭太を乗せて、それはもう幸せそうなにやけ顔でマツハを走らす。フルフェイスでなければ誰にも合わせられない普段のクールな真子からは想像出来ないニヤけ顔だ。

一方・・・

「凜ちゃん！！前にいるバカを追い抜きなさい！！」

「ちょ、由美・・・！立つなって！バランスが・・・！！」

「そんなの知らないわよ！！スピード出して並ぶなりぶち抜くなりしなさい！！」

「イヤだ！抜いたら殺されるし並んでも殺される！！」

「あーっ！！信号赤になっちゃっう！！離れちゃったじゃない・・・！！」

「由美っ・・・！く、首は絞めるな・・・！！ギブギブ・・・！！」

信号で停まるバイクの上で首を絞める由美と絞められる凜を、通行人の男性が見て見ぬフリをして去って行った。

こうして、真子に遅れること数分、凜のマツハは由美の家の前に着いた。真子はすでにエンジンを切ってシートに寄り掛かってぽうつとしてた。

「幸せだ・・・」

「真子さん！？圭太になんかして無いでしょうね！？」

由美が肩を掴んで揺さ振ると、真子はニヤニヤ笑いながらぼそつと言った。

「交差点で素敵ね・・・圭太君の腕が・・・」

「ごくつ・・・腕が・・・？」

思わず生唾を飲み込む由美。そして真子から出た言葉は・・・

「ぎゅって・・・前のめりになった時・・・腰に・・・」

「な、なんですってえ・・・！？」

ズギヤアアアン！！由美に雷が落ちた。その場でうなだれる由美とぼーっとしている姉を見て、凜はため息をついた。

それからすぐに部屋に戻ると、由美は着替えてバイクに乗る仕度をする。最後にグローブをはめてヘルメットを持って外に出ると、圭太のFXもすでに家の前にあった。由美はゼファーを道路に出しながら真子にたずねる。

「待ち合わせまであと2時間無いわよ？どこに行くの？」

「それだけ時間があるなら十分よ。街道を真っ直ぐ、高尾方面まで行きましょう？行って戻って、時間は余裕よね？」

「あ、それなら翔子ちゃんと合流も出来るわよね」

どうやら高尾に行くのが決定したらしい。時間から見ても、まだまだ余裕があるし1人遠くから来る翔子と合流出来る。由美は翔子の家に電話を掛けると、高尾寄りの街道沿いにある唯一のコンビニの広い駐車場で待ち合わせを告げて電話を切った。

「じゃあ行きましょう？のんびりして遅刻したら大変だから」

真子の合図に、4台のバイクが走り始めた。道が空いていたのですぐに街道に出れた。

信号が変わり、真子のマツハが爆音を上げながらスタートして行く。それを見て、由美はむっとなった。

「負けないわよ・・・！！」

ギヤを上げて、サード3500回転あたりから引っ張る。直管マフラーから雄叫びを上げながらゼファーがマツハに並ぶと、そのまま追い抜いた。

「どう!? 思い知ったかし・・・っ!?」

しかしすぐにマツハが前に出た。真子の涼しい顔がヘルメットのバイザー越しに見えた。カチン・・・

「絶対に負けないわよ・・・!! がんばれゼファーちゃん!!」

さらにアクセルを開ける。快音を響かせマツハに追い付こうとする。が、遠くに見える信号が赤に変わった。由美達は減速してきつちり止まった。

「由美ちゃん、ゼファーも速いわねえ。やっぱりこの中で1番新しいから乗りやすいわよね」

「そんな・・・真子さんのマツハも速いわよ、化石みたいに古いのに」

バチバチバチ・・・!!

比喻では無い。由美と真子の間で火花が散っている。後ろの2人が見ていると、信号が点滅を始めた。そして青になった瞬間・・・

コアアアアアアア!!

ギヤワアアアア!!

猛烈なスタートダッシュで加速していく2台を、啞然としながら見つめるしか圭太達には出来なかった。

時を同じくして、場所は街道沿いにあるラーメン屋、真田屋。真子と同一年なのにごか子供っぽい少女が店の前を箒で掃いていた。

「この後楽しみだなあ・・・今日は何を持っていこうかなあ」

真田屋の1人娘、真田美春が呟いた。ニコニコしながら箒で掃いていると、店の中からバンダナを巻いた少年が出てきた。

「おい、早く終わらせるよ？一回家に戻ってから行くんだからよお」

「任せてよおあつくん」

あつくんと言われた少年はため息をつくとバンダナを外した。すると現れたのはあだ名に反してイカツイパーマの掛かった見事なりーゼント。地元の不良で知らない者はいないと言われた霧島旭だ。

「オメエがサボりまくったから掃除してんだが。とつととやれ」

「むーっ！サボってないよお、月刊マ○ジンに夢中だったただけだよ！」

「それがサボりじゃなきゃなんなんだべ！？」

言って、美春の特徴的な揉み上げを両方掴んで引つ張る。

「だってえ、特攻○拓が新連載で天羽で不運と踊ハードラックダンスっちまうんだよお！？」

「意味わかんねえコト言ってるでやれっつーの！」

「じゃあ手伝ってよお！」

「何がじゃあなんだよ？1人でやれっつーの」

「あつくんのケチ・・・」

「なんか言ったかよ？」

ボキバキ 指を鳴らした。

「な、なんでも無いよお 1人だけだよお！頑張るからよお！！」

マニアックなネタをしていそいそと箒を振り回す美春をため息しながら見ていると、遠くから聞き覚えのあるサウンドが響いてきた。

「この音ってよお・・・」

「ゆーちゃんとマコリンかなあ・・・？」

美春が歩道に出て確認しようとして身を乗り出したその時、目の前の信号が黄色に灯っているのに突っ込んで来る2台のバイク。そして・

コアアアアアアアア！！！！

ギャワアアアアアア！！！！

「うわあ！！！」

驚いて尻餅を付く美春。目の前をかつ飛んで行ったのは間違いない。真子のマツハと、少し遅れて由美のゼファーだった。

「なにしてんだアイツら？」

「こつちが聞きてえよお・・・」

旭が呟くと、後ろから呆れた声が帰ってきた。後ろを見れば、赤信号に引っ掛かった凜と圭太が呆れ顔で停まっていた。

「あつくん・・・よくわかんないけどなんとなくわかったねえ」

「んだな・・・」

旭達がため息すると、凜達もため息した。

「由美・・・大丈夫かな」

圭太の心配そうな呟きだけがその場に残った。

「少し早く来すぎちゃいましたね・・・」

それからしばらく時間が経ち、場所は街道沿いにあるコンビニ。かなりど田舎なのでこの辺りでは唯一のコンビニで、駐車場も広い他に停まっているのはトラックとミニバンだけという空きっぷりが痛々しい。翔子はCB350Fourの前にあるクルマ用の輪止め腰掛け、今日圭太の為に用意した誕生日プレゼントをアーミーバッグから取出して手に取った。

「喜んでくれればいいんですが・・・」

そしてまたバッグに戻した。そしてバッグを確認する。今日持ち寄る食べ物や飲み物は予め買っておいたので問題無いが何か忘れていたら後で面倒なので一応確認したが、特に不備は無かった。

「少しコンビニで本でも読みますか・・・」

1人呟くとコンビニに向かって歩きだす。その時、やはり翔子の耳にも覚えのある音が近づいて来た。翔子は回れ右をして街道を見ると、ふと疑問になった。

「少し・・・速すぎませんか・・・？あれ・・・？」

そんな風に疑問を持った時だった。

ギャワアアアアア！！！！

コアアアアアアア！！！！

目の前をよく知る2台が駆け抜けていった。赤いバイクが若干離されていたがかなりのスピードだ。

「真子さん！？由美さん！？」

合流地点をブッチギリ、加速していった2台を見て思わず声を上

げてしまった。どうしたらいいのかしばらく呆然としていると、ようやく2台がゆっくり戻ってきた。

「あー楽しかったわー！真子さん、スゴい速いわねー！」

「由美ちゃんもなかなかやるわね。凜より速いんじゃないかしら？」

ヘルメットを脱いで話す2人の顔は嘘偽りの無い純粋な笑顔だった。思わず固まる翔子。

「どうしたの翔子ちゃん？お化けでも見てるみたいな顔して」

「い、いえ・・・！そんなことは・・・！！」

翔子は首を横に振るが、つい先日のコトを思い出す。あれだけ険悪ムードだった由美がこんなに爽やかな笑顔で真子と話している・

「じゃあ行くわよ翔子ちゃん！次は安全運転よー！！」

由美に言われて、我に返った翔子はなにがなんだかわからないままCB350Fourのエンジンを掛けた。普段のペースで走る由美と真子が並んで楽しそうに何か話しているのを見て、翔子は頭のメモ帳に書き込んだ。

「一緒に走れば仲直り・・・と」

しばらく走り、信号で引っ掛かった時に由美はそういえばとケータイを取り出した。そこには一件の電話とメールがあった。

『現地集合になったよ。あと、あんまりスピード出したらダメだよ？事故に繋がるから』

そのメールを見て少しか反省。しかしなんだか安心して返信しようとする信号が青に変わった。

「どうしたんですか？」

横にならんだ翔子がたずねると、由美は笑顔で言った。

「早く圭太の家に行きましょうー！」

一方、圭太と凜は旭達とは一旦別れて先に圭太の家に来ていた。

「メール返って来たか？」

一足先におじやましている凜が椅子に座ってたずねると、圭太は台所から麦茶を2つ持って出てきた。

「返って来ないね。事故してなければいいんだけど・・・」

「大丈夫だつて。あそこはずつとストレートだし、何より前が姉貴なら無理な運転しねーから由美もそれなりのペースで走ってんだろ」

あれを無理な運転と言わないのか・・・圭太は若干呆れながら凜に麦茶を出した。

「サンキュー・・・しかしさあ・・・」

お茶を一口飲んでから凜が続ける。

「お前、実際のところどうなんだよ？」

「ん、なにが？」

「いやだから・・・由美と姉貴のことだよ・・・」

いつも豪快な凜がボソツとたずねる。いつもと違う凜を見て、圭太はなんだろうと思いつながら首を傾げた。

「仲良いんじゃないかな？たまに由美が暴走するくらいでそんなに心配することは・・・」

「いやだからさあ・・・そうじゃなくて!!」

ブンブンと腕を振り凜が遮る。全くこの男は空気が読めないのだろうか。いや、読めないんだろうなあ・・・

「まあいいや・・・アホらしくなってきた」

「????」

呆れた顔で呟く凜を不思議そうな顔で見る圭太。一体自分は何かしてしまっただろうかと考えてみた。が、やはり特には思い当たらなかった。

「まあいいや・・・そのうちなんとかなるだろ」

凜が諦めた感じで言った。

そんな感じでなんとなく会話が終わった時、タイミング良く玄関のインターホンが鳴った。

「誰が来たのかな？」

圭太が玄関に向かって歩いていった。凜も居間から顔だけ覗かせて見ている。圭太がドアを開けると意外な組み合わせの2人だった。

「よお圭太！誕生日祝いに来たぜ！！」

「おめでとう！」

「ありがとうございます！洋介さんに千尋ちゃん」

すると洋介がはっはっはと笑いながら圭太の肩を叩いた。

「今日は良いモン持ってきたからな！まあモノがデカイから今は外に置いといたけどよ」

見てみれば圭太のFXを停めている車庫の中になんとか縦に長い段ボールが鎮座していた。

「まあ見てからのお楽しみっつーな」

「楽しみですけど、いいんですか？貰ってしまっつて」

「どうせオレには使えないし、手に入れた時もタダ同然だったしな」

なんだか気になるが、今はとりあえず2人を家に上げた。

「おじゃましまーす」

千尋が律儀に挨拶をしながら入った。

「2人の組み合わせって珍しいんじゃないの？」

先に居間にいた凜がたずねると、洋介が「そんなことねーって」

と言つて笑つた。

「千尋ちゃんは今からちよくちよく面倒見てたしな」

洋介の言葉に、圭太は少し前にあつた出来事を思い出した。旭が千尋を突き放していた時、美春と洋介が旭に隠れて相談に乗つたりしていたことがあると美春から聞いたことがあつた。

「でもバイクの音聞こえなかつたけど、歩きか？」

どーでも良さそうに凜がたずねる。確かに、洋介の愛車であるヨンフォアの音は聞こえなかつたし、前に見たときはリア周りが全バラされていて走れるような状態では無かつた。しかし洋介の工場からここまで徒歩で歩くとそれなりに掛かる。すると洋介は種明かしとばかりに2人を外に連れ出した。

「あれ・・・？このバイクって・・・」

そこにあつたのはどこかで見たことのあるバイクだつた。赤いフレームに7色ラメの入つた外装、当時モノ短風防にピヨピヨ、そして真白い墓石3段ロングの背もたれにある金剛力士像の刺繍・・・「確か長良君の・・・」

地元の族グループ、南部連合の頂点に君臨する男・・・長良賢のGS400Eだつた。

「あれ？圭太つて長良に会つた時あつたのか？」

「はい、俊一さんに会つた時に少し・・・」

伊勢俊一が帰つてきていたのは知っていたが、その時圭太が長良とわずかながらだが顔を合わせていたの知らなかつた洋介は驚いた。

「まあ長良にしても俊一にしても良い奴だからさ、また会つたら仲良くしてやってくれよ」

「こちらこそですよ」

1台のコテコテの族車を囲んで笑う2人。そんな2人を見ていた凜はワケがわからずたずねると、圭太はとりあえず説明してみた。

俊一と言う洋介達の親友（悪友？）がいること。このバイクがこの街を走る暴走族のリーダーである長良賢と言う男の物であること、

全てを説明すると凜は「ふーん」と言った。

「まあなんだかわかんねーけどさ。それよりなんで洋介がその長良
ってヤツのバイクに？」

すると洋介はふっふっふと笑いながらポケットからクリップで留
めてある紙束を出した。

「GSのパーツ代のツケが貯まってな・・・それをカタに借りてき
たワケだ。まあそれは建前でな、別に催促したりはしてねーしある
時にちよくちよく返すでかまわかなったんだけどさ、イジメたくな
ってさ」

ケラケラと笑う洋介。2人が額面を見るとそれはゼファークラス
の中古車なら余裕で買ってしまうほどの額だった。

「・・・圭太、さっきの段ボール返した方がいーいぜ・・・」

「あの、洋介さん・・・さっきの段ボール・・・」

「だーから！！あれは関係ねーっての！！」

ビビリながら段ボールを指さす2人を、洋介は笑った。

「まあとりあえずこういうワケだ。吸い込み爆音だから近所迷惑だ
し途中でキーを切って押してきたんだ」

「で、私が段ボール持って後ろに乗ってきたんだよ」

ここに来るまでの経緯を説明し終えた洋介と千尋。とりあえず圭
太の父親が仕事で使っていないなくなっているクルマの空きスペースに
GSを置いてから部屋に戻ろうとした時、外からまた新たな音が響
いてきた。

カーーン！！バリバリバリ・・・！！

「よお！待たせたな！！」

「けーちゃんやっほー」

キャンディレッドのB4ラインの外装にコロナのタンクバックが

シブイGT380に乗った旭と美春がやってきた。近所迷惑を考えエンジンを切って押してきた洋介のような気遣いなど無く、シヨットガンチャンバーからチーム内で1、2を争う爆音と白煙を撒き散らしてやってきた。

「ちゃんとプレゼント持ってきたからよお、あと飯な」

サンパチを止めると、旭がタンクバックからビニールに入った何かを取り出して笑う。その後ろにはなぜか鍋を持ちリュックを背負う美春が笑顔で立っていた。

「ありがとうございます旭さん、美春さん！」

「ところでそのでっかい鍋は？」

凜が不思議そうにたずねる。が、鍋から匂う香りは間違いなく香辛料。

「何って・・・カレーだお？」

「だおって・・・それ持って後乗ったのか？」

呆れながらたずねると、美春は「もちろん！」と胸を張って言った。白煙と爆音を撒き散らすGT380にカフェヘルを被る2人は絵になるが、後ろに乗る美春はカレーの鍋を持っている・・・その姿を想像して一同は笑った。

「そっぴやあ由美ちゃんと赤城長女はまだ帰ってこねーんかよ？」

旭が圭太にたずねると、圭太は首を横に振る。

「まだ帰って来ないんですよ。それに連絡も無くて・・・」

「アイツらもしかしてあのまんま山梨まで行ってんじゃねーか？」

「なんの話してるの？」

「どうしたんだ？」

由美と真子が街道でバトル(?)になったのを知らない千尋と洋介がたずねる。またまた圭太が事情を説明すると、とりあえずみんな圭太を見てため息をついた。

「え・・・?なんですかそのため息・・・」

「ゆーちゃん・・・ファイトだよ」

「姉貴もだ・・・」

美春と凜が顔を合わせて呆れた。

「姉妹と言えばリンリン、サヤリンは？」

「そのあだ名止めるっての・・・紗耶香はさつき連絡来て、もうすぐ着くってさ」

本来ならば由美達と翔子と合流した後で紗耶香も合流する予定だったが、予定が狂ってしまい紗耶香は直接こちらに向かうことになったのだ。

「まあさ、こんなところで立ち話もなんだしよ。先に入って準備なりなんなりすんべ？」

旭の提案によって一同は圭太の家に入っていった。

「まずいわね、少しペース上げないと間に合わないわ」

もう圭太の家まであと一步の所で信号に引っ掛かった。真子が腕時計を確認するとあと10分。

「まだ大丈夫じゃないかしら？ここまで来ればあとはもう少しよ？」

由美が進言する。ここから圭太の家まで、バイクなら5分掛からない場所である。信号が変わり走り出すと真子が先頭に躍り出た。

「あれ・・・？前にいるのって・・・」

翔子が前を見ると、真子の先を同じように白煙を吐きながら走るバイクを見つけた。向こうも気付いたようで減速。こちらに並んできた。

「真子姉さん！由美さんに翔子さんも！」

「紗耶香ちゃん！」

肩掛けのカバンを付けた紗耶香と偶然合流した。

「凜お姉ちゃんから聞いたよ？真子姉さん、由美さんと競争したんでしょ？」

真子の隣にならんでしらーとした目で見つめる紗耶香。

「いや、別に競争と言うほどでは・・・」

「ダメだよ？もう・・・真子姉さんや旭さん達は少しズレてるんだから、危ないことしたら」

「い、いや・・・でもだな・・・」

「言い訳しないの！！」

しどろもどろな返事をする真子に紗耶香が喝を入れる。

「真子姉さんのペースに付き合っただけで事故なんか起こしたら大変なんだよ！？もう！！」

「す、すまない・・・」

「な、なんか紗耶香ちゃんが怒ってるわね・・・」

「珍しいですねえ・・・」

紗耶香の貴重な怒りシーンを見て、ひそひそと話す。まあ途中合流のはずが急に無くなり時間もタイミングも狂わされたあげくに姉が危険行為をしたとあつては怒るのも無理は無い。人見知りな妹が姉の中では一番常識人の紗耶香は走りながら姉に説教を続けた・・・

「ふう・・・やっと着いたわね」

圭太の家の前に着き、やっと一息つく一同。が・・・

「・・・・・・・・」

「はあ、真子姉さんももう少し周りを見れたらいいのに・・・」

妹による説教が堪えたのか、だんだん元気を無くす真子がいた。

「紗耶香さんつてもしかしたら一番怖いのかもしれませんね・・・」

「そうね・・・まあたまには良い薬よ」

そう言うつと、由美と翔子は由美の家の前に愛車を置き、バンドルロックとワイヤーでバイクを繋いだ。真子達も説教をほどほどに圭太の家のガレージにバイクを入れた。

「じゃあ今日は楽しみましょう!？」

「圭太君の誕生日・・・こつちがドキドキしてきた・・・」

「プレゼント・・・喜んでくれますかねえ・・・?」

「心配しなくても大丈夫ですよ翔子さん!」

期待に胸を膨らませる。そして4人を代表して、由美が玄関を開けると、そこには仲間達が温かく迎えてくれた。

「遅かったじゃねーか姉貴!」

「事故んなかったかよ?かなりスピード出たべ?」

凜と旭が言うつと、由美と真子は苦笑いしながら頭を下げた。

「うわあ・・・もうこんなに準備出来てるんですか?」

翔子がテーブルに並ぶ各自持ち寄った食べ物や飲み物を見て感心した。誰が持つてきたのかピザやらチキンから、誰が持つてきたか一目瞭然なカレー鍋まで、多種多様な物が並ぶテーブルにみんなテンションが上がる。あちこちでワイワイ騒ぐ中、由美に圭太が近づいてきた。

「よかったよ、由美。事故したんじゃないかって心配してたんだよ?」

本当に心配そうに由美に言うつと、由美は少しバツが悪そうに頭を下げた。

「ごめんなさい・・・次からは気を付けるわ」

「でもなんにも無くてよかったよ。また転んでたら僕も辛いしさ」
その言葉に、由美ははつとなった。ちゃんと心配してもらえてい

たのもそうだが、自分も辛いとまで言ってくれた圭太に由美は少しうれしくなった。最近、いろいろなことがあり圭太を以前より遠いように感じていたが今確信した。

ちゃんと圭太の中にも私がいる・・・!!

「圭太・・・！誕生日、おめでとう!!」

第39章 誕生日会！！前半（後書き）

どうも！ファンじゃないですが懐かしくて久しぶりに『ファイターズ賛歌』を聞きながらの更新です！（わかる人いるかな汗）

今回は前後半で分けます。書いていたら楽しくなってきたて長くなってしまうので汗

これからも宜しくお願いします！！ご指摘感想お叱り待っています！！

3 気筒

第40章 誕生日会！！ 後半

みんなが持ち寄った食べ物や飲み物がテーブルに並ぶ。が、圭太の家は広いと言えど家族4人暮らし。足りない分をなんとか掻き集めても椅子は足りないため、みんな椅子に座ったりソファに座ったり床に胡坐を掻いたりした。

「それじゃあ！圭太の誕生日パーティを始めるわよ！！」

由美がグラス片手に立ち上がると宣言した。ちなみに中身はコーラ。

「18歳！おめでとー！！」

声高らかに言うのと、みんなが一斉にクラッカーを鳴らした。辺りに飛び交うビニールテープやみんなからの祝言に、由美達に問答無用にテーブルの上座に座らされた圭太が照れながら恥ずかしそうに頭を下げた。

「みんな・・・その、ありがとう・・・！」

「畏まるなって！今日はお前が主役だぜおい！」

洋介が圭太の肩に腕を回して言うのと、コップの中のジュースを飲み干した。

「そうそう、今日は思い切り騒ごうね 今日のために作ったカレーをお食べ〜」

ニコニコしながらさっそく持参のカレー鍋を開け、お皿を持ってお玉でカレーを掬う美春。しかし・・・

「あ・・・？れ・・・？」

「どうしたんですか美春さん？」

鍋と皿とを順番に見ながら何かを探す美春。そして

「ごはん・・・」

「え・・・？」

「ごはん忘れたあ・・・！」

どうやら米を忘れてきたらしい。ガックリとうなだれる美春に、

なんて答えればいいのかわからなかったがとりあえず圭太は美春の肩を叩いて

「あの・・・食パンならありますけど、使います・・・?」

と、米では無くパンを勧めると涙目で「うん・・・」とうなずいた。そんなやり取りを見ていた凜が

「全く、お前はやっぱりどこか抜けてるよなあ」

「むう・・・リンリンだって抜けてるじゃん・・・!」

「オレはお前ほど抜けてねーよ!!」

騒がしくなる2人。どっちもどっち・・・と圭太は思ったがそんなことを言えばどうなるか火を見るより明らかだ。そんな2人を見兼ねた由美が仲裁に入った。

「まあまあ美春ちゃんも凜ちゃんも!少し落ち着きなさいって」

「うるさいバカ」

「うん、ゆーちゃんはおバカ」

「な・・・!?!」

何故か息もぴったりになり2人にバカと言われて、由美は口調を強めて反論した。

「なによ!美春ちゃんや凜ちゃんほどバカじゃないわよ!?テストだって100点取ったじゃない!!」

前の勉強会の話を引き合いに出してきた。が、相手2人はその時に一緒に勉強した仲である。まるでカウンターを狙っていたボクサーのように由美の言葉にフックを入れた。

「あの時だってオレ達が協力したから100点取れたんだろ?」

「そだよーそだよー。私達のおかげさまなんだよお」

「くっ・・・!!」

確かに、あの時由美が1人で勉強していたとしたら間違いなくいい点とは程遠い成績であっただろう。否定仕切れずに「ぐぬぬ・・・」と顔を歪ませる由美。

「まあ要するにだ・・・由美はバカって事だ、うん」

無理矢理まともに入る凜のその言葉に、由美はカチーンと来た。

「うるさいわね！だいたい、バカって言う方がバカなのよ！？このバカ！！」

シーン……

「え……？なに……？」

先ほどまで言い合っていた凜達や圭太、他のメンバーが由美を見つめる。ぽかーんとしている者や呆れている者。笑いを堪える者までその反応は様々だった。

「由美……お前やつぱり」

「おバカさんなんだねえ……」

凜と美春が言つと、一同はウンウンと頷いた。

「まあ、とりあえずこの3バカ共は置いてだ……」

さりげなく凜達も一括りにして、旭が呟く。

「各自持ち寄った誕生日祝いをそろそろ出すべや。このままだと忘れそうだしな」

「それには大賛成ね」

真子がウンウンとうなずく。

「私のプレゼントは凄すぎて今出すのはもったいないわ！！私は最後よ！！」

1人張り切る由美。一体何を持ってきたのかなあと圭太が考えていると

「じゃあ最初は私からです！お誕生日おめでとunggございます！」

最初にプレゼントを渡したのは翔子だった。綺麗な包装紙でラッピングされた厚さはさほど無い四角い箱を受け取った。

「ありがとう……！見てもいいかな？」

「もちろんですよ、見てください！」

みんなが見守る中、圭太は包装紙を破かぬように綺麗に開けた。

長方形の箱を開けると、中には写真立てと、その中に1枚の写真が入っていた。

「うわぁ・・・！」

圭太は思わず声を上げた。その写真に収められていたのはいつどこで撮ったのか、駐車場でFXに跨がる圭太を1人で写した物だった。夕方なのか良い感じで夕日が照らすマシンと良い感じで目線を外す圭太。写真だけ見ればまるでカタログの表紙に使いそうな写真であった。FXの特徴的な角張った大柄なスタイルを見事に捉えている。さらにその頭上には『HAPPY BIRTHDAY!』と雲のように白い文字で描かれていた。

「すごい・・・嬉しいよ！ありがとう！！」

「喜んでもらえましたかぁ・・・よかった！1番カッコよく撮れた写真なんですよそれ！」

「ありがとう、机に飾っておくよ！」

うれしそうに笑う2人。特に翔子は自分の撮った写真で喜んでもらったことが嬉しかったようで、「この調子で頑張ります！」と将来の夢に向かってまた一歩進んだようだ。

それに続き、次は旭と美春がそれぞれのプレゼントを持って前に出た。

「じゃあ次はオレらからだ」

「けーちゃん！はいこれ！！」

旭からはどこかの服屋か何かの袋。美春は何か大きな箱を受け取った。

圭太はお礼を言ってから旭にもらった袋を開けて中身を取り出す。

「これは・・・？」

「旧単車乗りの必須アイテム、スイングトップだ。着てみるよ」

出てきたのは、無地の黒い服だった。着てみるとサイズは合っている。圭太がチャックを締めようと上に引っ張ると、旭が

「チャックの位置はヘソ辺りでストップな。上げすぎるとだせーかな」

そして着てみると、普段の圭太よりワイルド感が当社比二割増し

した。

「いいじゃんかよ、カッケエぞ圭太！」

「なんか引き締まって見えるわね」

凜と由美が素直に感想を述べる。圭太は改めて旭にお礼を言うと、次は美春から貰った大きい箱を開けてみた。

「……あの、なんですかこれ」

現れたのは、黒くて大きい建物みたいな物体と、黄色い玉が大量に入った箱。

「バト○ドームだよ 探すの大変だったんだからあ」

「見ればわかります！というかなんでバトルド○ム！？その前にバイクの後ろに乗った状態でカレー鍋まで持つてるのにどうやって……！？」

「それはほら……女の子には秘密がたくさんあるんだよあ これを貰って狂喜乱舞しない人はいないよねえ」

「あの、この時代にバトル○ーム貰って喜ぶ18歳はないと思うんですけど……」

圭太がアタリマエのようにツツコミを入れた。その時……

「うう……けーちゃんのために……頑張って探してきたのに……よ、喜んでくれないんだ……うう……」

いきなりその場でしゃがみ込んで泣き出す美春。そんな美春を見て困惑する圭太に旭が耳打ちした。

「大丈夫だって……どうせウソ泣きだべ」

「そ、そうですねか……？なんか嗚咽がリアルな気が……」

そんな事を話していると旭が美春に声を掛けた。

「おう美春よあ、泣くなつて。カレーでも食えつて」

「ううつ……！ひつぐ……！ひいいん……！！」

しかし顔を上げた美春を見てみんな驚いた。

「ま、マジ泣きかよ！？」

美春は本気で涙を流しながら、ついでに鼻水まで垂らしながら泣いていた。

プレゼント自体、ウケ狙いだと思っていた圭太達は多いに焦った。

「あ、あの・・・！あ、ありがとうございます！！実は昔から欲しかったんですよこれ！！」

慌ててフォローを入れると、由美達も続いて援護する。

「そ、そうよ美春ちゃん！一時期圭太はバールドームのCMを見ては欲しい欲しいって言ったのよ！？」

「ああ懐かしいなあ、あのCM」

由美の言葉に洋介が反応する。そんな周りからの援護の甲斐もあり、美春は涙を拭きながら圭太を見つめる。

「ほ・・・ホント？」

「ええ、ありがとうございます！」

圭太が頭を下げてお礼を言うと美春は千尋から差し出されたちり紙で鼻水を拭いて笑顔で笑った。

「よかったあ・・・ やっぱり私は間違っただけだったよお」

間違いだらけだが、これ以上ツツコミを入れるとまた泣き出すので、とりあえずウンウンと頷いておくことにした。が、1人空気を読まずにボソッと呟いた。

「ゴミが増えただけね・・・」

「じ・・・ゴミー!？」

美春が振り向くと、後ろで腕を組んでつまらなそうな目で見つめていたのは真子だった。

「自己満足で自分だけじゃない、嬉しいのは」

「な、なによう！そんなこと無いよお！」

「いや、赤城長女の言うとおりだべな」

しかし、そんな美春に旭が便乗してツツコミを入れると、美春はその場でパタリと倒れてまた泣き出した。

「おにーちゃん・・・！！ほら、おねーちゃん、あっちに行こ？ね？」

何故か便乗した兄と、泣き崩れる姉代わりを交互に見た後、美春

を背負って部屋の隅に移動させる千尋。ちなみに美春はまた涙と鼻水で顔を汚していた。あ、千尋の背中に鼻水が・・・

「まあ、なんかわからんトラブルがあつたが・・・仕切り直すべ」
旭がさらつとまとめた。

「いよいよ、次は私達ね」

「ほら、これ」

「圭太さん！お誕生日おめでとーございます！！」

三者三様の態度で圭太にプレゼントを渡すのは赤城姉妹だ。まず凜から受け取った箱から開けてみると、中から出てきたのは饅頭だった。

「旨そうだろ？贈り物と言えば饅頭！」

何かが違う気がしたが、先ほどのバトルドローよりは全然マシなので圭太はありがたく受け取るとお礼を言った。

「ありがとー、美味しそうだよ」

「ま、まあ・・・世話になつてるからな・・・」

少し照れながら言う凜は、どこか不自然だった。

「次は私ですよ！どうぞ！」

続いて紗耶香から渡された袋を開けてみた。中にはノートのような物が。

「これは・・・？」

「Z400FXのパーツマニュアルですよ！それがあれば修理の時に結構役に立ちますよ！」

探すの大変でしたよーと笑いながら微笑む紗耶香。カワサキ狂いの彼女らしいプレゼントに苦笑しながら圭太はお礼を言ってパーツマニュアルに目を通してしていると、横から視線を感じた。

「圭太君・・・私のも早く見て欲しいな」

「あ、すみません。今から見させてもらいます」

真子から貰った箱は、正方形に近い形をしたもので少し大きい。

まず箱を開けると、甘い香りが箱から漏れる。そのまま中身を引っ張りだすと、中から出てきたのはなんとイチゴのショートケーキ

だった。板チョコには綺麗に『Happy Birthday けいたくん』と可愛らしく書いてある。

「うわぁ・・・!」

「ど、どうかな・・・? 頑張って作ってみたんだけど、何しろ初めてだったから・・・」

「え・・・これで初めてなんですか・・・?」

圭太は驚いた。本当にお店に出ているもおかしくないくらい綺麗なこのショートケーキが初めて作ったものとは思えなかった。

「圭太君の喜ぶ顔を見たくって・・・どうかな・・・?」

珍しく緊張気味な真子。しかし自信はある。圭太の誕生日が近いと聞いたあの日から真子は毎日毎日夜遅くまで、それこそマツハにも乗らずにケーキ作りを練習してきたのだ。最初はケーキのスポンジが焦げたりクリームがうまく塗れなかったり食べたら吐き出ししてしまうほどアレな出来な物を経て、今朝方になってようやく出来上がった渾身の力作だった。

「早速食べて貰えないかしら・・・? 味の感想も直接聞きたいわ」

「ありがとうございます! 絶対に美味しいですよ!」

食べる前に断言しながら、圭太は台所から取ってきた包丁でケーキを切り分けると、その1つを自分のお皿に移してからフォークで口元に運んだ。

「ど・・・どうかしら・・・?」

緊張の面持ちで感想を待ち望む真子に、羨ましそうに見つめる一同の前で圭太は一口目のケーキを食べ終えた。

「・・・凄く美味しいです・・・! スポンジも柔らかくて、周りの生クリームも甘くてフワフワしてますし!」

「よかった・・・! 頑張って作った甲斐があったわ!」

圭太の喜びに溢れる笑顔を見て、ホッと胸を撫で下ろす。一方・

「どうしよう・・・」

「どうしたんですか由美さん?」

1人顔面蒼白で立ち尽くす由美。その表情はパーティー会場で見せていい表情では無い。心配そうに見ていた翔子がたずねるとが由美は口を開かない。

プレゼントが・・・丸被り・・・！！？

そう、由美が用意していたのもケーキだったのだ。しかも同じシヨートケーキ・・・

由美は再度真子の作ったそのケーキを見る。そして思った。

勝てるわけないじゃない・・・！

自分の作ったケーキを思い浮かべる。由美も真子同様、あの日から毎日こっそりケーキ作りを練習していた。スポンジこそ上手く出来るようになったが、クリームは上手くな濡れず、所々固まっているし何よりあんなケーキ屋顔負けのネーム入り板チョコなど用意出来なかった。

「これより後のプレゼントは少し渡すのに勇気がいらしますねえ」

しかしそんな由美の内心など知らない翔子は呑気にそんなことを口走った。

続いて洋介が近づいてきて圭太に言った。

「じゃあ次はオレからなんだが・・・まあさつき見ただろ？」

「ありがとうございます！あの中身って一体・・・？」
すると洋介はふっふっふと笑いながら

「ここでは開けらんないしな。明日こっそり見てみな？圭太には嬉しい物のハズだよ」

そう言っただけらしく笑う洋介。どうやら相当な自信があるよう

だ。

「変なモンだったら叩つ返してやれ」

旭が小声で忠告した。

「じゃあ次にバトンを渡すかな・・・千尋ちゃん？」

洋介が千尋を呼んだ。が、しかし・・・

「な・・・に・・・?」

後ろを振り返ったみんなが絶句した。そこには顔を真っ赤にしてぶっ倒れる千尋。そして・・・

「ぐびっ・・・ぐびっ・・・ぐびっ・・・!!ぷあああ!!」

一升瓶を抱えて、さらにもう一本の一升瓶をらっぱ飲みしているバカが一人・・・

「くっそー!どいつもこいつもばかにしゃがってえ・・・!ひっく・・・!おねーさん我慢の限界だぞお!!」

言つて、また酒を煽る。ロツクにせずそのまま飲むので酔いがいつも以上に早いようだ。唾然としながら美春を見つめる一同。しかし本人は気付かずに生ける屍状態の千尋の肩を叩いた。

「ほらあちーちゃん!まだまだ飲めるれしょ!!起きてよう!!」

しかしいくら叩いた所で屍は屍。時折辛そうに呻くだけで美春の言葉には反応出来ない。そんな千尋に飽きたのか、美春はまた膨れっ面になると一升瓶を飲み始めた。

「ねえ・・・なにあれ?」

「あのバカ・・・」

真子の質問に、呆れ顔で呟く旭。そのやり取りを見ていたのか、美春がずびしつ!!と真子を指さした。

「出たなあ!この現世の醜い浮き世の鬼めえ!!」

「何が鬼よ・・・」

呆れながらも一応返事を返す真子。そんな真子の態度が気に入らないようで美春はマシンガンのように語り始めた。

「ふんだ!!私のふれじえんとにけちつけて、ぱーてーの空気ぶち壊しのくせに!本当は〇とるどーむがうらやましいんでしょお!?

まっはなんかあ乗ってえ・・・くーるぶってえ！こんなことならそふとのないわんだーしゅわんにしておけばよかったおお・・・！！」

「いや、空気壊したのはあなただし、マツハは関係無いし、ついでに言えばワン〇ースワンもいらぬし」

冷静に美春の鬱憤にツツコミを入れる真子。そのどれもが的確なツツコミであるため、美春と千尋を除く全員が心の中で頷いた。

「なあなあ圭太・・・美春って酒飲むといつもあんな感じなのか・・・？」

始めて美春の醜態を見た凜がたずねると、圭太は頷いた。

「でも・・・普段はあそこまで酷く無いんだけど・・・」

「あれが本当の逆ギレね・・・しかも千尋ちゃんを巻き込むっていうあるタチの悪い」

由美もウンウンと頷く。

一方、酔いが回りすぎて周りが見えていない美春は真子の前までフラフラと歩くと、真子に新しい一升瓶を突き付けた。

「いまからしよーぶ！まこりん、どっちがはくまで飲むかしよーぶ！！」

「イヤよ面倒くさい・・・なんで圭太君の誕生日パーティーであなたとお酒で勝負しなきゃならないのよ？」

心底面倒臭そうに吐き捨てる真子。その主張は的確すぎて旭や洋介達から拍手が起きた程だ。が、しかしそれで引き下がるほど美春は賢くない。普段より3割り増しでうざくなっている美春はニタニタ笑いながら、そして酒臭い息を真子に吹き掛けながらこう言った。

「あれれれえー？まこりん、にげるのお？」

カチン・・・

「まっはにのってふだんはしよーぶばかりやりたがるまこりんが！にげるのおお??？」

もっ皆さんにお見せできないような、女の子にあるまじき酔っ払

い顔で挑発する美春の言葉とウザイ表情に、真子はついにキレた。

「いいわよ・・・？そんなに言うなら、死ぬくらい覚悟なさい？」

「え！？真子姉さん！？」

紗耶香が驚いて声を掛けると、真子は余裕そうな表情で言った。

「大丈夫よ、あのアル中に勝つ」美春は退場・・・この場の空気が浄化されるならお安い御用よ。それに・・・」

次の瞬間。真子の表情が一変した。

「現役大学生を・・・ナメてもらっては困るわよ？」

そこには、一匹のトラがいた。

「なあなあ、その戦いには一般参加枠もあるのか？」

一方、空気を読まずに洋介が参加表明をしてきた。美春はフラフラと自分の持ってきたバッグの中からさらに一升瓶1本とビニール袋から缶ビールを数本取り出してニヤリと笑った。それを見た圭太達は美春のバカさ加減と、どこにそれだけの酒が入るスペースがあるのだろうかと疑問を持った。

「よし、じゃあオレもやるかな」

決まり！とばかりに洋介が笑う。実は洋介もかなりの酒好きである。

「洋酒が無いのが盛り上がり欠けるが・・・まあ相手にとって不足はない」

「オメエはただ単に飲みてえただけだべ」

ヤル気満々の洋介に、酒が大の苦手である旭がツツコミを入れた。

「なんか楽しそうだな！オレも混ぜてくれよ！！」

「え！？り、凜も！？」

この空気の中でどこをどう見れば楽しそうに見えるのか、凜がウキウキしながら参戦表明した。圭太が驚きながらたずねると、普段妹に敵しい真子が「うむ」と頷いた。

「美春はマツ八に乗る私達姉妹にも挑戦を挑んできた・・・ならば全員で返り討ちにしてやるわ」

「ちょ、真子姉さん・・・!?」

普段は冷静な真子のムキになった感じの発言に紗耶香がツッコミを入れるが、凜の参加は決定した。

「わ、私は出ないからね!？」

「任せとけて!美春なんてオレと姉貴で潰してやるさ!!」

「頼む、そうしてやってくれ」

ヤル気満々な凜に、一応美春の彼氏であるはずの旭がエールを送った。

「ねえ圭太・・・どうするのこれ？」

由美がたずねると、圭太はため息をしながら

「まあ・・・近所迷惑にならなければ・・・あと周りに吐き散らしたりしなければ・・・」

「難儀ねえ・・・」

斯くして、この戦いに参戦する4人の戦士が集まった。

「それじゃああつくんたちい、みんながどれだけのんだかかじよえてへへへ」

すでにイカれてる美春が言うと、酒が並々注がれたコップを全員が高く持ち上げた。そして・・・

「かんぱあい!!」

美春の合図と共に、ついに禁断のバトルが始まった。

「ぐびぐびっ・・・!ぷひい!!」

奇声を上げて、最初に飲み干したのは美春だった。周りの3人はまだ半分も行っていない。

「このままのペーしゅでいくおお」

また並々と酒を注ぐと、すぐに飲み干した。それを見て参加している3人以外のメンバーもため息をついた。

「何杯飲めるかを競ってるのに・・・なんであんなペースで飲むかなあ・・・」

「まあアイツバカだし・・・ゲロ袋、用意しとくべや」

呆れ顔というか・・・うんざりしながら旭はビニール袋を持って

美春の近くに座った。

それから10分後。皆の予想通り、案の定美春はペースが止まった。始まって5分辺りで酒を口元に運ぶ回数が減り、今ではガツクリとうなだれながらしゃっくりをするだけになってしまっていた。

「なあ美春よお、そろそろキツイべ？」

「だ、だいじょうぶ・・・ひつく・・・まらまら・・・いけりゆう・・・うええ・・・」

真つ赤だった顔も今では顔面蒼白。冷や汗ダラダラ。そんな美春を尻目に、真子は自分のペースで酒を飲んでいった。

「ふん・・・これならすぐに勝負がつきそうね」

最初の美春程のペースでは無いが、真子のペースもかなり早い。しかも顔はまだ赤くすらなっていない。どうやらかなり上戸らしい。

一方、洋介と凜は早くも酔いが回ってきているらしい。

「だつからさあ！！ヨンフォアのエンジンが1番カッコいいんだつてのー！！」

「カッコじゃねーの！？オレのマツハのエンジンの方がカッコいいつてー！！あのフィンが最高なんじゃん！！それよりさあ、ヨンフォアにマツハのエンジンがこーなつてさあ・・・」

どうやらどちらの愛車のエンジンがカッコいいのかを話しているらしい。しかし酔っ払っているので声も大きくなり会話の内容もおかしくなっていた。

もはや勝負では無く、楽しい飲み会に変わっているのに気付いた圭太達は数を数えるのも放棄。予定通り誕生日会を再開した。

「なんか予定が狂っちゃったわね・・・」

由美がため息をしながら呟いた。が、圭太は笑いながら

「でも楽しんでくれてるみたいだし、僕も楽しいからいいんだけどね」

圭太がそんなことを言った直後、旭が圭太にトイレの場所をたずねると、美春の背中を擦りながら居間を出ていった。そして・・・

「？」 // ¥\$£?・・・!?!?」

びちゃびちゃびちゃ・・・!!!!!!」

「・・・とりあえず、そのドアを閉めよう」

平静を装いながらドアを閉める圭太を見て、由美と翔子、紗耶香はため息をついた。

「なあなあそのお！みんなこつち来いよお！」

凧が缶ビールを持ってニコニコしながら手招きする。とりあえず近くにいた翔子の袖を掴んで自分の横に座らせる。

「凧さんも結構飲みますねえ」

「あつははは！酒なんて今日初めて飲んだようなもんだ！！」

豪快に笑いながらビールを啜る。

「だからさあ、オレもう限界!!!!・・・翔子、バトンタッチな」

「へ・・・?」

何も知らない凧からの、地獄の宣言を聞いて圭太と由美が凍り付いた。急いで振り返ってみるとそこには・・・

「ごく・・・ごく・・・ごく・・・ごく・・・」

「おお、良い飲みっぷり!!」

凧に無理やり首を傾けさせられ、酒を流し込まれている翔子の姿が・・・

「ああダメだ凧っ!!」

「翔子ちゃんにお酒は・・・!!」

しかし時すでに遅く、凧は缶の中に残っていたビールを全て飲み干したのを確認してビールを翔子の口から離して笑った。

「翔子すげーな!!全部飲みやがったぜコイツ!!」

がははははと笑う凧。その横には糸を断ち切られたマリオネットのようにぐったりしている翔子がいた。

「ち、ちよつと凧ちゃん!!なんて恐ろしいことを・・・!!」

「何言ってるんだよ?翔子は自分の根性を見せるために全ての酒を・・・」

「違う・・・他の誰かに飲ませるのは別に構わないんだけど・・・」

翔子ちゃんだけは別なんだ・・・」

圭太がさも恐ろしい物でも見るかのように後退りする。

その時、凧の後ろでゆらりと静かに立ち上がる影が・・・

「ひいつ・・・!!」

「あ?なんだよ?なにかあるのか?」

2人の態度に、さすがに何があるのか怖くなってきた凧が不安そうにたずねる。

その時、凧の後ろを見ていた紗耶香がガクガク震えながら呟いた。

「り・・・凧お姉ちゃん・・・に、逃げ・・・」

3人は、凧の後ろに怪物を見ていた。比喻では無い。まるで満月の夜に1日だけ現れる某吸血鬼(死徒)のような残忍な笑顔の怪物は、ぽんつと優しく凧の肩を叩いた。

「・・・」

振り向けばそこには恐ろしい笑顔を張りつけた翔子が立っていた。

「あ・・・も、もう起きて大丈夫なの・・・か?」

いつもと明らかに違う翔子の雰囲気、凧がおずおずとたずねる。

次の瞬間・・・

ぐいつ!!

「ぶつ・・・!?!?ちよ、ぶはっ・・・!!」

先程とは逆に、翔子が凧の頭を掴み、無理矢理酒を口に押し込めるように流し込む。

「ぐくぐくぐく・・・ぶはあ・・・」

全てを飲まされた凧。翔子が頭を放すとその場にパタンと倒れた。まるで浜に打ち上げられた魚みたいにピクピクしている凧を静かに見下ろす翔子。そして

「ふふ・・・」

由美達を見下ろしながら・・・

「あはははははははは!!」

翔子は狂った。

「凜しゃーん？まだまだ飲みが足りましえんよお！？あははははははははは！！！！！」

言いながら、新しく開けた缶ビールをまた凜の口に突っ込む。しかし半ば意識を失っている凜が飲み下せるハズもなく、口内に入りきらない酒がびちゃびちゃとあふれ出る。

「あーだめでしょお？じえんぶ飲みなしゃい！！！」

べちべちと凜の頭を叩きながら無理難題を言う。しかし無反応な凜に飽きたのか、次の標的を探し始める。すると、後ろにいた真子に視線を定めた。どうやら洋介は沈んだらしい。

「あら・・・凜したらもう潰れてしまったの？全く、洋介君といい、まだまだねえ」

飛んで火に入るなんとやら。真子が倒れる凜に近づいた時だった。

「真子しゃん！！もつと飲んでくらしゃい！！！」

「え・・・？な、なに！！？」

突如襲い掛かる翔子に抵抗出来ずに、押し倒される真子。そのままマウントポジションを取った翔子は、凜に行ったようにビールを無理矢理口に突っ込んだ。

「んー！んー！ごく、ごく、ごく・・・な、なにするの！？」

辛くも全て飲み切った真子は翔子をにらみつける。しかし・・・
「ぶふつ・・・！？」

次に突っ込まれたのはなんと日本酒だった。これには真子もたまらず、途中でむせると気を失ったようだ。

「うふふへへへえ・・・」

不気味な笑みを浮かべながら、見定めた次の標的に襲い掛かる。

「さーやーかーしゃーん？」

「い、イヤ！イヤですう！！！」

しかし逃げる紗耶香をとっ捕まえると、また同じように酒を飲ませる。床に沈んだ紗耶香の次は・・・

「由美しゃん……一緒にのみましょーよー」

拒否は拒否する！そんな雰囲気をもとった翔子の誘いに、由美は覚悟を決めた。

「圭太……私が翔子ちゃんを止めてくるわ……」

「な……！む、無茶だ！由美、ここは逃げなきゃ……！」

「逃げてばかりだったらまた新たな犠牲者が出るだけよ……大丈夫よ、任せて」

そう言っつて、勇ましく翔子の元に歩いていく。果たして勝算はあるのだろうか。

「よーこそ由美しゃん！まあまあ座つてくらしゃい」

「ええ、翔子ちゃん。私と飲み比べしない？」

由美が自殺行為にもとれる発言をする。が、由美には勝算があった。以前、翔子と出会った日にも今日のようにどこかのバカの提案で酒を飲むハメになったときだ。由美と翔子は2人で飲み合い飲み合せ合い、互いに潰れた過去がある。しかしあの時は一緒に飲み始めたから互いに潰れたが、今回は翔子のほうがたくさん飲んでいいる。上手くいけば、由美は翔子だけを沈めて自分は助かるかも知れない……そう踏んでいた。しかし……

「いいでしゅよー？じゃあ……えい！！」

由美の口元を目がけて、翔子が日本酒の瓶を突っ込んだ。

「ち、ちよつと！飲み比べって言うてるじゃな……むぐつ！？」

制御不能なエヴァのような状態の翔子に反論するが、時すでに遅く。由美の体内にアルコール度の高い液体が注ぎ込まれる。

「うぶつ……！！」

しかし、大一波の攻撃は何とか耐えることに成功した。だが、身体は確実にふらつき、自分でも制御が利かなくなっているのがわかる。涙と頭痛でばやける視界を前に向けると、翔子が日本酒を飲み干していた。

「うー……酒がないですう……」

もつろつとしながら四つんばいで歩き回ると、寝ている洋介のそ

ばにまだ中身のある一升瓶を見つけて、うれしそうに笑いながらやってきた。

「まだまだありましゅーやりましゅー!!!」

そして、地獄の戦いがまた始まった。

飲んで飲ませ、飲ませられれば飲み返す。そんなやりとりがしばらく続いた時だった。

「ぶああー!!なんか幸しえな気分になってきたわあ・・・」

ミイラ取りがミイラになった。由美は完全に翔子のペースにハマっていた。顔を真っ赤にして横隔膜痙攣・・・しゃっくりをしながら酒を飲む。

その様子を見ていた圭太は戦況を見て不利と判断。時間ももう夜10時。今からならみんな寝ているし、部屋に戻っても酔っ払いは気付かないだろうと踏んで、そろそろと部屋を出ようとしたときだ。

「圭太あー!!」

「圭太しゃん!!!」

無情にも、敵に発見されてしまう。諦めた圭太が振り返ると、そこには明らかに不満そうな由美と翔子が・・・

「圭太あ?あなた、もつと飲みなさい!!!」

「ちよつと由美・・・目を覚まして・・・!!!」

「目なら覚めてるわよ!目覚めきってるわよ!!!」

ワケのわからんことを口走りながら迫る由美。そしてそれに気を取られているときだった。

「すきありー!!!」

「むがつー!!!」

いつの間にか背後に回っていた翔子に日本酒の瓶を突っ込まれた。突然喉を焼くようなアルコールの感覚に、意識が遠退くを感じながら圭太は思った。

次からは絶対に美春さんのカバンをチェックしよう・・・

そこで意識が途絶えた。

その後、由美と翔子は眠った圭太の鼻のしたにイカゲソの足を乗せてひとしきり笑った後、さらに飲み比べを敢行。最後の缶ビールを飲み切ると、2人は崩れるようにしてソファに倒れると、そのまま抱き合って深い眠りについた。

「ようやく寝たかよ・・・はあ」

その様子を、廊下の影から見守っていた旭がほっとした様子で咳いた。旭は美春が嘔吐した後の処理やらなんやらで戻るのが遅れ、難を逃れたのだ。

「ったくよお・・・今度からこのバカにすっかり言い聞かせつからよ、許せ圭太」

言いながらとなりで幸せそうないびきを掻きながら眠る若干ゲロ臭い美春を見る。ちなみに頭にはでっかいたんこぶがオプシヨンされている。旭のげんこつが酔っ払った美春に炸裂したのだった。

「・・・寝るか」

そして旭も壁に寄りかかると、臭う美春を少し離してから眠るところにした。

まだ日も上がり切っていない午前4時。新聞配達のカブの音で千尋が目を覚ました。

「ふぁーあ・・・頭が痛いよぉ・・・」

目をこすりながら辺りを見渡す。そこは屍累々の世界だった。真子と凜が近くでひっくり返り、洋介と紗耶香もうつぶせになっている。立ち上がって辺りに散乱する酒瓶や空き缶に注意しながら歩くと、ソファで抱き合いながら幸せそうな表情で眠る由美と翔子。そして・・・

「なにこれ・・・イカ？」

圭太の顔を見て疑問符が浮かぶ。しかし千尋はこの惨状を見て昨日何があったのか、何となく理解した。

「あ、そうだ」

何かを思い出して、ニコニコしながら自分のカバンからなにかを取り出して圭太の胸の上に置いた。

「誕生日おめでとございました！」

かくして、圭太の18回目の誕生日は終わった。

朝、全員が目を覚ますと部屋の掃除から始めた。ちなみに、主犯の美春、翔子に酒を飲ませた凜、そして翔子の頭にはたんこぶがオプシオンされた。凜と翔子には真子から一発ずつ。そして美春の頭には旭の他に由美や真子のげんこつの分。そして、圭太からも軽く一発もらった。

その後美春は

「もうお酒は飲みません。迷惑を掛けてしまい申し訳ありませんでした」

と、真面目に謝罪。敢えなく御用となった。

ちなみに、千尋からの誕生日プレゼントはクッキーだった。

そしてみんなが帰った後、由美はプレゼントを渡すことを決意した。

「ごめんなさい・・・真子さんのと同じになっちゃった上、あんまり良くない出来になっちゃって」

「そんなこと無いよ、ありがとう！食べてみてもいいかな？」

圭太がたずねると、由美は「もちろん！」と言った。

圭太は一口、口に入れてみた。そして噛み締めるように食べると「うん、美味しいよ！ありがとう」

ニッコリ笑う圭太。由美は嬉しくなって顔を少し赤くさせながら「改めて、誕生日おめでとう！！」

第40章 誕生日会！！ 後半（後書き）

未成年の飲酒喫煙は禁止されています。（笑）

今回のお話、やはり酒好きの私はパーティ＝お酒なので、こういうお話になってしまいます汗

ちなみに、飲酒運転はご法度です！飲んだら乗るな、当たり前です。

そして！！ついに今回で40回目の更新になりました！！

これからも『旧車物語』を宜しく願います！！

第41章 月光天女 疑心暗鬼

そして季節は無事に7月を迎えた。

まだ完全に梅雨明けしたワケでは無いが、それでも雨の降る日も減りつつあるある日。由美が教室内でルーズリーフに向かって何かを書いていた。

「海もいいわよねえ……せっかくなら……でも山で避暑も……カブトムシ捕まえて……うーん」

「何してるの？」

悩む由美の頭上から、Yシャツ姿の圭太が声を掛けた。

「もう後1月も経たないうちに夏休みじゃない？それで、私なりにどこに行こうかを考えてるのよ」

シャーペンをクルクル回しながら悩み耽る。そんな由美を見て気が早いなあと思い、ここは1つ釘を刺しておこうと圭太は忠告した。

「もう来週には期末テストだよ？そろそろ復習しないと……」

しかし由美はそんな圭太の心配……もとい忠告など耳を貸さずに

「大丈夫よ、前の範囲も出るのよ？次だって悪い点は取らないわよ」

と一蹴りした。そして「それよりも圭太！」と話をまた元に戻した。

「どこに行きたいとかある！？海！？山！？」

嬉々としながらたずねる由美の笑顔は、これから本格的にやってくる夏の太陽のように輝いていた。

放課後になり、由美は1人帰路についていた。本当なら圭太と帰

りたかったが圭太も高校生。友達付き合いもある。そんなワケで由美は1人で歩いていた。

「熱い・・・夏ねえ」

そんなことを思いながら歩いていると、やはり意識の問題かよけいに暑くなってきた。今年は猛暑かしら・・・そんなことを考えて、それならやつぱり海でフィーバーか山でのんびりか・・・夏はイベント満載、やりたい事は多々あれど高校生の身分では活動が制限されてくるのは由美も理解している。さらに自分は3年生、進路もあるのだ。まだ特に決まっていないのだが・・・

「1人で悩んでいても仕方無いわよね・・・よし、今日は1人で走りに行きましょう!!」

こうして、試験勉強もせずに由美は走るのを決意した。

ダッシュで家に帰ると、そのまま着替えてヘルメットを持って玄関に出た。

「さて・・・どこに行こうかしら」

しかし走りに行く場所を全くもって決めていなかった。ゼファーに跨るとまず右に行くか左に行くかで悩み始めた。

「普段ダムにばかり行ってるわよねえ・・・今日は全然違う場所に行きましょう」

そして、ウィンカーを右に出すと、ローにつないで走り出した。

グオロロロロ・・・!!コアンコアン!!!!!!

ショート管から吐き出される爆音はマフラーの中になにも詰まっていない証拠。耳をつんざく排気音に1人酔いながら由美は国道に出た。平日ということもあってやはり車は少ないが、それでもかなりのスピードを出して走る車はライダーにプレッシャーを与える。由美は流れに乗ると前方とのマージンを取りつつ進む。

信号で引っ掛かった時、由美はジェットヘルのバイザーを上げる

と、腕で汗を拭った。

「意外と暑いよね・・・」

自慢のタンクが太陽光を跳ね返して自分に当ててくるのがこの時ばかりは恨めしい。足下のエンジンの熱もいつもより高いのでは無いかと思う。

そんな事を考えながらぼーっとしていたので信号が変わるのを見逃していた。青になった瞬間、後ろのクルマからクラクションの嵐を盛大に貰い、焦って発進しようとしてエンスト。歩道までゼファ―を押し歩く由美を後ろのドライバーが面倒くさそうに抜いていた。

「ふーっ・・・なんか知らない場所に来ちゃったわね」

コンビニの駐車場で休憩しながら、由美はコーラを一口飲んだ。しばらく国道を進んだのだが、名前も聞いたことないような道に出ってしまった。

「まあ・・・また戻ればいいだけなんだけど」

そして、目の前を走る国道の上に掲げられた看板を見る。

「ここも横浜市かぁ・・・」

横浜には何度か行っているが、由美が行ったのは海が近い場所のみだった。海の香りのしない横浜市は初めてだった。

「1人で海まで行くにしても時間も無いし・・・今日はもう引き返しましょう」

缶をゴミ箱に投げ入れると、ゼファ―に跨がった。

由美は元来た道を進んだ。しかしただ帰るのはつまらない。由美は途中道を外れてみた。

「街は見てみたいわよね、寄り道よ寄り道」

1人呟きながら軽快に走る。FX仕様のゼファ―は快音響かせながら街を走った。そして、やはり目立った。街行く少年やサラリー

マンの視線を浴びて、満足気に走る。しかしその時だった……

ブーバア！バンブー！！

目の前の脇道から、明らかにそれらしいバイクが1台出てきた。

新幹線風防にアップハン、30センチ3段にケツアゲ+サンパチクリアテール……そして折り曲げられたナンバーから僅かに読み取れる『横浜』の文字。

すると、向こうも後ろを走る由美に気付いたのか、車速を落とすて並走してきた。

「アンタア！誰の前でんな単車転がしてんのよ！！！」

いちいちコールを切りながら由美を威嚇してくる。すると相手は由美に対して幅寄せをしてきた。それに気づき、由美は減速。ゼファアは間一髪で幅寄せから逃れられた。

「ち、ちよつと！危ないじゃない……！！！」

今の危険行為に対して、由美もさすがにキレた。が、前を走る単車はそれを嘲笑うかのように足を投げ出しながら蛇行運転をする。その挑発に由美はキレた。

「このお……待ちなさい！」

アクセルをガバツと開け、一気に加速。今度は由美が頭を押さええる形になった。

「ちよつと！人にあんな事して無視する気！？」

すると、相手の族車は由美のゼファアを見て怒鳴り返してきた。

「天下のハマでヨソのナンバーぶら下げてイキがってんじゃないわよバーカー！！！」

「な……！？」

そうして、族車に跨がるライダー……女……は反対車線にはみ出ながら加速。由美から頭を取り返すと、ゼファアの右フロントタイヤに、自身のリアタイヤを被せるポジションに着くと、再度幅

寄せをしながらそのままスピードを落としました。

「ち、ちよつと・・・!？」

「停まれつてんだよ!!」

女が叫ぶ。どうやら無理にでも止めようというらしい。このままスピードを落とさなければ自分にも相手にも危険が及ぶと判断した由美は仕方なく減速した。しかし・・・

「面倒くさいわねえ!ただじゃスピード落とさないわよ!？」

由美は叫ぶと、車体を一気に左側に倒す。女が驚いて離れた。が、由美のゼファーは吸い込まれる様に路地へと入っていった。

「ちつ・・・!やられた!!ていうかアタイとしたことがまたやつちやった・・・!」

女は舌打ちすると、その場でUターン。由美のゼファーを追い掛けた。

「はぁ・・・!なんなのよ全く!!」

あの後、路地裏を走り回り近くにあったコンビニに逃げ込んだ由美は逃げ切れただろうかと背後を確認すると1人ため息をついた。

「横浜つて治安悪いのかしら・・・!?!?全く、はぁ・・・」

ゼファーのキーを切ると、サイドスタンドを起こして降りた。早く地元まで逃げようと思ったが、今出てまた見つかるのも厄介だ。しばらく時間を空けてから出ようと判断した。

「その為にはまず裏道を調べなきゃいけないわねえ・・・」

しばらくコンビニの地図帳を暗記する作業をしなければならなく

なった由美はうんざりした表情でコンビニに入ろうとした。

その時、駐車場に1台のクルマが入ってきた。かなりハデなクルマで、シャコタン、20インチアルミホイール、内巻きエア口を身に纏い、ベント純正ブラックカラーが何故かお下品に見えるのは爆音だからか、少し古いトヨタのセダンだ。

「見ないようにしないとまた面倒くさくなりそうね……」

車内を見ると頭の悪そうな連中が2人。由美はなんでも無いふうを装いながら店内に入ろうとした時だった。

「そこのお姉ちゃん!!もしかしてそのフェックス乗ってん!?!」

しまったあ!!と由美は思った。今日はなんという日なのだろうが、心底ついていないと思いつながら由美は無視した。するとクルマから降りてきた青年が由美の肩に馴々しく触った。

「なあなあ聞いてんじゃん?あれ、お姉ちゃんのか?」

「さ、触らないですよ!」

ばっ!と身を翻すと、長居は危険と判断して足早にゼファーに向かう。しかし……

「そーもいかねーんだよなあ、姉ちゃんよお?」

もう1人、短髪を金に染めたイカツイ男が由美の前に立ちふさがった。

「姉ちゃんいい單車乗ってんじゃん?フェックスだろこれ?」

ニタニタ笑いながら……しかし目は笑っていないのは明らかだった。

「困るんだよお……ハマでヨソのナンバーぶら下げて、こんな時間から直管で走られると、なあ!!」

「……っ!?!?」

いきなり男の太い腕が由美に伸びてきた。もちろん避けれるわけも無く、肩を捕まれてしまった。

「そーゆーイキがった女がヨソを1人で走りやどーなるかくらい、わかってんだろ?」

「い、痛い……!放しなさいよ!?!」

「おう、コイツ積むぞ。早くしろや」

「任せるよ、ほんで今から仲間呼ぶからなあ、今夜は帰れないぜお姉ちゃん!？」

キヒヒヒヒ、と汚い笑いを浮かべる男達2人に捕まれて、身動きが取れない。何とかしようと藻掻きながら大声を出した。

「ち、ちよつと!！放しなさい!！放しなさいってば・・・!？」

しかし大の男2人に、普通の女子高生がかなうワケもなく、ずると引き連られて行く。必死に声を張り上げて助けを求めるが、誰もが見て見ぬ振りをする。

「助けて・・・!助けてよ・・・!圭太あ・・・!」

自分でも気付かないで咄嗟に名前が出てしまった。もしこのままクルマに乗せられればどうなるか、バカでもわかる。由美が必死に暴れて何とかしようとしている時だった。

バンブー!!ブバアアアア!!

「あ!？」

短髪金パがその爆音に振り向くと、1台の族車が停まっていた。

そして・・・

「アンタらあ、アタイの舎弟になにしてんのよ!？」

その聞き覚えのある声に由美が顔を上げると、そこには先ほどまで追い掛けられていた女が立っていた。

「何だよ、お前もこの女の仲間かあ？」

「レディースかつこいいよ、君い・・・ヒヒヒ」

短髪金パの相方が、やはり気持ち悪い声を発しながら女に近づく。女は由美と同じくらいの身長。勝てるワケが無いと思い、由美はいつのまにか叫んでいた。

「は、早く逃げなさいよ・・・!!」

先ほどまで助けを叫んでいたのに、他人の・・・しかも先程まで追い掛け回された相手の心配をってしまったことに気付かない由美。

そして・・・

「へえ・・・意外と気合いあるみたいね」

ドカツ!!

「ガツ・・・!?!」

鈍い打撃音の後、男は倒れた。彼女の手握られていたのはなんとレンガだった。男の頭からは血が出ていた。

「て、テメエ!?!」

まさか凶器を持っている等とは思いつかなかった短髪金パが睨み付けると、女はバカにするように言った。

「はん!アンタらみたい大男相手に、何にも用意してないわけ無いでしょうが!?!」

「ナメやがつて!クソアマあつ!!」

その言葉にキレた男が由美を放り捨てて、女に突進していった。女は慌てた様子も無く、レンガを男に投げた。しかし

「バーカ!当たるわけねーだろが!?!」

男は軽々と飛来する凶器をかわした。しかし・・・

ドゴオツ!!

「お・・・がつ・・・!ピイツ・・・!?!」

「そりゃこつちのセリフよバーカ。当てるワケ無いでしょ?フェイントなんだから」

女の直蹴りが、男の股間を見事に捉えていた。投げたレンガはフェイクだったのだ。

泡を吹きながら崩れ落ちる男を見下ろし、さてどうしてやるうかと考えていると、遠くからサイレンの男が響いた。

「チツ・・・!もう来るなんて・・・」

女は吐き捨てるように呟くと、単車に跨がりエンジンを掛けた。

「ホラ！アンタもなにボケつとしてるの！？バツかれるわよ！？」

「え・・・！？え・・・！？」

「あー！置いていくわよ！？早く！！」

女の叫びに、先程の恐怖で上手く動かない身体を何とか奮い立たせると、急いで愛車に跨がった。

「アタイについて来な！！逃げるよ！？」

言いながら由美の横に並ぶと、ゼファアのリアに手をのばしていた。由美は気になったが今はそれどころじゃ無い。前を走る族車について行った。

「あっはっは！！楽しかった！！」

由美達は、相模に近い国道のファミレスに来ていた。あの後、結局パンダカラーのクルマが追い掛けてくることもなく、とりあえず2人はファミレスに来たのだ。

「楽しくなんか無いわよ！！なんなのよ全く・・・あなたに絡まれ、男達に絡まれ、最後はお巡りさんにまで追い掛けられるなんて・・・！！」

一方由美は不機嫌だった。まあ目の前に座る彼女がいなければ間違いなく恐ろしい目に逢っていたワケだが、愚痴を言わずにはいられなかった。が、しかし

「まあまあ、気にするなし！」

「何言ってるのよ！！すつごく怖かったのよ！？」

由美の話などほとんど聞かずに笑う女に、由美がキレた。

「たはは・・・ま、まあ落ち着けよ、な？」

そう言つて彼女が由美の前にタバコを差し出した。が、
「タバコなんか吸わないわよ！」

バチンとタバコだけを器用に叩き落とした。

「ああ、勿体ない……！」

言いながら、落ちたタバコを拾うと、自分でくわえて火を点けた。

「まあ落ち着いてよ、アタイだつて別にアンタを殴ろうつて声掛けたワケじゃないんだから」

ふーっ、と紫煙を吐き出すと、彼女は灰皿にタバコを置いてマジメな表情で言つた。

「自己紹介がまだだつた……アタイはあの街で『月光天女』ってレディースの三代目やつてる様名玲花、18歳。ヨロシク」

彼女……玲花の自己紹介を聞いて、自分だけ名乗らないなどと言つわけには行かない。自分も自己紹介をすることにした。

「私は三笠由美……高校3年の一般人よ」

「そんなパンピーなんて言葉出さないでよね？地味に傷つくんだから」

すぱーつとタバコを吐き出すと、玲花はニヤリと笑つた。

「同い年ね！それであんなゼファーに乗つてるだなんて渋い！渋すぎるよアンタ……！」

「ちよ、何よいきなり……！最初はあるなに絡んで来たのに……！」

初対面とは明らかに違う態度に困惑する。

「いやさあ、実はあれにはワケがあつたんだ」

しかし玲花は前置きをして、自分が取つた行動について説明を始めた。

「アタイさ……さつき『月光天女』三代目やつてるつて言つたじやない？でもさ、今はアタイ1人なのよね……」

「？」

そして、玲花は事情を説明し始めた。『月光天女』はその昔、地

元1番のレディースで男並みに気合いの入ったチームであったこと。しかし二代目の時代・・・今から10年以上前に暴走族ブームの終焉により数が減り自然消滅したこと。そして、自分が三代目として復活させたこと。

「最初は他にも数人いたんだけどさ、みんなアタイについていけなくなつたみたいで・・・去年、私を残してみんな辞めっちゃまったのさ」

少し悲しそうに呟く。そして由美の目を見て

「でもアタイは見つけた！ゼファアのFX仕様に乗っててタメの女に！！」

そしてガバツと頭をテールブルに額を付けて頭を下げた。

「なあ・・・！騙されたと思ってアタイと一緒に走ってみないか！後悔はさせないから！！頼む！！」

「え・・・ちよつと、何言ってるのよ・・・！」

由美は驚きつつ玲花に言った。いきなり頭を下げたとすれば暴走族の勧誘だったのだ。さすがの由美も慌てた。

「・・・残念だけど、私は暴走族には微塵の興味も無いのよ。ごめんなさい」

「でも、どこのチームにも入って無いんだろ！？アタイといればさつきみたいなヤツらにマトにされることも無いし・・・！！」

それでも必死に食い下がる玲花。彼女も必死なのだ。

しかし由美は「それなら大丈夫よ」と言つて水を飲んだ。

「一般人だけど、頼りになる仲間達がいるわ」

「仲間つたつてパンピーだろ！？アタイみたいにケン力慣れしてないといざつて時・・・！」

「大丈夫よ、すつごく強いんだから。それに、私はチーム・・・暴走族じゃない、ツーリングチームをやつてるの」

その言葉を聞いて、玲花はガツクリと肩を落とした。

「ツーリング・・・旧車會か・・・？」

「なにそれ・・・？私達はただのツーリングチームよ」

旧車會なる物を知らない由美はなんのことだかわからないが、とにかくツーリングチームをしていることだけを言うと、玲花はハアつとため息をつくと、顔を上げた。

「わかったよ・・・この榛名玲花、無理矢理にでもチームに勧誘するほどバカな女じゃない。今回は諦めるわ」

「ええ、ごめんなさい」

言葉と裏腹に暗い表情の玲花を見て、由美は少し悪いなあと思っただが、今から暴走族を始めて道を踏み違えるほどバカではない。当たり前だが、由美はバイクが好きなのだだけの女の子なのだ。

すると、玲花が改めて由美をジーツと観察し始めた。

「アンタ、見直してみると本当に普通だよな。なんでFX仕様のゼファーに乗ってるの？」

ちなみに、玲花の格好はドカジャンにニツカ、髪型はショート的茶髪だ。

「私はねえ・・・小さい頃から乗り物が好きで、近所の友達のお父さんが乗ってたバイクが昔から好きだったのよ。それがFXだったの」

「ふーん、なるほどお」

「それで高校2年の冬に教習所に行って・・・その友達とね？で、ついこの前、春にようやく取れて乗り始めたのよ」

「そん友達は？同じチームなの？」

玲花が興味深そうにたずねると、由美は首を縦に振った。

「ええ、FXに乗って私達と一緒に走ってるわ」

そこで、玲花はぴーんと来た。ニヤニヤしながら由美にたずねてみた。

「そのFXに乗ってるの、オトコだろ？」

「え・・・？そうだけど・・・」

「アンタ、惚れてるね？」

「なあっ・・・!？」

軽い揺さぶりのつもりだったが、顔を真っ赤にして取り乱した由

美を見て玲花は笑った。

「あはははは！！」

茹でタコみたいに真っ赤にして取り乱した由美を見て玲花は笑った。そしてすぐに柔らかい笑みを浮かべて

「いやあ・・・アンタみたいな女の子はアタイのチームに入ったらダメだな・・・」

と、少し自嘲気味に笑った。

「よく見れば見るほど、ゼファーには見えないねえ・・・」

時刻は20時前。店を出ると玲花はゼファーを隅々まで観察し始めた。

「この直管・・・かなり良い音してたけどどこなの？」

「わからないのよねえ・・・前に詳しい人にも聞かれて、その人も知らなかったみたい」

ちなみにそれは、マフラー手曲げ職人（見習い）の伊勢俊一である。

「綺麗に乗れてるし、大事にしな」

「ありがとう！ところで玲花ちゃん・・・」

「ちゃんなんていらねーって。アタイのコトは呼び捨てで構わないよ、由美」

由美に呼び名を正させると、玲花も呼び捨てで呼んだ。

「うん。玲花のバイク・・・なんだか凄いわね」

そこで改めて見るバイクは、俊一や長良達のバイクに比べると形的な迫力は無いが、タンクに描かれた日章カラーや色褪せた黄色塗

りのハス切りマフラーなど、ワイルドさでは負けていない。

「カッコいいだろ？バブ？はやっぱいいいな」

「ばぶっー・・・？」

聞き慣れぬ名前に？マークが宙を舞う。そんな様子の由美を見て、玲花は改めて強引に由美を誘わなくてよかったと思った。バブ？の愛称で呼ばれる自分の愛車を知らないのだから、彼女は本当にただのバイク好きなのだろうと改めて思った。

「まあ名前はともかく、アタイのバブ？もなかなかシブいでしょ？マービング管のハス切りってばかなりヤバイんだよ」

そしてキーをシリンダーに突っ込み捻ると、セルに指を伸ばした。

キョカツ・・・！！

ブバアアアアア！！！！

「・・・っ!？」

音量的にも音質的にもゼファー以上に迫力のある爆音に、由美は思わず耳を塞ぎかけた。

「はっはっは！やっぱ2気筒が1番よなあ！！」

「凄くお腹に響くわね」

迫力のエキゾーストは旭達の2スト勢とはまた一味も二味も違う物だった。音量だけなら由美が知る中でトップクラスだ。

「まだ横浜だし、相模まで送るよ！」

「本当？ありがとうね！」

こうして、2台の直管マシン達が夜の国道に飛び出した。

2台のバイクは、スタイルこそ違えど街ではかなり目立った。

ブバアアアアア！！バアンブー！！

前のクルマが詰まろう物なら間髪入れずにアクセルを煽り、フラフラとローリングするバブ？。

コアアアアアアアアア！！

そして、どこまでも伸びて行きそうなバブ？の重低音とは違う、甲高いマルチ直管で加速する由美のゼファー！。2台は間違いなく目立っていた。

途中、信号で引つ掛かると、玲花がニコニコしながら由美に叫んだ。

「状況やスタイルは違っても、やっぱり1人で走るのとは違って楽しいよ！」

「私も、やっぱりみんなまで走った方が楽しいわよね！」
由美も大きく頷いた。その気持ちはよくわかる。

「後少し走れば相模・・・相模に入ったら適当な場所でアタイは引き返すよ。よかったらまた走ろう!？」

「ええ喜んで・・・！また連絡するわ！」

先ほど、ファミレスで互いにの連絡先を交換していたので、由美はそう言つと玲花は嬉しそうに笑った。

「今日はいろいろ時間取らせてごめん！それから、ありがとう!！」

「こちらこそ！」

信号が変わり、お喋りもそこそこに2人は走り出した。後10分もあれば相模だ。残り少ない時間をフルに使いながら走りを楽しむ2台。

その時、目の前の横道から1台のバイクが飛び出してきた。特徴的なテールランプに、甲高い排気音と白煙を撒き散らすシヨットガンチャンバー。そして跨がる2人のヘルメットと服装・・・

「あれってもしか・・・しなくても旭さんと美春ちゃん・・・よね」

キャンディレッドの純正カラーに鬼ハンドルなんてそうそういない。由美の予想通り、前を走るのは霧島旭、真田美春のタンデム組だ。

すると、後ろにいた玲花が由美に並ぶと、嬉しそうに笑った。

「前にいるあれ、サンパチだよね!! よっし・・・!!」

1人気合いを入れると、玲花はぐんぐん加速していった。

一方、前を走る旭達は後ろから近づいてくるヘッドランプに気付いていた。旭は自分のサンパチの排気音に混じって聞こえてくる音に笑った。

「おう美春う、なんかイキの良いのが突っ込んでくんぜ?」

「むー・・・ケンカしたらメ!だよ?」

そんな感じで話していると、玲花は2人の真横を勢いよく飛び出していく。そして目の前に出ると挨拶とばかりにローリングを始めた。

「ほー、やっぱバブかよ。イキがってんなあおい」

「ケンカはダメ・・・」

「わかってんよ。それに相手え女だしな」

「そだったあ?」

「3段のカンバン見てみ? 『月光天女』 なんぞ名前聞くのだったひつじぶりよお。まさかレディースを復活させるヤツが現代にいんかあ?」

興味深そうに目の前をローリングする玲花のバブを見る。

「しっかし・・・お粗末なローリングだべな」

「長良つちの方が全然上手いよねえ」

美春もウンウンと頷いた。

「まあ、10年以上前に消滅してた・・・ムリねーか」

暴走のテクニカルは先輩から盗み実戦で上達するものだ。しかし、

長い間存在しなかったチームでは自己流しか無い。ムリもないと旭が思うと、ニヤリと笑ってギヤをサードに落とした。

「あつくくん・・・？ケンカはダメだよお」

その行為で旭が何かしようとしているのを察知した美春が注意する。まあ普段言う事を聞かない美春には言われたくないが、旭は頷いた。

「なーに、ちよつくら『モノホン』を教えてやんかと思ってな。美春、落ちんなよ？」

「もう、せつかくのでえとだったのにい」

プイツとつまらなそうに顔を背ける美春だが、旭にしがみ付いていた両手を話すと、シートの下を掴んだ。

「やっぱ掴まれない方が動きやしーな・・・」

そしてそのまま加速。

カアアアアアアーン！！・・・バリバリバリ・・・！！

玲花のバブを追い抜くと、目の前でユラユラ揺れ始めた。

「なにをする気だい・・・？」

玲花が黙って見ていると、サンパチの動きが激変した。かなり深くローリングをし始めた。ステップから火花が散ったかと思えば、振りっ返して次は膝まで擦ろうかという程のギリギリまで車体を倒す。さらに、後ろに乗る人間も慣れたように両手でシート下を掴むと、綺麗に重心移動をする。タンデムで重くなつた分、コントロールしにくくなり、さらにバンク角の浅いと言われるGTをまるで自信の身体のように自由に操るその姿に、玲花は目を奪われた。

「じゃあ美春、アレヤンからよお、ヨロシク」

「もうあつくくんが楽しみたいだけになってるよお」

呆れながら呟く美春だったが、なんやかんやでシートを掴んでいた両手を放して、再度旭の腰に回して準備していた。

「しっかり見とけよなあ」

クアアアアアア！！

アクセルをあけると、フロントアップ。なんと2人乗りでのウイリーを始めた。2人分の重みでリヤサスが沈み、自由が効かないハズのサンパチをコントロールする旭と、いつものことのように慣れた感じで旭に合わせる美春。

「嘘……でしょ……？」

2人を見ていた玲花は驚きのあまり呆然となった。思わずがに股だった足をニーグリップし、曲がった背筋をシャンとしなおしてしまった。

GT380はウイリーを終えると、次の瞬間には最初のように普通に走り出した。後ろにいる影が運転手に何か小言を言っているようだったが、ライダーはその小言を遮るようにギヤをまたサイドに入れると、そのまま加速。暗闇の国道にテールランプの灯りと白煙だけを残して去っていった。

「玲花ー！」

後ろで一部始終を見ていた由美がここに来て漸く玲花に並んだ。由美が玲花の顔を覗き込むと、暗くてよくはわからないがかなり間抜けな顔をしていた。

やがて相模に入ると、2人は一度コンビニの駐車場に立ち寄った。バイクから降りてもまだ啞然としている玲花がボソツと言葉を發した。

「な……なんだ、あの走り……アタイは知らないぞ……」

「言い逃しちゃったんだけどあの人、私のやってるツーリングチームの仲間なのよ……」

その言葉を聞いた瞬間、玲花は由美の肩を引つ掴んだ。

「ち、ちよつと玲花あ！？」

「あんな走り……するなんて！！そ、そんで現役じゃない！？う、嘘だろ！？アタイを騙そうだったって……！！！」

かなり取り乱した様子の玲花に、由美は驚きながら事情を説明した。

「あの人は霧島旭さんって言う、私のいるツーリングチームでも凄い運転が上手い人なのよ、それで後ろにいたのが真田美春ちゃんていう……」

「霧島……!?旭……だと!？」

由美の説明を途中で終わらせて、いきなり叫ぶ玲花。そして信じられないと言った感じで何かを呟いた後、駐車場の輪止めに腰を掛けた。

「赤いサンパチ……鬼ハン、ショットガン……本当だったんだ……」

「ど、どうしたのよ?旭さんを知ってるの?」

由美が恐る恐るたずねると、玲花は自分を落ち着かせるために深呼吸すると、口を開いた。

「ハマにまで名前は届いてるよ……あの『相模無敵艦隊』……霧島旭と羽黒洋介、あと伊勢俊一……ケンカすれば誰彼構わず殴り倒してマッポにもケンカを吹っ掛けて半殺しにしたり、噂じゃあ拉致監禁や人殺しもしたって……」

「ち、ちよつと待ちなさいよ……!!」

玲花の話に耐えかねた由美が声を上げる。玲花の話では、3人はただの極悪人では無いか。そんなハズは無いと否定した。

「あの人達に限って、そんなのあるワケが無いわ……!何かの間違いよ!!」

そう、確かにケンカっ早いし見た目もイカツイ旭達だが、もしそんな極悪人なら自分達が見てきたものはなんなのか。あれだけ優しい兄のような2人がそんなことをするわけが無い。

「まあ、この噂もアタイが中1ん時くらいに流行ったモンだから、本当かどうかはわからない。アタイだつて見たこと無いし……」
「そつよ!そんな噂、嘘に決まつてるわよ!」

由美がキツパリ断言すると、玲花もだんだん「まあ、よその話だ

から、もしかしたらパチなのかも知らないけど・・・」と何とか納得したらしい。

「まあ・・・最後にいろいろあったけどさ、また一緒に走ろう！また連絡するよ！！」

そう言つて、玲花はバブ？に跨がるとエンジンを掛けた。

「ええ、次は私のいるチームの仲間達とも一緒に！」

「そういえば、そのチームって何て言う名前なのさ？」

玲花がたずねると、由美は胸を張つて言った。

「『旧車物語』よ！」

「へえ、変わった名前だな」

「個人的って言うのよ」

「そっか、じゃあ後でアタイから連絡するよ！それじゃ、気を付けてな！」

ブバアアアアア！！！！・・・

爆音を上げながら走り去る、玲花の後ろ姿が消えるまで手を振り続ける由美。そしてその姿が消えると、先ほどの玲花の話が脳裏に蘇る。

『噂じゃあ拉致監禁や人殺しもしたって・・・』

「そんなの嘘よ・・・」

3人の顔を思い浮かべながら由美は思った。旭はちょっと怖いけど、頼りになるし美春を大事にしている。洋介も見た目こそ少しイカツイが、おちゃらけていて尚且つ真面目な性格だし、俊一も友達想いのいい人だ。

しかし、その逆もまた然り。

旭と初めて会った日、3人を相手に1人で立ち向かい、隙を付かれたとは言え完全に勝っていた。妹の千尋を突き放していたのも自

分が悪影響を与えようと思っただけだし、洋介もケンカこそしないが、峠の走り屋と一悶着あった時のあの据わった瞳や言動。俊一も長良や玲花に負けず劣らずな派手なバイクに乗っているし・・・

「そんなの・・・嘘よ」

しかし、1人残された由美はしばらくその場を離れられなかった。

第41章 月光天女 疑心暗鬼（後書き）

人物紹介

榛名玲花

職業 ドカタ 交通整理

誕生日 12月14日（現在17歳）

身長 163？

愛車 CB400T HAWK？（角タンク）

家族構成 父・母

好きなもの 暴走・男気のある女・HAWK？・宇崎竜童・玉〇さん・横浜

嫌いなもの 女だからってナメている男・平成という時代・バカと言われること

地元は海から遠いがギリギリ横浜市内。10数年前にブームの終焉とともに消滅した伝説のレディース『月光天女』を仲間たちと三代目として復活させるも、現在では本人を残し全員脱退。それでも1人『月光天女』の看板を背負い、昼はチームの構成員のスカウト、夜は1人街を疾走したりと忙しい。本人いわくケンカチームなどではなく走りのチームにしたいらしい。

というわけで！！

今回で41回目です！！

何やら雲行き怪しい展開になってきました。あれー、なぜだろう・・・汗

ご感想、ご指摘、そしてお叱りは随時受け付けております！！よろ

しく願います!!

3気筒

追伸、今回も登場する団体、名称は架空のモノです。不都合がありましたら連絡願います。

第42章 友達！（前書き）

宜しく願います！

第42章 友達！

玲花と会ってから数日。待ちに待った週末の放課後、の教室で、圭太は由美に声を掛けた。

「おーい、由美ー」

「ん、なに・・・？」

しかし気のせいか、いつもより元気の無い返事に圭太は眉を寄せた。普段なら由美から声が掛かるのに、今日は声を掛けてこなかったし、自分から話してみればどこか疲れたような表情でいる。

「どうしたの？最近日を追うことに元気が無いみたいだけど」

「んうー・・・別に、何でもないわよ」

「なら良いけど・・・それじゃあ、早く行こうよ。今日は喫茶店でみんなで夏の計画を立てるんだからさ」

今日は『旧車物語夏休み活動計画会議』という、名前だけ見れば立派だが要はいつもの感じでダベるといふ予定があった。

しかし由美は少しだけ気まずそうに俯くと

「ゴメン圭太・・・今日、居残りで勉強していこうと思って・・・もし行けても少し遅れるわ・・・」

「・・・どうかしたの？由美が進んで居残りだなんて」

「なによ、私が学校に居残りしたらいけない？」

「いや・・・うん、わかった。じゃあみんなには伝えておくよ」

「ごめんなさい・・・」

教室から出ていこうとする圭太の後ろ姿を見つめながら、由美はつぶやいた。

「えー！ゆーちゃん来ないのお？」

さほど人の入っていない店内を照らす夕日の中、さほど人が入っていない中では1番密度の高いテーブル席で美春がつまんなそうに呟いた。

「なんか放課後に自主勉するみたいですよ？」

ちなみに、現在この場にいるのは圭太と美春、そして千尋だけである。旭と洋介は知り合いのバイクを治しに行くと言ったきり。まだ帰ってこないようで、喫茶店に着くなり美春がぷんすかしながらそう説明した。

隣街の赤城3姉妹や、離れた場所に住んでいる翔子は時間が掛かるのでまだ来ていない。

「もー、この集まりは欠席したらいけないんだよお？」

「まあまあおねーちゃん、由美ちゃんや圭太さんに翔子ちゃんも、ついでに私だつてもう受験生なんだよ？」

古めかしい店内で、1人パイソングラスをこくこくと飲みながら千尋が美春を宥めた。ちなみに千尋はこのパイソングラスのグラスのクマの柄が子供扱いされているようで少し気に入らないのは内緒だ。

「そうかあ、そういえばちーちゃんももう中学3年かあ・・・昔はこーんなに小さかったのにねー」

そして手を自分の腰より低い位置にかざしてうんうんと頷く。

「いや、おねーちゃん・・・今まで私の何を見てたの？」

「冗談だよお そんな2年で身長は変わらないよねえ。でも、」

そこでいったん区切ると、時たま垣間見せる歳相応な大人っぽい目付きで

「ちーちゃん・・・大きくなったねえ」

「おねーちゃん・・・」

そんな姉妹分が良い雰囲気になった時、店の入り口が鐘を鳴らしながら開いた。

「こんにちはー！」

「あ、しーちゃん！こつちだお」

ヘルメットを手にした翔子がカツカツとテーブルに歩み寄ると、隣の空いている圭太の横に座った。

「いやあ、週末の学校の後のバイクは最高ですよねえ……ってあれ？由美さんは？」

普段なら圭太の隣に当たり前のように座っているはずの由美の不在に翔子が気付いた。

「由美は今日自主的に残勉するから来れないみたいだよ？」

圭太が翔子にメニューを渡しながら説明すると、翔子は驚き顔で「そんな……おかしいです……」

と呟いた。

「おかしい？」

考え込む翔子の表情を覗き込みながら圭太が相槌を打つと、美春も頷いた。

「やっぱりしーちゃんもかあ……おかしいよねえ……」

「どうしたの2人とも？」

「おねーちゃん、なにか心当たりでもあるの？」

圭太と千尋が何の事だかわからないと言う風にたずねると、2人は口を揃えて言った。

「あの由美さんが……自分から居残りをしてまで勉強するだなんて……」

「それに週末だよお？ゆーちゃんが1番楽しみにしてる日に、わざわざそんなことするなんて変だよお」

そんな2人の疑問を聞いて、圭太と千尋も思わず納得してしまった。圭太はあの由美が自分から積極的に、しかも学校に残ってまで勉強してた所を長い付き合いの中で一度も見た事が無いし、千尋も長い付き合いでは無いが由美が週末の集まりより勉強を優先させるような真面目な性格では無い事を知っている。

「おかしい……」

考え込む4人の中でいつも笑顔の美春が、一瞬だけ真面目な顔になって呟いた声は誰にも聞こえなかった。

その頃、由美は居残りなどせず既に自宅に帰ってきていた。カバンを放り投げて制服のままベッドに身を投げると大の字になって天井を見上げる。

『噂じゃあ拉致監禁や人殺しもしたって・・・』

玲花の言葉が頭をよぎる。

由美は頭をバリバリと掻き毟るとつつ伏せになって重たいため息をついた。

「・・・はあ」

もちろん、由美は玲花から聞いた話を信じてなどいなかった。確かに旭や洋介、あまり知らないが俊一の見た目や強さからすれば、昔は結構なヤンチャ小僧だったのかも知れない。ケンカだってやってただろうし、警察といたちごっこだってしていたかも知れない。仮にそれが本当だとして、昔の旭達がどんな少年時代であっても自分は今を彼らを信じていた。あの優しい笑顔は極悪人に出来る表情では無い事くらい、由美にもわかる。

しかし、だ。

「はあ・・・」

時計を見る。時刻はまだ18時前。今から家を出ても十分間に合う時間だ。

本当なら今すぐにでもゼファーに跨がってみんなの集まる喫茶店に駆け出したい気分だったが、由美はそれを躊躇った。

心の奥底に引っ掛かる玲花の言葉が脳裏をよぎる。

『噂じゃあ拉致監禁や人殺しも・・・』

初めて旭に出会った夜。窃盗団3人を相手に臆するどころか慣れた感じで殴り合いを始めた旭。確かにあの時は流れるにも仕方が無かったかも知れないが、普通なら真つ先に警察を呼ぶべきでは無かったのか？そうすれば旭は刺される事も無く、暴走した美春が返り血を浴びて窃盗団の1人を包丁で滅多刺しにすることも無かったのでは無いか？

自分は最低だ・・・由美は思った。他地方の噂など、誇張されているに決まっていると解つていても心の奥底で燃え続ける疑心の火種。由美は耐えられなくなり、ケータイを取り出すと電話を掛けた。

「もしもし玲花？・・・うん、今日時間ないかしら・・・？」

一通り話終えると、通話を切つてケータイを閉じて立ち上がった。

「で、だ。とりあえず今日決まったコトはまた今度集まつてまとめる・・・でいいいな？」

日はすでに沈み、時刻は20時を少し回った頃。喫茶店に集まったメンバーの顔を見渡しながら旭が言った。

「ええ、今日話した所なら由美ちゃんもきつと納得すると思うわ」

「海も山もあるしな、最高だぜあそこは」

真子と凜もウンウンと頷きながら言った。ちなみに夏休みに行く場所候補をした結果、赤城姉妹の意見が採用されたのだ。

「じゃあ細かい日程などはまた後日に決めるといふコトで、今日は解散にしますか」

ノートに今日話合ったことをまとめ終えた圭太が言うと、今日は解散となった。

外に出て、店の前に並ぶ自分達のバイクにそれぞれ跨がると、エンジンを掛けたりそれぞれ話していたりと最後の時間をそれぞれ過ごしている、まず始めに赤城姉妹がバイクを出した。

「次は日曜、また明後日会いましょう？」

「はい、気を付けて帰ってくださいね」

圭太が言うと、真子はふっと笑って走っていった。

「ちよつと待てよ姉貴い！！あ、じゃあみな！！」

「また明後日、次は全員集合ですよ！！」

置いていかれた双子の妹達が姉の姿を追って音と煙だけを残して闇の中に消えていった。それを見送ると、洋介が浮かれた様子で旭を急かしていた。

「おい！早く出せって！今日こそオレのフォアちゃんを完成させんだからさ！！」

「つたくうるせえ奴だなオメエはよお・・・」

面倒くさそうに言うと、旭はGT380を引つ張り出した。

「じゃあオレはこのバカ送ってっからよお、美春も千尋も気いつけて帰れよな？」

「まっかせてよあつくん」

「おにーちゃんも気をつけてねー」

美春がふんぞり返ってオツケーサインを出しながら言うと、千尋も腕を振りながら「ばいばい」とか言っている。いつまでたっても心配になるこの2人を見て旭がため息をつく、圭太に向かって、

「まあ、後は任せた」

と言つて、2人を乗せたGT380は発進していった。

「そつえば翔子ちゃんは？今日はどうするの？」

千尋がたずねると、翔子は困ったように苦笑いした。

「どうしましょう・・・あまり早く帰ると家の人がつるさいので、少し遠回りしながら帰ります」

「それならしーちゃん、ちょっと私と一緒に来ない？」

美春は翔子の肩を掴んだ。

「私もこのあとなーんにもないんだあ　なんなら、泊まってっちないなYO」

「え・・・でも悪く無いですか・・・？」

翔子は嬉しそうなお顔と複雑そうな顔を混ぜた表情をした。泊まり自体はなんとすることは無い。家族は両手離して喜ぶだろうし本人も万々歳だ。しかし、来るたび来るたびにメンバーの家に泊まっていたのは迷惑なのではとも思うのだ。

しかしそんな翔子の心中を察しているのか、美春は翔子の肩をパンパン叩いた。

「気にしないでよお、遠慮は無用！なんならウチに住んじやいなよ
そしたら私にはちーちゃんとしーちゃんって2人の可愛い妹が・・・
痛っ！」

その時、千尋がガスッ！と美春の足を踏んだ。悶える美春を一瞥すると翔子をじろり。

「おねーちゃんって呼んでいいのは私だけだもん」

「くすつ・・・わかってますよ」

自分にもこんな姉妹が欲しかったなあと翔子は思いつつ、千尋の頭を撫でた。

「それじゃあ、泊まりかどうかはさて置きお付き合います。私もこのまま帰るのは少しつまらないですから」

「本当！？痛いけどやったあ」

「圭太さんは？どうします？」

翔子がちらりと圭太に振り向く。圭太は少し考えた。由美の事が少し心配だったが、由美には明日にでも会えるし、何より夜の道を女の子達だけで走らせたなら何かあった時に不安だった。

「うん。今日は何も無いし付き合っよ」

「じゃあ決まりですね！どこに行きますか？」

嬉しそうに笑いながら早速C Bに跨がる。するとさっきからウィンカーを点けたり消したりしていた美春がニッコリ笑いながら言った。

「じゃあ、私についてきて」

それから少し経った頃、相模寄りの国道沿いのファミレスの駐車場にFX外装の赤いゼファーと、ド目立ちの日章カラーを纏ったCB400Tが停まっていた。

「だからぁ・・・アタイだつてわかんないよ。古い話だし・・・」

比較的人が多い店内の喫煙席で、『月光天女』三代目総長兼スカウトの榛名玲花が困ったような表情でタバコに火を点けて言った。目の前には下を向いて落ち込んでいる由美がいた。

「私・・・本当に信じて無いのよ？でも、心のどこかで引っ掛かって・・・」

ちなみに由美は旭と初めて出会った時の話もした。玲花は興奮気味にその強さにただただ感心していた。

相変わらず下を向いている由美。玲花はうーんと唸りながら無い頭を振り絞って自分なりの答えを出した。

「深くは聞かないけど・・・アタイが聞いた噂は由美の推理どおり、街を跨いでる分、少しは誇張されてると思うよ・・・ただ、昔はかなり凶悪だったのは多分間違い無い。武装してる大人3人を相手に余裕ってあり得ないし、こないだセンパイに聞いたら実際にやられ

たつて人が何人かいたし・・・」

でも、と玲花は付け足した。

「話を聞くかぎり、その人達は今は悪い人らじゃないよ。そりゃあまあ、雰囲気や言葉はそうかも知らないけどなんていうのかなあ・・・こつ、『筋を通す不良』と『チンピラ紛いの不良』って違うだろ？難しいんだけど、その人達は大丈夫だとアタイは思う」

我ながらいい例えができたと思いついてウンウンと頷いた。しかし由美は相変わらず下を向いてしまっている。一般人の由美からすれば『筋を通す不良』と『チンピラ紛いの不良』の違いが分からないし、何よりも由美を落ち込ませるのは実際、旭達の過去を思つてではなく、本人も気付いていないだけで実は仲間を疑つてしまったことに對して申し訳ないといった気持ちが強いのだ。

自分の言葉を聞いても落ち込んだままの由美を見ていた玲花は、軽くため息をついた後、

「いい子だね、由美は・・・」

聞こえないように呟くとレシートをつまみ上げて一言。

「今日は奢るよ」

「え・・・だ、ダメよ！付き合ってもらつたのは私なんだから・・・」

「アタイは毎日働いてんの。アンタは学生。そういう事は社会に出てアタイより稼いで、高級料理店にでも行つた時に言つてよね？その時は容赦無く奢らせるからさ」

そしてレジまで歩いていくと、最後まで納得行かない由美を無視して会計を済ませてしまった。外に出ると由美は玲花に謝つた。

「今日は本当にゴメンなさい・・・」

「気にしすぎだよ。帰り道、途中まで一緒に走ろう。な？」

「本当にゴメンなさい・・・」

2人は愛車にそれぞれ跨がると、店を後にした。

「ねえおねーちゃん！なんでこんな道走るの？」

その頃、美春達は国道を流していた。先頭を走る美春のブルーのサンパチにタンデムする千尋は美春にたずねた。

「おねーちゃん家とは逆方向だし、行きたい場所があるの？」

しかし美春は後ろを振り向く事は愚か、返事さえしなかった。交差点やファミレス、コンビニや飲食店の駐車場や対向車線を走るバイクなどをキョロキョロと見ながら走っていた。カフェヘルの下の表情は普段のおちゃらけた表情では無かった。

一方、美春の後ろを走るFXとCBを操る圭太と翔子は共に不思議そうな顔をして見合った。

「美春さんの家は街道沿いなのに、なんで国道を上るんだらう・・・」

「なんででしょうね・・・どこか行きたい場所があるんですかねえ」

そして翔子はゴーグルの下で嬉しそうに笑った。

「でも私は皆さんと沢山走りたいので、ガソリンが続くかぎりついていきますよ！」

ギャバババババっ・・・！！！！

その時、目の前を走るGT380がとんでもない行動に出た。

片側二車線の国道の交差点に差し掛かった所で、車体を滑らせながら反対車線に向かって突っ込むと、並走するクルマと競うようにいきなりアクセル全開でカツ飛んで行ったのだ。

「な！？」

「美春さん……!？」

2人も驚いている間に交差点を通過。2人は次の交差点まで走るところでようやくウインカーを出して、対向車が切れた所で警察がないか確認した後、美春の後を追った。

「ん……?なんかついてきた」

アップハンで見にくいサイドミラーを覗き込んで、玲花が呟いた。

由美もそれに気付いた。そして後ろから近づいてくる音にドキツとなった。

「こ、この音……!」

しかし次の瞬間には、その音は前にやってきていた。タンデムシートに座る人影がなにやら叫んでいる。

「ん!?あのサンパチ……って」

玲花が呟くと、サンパチが玲花と由美の間に位置を合わせると減速。そのまま並んだ。

「やあやあゆーちゃん こんな所で奇遇だねえ」

ニツコリ笑う美春を見て、由美が驚いていると次の瞬間、美春の表情が変わった。

「話があるんだあ、出来れば隣の子も……ね」

3台はそばにあったコンビニの駐車場に停まった。バイクから降りるなり、フラフラしながら千尋が歩いてきた。

「あう〜怖かったあ・・・」

「美春ちゃんに干尋ちゃん・・・どうしてこんな所に・・・!？」

由美は驚きを隠せず、明らかに動揺している。そんな由美に美春はニツコリ笑うとサンパチのキーを抜きながら言った。

「それはこつちのセリフだよお？ゆーちゃんこそ、会議に来ないでなんでこんな場所を？」

美春の間に由美が答えられないでいると、美春は玲花を見た。

「はじめましてえ・・・じゃないよね？この前も、あっくんの後ろに乗ってる時に会ったもんねえ」

そして自己紹介をした。

「私は真田美春。霧島旭の彼女、由美ちゃんのチームのメンバー・・・」

その口調は、普段のマヌケた雰囲気の一片の欠片も無い真面目な物だった。

一方、玲花は美春の正体を知って驚いている様子だったが、名乗られて名乗らないワケにはいかない。すっと背筋を伸ばすと口を開いた。

「横濱『月光天女』三代目総長、榛名玲花です。由美とはこの前友達になりました」

丁寧な言葉使いでそう言うと、頭を下げた。

「ふうん・・・で、ゆーちゃん？今日はどうしたのかなあ？」

凍り付いた表情の由美の表情を覗き込むように見つめる美春。

「まあ・・・なんとなく分かるんだけどねえ」

そう言うと、美春はサンパチのシートに腰を下ろして言った。

「暴走族に誘われているか・・・昔のあっくん達の良からぬ噂を聞いてちゃったんでしょう？」

そして、由美は本当に凍り付いた。前者は合ってはいないが間違いで無い。が、後者は見事ど真ん中で正解だった。

「アタイは別に由美をチームに誘ってなんかいないよ。それに、誘ったって由美にはアンタ達仲間がいるんだから、受け入れるワケな

「いじゃないか」

「だよねえ よかったあ」

急にくねくねしながらホッと一安心する美春。そんな美春のテンションが想像していたものと違って玲花が驚いているが、すぐに笑顔で

「じゃあ、後者の方だったんだあ」

さすがの玲花も恐怖した。美春の推理の当たっていることにも驚いたが、それ以上に表情が異常なのだ。確かに美春は笑顔だが、その瞳の奥にはそこ知れぬナニかが渦巻いていた。

「こないだ会った時にゆーちゃんがいたのは、私気付いてたんだあ。あつくんは気付いてなかったみたい。で、今日来なかったでしょう？だから来たんだあ」

意味深な推理でここまで来たコトを説明した後、一歩玲花に近づいた。

「あつくんの噂なんてアレでしょう？殺したとか監禁したとか拷問したとか薬中とか・・・そんなつまらないデマなんて、いろんな場所に流れてるもんねえ？」

「はあ、とため息をして美春は空を見上げた。

「でも仕方ないよねえ。実際、昔のあつくん達は結構ケンカとかばかりやってたし・・・噂が立つのは仕方が無いんだよねえ、はあ。

でも・・・」

また一歩。

「あつくん達は不用意に人を傷つけるような極悪人じゃあないよ？ゆーちゃんだつてわかるでしょう？」

「そ、それは・・・」

分かる、分かり切っている。そんなことは出会ってから今日まで十分にわかっていた。

「確かに彼らは悪かった・・・でもね、何かあつたらすぐに上の人間を出したり一般人に脅しを掛けたり・・・最悪はクスリ、恐喝、マワシ、リンチ・・・そんなことするようないひん曲がった根性じゃ

ない。良くも悪くもホンモノのツツパリだったんだよ」

普段柔らかい笑みを浮かべている瞳が、キツと由美と玲花を捉えていた。

「ほ、本当かい・・・？あ、アタイが聞いてた噂とはまるで真逆じゃないか・・・」

愕然とした表情で驚く玲花。彼女が由美に話した噂話は由美の為に少しばかりしていて、実際はまだまだ危ない続きがあったのだ。

しかし、美春から聞くかぎりその情報は誇張もいいところ、捏造や妄言の域である。自分の地元の噂話を信じるか、目の前の本人の彼女の眼を信じるか・・・考えるまでもない選択に止めを刺すように、美春の後ろから小さな影が現れた。

「嘘なんかじゃない！おにーちゃん昔、私を嫌ってるみたいに突き放したんだよ。でも本当はそーゆー世界を見せたくないからって、嘘ついてたんだよ！？それに、洋介君だってそれまで私の事を気に掛けてくれてたんだよ！？由美ちゃんだって知ってるはずだもん！」

少し前まで、兄の不器用な気遣いで長年名前ですら呼ばれたことが無かった千尋が胸を張って言った。

「ち、千尋ちゃん・・・」

千尋の話聞いて、玲花の中の旭達のイメージが音を発て崩れるふと横を見ると横で由美が静かに涙を流していた。

由美が知っているのはそれだけでは無い・・・美春との出会いの時の話だって旭から聞いていたし、洋介が千尋の面倒を見ていたのも、2人が仲直り（？）するきっかけになったのも知っている。

そんな人間が、玲花から聞いたような事をするたろうか・・・？いや、するわけが無い・・・！

由美は恥ずかしくなった。大事な仲間を、余所の変な噂を聞いてぐらついた自分の心がイヤになった。

「美春ちゃん・・・千尋ちゃん・・・ごめんなさい、私・・・」

「わかってくれたなら大丈夫だよ それより、今日のコトなんか早

く忘れてまた明後日、またいつもの元気なゆーちゃんになって来てよ」

由美の涙を指ですくいながら美春が微笑んだ。

その言葉と笑顔に、由美の涙腺という名のダムは決壊した。

「美春ちゃん・・・!!」

「およよっ!? ゆ、ゆーちゃん!？」

不意に抱きつかれバランスを崩しかけたが何とか立て直すと、美春は由美の頭を撫でた。

「なんだ・・・いい仲間じゃないか」

その様子を見ていた玲花が羨ましそうに呟いた。そして、自分の軽率な言動を反省していた。あんな中途半端な噂話、話すべきでは無かったのだと。玲花は何かを決心したように頷くと、2人に向かって歩み寄る。

「由美・・・!美春さん・・・!すまない!!アタイがあんなハンパな話をしちゃったからこんなコトに・・・!!」

「玲花・・・」

「由美・・・短かったけど、ありがとうな。アタイはアタイの道を行くよ・・・迷惑掛けた。じゃあな・・・」

それだけを言って、玲花は顔を上げた。そして、すぐに振り返ると自分の愛車・・・CB400T HAWK?に向かって歩きだした。

玲花は・・・この騒動を起こしてしまった責任を感じて自分の目の前から姿を消すつもりだ・・・

「ま、待ちなさいよ・・・!!」

美春から離れると、背を向けた玲花に走り寄ってその腕を掴んだ。

「放しなよ・・・アンタはアタイと一緒にいたらダメなんだよ。それにこんないい仲間がいるんだから・・・」

「関係無いわよ!!」

しかし由美は玲花の言葉が終わるのを待たずに叫んだ。

「その仲間の中に玲花がいたらいけないなんて事無いわよ!?!?なん
でそんな事言うの!?!?」

「アタイは『月光天女』三代目なんだよ。それに、偶然とはいえア
ンタラの仲を引つ掻き回すような事もしちゃった・・・それに『族』
のアタイが『ツーリングチーム』とツルんだら、またどこかで面倒
なことに・・・」

すると、由美は袖を放すとつかつかと玲花のHAWK?に歩み寄
ると、3段シートの背中にあるチームの看板を見つめた。

「『族』と『ツーリングチーム』が友達じゃいけないの!?!?関係無
いわよ!!玲花はチームは違っても友達なの!」

出会って数日しか経っていないにも関わらず、由美がなぜここま
で自分を引き止めようとするのか。玲花にはわからなかった。いや、
本人にもわかっていないのかも知れない。しかし玲花も本心では『
旧車物語』のメンバーとも走ってみたいと思うし、何より由美と絶
交などしたく無いし、由美も同じ気持ちだった。

しかし、2人とも言葉が続かない。この想いをどう伝えるか・・・
考えた由美は先ほどの玲花の言葉を思い出した。そしてビシッ!と
玲花を指さすと、つい叫んでしまった。

「私が玲花みたいに働いたら、高級料理店で容赦無く奢らせるんで
しよう・・・!?!?」

「・・・はいっ?」

いきなり叫んだ由美の言葉に、玲花はポカンとした。美春も千尋
もなんの話かと思いい首を捻っていた。

斯く言う由美も、今になって恥ずかしくなり真っ赤になった。プ
ルプル震えながら、しかしその指と視線は真っ直ぐ玲花を指してい
た。

そんな由美を見て、玲花はしばらく口を開けてポカンとしていた
が、すぐに下を向いて笑いだした。

「くくつ．．．！ぷっははははは．．．！！」

「な、何よ！？何が面白いのよ！！」

耳たぶまで真っ赤になつて叫ぶ由美。確かに本人もさっきの言葉はどうかと思つたが、そこまで笑われるのも心外だつた。

玲花はひとしきり笑つと、由美の手を取つた。

「はははははっ．．．！悪い悪い．．．！」

そして呼吸を落ち着かせると、

「そうだつたね、アンタが働いたらアタイに高級料理．．．約束だつたね」

そして美春達に向き直つた。

「美春さん、千尋ちゃんも。今日はアタイが由美に変な話をして、由美に不安を与えてしまつて悪かつた．．．反省してます」

頭を下げると、すぐに口を開いた。

「今回の一件、許して貰えるのなら、霧島さんや羽黒さんに土下座でもなんでもします。だからお願いします！由美とは、これから先友達でいてもいいですか．．．！？」

そして、土下座した。玲花は今回の騒動の原因になつたコトに対する自分の責任に対してかなりの罪悪感があつた。

美春が屈んで玲花の肩を叩いた。殴られるか．．．そう思つた時だつた。

「レイにゃん、顔を上げてよ」

「．．．．．えっ？」

上から降つてきたマヌケな声とマヌケなあだ名が、自分に向けられたモノだと理解するまで数秒を要した。顔をあげると、ニンマリとした笑みを浮かべる美春がいた。

「友達でいることに、誰かの許可なんかいらないよお　レイにゃんとゆーちゃんは友達！それでいいんだよお」

「へ．．．？あ、あれ．．．？」

正直、小言のひとつやふたつ。むしろ怒鳴られたりされるものだと思つていた玲花に、予想外な事態が発生していた。

ニコニコ笑う美春の横に、千尋が並んだ。

「それに、私だって玲花ちゃんとは友達になりたいなあ。多分、『旧車物語』のみんなも玲花ちゃんに会ったらみーんな友達になりた
いって言うと思うー!」

千尋は幼い顔でニコッと笑った。ポカンとしてっていると、駐車場入
り口から2台のバイクが入ってきた。2台は美春のGT380の隣
に停まると、疲れたような顔で降りてきた。

「美春さん・・・やっと見つけましたよ・・・はあ」

圭太がため息混じりにつぶやく。

「路地裏とかまで探したんですよお?・・・ってあれ、由美?なん
でこんな・・・」

由美の存在に気付いて、圭太が近寄る。翔子もなにがなんだかわ
からないままキョロキョロしていると、駐車場の隅に一際目立つバ
イクを見つけた。

「あれはホーク?の角タンクじゃないですかあ!しかも凄い改造!
!わあ・・・!」

疲れた表情から一変、キラキラと瞳を輝かせながら、ホンダマニ
アの翔子が由美とホーク?を交互に見つめる。

「ねえ由美、あの人は?」

圭太は地面にうずくまる人影に気付いてそっと由美に耳打ちする。

「彼女は榛名玲花・・・私の友達よ。それより、圭太、翔子ちゃん」

由美は立ち上がると、圭太と翔子に向き直った。

玲花があそこまで言ったのだ、自分も2人に謝らねば・・・!

「わ、私ね・・・実は言わなきゃいけないことがあるの・・・!!」

「どうかしたんですか?」

翔子が首を傾げる。圭太も同じように聞いていると、由美は続け
た。

「じ、実は・・・わ、私・・・」

「あー！お腹空いたあ・・・！！！」

「お腹が・・・！って・・・あれ？」

突如、話をさえぎるように呑気な叫びを上げたのは美春だった。

つられてしまった由美をポカンとしながら見つめる圭太達に笑いながら手を振ると、由美の肩に腕を回した。

「私もうお腹ペコペコだよ・・・何か食べないと死んじゃうよう・・・」

そしてワケが分からないと言うような表情をする2人に背を向けると、ニタリと笑って、

「おねーさん、実はお給料日だったんだあ　今からおねーさんがみんなに何かご馳走しよー」

「確かにお腹は空いてますけど、奢りはともかくどこか食べに行きます？」

圭太が言うと、翔子も頷いた。

「それがいいですねえ。榛名さんでしたよね？あのホーク？のお話聞かせてくださいね！？」

「あ、ああ・・・」

キラキラとした視線を向ける翔子に若干戸惑いながら、玲花が頷く。

「ち、ちよつと美春ちゃん・・・！？」

「今日あったことは、私とゆーちゃんとちーちゃんとレイにゃんの4人だけの秘密だよ？」

周りに聞かれないように、由美に耳打ちした。

「ゆーちゃんが反省してるのは、すっごくわかった。だから、これでいいんだよ」

「美春ちゃん・・・」

それだけ言うと、美春は由美から離れてみんなの輪に加わった。

玲花にも同じようなことを伝えたのか、最初こそ驚いたような表情を見せたが、玲花は首を縦に振った。

「よし！じゃあ今かられつつご飯 ファミレスでも吉 家でもな
んでも奢っちゃおうよ」

「おねーちゃんカツコいい！」
無邪気に喜ぶ千尋。彼女も美春と同じ気持ちなのかあの話は持ち
出さなかった。

「ほらほらあ、早く行こうよ みんな、私についてきてねえ！」
サンパチに跨がると、キック一発でエンジンを掛けた。そして千
尋を乗せるとギヤをローに入れて走り出した。

「あ、ちよつと・・・！」
「待つてくださいよ！」

圭太と翔子も急いでそれぞれの愛車に跨がると、エンジンを掛け
た。

「由美！早くしないと置いていかれちゃうよ!？」

「榛名さんも、早く行きましよう?」

2人に促され、由美と玲花はハツとなって互いの愛車に飛び乗る
とスターターを押した。

キョカツ・・・!

コアアアアアアアア!!!

キュルツ・・・!

ブバアアアアアアア!!!

「凄い音だなあ」

「2台とも直管ですからねえ・・・」

圭太達はその音に圧倒されていたが、すぐに出口で皆を待つ美春
に気付いて走り出した。

カアアアアア！バリバリバリバリ・・・！！

先頭を走る美春のサンパチに続いて、圭太、翔子、由美、玲花の順番で国道を下った。由美と玲花は美春と千尋に心の中でお礼を言うのと、2台並んで楽しげに走っていた。その姿は、バイク同士が意志を持っているかのように楽しげな走りだった。

「結構仲がいいみたいだね」

「いつからの知り合いなんですかねえ・・・？」

圭太と翔子が走りながらそんな事を話している時、先頭を走るサンパチに乗る2人がひそひそと話をしていた。

「おねーちゃん・・・今思ったんだけど、お給料日って・・・」

そわそわしながらつぶやく千尋。今日は給料日では無い・・・そう言おうとした時、美春が、

「んー そーゆーことにしといてねえ」

言葉では笑っていたが、心の涙は隠せなかったようである。そんな美春を見て、千尋はため息混じりに笑った。

第42章 友達！（後書き）

真田美春の！オールナイトニッポン！！（裏）

この放送は『旧車物語』の読者の皆様のご協力で放送しております。美春「みんな～！！忘れたところにやってくる！真田美春のオールナイトニッポン！！元気かなあ！？美春おねーさんだよ。」

作者「元気だなあ・・・どうも、『信じる者がすぐわれるのは足元だけだ』・・・納得の作者です」

美春「ん？なにかあったのお？」

作者「いや、なんでもありません・・・くそっ、取り締まりなんて・・・」

美春「なんかどんよりしているけど作者君、今日は誰の曲を紹介してくれるのかな？」

作者「今日は翔子ちゃんイメージソング・・・もとい書いてる時に聴いていた音楽です」

タイトル YOU

唄 癒月

美春「悟史くうん！！私だああああ！うわあああああ！！」

作者「これを聴いているときに、なんかぴーんと来たんですよねえ・・・」

美春「いい曲だよねえ・・・詩の内容とメロディが本当に上手く絡んで・・・」

作者「ご存じ無い方は、YOUTUBEなどで検索してみてください。アニメ、ひぐらしがなく頃にの挿入歌です」

美春「それではみなさん！また逢う日まで！！」

作者「あ・・・ちなみに美春君」

美春「ん〜?」

作者「今年の年初めの番組でのことを覚えているかい?」

美春「・・・なんのことかなあ???」

作者「トボケるか・・・まあいい、見た方が早い」

だん!!

作者「その時の放送で設置した目安箱です」

美春「・・・」

作者「すっかり忘れていたんだけど、この前投書があるか確認した結果、1枚の投書もありませんでした。正直いろいろ愕然としました」

美春「・・・」

作者「つまり・・・この番組は裏番組となります」

美春「いや!!絶対だめだよ!!!」

作者「ちなみにタイトルも今日から変わっています」

美春「あ!?!いつの間にか(裏)って書いてある!!」

作者「そんなわけで、今度からこの番組は裏番組としてローカル一直線。そのうちタイトルもオールナイトニッポンからオールナイト沖ノ鳥島くらいの規模に・・・あの、美春さん、どちらからお電話を・・・?」

美春「こうなったらあつくんに連絡してやるんだから・・・ふふふ、作者君なんて壊れちゃえばいいんだよ」

作者「・・・もうイヤ・・・」

というわけで、ゴールデンウィークはどのように過ごされましたか? 自分は本業の音楽が忙しくも充実した連休でした。そのおかげで更

新が遅れてしまいました……汗
このような未熟な小説、『旧車物語』ですが、精進していきますの
でこれからも宜しくお願いします……!!

3 気筒

第43章 BLACKBOX 恐怖の始まり (前書き)

大変遅れてしまいました!!

今回は翔子メイン(!?)の3本立てです!!

第43章 BLACK BOX 恐怖の始まり

結局、玲花はみんなと仲良くなり由美もいつもの調子に戻り、そして美春の財布がすつからかんになつた昨夜から一夜明けて、土曜の正午に圭太はある物の前で腕を組んで立ちすくんでいた。

「うーん……」

誕生日に洋介が置いていった縦長の段ボール。蓋には特に何の表記も無く、今はその口を大きく開けている。中にはヘビのようなパイプが4本、頭を覗かせていた。

「マフラー……だよなあ」

取り出してみると意外と軽い重量。傷が付かないように慎重に地面に置くとその全貌が姿を現した。

根元でカクつと折れ曲がり、その先で集合している機械曲げの集合管。

「説明書は……無いな」

ボルトなども特に無く、変な紙が4枚と、ワッシャーが数枚、そして箱に同封されていた手紙があるだけで他には特に何も無かった。

「どうしようかな……」

「何やってるのよ？」

不意に後ろから声を掛けられて振り向くと、いつの間にか自分の横でしゃがみながらマフラーを見ている由美がいた。

「何やってるの……？」

呆れながらたずねると、

「ええ、翔子ちゃんが美春ちゃん家にいつもお邪魔してるからって今日1日だけ真田屋でバイトしてるって美春ちゃんから連絡があったのよ。それで圭太も誘おうと思ったんだけど……」

マフラーの出口を触りながら圭太を見上げた。

「……行く？それともこれ付ける？」

「えっ！？圭太さんのFX、マフラー換えちゃうんですかあ！？」

昼時の店内で、真田屋のアルバイト用の制服に袖を通した翔子が3番テーブルに水を運びながら叫んだ。

「そんなに驚くことかな・・・？」

「そうですね、これでノーマル仲間は私と紗耶香さんの2人だけになってしまいました・・・」

「まあまあしいーちゃん、いいじゃん けーちゃんはけーちゃん、しいーちゃんはしいーちゃん」

残念そうにつぶやく翔子に8番テーブルの餃子を渡しながら美春が笑った。

「そうですね、確かに圭太さんのFXがどうなるのかは楽しみです
し」

なんとか納得したのか、翔子が言うとお番テーブルに走っていった。

「でも圭太、アレはいつ頃付ける予定なのよ？」

ラーメンを啜りながら由美がたずねる。

「いつでもいいんだけど・・・付け方がわからないからなあ」

そう言っつて麺を啜る。固いちぢれ麺に醤油スープがマッチしている。

「それならばぐつちに聞いてみたらあ？はぐつちがくれたんだし」

「それなんですけど・・・こんな物が一緒に・・・」

箱に同封されていた紙を取り出すと、美春に見せた。

「『いそがしいから、自分でつける。わからなかったらしらべる。せつめい書？なにそれ食えるの？』・・・なあにこれ？」

やけに漢字の少ない手紙を朗読して、美春がたずねた。

「多分・・・自力でやれってことだと思えます」

「まんまじゃない・・・」

由美は呆れながら言つと、美春が「へーえ」とか言いながら手紙を返した。

「きつとあれですよ、いつも洋介さんと旭さんだけでみんなのバイクの面倒を見てるから、たまには自分の力でやってみるってことじや・・・」

翔子が手を打ちながら言つと、由美が

「いや、多分早く自分のバイクを完成させたいだけじゃないかしら」

「そんなことつ・・・！・・・あり得ますね・・・」

「でしょっ？」

「はぐつちのヨンフォアもしばらく動いてないからねえ」

しばらくそんな感じで適当に話して、由美と圭太は時間を潰した。

「・・・つおっしやあああああつ！！！！」
「うるせえぞバカ」

その頃、羽黒自動車の裏倉庫で洋介の雄叫びと旭のツッコミが響き渡った。

「や、やっと出来たぜ……！クリアランス取りに苦労した甲斐があったぜ……完璧だぜ……！」

感無量で立ち尽くす洋介の目の前には、深紅に彩られた愛車CB400Fourが鎮座していた。トマゼリのセパレートハンドルにグリップエンドミラー、ヨシムラの498ccボアアップキットにウエダのスイングアーム……

「理想だぜ……！理想の姿だぜこれが……！理想郷だぜ……！」

「意味わかんねーよ。んなことより早く走り行くべーよ」

GT380に跨がり、走りたくてウズウズしているような旭が言う。洋介は「まあ待て」と偉そうに言った。

「とりあえず慣らし運転しないと。レブリミット4000〜4500回転までで最低1000キロから2000キロは走らないと」

「うわあ、ダリいな……」

「んなわけで、とりあえず軽く流そうぜ」

「んだなあ」

洋介はバックステップを折り畳むとキックアームを出した。ヨンフォアにはセルが付いているが、排気量アップで上がった圧縮に対する耐久性が純正レベルでは不安があるので、キックでの始動だ。

カシユ……！！

グオオアアアアアアアア……！！！！

「イカツい音だなオイ」

なんやかんやで、旭も興奮気味にヨンフォアを見つめる。洋介はしばらくプルプル震えた後、

「さ……最高だあああ……！！！！」

雄叫びを上げた。

「けーちゃん！ゆーちゃん！仕事終わったあああ」

「お待たせしました」

それからしばらく経った昼下がりに、真田屋の駐車場で待っていた圭太と由美の前に、相変わらず騒がしい美春と、疲れた表情の翔子が現れた。

「翔子ちゃん、初めてのバイトはどうだった？」

由美が翔子にたずねると、翔子は背伸びをしながら

「大変でしたけど楽しいですね！高校が終わって進学したら、私もアルバイト始めます！」

「そうそう進学ね！私は……あ……」

言葉に詰まり、さすがに自分でもどうかと思って落ち込む由美。

「そういえば翔子ちゃん、専門学校に行きたいんだっけ？」

以前話していた事を思い出して圭太がたずねた。

「そうなんですけどね……まだわかりません」

「やっぱり家族の……？」

翔子はコクリと頷いた。

「最近ほとんど口もききませんし……家にいても家事などは全て押しつけられますし大変なんですよ。でも……」

顔を上げると、目を輝かせた。

「もう前までの私とは違うんです！そんなことでいじいじしません！」

「その意気だよしーちゃん！！良く言った！！」

美春が肩をバンバン叩いた。よろけながらも笑みを溢す翔子に、由美が何かに気付いたように言った。

「そういえば翔子ちゃん、最近前みたいに緊張したり怯えみたいな表情が出ないわね」

「うん、言われてみれば・・・」

「確かに・・・」

圭太や美春も思わず頷いた。以前までは常に緊張感MAXな感じで接していたが、最近ではごく普通の雰囲気話している。

「前までは『あ、あの・・・その、えつとお・・・ぐすつ・・・』って感じですぐに泣いちゃう可愛い翔子ちゃんも大人になったのねえ・・・」

由美が大げさに翔子のモノマネ（似てない）をしながら笑うと翔子が顔を真っ赤にした。

「そ・・・そんなのじゃないですよ・・・！ひどいですよ由美さん！」

「あはははは！」

笑ってごまかすと、美春がいつものニコニコ顔で今日これからの行動について提案してきた。由美は少し考えてから

「いつも走ってばかりだし、今日はどこか遊びに行きましょう？」

「うーん いいねえ」

「あ・・・それならこれ行かない？」

言いながら、圭太が財布の中からある紙を取り出した。

「・・・『サガミレーン団体割引券！』・・・ボーリング？」

ボーリングピンが描かれたシンプルな券を見て由美がたずねると圭太は頷いた。

「茶子姉えにしては珍しく、期限が切れてないのをどこからかもらってきたんだ。団体は4人から割引が効くから安いし、たまにはいいんじゃないかな」

「ナイスよ茶子姉え！みんなどうかしら！？」

ガッツポーズをしながら2人に振り向くと、美春も翔子もうれしそうに笑った。

「いいよお おねーさん、運動系の遊びは好きなのだ」

「ボーリングはしたことが無いので、楽しみです！」

「それじゃあ決定だね。市の真ん中にあるから、ここからだといくで20分くらいかな」

圭太が腕時計を確認しながらつぶやくと、隣で早くもジェットヘルをかぶった由美がゼファーに跨がり、エンジンを掛けた。

キュル・・・！！

コアアアア・・・！！

「そうと決れば！早く行きましょう！？」

ちょうどその頃、高尾のとある街道に1台のクルマが停まっていた。

山に囲まれた、それこそ最寄りのコンビニまで徒歩1時間はかかるような田舎のこの街道に、袴スタイルの張り出しフルエアロに3DのGTウイング。程よく下げられた車高にハイグリップのスポーツタイヤ、軽量ホイールで武装した走り屋スタイルの白いS15シルビアの車内で、男がつぶやいた。

「・・・最近無断外泊が多いと思ったら・・・ッ・・・」

男の視線は、ダッシュボード中央に鎮座したカーナビを見つめていた。自分は動いていないのに、カーナビの画面だけが違う街の中を進んでいた。

男は不敵に笑うとハンドルポスト脇にあるキーを捻った。

キュルル・・・
ボガアアアアアア！！！！！！

単車の比では無い爆音が、触媒ストレートの直管砲弾マフラーから響き渡る。

ガコツ・・・！！

ギヤをローに当てる。そして・・・
「愚妹が調子に乗りやがって・・・」

ボガアアアアアア！！！！！！・・・プシヤ、プシヤアアアアアア
！！！！

ねっとりとした声で言うと、ブローバルブ音を響かせて加速していった。

ナビが表示した場所は相模だった・・・

「うわぁ・・・！！」

翔子は感嘆の声を上げた。

足元は自分の顔が映りそうなほどピカピカな板張りの床。ゴロゴロと玉が転がる音がしたかと思えば、次の瞬間にはピンを薙ぎ倒す快音が聞こえてくる。そして吸い込まれた玉がしばらくすると、下を通って戻ってくる。そして、上を見れば液晶に映るスコア表にカタカナで書かれた自分の名前。辺りは人、人、人・・・

「ゆゆゆ、由美さん！！ボーリング場ですよ!？」

辺りをキョロキョロ見渡しながら、興奮気味に由美の袖を掴みながら言った。ポケットから小さなデジカメを取り出して写真に景色を納めていく。カメラ関係のモノなら何でも持っているのだろうか・・・

「何言ってるのよ翔子ちゃん。ボーリングをしに来たのよ？ボーリング場に決まってるじゃない」

受付で借りたボーリングシューズに履き換えながら何を言ってるんだと言わんばかりの顔で翔子を見た。

「そうなんですけど・・・初めてなのでつい・・・」

「へえ、本当に初めてなんだ」

圭太がたずねると翔子は恥ずかしそうに頷いた。

「じゃあおねーさんがボーリングのイロハを教えてあげやう　まずは玉選びからだよ」

美春に腕を引かれながら、翔子は後ろに走っていった。

「僕も久しぶりだから、感が戻ればいいんだけど」

「ふふん、私はボーリング得意なのよ？」

自信満々に言つと、由美は何かいたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「ねえ圭太？この勝負、1ゲーム毎にビリの人が1番の人に何か1つ命令出来るってことにしないかしら？」

「え・・・でも翔子ちゃんは今日初めてだよ」

「もちろん翔子ちゃんは抜きよ。じゃあ決定ね！美春ちゃんに伝えてくるわね!！」

言つが早く、由美も後ろのボーリング球が置いてあるラックの前

で球を選ぶ美春達の下に走っていった。

「これは・・・頑張らないとなあ・・・」

圭太はため息をつくと自分も球を選びに席を立った。

「ば・・・バカな・・・!?!?」

1ゲーム目を終えて、由美は思わずつぶやいた。

スコア表には自分の名前、『ユミ』が表示されている。が、表示された場所が問題なのだ。由美は愕然としながら叫んだ。

「な・・・なんなのよコレえ!!」

『ユミ』の表示の横に並ぶ数字は4・・・つまり最下位。3位が圭太。そして・・・

「んー、しーちゃんには見所満載だねえ 頑張ればもっと上手くなるよお」

「ありがとうございます！ボーリングって楽しいですねえ」

2位には圭太から僅差で逃げ切り、初ボーリング体験者の翔子がスコア150台を叩きだした。ちなみに1位の美春は開始時に「1回目だからウォーミングアップだよお」とか言いながら190近いスコアを叩きだし、ブツチギリの優勝だった。

翔子は美春に投げ方やコツを教えてもらうと、即座に対応。うなぎ登りに調子が良くなって行き、美春はそれはもうプロボーラー顔負けのフォームでストライクを連発した。

一方圭太は序盤こそガーターを出したりしていたが、最終的に140台までスコアを伸ばし、感を取り戻した。そして由美はガーター連発。ストライクは無くスペアが1回、スコアにはGの文字が無

数で最終スコアは100台という体たらく・・・

「翔子ちゃん！ボーリング初めてって嘘でしょう!？」

「本当ですよ？ボーリング場自体初めてで・・・楽しいですねえ!」

カチン・・・

由美の中で何かがキレた。

「ふふふ・・・いいわよ？ビキナーズラックなんてよくあるコトよ・・・」

ズビシっ!!と翔子を指さすと、半ばやけっぱちな表情で言い放った。

「次からは!!翔子ちゃんもっ!!最下位罰ゲームに参加してもらおうわよ!？」

「ち、ちよつと由美・・・!」

圭太が止めようと由美の前に出た。これはビキナーズラックなどでは無い・・・才能が為せる物だと見抜いた圭太は由美を説得しようとした。が、

「いいですよ？頑張ります!」

いつのまにか得意顔でニコニコしている翔子が勝負を承諾していた。

「それじゃあ、第2ゲームスタートよ!!」

数分後

「負けたあ・・・ええい!もう一度よ・・・!うりゃあああ!」

数分後・・・

「また負けたあ・・・!?なんのお・・・まだまだよ!!」

さらに数分後・・・

「つ、次こそ・・・!!」

「・・・・・・・・」

全5ゲームの戦いが全て終了した。いや、戦いと言うよりリンチに近い。

美春は怒涛のスコアを叩きだし、240台にまで上り詰め全戦トツプ。翔子もグングン上手くなりそのスコアはアベレージ180台にまで跳ね上がり、後半は体力が無くなりバテ気味で下がったが最高スコアは184にまでなった。圭太も善戦。第4、第5ゲームでは体力の差もあって、疲れが見えた翔子を抜き2位にもなった。そして・・・

「あのお・・・由美、さん・・・?」

「ふふふ・・・いいのよ?笑いたかったら笑ったって・・・」

由美はゲームを重ねることにやけくそになり、最終的に体力が無くなり自然とガーターが増え、スペアが無くなり、最終ゲームではなんとスコア60台というブツチギリのドンケツの奇跡的低記録を達成。見事最下位に輝いた。

「ボーリングなんて・・・ボーリングなんてもうやってあげないんだからっ!!」

「まあまあゆーちゃん、今度は私が教えて上げるからあ」

「もういいわよ、ボーリングなんて嫌いよっ!」

すっかりヘソを曲げてしまった由美を見て、翔子がこそこそと圭太に耳打ちする。

「あの、私のせいで由美さんが・・・その、罰ゲームって・・・」
「まあ、気にしなくていいと思うよ？自分で撒いた種だし」

ちなみに全戦1位の美春が全戦ビリの由美に命令することはすでに決定事項だった。由美を慰めつつも、美春はニヤニヤが止まらない。

「とうわけでゆうちゃん、罰ゲームは私が5回出すからね。それはもうあーんなことやこーんなことや・・・」

「あ、私用事を思い出したわ・・・」

「あ、ゆうちゃん待てえ」

スタスタと逃げ出す由美を美春が追い掛けていった。広い場内を早歩きで逃げ回る由美と早歩き＋笑顔全開で追い掛け回す美春を見て、2人は笑った。

「じゃあ靴を返して、そろそろ出ようか？」

由美と美春の分シューズを持って立ち上がると、圭太がカウンタ―に歩きだした。

「あ、私も持ちますよ」

「いいよ、翔子ちゃんは先にバイク置き場に戻っててよ。これ返したら、あの2人を連れてこなきゃいけないし。長いこと停めてたからイタズラされてたら嫌だしね」

「それもそうですね。それじゃあ私は先にバイク置き場に戻っていきますね」

そう言っただけで走り去る翔子の背中を見送った圭太は、靴を返すと場内を走り回る2人を捕まえる手間にため息をついた。

「ふう・・・腕がパンパンですよ・・・」

右腕を揉みながら駐車場にたどり着き1人つぶやいた。バイク置き場にはちゃんと4台のバイクが停まっていた。翔子は愛車CB350Fourに歩み寄るとハンドルポスト左下にあるキーシリンダーに鍵を挿してハンドルロックを解除すると笑みがこぼれる。

同年代の色の濃いバイク達に埋もれてしまい名車にもなりきれず、少し色褪せた外装や錆のあるスポーク。止まらないオイル滲み……。しかし翔子はこのCB350Fourを心底愛していた。

このバイクが無かったら、自分はどんな生活を送っていたらうか……。考えるだけで嫌になる。

「でも、そろそろ手を入れてあげないと……」

ヘッドのオイル滲みとにらめっこしながらつぶやく。頭の中で「社外品は使いたくないなあ」とか「でもガスケット1枚出ているかどうか……」等々、今後のメンテナンスに頭を悩ませていると、後ろから良く言えば賑やか、悪く言えばやかましい声が聞こえてきた。

「ほらほらゆるーちゃん？おねーさんの言うことは聞かなきゃダメだよぉ？」

「嫌っ！絶対に嫌よ！？なんでそんな恥ずかしいこと……!!！」

「2人とも。もうちよつと声を小さくしてよ？お待たせ翔子ちゃん」

騒がしい2人をなだめたがら歩いてきた圭太が声を掛けると、翔子は何があったのかをたずねた。

「由美さんの罰ゲームですか？」

「うん、そうなんだけど……」

ちらつと圭太が後ろを見ると、由美にベタつきまくる美春がなにかたわけていた。

「ほらほら、まず最初は萌え萌えきゅんってやってよぉ」

「何言ってるのよ出来るわけ無いじゃないバカぁ……!!！」

「バカって言われたぁ……。でもゆるーちゃん可愛いから許す」

「あーっもう!!翔子ちゃんからもなにか言ってちょうだい!!？」そ

んなことしないって!!」

ベタベタしてくる美春を押し退けながら背後の翔子に助けを求める由美。しかし・・・

「あ、私も見たいです！由美さんの萌え萌えきゅん！」

「コラあ！何言ってるのよ!？」

裏切られた由美が必死に叫ぶと、翔子は翔子らしからぬニヤニヤした笑みを浮かべた。

「負けたら罰ゲーム・・・二言は無いですよね？」

最後に思い切りいい笑顔で笑う翔子。

「さあ・・・！」

「由美さん・・・！」

ずいっと近寄ってくる美春と翔子。どうやら拒否権はなさそうな雰囲気能耐え切れなくなつたか、由美が叫んだ。

「ぐぬぬ・・・!!あーもう!!わかたわよやればいいんでしよう知らないわもう・・・!!!!!!!!」

やけっぱちになった由美の叫びだけが、駐車場に響いた。

街を走る4台のバイク。天気も良い夕方の道を走る前の2台は上機嫌である。

「いやあイイモノが見れたよう・・・」

「そうですねえ・・・」

ほんのり笑顔でどこかツヤツヤした肌を擦りながら呟く美春と翔子。一方その後ろを走る由美と言えば、恥ずかしそうな悔しそうなやけくそな・・・どちらつかずな表情でアクセルを煽りまくって

いた。

「由美つてば・・・そんなに吹かさないで、落ち着いて・・・」

「落ち着いていられるわけじゃない・・・！もう絶対対！！にやらないんだから！！」

爆音にも負けない声で叫ぶと、前を走る美春がニヤリと笑いながら振り向いた。

「あ、ゆうちゃん。まだ罰ゲームが4つ残ってるんだよお」

「うるさいうるさいうるさい・・・！！もう絶対絶対絶対！！対にやらないわよ！！」

由美が怒鳴る。少しからかい過ぎたかなあと思い、由美をなだめた。

「じゃあかわいそうなゆうちゃんのために、みんなで喫茶店にでも行こお」

「あ、いいですねえ」

翔子や圭太が頷くと、由美は「ふんっ」とそっぽを向いた。4台は交差点を折れて街道方面に出ると、喫茶店を探し始めた。

その時、翔子はCBのフロントからの怪しい挙動をキャッチした。

「ん・・・？」

ちよつとしたコーナリングでフロントがブレた。スポークの歪みやフォークの衰えなどでは無い、もう少し高い位置の・・・

「あ、あそこに発見」

原因を探っていた翔子の耳に美春の声が響いた。見れば前方に喫茶店らしき看板が出ている。4台はウインカーを出すと駐車場に入った。

「どこ・・・？あの不安定な挙動・・・」

「どつしたの？」

バイクから降りた圭太が翔子にたずねる。フロント周りを眺める翔子は顔を上げた。

「曲がった時にフロントが変なんですよ・・・」

「えっ？どんな風に？」

「なんて言ったらいいんでしょう・・・わからないんですけど、こう、前に荷重を掛けて曲がっていったら少し腕がブレるような・・・」

感覚的な感触を身振りして答える。気のせいなのかも知れない。

駐車場に入る時や段差を越えた時には感じ取れなかった。あの交差点の時にだけ感じたような気がしたただけなのだろうか・・・

「足回りかなあ？大事な場所だから、早くあつくん達に見せに行つた方がいいかもだよ」

いつの間にか翔子の隣に並んでしゃがんでいた美春が呟いた。

「エンジンは調子悪くても普通に走れば死なないけど、足回りだけは完調にしかないと、普通に走っても曲がらないし止まらないしつてなっっちゃったら死んじゃうよお」

「そうですね・・・美春さんの言うとおり、今日は無理をしないで、洋介さんや旭さんに見てもらった方が・・・残念ですけど・・・」

ため息をついて愛車を見る。

「そういえば、今日も泊まりなの？」

「いえ、さすがに今日は帰りますよ。このまま明日までいたら美春さんにも迷惑ですから」

「迷惑・・・？ふっふっふ、しーちゃん、遠慮はいらないお？むしろこのまま永住しても・・・」

「いや、それはちよつと・・・」

美春の得体の知れない笑みに若干引き気味で答える翔子。

「今日は道中気を付けながら帰って、明日にでも洋介さん達に見てもらいます」

「それなら今日はあんまり長話しないで、早めに切り上げましょう？」

由美が提案すると、3人は頷いた。

その時、駐車場入り口から荒々しいエキゾーストを響かせるクル

マが1台入ってきた。

ボアンボアン！ボガアアア・・・！！！！

「うわぁ・・・やっぱりバイクより音が大きいなぁ」のんきな声で圭太が呟く。フロントボンネットの稲妻エンブレムが目に入り、次にリアにある車名に目が行った。

「シルビア・・・ああ、あれがシルビアなんだ」

「なによそれ？」

「いや、クルマ好きな友達がいてさ。シルビアが好きって言ったんだけど・・・」

「ふん、クルマなんてバイクの敵じゃないわよ。そうよね翔子ちゃん？・・・ん？」

由美が勢い良く振り返って見ると、翔子はCB350Fourの下に隠れるようにして震えていた。

「どーしたのしーちゃん？どこか具合悪いのお？」

「悪いのは頭だろう。翔子？」

後ろから聞こえるアイドリング音に混じって翔子の代わりに答えた声の方向に振り向くと、シルビアの男がウインドから顔を覗かせていた。

「いきなり何言ってるのよ！だいたいなんで翔子ちゃんを知ってるの！？」

翔子に対する悪質な茶々に由美が食って掛かる。見た感じ、20代前半くらいで少しやせ気味、髪形も特に特徴も無い。こんな男がなぜ翔子を知っているのか。

しかし、その答えは以外とあっさり露呈した。

「僕が・・・そこにいる翔子の正真正銘の兄だからだ・・・なぁ翔子お？」

第44章 BLACKBOX 狂気の叫び(前書き)

中編です！

第44章 BLACK BOX 狂気の叫び

「翔子ちゃんの・・・お兄さん・・・？この人が？」

圭太がシルビアの男・・・もとい翔子の兄を名乗る男を凝視する。義理兄とはいえ、全く似ていない兄は翔子とは不釣り合いないやらしい笑みを浮かべてシルビアから降りてきた。

「いやぁ・・・面倒だったよ、道が混んでいてね。予定より迎えが遅れてしまったよ」

「ち、ちよつと待ちなさいよ・・・!!」

男の言葉を遮り、由美がたずねた。

「迎えに来たって何・・・？私達がここに来るってわかっていたってこと!？」

至極当たり前な疑問。由美達は適当な喫茶店を探して走り回り、ようやくこの店に入ったばかりである。後をつけていたにしても、入ってきたタイミングが少し遅いし、何より男の口調だとあらかじめわかっていたかのような話振りだ。

「ああ、そのことかい？僕にはたやすいことさ。さらに言うなら、君たちの今日の行動だつて当ててみせようか？」

男はシルビアのルーフに肘を置いて寄りかかると、挑発するような態度で続けた。

「まず、街道沿いにある飲食店からでて、相模方面へ。そこから駅前通りにあるボーリング場に。しばらくしてから今度は街道に出る裏道から街道に出て、この店に来た・・・違う？」

「な・・・っ!？」

この男はなにか特殊な能力でも持っているのだろうか？そう疑ってしまえるほど、男の推理は当たっていた。由美と圭太が驚愕に顔を歪める。

「あなた・・・何者なの？」

今まで黙っていた美春が、冷静な態度でたずねると、男はため息

をついた。

「だから言っているだろう？そこにいる愚妹、衣笠翔子の義理兄だ。あ、名前はまだだったね。衣笠弘毅だ」

へらへら笑う男。その態度にイラつくでも無く、美春は腕を組むといつも優しい笑みを浮かべる瞳をキツと据えた。

「残念だけど・・・兄とは言えそんなストーリーカーみたいなことをするような人にしーちゃんは渡せない」

「渡せない？愚妹とは言え妹の友達つてのは妹を物のように言うんだなあ」

「そんなゴタクは聞きたくないよ？しーちゃんから話は聞いているよ？」

「そ、そうよ！あなたや義理母が家事を押し付けたり修学旅行に行かせなかったりとか、イジメたりしている話はみんな知ってるのよ！？」

美春の言葉に由美が乗っかる形で指を突き付けた。

「こんなヤツにでも仕事は与えてやっているんだ、感謝はして欲しいなあ」

「な・・・っ！？」

「アンタ・・・！！何言ってるのよ！？」

美春と由美が怒りに染まった顔で叫んだ。その時・・・

「し、翔子ちゃん・・・！？」

圭太の声が駐車場に響いた。3人が振り向くと、CBのハンドルにしがみついて、下を向いて震える翔子がいた。そして・・・

「うっ・・・おえっ！・・・」

「翔子ちゃん！！」

目を見開き、嘔吐した。圭太と美春が必死に介抱する。

「あーあ、汚いなあ」

「何言ってるのよ！？アンタのせいで翔子ちゃんは・・・！！」
翔子を見ると、まだ辛そうに下を向いている。

「私はもう前の私とは違うんです！」

先ほどの言葉が脳裏によぎる。

全然大丈夫では無かったのだ。私生活での翔子の精神やストレスはとうに限界が来ていたのだ。それを、バイクに乗ることで発散していたのだ。

だが、目の前に神出鬼没の如く元凶が現れた事と、由美や圭太達に迷惑をかけてしまった事で、それが爆発してしまったのだ。

「しいちゃん、大丈夫？立てる？」

美春がハンカチで翔子の口元を拭くと、圭太と2人で翔子の肩を組んで立ち上がる。

「す……みませ……げぼげぼっ！迷惑を……」

「僕達は大丈夫だよ。美春さん、とりあえず翔子ちゃんをどこかに……」

「そうだね……でも……」

ニヤつく男と、白いシルビアが目の中の道を塞ぐ。美春は圭太に翔子を預けると、弘毅の前に立った。

「わかるでしょう？しいちゃんはもう限界だよ。どこか安静な場所で休まないと持たない。道を空けて」

「それは困るなあ。ここまで来て手ぶらで帰るのは僕にとって良くない話だ」

男は心底つまらなそうに後ろにいる翔子に目を向けた後、思いついたようにある提案をしてきた。

「それならこうしようじゃないか。君たち4人が先にここを出る。しばらくしてから僕が後から出る。君たちが翔子を守ればそっこの勝ち。僕が追い付いたら、君たちの負け。どう？」

「ふざけないで！！」

美春がキレた。弘毅の胸ぐらを掴んで、その細い腕のどこにそんな力があるのかシルビアのドアに男を押し付けた。

「おいおい……警察でも呼ぼうか？暴行罪と妹を連れ回したで、

もしかしたら実刑かも知れない。君なら多分少年院行きさ」

「や、やめてください……！」

突然の叫びに、美春と弘毅が振り向くと、そこには由美と圭太に支えられた翔子がいた。

「美春さん……もう、大丈夫ですから……」

「しーちゃん……でも……」

「わかっただろ？早く手を放してくれないかな？」

弘毅は美春の手を払うと、汚いものにも触れたかのようにズボンで手を拭いた。

「おとなしくクルマに乗るか？それともゲームをするか？2つに1つだ」

「やります……」

「翔子ちゃん!？」

予想外の答えに、由美が叫ぶが、翔子は無理やり笑ってこう言った。

「由美さん達には迷惑を掛けません……これは私の問題ですから……」

フラフラとした足取りでCBに跨ると、スターターに指を伸ばした。

キョカツ!

ブアアアアアア!!

「大丈夫……きっと逃げ切れますから、私1人の問題に皆さんを巻き込めません……」

「そうはいかないわよ、翔子ちゃん!」

翔子の言葉を遮り、由美が声を上げた。ゼファーに跨ると、同じようにエンジンを掛ける。

「僕も、由美と同じ答えだよ。ほっておけないよ」

圭太もFXのキーシリンダーを捻り、エンジンを掛ける。すぐ隣

で、美春もGT380のエンジンに火を入れた。

「だ、ダメです……！これ以上皆さんに……！」

翔子は首を横に振るが、それには全く耳を貸さずに由美達と言った。

「さっきの様子を見せられて、黙ってられないわよ!？」

「しーちゃんが辛い思いをしているのを黙って見てられない……」

「僕達は仲間じゃん?だったら遠慮なんかいらないよ」

「み、皆さん……ぐすつ……あ、ありがとう……ご、ごめい
ま、ひつぐ……」

嗚咽混じりで涙を流しながら翔子が言う。3人がほっとしていると、横からうるさいエンジン音が響き渡る。

「ふあゝあ……友情ごっこはいいからさあ、早く出るなら出てくれないかな?」

あくびをしながら面倒くさそうに言う弘毅。その態度にイラつきを覚えるが、今は逃げるのが先……

「行こう!なるべく遠くに逃げないと……」

圭太が半クラッチで駐車場を出ると、翔子と由美が後に続く。一方美春はシルビアの運転席横で一度止まった。

「行かなくていいのかな?」

弘毅が余裕そうに呟く。美春はアクセルを少し煽ると、
「どんな仕掛けか知らないけど、負けないよ」

カアアアアアン……!!バリバリバリ……!!

それだけ言い残すと、白煙を撒き散らして飛び出していった。

「はっ……あんな骨董品共に何が出来る?」

弘毅は呟くと、ナビの電源を入れた。動いていないクルマのナビの表示は、やはり動いていた。

「大通りに入って渋滞に巻き込んでクルマを不利にしようって?なる

ほどねえ・・・」

ガコッ！

ゴオオオオオア・・・！！

不気味に笑うと、シルビアは滑るように駐車場を後にした。

「やっぱり、土曜のこの時間ならクルマ通りも多いし、バイクと違ってすり抜け出来ないシルビアを相手にするには大通りじゃないと」

先頭を走る圭太が呟く。真後ろには翔子、それを挟むように由美が走り、少し距離を空けて美春がしんがりを努める。

「問題は3つ・・・」

1つは、翔子のC B 3 5 0 F o u rの不調。

2つ目はどこに逃げ込むか・・・どこかで一度旭達に連絡が取れば問題は無いのだが、それを3つ目の問題が阻む。

「あの人・・・なんで僕達の通った道を正確に知れたんだろう・・・」

そう、まるで最初からわかっていたかのようにあの喫茶店の駐車場に現れ、自分達の来たルートを正確に当ててみせた。どんなネタが仕込んであるのか、それがわからないと迂濶に停まれない。

そんな事を考えながら走っていた時だった。差し掛かったわき道から、白い影が飛び出してきた。

「なっ!?!?」

慌ててかわす圭太の後に続いて、翔子達もかわした。

「も、もう追い付いてきたっていうの!？」

翔子の後ろを走る由美が舌打ちした。しかし驚くべきは、この居場所を特定してから裏道を迷うことなく走り、圭太達が来たタイミングを正確に合わせてきた事だ。

「しまった・・・!真後ろに張りつかれた・・・!!」

バックミラーで確認して、圭太が舌打ちする。しかし、シルビアの後ろから甲高い2サイクル音と白煙をぶちまけながら、青いサンパチが現れた。

「ゆーちゃん、けーちゃん!!ここは私に任せてよお」

「美春さん・・・!？」

「な、何をする気なの!？」

翔子と由美が叫ぶと、美春はいつもの笑顔で

「足止めするよ!早く!」

「わ、わかりました!!無理はしないでくださいね!!」

「美春さん・・・ごめんなさい・・・!!」

圭太と翔子が言うと、3台は加速。一気に後ろを引き離す。

「ここは通して上げないよお・・・!？」

!!
カアアン!カアアン!カンカアアアン!!バリバリバリバリ・・・

後ろのシルビアに白煙とオイルを撒き散らしながらサンパチのアクセルを煽る。それでいて、速度を30キロまで落としてシルビアを完全にブロックする。

「邪魔くさい・・・!面倒なことを・・・」

パアアアツ!!パツパアアアツ!!

クラクションを鳴らして前の障害物にプレッシャーを掛ける。し

かしサンパチはそんなことお構い無しに道を塞ぐ。

「一緒にケーサツに行こうよ・・・」

美春が呟く。この通りでこんな行為をすれば、警察が出てくるのも時間の問題。そうすれば、自分と一緒にこのクルマも巻き込むことが出来る。そんなことを考えながら美春はサンパチで蛇行運転を始めた。

「おまわりさん ここにぼーそーぞくがいるぞー」

おちゃらけながらサンパチを走らす。一方、こうなると焦るのはシルビアの弘毅だった。

「クソっ！わき道までブロックしやがって・・・!!」

自分もクラクションを鳴らして退くように仕向けるが、相手の狙いが狙いだけになんともならない。後ろからは他のクルマからのクラクションも聞こえ始める。

「これ以上、騒ぎを大きくするワケには・・・」

このままでは、自分はこの女とともに警察のお世話になってしまうことは容易に想像出来る。なんとかしなければ・・・その時、弘毅の脳裏に外道な考えが浮かんだ。

「そうか・・・ならこうすればいい・・・!!」

邪悪に笑うと、ハンドルポスト脇にあるウインカーレバーに手を伸ばした。

「ん？」

美春がミラーで確認すると、シルビアが左にウインカーを出していた。

「脇道に逃げるのかな？逃がさないよお？」

しっかりと一車線を塞ぎつつ、左側に寄せて走る。しかし、脇道の入り口に差し掛かると、シルビアは半分止まりながらクラクションを鳴らした。これをされると、さすがに長く道を塞げない。シルビアを避けて後ろのクルマがイラつき顔で抜けていく。

「それなら・・・!!」

美春は裏道にシルビアを招き入れる形で侵入した。しかし、先ほど以上にキツイガードで相手を焦らす。

そしてシルビアにのる弘毅はと言えば・・・

「クックツ・・・！ここなら人通りも少ない。豪快に行かせてもらっよ」

ゴォロアアアア・・・！！

ガンツ・・・！！

「なっ・・・！？」

いきなりアクセルを煽り、バンパーでリアタイヤを突かれた美春が声を上げた。さらに二度三度、男は後ろからブッシュしてくる。

「そんなにかラみたいの・・・！？」

美春がスピードを上げる。その瞬間、立場が逆転。押さえる者が追われる者になった。

「信号無し、警察無し、通行人無し・・・飛びな・・・」

弘毅が笑った瞬間、シルビアは加速。ついに美春をバンパー1つ分割ることに成功した。

「し、しまった・・・！！」

美春が舌打ちする。しかし、相手は前に行かない。美春はある答えに行き着いて、固まった。

「ひやはははははははははは・・・っ！！」

弘毅がハンドルを左に切った瞬間、183キロある鉄の塊が火花を散らして地面を滑走していた・・・

車内にしか聞こえない狂気の叫びが、宙を舞う美春にも聞こえた気がした・・・

「美春さん、大丈夫かな・・・」

圭太が呟いた、この頃になると、3人は大通りを外れた道で一旦停車していた。

「もうだいぶ引き離れたとは思うけど、あの男がそんな簡単に引き下がるとは思えないわ」

由美の言葉に圭太は頷く。あれだけ余裕な態度を取っていた人間が、こんな早く諦めるハズが無い。

「美春さん・・・圭太さんや由美さんも・・・本当にごめんなさい・・・」

「大丈夫よ翔子ちゃん！美春ちゃんだつて運転上手いのよ？あんなクルマ、きつとこのまま押さえ込んでその間に旭さん達が来てくれるわよ！」

「そうだね、とりあえず旭さん達に連絡を取らないと・・・」

ケータイを取り出すと、圭太は旭に電話を掛ける。しかしすぐに留守番電話に繋がってしまった。

「洋介さんは？」

「今掛ける・・・」

長いコールが続く。早く出てくれ・・・！しかし、電話は無情にも留守番電話センターの機械的な女性の声が代わりに喋りだしただけだった。

「ダメだ、繋がらない」

「何やってるのよ全く・・・！」

由美がイラつきながら呟いた瞬間だった。

ゴオロアアアア！！

「き、来たあ！？」

由美がすつとんきょうな声を上げる。見れば後ろから猛烈な勢いでシルビアが突っ込んできた。

「み、美春さんがいません・・・!!」

翔子は顔を青ざめた。あの白煙を撒き散らすGT380の姿が見当たらないのだ。

「上手く撒かれたみたいだね・・・急ごう・・・!」

圭太の掛け声とともに、2人も愛車を走らせた。

「いやあ走った走った・・・」

「走ったってまだ1000キロだって走ってねーべや」

先ほどまで圭太達が走っていた大通りを赤い単車が2台、横並びで巡行していた。

「ヨンフォアの下トルクの無さが一気にマシになったし、早く全開に回してみてーなあ・・・」

生まれ変わったCB400Fourを操る洋介が呟く。排気量の上だった愛車は、クルマ通りの多い大通りも楽に走ってくれる。

「あ・・・?信号赤に変わっちゃった」
隣を走るGT380に乗る旭が舌打ちする。

「面倒だし、裏道行くか」

「ああ、そのほうが賢いべ」

止まりたくない2人はウィンカーを左に出すと、裏道に入った。

「この道っていいよなあ、民家も無ければ信号も無いただの直線だしね」

洋介がのんきに言うと、旭も頷いた。

「お巡りさんてのはなぜかこのルートはノーマークだかなあ、300メートルくらいはこの直線があればスピードの取り締まりとかやりそうなもんだがなあ」

そんな話をしながら走ると、突然前方に転がるバイクを発見した。

「あーあ、こんな場所でないで転んでんだ」

洋介が呟いた。しかし、旭はなぜか嫌な予感がした。

「あのテール……！サンパチか！？」

「え？嘘だろ……？」

洋介の顔が一気に落ちついていく。まさか、そんなバカな……

しかし、それは現実となつて目の前に現れた。

「これ……み、美春のじゃねーか……」

サンパチから降りて、よく見知ったバイクを見下ろす。ハンドルがひしゃげ、ウィンカーはステーから根こそぎ持っていかれていたのは、美春の青いGT380だった。

「おい旭っ！！こつち！！」

洋介が慌てながら叫ぶ。その声を聞いて、急いで向かうと、そこには変わり果てた姿の美春が路肩の隅に横たわっていた。

「美春っ……！！」

服が破れて全身擦り傷だらけの彼女を抱き抱えると、ヘルメット越しに美春が目を開けた。

「あ……つく、ん……？」

「どうしたんだよ！？一体何が……！？」

嫌でも気持ち焦ってしまう。自分でもなんとか落ち着こうと深呼吸をすると、ポケットからケータイを取り出した。

「今救急車呼んでやっかな……！？ちつと待つてる……！！」

ダイヤルする手が焦り、3桁の数字を押すのに一回間違えて、や

り直して、ようやく繋げると、電話を切った。

「私はいいから・・・しーちゃん達を・・・」

「翔子ちゃん達がとうかしたのか・・・？」

洋介がたずねると、美春はゆっくりと事の始まりを話し始めた。

最初は驚いていた旭達だったが、それがすぐに怒りに変わるのに時間はいらなかった。

「クズ野郎が・・・！人跳ねとばして顔色変えずにんなことやってやがんかよ・・・！！」

旭が苛立ちながら歯を噛み締める。洋介も口こそ開かなかったが、その怒りの凄まじさは十分に伝わってくる。

「ぜってークシャにしてやつかんよお・・・！」

握りこぶしをバキバキ鳴らす旭の表情はまるで鬼人だった。しかし、対称的に洋介は旭の肩を叩くと、落ち着いた口調で言った。

「そのクソガキがムカつくのはわかるが、お前はとりあえず美春ちゃんの心配してやれよ？クソガキなら俺がしよっ引いてやつからさ」

「っ・・・！！」

洋介の言葉に、ようやく冷静さが戻った。今は美春のケガを治すのが優先。旭は美春の手を握ると、美春は申し訳なさそうに笑った。

「おう美春・・・そのクソガキはまだ圭太達を狙ってんだな？」

旭の問に、美春はコクリと頷いた。

「目的は翔子ちゃんつても、あの2人も心配だ。こんなことを堂々やってくんだからよお。キレてやがるぜ」

洋介が舌打ちしながら呟く。こうなれば一刻も早く手を打たねばならない。

「長良達『金剛會』動かすつかねーな、こりゃ」

「んだな・・・じゃねーとオメー1人じゃさすがに探しきれねーしな」

旭が頷く。ここは『金剛會』を動かして3人に危害が及ぶ前に見

つげださねばならない。

洋介が長良達に繋ぎを入れるために電話をしている横で、美春は自分のヘルメットを脱がせてくれた旭にたずねた。

「あつく、ん．．．さ、サンパチは．．．？」

「．．．大丈夫だ、たいしたことねーよ。すぐにバキバキに治んぜ。んなコトよか、オメーも早くケガ治せよな？」

頭を撫でながら言うと、

「よかった．．．あ．．．早くよくなって、サンパチちゃんに乗りたい．．．なあ．．．」

「辛いんなら喋んなって、ほら」

旭が言うと、美春はおとなしく目を瞑ると、眠ってしまったようだ。後は救急車が来るのを待つばかり。美春の頭を撫でながら、旭は美春のGT380を見た。

「治すって言っちゃまったケドよお．．．正直ヤバイぜ、ありゃあ．．．」

見ればフロントフォークがしゃげスポークは折れ曲がりクラッチレバーはあらぬ方向に曲がり、トドメは克蘭クケースから溢れ出るオイルが血の様に地面を伝っていた。ほぼ全損級のダメージだ。

「旭あ！、繋ぎはついたぜ！今から動くらしい」

「そうか．．．長良達にやオレも後から礼に行くわ」

「おお、そうしとけよ。あと．．．」

洋介は不敵に笑うと

「美春ちゃんのサンパチは、オヤジが引き取りに来るってよ」

全く抜かり無い洋介の言葉に、旭は安心したような呆れたような表情を見せた。

「しかし気になるのは、ソイツの動きだな。なんだって行く先々でわかってる様に現れたり出来るんだ？」

美春から聞いた話を思い出して、洋介がさも不思議そうに呟いた。こればかりは自動車整備・板金工場で働く洋介にもわからなかった。だいたい、クルマが街中でバイクより先回り出来ると言うのも

おかしな話である。

顎に手を当てて考える。旭もその不可解な動きの謎を解こうと思考を巡らせた。

まるでこちらの居場所や目的地がわかっているかのような神出鬼没な動き。ここまで来たらハツタリでは無い。ヤツには圭太達の居場所が解るのだ。

何故だ・・・？何故先回りは愚か、まるで『最初から見ていたかのように』に現われるのか・・・

「見ている・・・？・・・あ!？」

「どうしたんだよ旭!?なんかわかったのか!？」

突然叫び声を上げた旭に詰め寄る洋介。それと同時に、ようやく救急車が近づいてきたのか、サイレンが聞こえてきた。

旭は「なるほど・・・んな『カントンでメンドーなコト』だったのかよ・・・!」と落ちていた空き缶を蹴り飛ばした。

「ネタはわかったぜ・・・?『BLACK BOX』の正体がよお・・・!!」

救急車の赤灯に照らされた旭の表情は・・・目の前の怒りと相手のペテンを暴いた喜びが交ざった、まさに鬼の形相だった・・・

第44章 BLACKBOX 狂気の叫び（後書き）

今回は前、中編を一気に上げました！！
お待たせしてしまい申し訳ありません汗
後編も上げようと思ったのですが、まだまだ納得のいく出来になっ
ていないのもうしばらくお待ちください汗
それでは！！

3 気筒

第45章 BLACK BOX 選択

相模の外れの道を、1台のクルマが走っていた。路地裏に逃げた3匹の獲物より先回りするために、2リッター直4ターボのエンジンが咆哮を上げる。

しかし、荒々しいエンジン音に反して、ドライバーの男はまるで過呼吸にでも陥ったかのような不安定な呼吸で、冷たい汗をびっしりかいていた。

「……………クソっ!!」

悪態をついて、ナビ画面を見る。このまま行けば、奴らより先に頭を取れる。次でケリをつけねば男の精神が保たなかった。

「あ、あああ……………っ!あの女……………し、死んでないだろうなあ……………!!」

本当はただ幅寄せをして、相手をビビらせるだけのつもりであった。相手はまるで自分の義妹のように怯えた瞳でスゴスゴ引き下がる……………彼のシュミレーションではそうなるはずであった。

「はあ……………はあ……………はあ……………!」

しかし、実際に起きたことは、行き過ぎた自分は相手をプッシュ。火花を散らして地面を滑るバイクがサイドミラーに映った。そして……………

「なんなんだ……………あの瞳はあああつ……………!」

投げ出されたライダーの表情を思い出して、吐き気を覚えた。最後の最後まで、あの女はこちらを軽蔑と哀れみの交じった瞳で自分を見つめていた。

たった一瞬の出来事……………しかし、無限に続くように思えた瞬間、彼女は景色と共に後ろに流れていった。

バックミラーには、地面を転がり路肩の草むらに叩きつけられた姿だけが映った。

「だ、大丈夫だ・・・だ、誰も、誰にも見られていない・・・!!」
男はセコからサードにシフトアップすると、当初の目的も思い出せぬまま獲物を追った。

シルビアのブローバルブ音だけが、街中に響いた。

一方、街の中心地から少し離れた路地裏を、深紅に彩られたCB400Fourが疾走していた。洋介は旭から聞いた手品の仕掛を思い出していた。

「GPS・・・？」

救急車のサイレンが鳴り響く緊迫した状況で、洋介がおうむ返しにたずねた。

救急隊に運ばれ、容態を見てもらっている美春の痛々しい姿を横目に、旭は確信を持って頷いた。

「翔子ちゃんのCB350Fourをイジった時があつたべ？あんなときにサイドカバー脇に、GPSってラベルのある基盤丸出しのちつきくて黒い箱を見つけたんだ」

「つまり、ヤツはそれで翔子ちゃんの行く先を？」

「ああ、多分カーナビなんかを分解して中からGPSだけ取り出してCB350Fourに忍ばせたんだろーよ・・・」

その時、救急隊の1人が旭に搬送先の病院が決まったと報告をしに来た。

旭は愛機GT380に向かって歩きだすと、背を向けたまま立ち止まり言った。

「もしそうだとしたら・・・かなりの技術を持ってんのによ、勿体ねーヤツだ・・・」

救急車が走り出すと旭も続いた。サイレンと爆音が絡み合いながら元来た道を進んでいった。洋介はそれを見送ると、自分も愛車に跨がり走り出したのだった。

「しっかし・・・相手が翔子ちゃんの動きが読めちまうっつーのが手痛いよなあ」

こんな状況でも、組み上がったばかりのエンジンを気にしてるためか回転を押さえながら走る。洋介は頭の中である1つの仮定を立てていた。

「まずだ・・・相手が最後まで人間捨ててなきゃ、今ごろ不安と焦りにパニック状態になってるだろうこと・・・それなら逆にこっちから追い詰めりゃ・・・」

そこで、洋介は愛機を停めた。ケータイでどこかに連絡を取ると、そのままニヤリと笑った。

「生け捕り作戦、スタートだ！」

「なんなのよもお!？」

国道に向かつて突き進む中、由美が叫んだ。後ろからは少し距離を置いて付いていく白いS15・・・

「ちよつと圭太!? 早くなんとかしなさいよ!」

「そんなこと言ったって・・・!!」

真後ろから獲物を捕らえんネコのごとく追い掛けてくるシルビアに、圭太は舌打ちした。

今にして思えば、このゲームのルール自体が向こうに有利なのだ。逃げ切れれば勝ち、捕まれば負け・・・時間制限の無い中で、有利なのは言うまでもなく追う側なのだ。さらに極めつけは、自分達の前をことごとく奪い取っていく不思議な現象。何もかもが始めから不利なのだ。

ブアアアアアつ・・・!! ガキヤガキヤ・・・!!

「翔子ちゃん!？」

後ろの異音に振り返ると翔子が焦りながら左足を動かしていた。

どうやらただのシフトミスらしい。ギヤをガチャガチャ言わせた後、すぐにサードに叩き上げた。

「はあ、はあ、はあ・・・!」

翔子の表情からはすでに余裕が消えている。仲間を巻き込んでしまったことや追い込まれ続けたことによるプレッシャー、愛車の原因不明のガタつきに極めつけは美春の安否の不明。全てが重圧となつて翔子に重くのしかかる。

「翔子ちゃん、大丈夫・・・!？」

後ろの信号が赤になり、シルビアが停車したのを見て、スピード

ダウンした由美が翔子にたずねる。しかし翔子は荒い呼吸をするのみで返事は返ってこなかった。

「圭太っ……!!」

由美に呼ばれて振り返ると、翔子がすでに限界なのは目に見えていた。由美にも疲れが見えているし、自分も十分なプレッシャーが掛かる。

「このまま走らせたなら……翔子ちゃん絶対に危ないわよ!？」

言われなくてもわかる。ただの直線ですら安定しなくなった二ーグリップ。曲がるたびに受けるおかしな挙動。

全てが限界だった。

今決断を下せるのは自分だけ……これ以上危険な行為を続ける体力も皆残っていない……圭太はある決断を口にした。

「みんな……もう止まろう……」

「け、圭太さん……?」

自分たちの愛車の音にかき消されないように速度を落とした圭太達に、翔子もそれに合わせて減速。ついに路肩に停車した。

「圭太さん……由美さん……」

「翔子ちゃん、このままじゃ翔子ちゃんの体力も心も持たない……だから、翔子ちゃんのお兄さんが追い付いてきたら、また少し話し合いを試してみようと思うんだ」

圭太が諭すように言った。

もちろん、翔子達が追い付かれたからと言ってそう簡単に翔子を弘毅に引き渡そうなどとは考えていない。

なんとかして翔子を1度彼ら家族から離れた場所で休ませなければ、彼女は体力どころか精神すら持たない。そのための交渉をしようというのだ。

「でも圭太……あの男がそんな話を聞くと思うの?」

由美がたずねると、圭太は首を横にした。そう、あの男を引き離

すということが絶対条件であり、何より難しい話なのだ。

そもそも、あの男が何故翔子をそこまで執拗に追い掛けるのかもわからない。嫌っているのなら放っておけば良いし、家族だからと言ってもそこまでするのは却って危険・・・なのにまるでママシのようにしつこい理由が見当たらなかった。

「け、圭太さん・・・由美さん・・・め、迷惑を・・・うつ、ぐっ・・・ゴメンなさ、い・・・っ・・・!!」

「ほらほら泣かないの翔子ちゃん！迷惑なんかじゃないわ！絶対にあのバカ兄から守りぬいてあげるわよ！」

泣きながら謝る翔子をゼファーから降りて励ます由美。抱き締めながら背中をポンポンと叩いて落ち着かせる。

「由美・・・僕が話を反らしたりしながらなるべく時間を稼ぐ。だから、由美は翔子ちゃんと一緒に少し離れた場所から旭さんか洋介さんにバレないように連絡を・・・」

圭太が言うと、由美は無言で頷いた。もうこれしか手が無い。もしあの2人に連絡が付かなかったら・・・そんな考えが頭をよぎった時、近くから爆音が聞こえてきた。

ボガアアアアア・・・プシャ、プシャアアアア・・・!!

「き、来たわよ・・・!!」

特徴的なブローバルブ音に由美が思わず固唾を飲み込んだ。が、すぐに別の音も辺りに響き渡ってきた。

ンバアアアアア・・・！ウンバアアア！ンバアアアア！！

コアン・・・!!コアンココココアアアン！！

ファンファンファンファン・・・!!ファンファン！！

「ち、ちよつと・・・なんかたくさんこっちに来るわよ・・・？」

「音が・・・シルビアの音と一緒に来る・・・！！！」

「義兄・・・さん・・・？」

3人が来た道を振り向いていると、やがてその爆音の群れは徐々に徐々に大きくなり、ついにそのエンジン音が聞き分けられる位の場所まで来た瞬間、圭太達の背後が光の川となった。

「う・・・わあ・・・」

圭太が思わず声を上げかけた。まず先頭にずいぶんとのんびりな速度でコールを切る単車が、さらに2台続いた後、ようやく弘毅のS15が現れたと思えば、その両サイドを挟むように、また単車が2台。後ろにも単車や原付が数台続いていた。

すると先頭の1台が圭太達に気付くと、仲間になにやら一声かけてから1人こちらにやってきた。

「あ、もしかしてえ、洋介センパイの後輩さんで、アンタ達っすか？」

集合部分でバラチオンにされたマフラーをぶら下げたXJR400Rに跨がるスキンヘットの少年が圭太達にたずねた。圭太は頷くと、少年はうれしそうに笑った。

「いやぁお疲れっスネ！あ、自分『金剛會』兵隊やってます進藤ってモンですわ」

「あ、僕は中山って言うんだけど・・・君たち、一体なんで？」

さりげなく自己紹介を済ませた少年、進藤に自分も名字だけの自己紹介をしつつ事情を聞くと、進藤はその風貌に似合わぬ甲高い声で笑いながら事情を説明した。

「洋介センパイから會長に連絡がいったんスよ。白いガンダムみたいなクルマが後輩にちよつかい出してらって。だからソイツ捕まえらって感じッスよ」

簡単に説明すると、圭太はなんとなくわかったようなわからない

ような表情をして弘毅のシルビアと、金剛會の少年達に視線を戻した。

「お三方はこちらで待っていてください！今から最高のショーが始まるッスよ！」

「ショー？」

由美がおうむ返しにたずねた、まさにその瞬間だった。

バキヤッ・・・！！

「なあ・・・！！」

圭太が思えば声を上げた。

横に付けていた単車のリアシートに座っていた少年が、手にした鉄パイプでシルビアのドアをひっ叩いたのだ。

さらに狙いをリアフェンダー、ルーフ、テール、・・・様々な箇所を反対につけた仲間達とぶん殴りまくる。

まるで一匹の獲物をなぶり殺しにする蟻の集団のようであった。

「はっはっはっはははは！見てくださいよ、あのシルビアもうパニックって泣きそうな顔になってますヨ」

「ち、ちよつと！あれはやりすぎだよ！！」

バカみたいに笑い転げる進藤に、圭太が言った。

「確かに僕たちは追い掛けられていたけど、あれはやりすぎだよ！あれを運転してるのはこの子の兄なんだよ・・・！！」

圭太が必死に言う。進藤は少し離れた場所で由美の後ろで怖がりながらこちらを見ている翔子を見た後、少しつまらなそうな表情をし、すぐに真顔で言った。

「わかりやした・・・洋介センパイ直接のコウハイさん達なら、自分達は黙って命令（言うこと）を聞きますよ」

バラチヨンマフラーから爆音を轟かせ、仲間達のもとに走り寄るとようやく騒ぎが収まったようだ。しかし、数台の単車はシルビアを囲んで逃げられないように押さえていた。

仲間を止めた後、進藤はまたこちらに歩いてきた。

「一応、仲間は止めさせやしたよ？」

「ありがとう」

圭太がとりあえずお礼を言う。後ろでは由美と翔子が手をつないであちらを警戒している。中里はちらつと圭太の後ろをのぞいたあと、困ったようにため息をついた。

「止めるには止めましたけどねえ・・・旭センパイの彼女さんを単車ごとぶっ飛ばしたんスから、まあ命は無いものとうお・・・っ！？」

「ちよつと！今なんて言っただんですか・・・！？」

進藤の胸ぐらに飛び付いて来たのは、翔子だった。その表情は由美達も見たことの無いような必死の形相であった。

「跳ねたつて！？美春さんを！？ほ、本当なんですか・・・！？ねえ・・・！？」

「ぐ・・・ぐるじい・・・！」

一体どこにそんな力が残っているのか、翔子が進藤の襟首を掴んで矢継ぎ早に質問を浴びせると、進藤は咳払いしてから言った。

「し、知らないんスか・・・？美春さん、大通りのわき道で後ろから押されたみたいで・・・會長の話だとさっき救急車に乗って病院に行っただつて・・・」

言いにくそうに翔子や圭太達に説明する。それを聞いた3人のシヨックは大きかった。圭太は頭を棍棒でぶん殴られたかのような気分になった。

「まさか・・・美春さんが・・・」

「ち、ちよつと待ちなさいよ！じゃああの人は美春ちゃんを跳ねたまま私達を追い掛けたつていうの・・・！！」

由美もすかさず進藤に質問攻めをすると、進藤は黙って頷いた。

「・・・まあ、止まらずに走っていたつてことはそうなんでしょうねえ・・・」

進藤の言葉に、由美は言葉が出なかった。爪先から頭のとっぺん

まで怒りの感情に支配され、先ほどの彼らの暴力行為を止めてしまったことを後悔するほど・・・そしてそれが間違っていることを頭でわかっていてなお・・・しかし怒った。

「・・・あの男！！許せないわ！！」

「ち、ちよつと由美！どこに行くの！？」

スタスタとシルビアに向かって歩いていく由美に圭太が叫ぶと、由美は握りこぶしを作って苛立たしげに怒鳴った。

「我慢できないわよ！こうなったらアイツ、私がボカッ！て・・・！！」

その時、由美達の背後からヘッドライトの灯りと共に、2台分のバイクの排気音が聞こえてきた。

「洋介さんと・・・長良君・・・？」

久しぶりに聞いたヨンフォアの音と、GSの爆吸い音を聞いて圭太がつぶやく。現れたのはやはり洋介と長良だった。

「すまない、ちと遅れたな」

ヨンフォアから降りると、まず頭を下げた。

「僕達はなんとか大丈夫です。それより・・・」

「洋介さんっ・・・！！うぐっ・・・み、美春、さん・・・はっ・・・！大丈夫ですか・・・っ!？」

圭太が言うより早く、翔子が洋介に飛び付いた。涙をボロボロ溢し、嗚咽を漏らしながら祈るようにたずねた。洋介は一瞬考えて、笑って言った。

「まあちと痛そうだったけど、まあ美春ちゃんだし大丈夫だろー」。

旭もいるしな」

「ほ・・・本当、ですか・・・!？」

「ああ、本当だ。だから安心しな翔子ちゃん。それと由美ちゃん
1人離れて立っていた由美にひとこと。

「女の子が握り拳なんて作るもんじゃない」

「・・・」

由美はおとなしくゆっくりと拳を解いた。しかしその顔にはまだ

弘毅に対する怒りが燃えていた。

「長良、助かったぜ。帰っていいよ」

「ウツス！」

長良が頭を下げると、進藤を含む仲間達もシルビアから離れていく。隊列を整え終わると、長良は圭太の前でGSを停めた。

「圭太さん・・・洋介センパイがやりすぎたら、止めるのはアンタだけっすから」

「うん・・・」

ギリギリ10台に達する単車の列が爆音を発てて走っていった。それを見送った後、洋介はポツリと言った。

「ところで由美ちゃんに圭太。翔子ちゃんも・・・」

ゆっくりとシルビアに歩み寄ると、運転席を開けた。

「ホラ！早く出ろっつてんだよ！！」

弘毅の髪の毛を引っ掴みながら洋介が叫ぶ。普段温厚な洋介がここまでキレているのを始めて見る3人は少し震えた。

「あんま喋らすんじゃねーよバカ、ったくよお」

「・・・」

洋介が悪態をつくが、弘毅はひたすらに黙りの姿勢でいるらしい。下を向いて、何を考えているのかよくわからない表情をしていた。

「このバカたれ、どうしたい？」

髪の毛を離し、襟首を掴みなおして洋介がたずねる。

「正直、オレはあんまし手荒な真似はしたくないのよなあ。っても、コイツを旭に合わせないわけにもいかないしなあ、アイツ絶対に殺しちゃうよ」

サラッと恐ろしいことを言う。

「だからさ、旭に会わせてもせめて何発か殴られるくらいに反省させたいんだけど、どーすりゃいいかなあ」

その時、捕まっている弘毅が嫌そうに首を動かした。

「・・・せよ」

「あ・・・？」

「離せよって言っているんだよ!!」

突然、人が変わったかのように弘毅が暴れる。目を見開き何かに追われているかのようにバタバタと逃げ出そうとする。

「なんなんだ！お前みたい等不良がば、僕に説教か！？ふざけるな！！だいたい僕が何をし……!?!?」

しかしそこから先は言葉が……いや、二酸化炭素すら出せなかった。洋介のボディブローが見事に鳩尾を捕らえた。目にも止まらぬゼロモーシヨンのブローのはずなのに、弘毅の身体は10センチ以上地面から浮いた。

「あんまり怒らせんなつての、面倒くせえ」

地面に倒れた弘毅に向かって本当に面倒くさそうに言い放つと、再度圭太達を見た。

「い、今浮いたわよね……」

「うん……」

由美と圭太が思わず見合った。旭も凄いが洋介もそうとうなものだ。もしこれで洋介が冷静な状態でなかったら、弘毅など瞬時にしてやられていただろうことは容易に想像がついた。

「あの、洋介さん。あまり荒っぽい事はしない方向にしません……?」

「まーなあ。しかしなあ、コイツ言葉で反省させるとか、オレ自信無いぜ?」

地面で酸素を求めて池のコイのようにパクパクと口を開けている弘毅を指でツンツンしながら洋介が言う。

「まさに『まな板の上の鯉』だなお前……まあ食いはしないけどなあ。翔子ちゃん」

「は……はい……」

まだどこかフラフラとした足取りの翔子に洋介が声を掛ける。

「正直に言おう……結果がどうあれ、このクス……いや、翔子ちゃんのお兄さま……いや、やっぱクス野郎だよな……いやしかし翔子ちゃんの手前……」

「なんでもいいから早く話しを進めてちょうだい？」

面倒になった由美が先を促すと、洋介は「悪い悪い」と言って話しはじめた。

「まあ、美春ちゃんを跳ねとばしたってのは事実なワケだ。フロント左バンパーに美春ちゃんとヒットした時のタイヤ跡がバッチリ付いてるしな」

言つて、幾分ボロくなったシルビアのフロントバンパーを指した見れば確かに、タイヤが擦れたような跡がくつきりと残っている。

「今回の問題は、オレや旭や、圭太や由美ちゃん達で決められる問題じゃあ無い。2つに1つ・・・」

洋介は翔子の両肩に手を置いて、その選択を迫った。

「反省していない状態で旭に半死覚悟で殴らせるか・・・大人としての筋を通して警察に突き出すか」

「け・・・警察・・・？」

翔子は口を震わせてやつとの思いで口を開いた。

確かに、ひき逃げとなれば最低でも5年の懲役、又は罰金50万。今回の事件は意図的に跳ねとばした悪質なものであるため、懲役は免れないであろう。下手をすれば10年は豚箱行きだ。

翔子の震える肩を押さえる様にして掴む洋介が視線を地面に落とし、洋介の言葉を聞いて弘毅が頭を抱えて唸った丁度その瞬間、由美が手を挙げた。

「あの、洋介さん」

「うん？なに？」

首だけを向ける洋介。由美は言つて良いものか、少し悩んでから口を開いた。

「あの・・・そのシルビアって、速いクルマよね？」

その瞬間、洋介がワケのわからんと言つた表情で見返した。この緊迫感漂う状況でこの男のシルビアがどうしたと言つのかと思つた。

「えつとまあ・・・中身どんだけやってんのかは知らないけど・・・」

まあスポーツカーだしな。走り屋ご用達マシンだから速いよ」

「そう・・・ねえ翔子ちゃん」

由美は2人に近づくと、翔子の手を握った。洋介も次に出てくる言葉を待つ。

「翔子ちゃん・・・今の2択に、もう1つ選択肢を増やせるわよ？」

そして、由美はその提案を言葉に出した。洋介も圭太も翔子も、そして渦中の弘毅ですら開いた口が塞がらなかった。

「はぁ・・・もうすぐコイツの両親も到着するみたいなんで」

「わかりました。今日明日は絶対安静、入院してもらいますからね。えーっ、また後で頭部の精密検査するから」

「はい・・・ありがとうございます、センセイ・・・」

病室から出ていく担当医に頭を下げて、旭はベッドに横たわる美春に目を向けた。

GT380のダメージや倒れていた美春の外傷から、重症じゃないかと予想はしていたが、あばら骨2本と、左腕の骨折とは・・・旭は眠る少女の頭を軽く撫でた。普段能天気で天然でバカでたまにマジメで・・・まあ面倒な奴だが、そんな彼女がこんな弱々しい姿で見ているのを見て、旭は胸に堪えるものがあつた。気分を落ち着かせるためにタバコの箱を取出して、両切りの銘柄を口にくわえた時

「あ・・・」

病室が禁煙だということを思い出した。旭はタバコをくわえたま

ま扉まで歩いていくと、

「後あ任せな」

それだけ残して、病室を出た。

1階のロビーにある喫煙スペースでタバコをふかした。

「しっかしまた、変に外れた病院に連れてきやがったな」

ここは相模の方でもかなり田舎に入る地区で、前に走った峠から数キロの場所にある。ここから市街までは少し距離があり、非常に面倒なのだ。

すっかり暗くなった外を見ながら、翔子の義兄をどうなぶり殺すかを考えていた時、喫煙スペースの扉が開いた。

「おや、こんな所にいたのかい？」

声を掛けてきたのは、少し紳士な感じの医師だった。歳は40代中頃か、柔らかい笑みを浮かべる顔の皺と整えられた髭を見てそう思った。

「君、さつき救急車で運ばれて来た女の子の彼氏君だろう？」

「はあ・・・そつすけど・・・」

こんなオッサンいたっけか・・・旭が考えていると、白衣の紳士はタバコに火を点けた。

「僕達も若かった時はそんな頭をした人が沢山いたからねえ。懐かしくてね」

キャスターの煙を吐き出して、続けた。

「バイクの事故だったよね・・・？」

「はあ・・・」

「バイクはなあ・・・危ない乗り物だよ。あんな小さなモノが時速何十キロで街中をクルマと並んで走るんだから」

その男の話しを聞いて、旭はため息をつく。これだから頭の良さそうな仕事をしてる大人は好かないのだ。こういう大人はすぐに頭ごなしにバイクを否定するのだ。しかし露骨に舌打ちも出来ない立場なので、早く吸って出ようと思った時、医者は笑った。

「でも・・・僕はバイクが大好きでねえ。自分では乗れないんだが、

嫁がバイクに乗っていたんだ」

「・・・へえ、そりやまた・・・」

「どうやら否定するワケでは無いようだ。旭は少し反省して、耳を傾けた。」

「最初の出会いは、笑っちゃうんだけどね、僕が彼女のバイクにひき殺されそうになったんだよね」

「また、奥さんもなかなかやるっすね」

「元気が有り余っていたからね、彼女。旧いバイクだったからブレーキが効かないのに、本人はアクセルを絶対離さないんだから、危なかったんだよね」

「何に乗ってたんすか？」

旭がたずねると、医者は懐かしそうに答えた。

「旧いホンダでね・・・CBの350のバイク」

「サンゴー？」

医者は当時を思い出しながらうんうん頷いた。一方旭は偶然かもわからないが、引っ掛かる物があり口を開いた。

「その・・・」

「うん・・・？」

「奥さんで、もしか・・・もう亡くなってる・・・？」

すると、医者の表情が変わった。どうやら当たったようだ。

「そんでそのサンゴーを、今は娘さんが乗ってねーか？」

もはや敬語なんてどこかに吹っ飛んだ。旭がたずねると、医者は強ばった表情で頷くと、タヌキに化かされた直後のような表情で旭にたずねた。

「君は・・・超能力者かい・・・？」

「んなワケねーべや。でだ、最後に聞くけど・・・」

旭がどこか確信めいた何かを感じつつ、たずねた。

「アンタ、もしかして衣笠さん・・・？」

第45章 BLACKBOX 選択(後書き)

どうも、遅れてしまいました汗

そしてご覧のとおり・・・もう一話お付き合ってください・・・汗

いや、本当は完結させる予定だったのですが、書いていたら・・・
今度から計画的に頑張っていこうと思います・・・

3気筒

第46章 BLACK BOX 終焉

「おいおい、本気かよ由美ちゃん・・・」

洋介は呆れているのか驚いているのか・・・口をあんどぐり開けていた。

「ええ、本気よ。本気と書いてマジと読むくらい本気」

「だって由美ちゃん・・・シルビアと勝負って・・・」

洋介が頭を押さえる。一方由美は弘毅に歩み寄ると目の前で仁王立ちで言い放った。

「私と勝負しなさい！アンタが勝ったら・・・今回の事は水に流すわ！でも、アンタが負けたら・・・二度と私達や翔子ちゃんの邪魔をしないっていうのと、美春ちゃんに謝りに行きなさい！？」

「ちよつとちよつと、由美ちゃん・・・！」

洋介が由美の顔を覗き込むように言った。

「勝負はともかく・・・！負けたら水に流す！？旭が納得しないし、それに・・・！！」

洋介にしては珍しくマジな顔で次から次へと言葉を吐き出す。それはそうだ。なにせ由美は本気で頭の悪いことを言っているのだ。

負けたら水に流す・・・こんなバカな話があつてたまるか。洋介が考え直すように言うと、なんと由美は笑った。

「大丈夫よ洋介さん・・・負けなければ良いのよ、負けなければ」

「だーからって！それには賛成出来ないって！勝ち負けは抜きにしても、由美ちゃんが転んだらどうする！？しかも相手はさつき平気な顔して美春ちゃんを吹っ飛ばしたようなイカした奴で・・・！！」

「でも洋介さん、美春ちゃんなら何て言うかしら。暴力でやり返すなんて絶対に言わないわよ？」

「だったらこのまま警察にでも突き出せば……！」

洋介が最もな事を言う。確かに、これは自分達だけで処理していない問題では無い。ひき逃げは立派な犯罪……洋介がそう言おうとした時、

「それは……翔子ちゃんを傷付けらわ」

由美はきつぱり言い切った。それがきつかけで、今まで心此処にあらずな状態でいた翔子の意識をこちらに戻させた。

「え……由美……さん……？」

「もし警察に突き出したら……翔子ちゃんの性格からして、責任を感じすぎちゃうと思うのよ。そうなったら、翔子ちゃんは私達と一緒に走っても心の底から楽しむ事は出来ないと思うわ……」

今でも十分に仲間達に迷惑を掛けてしまったことや、美春の容態で頭が一杯の翔子を横目に見た後、洋介に向き直った。

「暴力で解決しても、美春ちゃんは絶対納得しなくて、警察に突き出したら翔子ちゃんが傷つくなら……」

「……」

「由美……」

腕を組んで目を閉じて考えている洋介と、由美の出した先の見えない答えに複雑な視線を向ける圭太。口を開いたのは洋介だった。

「展開がめちゃくちゃでよくわからなくなってきたが……確かにコイツを突き出しや、翔子ちゃんの性格じゃ由美ちゃんの言うとおりになっちゃうんよなあ……」

「それに、手を出したら美春さんが納得しないっていうのも頷けるし……だからって言葉で言ってもまた僕達に関わってくるかも知れない……」

洋介に続いて圭太がつなげた。

「それなら決定じゃない！そんなクルマ、私とゼファーちゃんの相手じゃないわよ!？」

「でもなあ……由美だとなんだか負けそうだし……」

「そうなんだよなあ。由美ちゃん、別に速いわけじゃあないし……」

「ち、ちよつとちよつと……!!」

圭太や洋介達の心外なセリフにツツコミを入れる。

「私じゃ勝てないって言うの!?!この間だって、直線だったけど真子さんといい勝負したのよ!」

圭太の誕生日会の時の出来事を引つ張りだしてふんぞり返る。

「いや、多分真子さんセーブして走っていたし……」

「……何よ圭太?文句でもあるのかしら……?」

きゅぴん、と目を光らせながら圭太に向き直ると、洋介が組んで腕を崩した。

「それはともかく、由美ちゃん。問題は相手が単車じゃ無いってのがポイントなんだよ」

「な、何よ……バイクの方が峠道みたいな細い道なら有利でしょう?」

「狭い道で、由美ちゃんのケツにあんなデカイ鉄の塊がくっついていたらデカイプレッシャーになるだろ?」

「え……」

先ほどまでの余裕はどこへやら。街中カーチェイスを思い出して少し青ざめる。

「前にいたら、時速80〜100オーバーの中、そのテールの圧力で抜くに抜けないし、何より絡んだ時が最悪だ。何しろ相手は平気で人を跳ね飛ばすような野郎だ……何かあつたら美春ちゃんの時とはワケが違う。バトルスピードで絡まれてタイヤに身体を潰されようもんなら下手すりゃその肉片はこの世に残さずあの世行きなんてことも……」

洋介が由美の不安を煽り、由美が顔面蒼白になってその話を聞いている時。圭太もその話を聞いていたし、翔子は翔子で展開について行けずおろおろしていた。

隙を生んでしまった。

「翔子おおお!!!!!!!!!!!!!!」

「ひっ……!?!」

ボタン!!

キョカカカカカ……

ボガアアアアア……!!!!!!

「し、しまった……!?!」

「あ、あの野郎……!?!」

弘毅は翔子を運転席側から助手席に押し込むと、白いS15のキーを掛ける。同時に、少し泡食った圭太と洋介が次に弘毅がするであろう行為を阻止するために走り出した。

しかし、2人の推理……弘毅の逃亡という推理は簡単に裏切られた。弘毅は近づいてきた洋介達を見てふん、と鼻で笑った後、ギヤをローに入れてハンドルを目一杯右に切った。

ボガアアアアア……!?!

ギョギョギョギョ……!?!

「リアに打っ叩かれて死にやがれ……!?!」

「……!?!」

「しまった圭太!戻れ!!」

異変に気付いた洋介が咄嗟に圭太に飛び付き路肩に押し倒すのと同時に、シルビアのテールが洋介の肩を掠めた。

「な……!?!?アクセルターン!?!」

まるで氷の上を滑るが如く、狭い路地とはいえギリギリ二車線分

のスペースがある道幅を使いきって、シルビアはその場でスピントーンを決めた。

「ま、待ちなさいよ……!!」

由美が叫ぶが、その声はタイヤスモークとスキール音、エンジン音にかき消される。

2回転ほどして、シルビアは由美達に背中を向けると、嘲笑うかのように走り去っていった。

「逃げられたわよ!? 早く追いかけないと……!!」

「うん……!!」

由美と圭太がそれぞれの愛車に駆け寄る。由美が洋介に急かした。

「洋介さん! 早くしないと翔子ちゃんが攫われ……!!?」

辺りを覆っていたタイヤスモークが風に流され、地面に残されたブラックマークを見つめている洋介の表情を見て、由美は思わず固まった。

「あ……よ、洋介……さん……?」

「……なあに、すぐに追い付くからさあ、心配すんなよ……」

深紅のヨンフォアに跨がり、エンジンを掛ける。アクセルを1回捻る。

「……あのド低脳があああ……!!」

「ひいいい……!!?」

洋介のむき出しの怒りに、2人は震え上がった。普段の優しい表情を浮かべたお気楽な洋介はそこにはいなかった。いたのは、正しく悪魔だった。

「せっかく許してやんかと思ったけどなあ……アンの野郎、血ダルマにしてやんなきゃ気がすまねえ……!!」

グオアアアアアアア……!!!!!!

開口一発、アクセルを開けると洋介とヨンフォアは爆音だけを残

して夜の闇に消えていった。

「ど……どうしよう、由美……」

「こ、怖かったあ……」

取り残された2人は、へにやへにやとその場に崩れ落ちた。

その時、圭太のポケットから明らかに間違いな着信音が鳴り響いた。圭太がケータイを手に取ると、相手は旭だった。

震える手で着信ボタンに指を掛けて、スピーカーモードにして由美にも聞こえるようにしてから言葉を返した。

「もしもし……?」

「おう圭太あ、オレだ!」

どうやら向こうもかなり切羽詰まっているらしい。

「ちつとどえれえ事になっちまった……!」

「ま、まさか美春ちゃんになにか……!?」

由美が思わず身を乗り出してたずねる。

「いんや、アイツは大丈夫だ。それよりどえれえコトだぜ……」

受話器向こうで旭が深呼吸したのがわかった。

「今病院に来てるんだが……まさかこのタイミングでバツティン

グしちまうとわよお……!? 翔子ちゃんの親父と鉢合わせた!」

「ええ!?!」

「どういうことよ!?!」

圭太と由美もさすがに驚愕した。

まさか渦中の兄妹の親と偶然にも出くわすとは……

「翔子ちゃんの親父医者つつつたべ!? 美春の運ばれた病院がそこ

だったんだよ!」

旭も信じられないと言った感じで言うと、そのまま続けた。

「今からそつちに親父さん連れてくからよ! ！そつちはどうよ? ま

あ電話に出るってコトあ、無事つーワケか……」

「それが全然無事じゃないんですよ! ！翔子ちゃんが……!」

圭太はつい数分前に起きた出来事を簡単に説明した。翔子が連れ

去られてから洋介が飛び出していくまでの話を聞いていたところ
で旭が舌打ちした。

『あのバカ……！早速キレやがったか……！！』

「ど、どうしましょう……!?」

『アイツがマジにキレちまったら面倒だぜ……ったくよお』

呆れ半分危機感半分といった感じで旭が言うと、由美はふと疑問
を見つけた。

「あの……旭さんはキレてないのかしら？真っ先にキレていそ
うだから……」

それを聞いて圭太も思わず手を打った。確かに洋介よりも旭の方
が先に堪忍袋の尾が切れそうなものだが、今の旭は平時の時と変わ
らない。そんな2人の反応が心外だったのか、旭はため息をついた。

「アイツがキレたって聞いたらそりゃ少しは冷静になんべ……ま、
少しだけでもよお……？クシャクシャにしてやんぜ？」

それを聞いて2人は頷いた。どっちもどっちだ。

『お前ら洋介を追い！オレもすぐに行くから、現場についたらすぐ
に連絡寄せよな！！』

通話が切れたケータイを握り締めたまま、圭太と由美は目を合わ
せた。

「追い掛けるって言ったって……」

ケータイの液晶を見る。通話時間役2分。このタイムロスはかな
り手痛い……。いや、絶望的だ。只でさえ速い洋介を2分遅れで追
う。さらに行き先もわからないではどうにもならない。

「悩んでいても仕方が無いわ！行きましょう圭太!？」

「う、うん……!」

由美が持ち主のいなくなったCB350Fourのキーを抜き目
立たない場所に隠してハンドルロックを掛けると、2台のカワサキ
はエンジンを掛けると同時に、急いで洋介と同じように暗闇に消え
ていった。

その頃、旭はGT380に寄りかかり苛立たし気に腕を組んでいた。

すると玄関から翔子の父親が現れた。先ほどまで着ていた白衣ではなくスーツ姿でこちらに駆けてくる。

「す、すまない霧島君……！」

「早く！こちらら時間がねえんだ！！！」

翔子の父をリアシートに乗せ、タンDEM用の安い物の半ヘルを被せ、予め掛けていたエンジンは唸りを上げた。

「シートベルトがあんべ！？振り落とされねえようにシツカリ捕まっつとけよなあ！？」

クアアアアア……！！カアアアアアアアア！！！！！！！！！！

白煙を大量に吐き出しながら、旭のGTは加速していく。

「今さつき連絡したら、アンタの息子が翔子ちゃんを拉致って逃げたらしい……！！」

「弘毅……バカな……！？」

前を向いているので確認は出来ないが、かなり動揺しているらしい。旭はギヤをサイドに叩き落とした。

「逃げたヤツを捕まえんのは簡単な話だ。オレんダチが追っかけて

っからよお？ただ問題は・・・」

目の前の信号が赤になった。面倒だが停車するためにギヤを落とし、白線ギリギリで停車した。

「も、問題は・・・？」

翔子の父親が不安そうな表情でたずねる。旭はため息してから「そのダチのうち1人がぶちギリちまってんコトだ・・・ヤバイぜ？」

「キミの彼女の件といい、今の状況といい・・・もうどうしたらいいの・・・」

文字どおり頭を抱えて苦悩する。

「まあ、そのバカヤロウはどーでもいいが・・・翔子ちゃんと美春がやられてんだ、ここまでされたらもうそれなりの対応を取らせてもらっぜ？」

旭は信号が変わるか変わらないかのタイミングでアクセル全開、夜の街を疾走した。

その時、同じ時刻。

圭太と由美は洋介のヨンフォアと翔子に乗せた弘毅のシルビアを人通りも人家も少ない、先ほど居た場所から少し離れた場所で発見していた。

しかし、その現場は修羅場と化していた。

なんていうことの無いコーナーのガードレールに向かって伸びる
ブラックマーク。その先に突き刺さるS15。ヘッドライトや割れ
たフロントガラスの破片が散らばるすぐ側にたたずむCB400F
our。

2人は唾然とした。

シルビアの側で、翔子が頭を押さえながらへたり込んでいる。

その瞬間、翔子のすぐ脇の運転席側のドアに弘毅がボロ雑巾のよ
うに叩きつけられた。

「よ、洋介さん!!」

圭太がFXを停めて急いで駆け寄る。洋介の拳は弘毅の血で染ま
っていた。

「ソコどけ!まだ殴りたりねえぞ!!」

暴れ狂う洋介。その怒りは収まるところを知らず、ゴキゴキと拳
を鳴らした。

「もう相手は伸びています・・・これ以上はいけません!!」
必死に洋介を説得する。このままいけば、下手をすれば本気で殺
してしまいそうな勢いだ。

圭太が食い止めている間に、由美が翔子に駆け寄った。

「翔子ちゃん大丈夫!？」

「わ・・・私はなんとか・・・」

事故を起こした際に頭をぶつけたらしく、頭を抑えながら弱々し
く言った。

「たんこぶとか痛くない!?吐き気とか目眩は？」

「大丈夫です・・・」

どうやら脳に影響は無いらしい。ちゃんとした受け答えは出来て
いる。由美は安堵のため息を漏らすと、翔子の隣で下を向いてぐっ
たりしている弘毅に目を向けた。

「可哀想だけど同情はしないわよ?アンタの撒いた種なんだから・・・」

そう言って、しかしハンカチを取り出すと口元や擦り傷についた

血を拭ってやる。いくら弘毅が悪くてもケガをした人間を放っておけるほど由美は冷たい人間では無いのだ。同情はしないが。

ある程度拭ってやると、ハンカチを弘毅に持たせてから翔子の肩を担いで圭太と洋介の側に歩み寄った。

「翔子ちゃん、大丈夫だった・・・？」

「はい・・・」

圭太の問いかけに、弱々しく答える。

「洋介さん・・・助けてくださって、ありがとうございます・・・」

「え？あ、いや・・・まあ」

怒りの炎に燃えていた洋介だったが、翔子の言葉にその炎は鎮火しはじめたらしい。照れ臭そうに頭をかいた。

「で、これどうするのよ・・・？」

翔子の肩を担ぎながら由美が指さしたのは、ガードレールに刺さったシルビアと、そのシルビアにもたれ掛かっている弘毅。この状況のまま放っておくコトも出来ない。

「事故処理するにしても面倒だし・・・クルマはぐっちゃりしただけで走れそうだからコイツが目覚ましたら帰そう。幸い民家も無いしな」

心底面倒くさそうに洋介が言った。事故処理で警察が介入すれば面倒なことになるし、真相を話せば弘毅はそのまま逮捕。洋介も補導はされるだろう。ならばこのままバックレてしまおうと提案した。

「そうですね。翔子ちゃんのお兄さんが捕まるのはやっぱりちょっと・・・」

圭太も頷く。翔子の精神的にそれはアウトなのだ。しかし圭太はこんな賢くない選択を取る人間では無い。弘毅を見つめてこう言った。

「まあそれと美春さんを吹き飛ばしたのは別だからね・・・それについては、今から来る旭さんと翔子ちゃんのお父さんと、美春さん

とで決めてもらうけど・・・」

「そうね・・・」

由美もウンウンと頷く。

「そうだな・・・それじゃあ早速バックレるかな。圭太か由美ちゃんのとつちかに翔子ちゃんを乗せてくれないかな？オレはこのバカを誘導するから」

洋介はツカツカと歩いていくと、弘毅の肩を揺すった。

「おい起きろ。今からここ出るから、早くクルマに乗れ」

同情や詫びは一切入れずに命令する。それでも先ほどの状態より落ち着いた洋介に一同がホツとした時だった。

プツ・・・！

「・・・！？」

洋介の頬に弘毅が血と折れた歯を飛ばした。そしてケラケラと壊れたように笑いだした。

「仲間・・・？友情ごっこ？楽しそうじゃないか・・・へへへっ」

「ああ・・・？何が言いてえ？」

「あの・・・聞きたいことがあります」

弘毅の胸ぐらを掴んだ洋介を遮って、圭太がたずねた。

「あなたは翔子ちゃんをなぜそこまで連れ戻そうとしたんですか・・・？僕にはそこだけが全くわからないんです」

「・・・」

「確かにそうだな。自分の妹が1日とは言え無断外泊したら、まあ怒るのもわかるが・・・普段からGPS発信機を単車に付けておくとか、確かに異常だよな」

ウンウンと頷きながら洋介が言うと、圭太達はふと今の言葉の中にあつた単語に違和感を覚えた。

「ちよつと洋介さん？GPSって何の話？」

由美がたずねると、圭太と翔子もずいっと洋介に顔を近付ける。

「あれ？言わなかった？」「い、言っていないですよ！？どういうことなんですか！？」

翔子に胸ぐらガチツと掴まれ、それをなだめながら洋介は説明をした。

それを聞いた由美はマンガの様に地団駄を踏んだ。

「なによ！だからいつも先回り出来たのね！！悔しい！！」

「カーナビを分解して・・・そんなことが出来るんだ」

一方圭太はその発想と技術力と、無駄な使い方に関心半分呆れ半分と言った感じでひとりごちていた。

そして・・・

「もう許せません・・・！！」

「うわちよ、翔子ちゃん・・・！！」

普段おとなしく、今もずっと仲間迷惑を掛けたと自分を責めていた翔子が、突如義兄の胸ぐらを掴んだ。

この男が現われてから今まで、翔子は恐怖や、日々のストレス、そして友達を巻き込んだことや、撥ねられた美春のこと・・・全てが重なって容赦無く翔子に覆いかぶさった。そして今の洋介の種明かしでその全てが翔子の中でシイクされ、それが普段表さない怒りの感情となつて一気に爆発した。

「落ち着きなつて翔子ちゃん！女の子が暴力をしたらダメだつて！」

さつきまでやりたい放題殴っていた洋介がとりあえず落ち着かせようと必死になだめるが、翔子は普段柔らかい笑みを浮かべるその瞳をキツと尖らせ弘毅を睨み付けた。

「私1人が目的だったんですよね！？それに、私が逃げ切れないコトも解っていたんですよねえ！？なんで！？なんで由美さんや圭太さんや美春さんまで！？居場所が特定出来るのなら、いくらでも他のやり方で！私だけを捕まえられたじゃないですか！！なんで・・・！！」

「まあまあ、その辺りは後で話してもらうつからさ、とりあえず今は・

「・・・」

「洋介さんは黙って下さい!!」

「はい・・・了解です・・・」

普段怒らない人程キレると怖い。それを身を持って体験した洋介はとりあえず手を放した。

「いいですか・・・？長居はできませんから5分です、5分以内に私を追い掛けた理由と私達を巻き込むように追い掛けた理由を答えて下さい・・・私も、今回だけは許せません」

少し落ち着きを取り戻したかと思っただが、今度は弘毅に尋問を始めた。しかも時間制限付きである。

「さあ、早く話してください!」

胸ぐらを掴む腕にいっそう力が入る。慣れない感情に振り回されているのが自分でもわかるが、今はこうしていなければ身体がバラバラになってしまう。

そして翔子の形相に負けたのか、弘毅がボソリと口を開いた。

「気に入らないんだよ・・・」

「・・・?」

「気に入らないんだよ・・・!全てが!お前みたいな虫ケラが!」

「おいお前、大概にしとかねえと後でぐちゃぐちゃにされんぞ?」

「待つて下さい。それで?」

喧嘩腰になる洋介を腕で制して、先を促す。

「最初お前と会ったとき・・・僕が高校生だった時だ・・・お前を見て、僕はなんて哀れで情けないヤツと思った。自分の主張も言えず、母さんや僕の嫌がらせを受けてもひたすら頭を下げるお前は僕のストレスの掃き溜めの絶好のマトだった」

「ぺっ!と地面に血を吐く。頬の内側がズタズタに裂けていて、血が止まらないようだ。」

「そんなお前が、バイクの免許を取ってあのボロに乗り出した途端、家に帰る時間が遅くなりはじめた・・・僕は気に入らない!!お前

は毎日僕に殴られて怯えていけばいいんだ！バイクを手に入れて自由な気でいたお前が気に入らないんだよ！！」

「何言ってるのよアンタおかしいわ！そんなただの虐待したいためだけの理由で監視するためにJPNを付けたって言うの！？」

「由美・・・GPSだからね、難しかったら素直に発信機って・・・」

「う、うるさいわね・・・！！」

「で、そんな翔子ちゃんがバイクに乗り出しているんな場所に遊びに行くのがムカつくからGPS付けて居場所を突き止められるようにしたら、オレ達仲良くなってるのを知ったワケだ」

洋介が静かに問い詰める。

「翔子ちゃんに会った翌日、街道沿いのガソスタにいた時に、お前のクルマと似てんのが目の前を通ったのをオレは見てる。あん時、お前は様子を見に来たんだろう？」

以前、翔子と出会った翌日にガソリンを入れに来た旭と会い口論していた時のコトを思い出して洋介が呟いた。

すると弘毅は口から血を吐き出すと笑った。

「あの時は笑ったよ・・・まさかアレを取り付けて2日でお前達の存在を突き止めたんだから・・・そうか、出会ってまだ初日だったのか・・・ますます笑いが止まらない・・・」

「今までの話はわかりました。最後に、何故私だけを狙わなかったんですか？先回りをして道を塞いでバラけた所を捕まえることだって出来たじゃないですか？」

無駄な話を一切せずに翔子が次の質問を切り出した。すると弘毅は笑いながら続けた。

「ククク・・・わかつているんだろう本当は？」

「おおよそは・・・ただ、あなたの口から聞きたいんです。ほら、後2分半もありません」

面倒くさそうに口を開く外道に、翔子はやはり尋問を続ける。腕時計を仕切りに見つめている。

「理由なんて簡単、お前を外に連れ出して僕を苛立たせさせるお前らを巻き込めば、お前らはコイツから離れるかコイツが恐怖を感じてお前から離れると思ったのさ……まああの女を撥ねたのは計画外だったか……」

「あの女あ！？ テメエ大概にしとけ……！！」

「洋介さん……！！」

「止めるなよ翔子ちゃん！ この野郎やつば徹底的にボコリ入れねえと……！！」

「今は堪えて下さい……！」

必死に洋介を止める翔子。翔子の瞳に宿る炎を見て、洋介は拳を引つ込めた。

翔子は最後に今までの話の総括に入った。

「ではあなたは私に暴力を振るいたかつただけで、私が友達と遊んでいたからそれが出来ず、それなら私と友達を離れさせてまた暴力を振るう為に今回の行動を計画。発信機を私のバイクに付けて、居場所を特定。追い掛けている途中、美春さんを撥ねてそのまま私達を追い掛けた……こんな感じでしょうか？」

腕時計の秒針を見つめる。あと30秒で5分になる。翔子が弘毅を睨むと、弘毅はそんなコトもお構い無しに高笑いした。

「アツハツハツハツハ！！ ああそうだ！ そのとおりだ！！ お前は僕に殴られていればいいんだ！ これからもそうさ！ 帰ったらお前を二度と外には出さない！ 殴って殴って殴って……！！ お前は僕の下から離れられなくしてやるさ！！」

狂気の叫び。そのとおりまさしく狂ったような笑う醜い男を見て、洋介達は吐き気すら覚えた。

「この野郎、狂ってやがる……」

さすがの洋介も一歩後退りする。それをみて弘毅がニタニタ笑った。

「どうせお前ら……翔子を思って警察に僕を売り渡すような真似はしないだろう？ そんなことをすれば、コイツが傷つく……そんな

「ボウリング場で私、写真を1枚しか撮れなかったんです。だから容量は沢山余っていたんですよ。それで、私はそれを思い出しまして……」

ここで、ニッコリ笑った。弘毅の額からは汗が止まらない。

「ポケットの中なので映像はありませんが……あなたの、いや……この場にいる全員の『音声』はしっかり録音出来ています」

「え……?」

「……あ!!」

「なに? 一体なんなんだ……!??」

「……お、お前……まさかつつ!??」

4人の声がシンク口する。どうやら圭太と弘毅は理解出来たらしい。翔子は笑顔のまま言った。

「私はあなたを許せません。しかしGPSを仕掛けた以外の物的証拠はさつきの事故で無くなって、今はありません。あなたはなかんだでのりくりと躲して刑を軽くするでしょうし、そうなればあなたはまたやってくるでしょう」

圭太は息を呑んだ。どうやら自分の推理は当たっているようだ。

弘毅はもはや呼吸すら出来ていないようだ。

「なので今撮った音声を、私は警察に物的証拠として提出します」

「き……貴様あ……!!」

瞬間、弘毅が立ち上がり翔子の胸ぐらを掴んだ。怒りに歪んだ表情を浮かべて腕を振りかぶった瞬間、弘毅は再度シルビアに叩きつけられた。

「ようやくわかったぜ翔子ちゃん。お前はもう二度と翔子ちゃんには触れさせねえよ?」

翔子の後ろから、デジカメを預かった洋介が鉄拳を見舞ったのだ。翔子は洋介に頭を下げると、義兄に向かって言った。

「あなたも家族です。だから一応警察に通報する前にこれを家族に聞かせます。まあ、それで反対されても私は絶対に警察にこれを渡しますけど……って、もう聞こえていませんか」

足下で伸びている義兄を見て、翔子はため息をつく。その瞬間・

「あ……」

「危ないっ!!」

いきなり膝からカクンと崩れ落ちた。バランスを崩した翔子を、後ろから洋介が受けとめる。

「だ、大丈夫か!？」

「あ……れ……?私、足が震えて……か、身体が……」

どうやら極度の緊張状態から解放されたコトで、身体力が抜けてしまったらしい。身体が動かせない。

「いや、よくやったよ翔子ちゃん……本当に頑張った!」

「そうよ!翔子ちゃん、私なんて何にも出来なかったわ……」

「そんなこと、無いですよ由美さん……」

由美の手を握ると、翔子は笑った。圭太は翔子の前に立つと洋介と2人で起こすのを手伝いながらたずねた。

「翔子ちゃん……よく決断出来たね。でも何で急に?」

「そうですね……最初は嫌だったんです。でも、いろいろ話が進んでいくうちに、自分と義兄だけの話じゃないって……皆さんが辛い思いしてるのに、彼を許していいのか……悩んだ結果、私はそう決断したのですが……」

翔子はそのままで言っつて、気絶している義兄の頭を撫でた。

「やっぱり……私は決めかねますね……」

それからの処理が大変だった。

もう移動しても仕方がないと言うことでこの場で旭と合流。シルビアと弘毅を翔子の父親に任せて、翔子は洋介の後ろに乗って自分の愛車に送ってもらい、美春のいる病院で明日会うコトを約束して、解散の運びになった。

夜の病院。薬品の匂いが漂う灯りの無い廊下を歩き、ある病室の扉の前で1人の少女が立っていた。

扉を開けると、普通の個室にベッドと点滴、小さなテレビが。ベッドに横たわる人影を確認して、少女は静かに病室に入った。ベッドにいる人物はやはり眠ってしまっているらしく、その寝顔をのぞき見た瞬間、彼女の目から涙があふれてきた。

「私のせいでこんな目に・・・本当に・・・すみませんでした・・・」

少女は泣き声を押さえながら言うと、寝ている彼女の手を握りしばらく何かを考えた後、入ってきた扉に歩いていった。

「・・・さようならです」

それだけを言って、少女は病室の外に出る。音を発てないよう静かに扉を閉めた時、いきなり周りが明るくなった。

「・・・!?!?」

どうやら廊下の蛍光灯が一斉に灯つたらしい。暗闇から一転、光が支配する廊下に慣れるために目を瞑り開こうとしたとき、不意に声を掛けられた。

「こんなことじゃないかと思ったのよねえ」

「え・・・?」

目を開くと、良く見知った・・・いや、先ほどまで一緒にいた親友・・・三笠由美が立っていた。他にも圭太や洋介、旭もその場にあった。

「全く、さっき別れ際にあんな顔してたらみんな気付くわよ」

由美がやれやれだぜ、と首を横に振った。

「あとを付けるような真似をしてゴメンね？でも、やっぱり心配だったから、あの後みんなでもまた合流して付いてきたんだ」

「全く・・・なにが「さようならです」だよ・・・自分ばっか責任感じて」

圭太と洋介も全くだと言った感じで頷いた。

「というワケよ翔子ちゃん？まだまだ私達から逃げられないんだからね？」

ニコッと笑い由美が言った。少女・・・衣笠翔子は俯きながら身体を震わせていた。

「・・・私は・・・皆さんといたら・・・また、迷惑を掛けてしまいます・・・」

俯いたまま、表情が見えない翔子は、そのまま続けた。

「さつきはあんなコトを言いましたけど・・・私、やっぱり義兄を警察には突き出せません・・・ははは・・・！笑っちゃいます・・・あんな酷い目にあって、皆さんを危険な目に巻き込んで、私は許さうとされているですよ・・・？」

自嘲気味に笑うその声は震えていた。身体も心も、限界だった。

「期待を裏切ってしまったって・・・申し訳ありません・・・私、皆さんのような友達は初めてだったんですけど、呆れてしまいますよね・・・！？さんざん巻き込んで怪我人まで出て、結局こういう結果になっちゃったんですから・・・」

皆の顔を一切見ずに、まるで地面に話し掛けるように、最後の言葉を絞りだした。

「お母さんが死んで・・・何かにすがるように再婚して、やっぱり上手くいなくて・・・もう、お父さんの悲しい顔、見たくないんです・・・！！」

別れ際に見た、義兄のクルマに乗り込んだ父の表情を思い出して、涙が溢れた。決壊したダムのように、止まる気配が無い。

「私は皆さんの・・・仲間の期待を裏切って、家族を選んだんです」

「・・・だからっ・・・！！だから私・・・っ！！」

「全く、何を言ってるのよ翔子ちゃんったら！」

翔子の言葉をかき消して、由美が言った。

「私達は翔子ちゃんの義兄さんが警察に突き出されるのを望んでなんかいないし、翔子ちゃんが家族のコトを考えているコトに対して裏切られたなんて微塵も思っっていないわよ？」

由美の明るい笑顔に、翔子は思わず顔を上げた。見れば全員、同じように笑っていた。

「確かに大変な目にはあったけど、全てが丸く収まったしね。僕は逆に何も出来なかったコトを謝りたいくらいだし」

美春が事故をしてから、必死に逃げるルートを探して皆を引っぱった圭太が、本当に心の底から申し訳なさそうに頭を下げた。

「まあ圭太は良くやったさ。それより！翔子ちゃんが無事で何よりだったよ本当に。最後なんか大活躍だったしさ！鳥肌モンだったぜ！？益々惚れちまうじゃまいか・・・」

洋介が本当に感動したように翔子を誉めたが、最後で台無しにしてしまった。由美に足を踏みつけられて飛び上がる洋介をバツクに、旭が言った。

「このままバツクレようなんて思うなよ？オレたち『旧車物語』。どこに隠れたって見つけだすしな。それに・・・翔子ちゃんがいなくなっちまうコトなんざ、美春のバカはぜってえに望んでねーんだからなあ？」

「全く、旭さんの言うとおりよ。翔子ちゃんが居なかつたら、誰が私達の『ナビ役』をやるのよ？真子さんだけじゃ不安で仕方ないわ」

由美が翔子の肩をポンポンと叩く。

「そういうワケだから、翔子ちゃん！さよならするコトは一生無いわよ！？」

そのまま笑顔で言い放った。後ろのみんなも一様に笑顔で翔子の前に立っていた。

「みんな・・・ず、ズルい・・・！みなさん、ズルい、です・・・っ！」

笑顔で自分の肩に手を置く由美の胸元を掴んで、涙をボロボロ零しながら、翔子は泣いた。

「そんな・・・っ！ひっ・・・ぐ！い、言われたら・・・私・・・！なにも・・・なにも出来ないじゃないですかあ・・・！！」

顔を涙や鼻水で汚しながら、泣きじゃくる。そんな翔子を、由美が優しく抱き締めた。

「全く・・・翔子ちゃん、恨むなら友達想いの最高の友達を沢山作った、自分を恨みなさい？それと・・・」

由美は翔子や後ろにいる圭太達に表情が見えないように、さらにぎゅっと翔子を抱き締めて言った。

「もう絶対・・・！居なくなるなんて、い、言わないで・・・！！」

気付けば自分も涙を流しながら、そう言っていた。

今回のコトが起きた時から、由美や圭太達は不安に思っていたのだ。翔子の性格上、責任を感じて自分達から離れていってしまうことを本当に不安に思っていたのだ。正直に言えば、この尾行びつくり大作戦（命名、由美）だって失敗の可能性が無かったわけではない。翔子が強く否定すれば自分達に強制権は無い。おとなしく引くしか無かった。

しかし、翔子は拒否せずに自分達の元に戻ってきてくれた。それが嬉しくて、由美も涙を流してしまった。

抱き合って泣きじゃくる2人の少女を、3人の仲間の他に階段の踊り場から離れた位置で見つめる影が他に1人いた。

「佳代・・・僕は父親失格かも知れない・・・」

壁に寄りかかり、翔子の父親は言った。

「娘の気持ちなど梅雨知らず、ポツカリ空いた心を埋める為に再婚話に乗り、その罪悪感を忘れるように、君を助けたくてついた今の仕事に没頭して・・・いつしかあの子を見ていなくなっただ・・・」

本当、僕は情けない父親だ」

本当は病棟内は基本的に禁煙のだが、なに気にすることは無い。使い込まれたジッポでタバコに火を点けた。鈍く光るジッポの音をたてぬように閉めると、紫煙を吐き出した。

「でも、やつと吹っ切れた。長い時間を掛けてしまったけど、僕はもう迷わない・・・これからは、また『3人』で暮らそう・・・」
病棟の窓から、月明かりが男を照らした。開いていないはずの窓から、温かい風が吹き抜けた気がした。どうやら彼女は許してくれたようだ。

すーっ・・・

「・・・？」

「どうしたの・・・？」

急に上を向いて泣き止んだ翔子に、由美がたずねた。

「今、風が吹いて来ませんでしたか・・・？」

「え？何言ってるのよ・・・？窓なんか無いわよ？この病棟」

由美が言うように、この廊下には窓が無い。気のせいだったのか・・・そう思ったその時、やはりまた風が吹いてきた。

しかし、周りの物は揺れていないし、どうやら疲れているようだ。

「なんだか・・・私・・・」

温かい・・・心地よい夏の風に安心した瞬間、何か温かい物で包まれた翔子はその場で眠ってしまった。

「あれ？翔子ちゃん？」

由美が揺するが、目を覚まさない。翔子の言葉を思い出して、洋介が言った。

「深夜、病院・・・そして謎の風・・・」

「・・・」

由美、圭太、旭が固まった。

そして4人、顔を見合わせて・・・

「「「「で、出たあああああああああああ！……！！！！！！」」

「「」」
慌ただしく廊下を走って逃げていった。ちなみに翔子は洋介がおぶって言った。

そんな彼らを見て、空中にいた『誰か』はため息を漏らして呆れていたとか……

第46章 BLACK BOX 終焉（後書き）

どうも、更新が大幅に遅れてしまいました・・・汗
最初は3部作で終了させる予定が大幅に伸びてしまい、気づけば4部作に・・・汗

今回のお話、短編を覗けば一番分量が多くなっています。まあ多ければ良いわけでもないのですが、複線が多々ありますので少しは楽しんでいただけるかと思えます。

そしてシリアス（????）な話が続きましたが、いよいよ季節は夏！リアルタイムに乗り遅れぬよう、楽しい圭太たちの夏を描いていければと思っておりますので、これから『旧車物語』を宜しくお願います！

3 気筒

第47章 一件落着・・・？真子VS玲花！？（前書き）

おひさしぶりです汗

第47章 一件落着・・・？真子VS玲花！？

一夜明けた日曜日。圭太達は他の『旧車物語』の仲間と昨日の出来事と美春が入院していることを伝えると、美春のいる病院に集合した。

患者であるはずの美春であったが意外と元気で、病院食に文句をつけていた。その姿に安心して、赤城姉妹の長女と次女がその場にはいない翔子の義兄に対してここでは書けないような言葉で罵倒したり、千尋が泣きながら美春に抱きついていたり、翔子がそんな美春が許しているのに何度も頭を下げていたり・・・

そんな中、旭と洋介の2人は病院には行かずに、洋介の実家である『羽黒自動車』の片隅で頭を悩ませていた。

「・・・こりゃあ大惨事だなあ旭よ・・・」

「・・・」

目の前にあるのは、鉄クズ同然になった美春のGT380だった。

「・・・壊れた場所より無事な場所探す方が早えな・・・はあ」

自慢のGT750フロントフォークを始めとするフロント足周りはほぼ全損。リア周りは無事だが、チャンバーが左側1本、明後日の方向に折れ曲がっている。ハンドルも左側だけ旭の鬼ハン以上に真上を向き、ヘッドライトやウインカー全損。ステッブも天を仰ぎ、極め付けは克蘭クケースのひび割れである。他にも数えきれないほど無数の傷やタンクのへこみ。重症である。

「転けてた場所にブロックあったよな。あれで腰下ひっ叩いて割れたのかな？で、壁にがっちゃんフロント全損・・・ちゃんちゃん」

克蘭クケースを覗き込んでいた洋介が虚しそうに呟く。果たして元通りになるかなあ、と考えていると横から黒いオーラが・・・

「おい、洋介よ・・・」

「な、なんでしょーか旭さん・・・」

「あのクソガキ・・・やっぱりクシャクシャにできていいか・・・」
「？」

「・・・気持ちはわかる」

さてどうしたものか・・・2人は日が暮れるまで悩み続けたとか・・・

「ねえしーちゃんってばあ・・・」

場所は戻って病院。

他のみんなはお腹がすいたと言って病院の食堂に行ってしまった。病室には美春と千尋、そして翔子の3人だけが残った。

相変わらず謝り続けていた翔子は先ほどなんとか落ち着かせたが、今度は逆に暗い顔のままずっと下を向いてしまっていた。

やはり昨夜みんなに励まされたとはいえ、美春の現状を見てしまつとやはり明るくなんてとても振る舞えない。また自分を責めている翔子に、美春がついに立ち上が・・・と思いきや、ベッドから起き上がっただけにとどまった。

「しーちゃん、ちょっとこっち来て」

「は、はい・・・」

とぼとぼベッドに歩み寄る。重い足取りで美春の脇に立った瞬間、手を握られた。

「美春さん・・・？」

「・・・えいつー!!」

「え？うわあ・・・!!」

そのまま、グイッと腕を引っ張られると、美春の上に覆い被さるようにして倒れた。

「な、なんなんですか・・・!?」

「しーちゃん暗い・・・私が大丈夫って言ってるんだよお?それならいつまでも暗い顔してたらメっ!だよお」

左腕を庇いながら、しかしニコニコしながら美春が言った。

しかし翔子の表示は明るくなるどころか、その痛々しい腕や擦り傷を見てさらに暗くなってしまった。

「でも・・・私は義兄を許してしまいました・・・美春さんや圭太さん達を巻き込んで、ケガまでさせてしまったのに・・・」

「まーったくもー!しーちゃんつまんない!ちーちゃん、GO」

「りょーかあい!」

「え・・・!?ちよ、・・・!」

話ながらずんずん暗くなっていく翔子に業を煮やした美春が千尋に声を掛けた。千尋は指をワキワキさせながら翔子に飛び掛かると、そのわき腹に指を差し込んだ。

「え、ちよ、・・・!や、やめ・・・あひやははははははは・・・!!!」

笑わない翔子に美春が行った作戦は、くすぐりだった。千尋の指が的確に翔子を攻め、くすぐったさに翔子が身を擦らせる。

「あひやははははははは・・・!!ま、待って!ダメ、くすぐった・・・いひやははははははは!!!」

「ちーちゃんもういーよ」

「はーい」

美春が途中で千尋に命令して止めさせると、自分の上で息も絶え絶えにくったりする翔子。

「よかったあ しーちゃん、実はもう笑えなくなっちゃったのかと思っただよお」

「ぜえ、はあ、はあ・・・み、美春さん・・・?」

「しーちゃんが暗い顔して、得する人なんかいないんだから これからはずーっとその笑顔でいるんだよ」

ポンポンと、片方の手で頭を撫でる。

「私はぜーんぜん平気　終わり良ければすべてよし」
「で、でも……」

翔子は少ーしだけ気まずそうに俯いた。

「その……美春さん、サンパチが……」

翔子が言ったその瞬間、美春は真後ろ……枕に向かってぱたりと倒れた。その倒れ方といったらもう二度と立ち上がる事は無いのではと思えてしまうくらいの倒れ方だった。

「み、美春さん……!?」

「おねーちゃん！大丈夫だよ！おにーちゃんがなおしてくれるよ！

！……た、多分……」

「そ、そうです！綺麗に元通りになりますよ！！」

「ぐぼふっ……！！！」

「うわあ！おねーちゃんが吐血した！！」

「は、早くナーズコールを……！！！」

・
・
一人死にかけているが、なんと賑やかな雰囲気な病室であった。

「ん、さすが病院の食堂、あまり美味しくないな……」

丁度その頃、病院の食堂で赤城3姉妹の長女である赤城真子が、色の薄いチャーハンに文句を付けながら口に運んでいた。

「でもでも、ここで入院した人や医者さん達はみんなここのご飯を食べて頑張つて来たんだから、あんまりそういうことは……」

古そうな病院の建物を見て過去の出来事に想いを馳せながら妹の紗耶香がフオローする。

「いや、なんでそんな事に深く想いを馳せてるのよ・・・あ、圭太、七味頂戴」

「はいはい」

紗耶香にツッコミを入れながら蕎麦を啜っていた由美に、圭太が七味を渡した。

「でも良かったよなあ・・・重症って聞いてたから相当ヤバイのかと思ってたからさあ」

凜がホツとしたように誰ともなく呟いた。ちなみに食べているのは醤油ラーメンだ。

「そうだよな。普通の骨折なら、10日あれば完治するし」

「他に異常は無かったみたいだし、本当に良かったわよね」

圭太と由美が頷いた。

昨日旭から重症と聞いていた圭太達であったが、美春は腕の骨折とあばら骨を2本。その内1本はヒビが入っただけで、もう1本もどこか内臓に突き刺さることもなく、思った以上に重症では無かった。頭や他の箇所にも影響は無かった。まあ軽症では無いが、今日の夕方には退院する予定にはなっている。

「でもサンパチは全損級のダメージなんでしょう？大丈夫かしら・・・」

その事で今現在吐血して半死に状態の美春など知るすべも無く、真子が呟いた。

「まあ凄腕メカがいるし、大丈夫だろ・・・そんなことより、翔子ん家はどうするんだろうな・・・」

「それこそわからないよね・・・」

凜が心配そうに言うと、圭太も頷いた。

「翔子が復活しないと、アノ計画を実行してもつまらないしなあ」

「アノ計画・・・？」

凜の言葉に由美が聞き返すと、凜は「圭太から聞いてないのか？」と言って箸を置いた。

「そう言えばまだ由美には話してなかったよ」

「なによ圭太・・・なんだか淒く楽しそうな匂いがするわよ・・・?」

「その話については、私からしておこう」

味の薄いチャーハンに飽きてきた真子がレンゲを置いた。

「実は、8月にみんなで海に行く事が決まったの」

「え・・・!? 本当!?!」

由美が本当に嬉しそうに笑顔でたずねると、真子は頷きながら口を開いた。

「千葉の方に、ウチの別荘があるの。そんな広く無いんだけど、海に近くて眺めが淒く良いの」

「べ、べべべ別荘!?!」

由美が北斗神拳を食らった敵のように悲鳴をあげた。別荘なんて、某探偵アニメか芸能ニュースでしか聞いたことの無い一般人にはどこか現実離れしたものだっただけ。

「そう言えばすっかり忘れていたわ・・・真子さん達、お金持ちなのよね」

赤城建設令嬢3姉妹が、急に光り輝いて見えてきた。

一方真子は少しすねたように口を尖らせた。

「家の事はどうでもいいでしょ・・・そう言われるのは嫌なのよ」

「あ・・・ゴメンなさい」

真子や凜達が家柄の事を言われるのを嫌っているのを忘れていた。由美が頭を下げると、真子は笑った。

「まあそれはさておき・・・目の前は海、後ろには山・・・夏を満期するには十分な環境でしょう?」

「海には魚の群れとかウニとか貝とか・・・山にはカブトムシとかクワガタとかたくさんいるんだぜ!?!」

「ウニ・・・カブトムシ・・・!?!」

真子と凜の話聞いて、コクコクと頭を振りながら叫ぶ由美。その表情はまさに夏休み前の子供だった。

その時、ワクワク感マックスな由美のケータイ電話のバイブレー

夕が高々と鳴り響いた。

「玲花から電話・・・あ、病院って電話使ってよかつたっけ？」

「んー、食堂ならいいんじゃないかな。病室はダメだけど」

圭太の意見を聞いて、まあいいやと言った感じで通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『おー由美！元気してるー？』

スピーカーの向こうから一人暴走族、『月光天女』の総長兼構成員スカウトの榛名玲花の能天気な声が響く。

『今あたいさあゝ、用事があつて相模まで来たんだけど用事が終わっちゃってね。暇してたら一緒に遊ばないかい？』

「あー、ちよつと今忙しい・・・ワケじゃないけど、ちよつと遊ぶのは難しいわね・・・」

『んあ・・・？もしかして今チームで行動中かい？』

「行動つていうか・・・お見舞いね」

『お見舞い？だれか転んだ？』

「実はね・・・」

由美は細かい事を端折つて、美春がクルマに跳ねとばされて入院していることを伝えた。ちなみにGT380の被害も大きかった事を説明すると、今まで黙つて聞いていた玲花が叫んだ。

『そ・・・それで！？美春様は・・・！？』

「ねえ様つて・・・まあたいしたこと無いわよ」

『な、なに病院！？』

病院名を告げると、玲花はよっしゃ！と言つてから一方的に電話を切つた。

「今の電話玲花ちゃん？」

通話を終えた由美に圭太がたずねると、由美は首を縦に振つてケイタイをしまった。

「誰だそれ？友達？」

凜がさほど興味無さそうに言った。

「そうよ、私の友達。彼女もバイクに乗っているのよ。それも古いヤツに」

「おお、それは興味あるぜ！」

急に興味に身を乗り出す。バイク乗りが少ない昨今、しかも旧車乗りならばそれも当然の反応だ。

「なんか今から来るみたいだから、後で会えると思うわよ」

「それは楽しみです！」

紗耶香が期待に胸を膨らませて言って、双子の凜とハイタッチした。

その後食事を終えた5人はおそらく二度と足を運ぶことは無いであろう食堂をあとにして、病室に戻った。病室の扉を開けて、最初に飛び込んだできたのは、ぐったりとベッドに横たわる美春と、しょんぼりした2人の姿だった。

「あ、美春ちゃんが死んでるわね」

「本当だ。なーむー・・・」

「いやいや死んでないですよ!？」

由美と凜の心無い言葉に翔子が突っ込む。まあ、美春本人はすでにいろんな意味で屍のようだが。

「おねーちゃんにサンパチの話したら、ひっくり返って吐血しちやっただけだよお」

「吐血しただけって・・・」

千尋の中学3年生の平均より幼い声でのダーティな説明を聞いて、真子がため息をついた。

「この調子ならばらく起き上がってこないわね」

「どーすんだよこれから」

美春の肩をゆさゆさと揺する姐に凜がたずねる。

「お見舞いに来たのだからしばらく起きるのを待つしか無い」

「つーか退院寸前の患者をまた再起不能にしてどーすんだよ」

「「ご、ごめんなさい・・・」」

その言葉に、翔子と千尋が頭を下げた。不可抗力とはいえトドメ

を刺したのは自分達なので何も言えなかった。

「まあ不可抗力だし、仕方ないわよ。でもGT380は本当に治るのかしら？」

2人を慰めながら呟くと、真子も心配しはじめた。

「ウチのオヤジコレクションに部品無かったつけ？」

「どうだったか・・・探してみないとわからないわ」

「RGのエンジンがあるならあるんじゃないかなあ？」

千尋が真子の袖を引っ張りながらこちらを見上げて言った。いちいち仕草が可愛らしいなあ、と2人とも内心少し思った。

「確かにRGのがマイナーだけどなあ。もし無かったらウチの初期型のGT380から部品取っちゃおうぜ！？どうせオヤジ全然乗らないしな！」

「ダメだよ凜お姉ちゃん、ちゃんとお父さんに話をしないと・・・泥棒になっちゃうよ」

調子付く双子の姉に紗耶香が捻を押した。自分達の所有物では無いのだから、勝手に部品を取ったら間違いなく怒られるだろうことを、早く学んでほしいと心の内でため息をついた。

「そういえば、真子さんのお父さんの倉庫にあったサンパチって確か初期型なんでしたつけ？」

圭太が少し前にRGのエンジンを運ぶのを手伝った時の事を思い出した。グリーンに白のラインが思い浮かぶ。

「ええ、それも国内物の真正銘初期型のね」

「国内物・・・？」

聞き慣れぬ言葉にクエスチョンマークが頭に浮かんだ。

「国内物っていうのはその名の通り、日本国内で販売されたバイクのこと。意外に思うかも知れないけど、私達くらいの年代のバイクだともうほとんど当時日本を走っていたものが無いの」

70～80年代・・・日本のバイクは国内外問わず飛ぶように売れた。しかしいくら売れたからと言っても新しい物好きで高度経済成長期にあった日本では現存台数が少ない。加えて湿気もあるので

状態もあまり良くないのだ。それに比べて世界中で・・・特にアメリカで大ウケした日本のバイクは広い国土や湿気の少ない環境、物を長く大事に扱うおかげで今でも多くの日本のバイクが眠っている。

しかしいくら状態がよくても、メーターはマイル表示。車種によってはカラーバリエーションや仕様などが日本と大きく異なるものもある。

なので、国内に現存しているその年代のバイクは状態の良し悪しに関わらず恐ろしく高額な値段が付くことが多い。新車販売時の3倍以上に値段が跳ね上がることもザラである。

ちなみに普通免許で乗れるクラスならCBX400Fが有名で逆輸入でも100万以上、国内物なら200万は下らないという相場は、まさに『CBXバブル』と呼ぶに相応しい状態になっている。

「私達のマツハは向こうから里帰りしてきたいわゆる『逆輸入車』だから、メーターが140マイルで刻んであるのよ」

ざっと説明し終わると由美と圭太は以前試乗した時、メーターが140までしか無かったことに納得した。

「翔子さんと圭太さんの国内物ですね」

「んー、あんまり意識してないけどね」

紗耶香の羨ましそうな視線に対して普通すぎる反応で返す圭太。

「話がそれたけど、ともかく私もいろいろ探してみる。今回ばかりは美春を見なおしたわ」

ギャグなのか本当になのか顔に死相すら浮かべながらうなされる美春を見下ろす真子。今までただの天然バカだと思っていたが話を聞いて見なおしたと同時に、横浜で初めて出会った時のあの走りは偶然で無いことも改めて認識した。

そんなのどかな雰囲気の病室の、丁度窓の外の真下からとんでもない爆音が響き渡ってきた。

ブバアアアア！！ブバブバブバアアアアヴ！！！！

その後エンジンが止まり、その爆音は消えた。下を見れば駆け足で病院入り口に向かう人影が見えた。

「なんだなんだ？すっげえうるせえ音がしたぜ！？」

「思い切り『族』の音じゃないか」

凜が耳を塞ぎながら驚き、真子が冷静になにかを判断したようだ。まあ2人のエンジン音も負けず劣らず爆音だが・・・

そんな2人の反応に由美はなんとなくニヤリとイジの悪い笑みを浮かべてみた。

「な、なんだよ？」

「いや、なんとなくよ」

「紛らわしいマネすんなー！」

意味の無い行動に凜が突っ込んだ。

「玲花やつと来たみたいね」

由美がつい最近知り合ったばかりの人物・・・横浜のレディース「月光天女」三代目総長兼スカウトの榛名玲花が病院に到着したようだ。しばらくすると、廊下の奥の方からドタバタと非常に迷惑な足音が聞こえてきたその瞬間、病室の扉がバタン！と力強く開かれた。

「美春姐様・・・！？」

開口一発、現れたのはかなり動揺しまくりのヤンキー少女、榛名玲花。

玲花の美春に対する敬称に一同がぼかーんとしていると、玲花はフラフラとベッドに歩み寄った。

「ね、姐様・・・」

いろんな意味で見るからに重傷そうな美春を見下ろして、ガツクりとうなだれた。

「ま・・・間に合わなかったか・・・！あ、あたいが何も出来なかったばかりに・・・！！」

「いやいや、美春ちゃん生きてるわよ。勝手に殺さないでちょうだい？」

「ふえ．．．？」

膝を折って美春の手を握り締めていた玲花に、由美が突っ込んだ。

「ていうか、さつきから『姐様』てなんなの？」

呆れ顔でたずねる由美。その問に対して玲花は何をバカなコトを、と言った顔で返した。

「んあ、美春姐様は美春姐様だろ？あたいは初めて会ったあの日、美春姐様に一生忠誠を誓ったのさ」

「ああ．．．そう．．．」

そういえば前回、美春が（無理をして）食事を奢ってくれた時に、そんなコトを言っていた気がする。義理人情が人一倍とは言え、やりすぎな気もするが。

「そんなコトより玲花。周りに一応みんながいるんだから、挨拶くらいしなさいよ」

とりあえず状況に付いていけずにはかーんとしている赤城3姉妹に目を向ける。

「なあ由美．．．コイツは？」

凜がとりあえずたずねると、由美が説明するより早く玲花が口を開いた。

「ども、『横浜月光天女』三代目総長．．．つってもあたいたいしかないんだけど．．．榛名玲花つす！ヨロシク！あ、ちなみに単車は日章カラー角タンのバブ？ね。コールもローリングもケツ持ちも信号止めも全部こなすスーパー総長！！うーん、あたいたら最強！」

びしっ！と言っちゃった．．．！榛名玲花は1人心の中で感慨に浸っていた。

「はあく、ゾッキヤってんのか。ホーク？とかまた似合う単車に乗ってるし．．．あ、オレは赤城凜。凜って気軽に呼んでくれよな」

「わ、私は赤城紗耶香です。よろしくお願いします」

双子の姉妹はそれぞれ自己紹介をした。特に凜の方は玲花に好意的でニコニコ笑っていた。

「凜に紗耶香ね。ヨロシク！で、そちらの長身のお方は？」

みんなの輪から離れて隅に立っていた真子に視線を向ける。

「赤城真子。よろしくね」

「あ、ちなみにオレ達の姉貴な」

凜が補足してくれた。

「ちなみに凜お姉ちゃんと私は双子で、真子姉さんは2つ上の姉さんです」

「やっぱり双子だよな、だって2人似てるもん」

紗耶香の説明に玲花もうなずいた。

「あ、ちなみに私達姉妹は真子姉さんと凜お姉ちゃんが400、私が250のマツ八に乗ってます」

「ま、マツ八あ!?!」

紗耶香の言葉に玲花が驚きの声を上げた。

「マツ八と言えば超硬派なカワサキの名車・・・あ、あたいのバブより全然速そう・・・」

「そりゃああんなに長いシートが付いていればね・・・」

驚愕している玲花の肩を、由美が玲花のホーク?の3段シートを思い出しながら叩いた。少なくとも速そうなバイクには見えない。

「ていうかあたいわかった!ここにいるみんな凄い単車に乗ってるのね!」

赤城3姉妹のマツ八を始め圭太の愛車FXは中型バイク金字塔だし、美春のGT380も70年代のスズキを支えた。まだ乗れる歳では無いが千尋のRGも後のレーサーレプリカへの布石だし、翔子のCB350Fourも中型初のマルチ。由美のゼファーもネイキッドブーム再来の立役者。そしてなにより・・・

「あたい好みの族車ベースが沢山ある!!!!!!」

思わずガッツポーズを取る。玲花の脳内で、皆の愛車が一齐に族車に成り代わって行く。リーゼント風防、絞りハン、ロケット、エビテール、3段・・・良く言えば古き良き活発だった日本の若者文化の・・・悪く言えば下品でちゃんと走らない違法改造車が脳内を走り回る。

「凄い・・・！あたい今凄い所にいる！！ここは昭和何年！？」

「目を覚ましなさい？今は平成よ？」

1人暴走する玲花に、由美がツツコミを入れた。

「あの、玲花さん・・・一応病院ですから、少し静かにした方が・・・」

今まで美春のそばに居た翔子がおずおずと声を掛けた。さすが医者
の娘にして常識人である。

「あ、悪い悪い・・・」

「ダメだよレイにゃん、静かにしなきゃあ」

「レイにゃんって言わないで下さいよ妹様・・・」

「いもうとさま？」

妹様と呼ばれて、千尋が首を傾げた。それに答えるために、玲花は赤城3姉妹に聞かれないように千尋の耳元で囁いた。

「はいな、あたいを広おい心で許してくれた姐様の妹分にしてあの伝説の霧島さんの妹様ですから」

「妹様・・・なんか偉くなつたみたい！」

千尋が無邪気に笑った。玲花はニコリと笑うと、視線を再び翔子と由美に戻した。

「そついや、なんで姐様は転んだのさ？姐様、単車転がすの上手かつたよな？」

その質問をされた時、場の空気が変わった。由美はチラリと美春を見た後、翔子に視線を向けた。

「あ・・・気にしないでください。それにその話は私から説明しますから」

「ん？どつたの？」

「実は……」

「……昨日あたいと会った次の日に、そんなことが……ねえ」

翔子のお話を聞き終え、玲花は美春に視線を落としながら呟いた。再び視線を翔子に戻すと、翔子の肩に手を置いた。

「でも姐様の気持ち、分かる気がするよあたいは」

「え？」

「自分のダチとか仲間が危険な目にあってたら、自分を盾にしても助ける気持ちがさ」

「フツ、と笑って翔子の目を見ながら言った。

「良い仲間がこんだけいるんだから、羨ましいね」

「いやあ、照れるわねえ……！」

「由美に言ったわけじゃ……」

横でえへへと笑う由美に圭太が突っ込みを入れる。

「あ……そういえばもう少ししたらおねーちゃんの退院時間だよ？」

「なんとなく時計を見ていた千尋が言った。

「最終検査みたいなのと後片付けがあるんだっけ？それなら僕達は先に下で待つてる？」

病院の退院前に、軽く検査のような物がある。といっても腕が動かせるかとか吐き気が無いかなどの病室で簡単な検査の後、これからの通院の話などをするだけですぐに終わるのだが、気を利かせ

て圭太が言った。

「ていうか、美春はいつまで寝てるんだ？」

全く動かない美春の腹をポンポンと叩きながら凜が言った。

確かに美春は全く動かない。まるでただの屍の様だ。

「そうだねえ、そろそろ起こさないかねー・・・ほらおねーちゃん、起ーきーて！」

千尋が両手でバンバンと布団の上から美春のお腹を叩く。相手はケガ人だと言うのに、かわいそうなものだ。

すると叩いた成果が出たようで、ようやく美春が目を覚ました。

「うー・・・」

「あ、起きた起きた！」

「んあ・・・ちーちゃん、おはよお・・・」

どこか寝呆けた感じで美春が挨拶した。ギブスの巻かれていない手で目を擦ると、一際大きなあくびの後。

「あと5分・・・いや、15分・・・」

「寝るつもりな上にさらに10分伸ばした!？」

そんな長い間気絶していたわけでは無いにもかかわらず二度寝を決め込む美春に千尋が愕然とした。

「ダメね・・・全く、これだからろくでなしーずは・・・」

「姉貴、この場合は『ず』じゃなくてただの『ろくでなし』じゃあ・・・」

「何を言っているんだ凜、ろくでなしーずは3人揃ってはじめてろくでなしーずなんだ」

「・・・・・・」

「凜お姉ちゃん・・・こ、これで涙拭いて?ね・・・?」

「・・・うん」

紗耶香に渡されたハンカチで、涙を拭くしか出来なかった。哀れ凜。

「待ってても仕方ないわね・・・それじゃあ私達は先に駐輪場に向いませう?」

由美の提案に、千尋と翔子以外のメンバーは病室の外に出た。白い廊下を歩きながら話していると、目の前である人物と遭遇した。

「あ……翔子ちゃんのお父さんだ」

「ん？圭太君、それは本当なのか？」

真子が圭太の視線を追った先に、女性看護師となにやら軽いミーティングをしている人物を認めた。圭太の言葉に反応して、由美たちも視線を向けた。

「本当！翔子ちゃんのお父さんだわ！」

「どれどれ……おお、あれか！」

昨日の夜、短い間だけ顔を合わせた由美もその姿を確認した。凛達も視線を白衣の医者に向けた。

向こうも気付いたようで、看護師に手を合わせてすまないとジエスチャーして、こちらに歩いてきた。

「こんにちは。もう帰るのかい？」

「はい、もうすぐ美春さんも退院するみたいなので」

圭太が代表して説明した。すると、翔子の父は「そうか、それは良かった」と一瞬笑顔になったが、すぐに真面目な顔で言った。

「君達……少し時間はあるかな？」

「はあ……大丈夫ですけど……」

「少し付き合ってくれないかい？なに、時間は取らせないよ。ジュースの奢り付きだよ？」

「本当！？……こ、こほん……え、ええ、大丈夫です！」

「そんなにがつつかなくても……」

ジュース奢りごときでテンションが上がってしまい、取り繕うも恥ずかしさに顔がまだ赤い由美に圭太が呆れる。翔子の父は優しい笑みを浮かべた。

「それじゃあついてきてくれるかな？下に休憩室があるからそこで話をしよう」

「わかりました。じゃあ早速……」

「あ、な・・・なあ？」

二つ返事で了解しかけた圭太を遮って玲花が手を挙げた。

「あの、あたいはどうすればいいかな？チームの関係者じゃないしさ・・・」

「何言ってるのよ？チームなんて関係無いわよ？友達なんだから一緒に来なさい！？」

「うんうん、翔子の友達なら是非来てほしいな」

由美と翔子の父の誘いもあり、とりあえず玲花も後に続いた。

一階に降りると、人でごった返すフロアの待合場の脇にある休憩室に案内されて、一同はそこに入った。

「ここはスタッフ専用の休憩室だからね、人は滅多にこないし大丈夫だよ」

ニコニコ笑いながら翔子の父が言った。人数分の紙パックの飲み物を適当な種類選んで買った後、1人ずつ配っていった。

「いただきまーす！」

言うが早く由美はストローを紙パックに差し込むと勢い良く『飲むヨーグルト』を吸い始めた。

「そうだ、話ってなんの話なんですか？」

そんな由美には目もくれず、圭太がたずねた。すると翔子の父は紙パックをテーブルに置いて口を開いた。

「うん・・・昨日はウチの長男が君達を危ない目に合わせてしまった、申し訳ありませんでした」

そして頭を下げた。大の大人に頭を下げられて、一同は困惑した。

「か、顔をあげてくださいよ！僕達は別に気にして無いですから」

「しかし、私の長男が君達を公道で追い回して、真田さんをケガさせてしまったことは、親である私の責任でもある・・・それについては、僕が謝らなきゃいけない」

「まあ確かにそうだが・・・」

普段はクールな真子も慣れないシチュエーションに戸惑いながら

も頷いた。

「今回、真田さんの治療費と入院代、あとバイクの修理代は僕が弁償するのは当然の話なんだけど・・・それ以上に君達にお願いがあるんだ」

「な、なんですか・・・？」

紗耶香がたずねると、翔子の父はテーブルにバンっ！て手を置いて、頭を下げた。

「これからもずっと・・・娘と仲良くしていて欲しいん・・・！お願いします！」

「ち、ちよつとちよつと！」

由美が漸くストローから口を離すと、翔子の父に言った。

「そんなこと言われなくても私達はずーっと翔子ちゃんとは友達よ！」

全く、親子そろって似ているなあと思いつつながら由美が言うと、翔子の父は安心したように顔を上げた。

「ほ、本当かい！？よかった・・・」

「とにかくみんな気にして無いし、大丈夫ですよ」

圭太が言うと、翔子の父は「そうか・・・よかった・・・」と小さく呟いた。その表情は安堵に包まれていた。

それから軽く話した後、由美達は翔子の父と別れて病院玄関の外で待機していた。しかし・・・

「遅い・・・」

真子が腕時計を見て言った。待ち始めてからすでに30分が経過。

真夏日の昼間に立たされるのはキツイ。しかし、涼しい受付の前で待っていると病人怪我人、そして老人の通行の邪魔になってしまうので仕方無しに外で待っているのだ。

「でもさあ姉貴。こう暑い日差しの下にいと、今年も夏が来たなあ・・・つて、なんか嬉しくならない？」

「ならない。まあ冬よりはマシだが・・・」

「ちなみにあたいは夏が好きだ」

「いや、お前には聞いてねーし・・・」

赤城姉妹と玲花のにぎやかな(?) 会話が展開され始めた時、漸く病院玄関から3人の姿が現れた。

「あ、ようやく来たわ」

「ゴメンねー、おねーちゃんがなかなか起きてくれなくってー」

美春ではなく、千尋が苦笑しながら頭を下げた。一方寝ていた張本人はと言えば・・・

「暑い・・・ふあ・・・」

「み、美春さん!？」

「あ、姐様っ!!」

意味不明な擬音を残してぶっ倒れそうになった美春を圭太と玲花が支える。

「ああ・・・けーちゃん、れいにゃん・・・私、もうダメえ・・・」

「暑いのが苦手なんですか？」

圭太がたずねると、美春は弱々しく首を横に振った。

「あつくんからメールが来てねえ・・・『どーにもならん』つて・・・写真付きで・・・」

手にぶら下げていたケータイ(事故のせい或少し傷つき)を見せた。皆が覗き込んだ画面の中にはぐちゃぐちゃになった鉄の塊・・・もとい美春のGT380のフロント周りが・・・

「うわあ・・・フォークがくの字に・・・」

紗耶香が深刻そうに呟いた。

「フレームはなんとかなる・・・いや、なんとかするって書いてあるけど・・・当分治らないんだって・・・あ・・・空に大きな穴が・・・」

「ちよ、姐様！しつかりして！！」

「まだ休養が必要だな・・・早く家に返して寝かせた方がいい」

真子が冷静に判断を下した。

「そうですね・・・あ、じゃあ私タクシーを捕まえてきます」

翔子が病院玄関前にあるタクシー乗り場に走る。皆もついていくと、早速黒塗りのタクシーを捕まえた。

「じゃあおねーちゃんはタクシーで私が送るから、あとはよろしく」

「ええ、美春ちゃんお大事にね？」

「はゆひひひひ・・・」

美春の奇声を残して、2人を乗せたタクシーは走り去っていった。

残された7人はそれを見送ると駐輪場に足を向けた。

「それじゃあ私達も今日は解散しましょう？私も疲れちゃったわ」

ゼファアのキーを振り回しながら由美が言った。

「私も明日から試験があるし・・・その方が良さそうだな」

「あーあ、オレ達ももうすぐしたら期末試験だ・・・はあ」

「大丈夫だよ凜お姉ちゃん、前みたいに頑張れば」

赤城姉妹が励まし合いながら歩く。

「僕達も来週から期末だよ。由美、今回も大丈夫そう？」

「・・・ええ、もちろん大丈夫、夫。」

「はあ・・・」

そういえば最近ろくに勉強した姿を見ていなかった。圭太はため息をついた。

「翔子ちゃんの学校は？」

「私はもう今週から試験ですね。はあ、しばらくバイクには乗れません・・・」

「みんなテスト期間だね」

翔子のいつもどおりの反応を聞いて、圭太は少し安心したように言った。

みんな暗い表情・・・とまでいかなかったも、静かな雰囲気の中、1人ニコニコしている人物が・・・

「テストかぁ・・・あたいには関係の無い言葉ねえ」

「あれ？玲花さんの高校はテスト終わったんですか？」

紗耶香が羨ましそうに言うと、玲花は人差し指を立ててチツチツチと言った。

「あたいは学校に行っていないのさ！中学卒業してから社会人なんだ」

「中卒って奴？」

「聞こえは悪いけどね」

凜の質問に笑って答えた。

「確かに将来を考えたら高校くらいは出た方が良いかも知れない・・・でもあたい思った！！今から働いて、好きな単車を買って好きなようにイジって好きなように乗り回して好きなように青春を謳歌する・・・！！未来に向かって『守り』じゃなくて『攻めて』生きていく方がカッコいいんだよ！！」

歩ゆみを続けながら両手を広げて語る。

「そしてこれが！！あたいの青春！！」

駐輪場目の前に来て、自分の愛車であるホンダのCB400Tを指さした。

「このマーベリングの斜切り感、風防、絞りハン・・・！！全てにおいてあたいの青春！！」

日章旗カラーのホーク？を前に、1人テンションの高い玲花。一方周りの反応はと言えば・・・

「派手だなぁ・・・さすがゾッキー」

「ある意味、これがホークのあるべき姿なのかも知れませんが」

車体全体を見回して凜と翔子は笑った。豪快な物が好きな凜とホンダ党でありどんなジャンルにも理解がある翔子には受けが良かった

たらしい。終始笑顔で感想を述べた。一方・・・

「三段と言い絞りと言い・・・走りには向かない改造・・・」

どうやら真子にはあまり良く映らなかつたようだ。終始首を横に傾げている。

「何言つてんのさ、目立つたモン勝ちだよ世の中！速さなんか二の次！」

「ホークだつて速いバイクのハズ・・・もつたいない」

「な、なんだと！？あたいのバブ？に不満が！？」

「コラコラ、止めなさいよ2人とも」

見兼ねた由美が止めに入る。

確かに2人は両極端だ。真子は走りを求めるスタイル。玲花は乗りにくくても派手なスタイル・・・個人差はあれど、ここまで趣味が違つと確かに様々な意見が出るのも仕方が無い。

「じゃああなたのマツハはどれ！？」

「あれよ」

真子が指さした先には、ホワイトにグリーンのレインボーラインセパレートハンドルにバックステップ、純正改ダブルディスクにBEE Tキャストホイールが映える。テールカウルもFX用でシャープなラインを整形した、真子の自慢の愛車400SSマツハ？だ。

「低い姿勢で操り、BEE Tチャンバーから吐き出す白煙は後続車を包み込み、ストレートをフル加速する・・・この陶酔感が素敵な私の自慢のマツハ。ちなみに・・・」

「うわ、姿勢低つ。これじゃあ葉っぱにしがみついたバツタみたいな姿勢じゃなきゃ走らないな」

「な！？」

得意になつて語っていた真子の言葉を遮つて玲花が言った。

「それに、この赤いマツハのイモチャンはカッコいいけど、このチャンバーはなんかレーサーみたいで嫌だなあ・・・霧島先輩みたいなショットガンならまだしも・・・」

「ほう・・・！？言わせておけば・・・！そのブリキのオモチャみ

たいな汚い塗装のバイク乗りには言われたくない。むしろオモチャでしようそれ？」

「ああ！？なんか文句あんのか！？」

「文句しか無い」

「なんだとお！」

「コラコラ2人とも！止めなさいよ！」

さすがにまずいと思い、由美が間に入った。圭太や翔子達もまああと言いながら2人を宥める。

「止めてよ2人とも・・・ケンカはダメだつて」

「そ、それにバイクは人それぞれですし・・・」

「そうだよ真子姉さん、人は人、私達は私達でしょ？」

真子の肩を押さえながら紗耶香も説得した。2人はしばらく睨み合つと、そのままそっぽを向いてしまった。

「とりあえず今日は解散しようよ、しばらくはみんなテスト期間だから次の機会はまた後で決めよう」

「そうだな圭太君・・・すまないな、取り乱してしまって」

真子が頭を下げた。

「じゃあそういう感じで、また何かあったら連絡するわね？」

「わかりました。それでは、私はお父さんに会ってから帰りますから」

「ええ、それじゃあ翔子ちゃん！またね！！」

「はい！」

笑顔でお辞儀をすると、翔子は病院に掛けていった。

「それじゃあ私達も出ましよう？」

「そだな、今日はさすがに勉強しねーとなあ・・・」

由美の言葉を合図に、みんなが愛車をそれぞれひっぱりだした。

カシユツ・・・！！

バアアアアアアアアアア！！！！

2台の旧車は、そのまま駐車場から飛び出すと走り去ってしまった。

残された4人はポカーンとした顔で見つめていた。

「ねえ圭太・・・あの2人は仲良くやれるかしら・・・」

「どうかなあ・・・」

「オレはどっちの単車も良いと思うんだけどなあ」

「あうあう・・・」

本日の教訓、十人十色。

第47章 一件落着・・・？真子VS玲花！？（後書き）

後書き限定小話！！

『千尋の大冒険！？』

「・・・・・・・・」

拝啓、おにーちゃん。辺りは人、人、人・・・周りを囲む高くそびえ立つビル・・・駅にはホームがいくつも並んで、出口を探すまで大変でした。たどり着いたのは排気ガスとゴミと人の匂いが密集するコンクリートジャングル、新宿です！

「・・・・・・・・」

あ、紹介が遅れました。私、霧島千尋。それでも立派な中学3年生。今日はワケあって初めて新宿に来たよ。しかも1人で、その理由とは・・・

昨日、おにーちゃんが1人黙々とおねーちゃんのバイクを治してあげてる時。

「おお千尋。ちょいと頼みがあるんだがな」

「うん、なあに？」

「美春のサンパチのタンク、今板金中だべ？で、また色塗り直すんだがよ。塗料がねーんだよ」

おにーちゃんがさも困ったように言った。

「店でも買えるんだがな、高いんだわ。だから、安く手に入れるためにちよい協力してくんねーか？」

お、おにーちゃんに初めて頼みごとされちゃった！やった！嬉しくなった私はうんって言ったら、おにーちゃんはポケットから紙を出した。

「問屋でも安く仕入れるのは出来るが、業者向けの店があつてよ。

洋介ん家の名前使えばかなり安く買えるんだ。で、もう用意は出来てんだが取りに行く暇がねー・・・行つてくんねーか？」

なあんだ！ただのお使いだ！楽勝だよ！

「任せてよ！私だつてたまには役にたつんだから！」

「そつか、さんきゅ。じゃあこれ塗料代な」

手渡されたお金を、私は預かった。私からしたらかなりの大金だ。

・

「後、これ美春から。少なくともすまないが、これで遊んできてくれてよ」

ツナギのポツケからポチ袋を取り出した。なんでお年玉用のポチ袋なんだろう？ていうか、ポチ袋のポチつてなあに？いろいろ疑問に思いながらポチ袋を開けた。

「ご、ごしえんえん！？」

あまりの大金に噛んでしまった。普段私のお財布には、滅多に入らない樋口さん・・・だっけ？女の人が私を見てくる。

「ま、ヨロシクな。あ、ちなみに場所だけだよあ」

驚く私を前に、おにーちゃんがお使い先の地名を言った。

「新宿から上野・・・かあ」

そして、今。

ボーツとしてたらすぐに人にぶつかつちゃうくらいの人ごみの中、私は呟いた。

おにーちゃんが言うには、上野はそういう業者向けなお店とか安いお店が沢山あるみたい。それに、バイク街つていうバイク屋さんがある場所もあるんだつて。自慢じゃないけど、私は新宿とか渋谷

とか、そういう大都会に来たのは初めて。そんなこともあって、昨日は芸能人とかいるのかなあ、都会ってなんでもあるんだろおなあつて、はしゃいじゃって寝れなくて少し寝坊しちゃったのは内緒だよ？

とにかく、私はこの新宿から山手線っていうのに乗り換えなきゃいけない。

調べてみたら、山手線っていうのは終点が無くて、ずっとぐるぐる回ってる電車なんだって。私、ちゃんと下調べしてきたんだ、えへへ

「とにかく、ここからまた電車に乗らなきゃ・・・」

移動開始。それにしても人が沢山いるなあ。前が全然見えない。

切符売り場で、券売機上にある表を見る。新宿と反対側にあるんだあ・・・

切符を買って、改札を通る。さすがにこれは相模と一緒にだね。

「えつと・・・山手線、山手線・・・あ、あつた!!」

なんとか背伸びして、山手線のホーム発見

「あれ・・・でも、どっちだっけ？」

人が多すぎて2つある乗り場のどちらが上野に近いのかを忘れてしまった。止まって見ればどこ方面かわかるけど、人だらけで止まるに止まらない・・・

どうしよう・・・結局ぐるぐる回ってるんだから、どっちから乗っても一緒だよな？でも、早く帰っておにーちゃんに褒めてもらいたいし何よりこの人ごみから早く離れたいよお・・・

いや、待てよ私・・・迷っても仕方が無い！私はおにーちゃんの妹！こんな所で迷ってられないよ!!こういう時は・・・

「流れに身を流す！」

人ごみに流されるがままに、私はそのまま階段を登った。そうだ、上なら余裕があるだろうから、そこで確認すればいいんだよ。私、もしかして頭いい？

でも、そんな私の目の前に予想外な展開が待ち受けてた！

「で、電車来てる!?」

右手に緑色の山手線がすでに到着してた。電車の中から出てくる人や乗り込む人で止まらない。しかも……

「反対側にも!?」

見たこと無い、黄色い電車が止まった。そっちの電車にも人、人……

「あ……!!ち、違う!私は山手線に……!!」

ここに来て、流れに身を任せていたのがまさかの裏目に……!? 私の乗りたい山手線から、黄色い電車に乗り込む人の流れに押し流されていく。

「わ!ぷっ、ちよっ……!」

ダメ、人の壁は津波みたいに私を黄色い電車に押し流す。流れに逆らおうとしてみても、サラリーマンのおじさん達には私が見えてないみたい。くそう、あとちよつと背が高ければ……!!

「あ!!」

人と人の中から向こうを見れば、山手線のドアが閉まって発車しはじめてる。でもそれ以上の問題は……

「わわわ!この電車じゃ無いの!!」

あーれ!

そのまま、私は黄色い電車に乗せられてしまった。

あーうー!この電車じゃ無いのに、なぜなぜなんでえ?

こうして、私の旅は波乱の幕開けをしました。大丈夫かなあ?

続く……

第48章 絹の道（前書き）

赤城姉妹の双子が大暴れ（!?!）です!!

第48章 絹の道

「んー・・・やっぱ無い、かあ」

「そんなに都合良く行かないね」

「全く、なんでRGのエンジンはあつてGT380のパーツが1つも無いんだ？」

ある日の午後。赤城凜と、双子の妹の紗耶香は自宅から程近い『赤城建設』の倉庫内で埃と汗に塗れながらため息をついていた。

旭からサンパチに使える部品を探して、もしあつたら売ってくれとの趣旨のメールが来たのが数日前。それを読んで、それから時間を見つけては倉庫内を姉妹で探す作業をしてきた。

しかし、倉庫には父が長年掛けて集めたバイクのコレクションや部品に溢れ返っているため、その作業も至難を極めた。ちなみに長女の真子は大学の試験で来ていない。

「しかし・・・なあ、こっだけ漁って出てこねーんじゃ、もう無いんじゃねーか・・・？」

手を団扇にして仰ぐが一向に涼しくなる気配は無い。むしろ余計に暑くなってきた。窓無い倉庫内の気温は、夕暮れ時にも関わらず40度近くにまでなっていた。

「そうだね、お父さんはバイクは沢山集めてるけど、部品はほとんどカワサキのバイクだけだもん」

紗耶香も短いツインテールの先まで汗に浸けてため息をつく。カワサキ党遺伝子は親子代々なのだ。

「仕方ねー！こんな汗かいてたら何にもヤル気になんねーし、いつちよ走り行こうぜ！！」

「ダメだよ？凜お姉ちゃん、もう明後日は試験なんだよ？」

紗耶香が顔をしかめる。なんだかんだで試験直前。自分は時間を見つけてちよくちよく勉強をしているが、同じ年の姉の凜は時間さえあればバイクに乗っているんな所を走りに行く自由人。もちろん

勉強など全くやっていない。

「前は頑張って勉強したから良い点取れたのに、ここでサボったらまた悪い点数になっちゃうよ?」

「むぐつ……」

妹の確な指摘に、凜は何も言い返せなかった。しかし、こうも埃臭い場所で作業して、さらにその後おとなしく勉強など凜には出来るはずも無かった。

「大丈夫大丈夫、ちよいとその辺を走って帰ってくるだけだつて……」

「ダメ、そーやっていつつも遠回りして帰ってくるんだから」

凜の説得も虚しく、紗耶香は首を横に振った。すでに信用されていない事に少し悲しくなるが、しかしこっちも意地がある。

こんな暗くてただっ広くて埃まみれで、なおかつバイクに囲まれた場所で、鉄やオイルの匂いを嗅いできたのだ。今さら真っ直ぐ家に帰っておとなしく机と向き合って現国の復習をするなどと、そのような愚行、神が許しても自分は許さないと凜は固く心に誓うと、最終奥義である奥の手に出た。真剣そうな眼差しで紗耶香を見つめつつ倉庫内のバイク達を指さした。

「でも紗耶香?ちよつと見てくれよ」

「な、なに?」

「オレ達は今まで散々バイクに囲まれて作業してきた。目の前にザッパーとかW1とかカミナリマツ八がある中」

「うう……」

凜が言うと、紗耶香が少し表情を崩した。凜は心の中でニタリと笑うと、もう一息とばかりに押しに掛かる。

「もう我慢出来ないんだよ、欲求不満で……このままじゃ、オレなにするかわかんなくなる……」

「り、凜お姉ちゃん……わ、私も……が、我慢出来なくなっちゃうよ……」

「だろっ……?さあ、一緒に行こう……ピリオドの向こう側に・

「あぁ、ダメなのに……！ダメなのにい……！！」

グアアアアアアアアア！！！！バリバリバリ！！！！

パiiiiiiiiiiii……！！パリンパリンパリンパリン……！！

「うっひゃあ！！やっぱ、マツハは最高だぜい！！」

「うう……明後日試験なのに……乗せられちゃったあ……」

あの後、2人はそれはもう文字通りマツハで倉庫を施錠した後、愛車に跨がり走り出した。しばらく走った先の信号で停まった2人の反応が、2人の個性を表している。え？上の文章がなんかおかしいって？知らないなあ……

「まあまあ、走り出したらなんとやらだぜ紗耶香！こうなったら今日はとことん走り尽くそうぜ！」

「だ、ダメだよ！！もう絶対にこれ以上は行かせないんだから……！！」

「へっへー！止められるもんなら止めてミソってな！！」

信号が青になった瞬間、絶妙なクラッチ操作でスタートダッシュする赤い400SS。ショートイモ管から吐き出される異常な量の白煙と爆音を背後に残して走り出す。

「あ！狭い道でフル加速はダメって言うてるのに……！！待って

よー!!」

ブルーの250SSマツハに鞭を入れて、姉を追い掛ける。しかし、排気量の差とノーマルとチューンドの差は平坦な道では埋まらず、徐々に離されていく。前を走る凜が後ろを振り向いて余裕綽々で言った。

「はっはあ!!今のオレを止められる奴はどこにもいないぜい!!」

「凜お姉ちゃん!!危ないっ!!」

「へ・・・?」

悔しがる妹の顔を拝んでやろうと思つてたのに、その表情はさながら自分の愛車と同じくらい真っ青にさせた妹を見て、凜は前を見た。すると・・・

「ひ、人っ・・・!?!」

横断歩道の無い車道を、杖について横断する人影が。向こうも気付いたようだが、恐怖のためか曲がった腰のためか、道路の真ん中で止まってしまっていた。

「つくしょう!!動くなよ!!」

時速約50キロからのフルブレーキ。ブロー覚悟のエンジンブレーキも駆使して回避運動を始める。しかし、その距離はぐんぐん近づいてくる。相手の顔がわかるくらいの距離になって、凜は覚悟を決めると舌打ちした。

「上手く決まれ!!」

叫び、クラッチを切つてアクセルを全開に煽るとリアブレーキのペダルを強く踏みしめる。リアがズルリと滑りだした。真横を向いた瞬間、ブレーキから足を離してクラッチを繋いだ。

ギョババババババ・・・!!!!!!

衝突まで残り数十センチで、マツハはその場で180度ターン、停車。しかし、バランスを崩して立ちコケしてしまった。

「凜お姉ちゃん！？大丈夫！？」

ブラックマークの残るアスファルト。紗耶香がマツハから降りて叫ぶと、凜は苦笑いしながら手を挙げた。

「ははは・・・撥ねなくてよかった・・・ぜ、はあ」

「本当だよ！もつと気を付けなきゃダメだよ！！あ、大丈夫でしたか？」

普段のおとなしい態度から一変、凜を怒鳴り付けると道路に腰を抜かしている人影に声を掛けた。

相手はかなりのお婆さんだった。

「いやあ・・・もうダメかと思ったよ」

「ケガとかは無いですか？痛い所とか・・・」

「ええ大丈夫・・・驚いて転んじゃったただけだからねエ・・・」

紗耶香はお婆さんの肩を抱えると、そのまま立たせてあげた。

「いやあありがとね・・・」

「いえこちらこそ・・・！ほら、凜お姉ちゃん！！」

「いたたた痛い・・・！耳千切れる・・・！！」

お婆さんを避けた拍子の立ちコケで傷ついたステップゴムとクラシクケースのカバーを見てため息をついていた双子の姉の耳をちぎる勢いで引つ張る。

「ほら、謝るのが先！今回の件は凜お姉ちゃんが全部悪いんだからね！？？」

「わ、わかつてるよ！！だから耳放して・・・！！」

耳を解放されると、凜はあまりの痛さに涙目になりながらお婆さんに向き直ると頭を下げた。

「あ、その・・・よそ見運転してて・・・ほ、本当にすみませんでした・・・」

「いやいいよオ、あたしゃまだこうやって生きてるし」

凜の謝罪を、笑顔で許してくれた。

「ほっ・・・よかったぜ・・・」

「良くないよ・・・？」

「うわっ!？」

安堵のため息をついた凜に、紗耶香がボソツと呟いた。

「凜お姉ちゃん・・・?前にも言ったよね、狭い道でスピードは出しちゃダメだよって。ううん、こんな事、教習所でも習うよね?凜お姉ちゃん?」

すごいニコニコ顔で、しかしどす黒いオーラをびんびんに張り巡らしながら、紗耶香がゆっくり口を開いた。

「今日はお家に帰ったら、学校の勉強の前に乗り物のルールと社会のルールをゆっくりみっちりたっぷり教えてあげるからね?あと今日の反省会も」

「え、いや、その・・・学校の勉強もやらなきゃ・・・」

「り・ん・お・ね・え・ちゃ・ん・・・」

「はい!わたくし、赤城凜!紗耶香様のありがたい自動車講習、喜んで受けさせてもらいますっ・・・!!」

震え上がりながら、凜はおとなしく従うことにした。キレモードの紗耶香は、たとえ姉の真子ですら止められないのだ。もしここで逆らおうものならどんな目に遇うか・・・考えただけで鳥肌が立つ。

そんな姉妹の騒動をよそに、お婆さんは何かを探しているのか辺りをキョロキョロと見渡し始めた。

「アレま・・・あたしの杖はどこ行ったかね?」

「杖・・・ですか?」

紗耶香が復唱する。そういえば、確かに杖を持っていた気もするが・・・

「なあ紗耶香・・・」

「なに?今おばあちゃんの杖を探してるんだよ?凜お姉ちゃんも・・・」

「お前のマツハのフロントタイヤに潰されてるのって・・・杖?」

「一緒に探して・・・え?」

言葉が停止した。凜の指すのは、自分の自慢の愛車、250SS

マツハ？。そのフロントタイヤの後ろに、真つ二つに折れた棒きれが一本、無惨にも転がっていた。

「おやまあ・・・あたしの杖だわ」

お婆さんが口に手を当てて言った。その瞬間・・・

「す、すみませんでしたあっ！！！！！」

ビタン！と地面にへばりつき、土下座する紗耶香。焦っていて気付かなかったが、そういえば停まる瞬間、何か踏んだような気もしたのを、今思い出した。

「だ、大事な杖を折ってしまいました！す、すみませんすみません！！あ、後で絶対に弁償しますので・・・！！！」

「ありやりや、紗耶香ちゃん、やっちゃったねえ、え？」

「つぐ・・・！！！」

土下座する紗耶香を見下ろす形で小馬鹿にしたような声で神経を逆撫でるのは、双子の姉の凜。

凜からすれば、先ほどまで散々上から目線で怒られていたので少し仕返ししてやろうと思ったただけであった。しかし・・・

「う・・・ぐすつ・・・！！！」

「・・・え？」

見れば、紗耶香ががつつり涙目になっていた。マジで泣き出す5秒前！

「あ・・・わ、悪い、言い過ぎたって・・・そのだから、泣くなつて・・・」

泣き出す妹におろおろしながら声を掛ける。すると今まで見ていたお婆さんが紗耶香の前で屈むと、その皺くちゃな手を肩にポンッと乗せた。

「杖なんか家に帰りやあるから、気にしなくてもええよお。それより、おばあちゃんはそうやって素直に謝ってくれただけで、もう嬉しくてねエ」

「え・・・？で、でも・・・」

「それより、杖を踏んで転ばなくてよかったねエ。杖は人を立たせ

てくれるけど、それ意外じゃあ人を転ばせる道具になっちまうからねエ」

「お・・・おばあちゃん・・・!!」
「だきっ!!」

おばあちゃんに抱きつき、ぎゅーっと抱きしめる紗耶香をおばあちゃんがまるで孫を可愛がるように頭を撫でる。

「え、ちょ・・・オレは・・・?」

1人置いていかれた凜が、ぼつーんとつつ立っていた。

「しかし困ったねエ・・・杖が無くても歩けるにゃ歩けるけど・・・」

「

「大丈夫ですよおばあちゃん、私達が責任を持って送りますから」
「本当かい?」

お婆さんが嬉しそうに言った。

「もちろんですよ。あ、ちなみにおばあちゃんは凜お姉ちゃんが背負って行きますから安心して下さいね?」

「うおおおい!!なに背負うって!!?」

「当たり前じゃない。それとも、凜お姉ちゃんはこのままおばあちゃんを置いていくつもり?」

「バイクがあるじゃねーかバイクが!」

「バイクの後ろって、おばあちゃんがバイクに乗れるわけないよ、だから凜お姉ちゃんは徒歩+おんぶ。私はマツハ」

「なんで!? 流れる的にお前も徒歩だろ!? なにマツハって・・・!!」

姉妹の言い争いが勃発。この場合どちらが正しいかと言えばどちらも正しくは無い。不毛な口論が続く。そんな中・・・

「よっこらせ・・・」

「だから、せめておばあちゃんをタクシーに乗せてあげるとかさ、あるだろいろいろ」

「ダメ、それじゃあ凜お姉ちゃん反省しないし」

「反省してるって! だいたい背負って歩いたらなんつーか・・・乗

り心地とか悪いだろおばあちゃんが」

「じゃあバイクに乗せるの？おばあちゃんじゃあ絶対に振り落とされちゃうし、危ないよ。なによりまずシートに座れるかどうかって問題……が……？」

紗耶香の口が止まった。見れば自分のブルーレインボアのマツハに、おばあちゃんが乗っていた。

「あたしゃ大丈夫だよ、オートバイに跨がるくらいなんてこた無
いさ」

「ええ！おばあちゃん、乗れたんですか！？」

口をあめぐりしてつつ立っている凜の横で、紗耶香が悲鳴にも似た叫びを上げた。そんな2人の反応を見て、お婆さんは笑った。

「あたしゃあ乗れないよお、こんな大きなオートバイなんて。ただ昔に息子が乗っていたのサ」

「ああ、なるほどな」

手を打って納得する凜。なるほどそれならば確かに納得だ。しかし……

「おばあちゃん……あの、ごめんなさい……乗ってから言うのも悪いんですが……」

「どうしたんだよ紗耶香？」

紗耶香が申し訳なさそうな顔で頭を下げた。

「その……キック始動なので、降りてもらわないと……」
「あ……」

凜が納得した。スターターなど無いマツハのエンジン始動はキックである。後ろに人がいる状態ではキックが出来ないのだ。

「よくわからんけど、そんなに疲れるワケでも無し、大丈夫だよ」
お婆さんがリアシートからゆっくり降りる。紗耶香は「すみませ
ん……すぐ済みますから」と言って、マツハに跨がる。

．．．．．スピード、タコの間にあるキーシリンダーに刺さったキーを捻る。するとぼわあっとニュートラルランプが点滅する。暖まったエンジンはチョークを引く必要は無い。自分で組み上げた自慢の2ストトリプルのエンジンはキックと同時に、勢い良く吹け上がった。

パアアアアアン！！！！

パリパリパリパリ．．．！！！！

ああ、この爆発音．．．！！排気音．．．！！

なんと聴いてもシビれてしまうこのサウンド．．．！！！！

生まれた時から伝説の遺伝子を引き継いだ最強の250cc．．．操る者にしかわからないこの昂揚．．．パワーやスピードでは無い、素晴らしい世界．．．素晴らしい日々．．．！！！！

そうだ、私のマツハが1番なによりも1番、そう、絶対無欠未来永劫に1番そして永久欠番！！

さあ、真白い白煙に包まれながら後続車は跪きなさい！？あつはつはつはつは．．．！！！！

「ーか．．．！！さーやーかー！！」

「ふふふへ．．．顔面オイルシャワーでも食ら．．．て、あれ？凜お姉ちゃん．．．？」

「なにさつきからぶつぶつ言ってんだよ？エンジン掛けたら早くお

「ばあちゃん乗せてやれよな」

「・・・つあ！？ご、ゴメンなさい！！」

気付いたらいつものクセで脳内暴走を起こしてしまっていた。カワサキ愛もここまで来ると病気かも知れない・・・

お婆さんに乗っけると、紗耶香は掛けてあったタンデム用のジェットヘルメットをお婆さんにかぶせる。

「それじゃあ行きますね？しっかり捕まっけてくださいね？」

「うんうん、お願いねエ」

ギヤを入れると、先ほどの妄想とは真逆の操作で丁寧に発進した。

お婆さんの家はとうやらすぐ近くの山の中腹にあるらしい。

走り続けると途中、お婆さんの指示でわき道に入ると登り坂が現れた。マツハとは言え250ccの28馬力。ギヤを落として回転を上げるも、さすがに馬力が足りていないのを痛感させられる瞬間だ。

「ほらほら、あの畑の上にある家があたしのだよ」

お婆さんが指を指す先には、古ぼけた木造の平屋があった。紗耶香はそれを確認すると、もう一踏張りと言わんばかりにアクセルを開けた。

そしてまもなく、

紗耶香達はお婆さんの家にたどり着いた。もう日も暮れてしまっていた。

「いやあ、ありがとうねえ」

「いえいえ、当然の事をしただけですよ」

マツハから降りたお婆さんとのささやかな会話をする。するとお婆さんは玄関に向かって歩きだすと、双子の姉妹を手招きした。

「せっかくだからねエ、お茶でも飲んでいかんかね？」

「あ、いや・・・そこまでしてもらうのは悪いですよ」

お婆さんの誘いを遠慮する紗耶香。予定外な外出な上、こちらが悪いのにお茶をご馳走になる訳にも行かない。

「若いんだから、遠慮すること無いよ。それに、長く独り身でねえ」

「む……うー……」

お婆さんの表情に、心に迷いが生まれる。そこまで言われてしまうと、どうにも断れなくなってしまう。

すると今の今まで隅でタンDEMとは言えマツハに乗るお婆さんの姿に笑いを堪えていた凜がずいっと前に出てきて、紗耶香に耳打ちした。

「紗耶香よ、こういう時はな？素直にご厚意に甘えるのも大事なんだぜ？」

「うー、そうかも知れないけどお……」

「それに、おばあちゃんなんか寂しそうだし。少し話していく位問題ないだろ？」

「そんな事言つて、本当は勉強がしたくないだけのくせに……」

「そ、そんなこと無いんだZ E ……」

変な口笛を吹きながら、バレバレな嘘をつく。そんな姉にため息をつきつつ、紗耶香はお婆さんに言った。

「わかりました、お言葉に甘えさせて頂きますね」

「本当かい？ありがとうねえ」

お婆さんは嬉しそうに言つと、双子を家の中に案内した。

2人が案内されたのはごくごく普通の居間であった。古い木造建築の家だけあって布団は外されているが掘りコタツがある。

畳に腰を下ろしてしばらく待っていると、お婆さんが台所からお盆を持って現れた。

「あんまりいいモンじゃないけど、茶菓子に饅頭があるから食べなさい」

「お！お饅頭！！ありがとうおばちゃん！！」

「そ、そこまでしてもらわなくても……」

お盆に乗ったお饅頭に、凜が身を乗り出して喜ぶ。さすが圭太の誕生日に饅頭をプレゼントしただけのことはある。そして相変わら

ず紗耶香は遠慮気味に言うと、お婆さんはお茶とお饅頭を2人の前に置いてから言った。

「気にしなくても大丈夫だよ。ほらお食べ」

「いったきまーす！モガモガ・・・」

「あ、凜お姉ちゃんもっとお行儀良く・・・ああもう・・・あ、それでは頂きますね」

双子で同じ顔をしているはずなのに、こつちも中身に違いがあるともうどちらが姉なのかわからなくなってくる。

そんな双子を見つめながら、お婆さんは皺だらけの顔に笑みを浮かべながら話出した。

「仲がいいねえ。そういえば、2人は双子なのかい？」

「もががが・・・あ、うん。因みにオレが姉でこつちが妹で・・・もぐもぐ・・・あと、上にもう1人姉貴がなんだ」

「凜お姉ちゃん、口に物入れたまま話しちゃダメだよ？」

妹の紗耶香が姉以上に姉らしく凜に注意した。

「どつちがお姉ちゃんだかわかんないねえ」

お婆さんが笑いながら言うと、懐かしそうな顔で語りだした。

「ウチは1人息子だったから、兄弟姉妹つても良いモンだねえ」

「ゴクゴク・・・ぷはあ。んー、まあ色々事情はあるみたいだけだなあ」

饅頭をお茶で流し込むと、凜は知り合いの兄弟を思い浮べて首を傾げた。旭と千尋は、詳しい話は知らないがいろいろと問題があったみたいだし、翔子は翔子で今いろいろと大問題だし。

「そういえば、姉妹はみんなオートバイに乗ってるの？」

「そうなんですよ。私と凜お姉ちゃん、2つ上の真子姉さんもみんな古いバイクに乗っているんです」

「今でもいるんだねえ・・・最近の若い子はオートバイには興味が無いみたいだからねえ。ウチの孫も興味が無いみたいでねえ」

「おばあちゃん、バイクには反対とかしないの？」

凜がお茶を飲み干しながらたずねると、お婆さんは気を利かせて

お代わりのお茶を入れながら答えた。

「そりゃあね・・・当時は反対だったよ。あの時は暴走族とか増えてね、バイク事故もいっぱいだったからねエ・・・」

昔を思い出しながら、お婆さんは続ける。

「あの子が高校に入ったところかねえ、私にねえ『頼むからオートバイを買わせてくれ』って言うってねえ。お父さんとも最初は反対したのよ。でも、聞かなくなっただけねえ。日払いの仕事と学校を両立させて新車買ったのよ」

「し、新車・・・」

紗耶香が驚きの声を上げた。当時の高校生の日払いの仕事でバイクを新車で買うと言うのは今よりもとんでもない事なのだ。

「いろんな所に友達と走りに行っただけねえ、沖縄以外は日本全部回ったね」

「す、すごい・・・」

さすがの凜も驚いた。

「それから、何年もそのオートバイに乗ってねえ。乗り換えたりしても、最初のオートバイだけは今でも大事に取っただけねえ。素敵だよ」

「はあ・・・そりゃスゲー・・・」

「やっぱり思い出がたくさん詰まってるんだろなあ・・・素敵なお話です」

2人はその話を聞いて、想像した。自分達も、このマツハと一緒に、『旧車物語』の仲間と共にそんな旅してみたい。そう思うとなんだかワクワクしてきた。

「あー、因みにおばあちゃん。息子さんって、どんなバイクに乗ってたん？」

凜がたずねると、お婆さんは難しそうな顔で首を傾げた。

「白いオートバイなんだけど・・・あたしゃオートバイには詳しく無いからねエ・・・」

「んー、白っただけじゃあわかんねーなあ・・・」

「うん、一応絞ることは出来る」

凜のあきらめの言葉を遮って、紗耶香が言った。

「だって、白いバイクって70年代後半まで発売禁止されてたんだから」

「あ、そっぴやそっぴだ・・・」

紗耶香の言葉に、凜も納得した。

1968年。世にも有名な三億円事件が発生。ヤマハのスポーツ350R1と言うバイクが青から白に塗られて偽白バイとして犯人に使用された。事件の詳しい話は省くがそれ以降、国内市販車の塗装に白は禁止されていたのだ。

因みに500SSマツハ？の初期型とえば白を思い浮べる人も多いかと思うが、白いマツハは輸出専用カラーであり国内仕様は赤と黒・・・俗に言う赤マツハと黒マツハしか無く、白マツハが日本の道を走ったのは逆輸入が盛んになった80年代と、発売から10年以上後のことである。

それらのことから考えて、その息子さんに乗っていたのはおそらく80年代のバイクである。その時代の白いバイク・・・紗耶香の脳裏に1台の車種が浮かび上がった。

「もしかしたら、RZとかかも・・・」

「あー、確かに！RZなら白いな。てか、その系統のヤマハって全部白くねー？」

「うん、多分間違い無いよね」

姉妹は自分達の推理がそれなりに当たっていきそうな予感にはしゃぎあう。

「しっかし、実際に見ないことにはなんとも言えねーよなあ・・・」

「あの、写真とか無いんですか？私達、少し気になってしまって・・・」

紗耶香が申し訳なさそうにたずねた。するとお婆さんは困ったように笑った。

手探りでスイッチを見つけると、パチンと音と共に、古ぼけたオレンジ色の電球に光が灯る。

そして、とうとう目的のバイクとご対面した。しかし・・・

「あれ・・・？なんだコレ」

「見たこと無いバイクだね」

見慣れぬバイクが、そこにあつた。

エンジンと地上高のマージンがかなり広めに取られており、マフラーがエキパイからその場で180度向きを変えてシリンダーの脇から後ろに真っ直ぐ伸びている。前後ドラムブレーキで、マフラーが2本出ているがエンジンの大きさから250cc単気筒であることはわかつた。

「なんだろう・・・オフ車か？」

初めて見るバイクを凜がじつくり眺めながら呟く。よく整備されている様で、クラッチを握ると固着はしていないようでちゃんと握れたし、アクセルもブレーキもちゃんと操作出来るようだ。

「どこかで見た気がする・・・」

一方紗耶香は腕を組んで唸りながら考える。サイドカバーには何か書いてあつたのだろう。しかし色褪せが激しく読み取れず、クランケースとタンクのHONDAのエンブレムだけが頼りだ。

スズキのハスラーやカワサキのA1サムライスクランブラーなど、オフロード車をあげていくがなかなか思い出せない。その時・・・

「わかつた！！」

「うわっ、なんだよ紗耶香」

いきなり叫んだ紗耶香に凜がたずねると、紗耶香はニコニコ顔で答えた。

「このバイク、名前が分かつたの」

「な・・・！本当かよ・・・」

凜が驚きと呆れの交ざつた顔で呟くと、紗耶香が笑いながら言った。

「これ、ホンダのシルクロードだよ！！」

「シルクロード・・・？なんだそりゃ・・・」
紗耶香の自信満々の答えに、凜が？マークを浮かべる。

ホンダ、シルクロードは81年に出たトレッキング（山登りの意味）バイクで、頑丈なエンジンとスーパーローギヤ。山道を走るのに適したサス周りにディスクでは無く砂埃に強いドラムブレーキを備えたバイクである。オフロードとは違い、街中も山道も走るバイクなのでシート高も当時のネイキッドとあまり変わらないのも、シルクロードの特徴である。

「かなり希少車だよ・・・はあ、感激しちゃうなあ・・・」

「よくわかんねーけど、とりあえずすごいバイクなんだな」

うつとりしている紗耶香の言葉に凜はなんとなくだが珍しいモノなんだなあ、と思いながら呟いた。

今まで後ろで見ていたお婆さんも、その名前を聞いて思い出したらしい。昔を懐かしんでいるのか、柔かな表情で呟いた。

「そつえばそんな名前だったねエ・・・」

「なあなあ。コレ、今でも走ったりするの？」

凜がワクワクしながらたずねると、お婆さんは頷いた。

「孫連れて帰ってくると、家族放つとつて裏山を走りに行ってるよ。昔っから変わんないからねえ。2人もあのオートバイ、事故しないように大事にしなさいね？」

「はい！」

それからしばらくしてから、凜と紗耶香はお婆さんの家を出た。お婆さんは「また来なさいね」と言って、最後まで手を振って2人を見送る。

2台の姿が見えなくなり、家に入ると一本の電話が鳴り響いた。受話器を取ると、お婆さんは笑顔になった。

「そういえばねえ、今日は可愛いお客さんが2人来たのよ。アンタの宝物見て、頑張るって言ってたねえ・・・夏休みになったら、家族連れてウチに来なさいね」

そしてその言葉に対する答えを聞いて、お婆さんはいっそう笑顔になった。

「あー楽しかったあ！」

「全く・・・事故にならなかったから良かったよ・・・はあ」

帰宅後。ガレージに愛車を停めた凜の言葉に紗耶香がため息をついた。

「でも、あのおばちゃん。嬉しそうだったよなあ」

「うん、また行こうね！凜お姉ちゃん！」

「おうよー！」

「えへへ・・・でも、帰りが遅くなっちゃったね」

腕時計を見て紗耶香はまたため息。時刻はすでに9時を過ぎていた。

「今日はもう飯食って風呂入って歯あ磨いて早く寝るしかねーな！」

がっはっは！と笑いながら凜が言う。すると・・・

「ダメだよ・・・凜お姉ちゃん？今日は学校のテスト勉強と私の自動車講習があるんだから」

さつきまでの笑みはどこへやら。ジト目で凜を見る紗耶香。そして急に恐ろしい笑みを浮かべた。

「今夜は寝かせないよ・・・？凜お姉ちゃん・・・？」

姉の襟首をがっちり掴んだ。

「まず部屋についたらそのまま勉強だよ？一問正解することにご飯一口ね？それからお風呂は明日の朝まで入れさせないんから。トイレ休憩は1時間に1回、1分以内に済ませてね？」

「そ、そんな・・・！そりゃあ無いぜ紗耶香あ・・・！！」

「フッフ・・・じゃあ早くお家に入ろうよ・・・？」

「ひ、ひいいいいああああ！！！！」

ズルズルと限界に引き摺られていく凜の断末魔の悲鳴は、ドアが閉まり切るまでの短い間、近所一帯に不気味に響き渡った。

この時の状況を赤城真子氏は

「紗耶香の部屋から凜が啜り泣く声が聞こえて、たまに悲鳴が聞こえた。そういえば、最近私も凜をイジメていないな・・・フッフツ・・・」

凜の明日はどっちだ。

第48章 絹の道（後書き）

後書き限定小話！！

『千尋の大冒険！？そのに』

「・・・」

拝啓おにーちゃん、お元気ですか？私は元気です。

何とか隣の駅で降りれたけど・・・結局また新宿に戻らないといけなくなりました・・・

そもそも、あんなにいっぱいホームがあるのが間違いなんだよ、うん、仕方ないよね。

・・・よね？

というわけで、今私は駅の改札に来ました。でもここじゃ降りません。駅員さんに道案内・・・違う、電車案内・・・？まあ、とにかく上野の行き方を聞いてきます。

「あの・・・」

「はいはいなんですか？」

何でだろう、制服を着た人と話すのって緊張するよね。

「上野に行きたいんですけど・・・何番線でのればいいんですか？」

「ああ、上野ならその階段上がって。そしたら山手線に乗れば着くからね」

「あ、ありがとうございます」

ふう・・・何とか教えてもらえたよ・・・

ていうか、最初からこうしておけばこんなことにはならなかったのに・・・今度からわからなかったら聞くクセを付けよう。うん。

会談が上がったらちょうど山手線が来た。うん？電気屋さんのシールが貼ってある・・・都会はすごいなあ。

電車に乗った。この時間は人が少ないんだね。とりあえず座ろうかなっあ・・・!??

すごい!!電車のドアの上にテレビついてる!!すごい!!
なんかニュースが流れてるよ!?あんまり良いニュースでないみたいだけど・・・

ぐぬぬ・・・私の住んでるトコの電車なんて中吊り広告しかないのに・・・テレビまでついてるなんて・・・さすが都会!侮れない・・・!!

まあ、あんまり電車乗らないから良いんだけどね。へ?何でって?それはおにーちゃんがバイクで送ってくれたりしてくれるからだよ
お・・・えへへ・・・

まあ、しばらくは揺られてるだけだし・・・ニュースでも見ながら上野に着くのを待つてよう。

あれ、鷹〇爪だ・・・アセロラか・・・

そんなことをしている間に、もう上野だつて!!

ようし!ここまでくれば大丈夫だよ!お店までの地図もあるんだから!待つてねおにーちゃん!おねーちゃん!!

・・・あれ?

広くて・・・出口がいっぱい・・・

どこに出れば・・・あ、地図を見れば・・・!!乗ってない・・・

駅からの道のりしか書いてないよう・・・
どうしよう・・・

続く・・・

第49章 史上最強の鈍感少年（前書き）

長らくお待たせいたしました・・・汗
今回はバイクはお休みです。汗

第49章 史上最強の鈍感少年

「テスト・・・テストテストテスト・・・はあ」

7月に入り、急激に日が長くなった。夕暮れが照らす部屋の中で由美は1人机に向かっていた。

「毎年毎年・・・なんで夏休みが目の前って所でこんな障害物があるのかしら・・・」

由美と圭太の通う学校は7月前半に試験があり、それが終わるとすぐに夏休みに入る。なのでこの時期は生徒も教員も忙しくなる。

そして、夏休みに入っても一部の生徒は補習で夏休みが延期になったり進学のための準備があるため、今年の夏休みは去年に比べると驚くほど時間が無いのだ。だから少しでも長く夏休みを過ごしたい、補習を受けたくない・・・そんな一心でとりあえず数学のノートと課題のプリントを開いたは良いが、もう頭の中はここ数日の出来事と夏休みイベントの事で頭がいっぱいいっぱいなのだ。

「翔子ちゃんは・・・もう大丈夫よね。美春ちゃんのサンパチも多分大丈夫だと思うし・・・真子さんと玲花は・・・なるようになる・・・かな？」

背もたれに寄りかかり椅子をウィリーさせ、シャーペンを回しながらぶつぶつと呟く。由美ははつとなつて椅子を地面に下ろすとシャーペンを握りなおした。そしてすぐに投げ出した。

「あーもう！全っ然集中出来ないわ・・・はあ」

反り立つ壁のように立ちふさがるテスト期間勉強。この登れそうに登れない壁の前に、由美はため息をついた。

後もう少して手が届く夏休みという名のファーストステージのゴール。それを目前にしても、集中が出来ないのだ。

「もう少し・・・もう少しなのに・・・あ！」

ピカんと電球が光った。自分がテスト期間と言うことは、つまり同じ学校、同じクラス、そして幼なじみの圭太もテスト期間なのだ。

「・・・あ、遊びに行くワケじゃないわよ・・・！？ちよつと一緒に勉強しようつてだけなんだから・・・！決して変な事なんて考えてないんだから・・・！うん、そうしましょう」

こうして、由美は学校のカバンにノートやら筆記用具やらを押し込み、圭太の家に何故かスキップで行くのであった。

靴を履き、玄関を飛び出すと向かい斜めにある中山家に向かう。家の前にたどり着くと、そこは勝手知ったる人の家。門にあるインターホンを押さずに敷地内に入る。

そして玄関にたどり着いて、漸くインターホンを押した。

ごくごく普通のベルが鳴り、玄関から出てきたのは予想通り圭太だった。

「あれ？どうしたの？」

「い、いやね・・・その、一緒に勉強しようかなあ・・・なんて思ったりして」

この場合一緒に勉強ではなく勉強を教えてもらいに来たになるのだが、そこには突っ込まず、圭太は2つ返事で了承した。

「マジメにやるなら構わないよ。上がってよ」

「ま、マジメにやるわよ！」

そんなやり取りをして、由美は圭太の家に入った。2階にある圭太の部屋は6畳間の普通の部屋だ。ベッドに勉強机、クローゼットや本棚ももちろんある綺麗な部屋だ。本棚には様々な小説の他、意外にもマンガ、雑誌もあった。

「そういえば久しぶりだよ、由美が僕の部屋入るの」

「そう言えばそうね。でもあまり代わり映え無いわね」
窓から差し込む夕陽が良い感じなムードを作る。

「じゃあ勉強用に机取ってくるから、その変でゆっくりしててよ」

「あ、お茶もよろしくね」

「はいはい」

適当な返事をして部屋を出て行く。何もすることが無くなった由

美はとりあえず床に座って部屋をぐるりと見渡した。

「さて、と・・・何か無いかなあ・・・ん？」

視線を止めたのはベッド。いや、ベッドの上にある雑誌である。

「・・・まさか、ね・・・」

ベッドの上、雑誌、そして現場は男の部屋・・・由美は少し緊張した表情で床を膝歩きでベッドに近づくと、顔をベッドの上に出して表紙を見る。

「・・・はあ、よかった・・・ただのバイク雑誌みたいね」

ホッとして胸を撫で下ろす。そのままベッドに乗つてみると、寝転がりながら雑誌を開いた。

「ふーん、圭太も一応バイク雑誌を読むのね。ん・・・？」

適当に開いたページに、三角折りがされていた。どうやらその次のページのようだ。

捲ってみると、カラーページで特集が組まれていた。

『旧車カスタム！！いぶし銀、カワサキ特集！！』

タイトルからしてどこぞの3姉妹が喜びそうなタイトルである。

そこにはぶつ太い足回りと17インチでカスタムされたMk？やドラッグ仕様マツハ？。当時を意識したオールブラック塗装のZ？等々、大々的に写されていた。

そんな中、由美の目を惹いたのがローソンカラーをアレンジしたカラーでカスタムされたFXだった。黒の手曲げ管にセプレートハンドル、グリップミラーにバックステップ。セミシングルシートが当時仕様を主張する。

「ん、カッコいいわね・・・」

ビッカビカに輝く車体。傷1つ無いタンクはため息をつく程の完成度だ。自分もこれぐらいゼファアを改造出来たら楽しいだろうなと妄想を膨らませていると、下に書いてある改造費を見て諦めた。いくらなんでもそりゃ無理だと思つ金額に、由美はコツコツ地道に頑張ろうと心に決めた。

そんな感じで意識が現実に戻されると、ふと気付いた。

「こ……これが圭太の……ベッド……!!」

白いカバーに白いシート。なんの変哲も無い普通の布団に、一瞬にして顔が赤くなつていく。

「……な、なによ、ただのベッドじゃない……!!こんなので何焦ってるのよ私は……!」

真つ赤になつた顔で首を横に振る。そう、これはただのベッド。

普通に布団があつて普通に寝るだけの寝具である。しかし……

「こ……ここで圭太が……」

もう一度ベッドに身を投げる。ぼふつという音とがして由美を受けとめた。そして由美は少し変な気分になつてきた。

「そしてこれが……圭太の……」

目の前にある枕を見て、由美はそれを手に取ると顔を埋めた。

「すんすん……これが圭太の……」

少し危ない目で少し危ない行動をする由美。もう一度顔を埋めると、再び匂いを嗅ぎはじめた。

「すんすん……はあ、圭太あ……」

み・な・ぎ・つ・て・き・た!!!!

由美の内なる圭太への想いが爆発寸前にまで高められる。もういつこのままでいたい!由美がそんな思考に至りかけたその時……

がちやり

「……っ!?!」

扉のノブが動く音で目が覚めた。そして瞬間的になんとかしなければならぬと考えた由美は布団からマッハで飛び降りると、枕を顔の位置に抱えて……

「どりゃあああああ!!!!」

一気に仰け反った。

「いやあ、机を持つてくるの大変だったよ……って、なにやってんの?」

「み、見てわからないかしら・・・!？」

「・・・ゴメン、わからない。ジャーマンスープレックスしてるのはわかるんだけど、ジャーマンスープレックスしてる理由がわからない」

呆れ顔で圭太が見つめる。

そう、由美は圭太の枕をベッドにジャーマン式スープレックスでノックアウトしていたのだ。

「い、いや、その・・・!そう!この枕がなんか気に入らなくて、その、旭さん風に言っていると気合いが入ってなかったから気合い注入してたのよ!！」

嘘もここまで来るとワケがわからなくなってくる。しかし、そんな由美の嘘を鈍感少年圭太が見抜けるはずもなく。

「ふーん、まあ構わないけど壊さないでね」

と、注意するだけに止めた。

「さて、と。そろそろ勉強始めようか」

机を床に置くと、圭太は部屋の隅にあった自分の学校のカバンを引っ張り出した。

「ほらほら、いつまでもそんなことしてないで早くやろうよ」

「え、あ・・・え、ええ」

なんとか誤魔化したことに安堵して、由美はジャーマンスープレックスの体勢を解いて机に向かった。

ちょうどその時、圭太達の住む街の側の街道にあるコンビニに、

3台の旧車が停まっていた。

「フフフ・・・時はきた・・・！」

「どっかの破壊王か全く・・・なあ姉貴・・・本当に行くのか？
アイツん家・・・」

「当たり前じゃないか、テスト期間中は圭太君と会えなかったしな
により旧車物語は来週まで活動が無い。これ以上圭太君に会えない
なんて・・・私には我慢出来ない」

キリツとした顔で、どうしようも無い発言をする姉。そんな姉に
呆れ顔を隠せない姉妹達。

「はあ・・・つーかさ、一体アイツのどこがそんなにいいんだよ、
あんな鈍感野郎」

長い髪をポニーテールに束ねた武士みtainな勝ち気な少女がたず
ねると、次の瞬間姉からマツハでげんこつを食らった。

「くっ！！」

「圭太君のどこが好きか？そうだな・・・全てだ」

またしてもキリツとした顔である。恥じらいも何もないその表情
に痛みを堪えながら悶える少女も瞬時に呆れ返した。

「でも・・・やっぱり行くの止そう・・・？圭太さん達、まだテス
ト期間中だし・・・」

今まで事の流れを見ていた少女がおずおずと言った。勝ち気な少
女と双子なので顔は似ているが、小さなツインテールで全然女の子
っぽい。

「わかってないな・・・テスト期間だからいいんだ」

「え・・・どういう？」

「高校3年の試験は絶対に落とせない物・・・頑張つて勉強してい
るハズ・・・そんな時、現役大学生のこの私が圭太君の家にいきな
り行って、2人きりで勉強すれば自然と距離は縮まり、その後の展
開次第ではちよつと違う『大人の勉強会』になりうる可能性も・・・
もちろんこれは無理矢理では無くて・・・じゅるり」

（だ、ダメだコイツ・・・早くなんとかしないと・・・！！）

ヤバい目をしてヤバい脳内妄想をヤバい事に世間の目のある屋外で口に出してダダ漏れさせる姉に、2人は内心恐怖した。

「てか今日の姉貴ヤバいぜ・・・？何があつたんだ・・・？」ヒソヒソ

「きつと試験勉強が終わって一時的にテンションが上がっちゃってるだけだよ・・・多分・・・」ヒソヒソ

「おい、聞こえているぞ」

（（ビクッ！！））

内緒話をしているのがバレて焦りまくる2人。しかし姉は「ふっ、まあいい」と言つてバイクに跨がった。

「とにかく私は行く。なにがなんでもだ」

「それはいいけどよお、じゃあオレ達いらなくね？」

「いや、2人には敵を釣り上げてもらう」

「敵？」

声が重なる。

「そう・・・私達の仲間にして恋敵である由美ちゃんを、あなた達は外に連れ出す又は家に押し入り、圭太君との接触をシャットダウンする役目。家が向かいだから、念には念を・・・フッフ」

（（うわあああ！！とんだとばつちりだあ！！！！））

「フッフ、この煮え切らない戦いに、今日終止符を打つ・・・！」
そう言うと、愛車に跨がり走りだした。あとの2人も渋々嫌々、ついていくこととなった。

「……………」
「……………」

コチコチと秒針が鳴る音とシャーペンを走らす音だけがする部屋で、由美は向かいにいる圭太をチラッと盗み見た。

そこにはペンを走らせ、参考書と睨み合う圭太の真面目な表情があった。

一方自分と言えば、はかどるところかノートは真っ白。こんな状況で真面目に勉強できる程人間出来ていないのだ。

なんとかして、圭太と話さなければ……

しかし今の状況でバイクの話などの雑談を振れば、圭太に嫌な顔をされること必須。間違い無く流されるであろう。それならば……

「ねえ圭太」

「ん？」

「そのお……ちょっとわからない所があつて……」

申し訳なさそうな。心底申し訳なさそうな表情で由美が言う。すると圭太は由美のノートと課題プリントを覗き込む。

「あ、これはちょっと難しい奴だね」

「わかる？」

「うん、ちよつと待ってね」

自分のノートを持って立ち上がると、由美の横に移動した。

「隣座るよ？」

「へ！？あ、はい！どうぞ！！」

「……………？どうかした？顔赤いけど……」

「な、なんでも無いわよ！ほら、それより……」

「あ、ゴメンゴメン。えーっとこれはね……」

構わず説明する圭太の言葉を余所に、由美は心の中で「圭太キタアアアアア！！」とガッツポーズをしていた。

普段から一緒に行動する事は多いが、ここが学校でも喫茶店でも無く、圭太の部屋で2人きりというシチュエーション。そして今、少しでも身体を動かせば触れる場所に圭太がいる。そんなシチュエーションに由美の脳内ははっちゃけていた。

そう、この時までには……

ピンポーン

「あれ？誰か来たみたいだね」

「ん……どうせ新聞屋かなにかよ。無視よ無視」

「新聞屋さんならとにかく、宅急便とかだったならそうもいかないでしょ。ちよつと下降りてくるから待っててね」

「しょうがないわね……」

立ち上がって部屋から出ていく圭太を見送り、由美は来客を恨むが、すぐに早く圭太戻ってこいと念じはじめた。

すると、階段を上る足音が聞こえてきた。しかし由美はふと嫌な予感を感じた。

「足音が……2人分……？」

がちやり、とドアが開く。圭太がニコニコしながら入ってきた。

「由美ー、家庭教師さんが来てくれたよ」

「はへ？家庭教師？」

意味のわからない発言に由美が首を傾げると、後ろから入ってきた人物と目が合った。

「ん？由美……？げっ……！」

「な……！？真子さん！？」

圭太に連れられてきたのは、赤城家長女の真子だった。

「なんか偶然通りかかったみたいで、勉強教えてくれるって。僕ちよつと真子さんのお茶も取ってくるから、2人で待っててね？」

「え、あ……うん……」

成り行きを理解できず……いや、理解したく無く目の前の現実

から目を背けることに全力を注いでいた由美が、心ここにあらずな声で返事をする、圭太は部屋から出ていった。

「ん、こほん・・・や、やあ由美ちゃん、元気かな？」

「最初に『げっ・・・！』って言うっておいて今さら態度変えたって遅いわよ」

「チツ」

「露骨に舌打ちするな！！」

めちゃくちや嫌そうな顔で上から見下ろす真子に由美が突っ込みをいれる。

「まさか先手を打たれていたなんて・・・由美ちゃんもなかなかやるわね」

「ふんっ・・・偶然通りかかったなんて見え見えの嘘で圭太を騙そうなんて思考の悪者から守る為にいるのよ」

「なんとも言いなさい、今どき幼なじみ属性が最強なんて理論は通じない。由美など恐れるに足らず・・・なぜならこちらには援軍がいるのだからな」

そう言うと、真子はケータイを取り出してどこかにメールを飛ばした。

「あなただけ圭太君と2人きりにさせるなんて、そんな計画は即刻白紙に戻した後、私が圭太君と2人きりになる」

「な、させないわよ！！」

そんな時、また下でインターホンが鳴った。しばらくすると圭太が驚いた顔で部屋に入ってきた。

「真子さん、凜と紗耶香ちゃんが来ましたよ？」

「なあ！？」

「フツ・・・」

圭太の言葉に愕然とする由美。たいして余裕の表情の真子。

圭太の後ろから、凜と紗耶香が現れた。

「いやー参ったナー！偶然圭太ん家の近く走ってたら姉貴のマッハが停まってて・・・なあ紗耶香！？」

「う、うん・・・その、偶然って凄いですよ、ね・・・？」

すごい下手くそな演技で偶然を装う2人。しかしそんな演技にも騙されてしまうお人好しの圭太は頷きながら言った。

「偶然とは言え、真子さんが来てくれてよかったね由美。これなら2人とも教えてもらえるよ！」

「え、ええ・・・そうね・・・」

ニコニコ顔の圭太に表情を見られないようにして、由美が言った。心の中では真子達に対する呪咀で溢れていたが・・・

「・・・」

「・・・」カリカリカリカリ

「・・・」

勉強開始から数十分が経った。小さな机を囲むように5人が座っている。もちろん真子と由美は圭太を挟むようにして座っている。

「由美ちゃん、手が止まってるわ。圭太君を見習いなさい」

「そんなことより、真子さん圭太に近すぎないかしら？真面目に勉強してる圭太の邪魔なんじゃないかしら？」

「いや、由美も十分寄ってるからね？」

圭太がツツコミを入れる。しかし由美は鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「私はいいのよ、圭太と一緒に勉強してるんだから」

「じゃあなんでノートが真っ白なんだ？」

「うぐっ・・・！」

真子に痛い所を突かれた。確かにあれから、由美のノートは全く

手付かずになっていた。

「な、なによ！私のノートが真つ白だって別にいいじゃない！心の純白さが滲み出てる証拠よ！！」

「ふ．．．ついに開き直ったか情けない．．．」

「あの、真子さん。由美をあんまり煽らないでください、後．．．その、腕にしがみ付くのやめてください」

「．．．．．！？す、すまない圭太君．．．」

「あゝあ、真子さん圭太に怒られちゃったわね〜！ひっひっひワロスワロス．．．」

「由美も、なにもしないならせめて邪魔はしないでね？」

「は．．．はい．．．」

「ぷぷぷぷっ．．．！バカスバカス」

「なんかあの2人壊れてきたな、紗耶香」

「そうだね．．．真子姉さんなんかバカスバカスとか言ってるし．．．」

今まで事の成り行きを黙ってみていた2人が面倒くさそうに呟いた声は誰にも届かなかった。

そんな中、圭太は「はあ」とため息を漏らすと由美と真子を交互に見た。

「だいたいなんで今日の2人はそう仲が悪いのかな．．．」

「！！？」

由美と真子の2人に衝撃が走る。2人が争う元凶がようやくその事に触れたのだ。

「さつきから睨み合ってたばかりだし．．．何かあったの？」

「そ、それはその．．．」

「なんと言うか．．．」

2人が小声で呟く。すると意を決したように、由美が大きく出た。

「その．．．なんて言うか．．．そう！真子さんが圭太に近すぎるからよ！！」

「何で僕に近づいてるだけで睨み合いにのさ」

「それはその・・・あの、その・・・えっと・・・良いじゃない！ただ圭太に近すぎるのが気に入らないだけよ！文句ある！？」

「おお・・・！？なんか展開が？」ヒソヒソ

「ちよ、マズイよ真子姉さん・・・！！」ヒソヒソ

由美の照れ隠しに、外野も盛り上がる。しかし今の本人は意味がわかっていないらしく、顔を傾げていた。

「まあ確かに真子さん近すぎるけど・・・由美も十分近いからね」
「え・・・？あつ・・・！！！！」

言われてから、顔が真っ赤になっていくのがわかった。無意識のうちにはさつきよりさらに接近したらしく、鼻先がぶつかるくらいの距離に圭太の顔があるのに今さら気付いて爆沈した。

「ま、そういうわけだから、由美ちゃんは早く圭太君と距離を取って座ってなさい？」

「あの、真子さんも近いんですけどね・・・その、少し離れてください・・・」

「な・・・！？」

離れてください・・・

離れてください・・・

離れてください・・・

圭太の言葉が頭の中を駆け巡る。圭太からすれば何気ないひとことなのだが、真子にはかなりの大ダメージである。その表情はさながらミッドウエー海戦で勝つ気満々だった矢先、空母4隻を目の前で沈められた日本軍の提督のような、驚きと悲しみで満ち溢れた表情であった。

「あ。姉貴も死んだぞ」

「・・・」

外野が見つめる中、2人はジョーもビックリするくらいに真っ白

な灰になつて燃え尽きていた。

そんな2人を交互に見て、圭太はため息をついた。

「なんかよくわからないけど・・・なんか勉強する気が湧かなくなつちやつたね」

「いや、勉強する気が無くなるのはわかるけど、どーしてそうなたのかはわかつてやれよ・・・」

「真子姉さん、突いたら崩れそう・・・由美さんも・・・なんか溶岩みたいになつてるし・・・どうしよう」

呆れすぎてどんな表情をしていいのかわからなくなつてしまった凜と、犠牲者(?) 2人を交互に見てうるたえる紗耶香。

一方、この状況を作り出した圭太は未だになぜこうなつたのかを理解出来ずにいる。首を傾げる圭太に凜がずいっと近づいた。

「なあなあお前、本当にわかんねーのか?なんでこんな状況になつてんのか」

「うん・・・凜はわかるの?」

「つたりめーじゃん。むしろなんでわかんねーんだ?」

「そんなこと言つたつてなあ・・・」

本気で悩みはじめる圭太。そんな彼を見て、凜は思った。

「コイツ・・・本つ当に鈍ちんだな・・・」

いや、口に出していた。

「ま、いつかそのうち由美か姉貴のどつちかが答えを教えてください。時が来るだろうから、圭太もそれまでによく考えとけよな」

「・・・?よくわかんないけど、まあいいや」

凜の意味深な言葉にとりあえずうなづく圭太。すると、このもどかしすぎる空気に当てられたのか、紗耶香が究極の質問をぶつけた。

「そ、そういえばその・・・!圭太さんって、す、好きな人とかいるんですか!?!」

「ちよ、お前・・・!!!!」

凜がマズイと思って紗耶香の肩を掴むと、部屋の隅に移動した。

すると紗耶香が目に渦を巻かせながら小声で言った。

「だ、だって……！あそこまで鈍感だなんて……！」ヒソヒソ
「だからって直球すぎるだろ……！？ていうか暴投すぎんぞ！？」
ヒソヒソ

「何してるの2人とも？」

「な、なんでもないです……！」

壁ぎわでヒソヒソ話をする2人に声を掛けると、さすが双子。こ
ういう時は息もぴったりである。

そんな双子を見て首を傾げたあと、圭太はとりあえず質問に答え
た。

「質問された意味がよくわからないけどそういう話はないよ。どう
して？」

「いやその、なんとなくです……はい……」

首を傾げながら答えると、紗耶香はとりあえず慌てながらうなず
いた。

すると圭太はニヤリと笑った。

「そういう紗耶香ちゃんは？そういう話はないの？」

「もちろん、ありませんよ？女子校ですからね。そういう話は友達
にもほとんどいません。でも……」

そこで区切ると、隣にいる凜をチラリと見た。

「な、なんだよ……？」

「凜お姉ちゃんはそういう話はたくさんありますよ、ね？」

「なっ……！？紗耶香テメっ……！！」

妹の突然の爆弾発言に、凜が一気に顔が真っ赤になる。あたふたと
紗耶香と圭太な間で何か弁解しようとするが、紗耶香は意地の悪い
笑みを浮かべると、構わず話を続けた。

「凜お姉ちゃんはですね、男勝りな性格でうちの女子校では先輩か
らも後輩からもそれはもう人気があります……それはもう数え
切れない程ラブレターやら告白やらをされたんですよ？」

「え？でも2人って同じ女子校なんだよね？」

カタログをプレゼントしてあげましょう」

「え？いいよ別に、そういう意味で言ったんじゃないし・・・」

「なあなあ・・・圭太、オレは？オレだったらどうなってたかな・・・！？」

今まで会話を黙って聞いていた凜が、何故か興奮気味に圭太に詰め寄る。

「うん・・・？凜も多分、大丈夫なんじゃないかな？可愛いしさ」

「なっ！？かかか、可愛い・・・！？」

その時、後ろの方でまたピクリと耳を動かした人物が1人・・・

「凜お姉ちゃん顔真つ赤」

「そ、そんなんじゃないよバカ！！ただちよつと、あの・・・あれだよ・・・その・・・あ」

凜の言葉が途中で途切れた。そしてその時、3人の背後で、2つの黒い影が動きだした。

「『学校の誰かさん』って一体誰のことかしら・・・？ねえ圭太あ・・・？」

「なにが『あれ』なんだ・・・？なあ？凜」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・！！！！！！！！

「圭太あ？なに凜と紗耶香ちゃん口説こうとしてるのかしら・・・？」

「凜・・・貴様、圭太君に誉められて鼻の下を伸ばすとは・・・死刑に値するぞ」

鬼の形相で迫る2人。対する圭太と凜は、とりあえず平和的解決をするために2人を落ち着かせようとした。

「あ、あの・・・由美？べ、別にそういう意味で言ったわけじゃ・・・

・お、落ち着いて、ね・・・？」

「そ、そうだぜ。あ、姉貴も・・・！」

「「問答無用ッ！！」」

数分後、由美達は中山家の前にいた。

「また決着はつかず・・・か。まあいい、次こそ必ず圭太君を・・・」

「ふん、言つてなさい。真子さんなんかに圭太はあげないんだから」

マツハに跨がる真子と、仁王立ちする由美はしばらく睨み合つと、どちらからとも無く不敵に笑いあつた。一方・・・

「・・・」

「り、凜お姉ちゃん・・・？大丈夫？」

頭にアイスクリームの三段重ねのようなたんこぶが面白おかしく出来上がっていた。

その後しばらく話をしてから、3人は快音を響かせながら走り去つていった。

それを見送つた由美は、「うーっん！」と背伸びすると、すつかり暗くなつた空を見上げてから。

「はーあ・・・私も帰ろうかしら・・・」

言つて、向かい斜めにある自宅へと歩いて向かつた。

それから半時後。

「たたたたっ！たたたたっ！！たっだいまあゝ！！ヒツハア！！」
中山家に、圭太の姉である茶子が何か戯けながら帰宅してきた。

「あつれえゝ？誰もいない？圭太のバイクあつたよねえ？」

玄関先からリビングまで真っ暗な自宅を見て不思議がりながら階段を登つていく。すると、圭太の部屋から光が漏れていた。

「なあんだいるじゃんいるじゃん！圭太ー！たっだいまああああ！？」

部屋に飛び込みながら圭太に声をかけた瞬間、茶子は驚きひっくり返った。

そこには、部屋の主である圭太がうつ伏せで床に倒れていた。しかも、何故か頭にたんこぶが5つ乗っていた。

「こ、これはいつたい・・・！？あ、前からやりたかった警察ごっこが出来るチャンス！！まず遺体の位置を確認する白いテープと指紋採取セットを部屋から取りに行かねば・・・！待ってる圭太あ！！」

介抱すること無く、無駄に元気に部屋を飛び出す姉。そんな中、

圭太は薄れ行く意識の中で、ただ一言つぶやいた。

「な、なんだったんだ・・・がくっ・・・」

そして再び気を失った。

教訓、冤罪は恐ろしい。

ちなみに、前日の件で勉強をすっかり忘れていた由美はテスト当日になつて慌てて勉強するも、赤点ギリギリが平均点で1教科落とした為、夏休みの補習1教科分の参加が決定。

そして圭太はあれから由美と口を聞かず、1週間たった頃に何度目かわからない由美からの謝罪でようやく口を開いたという・・・

第49章 史上最強の鈍感少年（後書き）

いや、ほんとうに更新できずすみませんでした汗

今回は後書き小説はお休みにします汗

次回は早くお届け出来るように頑張りたいと思います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9754k/>

旧車物語

2011年9月29日03時25分発行